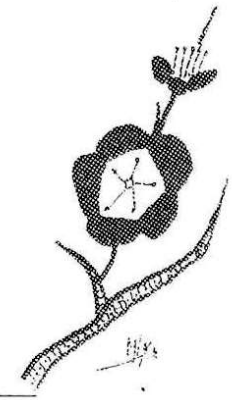
まんじ

No. 83

2002.2.1

まんじ第八十三号　目次

犬を連れた男……森　実与子…4
脱・下請の教科書
徳川家康……瀧澤　中…16
勲章と万博……大和禎人…22
灰吹法による戦国バブル……新井　宏…26
黒船（一）……太田和貞…34
城ケ島異聞（一）……島津隆子…42
宰相の橋（一）……太田精一…58
シナリオ　龍化妖姫（二）
―周の幽王伝―……相原精次…62



下剋上と奴隷王朝〈本編〉……宅見勝弘…72
―米国テロより異文明史を考証する―
悪流修羅（第二部）……中泉聖司…83
霧に包まれていた光（3）……鍋屋次郎…109
報徳の人　二宮尊徳（三）……三戸岡道夫…115
体当たり戦法を強制された
神風特別攻撃隊の人びと六）……千坂精一…128
泰山木（十二）……紙透寛夫…138
―紙透小太郎の一生―
漢詩潮騒録（三十一）……鯨游海…143
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（三十二）……金子正義…149
千篇萬律……編集子…160



表紙・カット……宮城正彦
カット……鈴木國男
……清水トム

犬を連れた男

森実与子



「……まったく、列車に乗るのを手伝ってもらっただけで、一万リラふんだくられるなんて」

動きはじめた列車のなかで、私はちょっぴり不愉快な思いを抱きながら空席を探した。

タクシーでナポリの駅に降り立ち、切符を買ってプラットフォームに向かうと、ちょうど十三時発のミラノ行き特急列車の出発寸前だった。急いで走れば乗れないことはない。しかし重い荷物を持っているため、ホームを走り抜けるのは並大抵のことではなかった。

大きなトランクをひきずりながら、乗ろうかどうしようかためらっていると、ふいに一人の痩せた男が近寄ってきた。

「これに乗るの？」

私が首を縦に振ると、

「あと二分だ。急いで」

列車を指さしながら、男は私のトランクを軽々と手にしてホームを走り出した。身軽になった私も男の後について全速力で走り、たどり着いた乗車口で、男は親切に重いトランクを列車に乗せてくれた。だから、間一髪で飛び乗ることができたのだ。

「ありがとう」

お礼を言うと男は、

「一万リラ」

そういって手を出した。

なんだ。たった今の親切は、みせかけだったのだ。男の態度には卑屈さなど微塵もなく、お金を要求するのは当たり前とでもいいたげなふてぶてしい態度である。これだけのことで小銭を稼ごうなんて、こざかしいイタリア人め！

一瞬、怒りがこみあげたが、私はしぶしぶ財布からお金を取り出して渡した。

「よい旅行（ボン・ビアッジョ）を！」

男は愛想をいいながら、手を振って見送ってくれた。

日本と違ってホームは低く、列車の乗車口は高いから、重い荷物を引きずり上げて列車に乗せるのは、かなりの力仕事であり、一人ではとうていこの列車には乗り込めなかっただろう。

カプリ島で日本人の女ともだちとバカンスとしゃれこんだが、次の目的地フィレンツェまでの移動は一人旅だった。一人でカプリから船でナポリの港へ出て、さらに駅へ行って鉄道に乗り換えることがすごく困難に思えて、旅のはじめから気が重かったのだ。

何せナポリは、イタリアのなかでも泥棒やひったくりの多い、悪名高い危険な街である。実際、すすけて汚ない街なかはスラム街のような雰囲気をたたえ、縦横無尽に車やバイクが走りぬけるから、一瞬たりとも気が抜けない。おまけに駅の構内の真中で、大きな犬が平然と糞を落としていても、通り過ぎる人々は皆そしらぬ顔で通り過ぎていく。私は唖然としたが、次第に、驚きと呆れを通りこしておかしさがこみあげてきた。そんなイカレタ街なのだ。

とにかく、スムーズに乗り継ぎができて無事にフィレンツェへ向かうことができただけでも、幸運と思わねばなるまい。一万リラといっても、日本円にすれば、わずか六、七百円なのだから安いものだ。

九月の中旬、まだバカンス気分が抜けない季節だからか、二等の車内は混み合っている。六人掛けのコンパートメント席を見て回ると満席が続き、通路にも人が立っている。

（四時間、このまま立って行くしかないかしら）

あきらめかけているその時、空席が目に入った。

コンパートメントの通路側の席が空いているではないか。向かいに座る中年男に、

「ここ、空いてますか」

と問うと、

「どうぞ」

男は白い歯を見せて、ニコッと笑った。目尻の垂れた丸い愛嬌のある顔だ。

男の足元には、大きな白い犬が寝そべっている。犬を敬遠して座る人がいないのだろうが、躾が行き届いているらしく、犬は大きな耳をダラリとたらして行儀よく寝ている。私が席につこうとすると、男は足元を気づかって犬をはじに寄せてくれた。

混雑した他のコンパートメントとはうって変わり、そこには、窓際に、若い女と学生風の男の子が座っているだけだった。

女は豊かな漆黒の髪を肩まで垂らし、胸元が大きくくれたノースリーブのオレンジ色のニットにベージュのパンツ姿だ。浅黒い健康的な肌を露出し、胸元や腕にゴールドのネックレスやブレスレットを幾重にもつけて、いかにもイタリア女らしいチャーミングな魅力を放っている。

一方の男の子は、坊主頭にジャージの上下を身に着け、運動部の部員といった風体である。感じのいい中年男とは対称的に、二人ともそっぽを向いて、実にそっけない。ツンと澄ました冷ややかな女と無関心な青年は、それぞれ雑誌や本に目を落とし、お互いまったくの赤の他人という態度でニコリともせず、むしろ憮然としている。紫色のポロシャツを着て、ジーンズにスニーカーのラフな服装の犬を連れた男は、やけに日に焼け、額と鼻の頭が黒光りしている。

犬を相棒にバカンスの帰り、それとも放浪の旅でもしているのだろうか。もしかして、犬を連れた街頭の物乞いとか。それにしてはこぎれいな身なりだが、案外当たっているかもしれない。だから青年と女は、ブスッとしているのだ。ともあれ、正体不明の男は謎めいていて、想像力をかきたてられる。

「かわいい。いくつなのかしら?」

犬の頭を撫でてやると、犬も人慣れしたもので、薄目をあけて尻尾を振る。

「四歳だよ」

男は、くすぐるような視線を私に向けて、低い声でポツリと応えた。

踏み込んで質問しても、所詮、言葉はたいして通じまい。静まり返ったコンパートメントのなかで、あれこれ聞くのも失礼ではないかと、私はそれ以上、言葉を交すことができなかった。

車窓には、岩肌をむきだしにした白っぽい岩山や赤茶けた土が連なり、賽の河原を見ているような迫力だ。ところどころに、オリーブの実をつけた低木のオリーブ畑が広がる干からびた大地は、夏の間中、一滴も雨が降らず、ひたすら太陽の恵みを浴びていたことの証しだろう。日本では決して目にすることのできない乾ききった眺めは、南イタリアの明るく開放的な風景である。しかし北上するにつれて陽は陰り、曇り空になってきた。

私は、カプリ島での夢のような数日間を噛み締めていた。

リゾートの島の玄関口の港は、船の発着の度に、夥しい数の観光客が吐き出されては吸い込まれ、坩堝のように蒸せ返っていた。断崖からなる小さな島は、上り下りが激しい上に、すれ違う人と肩をぶつけあうほど狭い石畳のつづらおりが続き、人の波であふれていたが、そんな喧騒さえもあまりあるほどの、人をとろけさせる魔力を持っていた。

小さな砂浜で海水浴も楽しんだし、島の最高峰の山頂からの眺めは、まさに絶景だった。緑の木々に覆われた白い岩肌には、斜面に白やピンク、黄色のおもちゃのような家やホテルが段々に連なり、入り組んだ海岸線は、目のさめるようなコバルトブルーの海に包まれている。鮮やかなピンク色の夾竹桃が咲き乱れ、樹木になるレモンの実が甘酸っぱい香りを放ち、島全体が一個の甘美な宝石箱なのだ。

私はすっかり、この小さな島に恋してしまった。自然の旋律に抱かれた島の情景は、私の脳裡に深く刻みこまれ、今、記憶の底で眠りについたばかりだ。おそらく、一生忘れることはできないだろう。

この島からさらに南へ足を伸ばすという友人を置いて、私は一人でカプリを発ち、フィレンツェへ向かっている。そこでドイツ人の友人イナと落ち合って、共に週末を過ごしてから日本へ帰るのが、十日間の短い旅の日程だった。

やがて、切符の点検に車掌が回ってきた。男が犬の切符を見せると、

「ほお、一人前だねえ」

小太りの車掌はにこやかに応じる。男は追加料金が必要らしく財布から金をだすが、あいにく小銭の持ち合わせがないようだ。

「両替できませんか」

車掌の問いかけに、すました女がすぐに財布を取り出して、それに応じた。

男二人は、

「いい女だねえ。こんな美人になら、いつでも両替して欲しいもんだね」

うれしそうに軽口をたたいている。

それでも女は、ニコリともしない。

両替に応じる親切心は持ち合わせているけれど、その辺の男なんて相手にしないわ。私はもっと価値のある女なのよ。……無言のうちに、そんなことを訴えているのだろう。

魅力的なボディのイタリア女に比べ、色あせたジーンズとTシャツ姿のうえ、小さくてやせっぽちの私は、いかにも貧しい。堂々としたイタリア女と並んで見劣りする自分の姿に、次第に気後れしていく。

車掌がいなくなると、コンパートメントは再び静まりかえった。

山間のトンネルに入ったのか、わずかの間、車内が暗くなった。すると窓ガラスに、女と私の顔が並んで写った。ぽっちゃりとした彫の深い女の顔の横に、目が落ち窪み、顎のとんがった栄養失調の子供のような貧相な顔がある。一瞬、嫌悪感が走り、私は思わず目をそむけた。しばらくすると、学生はポテトチップをほうばり、女

はクッキーをつまみはじめた。小腹の空く時間になったのだ。私も負けじと、カバンからサンドイッチを取り出してほおばる。

ほどなくして女は席を立つと、大きな形のいいヒップを左右に振りながら出ていった。そして戻ってきた手には、売店で買ってきたポテトチップをしっかりと握っている。席に着くと、早速、封を開いて食べ始めた。美女といえども、食欲には勝てないのだ。

しかし中年男だけは飲み食いせず、車窓に目をやったり、優しい視線を投げかけて愛犬の頭を撫でたり、ひたすら時間を持て余しているみたいだった。

本を読みながら、断続的な眠りについていると、いつのまにか雨が降り始めている。

列車は急にスピードを落としはじめ、車輪の軋む音がする。ローマのテルミニ駅に近づいたのだ。

私は通路に出ると、窓を開けて身を乗り出し、列車の振動に身をまかせながら回りの景色を飽くなく眺めた。

数十本もの線路が一直線に駅に向かって連なり、線路の外には、大きくカーブした高架式の高速道路やアパート群が見えてくる。現代の街並みのなかに、古いレンガの門や城壁のかけらが何気なく点在している。それは少しも不自然な眺めではなく、そこにあるのが当然といった風に、今と過去とが渾然一体としているのだ。

駅周辺の眺めは、古代ローマの断片がいまだに命脈を保っていることを物語り、ローマに来たという実感を抱かせてくれる。

行き止まりのテルミニ駅では、列車はいったん駅に入り、再び同じ線路を戻って目的地へ向かうという方式だ。美女と若い学生はローマで降り、代わって中年女と初老の男が乗りこんできた。

犬を連れた男と私は、相変わらず列車のなかにいた。窓から外を眺めたり、通路をうろうろしながら、停車時間をやり過ごした。

ローマを発つと、窓からの景色も今までの干上がった大地とはガラリと異なり、緑が深く濃くなってくる。山が連なり、トンネルの数も増えてきた。

時折、丘の上に城や教会がそびえる城郭都市が目に入る。トンネルに入ると車内の電気はすべて消え、まるで深海の闇の底にストンと落ちたような感覚に陥る。だがそこを抜けると、遙かな平原が開ける。そんなことの繰り返しだ。

雨足は強まっていた。雨が霧のように山や畑を包みこみ、白く霞んで見える。線路と平行する道路を走る車も、ライトをつけている。途端に、イナと会えるだろうかという思いがこみあげ、心細くなってきた。

移動に一日を費やした疲労感が、澱のように身体のなかにたまっていくのがわかった。

フィレンツェに着くと、犬を連れた男も大きな荷物をかついで降りていき、人ごみのなかに消えていった。

午前中は夏の名残を感じていたのに、ここまでくると、秋を通り越してもう冬のような寒さである。私は慌ててバッグから長袖のジャケットを取り出し、着こんだ。時計を見ると、五時を回っていた。雨のせいか、駅の構内は大勢の人が慌しく行き交い、タクシー乗り場には長蛇の列ができている。私は列の最後につき、順番を待った。

フィレンツェにはじめて来たのは、五年前のことだ。ルネサスンの街、花の都という心地良い響きに誘われ、八月の一ヶ月間、私はこの街で暮した。赤レンガの屋根がうねる波のように続く街は、街路樹も道路も、建物も、すべてが想像以上に大きく、生命力に満ちていた。そして、街の中心に、ひときわ大きな丸屋根(クーポラ)を抱いてそびえ立つ大聖堂(ドゥオーモ)を見た時には、電流が身体を突き抜け、目もくらむばかりだった。その圧倒的な力強さと荘厳さに、またたくまに眩惑されてしまったのだ。

なだらかな稜線に囲まれ、歩いて回れるほど小さな盆地の街なのに、汗にまみれながら歩いても歩いても、私はこの街を知り尽くすことができなかった。私はひと夏、ルネサンスの迷宮のなかにまぎれこんでしまったのだ。

その時、同じ下宿で生活を共にしたのが、これから会うドイツ人のイナだった。お互い三十代半ばと年も近いイナとは奇妙な友情で結ばれ、日本に帰ってからも、手紙やファックスのやりとりが続いた。二年前、ドイツの彼女の家を訪れて再会を果たしたが、思い出のフィレンツェで会うのは、それ以来だった。

しかし雨のせいか、フィレンツェに戻ってきたことの喜びよりも、寒さと疲労感だけがつのっていた。オレンジ色のバスが群がる駅前の殺風景な風景も、妙によそよそしい。

(思い出に浸ろうなんて、ノスタルジックな考えは甘すぎたのかもしれない。五年前と今とでは、明らかに違うのだもの。イナにも会えないかもしれない)

そんな軽い落胆さえ感じていた。

タクシーは街の中心を通り抜けてホテルへ向かった。傘をさし、レインコートを着こんだ観光客たちが、雨にもめげず闊歩している。がっしりとした石造りの建物と道が続くメインストリートを抜けると、大聖堂(ドゥオーモ)の白とバラ色、緑をほどこした大理石やレリーフが、他の建物の陰に見え隠れし、フィレンツェらしい面影が、次第に甦ってくる。

大聖堂(ドゥオーモ)近くの予約してあった小さなホテルに着くと、いきなり従業員の女が出てきて、

「ここじゃないですよ。別館に行ってください」

とまくしたてる。

女従業員にビニール傘を差し出され、どしゃぶりのなか、ホテルの別館とやらへ連れていかれた。

ゴツゴツとした石畳の道は、トランクをひきずりながら歩くには、実に厄介だ。傘からはみ出た腕と足も雨に濡れ、服を通して冷たさが体にしみ渡ってくる。どうして、こうついていないのだろうか。

「あなたはラッキーね。部屋はキッチン付きのジュニアスイートよ」

私の胸のうちを知ってか知らずか、女はそんなことをいう。案内された先は、ホテルからほど近い広場に面した建物の五階にあり、ホテルというよりもアパートの一室のようなところだった。

「キッチンで料理もできますよ。それから鍵はオートロック式ですから」

最新式の電子ロックの使い方を教えてくれたが、なんだか難しくて、目が回りそうだ。

「朝食はホテルの方へ来てください」

事務的な言葉を吐いて、女は去っていった。

雨の週末、たった一人で、しかもジュニアスイートのアパートで、一体、どうやって時間を過ごせばいいのだろうか。

天井は高く、確かにゆったりとした空間である。花柄のシックなベッドカバーで覆われた大きな二つのベッド

「どういうことなのかしら」

「満室ですから、レジデンスの方へ行ってください」

観光シーズンのこの時期、地の利もよくエコノミーなこのホテルは満杯らしく、私はどうやら、別の場所に追いやられるみたいだ。

「友達と待ち合わせしているんだけど、まだ着いていないのかしら」

従業員は私の問いには答えず、代わってレセプションの男が、

「ファックスが届いていますよ」

一枚のファックスをよこした。

それはイナからのものだった。

「親愛なるナツミへ　彼と別れることになって、引越しをしなければならなくて、今回は急に行かれなくなったわ。カプリのホテルの連絡先がわからなくて、連絡できなかった。近いうちにドイツに遊びに来てね。イナ」

と書かれている。

彼と別れる……？　二人の子持ちのイナはすでに一回離婚していて、今は別の男と一緒に暮しているはずだが、その男と別れたのだろうか。イナの複雑な家庭事情は、察することができない。……とにかく、私のイヤな予感が的中したのだ。イタリア滞在の残りの三日を、一人寂しく、フィレンツェの街で過ごさなければならないなんて。

と古い洋服ダンス、ソファが置かれた寝室は、実にゴージャスだ。バスルームもバスタブ付きで広く、調理具や食器の整ったミニキッチンでは、簡単なパスタやサラダぐらい作れそうだ。しかし、一人で過ごすには贅沢すぎる。恋人と一緒だったらうってつけの部屋だろう。舞台装置は完璧なのに、役者不足で主役不在のまま、一人でぽつねんとしなければならない。そんな心境だ。

ホテルはアパートのワンフロアを、満室の際の追加部屋として、借りているのだろう。しかし建物の下の階はオフィスなのか、住人がいる様子もなくて、静まり返っている。それにこのフロアにはいくつか部屋があるらしいが、泊まり客は他にいるのだろうか。人気のないだだっ広いフロアは、ちょっと怖い。こんなことなら、カプリで女友達と行動を共にすれば良かったかもしれない。

しかし、友人のプランに逆らってフィレンツェにやって来たのは、私自身の選択なのだ。

「私、どうしてもフィレンツェへ行かなくちゃならないの」

「私は、もっと南に行きたいわ」

「お互い旅慣れているんだし、途中から別行動するのもいいかもね」

「いいわよ」

我を張って別行動を提案したのは私だし、自分自身の責任なのだ。

（ナポリかローマ経由で日本に帰ってしまえばよかった。わざわざ苦労して、フィレンツェまで足を伸ばすことはなかったのに……）

屋根に落ちる雨音が、ずしりと心に重く響き、私は大きな部屋のなかを行ったり来たりしながら思案に暮れた。

バスルームは、赤いタイル貼りに大きなバスタブが鎮座する立派な作りだ。そういえば、カプリの狭いホテルはバスタブもなく、シャワーだけだった。それも水が飛び散る安直な作りで、気持良くお湯を浴びることもできなかったのだ。

（まずは、優雅に湯船に浸かってリフレッシュするしかないな）

私はバスタブのコックをひねり、熱い湯を出した。途端にバスタブのなかに湯気が広がり、熱気が私の凍えた心を解凍しはじめる。そして、石鹸の泡を体中につけて、ゆっくりと湯に浸かった。

……やがて、耳を澄ますと雨音はやんだみたいだ。

私はロング丈のワンピースを着こみ、週末にふさわしいお洒落をして、外出することに決めた。スイートルームに一人でいようが連れがいようが、そんなことはどうでもよくなっていた。果たしてこの場に一緒に過ごす男がいたとしても、一体、そんなことに何の意味があるだろうか。

どうせ一人なのだから、思いきりこの瞬間を楽しむし

かないのだ。気を取り直して、大好きなフィレンツェの街をほっつき歩いてみようと、心に決めた。

外に出ると、雨はすっかり止んでいた。

オレンジ色の街灯に照らされて光る濡れた道路から、しっとりとした風情が漂い、妙に艶っぽい。

（ああ、私のフィレンツェ……）

どこからともなく人が集まり、週末のにぎやかな夜のはじまりである。

ジェラートを食べながら、仲良さそうに閉店した店先のショウウインドウを覗きこむカップルもいれば、道路の真中でお喋りをはじめる人もいるし、レストランで夕食を食べ、カフェでお酒を飲み、若者も老人も、地元の人も観光客も入り乱れている。思い思いの宵が繰り広げられているのだ。

私は、フィレンツェのなかでも一番のお気に入りのシニョーリア広場へ向かった。

ルネサンス時代から政治の中心地であり、今も市庁舎として使われているヴェッキオ宮殿前の広場だ。時計台がそびえ立つ茶色いレンガ作りの宮殿入口には、相変わらず、風雨にさらされて汚れた、ミケランジェロのダヴィデ像のコピーが立つ。さらに回りには、白くて大きな海神（ネプチューン）の神の像と噴水、フィレンツェを開花させたメディチ家の祖コジモ一世のブロンズの騎馬像、などの彫刻群が並び、絵葉書を売る土産物屋や似顔絵描きがたむろする。活気に満ちたこの場所は、五年前と少しも変わっていない。私はこの広場に面したカフェで何度となくお茶を飲み、暑さと喉の乾きを癒したのだ。

これらの情景は、衣装こそ違え、おそらく五〇〇年前のルネサンス時代とそう大差ないのではないか。観光用馬車の馬の蹄の音を聞いているうちに、往時の喧騒や、庶民の憩いの場としての生き生きとした空気が彷彿としてくるようで、私の心を撫でる。

その時、トントンと肩を叩かれた。振り向くと、すりきれた服をまとった汚い身なりの浮浪者が、口をもパクパクさせて何か語りかけてきた。

「ちょっと、待ってて……」

そういうと、レストランの店先にあるプランターから、黄色い小花を二輪手折って渡してくれた。そして浮浪者は黙って去っていった。

（浮浪者にしては、いかすやり方だわ。今日は、こんな類の人たちと、縁があるみたいだ）

一人でレストランに入るのは勇気がいるが、私は意を決して、広場に面したレストランに入り、夕食をとることにした。

白いパラソルの下の屋外席は、両隣とも、大きな体の白人カップルである。彼らは大きな皿を、次々にたいらげていく。ボトル一本のワインに、野菜の前菜、山盛りパスタ、メインの大きなステーキ肉や魚のロースト、そしてクリームたっぷりのデザートまで、二人で取り分けることなく、一皿ずつきれいに片付けていく旺盛な食欲は、見ているだけでも気持がいい。感動的でさえある。

私は小さなカラフェの白ワインとピザ一枚が精一杯だ。外人客のわずか四分の一ほどの分量は、彼らから見たら、小鳥がついばむ餌のようなものだろう。同じ人間なのに、胃袋も身体つきも、皮膚の色も、どうしてこうも違うのだろうか。

しかし、回りのにぎやかなお喋りを耳にして、荘厳さと伝統を培った建物や石畳の風景を眺めているだけで、私は一人、ささやかな満足を得ていた。楽しく食事をしながら、この重厚で伸びやかなルネサンスの雰囲気に浸る陶酔感と幸福感は、万国共通であり、外国人も私も同じ感情を抱いているはずだ。そう思うと、妙に晴れ晴れとした気分になってくるのだった。

ホテルに戻る道すがら、わずかな街灯と小さなバールのネオンが灯るほの暗い広場の片隅で、人だかりに出くわした。

大道芸人の見世物なのだろう。

輪の中央で何やら男が芸に挑んでいるらしいが、背の高い群集の後からでは何も見えない。私はなかに分け入って、前に進んだ。すると取り囲む人々の真中で、体にぴったりとはりついた豹柄のスパッツと黒いランニング姿の男が、アクロバットさながらにバック転やら球乗りを披露している。小柄の引き締まった体つきは、衣装そのままにしなやかな豹のようだ。

……その男の顔は、どこかで見覚えがあるような気がする。

最前列で目をこらしてよく見ると、なんと列車で一緒だった男ではないか。塗れた敷石の広場で、裸足で身軽に芸を演じる姿は、昼間の物憂い感じとは一転してきりりと男らしく、勇壮な雰囲気すらたたえている。連れの犬は、斜め向かいの群集の最前列で、列車のなかと同様、地面に体をへばりつけて心地良さそうに寝ている。

男は地面にガラスの瓶をたたきつけると、鋭利な破片の上を軽々と歩いた。その一挙一動に、群集は奇声と拍手で湧き上がる。観衆のなかには、空間のなかにポンと置かれた箱に、小銭を入れる者もいる。

（芸は身を助けるとは、まさにこのことだわ。アッハッハッ、なんて、面白いの）

昼間の男と目の前の姿がなかなか重ならないが、かえってその落差に目を見晴らされ、私は笑いが止まらない。声を出して笑いたくなるほど、面白い見世物だ。

湧き上がる群集の片隅で、おとなしくうずくまり、主人を見守る犬の姿がほほえましい。犬と男は、お互いを慰め合う最良のパートナーだ。男と犬の情愛が空間のな

かでからみあい、まるで幻想的な世界が繰り広げられているようで、私は時間のたつのも忘れ、夢中になって見入った。

やがて男は観衆のなかから一人の青年を選ぶと、背中におぶってから両足を自分の両肩に乗せ、仁王立ちする。そしてガラスの破片の上を歩くが、青年ともどもびくともしない。さらに青年に代えて若い女の子を背負い、今度はとがったけんざんの上に立った。男が痛くも痒くもないといった表情で、苦味ばしった笑みを見せると、再び場は盛り上がる。

男の芸はさらにエキサイトしてゆき、今度は赤々と火が燃える松明を片手に持ち、輪のなかを走り回った。急に動きを止めたかと思いきや、松明を高々と掲げ、両足の下をくぐらせたり、身体の線に沿って滑らせるが、炎の熱などなんのそのだ。その俊敏な動きを逃すまいと、次々とシャッターを切る観客もいれば、口笛や歓声、拍手の嵐がなりやまない。男は一気に体を大きくのけぞらし、火を口に入れて大きな炎を吐いた。猛獣のような雄雄しい姿と強靱な身体に、再びやんやの喝采だ。男はしてやったりとばかり、満面の笑みを浮かべる。

最大の見せ場に、数人の観客が箱にお金を入れる。私も小走りに箱に近寄り、小銭を入れた。男が一通りの芸を終わらせると、観客は、三々五々に散って行った。

それから男は、赤い小さな三輪自動車の脇に置いてあるカセットデッキのスイッチを入れて音楽を流した。太鼓と笛、シンバルの哀愁をたたえた曲が流れてくる。それは異国情緒たっぷりのアラブの音楽で、男は微妙な腰つきでダンスを踊りはじめた。

（この男は、エジプトあたりからやってきたアラブ人なのだろうか……）

その軽快なリズムに合わせて、私もいつしか身体を動かしていた。身体の奥底から、覚えたてのベリーダンスの動きが自然に出てくる。次第に気分が高揚してきて、私は靴を脱ぎ捨てて裸足になった。石畳の冷たさが足の先から全身に伝わって心地良く、長いスカートの裾を手で持ちながら、腰と腹をくねらせて踊りに身をゆだねる。

男が手招きしてきた。

どきまぎするほど妖しい男の視線は、無言の熱い会話であり、私たちは午後の列車の相棒として、すでに心が通じているような微妙な感情を抱かせた。孤独な者同士が列車のなかで約束を取り交わし、今、ここでお互いのパッションを分かち合っている。

何ものにもとらわれない自由は、この場で、私だけしか味わうことのできない生きている実感だ。ルネサンス時代から時間が止まったようなフィレンツェの夜、この広い野外劇場で、こうして踊り興じることは、孤独の醍醐味である。

男の手が私の腰にからみつき、顔が接近しては離れ、男の吐息が、魂がぶつかってくる。通り過ぎる人の冷やかしの声や拍手を浴びながら、私は酔いしれていった。ほとばしる汗に体は上気しながらも、夜気の冷たさが頬と全身に染み渡り、しびれるような快感を感じさせてくれる。それは、終わることのない宴のようであった。

ふと空を見上げると、深く暗い空に、ダイヤモンドをちりばめたように星屑がきらめいている。

……しかしその瞬間、すべてが消え去っていた。男も犬も、通行人もいなかった。冷たい石の建物に囲まれた森閑とした空間のなかで、私はただ一人、所在無く立ち尽くしていた。



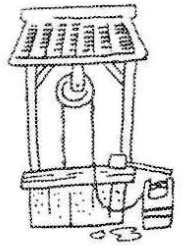
「まんじ」季刊発行内規

（発行日）	（原稿締切日注）
春季号 ……	二月一日 …… 十二月三十一日
夏季号 ……	五月一日 …… 三月三十一日
秋季号 ……	八月一日 …… 六月　三十日
冬季号 ……	十一月一日 …… 九月　三十日

注　円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

脱・下請の教科書
徳川家康

瀧澤中



1、下請から独立するため、家康は自らを磨いた。

歴史から経営を学ぶような本には、必ずといっていいほど、徳川家康が出てくる。

理由はしごく簡単で、オーナー社長が一番困っているのが、人と企業存続の問題だからである。家康は、部下を巧みに操縦し、育て、しかも徳川の三百年も続く政権の礎を築いた。これに学ばぬ手はない、という訳である。

しかし、家康の八十年に近い生涯を遠くから眺めてみると、天下人になったのは死ぬ前の十数年にも満たないのである。つまり、天下の「経営者」という意味で言うと、まだ駆け出しにすぎなかったのだ。

では、本当の意味で家康から学べるものとは何か。それはズバリ、下請企業から脱却して独立を果たすという、ただその一点である。

影武者、の話をご存知だろうか。

有名なところでは、黒沢明の『影武者』で描かれた武田信玄が上げられよう。信玄が陣中で急死した。その死を三年間伏せる、そのために影武者を必要とした訳である。

戦国武将はいつも生命の危険に晒されていたから、身代わりになる人間が必要だった。

信玄の次に、真贋はわからぬが、徳川家康の影武者伝説は、小説の題材になるほどポピュラーだ。

なぜ家康の影武者伝説がまことしやかに伝えられているのか。

それは、これから書こうとする家康の、「脱・下請戦略」と密接な関わりがあるのである。

家康の影武者伝説の特徴は、本物の家康が死んで、影武者Aが後を継ぎ、そのAが殺されると、次に影武者Bが後を継ぐという、つまり影武者のバトンタッチが行われたというものだ。

なぜそんな話になってしまうのか。

それは家康が行ってきた政策が、ある時点を境にして変質していくからである。つまり、とても同じ人間がやっているとは思えないのだ。

変質する時期はいくつかあって、それが影武者伝説へとつながってくる。

私は、本人が生きている間の影武者はあったと確信しているが、本人が死亡した後の影武者はナンセンスだと思う。バトンタッチした影武者が政策決定を行う可能性は少ないし、それでは重臣たちが合議で政策決定を行ったことになるが、あの下剋上の世で、合議制の領国運営などは自殺行為に等しい。

つまり、人柄や政策が変質したのは、本人が変質したのであって、他人がなりすましたのではないということだ。

ではなぜ変質する必要があったのか。

それは、徳川家が常に大きな大名の下請であったために、親会社の要求や性質によって、柔軟に対応していかねば生き残れなかったからだ。それも、完全子会社ではない外様の下請の場合、いつでも見捨てられる危険性をはらんでいたから、なおさらである。

家康時代の徳川は、そのほとんどを下請で通した。今川義元、織田信長、豊臣秀吉。いずれの時代もボロ雑巾のようにこき使われたが、今川、織田、豊臣の各親会社が潰れるたびに大きくなり、最後は天下を掌握して、自らが日本株式会社のオーナー社長となるのである。

徳川と同じ下請の立場の大名は他に沢山あった。彼らと徳川は何が違ったのか。なぜ徳川だけが下請脱却に成功したのか。各下請時代の戦略を検討し、その秘密を探ってみよう。

まず、今川義元の下請時代。

徳川は、立地条件的には、今川産業の企業城下町の外れに位置した。ようやく有限会社から株式会社になろうという、町工場に毛の生えたような時期である。

家康はまだ幼い。

徳川は企業戦略として今川について、今川と競り合っていた隣国の織田信秀（信長の父）の経営するベンチャー企業に対抗した。そのため、幼い家康は今川に丁稚奉公という名の人質に取られた訳である。

今川の当主（社長）は今川義元。彼が織田信長に桶狭間で殺されるまで、徳川も家康個人も、ただひたすら今

川に忠義を尽くした。

今川傘下時代、徳川はどんな無茶な要求を受けてもこれを甘受した。歯向かう力も、織田と通じるような才覚もなかったからである。

ただしこの時期、家康は後年の基礎を築くことをやっている。

一つは、自身を磨き上げたということ。

今川は、当主・義元もお歯黒をするような京都かぶれで、後継者の氏真も蹴鞠が大好きという風だったから、企業としての今川がどんな具合であったかは推して知るべしである。

が、家康はその風をよしとせず、実直に武芸に励んだ。理由はただ一つ。

「いずれ時が来たならば、自ら起って指揮をとるため」

いつか自分が親会社となって、独立を果たす。その日のために日々自らを鍛えることができるかどうか。最初の分岐点はここにある。

会社は現実的に下請を離脱するのは難しい。しかしそんな中でも、常に独立を念頭に置いて、まずは自分自身を鍛え上げること。それが独立をする経営者の最初の試練である。

家康がもう一つ得たのは、岡崎の領地に残っている家臣たちとの心の一体感である。

組織というのは、基本的に外からの攻撃には強い。今川という親会社からいじめ抜かれて、かえって社内に団結心が生まれた。

2、天才的発想をする猛烈親会社の傘下として

家康と家臣団は、心を一つにして困難に立ち向かうという組織の性質を育んだ。

自身は独立の志と鍛練を怠らず、部下とは心を一つにして困難にあたる心構えを育成した。そして、桶狭間の合戦が起こる。

今川の当主が織田信長によって殺された。

戦国時代の殿様の死というのは、勢力で言えば半減を意味する。

このまま今川につくか、織田に寝返るか、それとも独立するか。

ここで、家康の最初の変質が起きる。つまり実直・正直がウリだった徳川が、いろいろあったが世話になった今川を裏切って、ベンチャーで売出し中の織田信長についてみよう、という選択をするのだ。

今川の目は無い。それは、殺された義元の後を継ぐ今川氏真の、社長としての器量を見ればわかる。風雅の道

には長けていたが、武将としては話にならない。

当時の織田信長の領土というのは、ようやく尾張一国を領していた程度だから、多く見積もっても五十万石そこそこである。駿河・三河・遠江の三国を治めていた今川と比べれば遙かに小さいが、だからこそ、十数万石の徳川は存在価値が出てくる。つまり、ただの「下請」から一つ格が上がって「協力会社」ということになる。

親会社の倒産にもうろたえず、自身の足元をしっかりと見つめて無理な独立はせず、しかし自分を高く買ってくれる相手、将来の明るい相手を探した家康。その戦略は大当たりであったかに見えた。

が、世の中は甘くない。

織田信長というのは、今川以上に部下と下請をこき使う社長で、とにかくやたらと近隣を侵し続けた。その戦いの先頭に立たされたのが徳川である。

徳川が最前線で戦う限り、被害は徳川だけで織田の本体はあまり傷まない。徳川はその規模が中途半端に大きかったために、信長にいいように使われた。

織田からアウトソーシングされて、徳川は戦いの先陣についたが、これは割りの合う仕事かどうか。

家康は考えたろう。しかし、家康は二つの理由で織田傘下からの離脱をしなかった。一つは、当主・信長に対する恐怖心。下手に独立したら間違いなく殺される、というもの。もう一つは、この無茶な戦いの中で、自身とその家臣が鍛えられるということ。

信長はよく言われるように、一種の異常な天才だった。その発想は常に常識を覆した。

天才的発想をする猛烈社長の下で、そのノウハウを吸収したいと思ったのだ。家康は、恐怖心と共に、信長の発想や手法を学ぶために、敢えて自滅もしかねない、織田傘下の道を選び続けたのである。

それにしても代償は大きかった。

信長は、徳川の領地に危機が迫っても、ろくに人的、資金的な援助をしてくれなかった。

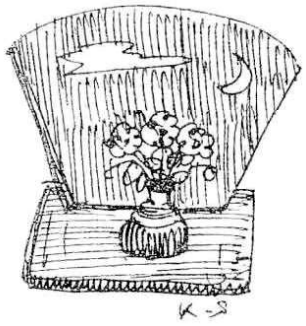
3、「いずれ独立を」の初志貫徹が、独立を可能にする最低条件。

たとえば、元亀三年（一五七二年）、三方ヶ原の合戦で、武田信玄が大軍を率いて徳川領内に攻め入ったが、信長は形だけの援軍を差し向けておわり。むろん、徳川は惨敗。

はては、家康の正室と長男信康に「武田に通じている」との嫌疑がかけられ、信長から殺害を命じられ実行した。

他社と通じている妻と息子をクビにしろと無茶を言われても、所詮は「協力会社」にすぎない家康は、従うし

かなかったのだ。
家康の第二の変質はこの頃に起きている。
実直で勇敢な青年武将だった家康が、織田にあわせる為に老成していった。
（信長の時代が終われば・・・。それまで何とか持ちこたえよう）
急激な成長を遂げる企業というのは、どこかに無理がある。その無理を承知で傘下に入るのならば、家康の如く、
（機会がくるまで現状を維持し続ける）
という努力が必要なのだ。
家康の「脱・下請戦略」は、当面現状維持をするという方向で動いていった。
それが変わる日が来た。本能寺の変である。
家康はこの時ついに、独立を決意した。
家康三回目の変質である。
まず、信長の仇を討って天下を取ろうとしたが、秀吉に先を越された。
徳川の誰もが一瞬、
（これで独立の夢は敗れたか）
と思ったが、家康はまだ望みを捨てない。
「者共、何を言うか。東国で地盤を固めよ。そして、秀吉を迎え撃つ準備をするのだ」
なんと家康は、西国で勢力を誇る秀吉に対抗するため、東国を押さえようと言うのだ。家康はただちに、甲斐・信濃攻略の軍を動かしたのである。
家康には既に二〇〇万石以上の領地と、五万人以上の兵力動員能力があった。
この時の家康は、いわば東証一部に上場したてといったところ。対する秀吉は、織田財閥の後を継いで、東証一部上場会社をいくつも傘下に収めるその総帥である。
家康は結局、豊臣財閥の一企業として存続する道を選んだ。但し今度の徳川は今までとは違う。過去、今川・織田には最初から臣従していたが、豊臣とは一戦交えてからの傘下入りである。しかも所領は関東で三〇〇万石を越えた。もはやいつでも天下を狙える。
やがて秀吉が死ぬと、家康は第四の変貌を遂げる。それまでの実直な顔を完全に脱ぎ捨てて、露骨に豊臣潰しにかかり、ついに慶長五年（一六〇〇年）関ヶ原合戦で、天下を治める。
このように、家康の「脱・下請戦略」は、まず勢力の無い時代は正直・実直に努めて信用と出来れば金を得る。
次に、企業規模をある程度確保してから、将来性のあるベンチャーに高い評価をしてもらい、取引をする。
特に、独自の技術やアイデアのない場合、技術のある企業と取引を行うというのは、極めて有益である。その場合、自社のウリは
「親切・丁寧」でも「正直・正確」でもいい。家康はまさにこれを信長に買わせたのだ。
取引中は、どんなクレームにも対応して、企業力をつける。それまでは耐えて忍ぶ。
そして、独立の機が熟したら、構わず飛び出して、堂々と戦えばいい。企業力さえついていれば、無様な負けはない。
ただし、家康がどんなに忍耐強く、頭が良く、実行力があったとしても、今川時代に、
「いずれ独立をするのだ」という強い意思がなければ、天下はとれなかったろう。
それだけを付言しておきたい。





勲章と万博

大和 禎人

「御国事変有之義風聞承り候共妄ニ動申間敷き事」
—御国の事変これある義、風聞承り候とも妄りに動きまじき事—

一八六七年（慶応三年）フランスのナポレオン三世の政府はパリーで万国博覧会を開催するに際し、徳川幕府に名産珍奇の出陳を勧めてきた。かねてこの国が示してきた親幕外交上の誘致に相違なかった。

慶応三年といえば、幕府にとってはすでに多く内憂を抱え、累卵の危うさに直面している時期であったが、協賛、出陳に応じ、将軍徳川慶喜は弟の徳川昭武を名代として、随員二十四名を伴わせ派遣している。わが国にとって画期、初の万国博への参加であった。

冒頭に掲げるものは出発にあたり将軍慶喜が危機を予感しての昭武に授けた心得であった。昭武は水戸藩主斉昭の第十八子で、時に十五歳。慶喜の異母弟で、二十二人（九人は夭折）いた男兄弟の中、慶喜はわけてこの昭武を愛し、信頼をおいており、昭武もまたこの兄に対し敬愛の念をもち、終生変わることがなかった。慶喜の大政奉還の知らせはやがて故国からパリに届いたが、昭武は兄の訓命を守って、この時点の帰国をひかえている。

昭武一行の横浜出港は慶応三年正月十一日、長い航海を経て三月七日にパリに到着。以後八月初めに至る約五ヵ月、万博の行事に参加している。幕府の呼びかけに応じた万博出陳には他に薩摩、佐賀の二藩があったが、薩摩藩の動向が幕府側の苛立ちを呼んでいた。

薩摩藩は今回の参加出陳にあたって、幕府より早い渡航の上、長崎の政商グラバーを動かし、あらゆる面で先手をとっていた。とりわけフランス政府の要路に対し、用意の勲章を贈るという意表の挙に出ていたのである。

先に、薩藩が引き起こした生麦事件は文久二年（一八六二）の八月、英国艦隊が報復の薩英戦争はその翌年の文久三年六月のことであった。外夷と侮った認識はこの際の殲滅的な打撃をうけて潰え、目覚めるとともに、掌を返し急速な和親関係を進め、まもなく藩内有為の若者を英国に派遣留学させている。後の急進的な開明主義者森有礼などがその一人であった。

薩藩側のパリ万博派遣の一行八名を写す一葉の写真が残されているが、その前列中央にはその森の姿がある。藩命で英国から急遽一行に加えられたのであろう。それにしても気づくことは並みいるすべての者が洋服、かつ断髪姿で、シルクハットを膝におく者もあり、慶応三年のこの時期、まさに異風を伝える写真になっている。

勲章の準備はもちろん故国出発以前、周到に準備されたものに相違ないが、建議してこれを実現させたものは開明派に相違ない。この事実はわが国勲章の嚆矢となるものであった。

問題の勲章の意匠は星を形象し、中央に丸に十字の島津氏の紋章、星光を縫うかたちで「薩摩琉球国」の五文字を配している、というものだった。

薩藩の勢威を象徴し、これを贈ることにより明らかに独立国家を印象づけ、同時に勲章をうけて喜ぶ心理をくすぐる魔力をも持ち、わけても勲章好きと目されたフランス人の関心を買うに十分だったのである。

勲章の効果は覿面だった。薩摩藩は薩摩太守、ならびに琉球国王として、幕府とは別に独立したスペースを要求して幕府の代表団が到着した頃のパリでは、

「どうも徳川幕府は日本全体の代表ではないらしい」

という空気が支配的になっていた。

「日本には二つの政府があるらしい」

こんな誤認の広がりをもつに至った。薩藩の施設の屋上に丸に十字の藩旗が翩翻とはためくのを見てはなおさらであった。

名代昭武に従う幕府方頭取格は向山隼人正で、これを問題視した。かれは勘定奉行格の外国奉行であった。

「これは由々しきことに思われまする」

通辞として一行に加わってきた駐日フランス長崎領事レオン・デュリーが伝えてくれていたらしく、勲章のことも知識にしていた。

「殿、いかがなされます」

気色ばむ声音であった。若冠の昭武を首班に仰ぐかれとしては補佐の任に並々ならぬ重責の自覚があって神経を尖らせていた。

「薩摩の藩中に厳しく糾しましょう、公儀を恐れざる

仕儀、回答によっては捨ておけませぬ」

幕府の威信にかかわる事態ととらえられたのである。

「木村や渋沢とも相談の上、よきに計らいくれよ」

「かしこまりましたご近習衆とも談合のうえいずれの善処をいたしましょう」

向山の立場からは水戸藩士の近習をさしおく行動はできない分限があった。封建社会の仕組みなのだ。

水戸藩近習の木村は藩の大番格の木村宗三、渋沢は勘定格の渋沢篤太夫（後の栄一）であった。渋沢は当時慶喜の登用をうけて臣従の身、とくに慶喜の指名で近習に加えられていた。

「幕府においてもそのデコレーションらしきものを、急遽、作成させてはどうか」

勲章という言葉はなかった。栄誉の胸錺（むねかざり）ぐらいに考えられた。デコレーションという呼び方はグスタフ・シーボルトによるものだった。駐日英国大使館付通訳で、父はシーボルト事件で知られるフォン・シーボルトだ。薩英戦争の折には艦隊の旗艦に乗っており、またこの度は休暇帰国のため昭武一行の船に便乗していたという奇縁がここにあった。

「いや、いまさら作成なぞと申し送って間に合うことではありますまい、江戸表の役人方には早速のご理解は困難でございましょう」

渋沢がたしなめて言った。官僚化した幕府の役人には望むことの無理を承知していたのだ。

「薩摩の存念を糾し、順逆を弁（わきま）えるよう促すほかありますまい、臣従の関係を明らかにさせることです」

渋沢の言はきっぱりとしていた。

向山隼人正は随員の中から外国奉行支配組頭の田辺太一を選び、二人で薩摩側へ赴き、交渉に当たった。

南国薩摩の侍たちの開明は前記のごとくであり、その異様な風体に囲まれ、難解な地下（じげ）言葉に、揶揄と覚しき言葉の礫（つぶて）を浴びせられた成り行きの挙げ句、

「薩摩太守の政府とすれば良かろうたい、その通りじゃけん、文句なか」

ということになった。向山ら二人はこの時点で深くその意味を噛みわける能力をもっていなかった。薩摩一藩に限る支配ぐらいの意味に軽くうけとったのだった。

「それはまずい、政府という意味はガバメントを意味するものだ、徳川政府の他にもう一つの政府が並び立つことになる」

切歯のほかない成り行きだった。

薩摩藩は周到な準備を進めて、パリ乗り込みも先んじており、五代友厚らにより琉球物産を多く長崎の政商グラバーの手により独自の船便で送るなど、万博を機に世界にアピールするチャンスととらえて、徳川家と島津家

は対等の立場にあることを宣伝するねらいを密かにねらっていたのだ。

パリ万博の主会場はフランスの国威を示そうとセーヌ河畔のシャン・デ・マルスの遊園地に設けられ、入場者総数は約一六〇〇万人、一八五一年のロンドン博の六〇〇万人を超え、ナポレオン一世時代の栄光を復活させたいというナポレオン三世の望みは達せられた。

会場のほぼ半分を開催国フランスが占め、イギリスが六分の一、プロイセン（ドイツ）、ベルギー、ロシア、アメリカなどが続いた。アジアからは日本、シャム、清国の三ヵ国が参加した。日本はシャムと清国に挟まれた狭いスペースであったが、出品物の点数と質では圧倒的に他の二国より優っていた。この万博の新機軸は国別のパビリオンを建てたことだった。ロシアの丸太小屋、オランダの農家、エジプトの神殿といった中に日本の水茶屋が異色をもって、三人の日本女性のサービスなどにより人気を呼んだ。町方から協力の名乗りをあげた瑞穂屋清水卯三郎のアイディアにほかならないものだ。清水は出品物においても大賞六四個中の四個もの賞をうける貢献を果たし、対薩摩との暗闘の苦渋を癒す上で、少なからぬ貢献を幕府方にもたらしている。

万博の会期の終りを待ち、昭武一行は八月六日、ヨーロッパ各国巡歴の旅に出ている。将軍名代として各国元首に謁見する任をおびていた。行く先々歓迎をうけ、見聞したすべての開花文明に「驚嘆」の二字を日記に記している。フランス語の勉学も慶喜の命で、ヴィレット中佐なる家庭教師が伴っており、勉強に励み仏文の日記を記すようになっていた。几帳面なかれは和文の日記と平行して仏文の日記を残しているが、かれの正直な思いのほどはこの仏文に多くを記し、帰国まで続いている。

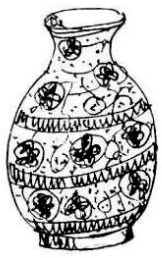
故国から兄慶喜の大政奉還の知らせが届いたのはこの旅行中であった。かれが留学生活をおくるため脱刀、断髪におよぶと、従っていた幕臣向山隼人正ならびに水戸藩士四名が病気を理由に訣別、帰国のため十二月パリを発している。一行にはただに役人という任務のために随行、また攘夷主義者もいるなど、当時の日本の社会を凝縮したようなメンバーで成り立っていたのだ。

昭武の帰国は江戸城明け渡しの上、兄の水戸へ退き謹慎の報が翌明治元年、五月十五日にいたり届いてからになった。しかも四月六日には水戸藩主慶篤（よしあつ）が死去しており、三卿の清水家を継いでいたかれが宗家を襲封し、水戸藩十一代、最後の藩主として十六歳から十九歳にかけて困難な局面に立ち、旧体制の残務処理に当たることになる。若年のかれに識見を云々することは当たるまい。

幕末の昏迷から新時代へ端境（はざかい）を生き、わが国初の文化使節を勤めた意義に亡びはない。（H一三・一一・一四）

灰吹法による戦国バブル

新井宏



二十年ほど前、鉄鋼は日本の輸出産業の花形であった。年間三千万トン以上、金額で言えば三兆円以上も輸出し、当時の国民総生産に対して、一パーセントに迫ろうかと言う勢いにあった。

ところで金属の歴史をひも解くと、似たようなことが、しばしば起っていた。

まず、江戸時代の中頃、日本は年間六千トン以上の銅を生産し、世界第一の産銅国であり、その過半を輸出していた。当時の国民総生産を米価換算で五千万石程度と仮定すれば、その輸出額は〇・三パーセントに相当し、鎖国下という状況を考えれば、まさに異例な規模であった。アダム・スミスが言うように、時にはこの銅がアムステルダムの銅相場を左右した。

しかし、それにもまして国民総生産に占める比率の高かった金属がある。十六世紀後半の戦国期に始まった銀の輸出である。そのピークとなった江戸時代の初期には、年二百トンも生産し、瞬く間に世界第一の銀生産国に駆け上がっていた。

それまでの日本では、銀の生産が乏しく、奈良時代からの生産量を全て合計しても、わずかに十トン程度にすぎなかった。だから年間二百トンの輸出が如何に膨大な数値であったか想像できるであろう。当時の国民総生産を米価換算四千万石と仮定すれば、実にその五パーセントにも達する規模であった。

そして更にさかのぼれば金もある。鎌倉時代から室町時代にかけて、日本の輸出品の中心となっていたのは常に金である。膨大な宋銭の流入に見合った輸出品としては、日本刀などもあったが、輸入対価の大半が金によって支払われた可能性が高い。そのことがマルコ・ポーロの「金の国ジパング」の噂を生んだのである。

かくして日本の歴史、特に国際収支の歴史は、順次、金・銀・銅・鉄の金属産業によって支えられて来たといっても過言ではないのである。歴史は繰返す。

ところで、乏しい銀の産出に苦しんでいた日本が、にわかに銀の最大生産国に駆け上った裏にはなにがあったのであろうか。

銀は、世界の歴史をさかのぼればさかのぼるほど高価であった。ヘロドトスの『歴史』では、紀元前五世紀には銀三に対して金四であったと言い、紀元前一世紀のギリシャの地理学者ストラボンも『地理学』の中で、アラビヤでは銀一に対して金二であったと言っている。誇張された表現であり、そのまま受取ることはできないが、かって銀がいかに高価であったかを窺わせるに充分であろう。それがローマ期には銀十に対して金一の割合、すなわち金銀比価が十に至る。

その点から言えば、古代日本も金が安く銀が高かった。奈良時代の金銀比価は三で、当時の唐における比価六あるいはローマ世界における比価十に比べるとかなり銀高である。おそらく当時の金や銀の産出状況を反映した価格であったと見て良いだろう。

史書によれば、銀の国産化は、天武天皇二年（六七四）に対馬国から、銀が発見され献上されたことに始まり、続いて持統天皇六年（六九一）に伊予国から銀三斤八両（約二キログラム）および銀鉱一籠が献上されている。しかし、その後に発行された和銅開珎銀貨の銀は、鉛の同位体比分析からみて日本産ではなく、当時日本では銀の産出が低水準に留まっていたのは疑い得ない。

平安時代に入って、天禄元年（九七〇）の頃、源満仲の摂津国多田銀山が盛況であったことを伝えるが、奥州の金産には、はるかにおよばなかった。その後、鎌倉時代に至っても金銀比価は相変わらず三を示しており、歴史的に見て日本における銀産が乏しかった。通説で、奈良時代から室町時代までの金産を三十トン、銀産を十トンとしているのもうなづけるのである。その証左に、十五世紀の中頃になっても、朝鮮李朝では金銀比価が十であったのに、日本では四～五であり、そのため日本は朝鮮に対して、しきりに銀を求めていた。それまでの日本は何といっても金の国であった。

状況が一変するのが、十六世紀の前半である。朝鮮半島から灰吹法が導入され、生産額が飛躍的に増大し始めたのである。主要な記事を追いかけて見よう。

一五二六年　大内義興の下で、博多商人神屋寿禎が仙の山（石見銀山）の銀鉱石を発見。海外から鉱石を求めて買鉱船が殺到。

一五二八年　ソウルで黄允充が倭の鉛で銀を作り訴えられる。

一五三一年　大内義興は石見銀山守備に矢滝城を築くが、小笠原氏に奪われる。

一五三三年　大内義興が石見銀山を奪回し、神屋寿禎は慶寿と宗丹を伴って「灰吹法」を実施し、運上銀百枚（四十キログラム）と決める。

一五三六年　後奈良天皇、大内義興の献上銀で即位式。

一五三七年　尼子経久に石見銀山を奪われるが、一五三九年に奪回、一五四一年に小笠原氏が攻め、一五四三年に尼子と小笠原両氏が銀山共同経営…と、延々として豊臣秀吉まで争奪戦が続く。

一五三九年　李朝の義州判官柳緒宗が、倭人から鉛を買い吹錬して銀を採り、その術を伝えたことにより罪に問われる。

一五四〇年　朝鮮から北京に出向く者の多くが密かに各三千両（十二キログラム）以上の銀を持ち出す。

一五四二年　佐渡鶴子銀山と生野銀山が発見される。

一五四二年　室町幕府の使僧安心東堂（対馬から派遣された偽使）が銀八万両（三トン強）を持参して貿易を求める。この頃、朝鮮では銀価暴落（銀一両布四匹が銀一両〇・六六匹に）。

一五四二年　ポルトガル人が捕獲した海賊船に、膨大な日本銀（八万両）を積載していた。

そして翌一五四三年には、種子島にポルトガル人がやってくるが、それはこれらの経過から見て必然的な出来事であった。ポルトガルは日本産の銀をもとにして、アジア貿易の覇者に成長して行く。

まさにこの二十年間の動きは、ひと瞬きする間の出来事であった。日本人の一気に走り出す特性がそこに読み取れて面白いが、前後関係から見て、灰吹法が朝鮮半島からもたらされたとするのには疑問の余地がないであろう。ただし、その灰吹法は、いままで中国の技術であろうと見なされていた。

韓国に限らないであろうが一般的な傾向として、その国の文化や技術を、他国に伝えたことを誇る傾向がある。国威発揚に心がける韓国では、日本に文字を伝え、仏教を伝え、高麗大蔵経を伝え、焼物を伝え、活字を伝え、朱子学を伝えて江戸時代の精神文化の基礎を作り、更には通信使を通して日本に広く文化を伝えたことを誇っている。その通りである。

しかし、その流れで言えば、灰吹法を伝えたことこそ、

もっともっと誇っても良いのである。日本が中世から近世へ、極めて順調に脱皮できたのは、まさにこの銀産の勃興による経済の活性化のためであった。

考えても見よう。国民総生産の五パーセントもの価値を持つ通貨的な銀が、毎年市場に投入されたわけである。これで市場が活気つかなかったとしたら、そちらの方が不思議であろう。

後のことになるが、徳川家康が発行した慶長丁銀は三千六百トンもあったと言う。その他にも銀を輸出して得た金などにより作った慶長小判が金純分で二百二十一トンすなわち千四百七十万両もあった。合計して三千五百万両にものぼる膨大な通貨が発行されたわけであるが、これは当時の国民総生産額を優に越えてしまう。

流通経済が極度に発達した今日でさえ、日銀の発券残高は国民総生産額の十パーセント以下に過ぎず、預貯金や手形等の準通貨を加えても、ほぼ国民総生産にやっと手が届くレベルである。そのことと比較して見てほしい。戦国バブルが発生していたのである。

だから日本の中世から近世にかけての経済活性化に、灰吹法が大きく関連していたことは、誰も否定しえないであろう。ところが不思議なことに、日本でも韓国でもあまりそのことを強調している方がいない。戦国大名が金銀山の開発に熱心であったことや金銀山の争奪を巡って激しい攻防戦を繰り広げたことは知っていても、その経済的な評価が不十分なのである。

その結果として、韓国でも灰吹法のことを知っている人など極めて少ない。もっとも今までは、この灰吹法はおそらく中国から韓国に伝わったものであろうとする見解が有力だったことも関係しているかも知れない。

ところが近年、この灰吹法が朝鮮半島で開発されたという確かな証拠が現れた。それは平成九年秋に石見銀山の仙の山から発見された鉄鍋によってである。

すなわちこの鉄鋳物でできた直径三十センチ程度の鍋が、韓国の史書『燕山君日記』の一五〇三年条に出てくる銀精錬法の記事に一致することが判明した。概要を翻訳してみよう。

良人の金甘佛と奴の金俠同は、含銀鉛一斤を製錬して銀二銭を得た。これからは国産の鉛から生産される銀で用がたりる。製錬法は次の如くである。鋳鉄製の鍋の内側に、骨灰で区域をつくり、その中に鉛片を充塡し、陶器の破片で炉周を覆う。木炭を熾して上から下に加熱して鉛を溶かす

灰吹法とは、銀と鉛が高温で良く溶け合う性質を利用して、微量の銀をいったん溶けた鉛の中に吸収させ、そのあと鉛だけを酸化させて骨灰などに吸収させ、銀を取

り出す方法である。基本的な原理は古代ローマでも古代中国でも知られていたが、問題はコストであった。銀含有量の比較的低い鉱石から銀を取り出す場合、コスト高であっては成立たない。なによりも当時、銀は通貨そのものであり、通貨価値よりコスト高であれば、銀産が成立つはずがなかった。

その点、金甘佛たちが開発した灰吹法は優れていた。動植物の骨灰などアルカリ性の副資材を使用して、効率良く鉛を酸化吸収させ、しかも鉄鍋を用いることで、鉱石状態の硫化銀に里帰りしたがる傾向を完全に抑制することに成功した。得られる純度も極めて良かった。

しかし、せっかく朝鮮半島で開発されたこの灰吹法も李朝で大きく開花することは無かった。なによりも日本に比べて良い鉱石に恵まれなかったことに大きな原因があったが、その他にも宗主国明との関係が複雑に絡んでいた。

明は建国以来、銀本位制を取り主要取引は全て銀によって行っており、その関係で李朝に対して銀を貢納せよと厳しく要求していた。それに対して「朝鮮では銀を産しない」と奏請して免除してもらっていたのに、銀産が盛んになって明から「不直の国」と見なされることを極度に恐れたのである。だから銀産をよろこび奨励する反面で、銀産を抑制するなど政策の一貫性に欠けた。

それに対して日本では、一気に銀山の開発が進んだ。良質な鉱山が次々に見つかったのも幸いしたが、それには、それに先立つ百年前頃から銅産が盛んになり、その製品を朝鮮や中国に輸出するようになっていたことも密接に関係していた。銅に続けと一気に走り出したのである。

そもそも、灰吹法を導入した神谷寿禎は、日明、日朝貿易に携わっていた博多の商人である。当時の主要輸出品はもちろん銅であった。だから李朝で画期的な灰吹法が開発された情報を速やかにキャッチしたのも、出雲大社の近くの鷺浦銅山を経営する三島清右衛門とともに、海上から南方に光り輝く山（石見銀山）を見て銀鉱の存在を悟ったのも、全てが銅との関係からであった。

神谷寿禎は当初は李朝に対して銀鉱石のまま輸出を行う。それが一五二八年のことである。情報は早かった。さっそく海外から鉱石を求めて買鉱船が殺到しはじめる。しかし鉱石のまま運搬していては運賃ばかりがかさむ。何しろ銀の含有量など〇・一パーセントにも満たないのであるから、銀を取り出してから輸出したくなるのは当然である。寿禎は李朝側商人に活発な工作を開始する。それに対して、李朝側商人の利害も一致した。李朝の銀産に対する一貫性を欠く政策の中で、鉱石の輸入は極

めて危険であった。事実、一五二八年にはソウルで黄允充が倭の鉛で銀を作ったとして訴えられている。

寿禎は李朝側商人と結んで宗丹と桂寿（慶寿）を送り込み灰吹法を学ばせる。一説によれば、あるいは桂寿は李朝の技術者だったかも知れない。そして一五三三年には彼らを伴い石見銀山で初めて灰吹法を実施し銀を得たのである。これが日本における新たな灰吹法の出発であった。

その結果、一五三八年頃になると日本から李朝に持ち込まれるのはすべて銀そのものとなった。一五三九年には李朝の義州判官柳緒宗が、灰吹法を日本に伝えたことで罪に問われるがもう手遅れである。銀はヤミルートを経て激しく李朝に流入し始める。

そればかりではなかった。これらの銀は李朝に留まるよりもむしろ、北京に向って再密輸出され始める。朝鮮から北京に出向く者の多くが密かに各三千両（十二キログラム）以上の銀を持ち出しているという状況が出現した。それと同時に、李朝における銀価が暴落する。これには李朝も困窮した。せっかく灰吹法を開発して朝鮮内の銀産が盛んになったのに、これさえ禁止し、日本に対しては禁銀政策で流入を規制する。

それに対して、日本側もいろいろな手を打つ。一五四二年には、僧安心東堂が室町幕府の使と偽り銀八万両（三トン強）を持参して貿易を求める強硬策をとるようになる。わずか数十年前には、李朝から銀千両を入手するのに汲々としていた状況とはまさに様変わりであった。李朝の禁銀政策が日明の中継貿易にポルトガルが乗り出してくる契機となった。

ところで、日本において灰吹法が隆盛に向ったちょうどその頃、新大陸では銀の新しい製錬法が登場した。それは一五五七年イスパニヤの鉱山技師パルトロメ・デ・メディナによって発明された水銀アマルガム法である。これは、鉱石を砕いて塩・硫酸銅・水銀を加えてアマルガムをつくり、水銀を蒸発させて銀を採る方法で、熱経済的に極めて有利であった。そのため、一気に銀の生産量が増加し、欧州では水銀価格が暴騰し、続いていわゆるヨーロッパにおける価格革命すなわち経済大変動が始まった。

そのアマルガム法の存在が日本に伝えられていたことは、秀吉亡きあと天下人となった徳川家康が、慶長三年（一五九八）にイスパニアのフランシスコ派の宣教師ヒエロニモ・イエズスを引見した際に、新技術の取り入れを要請していることから分る。家康は慶長十四年（一六〇九）にも、海難で千葉県御宿に上陸した前イスパニア・フィリッピン総督のドン・ロドリゴに、同様な要請をし

ている。家康は既得権を有するポルトガルとではなく、新たにイスパニアやオランダと結ぼうとしていた。

そのため、アマルガム法が実際に日本に導入されたか否かについて、近年まで激しい論争が続けられ、一時はアマルガム法は存在しなかったと言うのが通説であった。しかし現在では、佐渡の水金町の伝承や御用水などの関連遺跡から、その存在が確認され、しかも古文書から慶長十三年（一六〇八）以前に、既に始まっていたことが確実とされている。

ただし天正十九年（一五九一）のイエズス会巡察師ワリニャーニの書状に「彼らが若し、水銀を用いペルーにておこなわる技術を利用するを知らんには、……少なからざる財富を収め得べし」とあることから、この時点では未だアマルガム法は入ってきていなかったと見るむきもあるが、一五八五年六月二十日付マニラ発のサンチャゴ・デ・ベラの書簡で、そこには「余は猊下の命により、サングレイに対し水銀をもたらすべき商談を試みたれども、過去幾年か彼らは日本にこれをもたらしており、すなわち日本にては多くの銀鉱山あって良き価を受けたるため水銀の価格は騰貴し、彼らは抜目なき商人なるをもってこの種の交易の欲せられることを信ぜず云々」とあり、明らかに日本の銀鉱山で水銀すなわちアマルガム法を使用している証拠もある。

かくしてかなり早い時点から、日本でもアマルガム法が行われていたわけであるが、それにもかかわらず、家康が宣教師らにアマルガム法の導入を要請したのは何故であろうか。それは、アマルガム法が西国でのみ行われており、家康の管轄下では未だ行われていなかったからではなかろうか。我々は家康の政権を、関ヶ原の戦いをもって確立したように考え勝ちであるが、貿易、つまりポルトガル人からみたら、家康はポルトガル人に好意をもたない東国の一大名にしか過ぎなかったのである。

ところで、そのアマルガム法も日本の特殊性にうまく適応できなかったようで、慶長十九年（一六一七）英国商館長コックスは水銀が売れなくなったことを嘆いている。その頃、日本は灰吹法を大量生産技術に適するように改良することに成功し、アマルガム法を用いずとも銀生産の頂点を極めるほどに成長していた。

しかし歴史は皮肉である。ちょうどその頃、世界最大のボリビアのポトシ銀山も隆盛に向い、その銀がヨーロッパばかりでなく、マニラ経由で東洋にもたらされ始める。それは必然的に銀の暴落をもたらし、銀産によってささえられていた日本経済を直撃する。もはや国際的な金銀比価十三に日本はついて行けなくなってしまった。しかし次期の輸出花形商品となる銅の生産が育つまでには更に五十年を必要としていた。

そうなると常套手段は為替管理すなわち管理貿易の強化である。すなわち一六三二年から一六三九年にかけて五次にわたって順次強化された貿易制限令により、幕府は最終的に鎖国令に至ってしまう。

その結果、江戸時代を通じて、世界の金銀比価が十五に向う中で、日本だけが逆に金銀比価を五まで後戻りさせてしまう。鎖国下でこそ可能な幕府の巧妙な政策であり、幕府はこの膨大な為替差益を通貨改鋳を通して独占し続けた。そしてそのつけを払わされたのが、幕末のペリー来日である。ちょっと単純すぎる見方であろうか。

いずれにしても、戦国期から江戸初期の歴史を語るに当って、巨額の銀の存在を無視して語るわけには行かないことに、我々としては十分に留意すべきであろう。

以上のような話をすると韓国では必ず受ける。誰かがいっていた。韓国人は外国から誉められるのが大好きで、けなされると怒るのに、日本人は自虐的でけなされて喜んでいると。私は素直な方が好きだ。

祝出版

瀧澤中著

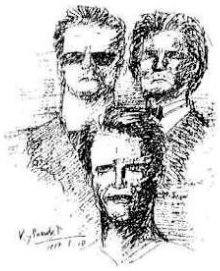
「一分間でわかる政治学」

ぶんか社　一、五〇〇円

「テロ　クライシス」

ぶんか社　一、五〇〇円

黒船（一）



太田和貞

大島が動いた

嘉永六年（一八五三）六月三日朝、蒸気船二隻・帆船二隻からなるアメリカのペリー艦隊が伊豆半島沖に黒い姿をあらわした。

江戸湾入口の浦賀水道を通り、酉上刻（午後五時）ごろ、浦賀町の沖合いに錨をおろした。

この日を境に、日本の情勢は一変し、徳川幕府の屋台骨は大きくゆらいだ。

「黒船あらわる」の第一報を浦賀奉行戸田伊豆守は早舟にて、江戸の老中阿部伊勢守に注進している。

今三日、羊上刻、相模の国、城ヶ島沖合いに、異国船四艘相見え候趣、三崎詰めのもの注進申し出で候につき、早速見届けのため、組のもの出張り仕らせ、御固め四家（井伊掃部頭・松平誠丸・松平下総守・松平肥後守）え心得のため、早々相達し候処、只今千駄崎まで迅速に艇り込み候、これにより此の段御届け申し上げ候、以上、

六月三日　戸田伊豆守

千石船を大きな船だと思っていた江戸の人々はペリー艦隊の軍艦を見て、

「伊豆の大島が動き出した」

と叫んだ。

船は艤で漕ぎ、帆で走るものと思っていた人々にとって煙突から黒煙を吐き、風上に向って航行できる摩訶不思議さと、しかも艦全体がピッチで黒く塗られていたため、「黒船」と呼んで、ひじょうに恐れた。

黒船は悪魔の化身に思えた。

そのため、幕府は六月七日に、黒船調伏の祈禱をおこなっている。

七日、浦賀港に異国船渡来す。よって日光門主のもとに、高家宮原弾正大弼御使ひして、世上静謐の祈禱料白銀百枚をつかはさる。

小岩村の名主助左衛門は床の中で善養寺の朝六ツ（午前六時）の鐘の音を聴いていた。

鐘の音を聴いても、助左衛門は起きる気にはなれなかった。

二日前に善養寺の住職慈現が卒中であの世に旅立ち、昨日葬式をしたばかりで、体中の気力と体力がいっぺんに無くなってしまった。

三日前までは、暁七ツ（午前四時）に起床して村人といっしょに善養寺の境内を竹箒で掃き清め、幼な馴染みの慈現が鐘楼にのぼるのを待った。

紺の作務衣の慈現が鐘楼にのぼる姿に、助左衛門たちは両手を合わせた。

捨て鐘を二つ撞いてから、慈現は開いた両足を踏んばって撞木を吊り鐘に一気に当てた。

ボーンという鐘の音に重なってウヮウヮ～ッという、唸りがどこまでも響いていった。

慈現は吊り鐘のこの唸りが黒船調伏に、いちばんききめがあると熱っぽく説いていた。

腹の底に響くこの唸りは、異人たちの五臓六腑を掻き乱し、遂には血反吐を吐いて死に至ると鐘楼の上から説教した。

その慈現も、今はいない。これまで助左衛門が葬式に立ち合ったのは、どれも年上の者たちだった。

それが、突然おないどしの幼な馴染みの死を迎えて、助左衛門は体力の衰えを思い知らされた。

若い者には負けはせぬと気張っていること自体がすでに老いのきざしだったのだ。

助左衛門、五十五歳。まだまだ人生の日暮れには、ほど遠いと思っていたのに慈現のように、死を迎えることがあるという恐ろしさに、助左衛門ははじめて気付いた。

朝六ツの鐘が鳴り終った。

慈現の息子の慈眼が父親と同じように、黒船調伏の説教をしている姿を助左衛門は思い描いた。

（そうだ。慈現のためにも、慈眼のお説教を聞かずばなるまい）

と気付いて助左衛門は床を跳ね起きた。

善養寺の山門を入ると若々しい慈眼の声が聞えてきた。

「心に念じた黒船への憎しみを口から吐き出しましょう。その邪気が凝り固まって、異国船の異人たちに仏罰をくだします。心に念じた憎しみを口に、……」

そう言って、慈眼は合掌した。「唸」という字を慈眼

は二つに分解して、説教の中に取り入れていた。

境内に静かなひとときが流れた。江戸の町では、黒船の恐怖で湧き立っているというのに、江戸から四里ほど離れたこの小岩村では、静かな朝であった。

慈現の葬式などでとどこっていた書類を片付けるために、助左衛門は精力的に働いた。気になっていた黒船については、興之宮村の触次三郎右衛門から廻状が届いていた。

廻状を以て御意を得候、しかれば今般相州浦え異国船相見え候ニ付、房総筋お備え場それぞれお堅メニ付、松平下総守様今七日江戸御出立、新宿町御通行遊ばされ、右ニ付、急御相談申し上げたき儀御座候間、明八日正四ツ時東小松川村東善寺え御名代、御不参なく、じきじき御出合下さるべく候、この状早々御巡達、留り村より御返しならるべく候、以上、

興之宮村
丑六月七日　触次　三郎右衛門

黒船が浦賀沖に姿を見せたのが六月三日、浦賀奉行戸田伊豆守から早舟による届書が江戸の老中阿部伊勢守に届いたのは、六月三日の夜半すぎであったろうと思われる。六月七日の興之宮村の触次三郎右衛門の廻状によれば、松平下総守が房総筋の防備のため六月七日に江戸を出立して、新宿町（葛飾区）を通過することが触れられ、急遽八日に名主の会合を開くことの知らせであった。

それにしても、その情報の伝達と対応の機敏さに驚かされる。

さらに、黒船来航の知らせは、六月三日の夜半すぎであったにもかかわらず、江戸の諸物価は急騰した。

米や油をはじめ、竹皮、わらじ、ろうそく、梅干、味噌までが翌朝までに品切れになった。諸藩の大名屋敷が争って大量に買い占めたためであった。

一夜明けて、物価の暴騰を知った江戸の町人たちは驚き、唖然とした。

ある者は天狗の仕業だと断言し、ある者は神仏の怒りだと恐れおののいた。

黒船の動向が分からない町人の間に、流言飛語が飛びかい、不安からの臆測は、やがて恐怖となった。

そのうち黒船の噂が流れるにつれて、戦争が始まると、老人や幼児婦女それに家財を郊外に疎開させる者が続出した。近郊に親戚や知人のない者は、菩提寺に老人や子供を預ってくれるようにと依頼する者が多くなった。このような混乱から江戸の町に空家がふえ、米価はさらに騰貴した。

江戸から離れ、静かだった村々も例外ではなかった。大名たちが担当のお備え場への移動で宿継ぎ人足が村々から多数徴用された。

徴用された百姓たちは、江戸の町の周章狼狽ぶりや黒船が、どんなに恐ろしいかを聞かされて村に帰ってきて、さらに大仰に家族や近隣に話して聞かせた。

このように、噂は噂をうみ、さらに大きくなって村々にひろまっていった。

そのため、六月十日に代官竹垣三右衛門は、村々が浮き足立たないように浮説禁止の触れをまわしている。

此節、相州浦賀沖合え異国船渡来いたしおり候ニ付ては、それぞれお固仰付られ、武家人、数場所え相詰め候ニ付ては如何之浮説申し触らし候義は勿論さわがしきこれ無きよう村々役人共より、小前末末のものえも申し聞かせ置くべきもの也、

竹垣三右衛門
丑六月十日　役所

さらに、十二日には触次役の三郎右衛門から江戸の町で早半鐘が打ち鳴らされときは、これまでの出火同様に村役人が付き添って馬喰町の御用屋敷に人足を詰めさせることが伝達された。

急廻状を以て御意を得候、しかれば今般異国船渡来ニ付き、江戸町方ニおいて出半鐘打ち候ハバ、これまで出火同様、村役人差添え駈付人足、馬喰町御用屋敷へあい詰めさせ候様、村々え相触れ請書印形取揃え早々差し出すべき旨、仰せ渡され候間、明十三日四ツ半時まで二三判（名主・年寄・百姓代の印鑑）ご持参、私宅へ御出張、御調印ならるべく候、此状刻付を以て即刻御順達、留り村よりお返しならるべく候、以上、

興之宮村
丑六月十二日　触次　三郎右衛門

翌十三日には、前日の十二日にペリー艦隊が浦賀沖から姿を消したという知らせは、人々を狂喜させた。

今般相州浦賀沖合え渡来の黒船、昨十二日同所引払候間、都て平日之通り相心得べきもの也、

竹垣三右衛門
丑六月十三日　役所

「たった四はいで夜も寝られなかった」異国船が退去したという知らせは、江戸の町、近郊の村々、日本中の人たちを安堵させた。

松平容保の米船退帆届にはつぎのように記されている。

一、金沢野島沖合滞船に相成り候異国船四艘の内、今朝弐艘、車付きは観音崎沖え退船致し候、向井将監

（船手頭）組同心より注進申し候、

一、異国船大津沖合に滞船致し居り候処、今日五半時比出帆、南洋を指し走り候につき、番船附添え、其の外、見届け船差出し候処、相州城ケ島と房州洲の崎との堺を乗り抜き、帆影も相見えず退帆致し候間、検使の者申し出で候段、富津詰め家来より申し越し候段、備前守殿え御届け致し候旨、申し越し候、以上、

六月十二日　　松平肥後守

六月三日の朝、ペリー艦隊が伊豆半島沖に黒い姿を現わしてから、六月十二日に浦賀沖から退帆するまでの十日間のペリー提督の行動を追ってみる。

六月三日、午後五時ごろペリー艦隊四隻（旗艦サスケハナ号二四五〇トン、帆走軍艦サラトガ号八八二トン、蒸気軍艦ミシシッピ号一六九二トン、帆走軍艦プリマス号九八九トン）は浦賀の町と相対して錨を海中に投じた。艦隊が錨をおろさないうちに、日本の警備船の一群が艦隊めがけて漕ぎ寄せてきた。

ペリー提督は信号で、

「決して日本人を乗艦させてはならない」

と命令した。

ただし、旗艦に限り、用件を帯びた者三名の乗艦を許可した。

浦賀奉行の支配組与力中島三郎助はオランダ通詞堀達之助を拉えて旗艦にのぼり、副官のコンテー大尉と協議を始めた。

コンテー大尉は、ペリー提督の指図に従い、

「ペリー提督は和親修交の使命を帯びて、アメリカ合衆国より派遣され、大統領から日本皇帝への国書を携えているので、提督と同等の日本の高官を本艦に差遣されたい」

との旨を通じせしめた。

中島三郎助は、

「外交は長崎で取り扱うことになっているので、長崎に赴くように」

と挨拶した。

コンテー大尉は、

「提督は長崎へは赴かない。また、国書は、現在地で受け取らるべきこと」

を主張した。

そのため、中島三郎助は、

「国書の副本を受け取る資格を持たないので、明朝、高官がきて挨拶するであろう」

と言い置いて、艦をおりた。

翌六月四日の早朝、中島三郎助は支配組与力の香山栄左衛門を伴って旗艦サスケハナに乗艦した。

ペリー提督は艦長ブカナン、参謀長アダムス、副官コンテーに命じて、昨日と同様の主張を述べさせ、

「日本政府が当方の注文に応ぜざるときは、兵を率いて上陸し、提督自らが国書を皇帝に手交すべし」

といわしめた。

このとき、与力香山を浦賀奉行と誤り認めたようであった。

奉行（香山）は四日間の猶予を請うたが、

「三日間だけ待つべし」

と通告した。

このとき、各艦からボートを出して、浦賀湾の水深を測量していたので、奉行（香山）が抗議した。

「浦賀湾の測量は米国の法にて命ぜられている」

と、奉行の抗議を一蹴し、さらに、

「明春、再び大艦隊を率いて来航するので、より江戸に接近し、より安全な碇泊地を選定せんがためである」

とも答えさせた。

約束の六月七日、奉行香山栄左衛門（実は組与力）は通詞堀達之助、副通詞立石得十郎とともに、お互いの主張を繰り返した。

その日の午後、奉行は再び来艦し、協議した結果、奉行の主張通り、六月九日、国書の原本と謄本とを久里浜の接待館で受領することに協議がようやくまとまった。

六月九日、久里浜の湾に、旗艦からペリー提督の出発を知らせる大砲十三発が轟き渡った。

久里浜湾の中央波止場に、艦長ブカナンが最っ先に上り、百余人の水兵があとに続いて両側に並列した。さらに、百余人の水兵が上陸し、音楽隊も二組上陸した。

上陸したペリー提督は随行の士官たちを従え、香山栄左衛門に導かれて、接待所に向かった。

剛力の二人の水兵が、合衆国の国旗と軍艦旗とを飜し、盛装した二人の給仕は大統領の国書と提督の信任状を入れた箱を捧げ持って、提督に従った。

浦賀奉行の戸田伊豆守と在府浦賀奉行の井戸岩見守は威儀を整え、端然として椅子に坐していた。

提督たちが着席すると、首席通詞の堀達之助がオランダ通詞ポートマンに、

「国書を受け取る用意ができているので、お渡しくださる都合は如何」

と訊ね、

「上座に備えてある朱塗りの箱は国書を受けるためのものである」

と伝えた。

提督は、給仕たちにうなずくと、彼らは国書と信任状とを捧げて進み、蓋をあけて書翰を取り出し、広げて文面や印章をみせてから日本の朱塗りの箱の上に静かに載せた。

時に、嘉永六年（一八五三）六月九日午前十時をすこし過ぎたころであった。

やがて、栄左衛門は井戸石見守に近づき、跪いて巻

き物を受け取り、提督の前に進み、跪いて渡した。
ポートマンの「それは何であるか」の問いに、「国書の受領書である」と栄左衛門は答えた。
暫時、沈黙が続いたのち、ポートマンは提督の意をうけて、
「提督は二、三日の内に、ここを出帆して来春四、五月ごろ日本に再航する心組みである」と語った。
このようにして、国書の受け渡しは静かな内に終った。

六月十三日の異国船退去の知らせに、ほっとしたのも束の間、六月十八日付の触次役よりの廻状に、村々の名主たちは忘れていたことを思い出した。
「異国船渡来ニ付」房総御備場へ向かう諸大名の新宿町（葛飾区）往来があわただしくなり、その継立人馬賃銭の上納が新宿町の助郷村に命じられた。

覚
高百石ニ付
金壱分ツヽ
右は今般異国船渡来ニ付、房総御備場御用掛其外諸家様方武器ならびに御人数御繰出し御往返新宿町御通行ニ付、臨時継立人馬賃銭凡前書之通り、来ル廿一日触次方え御持参御渡しならるべく候、此廻状早々御順達、留り村より其節御返しならるべく候、以上、

興之宮村
触次　三郎右衛門

丑六月十八日

小岩村の村高は百九拾弐石七斗三升弐合であったから新宿町への継立人馬賃銭の上納金は、一分二三一・八三文になった。
この非常時に、まさか納めないと言い出す不心得者はいないだろうという見通しで、助左衛門は立替えて触次役の三郎右衛門に納入した。
下之割の二十八か村の上納金は六十六両余にも達した。
八月九日になると代官所から内海御台場普請の引請人の募集が呼びかけられた。

内海御台場御普請仰せいださるべく間、右引請これを望むものこれあり候はば、来ル十二日まで申し上ぐべく候、この廻状早々順達、留り村より相返すべきもの也、

竹垣三右衛門
丑八月九日　役所

さらに、九月十三日には御台場普請の際、土砂運送船として参加する者は賃銭の引き上げを行なわないようにと、代官所から通達が出された。

今般内海御台場御普請ニ付、荷物等土取ニ相成候舟は御普請場所引請人共より相対次第、御普請之差出し土砂運送致すべく候、もっとも相当之賃銭これを請取猥ニ賃銭引上ゲ候儀堅いたすまじく候、

右之通り御書付出候間、その意を得、村下請印せしめ、昼夜に限らず刻付を以て、早々順達、留り村より相返すべきもの也、

竹垣三右衛門
丑九月十三日　役所

内海御台場の建設と大筒鋳造は勘定奉行松平近道、同川路聖謨、伊豆韮山代官江川英龍などによって進められ、八月初旬には品川浦沖に、十一基の御台場を構築するという案が採択されて決行された。
総工費約七十五万両をかけて第一・二・三・五・六番御台場を完成させたが、第四御台場は造築途中で資金難のため中止となった。

九月二十三日に、差紙（召喚状）で代官所に呼び出された触次役の三右衛門は、二十四日に御出役様が三右衛門宅に泊りがけでおいでになられて、名主たちと相談したいことがあると聞かされて緊急の名主の会合の触れを回わした。

廻状を以って御意を得候、しかれば今廿三日、御支配御役所より差紙にて召し出され候処、火急の御用筋仰せ付けられ、右ニ付明廿四日御出役様拙宅御泊りにて御越になられ候ニ付、急御相談申し上げたく候間、明廿四日晴雨とも正九ツ時東小松川東善寺え御名代御不参なく、じきじき御出会ならるべく候、もしまた御不参の御村方ご座候ては、御用お差し支えニ相成候間、くれぐれも御不参これ無き様御出会なさるべく候、この状刻付を以て御順達、留り村より御返しならるべく候、以上、

興之宮村
触次　三郎右衛門

丑九月廿三日

三郎右衛門は御用屋敷のお役人さま方のあわてようを見て、不安になった。
平素は静かな御用屋敷があわただしかった。
ある者は陣羽織、ある者は火事装束を着ていたが、みな白い鉢巻をして、誰もが小走りに走っていた。
御用屋敷で申し渡されたのは、「火急の御用筋のため名主の会合を開け」ということだけであった。
「何を相談したら、よろしうございますか」
三郎右衛門が尋ねても、「その会合に我等も出張る」と答えるのみで、要領を得なかった。（つづく）

城ケ島異聞（一）



島津隆子

鬼の噂

太陽が赤々と輪を描き、水平線に触れるころになると、三浦半島の岬には霧が雲となって湧き上がってくる。すると、その中にさまざまな生き物の形をした彫像が浮ぶ。ある岩は大魔神のように、またある岩は奇怪な猩猩のように、龍や、鱶や、悲しげな武人のように、あたかも誰かが自らの想念を刻んだかの岩が点点と姿をみせる。

土地の漁師たちは、それらの岩に生霊が籠っているという、遠い昔からの言い伝えを信じ、中には信仰心すら抱いている者も少なくなかった。

しかし最近、漁民たちの間で、この岬の先の島に生きた鬼が棲みついているという噂が、恐怖をもって囁かれはじめた。古長老たちは鬼に似た岩が出現したのではないかと聞き流していたが、もしかして本当のことかもしれないと信じるようになったのは、島に渡って生還した浪人の言葉や姿を見聞してからである。

「……とくに、夕闇の中にみる形相は、恐ろしげな悪鬼そのものという」

村の旧家・伯楽寺家の長老が深いため息とともに呟く。

「鬼の狼藉は血を吸うまで止むことがない」

憔悴した一人の浪人が、乱れた髪で顔半分を隠すようにして嘆息した。

岬一帯の住民たちが、新たに三人の手練の浪人を雇い、この島に差し向けたが、鬼のすさまじい怒りに触れ、たちまち腰が砕けた。それでも三人いっせいに斬りかかってみたが、疾風のごとき早業で、一人は一刀のもとに首を刎ねられ、他の一人は喉を突き破られた。そして、この場にいる浪人だけが、左耳を斬り落とされながらも、

海中に飛び込んで一命を取り留めたのだという。

「鬼に対する者は闘う前から、すでに戦意を失うのであろう。これまでに何人もの浪人が惨死か、溺死か、傷を負って逃げ延びるかだった」

長老の言葉に漁師たちがつけ加える。

「島では、季節になると素手で何匹でも魚がつかまるほどじゃ。あれほどの魚場はほかにはねぇだ」

「俺らにとっては命の海辺だ。それが今じゃあ人っこ一人、寄りつく者とてねえありさまだ」

そこで、長老が提案した。

「領主様に訴え出ても、一笑にふされるばかりであろう。こうなったらもう、あの剣狂いに頼む以外、手はないと思うが、どうじゃろうか」

途端に他の古老が反対する。

「そりゃあ止めるべきじゃ。あれの腕自慢はわからぬではないが、木刀の試合じゃあねえ。これは本物の命のやりとりだ。人を斬ったこともねえ剣士の、しかも女人ではな……」

「いや、女人だからいいのではないかの。あの姫君風情なら、鬼も本気で斬らねえと思うが、これも一つの賭けではあるがな」

「賭けでも何でも、わしらにとっちゃあ万に一つの望みがあるなら、やってもらいてぇもんだ。ならばわしがついて行ってもいい」

漁師の痛切な願い出に、

「それこそ足手まといというものじゃ」

反対した長老が得心顔で言った。

その夜、伯楽寺家に身を寄せる二十三歳の使い手である小桜姫は身動ぎもせずに、この家の長老と三人の漁民代表がこもごも語る話を聞いた。年格好は娘だが臈たけて品がよい上、並の武術家を凌ぐ腕前の持主だ。

「半島中に〝今巴〟と評判をとる姫の剣の冴えが、ぜひとも必要なときなのじゃが、いかがであろうか」

長老の突然の申し出に、小桜姫は驚いた。

これまで伝え聞いた鬼の噂話は、大袈裟な誇張がほとんどだったが、この男たちの言葉には真実味が感じられる。しかし、小桜姫は醒めた表情を崩さず、少しの反応も示さない。長老は思案に暮れたように、

「やはり、女人に妖怪退治は無理じゃろうか」

と言った。すると、小桜姫は両手を膝の上に揃えなおし、きっぱりと快諾した。

「私がその島に参りましょう」

「おお、よくぞ承知してくだされた。だが、これが別れではねえ。再び会えることをみんなで願って、待っているでな」

「いいえ、今生のお別れとなっても、悔いはございませぬ」

最後に長老は漁民に霧の出ない日時を選んでもらうがよい、と小桜姫に注意を与えた。

永正十年（一五一三）といえば、第十代室町将軍の足利義稙が重臣たちによって将軍の座を追われ、流れ公方として各地を流離うようになった年である。それは室町幕府落日の象徴であり、その波はここ関東の中心、鎌倉公方の権威失墜にも及んでくるのである。

そして、三浦半島から鎌倉一円に三浦道寸、伊豆半島から西相模には北条早雲などが割拠し、血を血で洗う戦国乱世の端緒を迎えていた頃である。

いざ、島へ

永正十年春三月―。

小桜姫は相模国三浦半島南東部にある慈雲寺の本尊・毘沙門天に詣で、鬼退治に出かけることを仏の前に固く誓った。この慈雲寺は応安元年（一三六八）、妙見大和尚によって創建されたと伝わる、漁師たちの信仰篤い古刹である。

祈り終わった後、しばし剣崎に立って眺める小桜姫の視界には、東に房総の山々が、南には伊豆大島の島影が映り、重くのしかかる緊張から、つかの間の解放感を味わった。

そして、ほど近い剣崎に連なる険しい岸壁から、小桜姫は隠密裡に舟出したのだ。

太陽がやや西に傾いた海面のゆるやかなうねりの帯を掻き分けるように、舟は霧の島に近づいてゆく……。

「速すぎる、もっとゆっくり漕いでくだされ」

舳先に座る小桜姫が前方をみつめたまま命じる。

不規則に左右に揺れる舟の進み具合で、櫓を漕ぐ船頭が怖気づいているのがわかる。

やがて、小桜姫は侵食した断崖に開く毘沙門洞窟の方に向かい、手を合わせた。漁師たちが神域と崇めている場所である。

女髷を解いて束ねた黒髪が小桜姫の項で潮風に靡く。脊に太刀を負い、額には平たがねを縫いこんだ白鉢巻をしめている。そして、袖に紅布の襷をかけ、裾の短い袴を着け、両の手足には白い手甲と脚絆。まさしく修羅場に臨む女武者の姿である。合掌する小桜姫の近寄りがたい凛々しさに、船頭は息をのむ。

瞑目のあと、しばらくして起伏に富む島の地形を目の当たりにした小桜姫は、鬼の棲家を仔細に観察しはじめた。陽を浴びた岩肌が眩しく反射する。

―このぶんなら日輪や星々が霧を破って照らしつづけてくれるだろう―

小桜姫は漁民の自然を知る勘の良さに感心すると同時に、時々、船縁に銀の鱗をみせて跳ねる何匹もの魚影に、ここが豊富な漁場であることがよくわかった。南端に屹立するひときわ高い断崖には真っ黒くみえるほど、海鵜が群れている。

舟は東西に細長い周囲四キロの小島の二周目を回っていた。長時間休みなく櫓を漕ぐ船頭は緊張のため、さらに疲労が増しているらしい。日没までにはかなり時間があるとはいえ、しだいに風とうねりが強まり、肌寒さを覚える。この時、小桜姫はすっくと立ち上がり、

「あの辺りに着けてくだされ」

と、外洋に面した奥深い入江を指さした。

舟がゆっくりと満潮の小波がざわめく入江に入った時、小桜姫は低く翔んできた一羽の黒鷲が頭上で旋回するのを見た。

その瞬間、一本の黒羽の矢が風を切り、小桜姫の頬をかすめて櫓の真中に突き刺さった。つづいてもう一本の矢が船縁に当る。咄嗟に、船頭は握っていた櫓を放り出し、船底に身を丸めて頭を抱えた。そして、恐る恐る上目遣いに見上げると、小桜姫は翔んできた矢の方向を、きっと見据えていた。

「あした、同じ頃、あの岩場に私の姿を見なければ、それでよろしい。もし、私に戻ってくる運があれば、鬼の首級がみられましょうぞ」

そう告げると、小桜姫ははじめて口元に艶のある微笑を浮かべ、波しぶきで滑りやすい平らな岩の一隅へ敏捷に飛び移った。

粗い岩肌から土を踏んで少し行くと、目の前に島の地形を一望するのに格好な台地があることを、小桜姫はすでに見定めていた。

所々に雑草が生えて、五輪塔や円柱のような岩石の露出した斜面を登っていくと、片側の枝が吹き飛んでいる一本の巨木があった。小桜姫は台地に立ち止まると、大きく息を吐いた。

島の南側は荒々しい絶壁や岩礁地帯で、遙か沖まで白い波頭が霞んで見える。北側の海辺は一面に白砂の渚がつづき、半島の先端まで湖のように穏やかな海面が広がっている。

対岸にはまばらに民家や、漁船が望まれ、遠い空には、大地のように浮んだ大きな雲が静かに流れてゆく。

一見、何の変哲もない眺望だが、急に謎めいた場所にいる実感が小桜姫の胸を緊める。そして、辺りの光景が長い影を引くのを知って、ふと、われに返った。

長老や漁民の話では、鬼はきまって崖っ淵に出現するという。おそらく、霧や闇に馴れているのだろう。もし、霧が出たら、周囲の岩と鬼との見分けもつかなくなるにちがいない。このまま息を潜めて待つのは、自ら敗北を招くようなものだ。それに、台地にいたのでは矢の的になりやすい。

小桜姫は、自分がこうした足場の悪い地形に慣れてい

ない上、身についた鋭い視覚も聴覚も臭覚も、潮騒や磯の香にかき消されてしまう不利をも承知していた。それでも、はやる心で大小無数の窪みに海水がたまる岩礁の上を、敵を求め、武者草履をつけた脚で器用に渡って行く。

鬼の正体

小桜姫が二、三間先の水溜りに目を配った時、奇岩の水面に、すぅーと黒い人影が逆さまに映った。「はっ！」と眉根をあげると、鬼が姿を現した。

綾織の黒い布で顔を包み、茶と紺の混合色の衣に黒い袴を身に付けた、岩肌の色に紛れやすい装束である。夜になればこのまま闇に溶け込んでしまうだろう。

西日を脊に、その迷彩の影はじりじりと小桜姫に近づく。しだいに、その影は濃い褐色となり、褪せた灰色に変る。

敵ながら変幻自在な衣装の術策に、小桜姫は目を見晴らされていた。そして、自分の不覚を振り払うように、素早く背中の剣を抜き、剣先が体に隠れる脇構えで、間合いを取った。鬼もすらりと脇差を抜き払って正眼に構え、逆光のなか、刻一刻と間合いを詰める。

小桜姫は眩しさのため、鬼の眼を見ることはおぼつかない。足元を気遣い、わずか西へ西へと位置を変える。鬼もその動きに応じて、静かに西へ移動した。すると、顔半分が光に曝され、鋭い右の眼が露見し、小桜姫の視線にぴたりと吸いついた。その眼光の矢は、小桜姫が瞬きの一つもしようものなら、胸板を射抜くかのような不気味さを湛えている。

小桜姫は打ち込む隙をうかがいながら、粗い岩肌に足を這わせ、さらに位置をずらすと、覆面の陰影から放つ両の眼がくっきりと浮かび上がった。その眼光は鋭利な刃物のように、いよいよ鋭さを増して迫る。小桜姫も怯まず睨み返す。

しかし、小桜姫の心のどこかに、この鬼は妖怪の類などではなく、人間の男が黒い布で顔を隠し、眼光であらん限り威嚇しているのだと思う余裕が芽生えていた。

大きく西に傾く陽射しをまともに受けるまで位置を変えた鬼が、中段の構えから次第に八相の構えに移り、鐺が口の高さで止まる。そして、キラッと反射する刀身を頬にかざすと、静かに紐が解けるように、覆面が脱げ落ちた。

小桜姫は全身に鳥肌が立つのを感じる。

……禿げ上がった頭髪がまばらに逆立ち、眉はない。横に分厚く突出した天狗鼻、異様に大きく裂けた唇、額から両頬にかけて太くX字形に刻まれた刀痕。そして、顔面を覆って簾のように血が流れている……。

とても人間とは思えない、凄惨としかいいようのない形相である。

―これは、やはり……鬼だっ！―

小桜姫は耐えうる精一杯の気力で、その面貌を穴のあくほど凝視した。だが、白鉢巻をした額に、剣を握る拳に、冷や汗が滲む。しかし、胸中の不安と怖気を払拭し、鬼の怒りを誘い、一気に勝敗を決しようと、

「化け物！」と、怒号した。

すると、沈黙のうちに正眼に構え直した鬼の切っ先が、疾風のように一直線に小桜姫の胸元を突いた。一瞬、血が吹き出るより早く、小桜姫は横に跳び退いていた。鬼も太刀を素早く引いて、小桜姫の正面に相対する。そして小桜姫の肩と同じ高さに切っ先を据え、喉元を狙ってぴたりと固定した。

右上段に構えたままの小桜姫は、目の前の微動だにしない切っ先を見つめたまま動けない。わずかにでも変わり身を示せば、たちどころに、鋭い錐が寸分違わず喉を貫く殺気を秘めているからだ。

小桜姫が半歩退くと、鬼は一歩前進する。対する二人の距離がじわーっと縮まり、さらに縮まる。半歩ずつ追い詰められた小桜姫は、ついに、後ろのない崖っ淵に立たされたことに気づく。

「泳ぎたくなったとみえるな」

「お前こそ」

緊迫した神経で小桜姫が反撥したとき、電撃的な切っ先の突きが、喉を刺した。が、間一髪、小桜姫は崖を蹴って大きく跳躍していた。

空中で二本の刀身が絡み合い、心臓を突き射るような激しい音を発した。だが、小桜姫の体が鬼の右後方に降りて踏み止まったとき、振り返りざまの鬼の太刀が横なぐりに唸りを立てて、風を斬った。小桜姫は太刀を受け払って、四間ばかり跳び退いたが、腕が痺れ、打ち込む隙がない。

第二撃の太刀が奔る。石火の正面斬りに、小桜姫は袖を切られて身を躱した。

つづく第三撃は目にも止まらぬ刀身を左に返しての裏突きを。

これを危うく受け流した刹那、小桜姫の剣が頭上に飛び、足元に落ちた。

「拾うがよい」

鬼が言った。意外に静かな声である。

―もう一太刀浴びせれば、この場の勝負は決まりだ。そうしないのは、理不尽に鼠を猫に、小猿を野犬に与えるように、残忍に弄んだあげく、生殺しにする了見でもあろうか―

小桜姫の心には、鬼に対して、耐え難い憎悪の念が湧いていた。

身を沈めて足元に転がる剣を取り直した小桜姫は、生涯ではじめて、魔性の剣気に憑かれたもののように、突き、斬り、狂気のごとく鬼に打ちかかっていった。

刀身と刀身が触れては離れ、縺れ合い、宙に舞う。刃音が鳴るたびに、火花が散る。鬼は右に左に、後ろに前に、自在に変化し、春風に靡く柳のように身を躱すのである。

不快な汗が全身を舐め、肩で息をするほど疲労した小桜姫は、最後の気力をふり絞り、

「キエッ！」

と、裂帛の気合をこめて大上段から剣を閃かせた。

それを鬼の太刀が宙で受け、剣ごと叩き割るような凄まじい力で押し返してきた。その瞬間、小桜姫は体ごと後へ倒された。

もうこれまでと観念した小桜姫は、身を仰向けに置いたまま、化石のように動きを止めた。

淡い闇が流れるなか、鬼が脚元に近づいてくる気配を感じた。その時小桜姫ははじめて、女としての恐怖感に襲われた。だが見上げると、今にものしかかってくるような鬼の鋭い眼光が、ふうーっと細められた。

「起きるがよい……」

凌辱を受ける前に舌を噛み切ろうと覚悟していた小桜姫は、意外な鬼の目元の涼しさと、声の穏やかさに息を呑む。

ゆっくりと身を起した小桜姫に向かい、

「この顔に、見覚えはないであろうな？」

そう言うと鬼は、突然、身震いするほどの醜貌を崩し、自嘲ぎみにニヤリとした。

小桜姫は不可解な鬼の言葉に慄然として立ちつくし、その意味をつかもうとした。

―決闘の最中、私を斬ろうと思えば斬れた場面は幾つもあった。そして、その太刀は多く故意に宙を切ったような感じがする。そういえば、鬼の立ち居振舞いには、どこか特別の情があるようだったが。もしや、あの我流の剣法といい、姿・形といい……―

そこまで思いいたった小桜姫は、はっ！　とした。

―まさか！　そんな……―

「刀を納められよ」

柔らかなもの言いである。

「退きませぬ。私は……」

と口に出かけたが、鬼が刀をぴしっと鞘に納める音を聞くと、急に声を失った。そして、不意に胸に迫るものを感じた小桜姫は、

「もしかしてあなたは、三浦義意……殿では？」

と口走っていた。再びにたりと顔を崩した鬼は、

「ついてまいられよ」

と、くるりと背を向けて先を歩き出した。

真の闇が辺りを包む時刻になっていた。

鬼に案内された淡く灯油が点る洞窟の中に、小桜姫は

ひっそりと座っている。

見廻すと、洞窟とはいえ、湿気を防ぐかなりの高床に、二畳ほどの畳が敷かれ、鹿の皮が広げられている。片隅の唐三彩の壺には、無造作に草花が投げこまれ、唐墨の芳香が漂っている。

「化け物の正体を知った気持を教えてくれまいか」

「そのお顔の変わりようでは」

「恐ろしいのか？」

「いいえ、義意殿とわかりますれば……」

そうは言っても、目の前にいる男が肩幅広く長身な偉丈夫であることを除けば、半島全域に君臨した新井城主〝その人〟だと聞く誰もが、信じられずに怪しむはずだ。よく見れば、血が流れていると見えたのは、ひどい火傷の引きつれで、赤いみみず腫れである。濃い紫色をした傷跡の凄味は、気の小さな人間なら、卒倒もしかねないだろう。

だが、この身の毛もよだつ醜悪な顔に変わり果てたのと同様に、落城もしないのに、どうして、こんな島の洞窟に潜伏している必要があるのだろうか。小桜姫にとれば想像外のことである。

「わしのことを恨んでおろうな？」

「私が恨みつらみなど持ち合わせぬ気性なのは、よくご存知のはずでございましょう」

「だがわしは、勝手にあのような別離を言い渡した。よくよく無情い夫であった」

「もう済んだことでございます。それよりも、なぜ？　そのような……」

「この面相のことか、それは後で話すといたそう」

「もとのあなたさまは、立派なお顔立をなさり」

小桜姫は一心に、目前の鬼面のような顔に、過去のそれを重ね合わせようとした。

「やはり恐ろしいか？」

「いいえ、相手が海賊や海坊主であれ、私の目には唯の男としか映りませぬ」

「まだ今なら、許してつかわそう。帰ってもよいぞ」

「私は鬼退治にここまで渡って来ましたのに、鬼があなたさまと知って、どうして戻れましょうか。非情なあなたさまと、恐怖する岬の住民の間に立って悩むなど、ご免こうむります。退くわけにはまいりませぬ」

「では、わしを殺るか？」

「いいえ、私は先刻、すでに死体になって横たわっているはずの身にございます」

「ここまでわしの秘密を知られては、生きて帰すわけにもゆくまいな」

「もはや死は、覚悟の上でございます」

「離縁した男と女がこうして再会するとは、何の因果であろうか」

「前世は宿敵同士でもございましたでしょうか」

顔を見合わせた二人は、苦い笑みを交わした。
「小桜、そなたの力量なら、借りても欲しいものじゃ」
「私にできますことなら……何なりと」
「もし失敗すれば、共に地獄に堕ち、運があるなら、そなたも再び城主の妻として生き延びることができよう」
義意の言葉は、その面貌の裏の、さらに暗い虚無の深淵を垣間見る思いに小桜姫を誘うのであった。
「あなたさまのお役に立つつもりにございます」
「わしの秘密を聞くか？」
小桜姫は無言で頷く。
「それでは、もっと近うに寄るがよい」
膝で前に進み出た小桜姫を、義意はいきなり両腕で抱きしめた。

翌日の黄昏どき。
船頭が島に見たものは、墨で描いたような二つの人影であった。大きな影に小さな影が屈しているような……。
―勝負は叶わずに、姫は鬼の囚われ人になったのか。姫の名誉のため、このことは誰にも話すまい―
船頭は独り、そう心に決めたのである。

恋におちて
時は二十三年前にさかのぼる。
延徳三年（一四九一）、房総半島のほぼ中央部から海に注ぐ小櫃川の中流域にある真里谷城城主・真里谷氏に女の子が生まれ、小桜姫と名づけられた。
それは奇しくも、北条早雲が堀越の足利茶々丸を攻めて自殺に追い込み、伊豆を攻略した年と符号するのである。
一方、姫はかわいらしい名前に背くように、幼少の頃から礼儀作法や習い事にはほとんど興味を示すことなく、木刀や棍棒を振り回すのが好きな、変った童女ぶりを見せながら育った。
生まれながらの奔放な気性もあったのだろうが、少女になると雌豹のような俊敏さで、上総はもとより下総にまで武者修行に出向き、行く先々で自分より上手な遣い手と見るや、教えを乞うほどの熱の入れようであった。
おかげで、乙女になったというのに小桜姫は化粧気もなく、言葉も立ち居振舞いまでも、男の子のような女の子に成長した。だが、紅、白粉とは無関係ながら、きりっと輝く素顔の美しさと、無造作に束ねた髪を背中に流し、常着に袴をつけた颯爽とした姿は、それなりに人目をひいた。
天与の剣才に恵まれていたものか、小桜姫が十五～六歳の時には、もう城中や近郷にはまともに相手になる者はいなかった。
ある日のこと。
隣村からの出稽古の帰り小桜姫の前に、田圃の一本道で独りの浪人風情が立ちはだかった。そして、
「ほう、女だてらに剣の修行か」
と声をかけてきた。
「立ち会え、お前が勝負に負けたら、わしのものになるのじゃ。どうだ賭けるか」
「勝手なことをお言いでない。お前さんごときの相手は、あの方がお似合よ」
小桜姫が顎をしゃくった方角には案山子が立っていた。その傲慢な口調が男の胸に怒りの火を点じた。抜刀とともに、
「この小生意気な女ッ！」
と鋭い突きを入れてきた。
小桜姫がひらりと横に身を躱すと、勢い余った男は、思わず前のめりに足が浮いた。途端に小桜姫が、手にする木刀で男の腰をしたたかに打ちすえたからたまらない。男は苦悶の声をあげて、顔が地べたを舐めた。
こうした武勇伝は数限りなかったが、真里谷一族の間では、小桜姫に関して難題が囁かれていた。小桜姫の噂はしても、姫にふさわしい婿殿を世話しようという人がいないのだ。ふつう年頃を迎えた城主の姫たちは、それなりの相手と引き合わされて嫁入りするのだが、小桜姫には縁談が持ち上がるどころか、適齢期だというのに、自身も縁談を待ち望む気配を全くみせないのである。
「姫ならば、どこへ嫁ごうと、よい妻になれよう」
などと、一族の誰彼もが口にはするのだが、具体的な話が持ち上がることはなかった。
そのうち一計を案じたさる古老は、
「女剣士というのも、いざ火急の際にはお家のために役立とうし、姫の性格もけっして粗暴ではない。それどころか、真里谷家の深窓で磨かれたゆえ、近頃は一だんと色艶も増しておる。男女の営みだけは傍目にはわからぬものじゃ。たとえ狒狒のごとき女であれ、閨の中で男の名刀に会うて、どのような可愛い女体に変るのか、たのしみではないか」
この古老は、剣術使いの小桜姫を選んだ婿には、かえって箔をつけてやろうと、逆手にとった宣伝を世間に吹き込んだのである。
その流言の甲斐あって、真里谷城にはちらほらと小桜姫の縁談が舞い込んできた。だが、その多くは上総一の美人剣士という評判を耳にした、物好きな男たちが、からかい半分にやってくるという程度のものであった。
房総の古兵・千葉氏と、嘉吉の乱で室町将軍に追われて三浦半島から安房に入り、この地を統一した新興の里見氏の間に挟まれて、真里谷氏は地理的にも絶えず不安定な位置にあった。その上、姫の異常とも思える剣術への執着ぶりに、奇異な不安を覚えるためであろう。古老の口こみによる縁談は、すべてご破算になった。

十九歳になった時、小桜姫は一人の青年武将と運命的な出会いをした。

ある日、安房南部の館山丘陵地にある稲村城で、城主・里見義通が主催する剣術大会が行われ、房総各地や里見氏に関係のある諸城から、腕自慢の剣士十数名が集い、自慢の腕を競い合ったのである。

この大会に招かれて、特別に観覧を許された小桜姫は、すぐに男たちの試合に惹きこまれ、

―さすが、誰をとってみても、尋常な遣い手ではない―

と胸が躍った。

中でも、一人の青年武将が群を抜く強さで次々と相手の剣士を負かし、勝ち昇ってゆく。

長身で痩せているが、肩がいかつく張っていて、太い樫の棒を振り上げると、巨人のように体が伸びる。相手がどれほどすさまじい気合で挑もうと、常に姿勢を崩さず、かまえた体は微動だにしないのである。凌ぎ合うとか、紙一重の差で勝つのではない。身を動かすや、一瞬の呼吸で決着をつけるのだ。とにかく、小桜姫がかつて見たことのない剣法なのである。

木洩れ日を受けて、自在に剣を繰る青年武士の逞しい腕に、小桜姫は微かな身震いさえ覚えた。

いよいよ迎えた決勝戦でも、相手の激烈な一撃を跳ね上げた瞬間、獣が滑走するような脚の運びをみせて、相手の毛脛を薙ぎ払い、その身が空を泳いで仰向けに転がると、青年武将の樫の棒は、さっと相手の首の皮を撫ぜていた。

明らかに、敵の首級を討つ、戦場で鍛えた実戦剣法である。それでいて、武辺一徹というには程遠く、決勝までほとんど息をはずませることもなく、白く白粉をはいたような蒼白の頬から顎に、一筋の汗が滴っただけである。

小桜姫が間近で見上げると、青年武将の頬はえぐれたようにこけているが、目鼻立ちの秀でた立派な顔には精悍さが漲っている。悠揚迫らざる男ぶりを息苦しいほどの思いで見つめながら小桜姫は、

―今が千載一遇の機会かもしれない、これを逃したら悔いを残すことになる。敗れても後学のため、もしも相手に隙があれば互角に渡り合えるかもしれない―

と意を決し、逸る気持で青年武将に試合を申し入れたのである。だが、

「女人とは立ち会わぬ。悪しからず」

と一言のもとに一蹴されてしまった。それでも青年武将を見上げたまま、畏敬の視線を離せずにいる小桜姫は、切なる願いをこめて言った。

「ぜひに、お願いいたしとうございます」

「わしにとって、剣は女より大切なものでござる」

―静かなもの言いのうちに、なんという気迫を秘めた眸なのだろう―

紛れも無く、剣に生きる男そのものの眼光に魅入られた小桜姫は、衆人環視の場であることも忘れて、棒立ちになっていた。

「わしは新井城城主・三浦荒次郎義意と申す」

そう名乗ると、青年武将の義意は世にも珍しい女を見るような和らいだ眸にかえり、唇に微笑を浮かべた。

小桜姫もこの異郷の青年城主に、生涯ではじめて、胸がちくちくと痛むような好意を抱き、自身の頬が上気していることに気づいて戸惑いを覚えた。

夕方には、日中に行われた剣の切磋琢磨の成果を祝い、お互いの親睦を図るための宴が催された。小桜姫が真里谷氏の代表格として、この宴の席にも招かれていたことはいうまでもない。

若さの特権で早くも気持の通い合った義意と小桜姫は、宴の途中で席をはずした。廊の一隅に寄りそって、海の方を向いて二人は立った。遠く海を隔てて夕闇に消えてしまった故郷・三浦半島の観音崎あたりに目をやりながら、義意は語りはじめた。

「三浦の祖先はここ安房と縁が深い。その昔、伊豆流罪の源頼朝公が平氏打倒の挙兵をした際、一族の嫡流・三浦義明は一族を引き連れ頼朝公のもとに向かうも、頼朝公が大庭景親に敗北したことを知る。そこで三浦に引き返して衣笠城に立てこもった義明は、畠山重忠と戦いながら一族を脱出させた後、自決直前、子の義澄に向かって〝海路安房に渡り、必ず再起をはかれ〟と命じたそうじゃ。同時に、三浦の者どもが偶然に、真鶴岬から安房を目指す頼朝公一行と海上で合流したという。以後、三浦は源氏の側近として重きをなしたと聞いておる」

「その末裔があなたさまでございますね」

小桜姫の言葉に、義意はつづける。

「いや、三浦の直系は一旦、北条時頼によって滅んでおる。だが、一族の親戚筋を以って、かろうじて名が残り申した。しかし、わしの父・三浦道寸義同は三浦の血筋ではなく、関東管領の上杉氏から、子のない新井城主・三浦時高の養子に迎えられた者でござる」

義意が説明したように、三浦氏は源氏再興に尽力した功績で鎌倉幕府の要職にあった。だが、宝治元年（一二四七）、北条時頼による宝治合戦で、三浦泰村とその一族は鎌倉法華堂で滅亡したのである。しかし、北条氏に加担した一族の佐原盛時らによって三浦介を名乗ることが許され、新井城を築いて本拠としたのだ。

小桜姫にとればややこしい血のつながりなど、少しの興味もなかったが、この際、自分の先祖も紹介しておこうと思った。

「私の先祖は甲斐の守護・武田氏十三代信満の子信長が、上総の守護代として入国、真里谷城を築いたのが始まりと申します」

「わかっておる。そして、安房の里見氏とも姻戚関係にあったとか……」

義意は言葉を切ったが、

「安房と三浦、二つの半島は、海を挟んで互いに睨み合っておるのじゃ」

と人ごとのように呟いた。小桜姫はその言葉の意味に思い至った。

―それはきっと、しばしば海を渡って進入する安房・里見氏の水軍に対する、三浦水軍のことにちがいない。すると―

小桜姫が義意に抱いた畏敬の念のなかには、強い男に対するあこがれがある。だが、今、義意が口にした言葉からは、あこがれなどという甘ったれたものとは違う、政略的な匂いを小桜姫は直感した。

―剣術大会に名を借りて、わざわざ安房にやってきたのも、里見氏の動きを探る隠密の役割でもあるのだろうか。それとも和睦のためなのか―

しかし、小桜姫にとれば、こうしたキナ臭いことはどうでもよかった。

いずれ力の均衡が崩れる時がくれば、強い者が勝ち、弱い者が滅び去る。それがこの世の明白な道理である。だから剣の腕を磨き脆弱な心を鍛えようと、小桜姫はあえて強い相手に挑み〝独り合戦〟を繰り返してきたのだった。やがてくるであろう最後の合戦のとき、剣の牙えとが臆することのないようにと念じながらの鍛練であった。

今宵、城主・里見義通が、宴で小桜姫の席を義意の隣に設けたのも、偶然のことにすぎまい。だが、宴の最中、義意に誘われて、こうして城の隅櫓に佇み薄闇の中で語らっているのが現実である。小桜姫はそれだけで十分満たされていた。その証拠に、夜の冷気も感じないほど体がほてっている。

―真里谷氏の長老の口ごみが、里見氏や、遠く三浦氏の居城にまで聞こえたのなら、私のこの胸に芽生えたあこがれは、すでに恋心に点火したのだ―

と小桜姫は感じていた。

「あなた様とお引き合わせくだされた、里見氏のご配慮を嬉しく思います。でも」

と口ごもる小桜姫に義意はすかさず問う。

「何か……」

小桜姫は一番気にかかっていることをずばりと切り出した。

「独り身の城主など、おられるはずがありませんね」

なんだ、そんなことだったのかと義意は多少持って回った言い方で、

「わしにとって、剣は女よりも大切、と先刻申したはずだが」

その言葉で、義意が独り身と知った小桜姫の表情にホッと安堵の色が浮んだ。そして悪戯っぽく、

「それでは、いまも、私より剣のほうが……」

お好きですか？　とはさすがに聞けずに俯いた。

「いや、いまは同じくらい大切になり申した」

途端に小桜姫の頬にぱっと血の気が燃え、伏し目がちだった目を大きく見開いて、義意の顔を真っ直ぐに見た。すると、義意の顔が静かに小桜姫に近づき、闇の中で重なった。

―剣に生きるもの同士の恋。待っていた甲斐があった―

そう思うと小桜姫は息がつまり、音を立てて速くなる胸の鼓動を、相手に気取られまいと羞恥にどぎまぎとした。だが、重量感のある義意に抱擁された小桜姫は、五体がばらばらにされ、気が遠くなるような陶酔感に浸っていった。

海を隔てた結婚

義意より一足早く里見城を辞した小桜姫は、真里谷城に帰ると、親や主な一族の人々に向かい、やや唐突に、単刀直入に自身の結婚を宣言したのである。

「縁遠い身で、いろいろご心配をおかけしましたが、私は三浦氏に嫁ぐことにしました。突然で、気でもふれたかとお思いかもしれませぬが、ご了承くだされ。以後、私の身にふりかかる一切の責任は私が負います」

有無を言わせぬ切り口上である。そして、あれこれ反対される煩わしさを考えた小桜姫は、義意と男と女の契りまで交してしまったことを告白したのだ。

父親は俄かに戸惑いの表情を浮かべ色を失った。一族の者の間にはどよめきが起った。天衣無縫な姫に突如として恋が生まれ、男女の営みが、慎みの感情に優先してしまったという事情の突飛さに、みなが愕き慌てたためだが、しばらくの時が経つと、

「いかにも姫らしい縁組の成り行きじゃわい」

と互いに頷き合って、笑い声も出るようになった。

「そういうわけで、私を見初められたのは義意様の方が先だったことをお忘れなく」

という小桜姫の念押しに、父親も仕方のない娘じゃという風情で、

「まあ、悪い縁談ではなさそうじゃ」

と苦笑を洩らした。

三浦氏の本拠である新井城は、南北に油壺と小網代の両湾が深く入り込み、西は相模湾に面して、わずかに東側だけが陸つづきになっていた。岬の先端部に本丸や二の丸などの主要な建物が聳えているが、そこへの通行も完全に掘り切られている上に、引き橋を架け、内側にも高い土塁が築かれている、まさに『北条五代記』に記す「獣もかけりがたし。百万騎むかふといふ共、力ぜめには成りがたし」という、天下無双の要害であった。

だが、乱世にうってつけの天然の堅塁を誇るこの城も、

一歩、城中に入れば、真里谷城中の女人の誰もが、ほぼ素顔で、着ているものといえば洗いざらしの木綿なのに比べ、旧都鎌倉が領域のためか、この城中の女衆は艶やかな紅白粉や柔らかな衣装で身を飾っている。

風流人で派手な義父道寸が選んだものか、それとも夫義意の好みなのかと、小桜姫は興味を覚えた。

小桜姫付きとなった侍女も年増だが、細面のきれいな顔に濃い化粧をして、むせかえるような香料が匂う。だが、まるで寺院から出仕した尼僧のようにもの静かで、もの言いもどこか抹香くさい。

すべての女性たちに生気が乏しくて、のっぺりした人形のようなのだ。海峡を一つ隔てただけの国柄のちがいで、女人にこれほどの違和感を抱くなど、小桜姫にとってはじめての経験だ。しかし、正室の自分が城中の女人たちに同化することもあるまい。自分は自分なりの流儀で押し通そうと、小桜姫は心に決めた。

朝になると小桜姫は襷に鉢巻をしたいでたちで縁側から庭に下り、木剣の素振りを日課とした。しなやかに伸びる肢体から打ち振られる木刀が、払暁の冷気を切り裂く。

時には義意も木剣を構えて小桜姫に立ち会うことがある。ただ、義意の剣法は敵を斃すものだけに手加減がないのだ。……二本の木剣が空を描いて鳴り響くと、腕に強烈な衝撃が走り、小桜姫の木剣が半ばから折れ飛ぶ。

その剛腕！はみごとしかいいようがない。

稽古が終ると小桜姫はきまって実戦に臨んだような思いがした。聞けば、義意の力は俗に〝八十五人力〟と称され、一丈二尺（三m余）の樫の八角棒を水車のごとく振り回して、一振りで数人から十人を薙ぎ倒すというのだ。その剛腕によって戦場で討取った敵兵の数は五百余人とか。

「おぬしの剣は、まるで草刈り鎌のようじゃ」

義意は遠慮なく小桜姫の剣をけなして、修行の成果を少しも褒めようとしないが、こうした新婚夫婦の風景は、言わず語らずお互いに通い合うものがある、いわば幼馴染同士が一緒になったようにも感じられるのだ。小桜姫の胸一杯に初々しい情熱が膨らんでくるのだった。

花咲く季節になると、馬に乗った二人は連れ立って、三崎に遊んだ。三崎はただの漁村というには、あまりに佳境の地である。その昔、鎌倉将軍以下、公達や武将たちがここの風景を愛し、しきりに清遊したといわれる。〝往古桃林ありて〟と謳われる見桃寺は「桃の御所」と称されていた。

またこの近くには、源頼朝が白拍子をともなって訪れ、優雅な酒宴を張り、舞を舞わせた歌舞島が浮かんでいる。

それから……北条湾を見下ろす高台には頼朝、頼家、実朝の源氏三代が逍遥した「桜の御所」があった本瑞寺や、湾の東岸には、庭園が椿の花で埋まる頼朝の別荘だった「椿の御所」などがある。この椿の御所は寛喜二年（一二三〇）、頼朝の側室であった妙悟尼の開基によって臨済宗の「大椿寺」になったのだという。

小桜姫は義意から、これら旧跡の説明を聞きながらの散策が楽しくて仕方がなかった。

城内でおくる正室の生活は見ようによれば懶惰なものである。だが小桜姫の場合は早朝の剣の稽古といい、乗馬での外出といい、大きな刺激で満ちている。それは単なる夫婦の愛情ともちがう、まるで仲のよい兄と妹で睦み合う親密さをうかがわせた。

花々で溢れる御所を愛でて廻る小桜姫の姿からは、蕾の季節から急に開花し、爛漫な花の季節を迎えた風情が匂いたっていた。

文庫本出版のお知らせ

島津隆子

新選組密偵 山崎烝

廣済堂出版より

社告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ケ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

宰相の橋

（一）



太田精一

トスンは、眠れないまま、ベッドに横たわり、サラエボの街を流れるミリャツカ川のせせらぎを聞いていた。風が少し出てきたようだ。街路樹の枯葉が、窓から漏れる薄明りの中で舞い散っている。

対岸の街角から、楽しげな話し声や、音楽がとぎれがちに聞こえてくる。ムスリムの多いサラエボでは、ラマダンの時期の繁華街は、昼間よりも夜のほうが賑やかだ。

川のせせらぎ、風の声、対岸の喧騒は、老いたトスンの記憶を四十年前のヴィシェグラードの町へと誘った。

「あれからすでに四十年、つい昨日のことのように思える。大変な工事だった。しかしやりがいはあった。」

トスンは、ヴィシェグラードのドリナの橋の建設工事を思い出していた。彼は、建築主任として、これまでの生涯を通じ、あれほどの大工事に携わったことはなかった。

「これからも、おそらくないであろう。」といって溜め息をついた。

トスン・エフェンディは、建築技術者として、オスマン帝国領内の数々の橋や建物の建設に携わってきた。しかし、ドリナの橋ほど雄大で、堅牢にして優美な橋の工事に従事したことはなかった。トスンは、オスマン帝国の架橋技術の粋を集め、莫大な資金を投入し、多大な犠牲を払って完成したあのドリナの橋に特別な愛着を感じていた。

「これからも、何百年もの間、ヴィシェグラードにあって、人馬の往来に堪え、周辺地域住民の交流を支えて感謝されることだろう。」とトスンはつぶやいた。その建築主任として活躍できたことを全能の神アラーに感謝し、ムスリムに改宗した喜びを噛みしめていた。

トスンは、エーゲ海の名もない島のギリシャ系住民の子として生まれた。父親は、ビザンチンの正教徒で、漁

師であった。一月の風の吹く寒い日に、漁に出た父親は、そのまま帰らぬ人となった。父を失ったトスンは、コンスタンチンノープルのムスリムの建築家ケマルの家僕として引き取られ、育てられた。

生来利発であったトスンは、トルコ語を覚え、ケマル家の家事をこなす傍ら、主人のもとで建築技術を学び、数々の工事に携わった。しかし、建築家として自立し、宮廷の建築やオスマン帝国直轄の建造物を手掛けるためには、正教徒よりもムスリムのほうが何かと都合がよかった。そんな実利的な問題もさることながら、トスンは、何よりも敬虔なムスリムであるケマルを父のように尊敬していた。

アラーへの真摯な祈りの心は、ケマルの建てるモスクや橋などの建造物にも表われ、トスンの心を打った。

「建造物は、堅牢で機能的であるだけではなく、美しく、気品のあるものでなければならない。」とケマルは口癖のようにトスンに語っていた。

トスンは、ケマルのように人の心を打つ建造物を創り出すためには、ムスリムになって、ケマルの敬虔な祈りの心に少しでも近ずきたいと考えた。ムスリムに改宗したトスンは、建築家としての名声を次第に高めていった。

この評判を耳にした大宰相メフメド・パシャ・ソコロヴィチ（ソコル大宰相）は、難工事の予想されるドリナの橋の建設主任に、トスンを指名した。

ヴィシェグラードの地形は複雑で、冬は厳しい。そればかりではない。狭く痩せた土地に、セルビア正教徒、ムスリム、カソリック教徒、ユダヤ教徒がひしめき合い、互いに反目しながら、時には、協調し、妥協して暮していた。橋の建設には、住民の協力が不可欠であるが、利害関係が錯綜し、建設に非協力的な態度を示す者も少なくなかった。そこでソコル大宰相は、腹心の部下アビダガを総監督に任命し、ある程度の強権を発動しても、工事の完遂を図ろうとした。アビダガは、これまで大宰相の命令を忠実に実行し、信頼を得てきた。だが、厳格で、情容赦のない人物として怖れられていた。

ソコル大宰相は、オスマン帝国のデウシルメ（徴集）制度によって駆り集められた奴隷軍人イエニチェリ（新設常備軍団）の出身であった。デウシルメとは、オスマン帝国領内のキリスト教徒の子弟の中から跡継を除く、十才～十五才の少年のうち、身体強健、頭脳明晰、かつ眉目秀麗な少年を選抜、スルタンの常備軍人、側近官僚、政治家を育てようとする制度である。身分は奴隷であったが、成人後は、オスマン帝国の支配層として、帝国を支えた。主な徴集地域は、バルカン地方であったが、後に、帝国領内の各地に拡大した。ボスニアでは、ムスリムに改宗した人々も徴集された。だが、ユダヤ教徒はどの地域でも徴集を免れていた。

十六世紀中頃までは、徴集は地方官にまかせられてい

た。だが、それ以降は、イエニチェリ軍団から担当者が派遣され、直接選抜、徴集を行うようになった。

ソコル大宰相も、デウシルメ制度によってボスニアから徴集された一人である。少年の頃、両親から引き離され、多くの子供たちと共に、イスタンブールに護送された。到着後ムスリムに改宗させられ、メフメドというムスリム名が与えられた。ハンサムで、利発であったため、宮廷の係官の目にとまり、トプカピ宮殿に送り込まれ、スレイマン大帝の小姓の一人となった。

小姓も身分は奴隷である。しかし、スルタンの側近として、英才教育を受け、長じては、イエニチェリ軍団の指揮官、高級官僚、政治家となり、オスマン帝国の支配組織の中核を担った。この小姓たちの出身は、戦争捕虜、スルタンへの献上品、反乱者の子弟、人質、などさまざまであった。だが、なんといっても、ソコル大宰相のように、デウシルメによって徴集された少年たちの中から選抜された小姓が多数を占めていた。

トプカピ宮殿内は、外廷と内廷と後宮（ハーレム）に分かれている。外廷は、国政の場で、政治、外交、軍事、財政、などの重要事項を決定する場であった。内廷は、外廷と後宮をつなぐスルタンの生活の場であり、宮廷内の男性は、ここで日常生活を送っていた。後宮は、スルタン以外の男性の立入りを禁じており、江戸城の大奥のようなものであった。ただ、大奥と違うところは、黒人の宦官の出入が許されているという点である。内廷は、スルタンと白人宦官と小姓たちが居住していた。

ソコル少年は、長ずるにつれ、武人としても官僚としても優れた能力を発揮した。オスマン帝国繁栄の礎を築いた数々の戦闘に、スレイマン大帝の側近として参加している。

また、宮廷内にあっては、冷静、沈着な態度で、適切な判断を下し、スレイマン大帝の信認を得た。

そうした功績が認められ、ソコルは、ルメリア（ヨーロッパ領トルコ）の太守に任じられた。一五六四年、スレイマン大帝の晩年には、大宰相に昇進し、オスマン帝国の実質的な政治上の支配者となった。ドリナ川の架橋工事を始めたのは、大宰相就任の二年後のことである。

トスンは、ヴィシェグラードへの赴任挨拶のため、アブダビ総監督に随行して、トプカピ宮殿のソコル大宰相を訪ねた。

大宰相は、「橋の建設は、オスマン帝国に、経済的な繁栄をもたらすだけではなく、アドリア海のベネチア海軍に、内陸から圧力をかけることができ、軍事的にも重要な施設となる。また、イスラームの教えと文化を故郷の辺境の地ボスニアにも、あまねく広めたい。」と橋の建設にかける熱い思いを語った。

次いで、大宰相は、声をひそめ、少年の頃、両親から

引き離され、イエニチェリ軍団に連行され、ドリナ川を舟で渡った悲しい想い出を語った。

「あれは十才の時であった。馬の両脇につるされた籠に押し込まれ、ソコロヴィッチ村からヴィシェグラードに連れてこられた。十一月の寒い日だった。徴集された子供たちが大勢籠から顔を覗かせ、渡し舟に乗る順番を待っていた。親たちが泣き叫びながら、子供を返してほしいとイエリチェリの兵士に懇願していた。

私の母も、泣きながら籠にしがみつき、ヴィシェグラードの渡し場までついてきた。だが、渡し舟に乗せてはもらえず、私を乗せた舟が遠ざかる姿を空しく見送っていた。舟を下りるとすぐ、岸の向こうの母を探した。私の目は、涙で曇って、母の姿が霞んで見えた。母は、岩肌の突き出た岸辺で、手を振っていた。それが、私の見た母の最後の姿だった。突き出た岩肌にしがみつくように生えている灌木に、烏が一羽止まって鳴いていた。あの風景は、いつまでも私の脳裏から離れることはないであろう。」

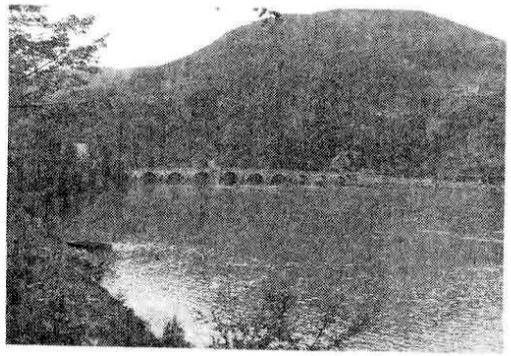
ソコル大宰相は、ボスニアのあの淋しくて、物悲しい風景を想い出すたびに、現在の栄光が幻であるかのような思いに駆られた。宰相は、あの渡し場に、橋を架けることによって、その幻を打ち消したかったのではなかろうか。

トスンは、アビダガ総監督と共に、工事の準備を整え、ヴィシェグラードに到着した。一五六六年の春のことであった。

両岸には、蛾々たる山々が連なり、その隙間を縫って川が流れていた。その川の流れが扇形に広がったわずかな平野部に、町とは名ばかりの集落があった。

アビダガとトスンは、ドリナ川の岸辺に立って、これから始まる困難な工事を前に、厳しい表情で、互いに顔を見合わせた。

（つづく）



ドリナの橋（1984.5.5撮影）

シナリオ〔大人の見るアニメーション映画の試み〕

龍化妖姫（二）

―周の幽王伝―

相原精次



24　幽王の居室

幽王　そうじゃ、ワシはおまえに特別な部屋をあてがうことにしよう。もちろん、ワシのこの居室も、おまえの部屋と思ってよい。遠慮はいらぬ。そして、おまえだけの部屋というのはこっちだ。（幽王、褒姒を伴って奥へ行く。）

25　褒姒の居室

幽王、褒姒を一つの部屋へ導き入れる。まるでこの褒姒の出現を予期し、そのためにあけておいたかのように、薄いベールの奥に寝台を備えた美しい部屋。中央にテーブル。二つの椅子がある。王、一つの椅子に女を座らせる。

幽王　どうだ、気に入ったか。ここは、后であっても入れない。満たされなかったワシの夢を追うために特別に作らせておいた部屋だ。

ワシはこの部屋に時々一人で入って、まだ見ぬおまえのようなすばらしい女の来ることを夢に見ていた。まさかそれが実現しようとは考えてもいなかったぞ。

女はうつむき加減である。

幽王　（気を引こうとして優しい）ワシは褒の国がどんなところか全く知らない。おまえの故郷の、褒のことを話してみよ。

褒姒　（ようやく顔を上げる）はい、褒の国は、山深く、川の流れは谷を穿ち、大変美しいところでございます。

26　褒の国

（声のみで）

褒姒の話す間、画面には褒の国の様子が展開する。

山々が迫り、緑が多く、水の豊かな急な流れ。人々は落ち着き、豊かに生活している。大きな瀧が画面に広がる。

褒姒　私は、山深い、川の近くに育ちました。まずしい百姓の家で。ですから、このように畏れ多い王宮で生活しようとなどとは夢にも思いませんでした。

幽王　そうか、貧しい家に育ったか。しかし、これからは違う。九国全てを治めるこの周室のワシの身近で、何の不自由なく生活するのだ。ワシは、とりわけ優しい男だ。安心するがいい。

（女の寂しそうな顔を見て）どうした、父や母を思い出すのか？

27　父母の働く畑

既に年老いた夫婦が、畑で働いている姿。

褒姒　父と母はその昔、物を売り、あちこちの国を巡っていたのだそうです。そして、その途中で、道端に捨てられて泣いていた私を拾って育てたのだ、と聞いております。

幽王　拾われた？　では、おまえは本当の父母の顔を知らぬのか？

褒姒　はい。でも、私を育ててくれたあのお二人がかけがえのない実の父であり、母であると思っています。

畑近くにある家。そこをさらに行くと川があり、先の大瀧が目の前に落ちるのが見える場所に出る。

28　褒姒の居室

幽王　安心するがいい。これまでに知らぬ幸せを、ワシが、おまえに授けてやろう。（狂おしく、激しく抱く）九国の全ての諸侯が、私を敬い、毎年その諸侯からおびただしい貢ぎ物が届いておる。

そうだ、この都、鎬京がどんなところか、おまえにみせてやろう。ワシと一緒に望楼へ来るがよい。周王室の都、ひいては、九国中の都、この鎬京の街を一目で見渡すことができるぞ。

29　宮殿の望楼

鎬京の町の様子が一目で見渡せる。遙か遠くの山々の連なり。そして、城壁に囲まれた大きな街。画面にはしばし、郊外の風景が展開する。涇水の流れも見られる。

幽王　どうじゃ。これが鎬京の街の全てじゃ。あらゆる諸侯が九国の都と慕う鎬京じゃ。そして、あの山をズッと越えた向こうに、おまえの故郷、褒の国がある。

30　王の居室

侍女たちの大勢見守る中、テーブルに豪華な食物が並べてある。王と褒姒が椅子にかけ、食事をとっている。

31　后の居室

怨麗　幽王の女狂いは一体どうなっているのでしょう。王はやはりあの女を片時も離そうともしないようだが。

侍女　近頃、見たこともない、優しい眼差しでございます。

怨麗　（怒りを表に出し）すぐさめてしまうと思っていたのに、一体あの女はどういう女なのだ。気まぐれな王の心をそれほどにとらえて離さぬほどの、何があるというのだ。

侍女　お后様、私は口惜しうございます。王の居室ではお后様が座るはずの椅子に、あの女が臆面もなく座って、王様と並んで食事などしているのです。

怨麗　私は、今更、王の愛だなどと、どうこう言うつもりはない。ただ、あの女の無礼については許してはおけない。今度、私の椅子にあの女が座っている姿を見たら、たとえ、王の前でもかまわぬから、強く咎めておくれ。その行為がどんな恥知らずなものであるかを、あの女に思い知らせてやりなさい。私は、もうあの部屋には近づきたくもない。

侍女　お后様、かしこまりました。

32　王宮の庭

酒の池に、若い男と女の裸の群がうごめく。王は褒姒を自分の近くに置いて、それを見ながら酒を飲んでいる。

幽王　どうじゃ、褒姒、楽しい見ものであろう。男や、女どもが、このワシの徳を慕って、酒の池で、ほぁれ、戯れておるわ。ワハハハッ。

王、愉快そうに酒を飲み、褒姒を抱き寄せ頬ずりをする。

褒姒　王様、一つお願いがございます。

幽王　ほう、どうした。おまえの願いとあれば、ワシは何でもかなえてやろう。言ってみよ。

褒姒　……

幽王　どうした。ワシはお前に会って以来、ズッと気になっていた。お前の顔が暗すぎるのだ。美しいお前が、笑顔を見せたらどんなに輝きを増すだろう。一度、笑顔を見せてくれ。そのためなら、何でも願いを叶えてやる。

褒姒　畏れながら王様、この遊びは止めて下さい。

幽王　ううん、お前は、あの喜んでいる男や女の姿を見るのは嫌いか。ワシはお前も喜んでくれると思っていたのだ。一緒に笑ってくれるのではないかと思って、お前にも見せたのだが。

……よし、ワシもこんなものを見るのは飽きていたのだ。お前がそばにいれば、もう何もいらぬ。（大声で）止めろ！　ものども、ふざけて騒ぎ合うのは止めろ。

男女たちの嬌声、王の大声で止む。

幽王　虢石父、おるか？

虢石父　は、何用でございますか？

幽王　この遊びに加わっていた男と女を引っ捕らえ、全て処刑せよ。

虢石父　はッ、承知いたしました。

33　王宮の中

テーブルに豪華な果物が載っている。椅子にかけた王と褒姒が、その果物を食べている。そこへ、王后付きの侍女が来る。

侍女　王様、畏れながら、申し上げます。

幽王　何だ！

侍女　その椅子から、この女を、お外し下さい。

幽王　何を言い出す。

侍女　その女は、恥知らずでございます。その椅子には、お后様以外のお方は誰も座れないはずでございます。そのことを、この女は知らぬようですので、思い知ってもらわなければなりません。

侍女、褒姒の近くへ寄り、手を捉え引っ張ろうとする。

幽王　これ！　何をする。このワシの承知していることだ。お前のような者が、何と思って、そのようなことをする。（周りの侍女に命じて）この女を引っ捕らえろ。

幽王付きの侍女たち、バラバラと、后付きの侍女のところへ行き、たちまち四方から押さえ、床に跪かせる。

幽王　その女の服を剝げ。鞭で打ち据えろ。

侍女たち、王の命ずるままに、女を裸にして鞭打つ。女は悲鳴を上げる。

幽王　その女を褒姒の前へ連れて行け。

侍女たち、女を捉えたまま褒姒の前に連れて行く。

幽王　褒姒よ、この恥知らずな女を足で踏みつけてやれ。

褒姒　（顔をそむけ、頭を横に振る）

幽王　遠慮はいらぬ。足蹴にしてやれ。

褒姒　王様、畏れながら、どうぞ、どうぞ、もう止めて下さい。この女を離してやって下さい。

幽王　褒姒は、そういうことが嫌いか。よし、皆、止めよ。この女を裸のまま街の広場へ引きずり出し、牛裂きの刑に処せ。退屈している街の者たちに見物させるのだ。さァ、連れて行き、すぐに刑を執行しろ。

侍女たち、わめく女を連れて、部屋の外へ出て行く。褒姒、しばらく驚きが覚めぬように王の顔を見つめる。

幽王　どうした、褒姒よ。そんな顔をして。

褒姒　私が間違っていたのかもしれません。あの人を、刑に処することはとりやめにして下さい。

幽王　何も気にすることはない。お前は、何の遠慮もなく、この椅子に座っていていいのだ。

ワシは道理に外れた者には厳しい男なのだ。あの女は、ワシへの礼を欠いた。そのための刑罰だ。

34　街の広場

女は裸のまま引き据えられ、街の人々の見守る中で処刑される。

左右の足を別々に括られ、それぞれの端が二頭の牛に繋がれた。役人の合図によって、牛に鞭が加えられる。牛は驚いて二方向へ走り出す。女の悲鳴。見物していた人々は顔を覆う。

35　褒姒の寝室

幽王と褒姒は床を共にしながら語り合っている。

幽王　ワシは、お前をもう離せなくなっている。もしお前の体の内にワシの子供が宿ったなら、そして、それが男児であったら、その子供にこの九国の全てを託そうと考えている。

褒姒　王様、私にはまだ信じられません。今、こうして、ここにいるのが私自身であるということが。

幽王　ワハハハッ、可愛いやつ。信じてよい。

（王、褒姒を強く抱く）

36　后の居室

怨麗（えんれい）は王子宜臼（ぎきゅう）の寝顔を見ながら話しかけるともなく、独り言。

怨麗　父上が愚かな故に、周王室を支える民たちが困っています。天もお怒りで、近頃は雨も降らなくなりました。空は毎日のように黄砂に覆われています。西の戎もこのままでは、機を見てこの国を襲うでしょう。王子のあなたに早く一人前になってもらって、この国の乱れを正してもらわなくてはなりません。

37　褒姒の寝室

幽王　お前は、一日も早くワシの子を宿すのだ。そして、立派な男児を産め。その子供こそ、この周室の悠久を継ぐ者となるのだ。

褒姒　いいえ、そのお言葉が、私には恐ろしいのです。

幽王　何を畏れる必要がある。

褒姒　世間の諸侯がお認めになっているお后様がいらっしゃいます。そのお方には、ご立派なお世継ぎも。

幽王　ワハハハッ、后か、今は名ばかりじゃ。確かに気の利かぬ宜臼という子供はいる。しかし、今は、ワシにお前がいる以上、共に用のない者ばかり。宜臼は近々命を絶ってしまおう。そして、怨麗は、このごろワシをないがしろにしている罰として、手足を切り落とし、お前の使う厠に沈めて、毎日お前の尿と糞を浴びせさせることにしよう。どうだ。

褒姒　（黙ったまま首を振る）

幽王　ワシは約束すれば、必ず実行する男だ。どうだ、嬉しくないか？

褒姒　恐ろしゅうございます。

幽王　笑ってくれ。ワシのために、笑顔を見せてくれ。

その美しい顔に、笑みがこぼれるのを、ワシは見たいのだ。

褒姒　……

幽王　どうだ、（顔をのぞく）まだ物足りないのか？

褒姒　いいえ、もったいのうございます。ただ、私は、生まれてからこの方、笑うということが、どういうことなのかを知りません。

幽王　よいよい、ワシが心からお前を笑わせて見せよう。そのうち、笑うということがどんなに楽しいものかわかるようになるだろう。

幽王、褒姒を強く抱き寄せ、激しく愛撫する。

褒姒、もだえる中で龍と化し、王と共に天に昇る。

空中で王の体に巻き付き、王を苦しめる。

38　民の働く畑

農民たちは、涇水の流れの見える岡の畑に出て働いている。川は干上がり、作物は枯れている。

農民Ⅰ　（空を仰いで）ああ、不吉な黄砂が今日も晴れない。

農民Ⅱ　（嘆息しながら）これも幽王様のご乱心のためだ。

農民Ⅲ　近頃、どこの女とも知れぬ女に狂っているということじゃないか。為政者の徳を全く失ってしまった。

農民Ⅰ　天の怒りは、このままじゃすまないだろう。

農民Ⅱ　山に緑がなくなり、水が涸れ、毎日空が赤く染まるのは、何か事の始まる前触れなんだ。

農民Ⅲ　悪い王が立った時代に生まれた我々は、不幸な巡り合わせだ。

39　宮中の執務室

申侯の義は占いの博士を呼んで伺いを立てている。

義　朝議は開かれず、宰相の虢石父（かくせきほ）は、王のご機嫌を取ることばかり考え、その実、蔭では私腹を肥やすことばかりやっている。博士、あなたはこれを何と見、そして、この国の行く末をどのように見てますか。

博士　陰の気と陽の気が、うまく調和しているとき、世は平和でいられる。この世に起こったことを全て考えてみると、陽の気の全て重なった場合は、政治は安定し国は栄える。全て陰が重なってしまった場合は、争いの相と言って、国は乱れ、滅ぶのじゃ。

義　今は？

博士　今は、その陰の気が重なっているのじゃ。よって、国においては、よき臣下、よき忠告者を必要としている。ただし、どうにもならない深い因果の律に根ざしている場合は、いくら立派な忠臣がいてもどうにもならないことがある。

義　今後どうなりましょう。

博士　今度の場合、大昔より定まっていた流れに乗って、事はなるべき方向に向いておるような気がする。

義　定まっていた流れ？

博士　そうじゃ、深い天の因果の律による。

義　それはどういうことですか？

博士　滅びの道。

義　滅び？

博士　さよう。悠久の昔より、定まっていた方向にな、動くべくして動く。

義　天の定めによって周室はこれでおしまいだとおっしゃるんですか？

博士　言いたくはないが、その通りじゃ。あなたから見る幽王は、だらしのない、情けない男として映っていようがのう。だがあの幽王は出るべくしてこの世に生まれたのだ。定められた道に従ってな。あの王個人の生き方を責めてもどうにもならない流れに乗ってな。

義　山が崩れ、川が涸れる。みな亡国の徴。これは、この世を統べる王の徳が乱れておるがため、天の災いを招いているというのではない、とおっしゃるのですか？

博士　全くその通りじゃ。逆に、あの幽王は不徳を背負うべく定められて生まれて来た気の毒なお方なのかもしれぬ。

王のもとへ近頃来たあの女が、そのことを全て物語っておる。

義　あの女が？

博士　そうじゃ。政治を執り行うような人間の徳も不徳も、全て天の筋書きによる、というべきか。天の筋書きもその兆しによって読みとることができる。

義　さて、分からなくなりました。あの女が天の語る滅びの兆しだと言うわけですか？

博士　その通り。あの女はな龍の化身に違いない、わしはそう思っておる。

義　龍の化身ですと？

博士　さよう、神龍のな。龍は天の意志の化身じゃ。

義　何の故あってそうおっしゃるのですか？

博士　では、話して聞かせよう。事の起こりは、ズッと昔に遡るのだが、この九国全てを治めてきたのは、天帝たる龍の精だった。

画面の上の部分にテロップが流れるように時代名と帝・王の名が流れる。

（博士の話）

三皇時代
太昊
炎帝
黄帝

五帝時代
少昊
顓頊
帝嚳
帝堯
帝舜

天を統べる三皇、五帝の後を受けてこの世に禹帝が立った。
禹はそれまでの天帝と同じ位を授かり、その印として、龍の性を受けた。水を治める能力を授かってな。
国中が出水と、旱魃に苦しんでも禹はその能力によって水を治め、全土を九国にわけ、安定をもたらした。夏と呼ばれた時代だ。
この禹の徳を戴き、その後十三代に亘って夏は栄えたが、実際の徳は禹王までじゃった。現実は天の帝たる性質を次第次第に薄くして、国を統べる者は人となって行ったのは仕方のないことだった。
十四代目の孔甲は何の徳も積まず、己を鬼神であると思い上がってしまった。それを戒めるため、天は禹の時代を思い出させようと二匹の龍を孔甲のもとに下した。それとも知らぬ孔甲は龍の出現をただ恐れ、龍を治めて力あると言われた山深い急湍の畔にある褒という小国の御龍氏、劉累という男に命じて、龍を鎮めさせた。

義　山深い急湍の畔の国、褒と言いますと、このたび貢ぎ物と共に、例の褒姒という女をよこしたあの褒の国のことですか？
博士　その通りじゃ。
義　あの国は、そんな古くからあの地に続いた国だったのですか？

夏

禹帝（初代・文帝）
九国の水を治める。龍の性を持つ。
孔甲帝（十四代）
二龍現る。その一匹の肉を食う。

博士　全くその通りじゃ。昔からあの山奥に城を構え、夏の時代の初代、禹すなわち文命帝の流れをくむ国でな。
おそらく禹は、天にあって、自分が始めた夏の国の行く末を見つつ、戒めるため二龍を下した。にもかかわらず、何も分からず乱脈を続ける孔甲に怒りを覚えて、二龍の内の一匹を劉累に殺させ、その肉を孔甲に食わせるようにしむけた。

殷

桀帝（十七代）
夏滅ぶ
湯帝（初代）
紂帝（三十代）
私欲のため政治を恣にし殷滅ぶ

周

武王（初代）
「帝」をやめ「王」とする。
厲王（十代）
櫃を開ける。
周室乱れる
宣王（十一代）
周室中興
幽王（十二代）

以来、栄えの後には滅びが来るという時の流れの形が定まったのだ。
いうなら、今度の事の起こりは、ここに始まっていたというわけだ。
以来夏の国は滅びの一途をたどり、十七代目に桀が立って、乱脈も行き着くところ極まった。そしてここに禹の建国した夏という国は滅びてしまった。
つぎに殷が国を湯によって立て、九国に長い繁栄をもたらしたが、三十代目の紂に至って、また国を滅ぼした。
その後、周室建国の租、我が武王が立った。武王は偉かった。天を畏れ、人たるもの思い上がることはならぬと、前の時代まで残っていた「帝」という号をこれからは使わぬ、と言って、自ら「王」と名のった。
徳を積み、これまでの周室繁栄の礎を築いた。しかし「夏」がそうであり「殷」がそうであったように、繁栄も永遠のものではない。

東周

都鎬京（西周）
滅ぶ
平王（十三代）
都を洛邑（洛陽）に移す（東周）

必ず、その国を乱し、滅ぼすために生まれてくる者が天の傀儡としてこの世に送られて来るのだ。
三皇と五帝、そしてそれを受けた禹までで天の時代が終わったのだから、これも仕方がない。
まず、この周室においては、十代目の厲王が国を乱した。それを復興したのが宣王だった。

義　そうでした。宣王様は、この私を高く買ってくださり、心から周室を愛する方でいらっしゃいました。ところがその子、宮涅に至ってはこのありさま。
博士　そうじゃ。幽王こそ天の筋書きによる夏時代の「桀」であり、殷の時代の「紂」なのだ。
義　（頭を抱え）私が心配してもどうにもならない天の定め、とおっしゃるのですね？　これは天の意志だと。ところで、あの女、褒姒とは一体何者なのですか？
博士　そうであった。その話もしておかなければならぬな。

（つづく）

下剋上と奴隷王朝〈本編〉
――米国テロより異文明史を考証する――

宅見勝弘



六、下剋上の無い西洋史

もし、前一世紀のローマ帝国における、剣闘士奴隷スパルタクスの反乱が成功していれば、下剋上による国家が誕生していたであろう。

当時のローマ市民にとっての娯楽の一つが、円形闘技場（コロッセウム）で二人の剣闘士奴隷を死ぬまで戦わせるという残酷な「殺人ショー」であった。

ローマ市民は、ほとんどの労働を奴隷にさせていたので、「ローマの休日」は年間二百日以上あった。その持て余した休日をより刺激的に楽しむために生み出した娯楽である。

残酷な制度に耐えかねた七十八人の奴隷がスパルタクスを中心にして反乱を起こした。その少数の反乱がローマ軍を破り、多くの奴隷が加わって、十二万人もの反乱になった。

奴隷達は自由を求めて、当初はイタリアを北上し、アルプスを越えようとした。その後、南へ転じて、アフリカに逃れようとした。しかし、最後はローマ軍に破れ、全滅した。

スパルタクスは制圧した土地を平等に与えたというが、もし国王になっていれば、搾取の無い理想的な国家になっていたかもしれない。

スパルタクス以外にも、西洋の歴史上に奴隷の反乱は存在するが、成功した例は無い。

ロシア・ロマノフ朝において、十七世紀のステンカ＝ラージンの反乱、十八世紀のプガチョフの反乱といった農奴が起したものがあったが、二つとも鎮圧されて、農奴制が強まった。

アメリカでは、十九世紀にナット＝ターナー、ジョン＝ブラウンという黒人奴隷が反乱を起したが、失敗して殺された。

独裁者を倒した後、別の独裁者が誕生した例は、多くあり、代表的な例が「革命」である。

十七世紀イギリス清教徒革命後のクロムウェル、十八世紀フランス革命後のロベスピエール、二十世紀ロシア革命後のレーニンが挙げられる。

日本史では下剋上の例として「山城の国一揆」「加賀の一向一揆」等、国一揆や一向一揆も含めている。戦国大名の毛利元就は安芸の国一揆のリーダーであった。

一揆は、一個人によるものでなく、下の階級が上の階級に克ったものである。一揆が下剋上であれば、革命も下剋上と言えるかもしれない。

しかし、革命は権力者が交代する際に政治体制の変革を伴うものであるため、一揆とは性質が異なる。革命後の独裁者は、支配者階級の交替の後に、その支配者階級の中で誕生したと考える。

なぜ、西洋に下剋上が見られないか。

双務契約、王位継承、農業生産、統治思想、等が理由であると思う。

第一に、西洋における君主と臣下の契約関係は双務的つまり対等である。君主が契約を守らなければ、自由に臣下を辞めることができ、下剋上をする必要が無かった。

第二に、王家同士の婚姻関係が成立しており、円滑に王位継承が進み、安全保障の役割を果たしていた。

第三に、ヨーロッパの生産性の低い農業では巨大な権力の集中を生み出せず、農民のリーダーが権力を持ち、国王に抵抗することができなかった。

第四に、絶対主義を補強する王権神授説があり、思想的にも下剋上が許されていなかった。中国の天子思想では、有徳の皇帝の余徳により、その子孫も支配者となるが、徳の余りが尽きると、別の有徳者が皇帝に就くと考えていた。

七、奴隷から首相になった日本人

イスラムの奴隷王朝に入る前に、奴隷から首相になった日本人を紹介する。

大正時代に首相になった高橋是清である。

原敬首相が刺殺されたために、急遽、高橋が首相になった。なお、高橋は五・一五事件で犬養首相が暗殺された後に臨時首相になっている。

高橋は、首相よりも七回の大蔵大臣の方で活躍しており、また農商務大臣も歴任した。大臣になる前は日本銀行総裁としても活躍し、その前は横浜正金（現東京三菱）銀行副頭取も経験した。

八十三歳で大蔵大臣在職中に、二・二六事件で陸軍青年将校に惨殺された。

もし、高橋が奴隷のままで、政治や経済の世界に登場しなかったら、かなり日本の歴史は変わったであろう。

原首相が暗殺された後は、次の首相が決まらなかったかもしれない。

銀行の取り付け騒ぎが発生した金融恐慌を、高橋が大蔵大臣として支払猶予令（モラトリアム）や日銀特融により静めなければ、大混乱になったかもしれない。

その後に発生した世界大恐慌（昭和恐慌）で、日本が国家破産したかもしれない。

それ以前に、日露戦争において、日銀の高橋が戦費の半分以上にあたる巨額の外債による資金調達ができなければ、日本は戦争に負け、ロシアの植民地にされたかもしれない。

二・二六事件で暗殺されたのが高橋で無ければ、陸軍のクーデターは成功し、軍国主義が進んだかもしれない。

「だるま宰相」として国民や天皇に敬愛されていた高橋が殺されたことで陸軍の支持が得られなかったと思う。

高橋是清は、いつ、どこで奴隷になったか。

日本は、奴隷制度という非人間的な制度が浸透しなかった世界史上でも珍しい国である。

卑弥呼の時代から「奴婢（ぬひ）」がおり、江戸時代にも「えた・非人」がいたので、人間扱いされない、身分の低い人間はいた。しかし、西洋のような奴隷制度は無い。

高橋が奴隷になったのは、江戸時代末であり、アメリカのサンフランシスコにおいてであった。

高橋は十四歳で、仙台藩から派遣されてアメリカに留学した。そこで騙されて、奴隷として売却されたのである。高橋は英語が分からずに奴隷契約書にサインしたのであった。

一年で奴隷から逃れて、明治維新後の日本に帰国したのであった。

八、イスラムは劇的な下剋上の歴史

イスラムでは、スパルタクスが国王になったような、中国よりも劇的な下剋上が存在する。

イスラムの奴隷制度の特徴は、奴隷の対象が成人でなく子供である、ということである。異教徒・異民族の子供を誘拐や購入して、奴隷として成人になるまで育てた。奴隷にしたのは五才から十四才までの子供であった。

男の子は軍人奴隷として育て、女の子は愛人奴隷等として育てた。家畜並の扱いということであれば、男の子は番犬代わり、女の子は愛玩犬代わりであった。

異民族・異教徒の子供を奴隷として育てる制度は、一時的なものでなく、千年以上に渡って、二十世紀まで続いてきた。

イスラム奴隷は、ローマの剣闘士奴隷やアフリカ黒人奴隷と比べると、かなり性格が異なる。しかし、家畜同様に生殺与奪の権限は主人が持っていたし、人権も無く、売買対象の「物」であった。歴史学上も、明確に「奴隷」ということで定義している。

イスラム世界で、奴隷が活躍する歴史を四つ紹介し、考証する。

第一は、十世紀のアフガニスタン。アフガニスタンで最初に国家を興したのは奴隷である。

第二は、十三世紀のインド。インド史における最初のイスラム王朝は「奴隷王朝」である。

第三は、十三世紀から十六世紀までのエジプト。マムルーク朝と呼ばれるが、マムルークは奴隷であり、訳せば奴隷王朝である。

第四は、十三世紀から二十世紀までのトルコ。オスマン＝トルコ帝国は、皇帝が奴隷の息子であり、奴隷が支配する帝国であった。

九、奴隷から誕生したアフガニスタン

米国同時多発テロの報復より、世界で注目を浴びているアフガニスタンであるが、その地域単一で成立した国家は歴史の上では少なく、周辺国の一地域として侵略され支配されていた。

この地域だけで固有の国家が建てられたのは、アフガニスタン以前では、十世紀のガズナ朝・十一世紀のゴール朝である。ガズナ・ゴールという都市も現在残っている。

厳密に言えば、前三世紀から約一世紀の間、アフガニスタン北部には、バクトリアというギリシア人によるギリシア国家が独立するが、民族的・宗教的にも別に考える。

前六世紀はアケメネス朝ペルシア帝国の支配下に置かれていた。

前四世紀はギリシアのアレクサンダー大王に征服された。アフガニスタン第二の都市カンダハルはアレクサンダー大王（ペルシア名でイスカンダル）から名付けられた。なお、ガンダーラも同じ語源である。

その後、代表的な支配者を挙げると、九世紀がサーマーン朝（イラン）、十三世紀がモンゴル帝国、十四世紀がティムール帝国（中央アジア）、十六世紀がムガル帝国（インド）である。

十九世紀から二十世紀に入ってからは、イギリスとソ連との間で三次に渡るアフガニスタン戦争があった。一九八十年代はソ連によるアフガニスタン侵攻が続いていた。そして、現在のアメリカによる空爆である。

これだけ、他国から蹂躙された国家というものは他に無いかもしれない。

しかし、十世紀に現在のアフガニスタンを大きく包み込むような版図を築いたガズナ朝という独立国家があった。

ガズナ朝は奴隷が興した国である。ガズナ朝の初代国王アルプテギンはサーマーン朝の奴隷であった。

アルプテギンはトルコ人で、奴隷兵として活躍し、国王の親衛隊長になった。その後、失脚して、インドへ向かう途中で、アフガニスタンにガズナ朝を興したのであった。

スプクテギンはイランとトルコの混血で、アルプテギンの奴隷であった。武勇に優れ、ガズナ朝の王位を継いだ。

現在のアフガニスタンは海に面していないが、ガズナ朝はアラビア海まで版図を広げた。

十二世紀に、ガズナ朝はイラン系のゴール朝に滅ぼされた。

ゴール朝は、奴隷が建てた国でないが、ゴール朝の奴隷がインドに奴隷王朝を築くのである。

十、インドの奴隷王朝

奴隷王朝は、奴隷が王朝を建てただけでなく、「奴隷の奴隷」、さらに「奴隷の奴隷の奴隷」も国王になった。宮廷の高官等の支配者階級も奴隷が占めていた。そのため、歴史学上も「奴隷王朝」と呼ばれている。

アイバクは少年の頃、トルキスタンのトルコ人の両親から誘拐されて、奴隷として売られた。若い頃は、商人や司法官の奴隷であった。その後、転売されて、ゴール朝の宮廷奴隷となった。

アイバクは、武将として優れており、ゴール朝のインド侵略軍の指揮官として活躍するようになった。ゴール朝の国王が暗殺されると、アイバクはインドで独立して、インドで初めてのイスラム王朝を建てたのである。

イルトミシュはトルコ人有力部族の首長の息子であったが、親兄弟から奴隷として売られた。奴隷として転売されて、最後にアイバクの奴隷になった。つまり、奴隷の奴隷である。

アイバクが落馬事故で急死すると、イルトミシュはアイバクの息子と争って勝ち、王位を継いだ。イルトミシュはチンギス＝ハンの率いるモンゴル軍の侵略に抵抗し、奴隷王朝の安定政権を築いた。

イルトミシュは娘のラジーヤを国王の後継者に選んだ。ラジーヤはイスラム世界で唯二人しかいない女王の一人である。国王が女性であることに不満を持つ家臣により暗殺された。

バルバンは同じくトルコ人であったが、青年になってモンゴル軍に捕らえられ、奴隷にされた。各地を転々としていたが、最後はイルトミシュの奴隷になった。つまり、奴隷の奴隷である。

バルバンは、イルトミシュの息子である国王を毒殺して、自ら国王になったという説がある。

奴隷王朝は、バルバンの次の代で滅ぼされ、同じトルコ系のイスラム王朝であるハルジー朝に取って代わった。

奴隷王朝を含め三世紀以上続くイスラム政権の五王朝はデリー＝スルタン朝と呼ばれる。すべての王朝が、インドのデリーを首都とし、北インドを支配した。

デリー＝スルタン王朝は別名でパターン朝と呼ばれるが、パターン人とはパシュトン人、つまりアフガニスタン人のことである。実際にアフガニスタン人が支配したのは、最後のロディー朝だけである。

十一、エジプトのマムルーク朝

マムルークは奴隷の意味である。つまり、マムルーク朝を訳せば、奴隷王朝である。

マムルークは女奴隷で無く、男奴隷を指している。人種は黒人でなく白人（正確には黒人以外）である。民族的にはトルコ系が多く、スラブ系、モンゴル系、ギリシア系、アルメニア系等がいた。農民奴隷でなく、軍人奴隷である。奴隷の中でも白人奴隷兵と訳すのが元の意味に近い。

しかし、マムルーク朝の最初の王は、男奴隷で無く、女奴隷であった。

マムルーク朝の初代国王になったのは、アイユーブ朝国王サーリフの愛人として飼われた女奴隷シャジャルである。

歴史書によると、シャジャルは美貌の少女であった。トルコ人ともアルメニア人とも言われているが、幼い頃に誘拐されたのか、経緯は不明だが、奴隷となった。シャジャルは奴隷につけたニックネームであり、初代国王でありながら、本名も親兄弟も分からない。

その美貌のため、エジプトを支配していたサーリフ国王へのプレゼントとして、与えられた。国王に愛人奴隷として可愛がられ、国王の子供を生んだ。

奴隷とはいえ、国王の息子の母親である。やがて、その地位を利用して、政治的な権力を手に入れていった。

当時はアイユーブ朝の支配地エジプトに、フランス王ルイ九世の率いる第七回の十字軍が侵略していた。この十字軍とアイユーブ朝との戦争の最中にサーリフ国王が病死してしまった。

シャジャルは国王の死を隠し、筆跡を真似て命令を出し続けた。アイユーブ朝の軍隊は十字軍を破り、ルイ九世を捕らえた。

シャジャルの息子は早世しており、継子のトゥーラーンシャーが即位した。しかし、トゥーラーンシャーはマムルーク軍を弾圧しようとして逆に殺され、アイユーブ

朝は滅びた。

シャジャルが政治的・外交的手腕を発揮したので、マムルークの信任を得て、正式に国王に推戴された。こうして、奴隷が支配するマムルーク朝が誕生したのである。

イスラム世界で女王となったのは、シャジャルと奴隷王朝のラジーヤだけである。

シャジャルの次に王位を継いだのが、アイバクである。奴隷王朝のアイバクと同名であるが別人である。

アイバクはトルコ人奴隷であり、サーリフ国王に仕えていた。サーリフの息子トゥーラーンシャーを殺害し、エジプト軍の総司令官となった。

そして、シャジャルと結婚すると、その妻から王位を受け継ぎ、第二代国王となった。

アイバクは七年間、王位に就いていたが、別の女性にプロポーズすると、シャジャルに殺された。シャジャルも夫を殺した三日後に女奴隷によって殺された。

アイバクの死後、その息子（シャジャルの子でない）が一時的に王位に就いたが、奴隷のクトズが王位を引き継いだ。そのクトズを殺して、奴隷のバイバルスが次の国王になった。その後も、歴代の国王の多くは奴隷であった。

一時的に王位を国王の息子が継ぐことはあっても、マムルーク朝では、原則として世襲は認められなかった。王位を簒奪した者か、奴隷の中から推挙された者が国王となるのである。

マムルーク朝はオスマン＝トルコ帝国に滅ぼされるまで、約二七〇年続いた。

十二、奴隷帝国オスマン＝トルコ

十三世紀から二十世紀までイスラム世界に君臨するのはオスマン＝トルコ帝国であるが、ほとんどの皇帝はキリスト教徒女奴隷の息子であった。

オスマン＝トルコの君主は世俗的君主（スルタン）だけでなくイスラム教の最高権威（カリフ）を兼ねるので、国王でなく皇帝と呼ばれる。つまり、単なる君主でなく、イスラム教の最高権威者が異教徒奴隷の息子である。

男性が多くの女性を侍らせていることを「ハーレム」と呼ぶが、皇帝の周りには三百人ほどの性の相手をする女性がいた。

オスマン＝トルコでは、皇帝は正式に結婚をしなかった。妻が敵の捕虜になることで国難となるのを避けるためである。

皇帝が性の相手をする女性は、奴隷であった。イスラム教徒のトルコ人を奴隷とすることは許されなかったので、奴隷のほとんどがキリスト教徒の非トルコ人（主にヨーロッパ人）であった。

奴隷はイスラム教に改宗する必要もなかった。皇帝の

母親がキリスト教徒のままであったので、母親の葬式をキリスト教式で行うこともあった。

オスマン＝トルコ帝国では、皇帝は息子が世襲するのが一般的であった。

四代皇帝のバヤジット一世以降、新しく皇帝が即位すると、皇帝の兄弟は皆殺しにするという慣習があり、法律にも定められた。皇帝の座を脅かす存在は早めに抹殺するというのが理由である。

皇帝の息子は、自らが皇帝にならなければ、殺されるのである。実質的に一夫三百妻であるから、兄弟はかなりの人数になり、皇帝の息子が生き残るのは至難の業であった。兄弟が即位すると自動的に殺されるという境遇を考えれば、奴隷よりも悲惨かもしれない。

七代皇帝メフメト二世がビザンツ（東ローマ）帝国を滅ぼした。メフメト二世が最初の奴隷の息子で、以後は最後の皇帝まで三十代に渡り奴隷の息子が即位した。

九代皇帝セリム一世の時に、マムルーク朝を滅ぼした。つまり、男奴隷が国王となる国を女奴隷の息子が皇帝となる国が倒したことになる。

十代皇帝スレイマン一世の時に、ウィーンを包囲する等、ヨーロッパ世界に対抗し、地中海を支配していた。なお、スレイマン一世が最も可愛がった奴隷はロシア人であった。次の皇帝セリム二世は、ロシア人ハーフである。

十四代皇帝アフメト一世以降は、兄弟皆殺しでなく、牢屋に一生閉じ込める方法に変わった。

オスマン＝トルコ帝国では、ギリシア人などのキリスト教徒の子弟を奴隷兵として育て、キリスト教国と戦わせた。イェニチェリと呼ばれる最強の奴隷軍団である。

イスラム教に改宗させるのであるが、イェニチェリ軍は皇帝に対する忠誠心と、死を恐れない勇敢さのため、キリスト教国の軍隊が恐れ慄いたと言う。

なお、イェニチェリ軍に入るには、武勇に優れていることだけでなく、美少年であるという絶対条件があった。皇帝が同性愛を好む場合に備えていたためと言われている。

結婚することも一切の娯楽も禁止され、親兄弟からも隔絶された社会で育った元キリスト教徒にとって唯一信頼できるのはイスラム教の皇帝であった。皇帝のためには多くのキリスト教徒を殺すことができたのである。

宰相をはじめ、多くの高官が奴隷で占められていた。つまり、皇帝は奴隷の子供で、軍隊が奴隷で、宰相も奴隷という奴隷帝国であった。

十三、奴隷が国王になる仕組

奴隷が国王になる仕組は、どのようになっているか。マムルーク朝を例にして考証する。

虐げられた人間が反乱を起こして、国を乗っ取ったのではない。むしろ、奴隷の主人である国民が、奴隷が国王になることを受け入れたのである。そして、国王の子が王位を継ぐのではなく、別の奴隷が国王になるのである。

奴隷であるから、もともとは畏敬の対象となる要素は、ほとんど無い筈である。人格を認められず、「物」として売買される存在である。

しかも、彼らは幼い頃に連れ去られた外国人（非エジプト人）であり、国民（エジプト人）の代表でない。イスラム教に改宗させられるが、元はイスラム教徒ですらない。

マムルーク朝は二七〇年近く続いており、けっして一時的な王朝でない。マムルークという奴隷の制度は、九世紀から千年も続いている。（オスマン＝トルコ帝国は六二〇年以上続いている。）

十三世紀のエジプトは、東からはモンゴル帝国に侵略され、西からは十字軍に侵略されていた。

その当時、他国の侵略に対して、国民自身は兵役を嫌い、国家防衛のために戦うことができなかったのである。自分たちの国と国民を守ってくれるのは奴隷しかいなかったのである。

自分の命を守ってくれる者であれば、異教徒出身の外国人で人格の無い「物」であっても、畏敬の対象となる訳である。

国王になると、当然ながら奴隷身分から解放されるし、その前に解放された者もいた。

マムルーク朝を例にしたが、他の王朝でも同様に、他の文明圏との侵略・被侵略の時代に誕生している。

ガズナ朝は、イスラム世界がインドへ侵略する途中で、独立したものであった。奴隷王朝は、モンゴル帝国から侵略されていた。オスマン＝トルコ帝国は、東ローマ帝国やスペイン等のヨーロッパ諸国との間でお互いに侵略戦争が続いていた。

戦乱の時代であれば、生まれた身分が高貴であるか、は全く関係なく、自分の国を防衛や拡大する者が支配者になるのである。

実力があれば奴隷であっても国王になれる、というイスラム世界には、非常に強烈な下剋上のダイナミズムが存在する。

十四、東洋文明の下剋上

「文明法則史学」の歴史観では、約八〇〇年ごとに文明の主役が、東洋（イスラムを含む）と西洋とで交替する、と考える。

五六〇〇年前から、順番に代表的な文明や国家を例に挙げると、次の通りになる。

紀元前三六〇〇年からの八〇〇年間は、エジプト（古王国）文明【第一（西洋）文明期】。

紀元前二八〇〇年からの八〇〇年間は、西アジアのメソポタミア文明、インドのインダス文明、中国の黄河文明【第二（東洋）文明期】。

紀元前二〇〇〇年からの八〇〇年間は、地中海のエーゲ文明（クレタ・ミケーネ文明）、エジプト（中王国・新王国）文明【第三（西洋）文明期】。

紀元前一二〇〇年からの八〇〇年間は、最初の世界帝国アッシリア、空前の大帝国ペルシア帝国（アケメネス朝）【第四（東洋）文明期】。

紀元前四〇〇年からの八〇〇年間は、ギリシア・ローマ帝国【第五（西洋）文明期】。

紀元後四〇〇年からの八〇〇年間は、ササン朝ペルシア、中国の唐、イスラム帝国【第六（東洋）文明期】。

紀元後一二〇〇年から現代までの八〇〇年は、ポルトガル・スペインの地球分割、オランダ・イギリス等の植民地支配、アメリカの覇権【第七（西洋）文明期】。

約八〇〇年間、西洋文明の主役が続いたので、現在を含む数十年間が、東洋文明が主役に入れ替わる時期である。

文明興亡の周期性は、村山節先生が発見したもので、林英臣先生・浅井隆先生が研究・普及されている。

当然ながら、例外的な文明、時代の誤差は有るが、全地球規模で比較して考えると、文明興亡の周期は確実に存在している。

オスマン＝トルコ帝国は西洋文明優位の時期にあるが、イスラム世界含めた東洋文明全体では、他に西洋諸国と対抗できる国は唯一であった。

マムルーク朝は東洋文明であるが、エジプトについては、ギリシア人のプトレマイオス朝もあり、主に西洋文明に登場する。

十二世紀以前の約八〇〇年間は東洋文明が主役であった。イスラム文明は世界の中心であり、西洋文明よりもはるかに進んだ高度な文明を持っていた。

九世紀で考えると、世界最大の都市は現在のイラクの首都（フセイン大統領のいる）バグダッドである。当時のバグダッドには二百万人いたと言われる。

世界第二の都市は唐の長安（現在の西安）で、人口百万人であった。

世界第三の都市はスペインのコルドバで、人口五十万人であった。スペイン南部はイスラム帝国の支配下であり、東洋の一部であった。

当時ヨーロッパ最大の都市アーヘン（フランク王国の首都）がわずか二、三千人の時代であった。

アラビア数字というように数学もイスラム世界で発展してきたものであった。医学や大文学もイスラム世界で発達した。アリストテレス等のギリシア哲学もイスラム

世界で受け継がれてきたものをヨーロッパに逆輸入したものであった。

ルネサンス自体がヨーロッパで自発的に発生したものでなく、イスラム世界に刺激されて、発生したものであった。

そのイスラム世界が衰え始める時期に、「十字軍」による侵略があった。

十字軍というのは、ヨーロッパの歴史家によって、かなり美化されているが、実際は、ヨーロッパ権力者が世俗的欲望のためにイスラム世界を侵略し、イスラムの人間を大量虐殺し、金品を強奪したものである。

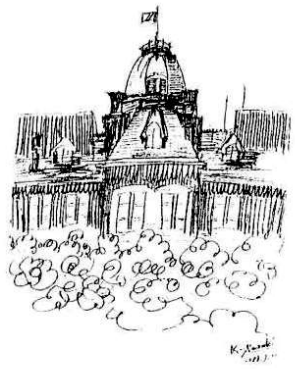
ヨーロッパ人による大虐殺に対して、イスラム側は応戦したが、過剰に報復しなかった。サラディン（アイユーブ朝初代国王）は、部下にキリスト教徒を殺すことを禁止した。

米国テロ事件で殺された人および遺族の方々のことを思えば、テロという卑劣な行為は許せない。しかし、テロ行為の善悪を論じるのでなく、人類史上でテロ事件がどのような意味を持つかを考証する。

歴史的事実として、約八〇〇年前に文明の主役が東洋から西洋に移った時に、十字軍という卑劣な侵略行為があった。

テロという卑劣な行為が、十字軍と同じ人類史上の意味を持つかもしれない。テロ事件および近い将来に発生するかもしれない惨劇が、西洋から東洋への文明の大転換を象徴する可能性がある。

米国同時多発テロ事件について、西洋文明を頂点とした世界秩序に対する東洋（イスラム）文明による「全地球規模の下剋上」の予兆を感じる。



悪流修羅　第二部



中泉聖司

（一）

二〇〇一年、四月。いたるところでミレニアム〝最後、最後の世紀〟と騒がれた二十世紀を閉じて、〝最初、最初の〟と二十一世紀のマスコミのアナウンスが始まり早くも春がおとずれていた。

猫田玄一は赤坂の料亭〈鈴千代〉に着いた。いま大概の国民は出口の見えない不況の中でもがき苦しんでいたのに、この年は彼にとっては檜舞台に上るように感慨のある新世紀なのだった。

打ち水に濡れた敷石を渡って仲居の案内についてゆく。小竹を編んだ押戸を開いて数奇屋造りの離れ座敷の玄関に入ると先客が二名待っていた。来る人の足音に気付いたQ銀行、丸井専務が立ち上がって大げさな身振りで猫田を出迎えた。

「やあ、やあ…お疲れ、お疲れさま！ご苦労さま！…さあさッどうぞ！」

「頭取は？」

「財務省から直接ここへ回ることになっています。…間もなくでしょう。こちらへどうぞ！」

猫田を上座へ導き、正面に頭取の席を一つ空けて着席させた。上役の専務の気配りに猫田の自尊心がうずく。

猫田はこの四月の人事異動で大阪のQ銀行難波支店長から本部に帰ってきたのだった。

あの、青山支店から名古屋の支店に転勤し大阪の難波支店に行った。支店長として約一年ごとに移動したから、足掛け五年振りの東京だった。

「懐かしいな！この料亭は！」

「エ～ッ！いつ、いらっしゃったんです？」ウソでしょう。あなたの来れるような料亭ではないでしょう！と、秘書課坂口の顔が反応した。

「オイオイ…坂口！俺の五年前を忘れたのか？俺は青山支店にいたんだぞ！忘れたらあきまへんで！」

大阪弁を披露して笑っている。坂口と呼ばれた男は猫田が管理部時代の部下、三十歳の独身で今は専務秘書を

やっている。
「あの頃ですか！良くもまあ…交際費の無い時期に…」
部下だった当時から自分の金は使わない〈ケチな上司〉の下馬評は定着しており、青山支店時代でも猫田支店長には青い血がながれたケチ男と、同僚のヒソヒソ話は聴こえていたし、内心では猫田を嫌悪していたので思わず口を突いて本音が出てしまった。
それでも猫田は今度の株主総会で役員になることが決まっており、坂口は出世頭のご機嫌を損じる言い方にハッと気が付いたが…もう遅い、シマッタ！とドギマギして俯いていた。
「へへへ…その通り！当時は支店の経費を一番節約した支店長だよ、俺は！ここは、いつも横山社長のお伴できたのだよ！」
「やあ…キミのお陰で大助かりだよ、Sシステム社も…今じゃ含み資産で日本のビッグカンパニーに成長したからね！見込みのない古い会社を切り捨て、IT関連に資金を出したキミの功績でうちの持株資産も大幅に増えて、他行に自己資本比率では大きく溝をあけている。…金融監督庁でも大きな顔が出来るよ。」
この時期をピークにこの会社の株価も下落していくのだが、今は解っていない。
専務の丸井が猫田にビールを注ぐ。
あわてて坂口がすみません、と言いながらビールを持った。
「キミも猫田君の部下だった時期もあるようだが、少しは見習ってくれよ！バカ正直もいいがキミの言い方は嫌味に聴こえるぞ、ご栄転の昔の上司にまずビールを注ぐ！気配りくらいは常識だよ！こんな料亭の一件や二件知っていることくらいで驚くなよ！」
猫田は叱られている坂口を見てニヤニヤ笑っている。相変わらず貧乏症で愚鈍な男だ。いつまでも結婚が出来ないはずだ、と考えている。
二年前に丸井は専務に昇格し、同時に頭取になった川口の後釜だった。いわゆる五年前の親衛隊長が頭取になり常務の丸井が専務に昇格していたのだ。が、丸井専務は実績の無い一貫したゴマすりタイプでコバンザメのように川口頭取に擦り寄って得たポストだと陰口を叩かれている。
「いえ、それもこれも皆、頭取、専務のご指示のお陰です。ありがとうございます。」
一応、先輩は立てなくてはいけない。これまでアクティブな指示や支援など受けたことはない。Sシステム社の転換社債引受は本当に大丈夫だろうな？と、不安顔で何度も念を押されながら稟議をとおした記憶がよみがえる。
頭取が到着したようだ。幾つもの足音が聴こえてきた。
「猫田君、ご苦労だった！今夜は君のための席だ。昇進

祝いもかねて」
頭取が席に座りながら猫田に笑顔をおくる、すぐに丸井専務の発声で乾杯をする。頭取秘書の山口美奈子が頭取の指示で猫田の脇に座り勺をする。秘書室長の長山と専務秘書の坂口は末席に並んだ。
「猫田君にはまもなく経営陣に加わって頂く事になるが…二十一世紀の幕開けに相応しい人材の登用なのだと考えてくれ、でも、これからが本当の正念場だ。期待しているよ！」
「ハッ！がんばります！」
山口美奈子の胸の膨らみを横目で見ながら低頭している。均整の取れた素晴らしいプロポーションに思わず唾液を飲んだ。すでに頭取に抱かれているのか？イヤイヤ、そんな筈はないな！恐妻家の彼には絶対にできないな、と考えている。
「不良企業を切って切って切りまくってきた猫田君には東京が最後の仕上げになる。今度は勤皇の志士の親分、……Q銀行の本隊長と言おうか、イヤ、新撰組の隊長としてな！近藤勇のようにだ！」
専務が竹の箸を振りかざしながら幼稚な例えで檄をとばす。
猫田が不良債権になりそうな灰色グループの中小企業を名古屋、大阪で有無を言わせず切り捨てて来たことを言っているのだ。先に成功したD商事のやりかたで自信をつけた猫田はあらゆる人情を無視してドラスチックに債権の回収をし、即決即断がそれなりに功を奏したのは確かで、処理が遅いほど資産デフレの影響が担保資産を目減りさせている現況下で判定すれば彼のやり方が銀行にとって最小の損害で成果をあげて来たことはデーターが証明していた。さらにベンチャー優良企業には資金を注ぎ込み他の支店とは比較にならないほど好成績をあげてきたのだった。
「切れば血も出る、死人もでる。まさしく明治維新の時代だよ。…今まさに…」
丸井専務の口が滑らかだ。酒がその目尻をだらしなく垂れさせて赤く染めている。
猫田の脳裏に自殺したD商事の藤田社長の顔と、猫田の不条理なやり方に死んで抗議をしてきた小田専務の手紙が脳裏をかすめた。小田の手紙には〈二度と人を騙すな〉という内容がめんめんと書かれていたが〈運命を俺のせいに摩り替える、女々しい奴よ〉と、すぐに焼き捨てた。その怨み節の手紙が黄色い炎をあげて燃えている情景が浮んでいた。
名古屋、大阪でも泣いたり喚いたり首をくくったりした無数の経営者の顔が浮んでいる、が、すぐに、これが戦争なのよ！生きるか殺されるか、まさしく今は経済戦国時代なのだ！この戦国の世に戦略と戦術に長けた者が俺のようにヒーローになるのだ、と切り替えして納得し

ている。
　頭取が専務からグラスにビールを受けながら笑みを浮かべて猫田に言う。
「それともう一つ、キミの親友が出世され金融監督庁の局長になられて、太いパイプができて助かっているよ。今までもいろいろ世話になったが何もお返しが出来ない。気にはしているが…この時代は贈り物もできない…しなあ」
　成果を求めながらも決して自分の手を汚したくないのだ、贈収賄の罪を恐れている。暗黙のうちに猫田に賽を振っているのだろうか。
「今日もつい先刻まで例のゼネコン、F組の件でまえ裁きはしてきたが……一応了解は取り付けた。専務の発案通りにキミと専務とで進めてくれたまえ」
「ありがとうございます。金融監督庁のN局長のほうは私がそのうち何とかします。また例の機密費のお世話になりますが…」頭取の投げた賽を眼で飲み込んで、専務に計略を吹き込んだのはこのオレ様なのだと言う表情も包み込んだ。
「本当は専務が近藤勇隊長でわたしは土方歳三の役なのですよ。難しいこの時期に早々に決断された頭取には敬意を表します。」
　満悦の専務と頭取の横顔に斜に頭をさげて自信を深め、また機密費が自由になり、女に使える、東京に戻った今度は特定の愛人を置こうなどと想像を膨らませながら欲望を疼かせている。その昂ぶりは彼の特性で顔には出ない。
「…でF組の件とは？」
　とぼけた振りで伺ってみる。
「うう～ん、それだよ！」
　専務が大げさに頷くと、頭取と顔を見合わせて、頭取がよかろうと眼で答えた。
「ま、この場は川口頭取の親衛隊の会だから言ってもいいだろう！…まもなくゼネコンのF組に引導をわたす。うちは主力ではないが、私も苦労したが、ここにいたり、うちがキャスチングカードを握っている。恐らく主力のB銀行やグループ企業からかなり反発や非難が起こるだろうが、すでに向こうのB銀行からF組に派遣された常務には手が打ってある。後は猫田君が例の手で打ち合わせてやることになる。」
「まま、専務そこまでにしょう！飯を食おう！みんな腹がへっているんだ。……今夜は芸子も呼んである。ゆっくりやってくれ！」
　パンパンと手を打つと控えの間の襖が開いて仲居が料理を運び始めた。
　猫田は秘書の山口美奈子に寄り添い太腿に自分の膝を接してその肉感を試し、弾力のある柔らかい肌に想像を膨らませている。美奈子はその程度のセクハラには慣れ

ていたが、初対面の猫田にはなぜか好感が持てない、何となく爬虫類のような冷たい男に思えていた。酒のせいか猫田の右目の下にある卵大のシミが赤黒く浮き上がり陰をつくっている。
「芸子より君の方がいい。今後ともよろしくな」
　耳元に囁いてくる。
「おうおう！猫田君は女にも手が早い！山口君気をつけろよ…まあ、今日は許すか、これからは猫田にも可愛がって貰え！それも仕事のうちだ。」頭取のご機嫌がいい。
　名古屋、大阪でも単身赴任の猫田は女を買い漁った。東京には公務扱いで仕事を兼ねて自宅に帰ったり、支店長会でも度々上京したが、その折に一度だけ、例のデートクラブに行って女の候補者の写真を選びに行ったことがあるが、何故か係りが冷淡だった。ロクな写真を出さない、もっとグッレードの高いのを要求してもブツブツ言って応募者が減っていると言いながら、いつかの女が死んだと言う。一年近く経っていたから何時かの女と言われても思い出さなかったがハッと息を飲んで、何故か？と尋ねると肺炎で死んだらしいと言い、あれだけのクラスの娘はこのごろ居ないと言うので、あの日二万円しか置かなかったことを思い出し多少の罪悪感も湧いてきたので、そうそうに出てそのまま終わっていた。おそらくケチを顔に書いたような猫田は嫌われていたに違いない。この世界はチップの一つも出してくれ、それから探せと係りの女は思っていたのだろう。
　東京でまた見つけなければならないが、秘書の美奈子は好みのタイプだ、が別格の美人だ。特定の女にするには格好の標的だが……なかなかやらしては貰えないだろうが、俺もすぐに役員になるのだ。遠からずチャンスが来るだろう、すこし今日はツバでも付けて置こう。俺のことをあまり好いても居ないようだが本来、権力と金には女は弱いのだ、この歳まで結婚をしないと言うことはロクなボーイフレンドもいないのだろうから、やがて強い酒でも盛って酔わせて贅沢な生活を保障してやれば、身体を開いてくるだろう。酔いのなかで猫田の眼がニヤリと陰を落とした。未だに利己的で無謀な論理に気が付かない、この幼稚な発想の男が経営管理者として認められていることこそが不幸を生む今の時代なのだろうが、悪流に気付かないのも現代なのだ。
　襖が開いて女将が挨拶にやってきた。
「みなさま、ようこそ…いつもご贔屓にありがとうございます。」
「ようー、ようー女将、いつも艶っぽいの！」
　軽く受け流して頭取に日本酒を注ぎながら美那子と眼を合わせると、
「今月もお忙しいわね…いつもありがとう…叔父さまにも大変お世話になっています。よろしくお伝え下さいませね…」

小声で告げながら酌をしている。
芸子と言われた女も四人きて夫々の席に添いながら勺をしていた。今時の芸子の芸はお粗末で酌婦がわりのコンパニオンが下ネタ中心の話題だけで職業としてやっているだけだ、が昔の芸の解る客もいないのでこれで良いのかも知れない。
「女将さん！しばらくです！猫田です。今度東京に帰りました、これからは私もここを使わせてもらいます…今度はわたしが散財しますよ！ハハハ……」
女将はすぐに思い出していた。最初の出会いは横山社長に寄り添って猫のように昼飯を食っていた男だ。相変わらず姿勢の悪さが目に付く、膝を片方に折り曲げて、美那子の側面に寄り添い背中を丸めて斜に挨拶をしてくる様は五年前と変わらないが言葉には威圧的な言い方を感じた。笑顔を流しながら、本質はあの頃と少しも変わってはいないわ、と思う。
「この男にも注いでやってくれ！この猫田の祝いだ、今夜は。…役員になる！」
「それはそれは！猫田さまにはご栄転おめでとうございます。いつもQ銀行の頭取さまや役員の皆さまのおかげで……ご出世された猫田さまにご散財いただけると更にうれしゅうございますわ。」
さらりと言ってのける。このような銀行マンは人の縁(えにし)を磨くための綺麗な金の使い方を知らないのかもしれないわ、少しおだてすぎたかしら？これから、この猫田も寄ってくれるのだろうが、やがてこの料亭が彼の悪巧みの場に使われるのは少し気も咎める……が。
人の出会いを楽しむ女将にとっては未来の人材がすっかり乏しくなったことに一抹の寂しさを覚えるが、ふと最近、活発な会合を主宰して世のゆがみを論じるグループのリーダー、美那子の叔父でジャーナリストの星野駿介の顔が浮んでいた。キラキラと光る瞳、かくしゃくとした風貌と律儀な性格を思い浮かべて、この猫田と頭取や専務の面々とを自然に対比している。すると胸の中のスクリーンに浮かびあがった星野の存在がさらに鮮鋭に煌いてきて未来に微かな希望も見えたような気がしてくる。共有した親しみを柔和な眼で美那子に送り、美那子が笑顔で頷くと、
「ごゆるりと、お過ごし下さいますよう……」
女将が去ると急に座が乱れはじめた。
頭取が一人のコンパニオンに向き合い着物の裾を開いて股座に手を入れて、
「和服にパンティは似合わないぞ！緋色のへこだけでいい！……キミ達の花代にはノーパンギャラが含まれているのだろう！」
「へコ～？…」
「そうだ！下半身に巻きつける奴だ！芸子は色気、色気だぞ！…要するにだ、下着は着けるな！触りがいがない。」
「ダメダメ！おねえさん助けて！…」しつこい攻撃に逃げながら年上の芸者に頼んでいる。
「マミちゃんは若いから、モテモテなのよ。羨ましいわね！頭取さま、わたしじゃおイヤ？」
裾を捲って紅い下襦袢を開いてみせた。
「ワッ！臭うぞ！そのへコ……」
大げさに顔の前で掌を揺らして鼻を鳴らしている。酔眼が緩んで満更でもない様子。
「お願いだから止めてくれ！その〈へこ〉にはキミの屁の匂いがしみ付いている。愛屁去りがたしかな…どれどれ……」
ゆらゆらと立ち上がって、姉さん芸者の裾を両手で開いてまくり、覗き込む。ノーパンの下半身が曝されて陰毛が剝き出しで見えた。
丸井専務、長山が笑い、拍手して喜んでいる。
「これには閉口するな…レデイもいるのにさ」
猫田がそれを見ながら山口美奈子の耳元に囁く。標的にした女の関心を買う為に偽善ぶっていることを美奈子は感じとっている。頭取の秘書として度々宴席に従っているので、酔うと出る頭取のクセは分かっている、まもなく芸子の膝枕で横になり三十分もすると帰る、と言い秘書室長の長山が自宅に御伴して送ることになるのだ。すでに頭取は女に挑む能力も度胸もない、ただみんなの為に座を盛り上げるための余興にすぎないのだ。
それにしても、猫田は胡散臭い、座の乱れに乗じて幾度となく美奈子の手を握り、足の裏や指を摘まんだりしてアタックしてくる。
時折、坂口が厳しい冷めた眼でそれを見ていた。猫田をかわしながら坂口の視線を感じて視線を受け止めた、その時、不意に美那子は全身に冷たい冷水を浴びたような悪寒を覚えた。みるみる鳥肌が白い腕に波のように伝播しはじめている。
そして坂口の背後が暗転し、浮かび上がった想い出深い女性の顔に息を飲んでいた。同郷の親友だった真理子の白い顔だった。
美奈子は愕然として、眼を擦り、もう一度坂口の背後を観察した。
幻影は瞬時に消えて何事も無く酒席の喧騒が身体を包み、部屋の色が戻っている。
ホッとする間にも美奈子の脳裏はある覚悟を固め始めていた。
今度はたちまち鮮やかに親友の真理子の細く美しい顔の表情が次々と胸の中に生れて浮んでくるのだ。五年前肺炎を起して急死したのだが、葬儀の時、真理子の兄は、右目の下にアザを持った男の裏切りにあい衰弱し、肺炎を併発したと告げられたが、どういう裏切りなのかは兄がビデオを持っているので見ないかと言われたことを今、

重く思い出していた。

（二）

黒塗りのセダンから猫田と二人の男が日本橋のゼネコンF組の本社玄関に降り立った。

五月の大型連休の前日、四月三十日午後一時過ぎ。

すがすがしい春の風が吹き抜ける陽気に反して、F組のロビーはひんやりと沈澱しており、正面の受付コーナーには春の征服で出迎える女性社員も座っては居ない。大理石でしつらえたカウンターに一人の老守衛が座っているだけだ。ずり落ちた老眼鏡の奥から三人を追っているだけで何も言わない。

変われば変わるものよ、と猫田は十年前、バブル期に竣工して華々しい披露パーテーに当時の常務と出席したときの模様を思い起し栄枯盛衰を感じて今まさに奮い立っている。

F組にとって、この新社屋に投下した資金も今では大きな債務の負担となっていた。

この会社を自分の才覚で食い尽くすのが仕事なのだ。命絶え絶えで余命幾ばくも無いエサに挑むハイエナのように注意深く四方に神経を張り巡らせてエレベーターに乗り込んだ。

関係外の役員には顔を見られたくなかった。秘書室長の長山と融資審査部長の山本が後に従う。

「潰れる会社とはこんなものよ！君たちも肌で感じろ。寒々しい！受付のチェックもなし、警備員らしいのが居ても、眼が見えていないらしい！…誰の目にも触れないのはこっちにとっても好都合だけど」

二人が苦笑して同調している。

十五階の役員室のフロアーでおりる。役員室専用の受付もあるが此処にも誰も居ない。

長山がすでに何回も来ているから財務担当の篠田常務の部屋は知って居る、彼について行くと廊下の一番奥の右手に常務室があり、ドアにノックを入れると同時に開けた。

「あらら、受付は誰もいませんでしたか？皆さんがお見えになることは言っていたんだが…それは失礼した！お待ちしていました。どうぞ！どうぞ！」

「いや、この方が好都合です。リストラを進めれば仕方ないでしょう。やる気の無い従業員はどんどん辞めて貰うんですな！」

「いや、ホントです。秘書も全て解雇しました。役立たず役員がいま少し居ますが間もなく辞めていくでしょう。立派な個室だけが空き部屋になって行くのでこのフロアーはゴーストフロアーと呼ばれて、先代の幽霊でも出そうな雰囲気で気持ちが悪いものですよ！」

「その幽霊は先代の美人秘書じゃないの？…社長室でいつも、ど派手なパーテーをされていたようで…」

三年前、創業社長のFが銀行団に経営責任を叩かれ始めた矢先に、向かい側の社長室で脳梗塞を起し倒れた、その時秘書の急報で駆けつけた役員達が見たものは美人秘書のパンストと花模様の下着がソファーに投げ置かれて、秘書が社長の頭を抱え込んで泣いている姿に唖然とした、と言う噂話が聴こえてきたものだ。しばらくするとその秘書は噂話に耐えかねて会社を辞め、先代を慕って後追い自殺をしたと言う、が、真実はわからない。

先代が社長室で倒れて東大病院に運ばれ、すぐに死亡したことは事実だったが九十二歳の高齢で夜叉孫娘ほど年齢がかけ離れた秘書とのセックスに夢中な造形にはすこし無理があり何とも気味が悪い。リストラされた役員のタレこみなのか、その後噂話が三流週刊誌で扱われたが、すぐに消えて行ったからF組を追われた役員の妬み記事だったのかも知れない。

「ところで……」猫田が切り出した。

「うちの百五十億についてだが予定通りで良いですな！」

「私もおたくの頭取の言葉を信じて、そのプロセスを造ったからには覚悟は出来ていますよ」篠田の顔が青ざめた。

「所詮、一兆を超える負債の処理はあなた一人で出来るもんじゃないし、あなたには責任もない！どうせ債務超過に落ちた会社は潰さざるをえない。いまさら銀行団が協調し債務免除をしても何の意味も無い。公共事業に頼ってきたこの会社の将来はないし、これが見えない銀行の経営者は経営を継続する資格は無いよ。このままだと、やがてあなたも母体銀行から消えていかざるをえない。いい選択でしたよ！」

「財務の吉田君のことも、合わせて頼みます。彼の協力無しではここまで来れなかった…」

「心配しなさんな！…Sシステム社の横山社長は待っていますよ、ポストを空けて！」

篠田に呼ばれた吉田財務課長が入ってきた。線の細い経理屋タイプで眼鏡の奥の目が怯えたように落ち着かない。バッグから取り出した紙包みをテーブルに置いた。

「Y証券で名義変更を済ませた株券明細です。これは無傷のままです。」

どこからも質権の設定が為されていないと言う。バブル期に受注した貸ビル会社の工事をF組が裏保証し、その会社の社長が所有していた個人の株券を万一のときに代物弁済として補塡させるために預託を受けたもので、すぐにはF組の資産表に出て来なかったものだが、やがてそこの社長が死亡し相続が開始したが、当時の念書に基づいて裁判によって、やっと勝訴しF組の資産として始めて計上したばかりだとぼそぼそと説明している。

「時価評価でいくらある？」

「約二十二億です」

すでにF組の所有していた株の売却分と合わせて百七十億を超えた。これまで、その他の資産株は密かに株式

市場に流して現金化を計り、この金百五十億余りはQ銀行の本店にプールしてある。主力のB銀行が形だけ押さえていた株券だが法的な手続きはふんでいない。

その為にB銀行は、篠田をF組の財務担当の常務取締役として派遣して資産管理と保全の命令を出していたのだ。B銀行から派遣された篠田常務の指示を信じたY証券の担当専務も背任行為に気がつくはずも無い。株式の持合い解消計画を綿密に打ち合わせて長時間にわたって現金化させ、世間を欺く口実でカモフラージュの為に売却代金はQ銀行に振り込ませるとの理屈まで信じさせてきた。

Y証券には秘密事項が外部に漏れることにペナルティを課したので秘密はまもられていると考えていたが株式市場の動きからアナリストが推測を流し始めていた。

大会社の金庫株が流れて相場を崩している、経営に苦しんでいる某ゼネコンではないのか?それは銀行が売らせているのではないのか?業界紙の紙面にも記事が出始めていた。

誰からともなく、すでにQ銀行の抜け駆けで自己債権の回収が行われているのではないか、という噂も飛び始めて、各行の頭取がQ銀行の川口頭取にさぐりを入れ始めていたし、もはや時間的余裕はない、と猫田は判断していた。

「山本君、すぐこれに質権の設定をしなさい。そして確定日付を取るんだ。」

予め用意した契約書に株券明細をつけて融資審査部長の山本が公証人役場に飛び出していった。

「やれやれだ!篠田さん、吉田課長さん、いろいろありがとう!」

猫田は二人に握手し、

「長山君、あれを…」

長山秘書室長が分厚い封筒を猫田に渡す。

「お二人にこれを……どうぞ!明日から連休だから、どこかで骨休めでもしてきてよ!三百万ずつ入っているから…」

二人とも震えながら金を受け取る。

「後の金と就職は、ほとぼりが冷めたら予定通りだ…いつでも連絡してくれ、例の電話かメールでね。」

「お願いします!…あなた方、Q銀行がこれから処理されることは私たちには関係がありません。私たち二人が知っていたことだけは伏せて下さいよ!もし、このことがバレルと背任罪の共同正犯になる。当社の信頼を裏切ることにはいささか罪悪感を覚えるが……」

「当然です。たまたまうちの銀行に金がある、と言う事実だけだ。…騒動になれば、猫田に裏切られた!と、騒いで貰って構わない。」

「そんな、…多分、内部の査問会で私が厳しく詰問されるが、私の無能を証明しますからあなたにはご迷惑はかけない。どうせF組をB銀行が救う気があるのなら公的資金のお世話になればいい、大した金額でもない…」

篠田は呟くように猫田を見ながら、犯してしまった罪の認識を強者の猫田に振っているような言い方だった。金を受け取り、共謀していながら今更なにを!こんな男たちには良い仕事はできないな、Sシステム社に入れても一年とはもつまい、と自分の悪辣さは棚にあげて猫田は考えている。

四月三十日の午後三時、Q銀行のF組の口座から全ての金が消えた。

F組の債務が相殺されたのだった。F組の本社にその内容証明がQ銀行の融資部長名で届き事実が判明するのは五月二日になるだろう。

翌日から三連休のあと債権者、銀行団が慌てふためくさまを想像しながら猫田は本部役員室の窓で暮れてゆく銀座の夜景を眼下にみながら陰湿な笑みを浮かべていた。F組を潰すか潰さないかは他の銀行団の判断にかかる。金融庁には予めQ銀行の抜け駆けは日本金融界の健全化の先鋒だと大義名分を打ち出してネゴができている。後は政府資金を入れてまでF組を救うか否かはB銀行の勝手だ、百七十億位はどうってことはない、事態は何兆円、何十兆円の世界の中の一コマなのだ。最悪の場合は川口頭取の首一つ差し出すだけで事は収まる、後は俺の時代が来るだけだ。丸山専務は頭取の器じゃない。いずれ大株主の連中や横山社長に会わねばなるまい、と将来の城主になる自分の姿を描いていた。

頭取秘書の山口美奈子が入ってきた。スカイブルーのスーツがボディに調和して麗しい。キメの細かいもち肌に長い睫毛の奥の瞳が濡れたようにきらめいている。

「頭取がお呼びです」

猫田はうっとりと美奈子の顔を眺めている。

「これから宴会だろう?…キミも一緒だと楽しいよ!頭取が帰ったあと二次会は僕がいいところに案内してあげるよ、銀座のね、今夜はクラブで遊ぼうよ!」

「申し訳ありません!わたくし今夜は御伴ができません。連休で故郷へ帰りますので…」

「…ほう!それは残念!寂しいな、…どこなの?クニは」

「山形です。」

美奈子の胸には目的が目覚めている。帰郷して真里子の兄に会う予定だ。それによっては次の手を打たねばならない。すでにこの銀行の仕組みや役員の経営の手法には辟易している。特に猫田のやり口にはヘドが出るほど嫌悪感をいだいていた。

このままで良いのか!これが大企業のやり方で正義なのか?そんな筈は無い、人間性の壊れた刷きダメのような会社に未練はなかったが、自分が辞めて行くだけでは納得がいかない何かに苛まれていた。

猫田はこれに気づきようもない。
美奈子のスーツに浮き出したボディラインをなぞりながら想像を膨らませている。
「僕も山形に行きたいな！ゴージャスな温泉ホテルでデートしたいな！」
美奈子は何も答えず出て行った。

（三）

美奈子が啞然とテレビ画面を見ている。両手で眼を覆いたくなる光景がそこには映し出されていた。美奈子のみる真理子は痩せて衰弱している。どう見ても渋谷で最後に会った時の、その真理子ではないような気もしていた。別人であることを願いながらも現実を瞳に照射されて悄然としていた。
全裸で絡み合う男と女の性愛の情景。男も女も水が滴り落ちてベッドのシーツを濡らしている。男の動きは真理子を奴隷のようにあやつり、顔を覆って嫌がる真理子の細い身体を抱き起こし、両足を曲げたり開いたりさせて性行為をいとなんでいる。騎乗位に女の体位を変えて真理子の長い髪を払いのけたとき男の顔が映し出された。
猫田の顔だった。予想通りだったことに美奈子は何度も愕然とした。
猫田の動物的、利己的な性交が見て取れる。性欲を満たす野獣のように挑む姿は人間の愛の行為ではない。
最後にテーブルに紙幣を投げて出て行く男の姿に美奈子は眼をみはり、腹立たしい思いが込み上げて吐き気すらしてきた。
事実を確認したい衝動にかられて真理子の兄、山形県警の巡査をしている洋一の家からビデオを持ってきて衝撃を受けたまま、話も聴きたくて再び兄を訪ねた。
休日は父母の手伝いでサクランボ山で働いていた兄が花を咲かせ始めた樹木の下に椅子を持たせて美奈子を座らせ、当時の話を辛そうに話した。
幼少時代から兄と妹の仲の良さは、美奈子も知っていた。兄は妹の入院の連絡を受けて急いで上京、思いのほか容態が悪いのに驚愕し父母を呼び寄せたが、その到着も間に合わず、たった一人で臨終に立会った。その時、真理子の男に対する深い怨みを知った、高熱にうなされうわ言で何度も男をなじっていた、と言う。
「許せない！あの男は許せない…目の下にアザのある男…汚いヤツ」
「その、彼氏の名前は？どこに勤めているのだよ？」
「分からない……わたし、お金が無かったの……兄ちゃん、ゴメン…ゴメンなさい」
真理子が息を引き取ったあと、兄の洋一は遺品を整理しながらパソコンに打ち込まれた〈新宿、モーテルKでの男は最低！いつか仕返しをしてやる！〉との記述を見て、せめてどんな男が妹の恨みの対象になっているのか、

存在が知りたくて新宿で調査を始めた。モーテルKの存在は直ぐに見つかったが客の秘密に迫るオーナーへの説得は容易ではなかった。妹の直接の死因は肺炎だが職業柄の判断で新宿の刑事の応援を求めてモーテルに設置された防犯用ビデオのチェックをして貰った。山形県警の上司の口利きもあったのと何か薬物に汚染されていたのではないか？と言う兄の疑いに興味を示した刑事はモーテルの社長から消去まえのビデオを提出させて二人で署内のビデオデッキを回して調べ、真理子と男を見つけ出したのだった。しかしチェックのあと〈これは気の毒だけど不倫行為のようで事件にはなりにくい、もし売春行為が立証できればとも思うが妹さんの名誉が守れない、それでもこいつに吐かせますか？片方が死んでいるんじゃ立証が出来ないこともあるが…〉と論議したが、確かに他のビデオの中身も類似した様子を映し出していて都会の現実にふれた洋一は息を飲んでいた。父母には見せられない真理子の醜態をダビング（複写）して持ち帰ったが、この行為には死んだ妹の怨念が兄をそうさせたのかも知れない。
妹の手帳から交際相手を紹介したらしい会社、表向きは結婚相談所の看板を見つけて出向いたが白人のような大女が誰とお付き合いをしているかは報告がないから特定できないし事件で無い限り男の人相だけでは秘密保持の義務があると言い教えてくれない、肺炎で死亡したと言うと驚いて登録した写真を返してきたという。
勤めていた会社では優秀な社員だったが高額なサラ金の借金があることも会社から教えられた。
お金にはかなり困っていたらしく、恥辱に塗れた妹の名誉が調べていくうちにますます汚れていくようでサラ金の借金の支払いを済ませて兄は調査を打ち切った。
「お金のことは何一つ言ってくれなかったから…俺はなにもわからなかった！かわいそうなことをした…」
兄の洋一は涙をこぼした。
「今になっては何の意味も無いけど、東京に憧れて出て行ったのがいけない！水が合わなかったのよ…あんな恥ずかしい思いをして死ぬなんて…心神ともこわれていたのよ、早く帰ってくれば良かったに！」
「ごめんなさい！わたしも知らなかったの…辛抱強かったのよ、真理ちゃんは！悪い男よ、やつは！」
「知って居るの？真理子が付き合っていた、この男を」
黙って首を振る。あえて教えた為に猫田に洋一が復讐を考えても罪つくりになる。いま、どうして猫田に真理子の苦しみを分からせるか？仕返しができるかはわからない。期待も持たせるわけにはいくまい、と考えた。
「ビデオのお陰で男の顔は覚えたから、万一解れば連絡するわ、あんな悪人を神様は許さないと思うわ」
叔父の星野駿介の精悍な顔が浮んでいた。東京に帰ったら相談しなければなるまい。

ジャーナリスト、星野駿介は麹町の専用オフィスで、いつものように卓上に積み上げられた郵便物の整理をはじめていた。

経済の状態は最悪だった。消費が伸びない、設備投資が停滞している。中小企業はバタバタ潰れていく。不動産は下落し、株価も二十年前の水準に落ち込み国民の財産を毎日のように一夜で消し続けていく。その反対に高い税金だけは目減りもしない！

此処まできても与党政治家はいつまでも派閥抗争を繰り返しているだけで国の危機的状況を救おうともしないように映る。野党政治家もことが起こるたびに口先だけで国民の為に日本経済のためと論争しているだけで、この本質が見えていないのか、与党の悪口雑言ばかり、まるで痴話げんかの様相だけで、なにも変わりそうに無い。だからと言っても戦後、復興時代の日本の政治家に甘え育った野党幹部や、人間としての痛みや民衆の苦労を知らない二代目政治家の野党党首の本質も同じように写り、改革を期待する方が、所詮間違っているのだろうが。

デフレスパイラルに完全に入り込み最早小手先だけの経済政策、金融政策では間に合わない。マスコミもそれに輪をかけたようにことの本質、ビジョンを訴えることもなく政治家の個人攻撃ばかりを繰り返し、自浄能力を失いつつある。

「うんざりだよ！」

誰に吐き掛けるでもなく星野はつぶやいた。

「打つ手、打つ手が常に遅い！なぜ、こんな日本になったのか？普通の治療では最早間に合わない、思いきった手術が必要になっている……されど」

際立つエコノミストがいない。ジャーナリストと呼ばれた大半がマスメディアのレポーター、コメンテーターとなり生活のためだけに仕事をしている。平和ボケが続いたために思想は無用、大半が井戸端会議の様相を呈し激しいスキャンダル合戦、個人の資質攻撃、嫌味な言葉を演技の一部にして猿芝居を売り物に視聴率やメディアでの売上を競うのが普通になっている。この中傷行為が、自分と同じ日本人の頭上に唾を吐いていることに気付かない。

果たして民主主義は日本のためになる思想だったのだろうか？

多数決の原理は公平なのだろうか、多数決は本当に正義なのだろうか？ここまで論理がひずみ、倫理、道徳が落ち込んでくると星野は疑問を感じざるを得ない。

少数側は常に多数側に付き従わざるを得ないし悪政の犠牲にならなければならないのか、これを真の自由平等といえるのであろうか。

ふと、星野は見覚えのある封書の名前に目が止まった。

メイの山口美奈子、流れるような書体に美奈子の成長を重ねていた。文字は人を表す、の例え通り、若い世代には珍しく美しい字を書くようになったな、と感じ入りながら内容を読み取っていく。

「悪い虫だ！いや、悪猫か！」

Q銀行で引起している猫田の行状が冷静に書かれていた。人の縁の奇遇に驚いている。美那子もあの男に苦しんでいるのか！

壮絶な死を選んだ星野の親友、D商事の藤田社長の面影が眼に浮ぶ。親友を死に追いやった記憶が鮮明に浮んでくる、涙にくれて遺族らと悲しみ、友人として無力な自分を苛んできた。その悪の張本人が日本の善良な組織をあやつり、侵し始めている、実直な真人間のうめき声が聞えて来るようだ。その他にも、すでに星野の手元には猫田に関する数々の悪行情報がファイルされて最大注意人物としてマークしていた。

「そろそろ退治しなければなるまいか！日本のためにならない！」

美奈子の手紙を読み終えて、同封されたビデオをデッキに差し込んだ。

「人間愛の無いやつに、企業の経営は任せられない、特に金融資本の大切な役割も知らない男は、百害あって一利も無かろう、無意味だ！」

こんな汚い手法や政策がまかり通る世の中だ、今は、金融界の寵児となって悪魔の手先に踊らされているが、このまま放っておくと、やがて手のつけられない日本金融界の厄病神になるに違いない、と星野は半断した。

猫田の女に挑む姿、顔の陰には最近政界を汚濁させ贈賄罪で収監されたK事業団の理事長の悪行に重なって見えた。この男の病原菌に感染した政治家や官僚が日本の進路を汚し経済活動まで阻害し、日本の国民を巻き込んで衰退させようとしている。こんな男を二度とつくってはいけない。どうせ今の日本の裁判では被告らに誰もが納得する重刑を課すことはないだろう。被告人ばかりが保護された弁護制度に歪があるし、これを裁く判事の能力にも限界を感じている。これで良いのか？罪人として数々の悪業が認知されるまでにも侵してきた不誠実な行為に潜在してきたものを白日の下に曝して悪罪の芽を矯正すべきではないのか？いままさに育ちつつある有害の芽を、早期除去して被害の再発を防止すべきではないのか？

法にさえ触れなければ一人の男が放つ非人間的で軽薄な判断、行為は善良な大衆の命を簡単に侵し蝕むでいくのだ、知らず知らずに悪流に流され汚染された川の水に染まり抵抗力を削がれた大衆は汚濁の世界に君臨するピラニアの餌食になって死んでいく魚のように脆いものなのだ。

猫田の悪略で死んでいった経営者の家族、家庭を侵さ

れた者は生涯悲しみ、耐え忍ぶしかない。耐え忍ぶ側には検事もいないし弁護人もいない。精神をゆがめられ、壊される行為には罪はないのだろうか？病に落ち込んでゆく被害者には。精神科医の治療を受けるしか方法がないのか？

だからと言って残された者が憎しみを実行すれば罪になる。

江戸時代の仇討ちは野蛮だ、止め処なく続く因果応報の怨念に歯止めをかけると言う論理で否定された。

そんな論理や倫理、法制史について星野は百も承知している。

汚され、けがされる悪流の源泉を嫡除し浄化しなければ日本の将来はない。星野は決断した。

六月末の株主総会で猫田はQ銀行の取締役に就任した。

さらに総会終了後にただちに取締役会が開催されて猫田は業務執行役員常務に抜てきされた。猫田の人間性に異論をもつ役員もいるのだが、敵対関係をさけることを選択したのか一人として他の役員からの異議も無く東日本エリアの統括と、融資部長を兼任することが決議された。

猫田のF組に対する債権回収とSシステム社に対しての功績が評価されたのは明瞭だった。B銀行主導のもとにF組は民事再生法による延命方法で模索を続けているらしいが、Q銀行、猫田には何の因果関係も追求されることも無く、他の銀行団やマスコミの批判もたいしたこともない、債権の先取り行為自体は当然のことだし、合法的だとの認識を広報室長からコメントを出しても反論する動きも無い。事実が判明すれば腹の煮えくりかえるほどK組の債権者たちは怒り狂うはずだが、B銀行の管理ミスで発生したことは公表できないし、今に至ってはQ銀行に怨みも言えず、川口頭取も責任を追及されて退任を迫られることもなくホッとしていたし、更に丸井専務、猫田の手柄を称え、二人の昇進のポストはこれに報いる論功業賞だったのだ。

秘書室長の長山によって、いち早くそのニュースが秘書室に飛び込んできた。

「猫田常務誕生だよ！わが行で最年少の常務だ。丸井専務は副頭取になる！」

秘書の坂口が美奈子の眼をみて頷いた。何を意味しているか美奈子は了承している。

「人事部から間もなく異動の連絡があるはずです。われわれの分担も少し変わるかもしれない。」

坂口が口を開いた。

「わたしが頭取担当になります。山口さんが猫田常務の専任になります」

「猫田君が早々と頭取におねだりしたようだ…本来は秘書室長のわたしの権限だよ！人事部長からわたしには何

の相談も無く、そうしてくれよ、とさっき電話で命令されたばかりだ。」

秘書室長の長山が口を尖らせた。

「いくら頭取のお気にいりでも、余りに我がままがすぎるよ、新入り役員がね、山口君を狙っている、女癖の悪い人だから…」

「大丈夫ですわ。気をつけていますから、ご心配なく」

美奈子は微笑んで長山に答えた。

「やがて頭取候補ナンバーワンですもの！悪くは言えないわよね！美人はお得だわ……」

別の女性秘書が美奈子に妬みを帯びた声をもらした。

美奈子は黙って首を振り部屋を出て行った。今にわかる時がくるわ、猫田をこれ以上経営に参画させて不幸な人間や企業をつくりたくないために坂口の知恵で人事部の部長に根回しをして猫田の専任秘書になったのだった。取締役人事部長も室長の長山も、陰では猫田の悪口を言うが、自分のポストを守る為には猫田の言いなりになるのは目に見えていたからあえて先手をうって猫田のお好みどおりに美奈子を異動させたのだ。

明日の異動に猫田のほくそえむ顔を想像し、美奈子の気持ちは妙に高ぶっていた。

（四）

七月半ば蒸し暑い陽気に雨が続いていた。梅雨の季節ももうすぐ終わるのだろうか、小雨に煙る銀座の夕暮れを美奈子は常務室の窓から眺めていた。

新人常務の猫田は忙しい毎日を送っていた。美奈子を同行した民間顧客の挨拶回りは一順したが今日の午後は秘書の美奈子は同行しないで金融庁の局長に面会している予定だ。秘書にもさとられないほどの機密の打ち合わせが彼を動かせているに違いない。美奈子に食指を動かす余裕もないほど過密なスケジュールで動いていた。が、毎朝、猫のように美奈子にすり寄って指示を出して来る猫田の身体からは発情している男の体臭がもれて鼻をついていた。美奈子は嫌悪の身震いを押さえ、笑顔をつくってきた。これに気を強くした猫田はチャンスを推し量っているに違いない。

「七時に赤坂の例の場所に来てくれ。長田秘書室長から書類を預かって持ってくることを頼みたい。長田のとこ ろへ行けばわかるようになっているから……キミも宴席には同伴してくれ。それまでは打ち合わせだから来なくていい」

猫田をおびき寄せるまでも無く今晩、赤坂の〈鈴千代〉にこいと言う、美奈子は直感で猫田の計略を読み取った。

星野駿介に計画した通りメールを入れる。料亭の女将にも電話をいれて予約する。

「今夜は重要なお客様です。誰の目にも触れないお部屋でお願いします。」

予め女将と申し合わせた暗号会話でつたえた。中座敷、宴席、奥座敷の三部屋を合わせた秘密部屋だ。昔は政界の大物が女性との密会に使用したと言う、いわくのある部屋を今夜は使用する。当然、猫田は知らないが、その豪華さには自尊心をうずかせるはずだ。

猫田の指示どおり長山室長から分厚い封筒を受け取った。ガムテープで周囲を固められた封書で重い、本のような感触に銀行員としての経験から美奈子は覚っていた。現金の束が横並びに揃えて一千万、ボール紙で挟んで詰っているものだ。金融庁の高官に渡る手筈の物か、と考えたが何食わぬ顔で銀行の手提げ紙袋に無造作に入れて秘書室を出ようとすると、

「坂口をつけようか？…何かあってもいかんな…」

長山の言い方には現金の心配がありありと浮んでいた。ボデイガード代わりに坂口をつけると言う。社用車を使うので問題はないと思うが好都合だ。簡単な打ち合わせができる。

午後六時三十分、坂口と二人が社用車で銀行本部を出た。初夏の夕暮れは遅いが雨のせいでネオンの灯が入り夜の帳に包まれ始めていた。緊張が薄闇の増すごとに灯の色が映えていく速度で二人を包んでいく。いよいよだな、と思うが車中では運転手の手前何も言えない、

「坂口さんは、到着したらこのまま本部に戻ってください」

美奈子は戻って出直せと言っている。

「そうしょう、長山室長に荷物が無事に常務の手元に届いたことを報告しょう」

「よろしくね！常務は局長と食事のあと別のクラブに出かけると思うわ！お忍びになると思うので運転手さんは要らないから…指示してね！」

運転手に対する工作のため、眼で合図を送る。その後のことは心配するなと、美奈子は歯に噛んだような笑顔を投げかけている。猫田の手法はある程度予測できる。酒を飲まされて酩酊したところで強引に、身体を接して来るはずだ。今は下着の上に堅い防貞コルセットをつけていた。

玄関から女将の案内で特別室に通る。

「お一人でかなり酔っているようだわ、料理を運んで気をつけるようにはするからがんばってね！」小声で女将が言う。

「お客様は？」

「すぐにお帰りになりました。」

「一時間もすれば星野先生やメンバーが到着するわ…それまであの男と差し向かいではおいやでしょうが、わたしがお助けしますわ、…でも男衆の恋の手助けは今までいくつもしてきましたが、女の操を守る手助けは初めてだわ…」歩きながら胸を叩いて、大丈夫よ、まかせてね！美那子を案内していく。

ドアを開けると中座敷のフスマに両手を添えた女将が、

「お連れ様がお見えになりました」

襖を開くと猫田がニヤニヤとした顔を向けて飲んでいた。

「ごくろうさん！待っていたよ！」

女将の言う通りすでに酔っている。ぎらついた眼が美奈子の身体にはり付いてくる。

「すぐにお料理のほうをお持ちさせますわ」

女将がテーブルを挟んで相対に美奈子を着席させると出て行った。

女将が控えの自室に入るとテレビのスイッチを入れて遠隔操作で画面を調整し始めた。

特別室の二人の姿が映し出された。

料理が運ばれ猫田は相変わらずピチャピチャ音をたてながら平らげていく。食の姿勢、習貫は余程のきっかけがなければ直らないものだ。今も大銀行の常務の品性はない。

「人の姿を仮りた、化け猫かしら！」

前もって星野が設営した監視カメラに写し出されたテレビ画面を見て女将がつぶやいた。

その時星野が到着し、画面を見ながら、うんざりした顔を女将に向けた。

「この男には料理の心が伝わっていない。野獣が性欲を満たすのと同じだ」

猫田が何を考えているのか、寡黙のまま時が流れていく。たまに飲め、食えと美奈子に催促しているが、美奈子の箸の回数がだんだん落ちている。

美奈子の心境が分かっていたが今は手が出せない。スタッフの到着までいま少しかかるだろう。本部ビルを退社した坂口が裏口を通ってその部屋に帰ってきた。

仲居が出て行き、おおかたの料理が美奈子の前だけに残されたままで、しばらく沈黙していたが今度は猫田がブランデーを氷水で割りながら美奈子に渡し飲めと言う。しばらくすると美奈子が、お手洗いにと言って席を立つ。中座敷の左手がお手洗いになっており襖を閉めた。

その時、猫田が奇妙な行動に出た。自分のお猪口に白い粉を入れて水を入れ指で溶かし始めた。すぐにそのお猪口の液体を奈美子の水割りに注ぎ入れてから、かき回して戻したのだ。

「薬をもったな！汚い手だ！」星野が叫んだ。

「何でしょうか？…」

「ハルシオン、睡眠ざいかもしれない」

美奈子が戻ってくる、何食わぬ表情で自分も水割りをつくり乾杯のポーズで美奈子のグラスに当てて飲ませようとしている。

「今夜はキミと歴史をつくりたい…公私ともにね…」

「……どういう事でしょう」

「財務省の局長がね、俺を金融財政政策委員に推挙してくれた。政府の諮問委員会だが…日本経済の将来を担う重要な役割だ。俺は受けようと思うが、キミの協力も必要だ。多忙になるし、キミとは常に一緒に行動したい。」

それが美奈子とどういう因果関係になるのか、首をかしげた。

「とに角、俺が良くなればキミも恵まれるということだ。すべてに！…まま乾杯してくれ」

美奈子は水割りにくちを付け飲んだ。少しは酔わなければこの男の相手ばかりは疲れて仕方が無い、この冷酷な男のお付き合いを早く終わらせたかったから。

猫田の奥の瞳にニヤリと笑みが浮んだ。布団を敷いた奥座敷の様子が眼にうかぶ。

いよいよ勝負だ！女は金に弱い。女は一回やれば後は俺の言いなりになるものだ。あの絹の布団の上で強い俺の肉棒に狂いまわる美奈子の女体、その姿態の想像が下半身を疼かせて、すぐに猫田の脳天をしびれさせた。

「今夜は酔おう！君が正体不明になっても俺は構わない…」

猫田の仕組んだ薬が美奈子の身体に入っていくさまを見て、伏線をはっている。

「キミとこうやっていると、おれは嬉しいんだ！俺に着いてくれば何の不自由はさせない。この袋に何が入っていると思う？見たいだろう！」

猫田はバリバリと封書体の表紙を破り捨て中身を取り出してテーブルに置いた。美奈子の予測どおりテーブルに現金が積まれていった。

「半分はキミにあげるよ、ほんの手付金だ、五百万ある」

「……」

「心配しなくていい！機密費から出た政界工策費だ、私の裁量でいくらでも使える金だ。俺たちに何の迷惑の掛かるものではないよ。」

「わたしに…なにを？」

「わかっている筈だ、…俺にキミの身体も預けてくれ！君が欲しいのだ！銀行にいる限りの間、期間でいい。…やがて望むなら幸せな結婚もさせよう。」

虫の良い話だ。何と言う高慢ちきなスケベ男だろうか！お金で自分の身体を買おうとしている、しかも銀行の、いや人の金で、どんな神経の持主なのか？猫田の顔を見た。自分に向けられた目は充血した獣の目に似て恐怖を覚える。

瞬間、猫田に食われた真理子の悲しそうな表情が浮んで来た、…がすぐに消えた。消えた真理子の顔を呼び戻そうとしてみたが、すぐに消えていく、それどころか全身から力が抜けていくような気分になりはじめていた。どうしたのかしら！何かがおかしいわ！片手に持った水割りのグラスを見ているが、琥珀色の液体が動きはじめテーブルにこぼれ敷き紙に滲んでいく、すぐに目が霞んできた。山中で靄のなかに一人置かれたような心細い恐怖に包まれ始めていた。

猫田が立ち上がると陽気な足取りで中座敷に消えていく。振り返り美那子を見下ろす眼に笑いの陰が写り、カチッと内部ドアロックの音が響き、手洗いに入って行った。しばらくして戻ると美奈子の脇に座った。

「当分、この部屋に来ないでくれ…」

仲居に室内電話を入れる。

猫田は右手で美奈子の肩を抱く、左手で頭を起してグッタリとした顔に口を近づけていった。

モニターテレビの前の坂口が押し殺した声を吐き出す。

「ちくしょう！破廉恥な奴！」

「よし！突入しよう、これまでだ！猫田を捕獲する！」

星野が到着したスタッフ三名に指示を出した。

「打ち合わせ通りに頼む、坂口くんは車周辺をガードして待つ。人を近づけないように…いいね、女将の家の裏口に僕のベンツがあるから運転手に指示を頼む」

料亭に接した女将の自宅の裏口は他人には判別できない造りになっていた。小竹を生やした裏庭に面した出入口は板塀を切り込み、判別できないように工夫がなされている。

猫田と美那子のいる特別室には女将が誘導して裏庭に通じる秘密の進入口に立った。

「電源を切るわ。いいかしら、用意は」

古い時代、お忍び用の特別室には秘密の出入り口が作られ、さらに女将の自宅の裏口に通じて誰の目に触れることなく出入りできる仕掛けになっているのだった。猫田のような料亭の未熟者には予想もつかないのだ。

「オーケー！行くぞ！」

三人の屈強な若者が従う、星野を慕う自衛隊出身者だった。女将の手で、この部屋だけの電源が切れた。

静かに進入口が開き、暗闇の部屋に忍び込む。奥座敷の向こうに奴がいる。フスマで仕切られた向こうに奈美子を抱えた猫田がこの暗闇の異常は己のための演出だろうと、悦び自分の性欲の発散に燃え始めている。小さな懐中電灯が交錯し無音でフスマの壁に四人が隊列をつくる。暗黒の向こうから猫田が美奈子を求める吐声が激しく聴こえてくる。

「俺の女になれ、キミが好きだ……」

星野が静かに一枚のフスマ障子を滑らせて開けた。

「いやよー、いやだー」弱い声が抵抗していた。

畳をすべる人の動きに合わせて懐中電灯の光を当てた。

猫田が美奈子に被さりながら横たわり抵抗する美奈子の太腿を片手で撫ぜている姿が浮びあがった。

「猫田！そこまでだ！」

星野が叫ぶと同時に猫田の襟首をつかんで、顔面を殴りつけた。バシッ！と暗闇に肉の弾ける音が響き、さら

に頭部に降ろす拳骨の制裁が加えられた。
咄嗟の事態に猫田は手を払い、悲鳴をあげるしかない。光の輪が交錯し美奈子の白い顔を映し出し、隊員が美奈子を抱き起こして保護をすると、他の隊員が星野に呼応して猫田の抵抗を止めるために腹部を蹴り上げた。
「君の悪行もこれまでだ！観念して静かにしろ！静かにしなければお前は、ここで死ぬことになる！」
「だれだ……何者だ…」苦し紛れに叫んでいる猫田に、一人の隊員が鼻を引き上げて開いた口に湿った布が押し込められた。
口元から血を流し、布を咥え、怯えた眼が電照の灯りで揺れていたが、クロロホルムの刺激ですぐに気絶し、後ろに回った別の男が被せた黒い袋の中に包み込まれて消えた。
もう一人の男が猫田の手足をガムテープで固定し動きを止める。
やがて黒い袋に全身を包まれ、捕獲され担ぎ上げられた男が、裏庭の小竹の茂みを通り抜けて裏口に留められたベンツに運び込まれていった。坂口の采配で誰に覚られることもなく星野ら四人も乗り込んだ。
夜の街に消えていくベンツの姿に坂口は頭をさげて見送っていた。ホッと安堵の表情をつくると美奈子のいる部屋へとって返した。
女将がすでにメンバーの医者に連絡を取り、到着を待っている、と告げた。
美奈子は布団に寝かされて静かな寝息をたてていた。

（五）

音もなく開いたドアから星野駿介が入ってきた。すでに六名の人物が半円形のテーブルに襟を正して着席をしていたが駿介の入室と同時に立ち上がり目礼をする。
それにやさしい笑顔で答えて中央の席に着いた。
すぐに一人の男が屈強な二人のスタッフに両腕を獲られて椅子に固定された。
男はもがいていたが、椅子はびくともしない。男は猫田だった。腫れ上がった顔は卑屈な陰をつくり、ゼーゼーと酒臭い息を吐いていた。
「それでは審判をはじめます。そこはあなただけを裁くための被告席です。」
星野が、もがいている男に告げる。
「そのようにムリに動くとその椅子は更にあなたの肉体を苦しめるでしょう。この部屋はあなたを裁く法廷です。すべてがハイテク機器、装置によって運営管理されていますので、一切の現世とは遮断された世界だと考えて頂いて結構です。いまから私たちは、あなたの概念の法律では裁けない被告人、あなた自身をこれから裁くのです。腐り切ったあなたをね！」
円卓の中央から星野駿介が厳かに言い放つ。左右に各

三名、黒いスーツに身を固めた男女が円卓の半分を占めて被告の男に対峙して居並ぶ。
円卓の中芯部に被告席、樹脂製の黒い椅子に固定された男が手錠を嵌められて閉まる腕に恐れて静かになった。映画撮影用に作られた椅子を改造したものだ。
そのルーム、スタジオは地下室らしく窓がなく完全なエアコンデショナーで快適温度に制御されていた。一切の喧騒は耳に聴こえず、蒸し暑い七月の梅雨の時期にしては空気に湿った土の匂いも無い。星野の背後にあるデジタル時計の数字が午前〇時五分を告げていた。
「あなた方は何者です、あなた方は料亭で無理やり私に暴力を振るい、誘拐した。私を誰だと思う！知ってのことか！そして不法監禁している。こんなことをして、キミ等はその罪の重さを知って居るのか？そんな罪人が私を裁く？…正当じゃないな！」
喚きはじめた猫田の口から、激しく飛ぶ唾が照明に浮び、光の中に散乱した。
「その被告席に座ると、大概の発想があなたと同じです。そんなことは百も承知です。私たちは日本の刑法を侵しています。…しかし私たちは日本の刑法ではどうしても裁けない、あなたのような悪人の芽、やがて巨悪に育つかも知れない根本を裁くのです。あなたの価値観での公平、平等はこの法廷にはありません。」
「そんな！…人権侵害だ！弁護人も無いのか！わたしの顧問弁護士を呼んでくれ！」
口から血に濡れた涎を流し、涙と合流している。
「何回も言いますが、私たちの価値観と違う、あなたが予定した弁護人をつけても何の価値も、あなたの利益にもなりません。無機的な人間ロボットのような手法で、人間社会で汚いことをしてきた罪を罪ともしないで被告を救う、あなた方の弁護人はこの法廷では共犯者と同じです。目に余る彼らもやがて同じ運命を辿るでしょう。」
孤立を認識した猫田は怯えた眼でグルグル首を回している、逃げ出そうにも何処にも出口は見当たらない。一面がグレーの丸い壁だ。
全ての装置は電動でコンピューターコントロールされているらしく、グレーの地下ドームには大きなデジタル時計、撮影用の機械装置、ライトとテーブルと空調の窓らしい凹みしか猫田の眼には見えない。自分の座っている椅子にスポットライトがあてられ、両サイドに男が立って監視している。スタジオを経営するオーナーは星野のメンバーの一人で、このスタジオの構造は傑作中の傑作なのだ。
たちまち猫田は異様な雰囲気に飲み込まれていった。いくら観察しても逃げ出せる可能性が無い、状況の不利を悟ったのか、男の眼に、たちまち哀願の表情が浮んだ。
「私はもう帰らなければならないんです。実はわたしの妻は病弱で、わたしの帰りを待っている。息子と娘が受

験期で…」

「女性秘書を犯そうとし、薬まで盛った、あなたも家族を心配されるんですね！はじめて知りました。日頃は家庭をかえり見ることのない金融界の鬼才と恐れられたあなたがね、…いいえ、反対に私たちは金融界の厄病神、と、あなたを呼んでいましたが…」

猫田を囲んだ全員が苦笑を漏らす。厳しい眼光を崩して駿介もニコリと笑って見せたから、被告の猫田の顔はたちまち憐憫を乞う表情に変化する。

「…助けてください。秘書のことは謝ります！でもわたしはまだ何もしてはいない。私は今夜は子供たち顔も見てあげなければいけない。…妻がカゼで寝たきりだし…金が欲しいのならなんとかする…必ず約束する、帰してくれ…頼む！……」

「あなたは最低だ！…また私達はうんざりしましたよ。自分の為にだけのお金の切り札、しかも人の金で自分を守ろうとする、最後は人間として目覚めることができるのか？今のあなたには何を言っても無駄なようだ！お金の価値観が違う！これまで何社、いいえ何百の人と企業が、あなたにそのお金の助けや憐れみを求めましたか？従業員、背後の家族を合わせると何万人の苦しみになる、覚えていますか？いや、そんなことは罪としての概念も無く、被害にあった背後の人々のことも考えたこともないあなたにとっては悲しい記憶どころか、歓喜の思い出になっているのかも知れないが！」

駿介は、遠い記憶を辿るように、天空の星のようにちりばめられた淡いダウンライトに目をやった。

「あなたの悪行の数々は、私の脳裏に焼きついている。温かい人の心に刃を刺し込んで人を蹴落とし死なせ、企業を食い尽くしてきた、許せないことだ！更にあなたの身体に潜む獣の性欲が弱った女性に向けられ、なぶり者にしてきた罪！日本の今の法律では裁けない君の罪は数えきれない！」

「そんな……」

「極端に言えば私たちにとって、あなたの罪は金融界を悪流に染めたこと、あなたに人間としての正常な教育をしてこなかった無作為の関係者も含めてだが！」

「……バカな！何を言っているのかわからない」

「解らないと言うなら数時間も経たない間に無知の邂逅をこの場で実証させてあげます。」

駿介がスタッフに目配せした。処刑室の準備を進めるために。

「私は、この法廷の陪審の香川です、判事を職業にしています。ですが、この法廷はあなたの言い訳を聴くための場ではない。予め申し上げる。私の隣の女性が藤田峰子、あなたが騙して倒産させたD商事の社長夫人です。覚えていますね、その向こうが浜内洋一、キミの野獣のような性的汚辱を受けて、死亡に至った真理子さんの兄

で、今回の陪審の役割を担って頂いた方たちです。三人があなたの犯してきた罪について照査し、私があなたの重罪を認識し処刑を進言したものです。」

猫田に絶望的な表情が表れ、苦しそうに悶えている。

香川が中央の駿介を見て、眼で伺う。駿介が頷いて、香川が後を続ける。

「これらの皆さん、及び他の三名の皆さんも、あなたのために犠牲になった人たちの関係者、遺族の代表者です。だが、ただ単に怨念だけであなたの処刑を見守る方々ではありません。悲しみを乗り越え、リベラルに物事を判別でき、人類の将来に危機感をいだき、悪流に流れる人間社会を再構築するための布石になる人たちです……」

香川が話し終わると一呼吸おいて駿介が凛とした声で告げた。

「Q銀行常務取締役猫田玄一、被告の罪は重い、この罪を洗い清め日本を復活させるために被告、猫田を極刑に処す。処刑は即刻、本法廷の第五処刑室にて行う！被告を連れて行きなさい！」

処刑室にはバーチャルシステムを導入し、スタッフの操作でその部屋の全体が地獄絵に変化する。各種の特撮用に改造された映像用ロボットが次々に猫田の行状を暴露し、肉体と精神に迫る。装着した装置から電流と灼熱、鋭い光が絶え間なく猫田を攻めたて地獄の苦痛を迫り、この精神的ひ弱な猫田には現実の分析をし、忍耐をすることは数分間で不可能になるだろう。最初は泣き喚いて過去にしてきた行為を告白することしか出来ないだろう。さらに論理的に迫る正魔の糾弾声に自己を検証させて、さらにその天罰として肉体と精神の極限を体感させるのだ。この演出は猫田の悪徳に染まった利己を滅却させるまで続く。

「審判長、星野駿介！」

駿介の手が、卓上のシステムを稼動させた。被告席の手錠がパラリとはずれ、側の二名の刑士が、被告の両腕を捕捉し立ち上がらせる。

「無茶くちゃだ！横暴だ！…俺は死にたくない！バカなことは止めてくれ！」

刑士に抱えられて泣きながら叫ぶ。

「無茶をやり、横暴な権力を振るい、馬鹿ばかりをやってきたのは、そのあなた自身でしょうが！」

陪審の藤田峰子が言葉を投げ、部屋の空気を振るわせた。

無言の刑士はロボットのように軽々と抱えた猫田を運ぶ。

「助けてくれ！…お願いです！金ならいくらでも出す！キミらにもやる！金で…金ですましてくれ！」

足をバタつかせながら抵抗している。

「止めてくれ！…」

別のシステムに信号が作動してグレーの壁に嵌められ

たドアが開き、三人の行く手に通路が現われた。泣き声をあげてバタバタと足掻きながら被告は処刑室に連行されていった。

「何だ！これは！……」

演出した絞首刑の処刑台が厳かな光を反射している。処刑台に引き上げられ、首にはベルトが巻かれて両手と両足には電導ラインが結ばれて。

「やめてくれ！死にたくない！死にたくない！……な！なにをするのだ……！」

顔にバーチャルシステムを組みこんだフードが被せられていく。

喚き声は消えた。

すべて擬装された世界の出来事なのだが今の猫田の肉体と精神は虚構の世界に踏み出している自己を検証する余裕はなかった。

間もなく自分の置かれた処刑台に、自己の肉体を吊るされるための白い縄が猫田の首に巻かれた感触に衝撃を受けて、死の予感に更に泣き叫び、足元の床が割れて底なしの地獄に落ちて行く恐怖の現象に悶えるのだ。

そしてフードの中央から次々に眼底に照射される過去の悪行が異次元の世界から激流のように迫り狂い、轟音、電流、閃光の激震が肉体と脳芯に激痛を与え続けることになるだろう。

やがて猫田の全身から溢れて出る、懺悔の声が響き渡り、猫田の犯した獣欲の罪、これまで加担したQ銀行の経営路線の全貌、利己的な官僚との癒着が告白され、全てを吐き出していくことによって体内を駆巡ってきた悪流の毒素が噴出しながら浄化されていく。

「ああ！なんと言うことだ……この清々しさは！」

茫洋とした暗黒の世界を疲れ果ててさまよう肉体に新しい血が巡りめき、やがて自己の深遠に荘厳な青い空を見ることになるだろう。その時はじめて生の歓喜が融合し、初めて利己を捨てた猫田が蘇える。そして無限の後悔に身を焼き焦がしながら犠牲者への謝罪と鎮魂を吐き出していく……。

この現実の全ては映像に収録されて、世界のネットワークを通じて発信され、悪流を浄化するための布石として暗澹とした現世に投げかけられることになるのだが。

おそらく星野駿介が発信しなくても、猫田自身が自ら犯した罪を公表して、自ら懺悔を発信して重い罪を償うことになるだろう。

それは猫田のグループにとっては、猫田が一瞬に命を落とすことよりも、さらに恐ろしいことかもしれない。

第一話　完



霧に包まれていた光(3)

鍋屋次郎

この年、寛永十八年（一六一三）、家康はポルトガルとの貿易独占対策を確立するために、ここ一年間、一時的にキリシタンの活動を見てみないふりをしていた。このような家康の態度に業を煮やした仏僧達の讒言によって、八月に入って、浅草「ライ病院」内をはじめとする厳しいキリシタン弾圧が行われた。

それは近年まれにみる残酷な迫害であった。バテレンと江戸のキリシタンの一部の人達が、ライ患者の生活を少しでも支援しようとして、浅草ライ病院の中に藁で囲った駐在所と礼拝堂を設けて支援活動をしていた。仏僧達はこれを「前年打壊されたフランシスコ会の天主堂の代わりになっていて、一種の要塞のようなものである」と讒言、幕府はこれの取壊しと共に、その場で発見されたキリシタンを全て監禁、二十七人が火炙りの刑によって殉教したと伝えられている。

同時に、膝元の江戸市中は勿論のこと、駿府、上方に対しても、直ちにキリシタン取り締りの強化が示達された。

京都伏見の天主堂のイルマン北川と兄の徳右衛門から、江戸、駿府でのキリシタン弾圧の状況調査を依頼されて東海道を下ってきた清吉は、十一月三日、遠州森町三島神社の大祭を見物した後、常宿の旅篭吉川に着いてから、旅篭の息子亀松に、相良の塩問屋相良屋主人幸兵衛宛の手紙を持たせた。清吉の実兄で、京都伏見の塩問屋主徳右衛門の内儀は相良屋から嫁いでいる。清吉が直接相良屋を訪問しなかったのは、相良屋の内儀お鶴が主人幸兵衛がキリシタンに関わっていることを心配して、清吉の来訪を歓迎していなかったからである。

幸兵衛からの返事は「十一月八日、正午、掛川宿南の北城山大日寺境内で待て」というもので、清吉は既に半

刻くらい前から境内の大銀杏の木に凭れて幸兵衛を待っていた。

やがて幸兵衛がやってきて

「今、駿府ご城下ではキリシタン摘発が厳しく、過去キリシタンであった者の親戚縁者まで虱潰しに尋問していると聞いている。今、ご城下に入るのは危険だ。清吉さん、安全な隠れ家を教えるからこの手紙をもって貴方が直接行きなさい。それは、安倍川の手前丸子宿からご城下に入らないで安部街道を上り梅ヶ島街道に入ったところに樵小屋がある。そこに喜作さんという樵がいる。そこに暫く厄介になりなさい。そこから動かなくても駿府の情報はある程度入手できるだろう」

と言って、紹介の手紙と共に

「喜作さんにこれを渡してくれ」

と、塩と一包みの魚の干物を清吉に渡した。そして続けて

「喜作さんは以前は小笠原様のご家来で、今でも熱心なキリシタンだ。今、樵小屋に住んで、落ち延びてくるキリシタンの連絡を密かに取っている。江戸と上方との連絡も喜作さんに負うところが多いと聞いている。暫くの間、貴方も樵の仕事を手伝って情報を待つことだ」

幸兵衛と別れた清吉は、旅篭吉川には戻らないでそのまま東海道を下りその日は島田の宿で泊まり、翌日朝早く出て、夕刻近くなって梅ヶ島街道の樵小屋を見つけたが喜作はいなかった。

あたりが暗くなってきた頃帰ってきた喜作は、清吉が持ってきた紹介状に目を通すと、厳しい表情で

「安心して暫くここで過ごしなさい。焦って外に出てはいけない。ここから半丁ばかり入ったところに二つの小屋がある。その一つにはバテレンのシモン様が居られる。貴方は空いている方の小屋で過ごしなさい。煙と大きな話声は禁物だ。食事と水は儂が届ける。昼間は樵の仕事を手伝いなさい。仕事場はずっと山奥で誰も人は来ない。煙を出して煮炊きするのはいつもそこでやる。近くの谷川に水もある」

「それから」と続けて

「貴方の小屋には布団はない。勿論シモン様の小屋にもない。もしも誰かが覗いて、人間が住んでいる気配が感じられてはいけない。藁の中に潜って寝なさい。藁はたくさんある。火の気は一切使ってはならない。これから寒くなるので、夜は早く寝なさい」

「それから、人間の気配を消すために、大便は五寸以上深い穴を掘ってその中にして、後は土をかぶせて、その上を枯れ葉で覆っておきなさい。小便は草むらでしなさい。土の上ですると濡れた跡が残る」

潅木の生い茂る灯り一つない闇の中を喜作に導かれて

歩いてゆくと小さな小屋があった。喜作は「小屋の中は藁だけだ」と言っていたが手探りであちこち触ってみても、所狭しと藁が敷かれ、また片隅に積んであることがわかった。

生まれて初めて「藁布団」に寝たが案外暖かい。だが、これからのことを考えると不安が募りとても寝付けない。小屋の外は静寂そのものだ。

小屋の中が薄明るくなってきた。起き出して外に出ると潅木の中に、樵姿をして手拭いで頬被りをした大男が、跪いて頭を垂れ、胸の前で両手を組み、何かぶつぶつ言っている。清吉には、喜作から聞いたバテレンのシモンが祈っていることが直ぐわかった。

朝日が差してきた頃喜作がやってきて、清吉をシモンの小屋に連れて行った。喜作が二人を紹介した。と言っても名前を教えただけだった。頬被りを外したシモンは、髪は赤茶けていて後ろで束ね、顔はやや赤ら顔で鼻が高く、いかにもバテレンの顔であった。三人は喜作が持ってきた握り飯と沢庵で朝食をとった。シモンは握り飯に手を出す前、喜作と一緒に短く祈った。

朝食を済ませた三人は、喜作の先導で山の奥に出かけ、そこで立木を切り、枝を払い、長さ二間の丸太を作った。喜作の持ってきた衣類で樵姿になっている清吉は、労働になれるまで二～三日かかった。

単純な日々を過ごしている間に何日か経った。清吉は一人暗闇の小屋の中でシモンのことを思っていた。食前には必ず祈り、朝と夕方、毎日聖書を開き、昼は清吉以上に働き、飲み水は三人分を率先して谷川に汲みに行き、態度は清吉に対しても謙虚で、清吉は今までこのような人に出会ったことはなかった。

次の日、夕方から雨が激しく降り出した。喜作は雨雲の動きをみて

「この様子では二～三日は降り続くだろう。骨休みをしなさい」

と言ってさっさと自分の小屋に帰って行った。

清吉は片言の日本語を話すシモンにいろいろと聞きたいと思ったので、雨の中を喜作のところに行き許しを願った。喜作はそれを待っていたかのように

「いつもの仕事場の向こうに竹薮がある。その奥に雨露しのげる程度の小屋がある。そこなら誰も近づいてこないから、シモン様にいろいろとお聞きするがよかろう」

と許してくれた。更に続けて

「私は明日駿府のご城下に行って来る。江戸では大変なことがあったらしいが、よく聞いて、これからのことを

考えよう。場合によっては泊まってくるかもしれないが、天気になったらシモン様と仕事をしていてくれ」

と言いながら「聖書ルカ伝」の口述を書き留めた綴りを清吉に渡し

「シモン様によく教えていただきなさい」

と言って初めて笑顔を見せた。

喜作が言ったとおり次の日は終日雨だった。清吉は初めてシモンと二人きりで竹藪の奥の小さな小屋で過ごした。シモンは最初、清吉が京都伏見天主堂の神父から聞いているキリシタンの知識について驚いた様子であったが、やがて

「清吉さん、貴方はキリシタンについて知識は持っているが、これからは信仰という最も大切な根本的なことを学びましょう。人間の生まれながらにして持っている罪について考えましょう。神様はそのように罪深い私たちを愛して下さっています。そして私たちは神様の前で謙虚な人間になりましょう」

と片言の日本語で一生懸命に語った。

シモンは清吉を見つめながら、人は誰でも罪を負っている。極端に言えば、己を捨てて人を愛することができなければ、神様の前で罪を犯していることになる。罪の最も具体的な説明として十戒の項目について説明し、十字架のイエスと神の愛について喜作が貸してくれたルカ伝の口述筆記の綴りからあちこちの箇所を示しながら、飽くことなく熱心に語り続けた。

夕闇も迫った頃、シモンは

「清吉さん、一緒にお祈りしましょう」

と言って祈り始めた。

「聖なる神、今日一日、この僕に、清吉さんと神様の愛について語り合うことが許されましたことを感謝します。清吉さんが神様を信じることが出来る日が一日も早く来ますようにお導き下さい。駿府に出かけている喜作さんの道中の安全をお守り下さい。今日、私が犯しました罪をお許し下さい。この祈りを御前に捧げます。アーメン」

祈り終わって

「清吉さん、明日も雨だろうから、神様が人間に守るように示してくださった十戒について一つ一つ学びましょう」

と言って、喜作の置いていった握り飯の夕飯を取り出した。

次の日、夕刻には雨は上がり、シモンと清吉はそれぞれの小屋に戻ったが、喜作はまだ帰っていなかった。夜も大分更けてから戻った喜作は二人を自分の小屋に招き

「今度の江戸でのキリシタン弾圧は尋常ではない。公方様もいよいよ徹底的にキリシタン根絶を考えている様子だ。江戸では何人も火炙りの刑で殉教したらしい。斬首された人も何人かいるそうだ。駿府のご城下でも厳しい詮索が行われ、先に転んだ人達のところまでキリシタン探索の手が回っている」

ここまで言って、怒りがこみ上げてきたのか顔を紅潮させて

「神父様やイルマン様達が、ライ病院にいる人達のお世話をしている尊いお姿を。なんと言うことだ。幕府は人間ではない。犬畜生にも劣る」

と吐き捨てるように言って

「でも江戸で一番偉いソテロ神父様は、仙台の伊達様が江戸から仙台へお連れになったそうだ。それに対して幕府は黙っているそうだが、幕府が伊達様を攻めなければよいが」

シモンと清吉は目を丸くして喜作の言うことを聞いている。喜作は

「この江戸での状況が、どこまで上方に伝えられているかが問題だ。お上は、江戸からの指令で上方にも徹底的な弾圧をさせているだろう。既に遅いかもしれないが至急お伝えしなければならない」

ここまで言って、大きなため息をついて

「シモン様、夜だけ歩くことは出来ますか。貴方は昼歩いてはいけない。清吉さん、シモン様を上方まで案内していただけますか。駿府の御領下を抜ければ警戒の役人も少なくなるでしょう。遠江、三河も東海道を通らなければ大丈夫でしょう。ここから梅ヶ島街道を上って大日峠から井川に抜けて、川根に下り、山道を西に向かって秋葉街道に出る。そこから塩の道を伝って天竜川の上流を渡って三河の奥に出て行く道ならば大丈夫でしょう。清吉さん、貴方が来てくれているのは神様の助けです。宜しく頼みます。秋葉街道に出るまでは私が案内しましょう」

喜作がここまで一気に言うと、シモンは

「喜作さん、どうも有り難う。清吉さん、一緒に行ってください。お願いします。一日も早く上方の人達に伝えたいです」

それから二日後の朝、暗いうちに三人は大日峠を目指して歩き出した。

三人の足ごしらえは、喜作特製足袋に雁皮（ジンチョウゲ科の低木、樹皮の繊維は強く、和紙の原料となる）の繊維を編み込んだ草鞋履き、それぞれ三足の草鞋を腰に下げ、秋葉街道手前までは昼歩くことにした。

川根から家山を通り大日山手前の金剛院の坊にたどり着いたのは翌日の夕方であった。この坊には誰もいない。辺りを見渡したところ、この山中の人里離れた坊は、本堂や庫裏からは大分離れているので誰も近づいて来る気

配はない。

翌朝早く清吉は、喜作とシモンをその坊に残して秋葉街道に出て、三倉村から太田川を下り旅篭吉川に飛び込んだ。そして、明日夜、離れの一室にシモンと泊まることの了解を旅篭の主留蔵に取り付けた。更に、外から案内を乞わずに裏の木戸から入れるようにしておくことも依頼した。

次の日、喜作は朝早く、出発して来た道を戻っていった。シモンと清吉は夕方になるのを待ってその坊を出て、夜更けてから旅篭吉川の離れに飛び込んだ。

部屋の中には灯りはなかったが、火鉢の火が燃え盛り、その灰火の灯りで、闇に慣れた二人には部屋の状況が何とか分かった。土瓶に触ると中には熱い湯が入っていた。蒲団も二組敷かれていて、清吉は半月ぶりに蒲団の中で身体を横たえることが出来ると思うと、一挙に疲れを感じた。

その時、庭先に人が歩く気配を感じて二人は息を詰めた。一寸間を置いて、押し殺した声で

「旦那様、留蔵でございます。今晩も明日の晩もお客は一人もとっていません。どうぞ安心してごゆっくりと旅のお疲れを休めてください。お風呂は明日朝沸かします」

と言って、音もなく去っていった。

清吉はシモンと共に蒲団の上に跪き、感謝の祈りをしてから蒲団に入った。

なかなか寝つかれない。シモンも寝つかれないのか寝返りを何度もしている。清吉は闇の中で、この半月間を振り返り、自分の気持ちの持ち方が、何か素直になっている自分を不思議に感じていた。しかしながら、喜作が駿府から戻ってからの話を思い浮かべ

「キリシタンの神様って本当に居るのだろうか。本当に居るのなら、何でキリシタンがこんなに酷い目に会わなければならないのだろうか。困っている人のお世話をしたり、よいことばかりして何も悪いことはしていない人達のに。どうしてキリシタンの神様は助けないのだろうか」

の疑問を、心のどこかで払拭出来ない自分を感じていた。

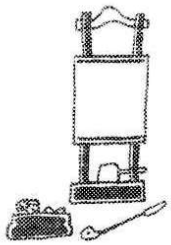
（つづく）

（注：文中の「ライ病院」の表現は、レオン・パジェス著　日本切支丹宗門史　岩波書店刊の表現をそのまま引用しました）

報徳の人

二宮尊徳（その三）

三戸岡道夫



（六）奉公

生家の復興をなした金次郎は、二十五歳のときには小作米を三十三俵一斗、二十六歳のときには小作米を三十八俵二斗を得るという、立派な自作農となった。

しかし金次郎はそれに安んじておらず、小田原藩士岩瀬佐兵衛の日雇い奉公の後は、二百石取りの慎島総右衛門のところへ奉公に出た。そして米や薪の売買、米や金の貸付など、相変らず八面六臂の仕事をしていると、薪売りに出入りしている邸の中から、いつも読書の声が聞えてくる家があった。学問好きの金次郎には、その読書の声の絶えない邸がなんとなく気になっていたが、ある日のその邸で、

（若党を求めている）

ということを耳にしたのである。それが小田原藩の家老、千二百石の服部十郎兵衛の邸だった。

金次郎はただちに応募して、服部家へ奉公した。文化九年（一八一二）、金次郎が二十六歳のときである。

服部家への奉公はもちろん給金取りが目的であったが、しかし今回はそれだけではなかった。服部家の中に流れている学問の雰囲気に金次郎は魅せられたのである。

服部家には三人の男の子供があった。三人の子供はよく学問にはげみ、いつも邸の中から聞えている読書の声は、この三人の子供の声だったのである。金次郎はその三人の子供付きの若党となったわけで、学問好きの金次郎にとっては願ってもない奉公だった。

金次郎は三人の子供が学問所へ通うお供をした。そして学問所で子供たちが勉強している時は、講堂の窓の下

に立って、洩れ聞えてくる講義を聞き、自分なりに理解をした。また昼間の勉強が終り、家に帰って、夜、子供たちが勉強するときにも、近くに座ってじっとこれを聞き、よくこれを暗記した。

この年に金次郎は「経典余師」を自ら二朱で買入れて勉強している。経典余師は四書の俗解で十巻物である。当時の小田原藩主は大久保忠眞であるが、小田原藩の藩校はこの忠眞の時代になって開かれ、藩の子弟に、はじめて経書の公式修学が始められていた。したがって金次郎は服部家へ奉公することによって、同じ学問を、公式の学問所ではないけれども、学ぶことができたわけであった。

こうして四書五経を中心とした学問が自然に金次郎の中に吸収されていったわけで、それにつれて夜の勉強も、ただ子供たちの勉学の席に座っているだけでなくて、子供たちの復習の助言をしたり、勉学の相手をもつとめるようになっていった。

服部家での金次郎の仕事は、最初はこうした子供たちの勉学の相手であったが、そのうちに服部家の中で金貸しも始めるようになった。

武家は外から見ると立派な格式でいかめしく、裕福に見えるが、その内部に入ってみると、その逆であることが金次郎にわかった。服部家にも彪大な借金があるようで、財政は火の車であり、その影響を受けて、仕える用人、奉公人たちの懐も苦しかった。

そんなある日、服部家の用人である関谷周介から、

「少し金を用立ててはくれまいか」

と頼まれた。金次郎があちこちで金貸しをやり、金のあるのを聞いていたからかもしれない。

「関谷さまなら信用がおけます。結構でございます」

そう言って金次郎は周介へ二分ほど貸し、これがきっかけとなってその後も度々貸すようになった。もちろん用人に貸すといっても利息はちゃんと取ったし、期日にはきちんと返済してもらった。これがすなわち信用というものである。そしてこの評判が服部家の子供たちの耳へも届いたのであろう、やがて嫡男の服部清兵衛へも四両二分の金を貸すようになった。すなわち金次郎は、小田原藩の家老の嫡男にまで金を貸すようになったわけである。

こうしたニュースはまたたく間に服部家の中にひろがり、服部家の子弟や用人だけでなく、仲間や女中たちまでにも金を貸すようになった。

ある時一人の女中が、借金の申込みにやってきた。

「いいですよ、お貸ししましょう。でも、どうやって返すのですか」

「お給金で返します」

「お給金はどのくらい貰っているのかね」

すると女中は急にうつむいて黙ってしまった。金次郎が、

「どうしたのかね」

とたずねてみると、女中は小さな声で、

「実はお給金はかなり先まで前借りして、すべて親に渡してしまっているのです」

とため息をつき、絶望的な眼で金次郎の顔を見た。金次郎はしばらく考えていたが、やがてにっこり笑うと、

「お給金で返せなくても、いい方法がありますよ」

「えっ、ほんとうですか」

女中は驚き、眼を輝やかせた。

「あなたの仕事は台所でしたね」

「はい、そうです」

「それなら毎日ご飯を炊いていますね。そのとき使う薪を節約して、それで返せばいい」

「えっ、薪で？」

女中には意味がわからなかった。

「たとえばご飯を炊くのに五本の薪を使っていたら、これを三本で炊けるように工夫するのです。そしたら薪が二本節約できるではありませんか。そしたらその二本をわたしが買ってあげます。そうすれば返すお金が出来るではありませんか」

「そうですね」

と女中は目を輝やかせたが、

「でも…」

と自信なさそうであった。金次郎は、

「あなたがいまやっている炊き方では薪は節約できません。その秘訣を教えましょう。五本で炊いていたのを三本にするには、まず鍋の底についている鍋炭を落すことです。そうすれば薪の燃焼がよくなります」

（なるほど）

というように女中はうなずいた。

「次に三本の薪は、火が鍋の底に丸く当るように置く。すると薪は完全燃焼して煙も出ず、火が鍋の底によく当ります。そうすれば薪を五本使わなくても三本ですみ、二本が節約できます。一日では薪二本と思うかもしれないが、これが十日になれば二十本、百日になれば二百本の薪が節約できるではありませんか」

口にこそ出さないが、これこそ金次郎が心の奥に秘めている積少為大（小を積んで大を為す）の理念であった。

「わかりました。すぐやってみます」

「薪が完全燃焼すると、残り火の火力も強く、するとよい消炭が出来ます。これであとのお惣菜ぐらいは十分煮ることができますよ。こうして節約した薪は毎月わたしが買ってあげますから、そのお金で返せばいい。ではお金をお貸ししましょう」

といって、金次郎は金を貸した。女中はうれし涙にくれるとともに、これまで考えてもみなかったご飯の炊き

方、薪の節約方法を教えられて、なにか眼の前に別の世界が展けたように感じ、台所仕事にやり甲斐を感ずるようになった。

金次郎の節約は『けち』というのではなくて、それぞれの物の本質に従ってその持味を生かしていく（物の徳を生かす）ことが倹約となり、生活の合理化になるという、後の『報徳の精神』につながる考え方であった。そしてその合理化が積もり積って大きな経済的効果となり、自分の上に還ってくるのである。こうして金次郎は、服部家でいっしょに働く下男や女中たちに、倹約のたのしさ、働くよろこびを教えたのである。

節約の利得はご飯たきの薪だけではなかった。女中や下男が元結（もとゆい）や髪油を買うのを、金次郎がまとめて買ってやった。金次郎が買うと安く買える上に、それまでの品物より一級下のものを、さらに安く買ったのである。そうして安くなった分だけ金次郎はずっと貯金しておいてやり、彼等が勤めをやめて家へ帰るときなどに、本人からの預り物として返してやったのである。

服部家に仕える下男や女中たちは、いずれも親兄弟をかかえて、家計を助けるために奉公に来ているのであるから、金次郎の金銭面からの助けは、非常な助けとなった。

だから金次郎はこうしたことの外にも、彼等が困っていれば金を貸し、また無駄使いをしないようにと、給金の一部を金次郎のところに預けたりもした。金次郎は預った金を他へ貸して利子をふやしてやり、

（金次郎に金を預ければ安全で、確実に利子がふえる）

とよろこばれた。金次郎はいわば銀行のような役目を服部家の中で果したのである。その結果、一人一人の生活設計まで考えてやり、借金の返済方法から、将来にそなえての貯蓄計画の相談などにも乗るという、生活コンサルトの役目まで引受けるようになったのである。

（七）五常講貸金

金を貸したり、用立てするとき、当初は金次郎の貯えた金でやっていたのだが、金貸しが活発になるにつれて、節約した金や、給金を倹約して金次郎に預けるなど、いろいろな金が金次郎のところに集るようになった。自分の金と、他人の金とが混り合い、複雑になってきた。そろそろ、

（個人の能力と、個人の財力でやる限界がきたな）

と金次郎は思った。

また借りる人間もふえてきたので、借主の管理ということも必要になってきた。借主の管理とは一口に言えば、借りた人がちゃんと金を返すかどうか、ということである。金をちゃんと返す人間であるかどうか、その見きわめ方が、これまでの金貸しの経験の中から、金次郎にはわかりかけていた。それは一口に言えば、

（人間の信用）

である。その信用をどうやって築くか、それを確認するか。これまでは金次郎が借主の一人一人に目をつけて信用を確認してきたが、それが大勢になってきたので、とても一人の力では出来なくなった。

（個人を越えた組織的なものでやる必要がある）

と金次郎は考えた。そして考え出されたのが、

（五常講貸金）

という金融システムであった。

それにはまず貸金の源泉となる基金を、金次郎の個人資産と別に管理する必要があった。別といっても、もちろん金次郎の出資する金が中心になるのではあるが、その金へ人々が、生活の合理化や、薪や油の節約など、日常の工夫で生み出した金や、毎月の給金を少しずつ貯金した金などを出資させて、貸付の元金にし、必要な人々に貸すという相互扶助金融制度であった。

すなわち金次郎の個人の金を貸すのでなく、皆の金を、皆へ貸すのである。個人金融から、団体金融へとでもいえばよかろうか。この方が、発展性があり、規模も大きくなるだろう。

すると今度は個人の金を貸すのではなく、皆の金を貸すのであるから、これまで以上に確実に返済されなくてはならない。金次郎個人の金であれば、もし返済されなくても『まあ仕方がない』と自分があきらめればそれで済むが、皆の金を貸すとなれば、そうはいかない。『確実に返済する』という約束が絶対条件になる。この『約束を守る』というのが信用であり、そのために金次郎の考えたのが五常であった。

五常とは人間の行なうべき道として、儒教が定めた根本原理で、仁、義、礼、智、信の五つの徳である。この五つの徳を守る人間であれば信用が置け、安心して金が貸せられるという考え方であった。

その考え方をもう少し細かく見てみると、金の貸借には確実に約束を守ることが大切で、これが『信』である。

金の貸借には、金の余裕のある人が、ない人へ、金を差し出すことが必要で、これが『仁』である。

借りた人は約束を守ってまちがいなく返済する、これが『義』である。

借りた人は、貸してもらったことに感謝する、これが『礼』である。

また金を借りたら一生懸命働いて、どうしたらはやく返済できるかを努力工夫する、これが『智』である。

そしてこの五つの徳を守ることができる人だけが基金を借りることが出来るわけであり、そういう意味で、

（五常講貸金）

と名前をつけたのである。

言ってみれば人間の信頼関係を基にした、回収不能がない金融制度であり、物を担保に金を貸すのではなく、人の心を担保に金を貸すのである。貸借関係の信頼を崩さないためには、このような倫理的な自覚と、相互に規制する連帯的な責任制度が必要だったのである（晩年になって完成した二宮金次郎の教えは、一口にいうと経済と道徳の一致であるが、その原点はこの五常講貸金にあるといっていい）。

そして金次郎はこの貸出基金に『聖人御伝授の金』という名前をつけた。うっかり踏み倒しなどできない言葉の響きを、意識的に使ったのである。

さらに五常講貸金はそのような精神の相互扶助金融制度であったので、あえて利息は取らなかった。いわば現代の信用組合の元祖のようなものだった、といえばよかろうか。金次郎はこの五常講貸金のために、

（五常講真木手段金帳）

という帳簿を作って、貸金の記帳を行った。『真木』は『薪』に通ずる言葉で、この五常講の発想の原点が、ご飯を炊く薪の節約にあることを示している。

この帳簿は文化十一年（一八一四）三月五日、金次郎二十八歳のとき、すなわち服部家に奉公して三年目に作られている。そして五月三日に、入金の第一号が記入されている。それには「別所村田植一人」と書かれているが、これは金次郎が服部家から休暇をもらって別所村へ田植えの日雇いに行き、そこでもらった賃金を、五常講貸金の基金へ入金したからである。

こうして金次郎の熱心な勧誘が功を奏して、五常講へは次々と加入者がふえ、十一月になると伴七という者が加入した。そして翌年（文化十二年）九月には、『槇倹約からくり糸』と題して、おとめ、おきよ、おまき、倉蔵などへ貸付がなされた。また、平蔵や金蔵へは真木代貸付もあり、また『夜遊び法度からくり』と題して、藁代が貸付けられている。

「槇倹約からくり糸」とは、薪を節約して貯めた金で返済せよ、「夜遊び法度からくり」とは、夜遊びをやめた金で返済せよ、という意味である。

また五常講へは、下男、下女たちだけでなく、次第に服部家の、関屋、藤太夫、源二郎などといった家中の用人も入るようになり、五常講には、服部家の用人から下女にいたるまで大勢の人間が参加したのである。

こうして金次郎は五常講によって、女中たちには飯の焚き方、薪炭の節約など、用人から仲間にいたるまで、生活指導をし、返済財源を作らせることまでしたのである。（こうして五常講はその後五年間、文政三年までつづくのであるが、五常講の会員は十七名に及んだ。なお、五常講貸金は金を借りるだけでなく、金を預けてふやすという役目もしたわけであり、ある心掛けのいい女中は五常講に毎月の給金を預けて利子を稼ぎ、最後は十五両

もの大金にふやしたということであった）

このように金次郎は服部家で、子弟の勉学の相手をしたり、家中の者の金融の面倒を見ていたが、服部家へ奉公して三年目の文化十一年（一八一四）に、弟の友吉が家へ帰ってきた。十二年前に母が死んで一家離散したとき、友吉は母の実家である曽我別所村の川久保家へ預けられていたのであるが、その友吉もはや二十五歳となり、立派な青年に成長した。いつまでも他家の世話にならずに、生家へ帰り、兄の金次郎とともに自立の道を歩もうとしたのである。

そこで金次郎も友吉とともに、もう一段の生家の復興と隆盛を願って、その翌年、すなわち文化十二年（一八一五）、二十九歳のとき、ふたたび栢山村の自宅へ帰った。

（八）結　婚

弟の友吉はすでに、三、四年前から、ときどき生家に帰ってきては、金次郎の代りに酒匂川の川普請に出たり、農作業などにも従事していた。だから半ば生家へ足をふみ入れていたようなものであったが、友吉と二人で生家に落着いてみると、金次郎の胸の中には、あらためて兄弟二人で生家の家業にいそしむ喜びと、希望が溢れてく

るのだった。

だが、そうなってもまだ金次郎の中に尾を引いているのは、服部家の財政のことだった。服部家に仕える人々が金に困っているように、服部家自身が、家老の家柄とはいえ、借金の山で、財政に困窮していた。

奉公人の間に五常講貸金の制度を作ったように、

（服部家を救うのに何かいい方法はないだろうか）

という思いが、農作業のあい間に金次郎の頭をかすめるのだった。

「兄さん、やめた奉公先のことを、そこまで考える必要はないんじゃありませんか」

と友吉は言うのだが、金次郎の気持はそうはいかなかった。奉公していた三年間のあいだに、金次郎は服部家の財政の問題点を正確に摑んでいたので、工夫すべき点、改革する方法、こうやれば立ち直れるというやり方などを、金次郎は金次郎なりに摑んでいたのである。

それで自宅へ帰った文化十二年の暮に、経費の節減などを中心とした服部家の再建整理の計画書を自分なりに作り、

（御家政取直趣法帳）

と題して服部家へ提出した（しかし服部家ではすぐこれに取掛らず、実施に移されたのは三年先であった）

すると翌年（文化十三年）の正月のことである。二宮

一族の親族協議があり、友吉が、伯父萬兵衛の本家にあたる三郎左衛門の跡取りとして、養子になることに決った。

せっかく兄弟二人が一つ屋根の下に住み、これから力を合わせて家業隆盛をと思っていた矢先である。それがふたたび離れ離れになるのである。その点は残念であったが、しかし養子の話は友吉にとってもいい話である。承諾する以外にない。

こうして一年間ばかりの兄弟一緒の短い生活であったが、それに別れを告げ、友吉はふたたび金次郎のところから去っていった。

金次郎はふたたび一人になり、一人で荒地の開墾や田畑の耕作に精を出し、また田畑の買入れにも努力していった。

これまで金次郎は親戚の者たちから結婚をすすめられていたが、耳を貸さなかった。しかし考えてみれば金次郎もすでに三十歳である。とっくに適齢期をすぎている。それに念願の生家の復興も果たした。

それにこれから苦楽を共にしようとした弟の友吉も急にいなくなり、淋しくなってしまった。そろそろ潮時かもしれない。

金次郎の胸の中には一人の娘の名前があった。金次郎が服部家に奉公しているとき、中村倉蔵という仲間(ちゅうげん)がいて、仲よくしていたが、その倉蔵から、

「おれの妹を嫁にもらってくれないか」

と言われていたのである。その時はまだまだ早いと思って返事をしてなかったのだが、

（これに決めよう）

と金次郎は思った。

こうして翌年（文化十四年）の二月二十八日、倉蔵の妹である、隣村堀之内村の中島彌之右衛門の娘キノと結婚した。金次郎は三十一歳、キノは十九歳であった。

金次郎は家庭を持った上に、この年（文化十四年）には所有田畑も三町八反余り（約三・八ヘクタール）に達し、村内で二番目といわれる堂々たる自作農になったのである。

こうして経済的に安定し、家庭に落着くと、金次郎は村の風紀をよくするために、村の若者たちを集めて、話し合いの会などを開いた。

その会では新妻のキノが作った桜飯(さくらめし)を食べさせ、金次郎が訓話をしたり、また若者たちと話し合うのだった。桜飯とは、醤油を少し入れて味をつけた茶飯のようなもので、若者たちは話を聞くこともさることながら、この桜飯を食べるのもたのしみの一つなのだった。

（九）服部家仕法

貧困のうちに父母を亡くし、一家離散した金次郎が、腕一本で村内で二番といわれる大地主に復興したのを、村人たちは驚異の眼で見た。金次郎はこのまま栢山村に落着くかに見えた。

しかし世間が金次郎をそうはさせなかった。ふたたび服部家から呼び出しがあったからである。今度の呼び出しは、服部家への奉公ではなかった。服部家の財政再建のためであった。

当時の世相は、十一代将軍家斉の豪華な生活のためもあって、徳川幕府の財政はますます窮迫し、それに従って各藩も財政難に苦しんでいた。

小田原藩も同様で、納米を抵当にした大阪の倉宿から借入れた金が巨額に達している上に、商人などからの借入れも多額にのぼり、財政難にあえいでいた。そこでやむなく藩士たちの給米を減らし、その減俸がときに五割にも及んだときさえあった。そのため中流以上の藩士たちは負債に苦しみ、下流の藩士たちも生計に苦しんでいた。

小田原藩の主席家老は杉浦平太夫で千五百石、次が山本源太衛で千四百五十石、三番目が服部十郎兵衛で千二百石であった。

ところが服部十郎兵衛について言うと、その渡米（わたしまい）（給与として受取る米の量）が千二百俵であるべきなのに、実際は四百三俵しか渡されていないのであった。これは小田原藩の収納減退のために減俸となったり、また服部十郎兵衛の借入金の返済が差引かれるといったような原因が重なっているためであったが、定められている俸録が三分の一になっているのだった。

そこへもってきて服部十郎兵衛も、用人の関谷周助も経済には疎い人間であったので、服部家の財政はますます窮迫の度を増しているのだった。

金次郎にはこの辺の事情が、服部家に三年間ばかり奉公しているうちに、ほぼわかっていた。それで生家に帰ってから、その再建策として『御家政取直趣法帳』を服部家へ献策したのだったが、せっかくの趣法帳も、いまだ手つかずのままだった。

しかしその後の服部家の財政はますます苦しく、文化十四年（一八一七）末には、ついに借金の残高は二四六両になってしまった。文化十二年からのその推移増減を見ると、

文化十二年末借金残高	一八四両
文化十三年末　〃	二〇三両
文化十四年末　〃	二四六両

と年々借金がふえ、その元利ともに返済する目途も立たなくなった。

そこでこれ以上放置するわけにもいかず、難局を切り

まんじ 83



平成十四年二月一日発行　まんじ　第八十三号

開くべく、服部十郎兵衛が奉行の三弊又左衛門や、代官の鵜澤作右衛門などに相談した結果、

「やはり御家政取直趣法帳まで作ってくれた二宮金次郎に依頼するしかないであろう」

ということになった。

こうして文政元年（一八一八）に服部家から使いが来て、服部家の財政の立て直しを頼まれたのである。

しかし金次郎はすぐには腰を上げなかった。

「服部様のお家の財政再建など、容易なことではありません。わたしのような百姓が潰れた生家を再興できたのは、農事に精を出し、農民としてなすべき道を勤めたからであります。服部様が小田原藩の中で最高の俸禄を受けながら、莫大な借金を作り、財政が困窮しているのは、武士としての家を治める道をあやまったからではないでしょうか。わたしのような百姓が、どうして武士の家を興すなどということが出来ましょうか。ご辞退いたします。どうか服部様にそのように申し上げてください」

と承諾しなかった。

服部家からの依頼は、千二百石という家老の家の財政再建を、一介の百姓に任そうというものであった。金次郎にとっては触手の動く、興味があり、やり甲斐のある、光栄ともいうべき仕事であった。

（だが、それは並大抵の仕事ではなく、失敗は許されない。服部家との間に十分な話し合いもなく、十分な用意もなく引受けたら、失敗するにきまっている）

と金次郎は判断したからだった。

服部十郎兵衛はその返事を聞いて、ますます金次郎への期待感が高まり、その後も信義をつくして、再三再四、依頼してきた。ついに金次郎はその熱意に負けて、

「服部様はわが小田原藩の家老であるのに、その財政困窮のために、家運も衰えようとしている。その家運の挽回のために、高き身分なのに、わたしごとき者に頭を下げ、誠意をもって依頼してきている。わたしがこれを救わなければ、服部家は潰れてしまうであろう。もし服部家が潰れたら、小田原藩主の大久保忠眞公は大変おなげきになるであろう。そう考えると、服部家の不幸は、服部家だけのものではない。小田原藩全体のものである。小田原藩のために服部家を救わなくてはならないのだ。わかりました、お引受けいたします」

と金次郎はついに承諾した。

金次郎が再三、再四にわたって承諾を拒絶したのは、服部家の財政再建引受けを嫌ったのではなく、また逡巡したためでもない。相手を焦らすためでも、かけ引きでもなかった。金次郎はやる気十分であったし、すぐにでも引受けたかった。

しかし引受けたからには絶対成功させなければならない。しかし成功させるには、成功する条件をととのえてスタートしなければならない。その条件をととのえるためであった。

服部家の財政再建は非常に困難である。その困難を乗り越えるには、非常なる決意が必要である。困難な事業が失敗するのは、当人がその苦難に悲鳴をあげ、当初の決心がぐらつき、途中で難事業を放棄してしまうからである。それを事前に防がなくてはならない。

服部家の財政再建が始まれば、すさまじいほどの節倹を、服部家の当主も、家族も、仕える者たちも、強いられるであろう。その節倹に当主の服部十郎兵衛が堪えられねばならぬのである。金次郎は再三の押問答によって、その決意と自覚を促し、服部十郎兵衛の決意が固ったと見た段階で、承諾の返事をしたのである。

これは金次郎の戦略の一つともいうべきもので、これから後も大きな復興事業に向うときは、必ずこの戦略を縦横に使って、成功に導くのである。

（引受けたからには、事業を絶対成功させねばならぬ）

という金次郎の決意の固さが、この方法を取るのだった。

だが、服部家へは承諾の返事を出したものの、金次郎には次の難関が待っていた。それは妻のキノにこれを承諾させることだった。

服部家の財政再建となれば大事業である。かって服部家へ奉公していた時より、もっと真剣に取組まなくてはならない。これから五年間は服部家へ住み込んで、家へは帰れない。結婚したばかりのキノに、そのようなことが言えるであろうか。だが、言わねばならぬ。

その日家に帰ると金次郎は、キノを呼んで一気に言った。

「お前も知っているように、服部家からの依頼はたびたびに及んでいる。それでわたしはこれから服部家へ行って、家計の立て直しに力をつくしたい」

「えっ、また服部様のところへ行くのですか！」

キノは驚きの眼をみはったが、その驚きの陰には不満が宿っていた。

「そうだ。行かねばならぬ。行かねば服部様の家は潰れてしまう。わたしは五年間で服部様の家計を立て直して帰ってくる。お前はおそらく途方にくれるであろうが、我慢して、家を守り、家事につとめてほしい。わかったか」

聞くキノの顔は固く凍りついたようだったが、しばらくして、

「はい」

とだけ答えた。そして答えた途端に、涙が両眼から滑り落ちるように流れた。

言葉では『はい』と答えたけれども、キノの心は、

（そんなことは嫌です）

と叫んでいるのである。

（せっかく結婚したというのに、これから一人ぼっち

でこの家で暮すなんて、そんなことわたしには出来ません。自分の家と服部様と、どっちが大切なんですか。どうしてそこまで服部様のために尽さなくてはならないのですか）

キノの心は泣いていたが、金次郎の言葉に従わざるをえなかった。

こうして三十二歳の金次郎は文政元年（一八一八）三月十六日、新婚の妻キノを家に残して、家政整理のために服部家へ入った。

服部家へ入ると金次郎は、当主の服部十郎兵衛に次のように申し入れた。

「わたしがお引受けしたからには、五年以内で服部家の財政を再建いたします。しかし、すべてのことを、わたしにお任せくださらなくてはなりません。たとえ小さなことでも服部様のお考えが入るようなことがあれば、わたしの再建策を成功させることはできません。もしそのようなことがあれば、かえってお引受けしない方がいいのです」

すべてわたしにお任せください、余分な口出しをしないでください、と念を押したのである。当主が口出しをしなければ、下の者も口を出す、そうなれば金次郎の言うことをきかなくなり、計画が目茶目茶になってしまうからである。

服部十郎兵衛はそれを聞くとよろこんで、

「わかりました。一切口出しはしません。わしは経済の才がないので家計を安定させることが出来ず、このような財政疲弊に立ちいたってしまった。再建の思慮もつきはてて、そなたに依頼したのであるから、どうして余分な口出しなどをしようぞ。服部家の家計の興廃はそなたに任せたのであるから、どうか思う存分に改革してほしい。わしもすべて、そなたの指図に従って動くつもりだ」

ときっぱりと言った。そこで金次郎は、

「では、もう少し具体的に申し上げます。御当家の俸禄は千二百石、お渡米が千二百俵であるべきところ、実際は四百三俵のお渡米しか入っておりません。いわば三分の一の収入しかありません。それなのに三百四十六両あまりの借金があります。これでは世禄はあっても名ばかりで、実際は他人の所有になっているようなものです。それに借金も、ご家老の権威をたのんで返済もしないでいるので、考え方がますます安易になり、実際には三分の一しかない俸禄を、いまだに全額あると思いちがいしているのです。なげかわしいことと言わねばなりません」

「うむ、たしかにそうじゃ」

「したがって、これからは常に質素、倹約を守り、家を存続させ、殿様（小田原藩主）の御恩に報いようと忠

勤をはげむのが、家臣の道と心得ます。それなのに奢侈に流れて、家計が赤字になれば他から借りてこれを埋めるだけなので、その元金に利息がかかって借金は倍増し、一家が没落の危機に直面していることも考えず、ついに家を滅ぼし、殿様の信頼を裏切るようになってしまっています。どうして服部家が忠義の家臣と申せましょうか」

服部十郎兵衛が、

「まったくわしが至らなかったからだ」

と素直に反省すると、金次郎は言葉をつづけて、

「ではこれからお守りくださる三つのことを申し上げます。食事は飯と汁だけにすること、着物は木綿のものに限ること、そして必要のないことはやらないこと、この三カ条でございます。これをお守りくださいますか。もちろん服部様だけでなく、ご家族、使用人、すべてでございます」

十郎兵衛はうなづいて、

「もちろん守るとも。そのぐらいのことで家計が再建することが出来れば、これ以上の幸せはないからな」

そこで金次郎は、

「では以上のことを他の皆様にも申し伝えたいので、この場へお集め願えますか」

と服部家の全員を集めてもらった。計画を徹底させるには、直接会って話す必要があるからである。全員が集ると金次郎は、

「服部家の財政が窮乏して、借金が千両を越えているのは、みなさんもご承知のことと思います。このままで三年もたてば、服部家は滅びてしまいます。もしみなさんの中で、無事に服部家を永つづきさせる方法を知っている者がいたら、わたしに教えてください」

すると使用人たちは口を揃えて、

「いいえ、どうしてわたしたちが知っておりましょう。どうか教えてください」

「あなた方が服部家の無事を願って、わたしにその再建方法を聞きたいというのなら、申し上げましょう。ただいま服部様は、今後五年間、いっさい口出しをせず、全部わたしに家計をお任せ下さると申されました。あなた方も同様、すべて今後はわたしの指図に従っていただきたいのです。ご異存ありませんか。もしご異存の方があれば、いま、ただちにおいとまをいただいて下さい」

と金次郎が言うと、

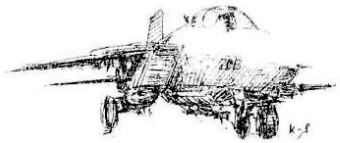
「わたくしたちは長いこと服部家へご奉公しています。お家の危機に際しておいとまをいただくなんてことが、どうして出来ましょうか。二宮様が一身をなげうって服部家の安泰をはかるのに、どうしてさからうことなど出来ましょう。お指図に従います」

こうして金次郎は、服部十郎兵衛以下全員の承諾を取り付けると、いよいよ家計再建に乗り出したのである。

（つづく）

体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（六）

千坂精一



マリアナ沖機動部隊決戦

トラック島を陥とされたあとはマリアナ諸島が狙われて、戦線は西へ西へと追い詰められていった。

五月に連合艦隊司令長官に着任したばかりの豊田副武大将は、古賀前長官の作戦を継承して、アメリカ機動部隊撃滅の〈あ号作戦〉実施を急いだ。

ところが、この計画はすでにアメリカ太平洋艦隊司令部に知られてしまっていた。

というのは、古賀前長官遭難のとき、福留参謀長がゲリラに奪われた鞄に収納されていた機密書類のなかの『乙作戦計画』が、〈あ号作戦（マリアナ沖海戦）〉や、のちの〈捷一号作戦（フィリピン沖海戦）〉の作戦指導書だったのだ。

そこには、現有兵力と増強計画の詳細、攻撃目標にいたる艦船の移動経路や攻撃方法まで作戦のすべてが記述されていて、これから実施されようとしている〈あ号作戦〉は、すでに手の内を曝してしまっていたのである。

そうとは知らぬ連合艦隊司令部は、逸材提督小澤治三郎中将の第三艦隊に第二艦隊を併合させて連合艦隊可動兵力すべてを預け、最後の艦隊決戦を挑ませて勝機を摑もうとした。

五月二十日、フィリピンミンダナオ島とボルネオ島のあいだにあるタウイタウイ島に集結した小澤機動部隊（第一機動艦隊）は、空母九隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦一五隻の第三艦隊と、遠距離砲撃可能な大和、武蔵を含む戦艦五隻、重巡洋艦一一隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦一四隻の第二艦隊からなる五六隻で、これはハワイ作戦を上回る大艦隊であった。

真珠湾攻撃のときの南雲機動部隊の空母は、一航戦の赤城、加賀、二航戦の蒼龍、飛龍、五航戦の瑞鶴、翔鶴の六隻であったが、小澤機動部隊は一航戦の大鳳、瑞鶴、翔鶴、二航戦の隼鷹、飛鷹、龍鳳、三航戦の千歳、千代田、瑞鳳の九隻である。

ただし、南雲機動部隊のほうはいずれも正規空母であったが、小澤機動部隊のそれは九隻のうち大鳳、瑞鶴、翔鶴だけが正規空母で、隼鷹は大型客船橿原丸、飛鷹はおなじく出雲丸、龍鳳は潜水母艦大鯨、瑞鳳はおなじく高崎、千歳と千代田は水上機母艦からのそれぞれ改造空母であった。

搭載機数は、改装零戦二二五機、彗星艦爆一一七機、天山艦攻九九機、彩雲艦偵九機の四五〇機のほか、重巡が零式水偵四五機を搭載していた。

決戦相手のアメリカ艦隊は、スプルアンス大将率いる第五艦隊のうち、ミッチャー中将指揮下の第五八機動部隊で、正規空母七隻、軽空母八隻、戦艦七隻、巡洋艦二一隻、駆逐艦六九隻の一一二隻。搭載機は戦闘機四七五機を含む八九一機であった。

艦船、搭載機ともに二倍の差があるうえ、一年以上の練度の搭乗員が定員の三倍配属されていて、交替制をとっていた。

たいする我が方の搭乗員は、打ち続く消耗戦で開戦時には三、〇〇〇時間超を誇っていた練度の高い将兵たちを数多く喪ってしまっていて、一〇〇時間から二〇〇時間程度の低水準になってしまっていた。

質量ともに劣り、しかも手の内を知られてしまっている不利な条件を背負って、この決戦を指揮するのは、いかに逸材提督と雖も勝利するのは至難の業であった。

小澤機動部隊が泊地で搭乗員たちの練度向上を急いでいるころ、マーシャル泊地を出撃したアメリカ艦隊がマリアナ諸島に迫り、六月十五日にサイパン島を攻撃してきた。

小澤長官は、訓練半ばで急遽出撃を命じた。

十八日に索敵機から、

「サイパン島西方約四九〇キロ地点に三群編成のアメリカ機動部隊発見」

の報が入ったので、三航戦の六五三空天山艦攻隊を発進させたが、帰投が日没になると夜間発着艦は無理と判

断した小澤長官は、艦攻隊をいったん母艦に戻させた。
搭乗員の練度は、この程度にまで低下してしまっていたのである。
小澤長官は、翌十九日早朝、第二艦隊と三航戦を前衛にして、大鳳を旗艦とする直率の本隊一航戦と二航戦の全軍がマリアナ諸島沖の決戦海域を目指して出撃した。
途中、なんども索敵機を発進させて、その数四三機にも及んだ慎重さは、ミッドウェーの轍を踏まぬための小澤長官の配慮であった。
〇六三〇、第二艦隊から発進した水偵が、
「サイパン島西方約二六〇キロ地点に空母四、戦艦四、その他一〇数隻発見」
と報告してきた。
敵機動部隊との距離約五八〇キロ、前衛部隊とは約四八〇キロであった。
小澤長官は、搭載機の航続距離が敵機より長いことを利用して、射程外から攻撃隊を発進させ先制攻撃をかける〈アウトレンジ戦法〉を実施すべく、海上を行きつ戻りつしながら発見した一群を〈目標七イ〉とした。
〇七三〇、三航戦に、
「攻撃隊発進」
が命ぜられ、中本道次郎大尉指揮の戦爆連合六七機が出撃したが、途中目的地点の四〇キロほど手前で電波探知機に捕捉され、新鋭機グラマンF6Fヘルキャット戦闘機に阻止されて格闘戦になった。
どうやら切り抜けて、〇九四五ごろ攻撃目標の空母群に到達したが、VT（近接）信管付の対空砲火を浴びて爆破され、四二機が未帰還になってしまった。
〇八〇〇、三航戦につづいて本隊の一航戦からも垂井明少佐指揮の戦爆連合一二八機が発進した。
その直後、アメリカ潜水艦アルバコアから発射された魚雷が小澤長官座乗の旗艦大鳳の右舷前部燃料庫付近に命中した。
さして支障はなかったが、小澤長官は大事をとって、司令部をおなじ一航戦の瑞鶴に移した。
一航戦の戦爆連合隊は、途中前衛の第二艦隊上空を通過するとき敵機と誤認されて対空砲火を浴び、二機が撃墜され、被弾機は空母へ機投するという災難に遭ったあと、〈目標七イ〉の約七五キロ手前で敵戦闘機の迎撃を受けて乱闘になった。
一〇四五ごろ、垂井少佐の指揮官機が、
「全軍突撃せよ」
と命じたまま消息を絶ったのをはじめ、天山二五機、彗星四二機、零戦三一機の九九機が未帰還になってしまった。
三航戦攻撃隊が敵空母群を攻撃しているころ、一航戦から発進した索敵機がグアム島南西約一三〇キロに新たな空母三隻、戦艦五隻を含む一群を発見し、さらに〈目標七イ〉の北方約九十キロに空母三隻、戦艦一隻を含む別の一群を発見した。
これで敵機動部隊三群をすべて捕捉したので、司令部は前者を〈目標三リ〉、後者を〈目標一五リ〉とした。
〇九〇〇、石見丈三少佐指揮の二航戦第一次攻撃隊四九機が〈目標三リ〉と〈目標七イ〉に分かれて向かったが、〈目標三リ〉の空母は発見出来ず、索敵中に敵戦闘機四〇機の攻撃を受けて交戦し、七機を喪って帰艦した。
いっぽう〈目標七イ〉に向かったほうも、空母発見にいたらず、全機帰投した。
第二次攻撃隊は〈目標一五リ〉に絞ることにして、一〇〇〇まず千馬良人大尉指揮の一八機が発進、次いで一一〇〇に阿部善次大尉指揮の一五機と、宮内安則大尉指揮の四七機がそれぞれ発進したが、索敵機の位置誤認か空母を発見出来ず、千馬隊は九機不明のまま帰艦した。
阿部隊はサイパン島とグアム島のあいだにあるロタ島へ、宮内隊はグアム島へ向かった。
阿部隊は、ロタ島付近で空母三隻を含む敵艦隊に発見されて攻撃を受けたため、彗星一機と零戦一機しかロタ島へ着陸出来なかった。
宮内隊のほうは、グアム島上空で敵機三十機と交戦して敗れ、九機だけが辛うじてグアム島へ着陸出来た。
この日の損害は大量の航空機だけではなく、今朝がた被弾した空母大鳳が一四三〇にガスの引火で大爆発を起こし、二、〇〇〇人の将兵が艦と運命をともにした。
また、空母翔鶴も一四一〇敵潜水艦キャバラの魚雷三発を受けて傾斜し、二隻の空母は搭載機一〇〇機以上を抱いたまま沈没した。
小澤長官は、翌二十日も未明から索敵を行わせたが、目標は発見出来ず、一五〇〇ごろ逆に敵機に接触されて警戒態勢を布いた。
一六一五、ようやく索敵機から、
「空母発見」
の報告が入り、双方の機動部隊が薄暮攻撃をかける決戦のときがきた。
先制攻撃をかけたのはアメリカ側だった。
一七三〇、敵機一五〇機が来襲して、一時間にわたる攻撃を受け、二航戦の飛鷹が沈没した。
一航戦の小野賢次大尉指揮の攻撃隊十機は予定海域に到達したが空母を発見出来ず、索敵中二機が衝突して墜落、八機が帰投したが母艦瑞鶴を発見出来ず、駆逐艦の近くに不時着水して救助された。
この空母同士の決戦で、小澤機動部隊は空母三隻と搭載機四三〇機を喪い、潰滅的打撃を蒙った。
残存機数僅か三五機といわれている。
名将と謳われた小澤提督が喫した唯一の敗北であった。
劣悪戦力で勝利するのは神業意外にない。
一九四五、豊田連合艦隊司令長官から、

「戦線を離脱せよ」
との命令が下り、満身創痍の小澤機動部隊は沖縄中城湾目指して引き揚げていった。
太平洋戦争のなかで、最大の空母同士激突戦だったこのマリアナ沖海戦は、練度の低い搭乗員がばたばた撃墜されていったので、アメリカ側に、
「マリアナの七面鳥撃ち」
と嘲られる結果に終わってしまった。
小澤長官は、敗戦の責任をとって連合艦隊司令部に『進退伺い』を提出したが、戦局多難のおりから握り潰された。
この海戦を最後に、海軍は機動部隊を再編しなかった。というより、もはや積極攻撃するための空母が残っていなかったというべきであろう。
以後、艦船勤務の飛行隊はすべて陸上基地へ揚げられて、もっぱら防衛戦力に使われることになってゆく。

サイパン島守備隊玉砕

小澤機動部隊がマリアナ沖で惨敗したことで孤立無援になったサイパン島守備隊は、熾烈な戦闘をつづけたが、圧倒的兵力と物量を誇るアメリカ軍には所詮抗し難く、六月十七日には島を分断されて山中へ後退した。
二十四日に大本営は、
「あ号作戦中止と、サイパン島の放棄」
を決定したが、それを知らぬ守備隊は、飢えと疲労に耐えてなおも救援を信じ、虚しい抵抗をつづけていた。
机上計画で作戦を弄ぶ高級参謀たちは、押したり退いたりを簡単に考えるが、実施する部隊のほうは押すも退くも命懸けなのだ。
救援部隊の犠牲が多くなると、大本営は失敗を虞れて勝手に作戦を中止するから、籠城軍は二階へ上げられて梯子を外されたようなもので、生還の途はない。
守備隊は、救援を待つのも限界にきた。
七月六日、陸軍部隊の総指揮官第四三師団長斎藤義次中将が割腹した。
海軍は、ミッドウェーとソロモン海戦で敗将の汚名を蒙り、陸上勤務に転じて佐世保と呉の鎮守府長官を歴任したあと、四カ月まえ中部太平洋方面艦隊司令長官に任ぜられて赴任した南雲忠一中将が指揮を執っていたが、
「止まるも死、進むも死、アメリカ兵に一撃を加え、太平洋の防波堤としてこのサイパン島に骨を埋めん」
そう訓示すると、最後の力を振り絞り、七日と八日に残兵四、〇〇〇人を鼓舞して総攻撃をかけ、全員玉砕させて自決した。
このマリアナ諸島は、大正七年（一九一八）十一月十一日の第一次世界大戦休戦条約調印のあと、翌八年五月七日に開かれた講和会議において、赤道以北南洋諸島の統治を委任されてから四半世紀を経ていたので、民間人が多数居住していた。
戦闘に巻き込まれたこれら民間人は、島の北端に追い詰められて、軍人たちと一緒に洞窟に潜んでいたが、
「生きて虜囚の辱めを受けるな」
と叱咤されて、手榴弾で自決したり、のちに〈バンザイ岬〉といわれている一五〇メートルもある断崖から投身自殺した。
僅か二十日あまりの戦闘で三〇、〇〇〇人が戦死したが、民間人も一〇、〇〇〇人が死亡し、捕虜になったのは一、〇〇〇人ほどであった。
サイパン島を基地にされれば、日本本土全域が爆撃機の航続距離内に入ってしまうので、失陥は大打撃だった。
このとき、ほかにグアム島、テニアン島も奪取されて、マーシャル諸島にとどまらず、マリアナ諸島までも喪ってしまった。
独裁政治で太平洋戦争を指導してきた東條体制も、ここまで負けが込んでは国民の不満感情を抑制出来ず、皇族、重臣らの東條内閣打倒工作が表面化して揺らぎ、七月十八日ついに総辞職に追い込まれた。
陸海軍部内でも敗戦責任が問題になり、参謀総長を兼務していた東條英機大将と、軍令部総長を兼務していた嶋田繁太郎大将が、ともに引責辞任せざるを得なくなった。
後継内閣は、陸軍大将小磯國昭に大命降下して、陸軍大臣に杉山元大将、海軍大臣には米内光政大将が入閣した。
米内光政は、昭和十二年の林内閣以来、第一次近衛内閣、平沼内閣と二年海軍大臣をつづけたあと、昭和十五年に半年間総理大臣をつとめて以来の入閣であった。

台湾沖航空戦

ソロモン海戦に敗れて、西へ後退した小笠原群島、マリアナ群島、西カロリン諸島、ニューギニア島西部を結ぶ防衛線も、トラック、パラオ、サイパン、グアム島と中央突破され、背後はアジア大陸が立ち塞かるところまで追い遣られて、ついに雪隠詰めになり、沖縄、台湾、フィリピンが死守防衛線、最後の砦になってしまった。
南方基地群にいた残存飛行隊を掻き集めて新規に一航艦（第一航空艦隊）が編成され、主力をフィリピンに据えて、司令部をミンダナオ島のダバオに置いた。
古賀前長官が連合艦隊司令部をパラオ島から移そうとしたところである。
そして、八月七日新長官に寺岡謹平中将（海大二四期）が任命され、十二日に着任した。
この一航艦の編成は残存飛行隊の集合体ということもあって、機種別に整理分類された。

第二〇一航空隊は戦闘機隊、第七六一航空隊は攻撃機隊、第一五三航空隊は偵察機隊などである。

だから、二〇一空といえば戦闘機隊であることが誰にでも判った。

ほかに、空地分離による基地隊として、基地の拡充、修復、機体整備、器材収集などを担当している司令有馬正文（海大二六期）少将の第二六航空戦隊も組み込まれた。

ハワイ海戦の主役だった一航艦も、いまや尾羽打ち枯らして、昔日の面影はなかった。

九月二十九日、豊田長官は連合艦隊司令部を木更津沖の大淀から、横浜市港北区日吉台にある慶應義塾大学構内に設営した地下壕に移転した。

作戦指導全般を効率的にするためということであったが、航空艦隊が空母から陸上基地へ揚がったのについで、連合艦隊司令部もまた旗艦から降りた。

以後、連合艦隊司令長官の将旗がふたたび艦艇に翻ることはなかった。

十月十日早朝、沖縄本島の北飛行場が突然空襲を受けた。

陸軍の飛燕戦闘機十機が慌てて迎撃したが全滅し、海軍機はすべて地上で破壊され、那覇市が潰滅的損害を受けた。

奇襲してきたのは、ウイリアム・F・ハルゼー大将のアメリカ第三艦隊であった。

この艦隊は、フィリピンレイテ島攻略作戦支援のために、北方の日本基地沖縄を叩いて無力化する任務を帯びていた。

南九州の鹿屋基地から発進した索敵機が、一五三〇ごろに沖縄東方約四〇〇キロ付近にいるこの艦隊の空母群を発見した。

六月十五日付で台湾高雄（カオシュン）の第二航空艦隊司令長官に補任された元連合艦隊参謀長福留繁中将は、このとき、T部隊による夜間攻撃を計画したが、目標掌握が出来なかったので、出撃を断念した。

T部隊というのは、軍令部航空参謀源田實中佐が考案したといわれる、台風などの悪天候を利用して奇襲攻撃をかける特殊部隊のことで、熟練搭乗員多数健在の陸軍飛行隊も組み入れられていた。

一夜明けた十一日は、昨日の空襲が夢かと思えるような平穏な一日であったが、夜になってアメリカ機動部隊が台湾に接近してきていた。

そして、十二日早朝、台湾東方約一六七キロ地点から一、四〇〇機の大攻撃部隊を発進させて、台湾全域を襲ってきた。

陸海両軍の戦闘機一二〇機が緊急発進したが、格闘戦で八〇機を喪った。

この日、T部隊にも出撃命令が下った。

また、南九州各基地からも攻撃隊が発進したが、戦果を挙げるどころか、逆に半数が未帰還の結果に終わってしまった。

さらに、鹿屋から夜間攻撃に向かった隊も、目標確認が出来ず、不成功に終わり、九九機のうち五四機が未帰還になった。

十三日には、また夜明けとともに台湾全土が空襲を受けた。

この日、T部隊は日没ごろに敵機動部隊の上空に到達した。

四機ずつの編隊で攻撃を開始したが、僅か半時間の戦闘で一八機撃墜されてしまった。

熟練者でも難しい夜間の出撃で、敵艦船を識別しての正確な攻撃など出来るはずはなく、戦果は誤認されて、

十二日、空母六～八隻轟撃沈。

十三日、空母三～五隻轟撃沈。

その他、両日とも相当の艦艇撃沈と認む。

と報告された。

だが、実際は十三日に偵察機からの、

「損傷艦二隻、曳航されて南下中」

との報告が裏付けているように、十二日は戦果がなく、十三日も重巡キャンベラが航行不能に陥ったのと、正規空母フランクリンが火災を起こした程度だったのだ。

しかし、大本営は未熟な搭乗員の戦果報告をそのまま鵜呑みにすると、この戦闘を麗々しく『台湾沖航空戦』と名付けて、

「轟撃沈空母一一、戦艦二、撃破空母八、戦艦二、その他。我が方の損害未帰還三一二機」

と発表した。

この誤報をそのまま信じた国民は、久々の大戦果に酔い、欣喜雀躍した。

十四日は、台湾を一回空襲しただけだったので、現地部隊もこの戦果に確信を抱いた。

この日早朝、四〇〇機からなる攻撃隊を編成した第六基地航空部隊鹿屋司令部に出撃命令が下った。

雲量一〇の悪天候と慣れない索敵攻撃に苦しみながらも、第一攻撃隊は敵機動部隊の上空に到達した。

だが、視界不良で編隊が組めず、各機の判断で攻撃を開始したために、熾烈な対空砲火を浴びてほとんどが撃墜されてしまった。

第二攻撃隊は、目標を発見出来ず、台湾の基地に不時着陸したが、天山隊の一七機だけは諦めずに進撃し、ついに敵機動部隊を発見して獲物に襲いかかったものの、対空砲火を浴びて一六機が撃墜され、指揮官機だけが辛うじて生還した。

その夜、T部隊は石垣島南方海上の敵機動部隊に対して夜間攻撃を行った。

敵艦があちこちで炎上するのが認められたので、多大

の戦果を挙げたと思われたが、実際に損傷を与えたのは僅か軽巡一隻大破だけであった。

壮烈、有馬司令官の自爆

十五日も、基地航空部隊とT部隊一一七機が出動したが、敵を発見出来なかったり、索敵中に敵戦闘機の阻止に遭ったりして、三三機が未帰還になった。

この日ようやく攻撃準備の整った一航艦は、ルソン島東方海上に現われた敵機動部隊に対し、陸軍と協同して攻撃することになった。

マニラのクラーク地区を担当していた二六航戦司令官有馬正文少将は、第二次攻撃隊として七六一空の一式陸攻一三機と二〇一空の直掩零戦一六機を出撃させるにあたり、突然、

「本官が指揮を執る」

と言い出して、攻撃隊の一番機に搭乗した。

航空戦の戦闘指揮官は飛行隊長であり、階級は大尉か稀に飛行長級の少佐が最上位であって、将官が指揮を執る前例はなかった。

有馬正文は、薩摩藩の儒者の家に生まれたというが、有馬氏といえば播磨の名族赤松氏の分流で、筑前久留米藩主の家系であるから、薩摩の有馬氏はその岐れであろうか。

そういえば、幕末の勤皇倒幕派精忠組のなかに有馬新七という人物がいた。

脱藩を主張する過激派で、同志と伏見寺田屋で会合しているところを島津久光の鎮撫使に踏み込まれ、死闘の甲斐なく斃された。

有馬司令官は、痩せ型の温和な人であったが、自分には厳しく、頑固だったという。

指揮官の本分を全うすべく、どんなに暑くてもきちんと第三種軍装を着用して、司令部内の居室や宿舎で過ごすことなく、いつもニコルス飛行場の戦闘指揮所に軽便寝台を持ち込み、水で躰を拭うだけで軍服のまま転寝していた。

したがって、食事は三食とも弁当だった。

以前、ミンダナオ島のダバオにいたとき、敵の奇襲を受けて多数の航空機を喪った責任を痛感しているのか、緊急事態に即応出来るよう、たとえ敵襲を受けても指揮所から一歩も退かぬ覚悟に見て取れた。

そして、一航艦司令部への作戦具申は、いずれも過激な積極果敢策で、

「物量の劣りを補うのは、精神力の活用しかない」

との自論が、航空戦隊最高指揮官みずからが先頭に立つことで、全軍の士気を鼓舞する行動に走ったのであろう。

有馬正文は、佐世保、木更津、横須賀の各航空隊司令を歴任したあと、横須賀航空隊副長から空母翔鶴艦長を勤め、航空本部教育部長になって少将に進級し、今年四月九日付で第二六航空戦隊司令官に補任された航空畑一筋の人であった。

この日の出撃にあたり、こんな話が残っている。

精神論を主張する有馬は、戦闘指揮所にいた七六一空の佐官級幹部将校たちに、

「体当たりも辞さぬ攻撃命令を下しておいて、幹部が搭乗しないのは、隊員たちの士気にかかわる。誰か陣頭に立つ人はいませんか」

そう誘いかけたが、誰も名乗り出なかった。

打てど響かぬ態度に業を煮やした有馬は、

「誰もおらんのか」

そう声を荒げると、

「よし、ならば本官が行こう」

行き掛かり上そういうことになったのだという。

有馬司令官指揮の攻撃隊は、マニラ沖約四四五キロ地点で敵機動部隊を発見した。

有馬司令官は、

「全機突撃」

を命ずると、攻撃の見本を示すかのように空母目掛けて急降下し、自爆して壮烈な戦死を遂げた。

有馬司令官は、出撃に際して第三種軍装の襟章を外し、双眼鏡に白い塗料で書かれている〈司令官用〉の文字を小刀で削りとった。

そのことから察すると、自爆は発動機故障ではなく、覚悟の体当たりであったかも知れない。

ともあれ、有馬司令官機の自爆は、アメリカ側の資料に、

「この日、正式空母フランクリンが水平爆撃を受けて被弾したが、襲撃中の一機がフランクリンの三〇メートルほど近くの海中に突入して、翼の一端が飛行甲板に飛び散った」

と記録されるほど凄まじいものであった。

（第一部おわり）

主要参考文献

日本の歴史(25)太平洋戦争　（中央公論社）
戦史の証言者たち　吉村　昭　（文春文庫）
別冊歴史読本・日本海軍艦隊総覧
〃　日本陸海軍航空隊総覧
（新人物往来社）
歴史と旅臨時増刊・帝国海軍提督総覧
（秋田書店）

泰山木（十二）

―紙透小太郎の一生―

紙透寛夫



第四章　新天地

一　岸壁の父

翌日、羅津の港には、太陽の光がさんさんと降りそそぎ、海は青く、波は静かであった。私が乗る日本海汽船会社のハルビン丸は、もう岸壁に横付けされていた。

父小太郎は私を連れて、乗客のなかに混じり、大勢いる船室に入り、通路側に私の席を陣取ってくれた。私はそこにトランクをおき、場所をたしかめるように、あたりを見回して座った。

「じゃあ」

父は一言いい、私が黙ってうなずくと、父はきびすを返して船を下りて行った。

（いよいよ僕は一人になったのだ）

と思っていると、あちこちの乗客が階段を上がり始めた。私も行列の後ろに続いて甲板に出た。

岸壁を見ると、見送りの人々が大勢いた。軍服姿の父は最前列にいて、すぐに分かった。しかも、ひときわ大きく見えた。私は手を振る。

ボウーッ

出帆のどらが鳴る。

すると、父は軍人としての不動の姿勢で挙手の礼をした。私も手を振った。ハルビン丸は水面を滑るように岸壁を離れて進んだ。父は銅像のように動かず、ずうっと、いつまでも挙手の礼を続けていた。船は速度を早め、父の姿は、どんどんと小さくなり、ついに、見えなくなってしまった。

父はなんで、あんなに、いつまでも敬礼をしていたのであろうか。

（寛夫よ、恙無く、山梨に着くんだぞ……山梨では、おじいちゃん、おばあちゃんの言うことをよく聞いて、一生懸命に勉強するんだぞ……）

と、面と向かっていわれたこともない、まして、遠く離れつつある岸壁の父から聞こえるはずもないのに、この声が聞こえたような気がした。恐らく、そんな祈りを込めた父の敬礼であったように思うのである。

あの父の姿は、今でも私の脳裏に深く刻まれて、忘れることができない。

父は三十七歳、憲兵准尉、南陽憲兵分遣隊長であり、私は十一歳、小学校六年生の夏休みであった。

羅津港も見えなくなり、私は船室に戻って、しばらくじっとしていた。が、そのうち退屈になり、また甲板に出てみた。一面、青一色の海原でほかに、なにも見えない。その時ふと、船尾の方に目をやると、

（あれっ、お相撲さんが大勢いるな、なんだろう？あっ、あれが双葉山だな）

母が買ってくれた小学生の雑誌で、双葉山のことは知っていた。私は近寄り、しゃがんでよく見た。力士たちは、しこを踏んだり、稽古をしていた。私は強い横綱双葉山にみとれた。双葉山と視線が合ったが、声は掛からなかった。

過日、東京・両国国技館の中にある相撲博物館に立ち寄り、そのころの資料を見せてもらった。

昭和十五年七月二十八日、双葉山、羽黒山一行が新京で皇軍慰問の巡業をし（皇軍とは、また、古い言葉に出会ったが、天皇が統率する軍隊。戦前までの日本帝国陸海軍の呼び名。と大辞林は説明している）、一方、北京方面でも同様に、男女の川、前田山一行が巡業していたが、途中で合流して、たしかに私と同じハルビン丸に乗船していたことが分かった。

私の目に狂いはなかった。ちなみに、そのころの大相撲は、春と秋の年間二場所だったように思うが、双葉山は第三十五代横綱で、全勝優勝連続五場所、幕内優勝は十二回などの記録を持ち、昭和十四年一月十五日、安芸ノ海に敗れ、六十九連勝でストップし、話題となった名横綱である。

私は力士の稽古をずいぶん見ていたが、飽きてきたので、船室に戻った。室内は静かであった。

どれほど、時間がたったのであろうか、あたりがざわめいてきた。ちらほらと立ち上がる人もいた。

（もう内地に着くのかな、それにしては馬鹿に早いな）

と思っていると、近くで

「もう、まもなく清津に着くぞ」
という話し声が聞こえた。
ハルビン丸は清津に寄港したのである。そこで下船する人もいたが、私はトランクを盗まれたり、また置いてきぼりにされては困ると思って、船室にとどまっていた。
ボウーッ
出帆のどらが鳴ったので、私は甲板に出てみた。清津港の岸壁にも大勢の人々がいた。
ハルビン丸はいよいよ針路を敦賀にとった。清津の街は、見る見るうちに一本の細い線となり、やがて視界から消えてしまい、背後の山々も、どんどんと小さくなり、ついに水平線のかなたに没してしまった。
（朝鮮よ、左様なら）
私は心の中でつぶやいた。
船室に戻ると荷物検査が始まっていた。私の番になり、職員は私のがらくたを、ひと目ちらっと見ただけで、
「ああ、いいよ」
トランクのふたを、ばたっと閉めると、隣に座っていたおばさんが話し掛けてきた。
「僕、一人で内地に行くの？」
「そうです」
「まあ！、偉いわねえー」
と、連れの男と顔を見合わせながらいい、男はうなづいていた。このペアは今にして思えば、新婚旅行で満州に行った帰りのようであった。
あとは、船内でどう過ごしたのか、まったく覚えていない。いつ、どこで食事したのかも。多分、することもないので、そのうちに寝入ってしまったのであろう。
私たちを乗せたハルビン丸が、寄港したこの清津という港は、二年半ばかり前の不審船事件を思い出す。平成十一年四月一日の毎日新聞に、だったと思うが、『不審船が消えた港』と題し、北朝鮮・清津――太平の眠りを覚ました2隻の「不審船」。政府は朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の「工作船」と断定したが、その「不審船が消えた港のある清津（現チョンジン）もまた厚いベールに包まれた港湾都市であった。……と述べていた。
事件は、平成十一年三月二十一日、自衛隊、在日米軍が能登沖で怪電波をキャッチし、二十三日、対潜哨戒機P3Cは、佐渡島の西約十八キロの日本海領域内で、『第1大西丸』と書かれた不審船を、さらに能登半島の東四十六キロの領海内で『第2大和丸』と名乗る不審船を発見した。自衛隊・海上保安庁による追尾が始まったが、逃げられてしまい、二十五日の早朝、この二隻は清津港に入港してしまった。これはまだ記憶に新らしいことである。
こうして、現在の清津は、対日工作専門のスパイ出撃拠点として、不気味な街となっている。

船室が騒がしくなり、ぐっすり眠っていた私は目を覚ました。まわりの乗客は、せわしく荷物を整理して下船の準備をしていた。到着したようである。
敦賀の港を船上から見ようと思い、私は甲板に出た。もうハルビン丸は接岸していて、桟橋を見ると大勢の人がいた。
（あれぇー、あれは、おじいちゃん、じゃないか、まさか、なんでいるんだろう？）
私は自分の目を疑った。もう一度よく見た。祖父は、出迎えの人たちの最前列の真ん中に、着物姿で立っていた。私はまだ半信半疑であった。南陽の官舎で、私が山梨に行く話の出た時、父は『一人で行くか？』と言っただけで、あとはなにも、いわなかったし、私も『行く』と返事して、その積もりでいた。だから、祖父が迎えに来るはずがないと思い込んでいた。それはそれでよいとして、私は念のために、さらによく見た。南陽の官舎で七年振りに会った時の、額に三本、深いしわのある、あの顔に間違いはなかった。
「おじいちゃん！」
私は大声で呼んだ。祖父は聞こえたらしく笑顔でこたえた。私は急いでトランクを取りに船室に戻り、桟橋に降りると祖父に会った。思わず、祖父の着物のたもとをつかんでいた。
（なんだ、おじいちゃんがいたので、すっかり安心しちゃった顔をして……）
祖父は、からかうように、ひじで私を突く真似をして笑った。
この時、昭和十五年（一九四〇年）八月十日、午前七時過ぎ、私は物心がついてから、初めて内地の土を踏んだのであった。祖父に伴われ、汽車に乗って明るいうちに、山梨町の祖父母の家に着き、私はここに身を寄せることになった。

私は少年時代の後半を、この山梨で過ごした。山梨町はその後、昭和三十八年に袋井市に編入され、今は袋井市山梨となっている。袋井は江戸時代の東海道五十三次の宿場町の一つである。江戸日本橋からも、京三条からも二十七番目の『どまん中、袋井宿』と呼ばれたところである。しかも、およそ東経一三七度、北緯三四度にあって、日本列島のほぼ、真ん中に位置している。遠州三山と呼ばれる法多山、可睡斎、油山寺（土地の人々は愛称で『あぶら山』と呼び、親しんでいる）があり、現在はメロン、お茶などが特産品である。
袋井の周辺についても、少し触れると、東は掛川宿のあった現掛川市で、西は見付宿のあった現磐田市で、北は森町である。

掛川といえば掛川城。その美しさでは、東海の名城とたたえられたが、昔の天守閣が平成六年四月に、全国初の本格木造によって復元された。特産品はお茶、葛布などが有名である。

磐田は昭和二十三年に市になった。見付と中泉が市の中心地である。見付天神は東海道随一の学問の神として信仰を集める古い神社である。また、Jリーグのジュビロ磐田の本拠地となっている。

森町は遠州森の銘茶で知られ、次郎柿発祥の地である。また、浪花節で有名な『森の石松』の墓がある。

この地方は気候温暖であり、その豊かな緑と水に恵まれた環境のなかで、私は育てられたのである。

山梨に着いた私は、すぐ、父母には無論のこと、南陽小学校のただ一人の級友、本田幹雄にも葉書を出した。一週間たった頃、本田から往復はがきの返事を受け取った。彼は私がいなくなって寂しくなってしまい、また、便りが欲しいという意味で、往復はがきにしたのであろうと思った。

消印は一五・八・一六で、あて名と差出人は、

静岡県周智郡山梨町下天
掛川屋内
紙透寛夫様

朝鮮咸北南陽柳町通
本田洋行内
本田幹雄

となっていた。掛川屋というのは、昔、祖父鈴木義平が掛川に住んでいて、山梨に移ってからも、『掛川屋』の屋号で傘の製造販売を営んでいたからであった。しかし、私が行った時は、もう祖父は隠居の身で、自適の生活を送っていた。しかし、しばらくは、まわりで『掛川屋』と呼んでいたのである。裏面の本文は、

紙透君お手紙有難う
僕も元気で一生けんめいに勉強をしています。此の間君のお母さんが僕の家に来てこんど雄基にてんきんだそうです。それで今日の朝の十一時に雄基に行くそうです。又僕の兄さんも十三日の夜六時三十五分の汽車で新京に行きました。僕の兄さんによろしく言ってくれな。またおたより下さい
お体を大切に　さようなら

となっていた。

私は彼のこの葉書で、父が雄基憲兵分隊に転勤となり、私を除く家族全員が雄基の官舎に引っ越したことを知った。

（つづく）

漢詩

潮騒錄（卅一）

鯨游海

賀壬午春　壬午元旦

有酒有花人自失
有雲有霧月超然
馬齢又累又踰矩
酩酊屠蘇如謫仙

押韻・然　仙

〈壬午（馬）の春を賀す〉

酒有り花ありて　人自からを失ない
雲有り霧あるも　月超然たり
馬齢又累ねて　又矩を踰え
屠蘇に酩酊して　謫仙の如し

〔注　解〕

転句「矩　踰は論語巻一為政篇の一章「……七十而従心所欲　不踰矩」より。

承句の屠蘇は、五種の薬草を入れた正月を祝う酒。一年の邪気を掃うという。古来中国の風習であったが何時の頃からかわが国にも伝えられた。

尚屠蘇酒を盛る器も屠蘇というが、広辞苑を始めとするどの国語辞典にも触れていないのは片手落ちであろう。

結句の謫仙は謫仙人。天上界から罪を得て人間界に流された仙人。李白が余りにも優れた詩を作るので友人の賀知章は彼を謫仙人と呼んだ。

口語訳してみよう。なお花を美人ととると意味深長。

酒や花がある為に人は自からを失ない、
雲や霧があっても月は超然としている。
私は又馬齢を一つ累ねて、いい齢になったにも拘わらず又矩を踰えて了った。屠蘇酒に酔った私は、罪を得て人間界に追放された仙人の心境である事よ。

☆いやさかの馬齢祝いて屠蘇にがし
　人みな若く美しく見ゆ

長吠歌・鈍犬太郎自詠叡句十二首連作其七

平成十二年十月

我輩悶悶巻尾過
叱聲未已調如歌
主人何處呼不答
飽食暖衣襲睡魔

押韻・過 歌 魔

〈長吠歌・鈍犬太郎自から詠める畳句十二首連作その七〉

我が輩悶々として　尾を巻きて過ごす
叱声未だ已まず　調べ歌うが如し
主人何処ぞ　呼べど答えず
飽食暖衣して　睡魔に襲わる

〔注　解〕

白樂天の長篇名作「長恨歌」に匹敵せんか「長吠歌」。我が愚犬の詠める畳句十二首後半である。さて口語訳。悪戯をして叱られた我が輩は心が塞がりもだえ悩み、尻っぽを巻いて恐懼謹愼して過ごした。しかし……。

叱声はなお已まず蜒々と続き、恰もその調べは歌うが如く心地良かった。

ところでご主人様は何処へ行って了ったのだろう。呼びかけても一向に答がないし、いよ〳〵ねむい。

さてご馳走で腹がふくれた上に暖かい贅沢三昧の暮らしに満足し、うつら〳〵と睡魔に襲われて了った。

悶々は、もだえ悩むさま。暖衣飽食は満ち足りた生活の喩え。孟子・滕文公「飽食煖衣　逸居而無教　則近於禽獣」。禽獣に近い、といわれても我が輩は禽獣そのものなのだが……。

☆念仏か経か歌かは知らねども
調べ豊かに睡魔おそいぬ

又・十二首連作其八

平成十二年十月

我輩夢看忠八公
焉忘澁谷驛頭雄
主人與妻是吾命
一旦誰厭水火中

押韻・公 雄 中

〈又・十二首連作その八〉

我が輩夢に看る　忠なる八公
焉くんぞ忘れん　渋谷駅頭の雄しきを
主人と妻こそ　是れ吾が命
一旦誰か厭わん　水火の中

〔注　解〕

忠八公とは我が種族の誇るべき大先輩で銅像もある。



焉は、ここでは反語。一旦＝一朝。口語訳してみよう。

我が輩は睡魔に襲われうと〳〵している間に我が先輩忠犬八公の夢をみたのだ。

どうしてあの渋谷駅頭に飾られた堂々たる雄姿を忘れようぞ。

ご主人様と奥方様は何者にも替え難き吾が生命そのものなのよ。一朝の有事には縦い火の中水の中と雖も我が輩は厭いはしない。

☆我が生命捧げて悔のあるべきか
八幡太郎水火厭わじ

又・十二首連作其九

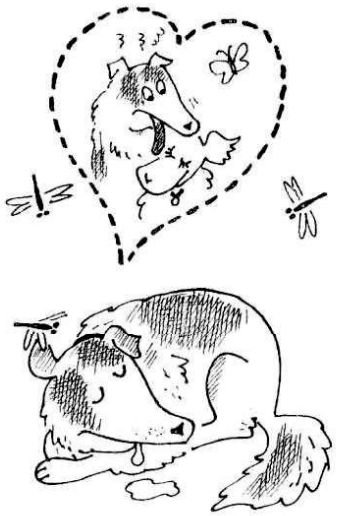
平成十二年十月

我輩醒來蜻蝶群
千金午睡煮茶薫
主人不在妻無影
一朶紅蘭又憶君

押韻・群 薫 君

〈又・十二首連作その九〉

我が輩醒め来たれば　蜻蝶群る
千金の午睡　茶を煮る薫り
主人はおらず　妻も影なく
一朶の紅蘭に　又君を憶う



〔注　解〕

一朶とは、花がこんもりと茂り枝が垂れ下っているさま。口語訳してみる。

我が輩、ねむりから醒めてみると頭上には蜻蛉や蝶々が舞い群れている。

ああ、値千金の午睡。折しも茶を煮るいい香り。

所でご主人様はご不在のようだし、奥方様の影もない。

その時、眼に映じた見事な紅蘭の一朶に再び又君の面影を憶い出した事であった。

☆夢うつつ甘き香りに目覚むれば
蘭あでやかに君し憶ほゆ

又・十二首連作其十
平成十二年十月

我輩凝瞳虚室中
古瓶何物艶香充
主人夜夜對妻坐
相酌三杯氣若虹

押韻・中 充 虹

〈又・十二首連作その十〉

我が輩瞳を凝らす　虚室の中
古瓶何物ぞ　艶香充つ
主人夜々　妻と対いて座し
相い酌むこと三杯にして　気虹の如し



〔注　解〕

虚室は広いがらんとした部屋。陶淵明・歸田園「虚室生白…」荘子・人間世「心を空しくすれば眞理を悟る事が出来る」より借用。氣若虹は気焔を挙げて元気なさま。

口語訳してみよう。

さて我が輩は人気のないガランとした部屋の中を凝視してみた。するとあれは何だろう。

古い瓶が一つぽつんと置いてあり、艶めかしい香りがする。

そういえばご主人様は夜な〳〵奥方様と対い合い、互に酌をし合って三杯も飲むと何時の間にか元気旺盛になり、気焔を挙げて愉快になられる。さても怪し気な古瓶だわい。

☆何物ぞ虚室に怪し古き瓶
三杯酌まば虹のかかるや

又・十二首連作其十一
平成十二年十月

我輩祕狙瓶子圓
欲嘗醁液好機旋
主人何未使吾飲
趨走徐覗忽醉顚

押韻・圓 旋 顚

〈又・十二首連作その十一〉

我が輩秘かに狙う　瓶子の円きを
嘗めんと欲す醁液　好機施れり
主人何ぞ未だ　吾をして飲ましめずや
趨走して徐に覗けば　忽ち酔いて顚ぶ

〔注　解〕

秘の本字は祕。漢字が移入された際誤って書かれた。

醁液はうま酒、良い酒。趨走は膝を曲げて小走りに進むこと。殿中の作法であった。

口語訳しよう。

我が輩はこの古く円形の瓶を秘かに狙っていた。

今こそチャンス到来。得体の知れぬ醁液なるものを嘗めてみようぞ。

それにしてもご主人様は何故今迄我が輩にこれを飲ませてくれなかったのだろう。恨めしい事だ。

かくして小走りに近寄りおもむろに瓶を覗いた途端、たちまち酔って顚んで了った！うーん、後は覚えていない。

☆色香良しかねて狙いし丸き瓶
ひとたび嗅げば雲上に舞う

又・十二首連作其十二
平成十二年十月

我輩陶然萬物閑
然而怪訝彼人間
主人日日何齷齪
沙暖鴛眠泉水潺

押韻・閑 間 潺

〈又・十二首連作その十二〉

我が輩陶然たり　万物閑なり
然り而うして怪訝なるは　彼の人間ぞ
主人日々　何ぞあくせく
沙暖かくして鴛ねむり　泉水の潺々たるに

〔注　解〕

結句は杜甫の絶句と題する詩より借りている。
遅日江山麗　遅日（春の沈まない夕陽）江山麗わしく
春風花草香　春風　花草かんばし
泥融飛燕子　泥融けて　燕子飛び
沙暖睡鴛鴦　沙暖かくして　鴛鴦ねむる
この詩で杜甫は、万物自然の調和の中で美しい江山と幸福そうな鴛鴦に見入っている。春日は長く、時も止っている。動こうともしない老いたる杜甫。
人間は何故こうも齷齪とせわしいのであろうか。
我が輩もまた主人や奥方様と生活を共にしてつくづくと思ったことであった。
嗚呼、犬に生まれて良かった、万々歳！
この詩口語訳する迄もあるまい。潺は擬声語サラサラ。

☆人の世の何ぞあくせく鴛鴦は
温くめる沙に今日も寝ぬめり

《漢詩の流れ22》中唐の詩人⑦――劉長卿・盧綸・張繼

重送裴郎中貶吉州・劉長卿

猿啼客散暮江頭　猿啼き客散ず　暮江の頭
人自傷心水自流　人は自ずから傷心　水は自ずから流る
同作逐臣君更遠　同に逐臣となりて　君は更に遠く
青山萬里一狐舟　青山萬里　一狐舟

人は有情、水は無情。我も流謫の身であるが君は更に遠くへ流されて行く。ひとり寂しく一隻の小舟に乗って。

和張僕射塞下曲・盧綸

月黑雁飛高　月黑くして　雁の飛ぶこと高し
單于遠遁逃　單于　遠く遁逃す
欲將輕騎逐　軽騎を将いて　逐わんと欲すれば
大雪滿弓刀　大雪　弓刀に満つ

簡潔勇壮な辺塞詩。わが源實朝に恐らくはこの詩を読んでヒントを得詠んだと思われる和歌がある。
武士の矢並つくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原

楓橋夜泊・張繼

月落烏啼霜滿天　月落ち烏啼き　霜天に満つ
江楓漁火對愁眠　江楓漁火　愁眠に対す
姑蘇城外寒山寺　姑蘇城外の　寒山寺
夜半鐘聲到客船　夜半の鐘声　客船に到る

日本人がこよなく愛する七言絶句である。

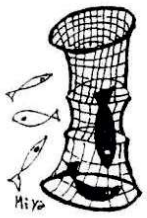
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（三十二）

第一部　北方探検近藤重蔵　下

第一章　重蔵の栄華と失脚

四　北辺開明の振幅

金子正義



（三）

近藤重蔵は老中伺いで、得撫島移住の露人の退去と、我が国の領有地として明確な標柱を建てる事、が承認されたことを縦として、第二議案の鯨漁は留保されたが、時機尚早であったと納得した。

重蔵が江戸に帰着したのは十二月十二日であり、江戸城中は年の暮れより新年にかけて恒例の行事多く、特に将軍拝賀に列する群臣の出入慌しき中での老中伺いであった。第二の綿密な鯨漁の資料など時間をかけての審議は出来ず先送りとなり、二月五日には改元されて享和元年となり、群臣出仕して安藤対馬守より改元の意義が伝えられた。

近藤重蔵は、父近藤守知の生家の母が老齢による危篤となったが、父近藤守知は旗本の福間題右衛門の次男であったが、近藤氏は遠祖古事記の時代の天児屋根命より世々累代に藤原鎌足、俵藤太秀郷等の名家を経て、戦国争乱の時代は近藤武者と稱され、三河国守利庄に住し、藤堂高虎に従い、後徳川二代将軍秀忠に仕え、以下代々先手与力を勤めた。

徳川幕府に従ってより五代目の近藤円次郎守行は家を継ぐ男子に恵まれず、宝暦六年長女悦に旗本福間題右衛門の次男右膳守知を迎えたのである。従って、父守知の母は、重蔵にとって祖母に当るので、葬儀ともなれば参列しようと案じていたが、品川壺岩島の幕府御用船手組頭の向井将監より、幕府用船安馬丸七百石積が建造されたばかりであるが、今度蝦夷地箱館詰合勘定役の水越源

兵衛、同じく支配勘定役の寺田忠右衛門等を乗せて、二月二十日に出帆するが、択捉島へも航行するので乗船するように、と連絡があった。近藤重蔵は、先に択捉島に戻った山田鯉兵衛が配船の手配をしていたのであろうと喜んで乗船した。

幸い天候に恵まれ穏やかな航海であった。始めての船旅である水越源兵衛等は上甲板に出て海洋や、陸地の風景などを眺望していたが、近藤重蔵は、行李に詰めた陰陽之録を出して端坐誦読していた。

安焉丸は享和元年辛酉五月六日の申上刻択捉島の野斗呂岬の西南の老門に入津した。

重蔵より先に択捉島に戻っていた山田鯉兵衛や、番役人となっていた松兵衛や、重兵衛が老門会所より出迎えた。

程なくして、通詞役となった市助や寅吉、漁場指導の小頭となった、又四郎や、アチャボ達も喜び勇んで、浜から出迎えに来た。

宮本源次郎は、近藤重蔵が江戸へ行っている間は択捉島の支配勘定として、老門、紗那、留別、内保等十七ヶ所の漁場も、昨年以上の大漁続きであったと報告に来た。

寅吉、又四郎、アチャボは、交々に、余りにも漁が多いので、鱒などは、塩引きにしたり、三枚におろして蔵に切り囲いしたり、高田屋嘉兵衛の運んできた鋳物の大鍋で煮え湯を通して圧搾機で油を絞って灯明油を取ったり、残りの魚粕を天日に乾して肥料とするなど、アチャボ達はアイヌに教えて大賑いであったと伝えた。

然し市助が、

「大変な事もありましたが、明日にでも重蔵様が落ち着かれたら報告いたします」

と云った。

北辺の厳しい自然の中で様々の変事があるが、余り物に動じない市助が、改まって何にを云うのであろうか、と重蔵も気になった。

（四）

翌朝、老門コタンの夷家に寝起きしている市助は、近藤重蔵が起床して老門会所の番役所に出た頃を見計って報告に来た。

「実は山田鯉兵衛様にも申し上げましたが、何にか蝦夷地御用役の定めとかで、択捉島発展の為にエトロフアイヌは、得撫島、知里保以島などに出稼ぎに行かず、エトロフでいくらでも暮しが楽しく出来るようになるから出稼ぎに行っている者を呼び戻すようにと、厳しく云われましたので、出稼ぎのエトロフアイヌも大分戻った次第です。

処が蝦夷本島厚岸のイコトイは、前々より度々得撫島に渡り、猟虎や鶴や、鷹等の軽物を獲り、赤人に接して交易していたので、幕府に睨まれて厚岸に蟄居していま

したが、今度は、近藤様の呼びかけに喜び勇んで択捉島開拓民として参加するとして、多数のウタレを連れて択捉島の開島式に参加しましたが、何んと山田鯉兵衛様の止めるも聞かずに、多くのウタレと其の妻子等六十人と図合船で得撫島に渡りました。

択捉島の開拓民として参加するとの言葉の通り、開拓民としての氏名、性別、年令等を書き込んだ名簿を近藤重蔵様当てに残して行きました。

処が、イコトイの得撫島妻と厚岸にいたイコトイの子供達と仲違して旨くいかず、猟虎や海豹等の赤人との交易も少なく、択捉島の島役人達より何度も択捉島に引き上げる様に厳しく伝えられたので、イコトイは一同を連れて図合船で択捉島に向った時に大時化となって、船が転覆して一時はイコトイも生死不明でありましたが、溺死いたしましたのは、イコトイの悴と娘にウタレ六人でした。

イコトイは其の衝撃に心を痛め残ったウタレ共を纏めて厚岸に帰って了いました。

近藤様、山田様も江戸に出て老中伺いの為に留守中なので、箱館の蝦夷地御用役の方へは届けました。」

と暗然と語った。

近藤重蔵は、千島、カムチャッカの海洋の気象や潮流に明かるいイコトイが、海難に会わうとは、思いも依らぬ事であった。業々悴や娘に海山の狩猟漁猟の業を身につけさせようと、厚岸より択捉島開拓民として来たのであろうが残念であろうと痛ましく思って、イコトイを厚岸に見舞度いが、昨年より取りかかった「恵登呂府村々人別改め」を完了する事が大事であると、今はイコトイの不幸を癒す瞑目合掌に留まった。

（五）

昨、寛政十二年江戸へ老中伺いに行く前に、通詞役の市助、宮本源次郎等と一図合船を使って海岸伝いに、択捉島全体を巡回して人別改めをしたが、欠けているコタンや個々の住民を確認していない郷村も残っているので、改めて享和元年辛酉の六月改めとして確認しようと、通詞役の市助や、番役人の重兵衛、松兵衛を担当者として恵登呂府郷村の村々人別表を編成した。

表題に『恵登呂府・村々人別帳』と表記し、択捉島全体の村名をアイヌ語（カタカナ書）で次の如く列記した。

恵登呂府　村々人別帳

シ　ヤ　ナ　ア　リ　ム　イ
アンヌンコタン　ル　ベ　ツ
ナ　ヨ　マ　イ　ラ　ウ　シ
ナ　ヨ　カ　ニ　ヨ　ロ　モ　イ
ペ　ト　プ　イ　ト
ゼップコイキ　ナ　イ　ポ

トウロマイ
マクヨマイ　タン子　モイ
シベトロルチヤラ
ビライトロコウ
ビン子ペツセヲノツ
シレトトシモイ

愈々、恵登呂府、村々人別帳の中味である。択捉島の郷村名としてコタン（村）名を記し、一戸一戸の人名、村役名等を記している。斜那村を例にすれば次の通りであった。

六月改

斜那村

（享和元年）

一『酉七月十五日改俗　『乙名』
イケシツルハ
『改名　鶴吉』　七十才
『酉七月十六日改名』女房
ラルマカ
『改名　お亀』　六十三才
『酉七月廿七日改名』妾
ヤヱチヤン
『おやゑ』　六十才

一　イケシツルハ子
シユヱンカッテ　三十才
女房
イコシカッテ　二十四才

一『酉七月廿日改俗』後家
マウシャムシ
『おむしと改』　四十才
『同断』　娘
コナミ
『こなみ』　五才

一『酉七月廿日改俗』後家
ウサルイケ
『おいけト改』　六十三才
『申年　当時サケロク妾　トウロヘ引越』
娘
アトイクシナ　二十五才

一『酉七月十六日改俗』イメツカウカ
『改名　高六』　三十五才
『酉七月二十七日改俗』女房　ナンクシテ
『おくし』　二十六才

一『酉七月廿日改俗』　母　シキブシル
『おくしト』　五十九才

一『酉七月廿六日改俗』　トヤヱサン
『改名　吉助』　九才
四

一『酉六月廿六日改俗』弟　彌之助　六才
『同断』　弟作助　四才
当時　サケロク妾　母　イブイケシ二十八才
前名サラブンケ

一『酉七月十五日改俗』　イワコウジ三十一才
『改名　岩助』
女房　チヱレ　二十四才
娘　ムメノ　〇才

一『酉七月十七日改俗』　カチヤリロ
『甚六』　四十八才
女房　メクルマチ　四十才

「四」
『酉七月廿六日』　子　ワツカルト　十三才
『改名　和七』
「四」

一『酉七月廿六日改俗』次男　万作　十才
二作　一才
娘　おさよ　六才
同　おせん　四才

一『酉七月十五日改俗』　ヱミキサン　四十六才
『改名　笑助』

一『酉七月十四日改俗』　キリッキ
『改名　力助』　十五才
母　オキシロ　三十七才
『酉六月廿六日改俗』妹　おふさ　七才
『改名　おちょう』

一酉七月五日ルヘツニの死　イケシヅルハ下男
トンテキ　三十八才

一『酉七月廿七日改俗』女房　レムニ
四　『おれも』　二十九才

一『酉六月廿六日改俗』娘　シウス　七才
『改名　おしら』
一『酉七月十七日改俗』　イケシヅルハ下男
ハ　ゲ　チ　カ
『改名　伴蔵』　□□　三才
一『酉七月十六日改俗』　イケシヅルハ下男
カンブヨシ□（ヤカ）
『改名　勘平』　三十五才
一『酉七月十五日改俗』同　イマウラック
『改名　今助六』　二十六才
一『酉七月十七日改俗』同　パカエワック
『改名　半六』　十七才
一　同　エプシユイ五十一才
下女ホチンゲ　二十二才
同
『酉六月廿六日改俗』　おへぶん
『改名　おふさ』　十八才

寛政十二年庚申（二）

合四十人　内　男十九人　女二十一人
『△
一　酉六月　日　三助　二十五　イチンケムシ
女房
酉七月十一日　おその　イナンシヤウシマツ
改おそて　二十二才
酉六月廿六改　悴
イモンケセックル
改名　三吉
△
』

寛政十一年　改俗
（寛政十一年）
一『未八月　改俗』　市　助　三十二才
『酉七月十一日改俗』女房
おちよ
本名コチヨウ三十五才
一『酉六月　日改俗』三　助
本名　二十六才
一『酉七月十一日改俗』女房　ソラノ
『改名おそて』二十二才

寛政十二年改俗　『オイト住』
一『申五月　日改俗』与　茂　作　二十四才
『酉』　女房
ヲマンコ
乙名並心得申渡
一『酉七月十六日
乙名並心得候様申渡、同十五日改俗
イチ、ヤンケムシ　『改名』市平
『酉七月十五日改俗　女房イナンシヤウシマチ
『酉六月廿六日改俗　子イモンケセックル
『改名　三吉』

以上、近藤重蔵の解読に依れば、斜那村の乙名であるイケシツルハ改名して鶴吉七十才で、村役を努めていたが、長男のシュエンカッテと其の妻と同居し、妾一人と、娘二人が後家となって、子連れの出戻りとなっている。尚イケシツルハ鶴吉の次男、三男も妻を娶って別居している事も、鶴吉一族の結束の力強さである事が分る。人別改めの全体を述べるには紙幅が許されないので以下は略し、択捉島全体の状況を概括する。

択捉島全体を統括する番役会所は老門（ラート）（生都）に在って寛政十二年より享和元年に至る一年間で、船舶、倉庫、番小屋、油絞竈を設けた工作小屋、等が設備された。

各郷村や、十七ヶ所の漁場の和人、夷人の係人は、通詞二人、番小屋九ヶ所の番人二十人、板蔵七ヶ所の稼方三十人、萱蔵二十一ヶ所の船頭一人、水主九人が常駐し、各郷の油絞竈五十三口、鯨船一艘大図合船二艘、図合船十三艘、夷船六十三艘、夷村二十五村、夷家百九十軒、夷人別千百十八人（内男五百三十六人、女五百八十二人、総乙名一人脇乙名一人、総小使一人、乙名七十五人、土産取十八人）であった。
個々の郷村別状況を示すと次の通りであった。

○斜那郷、別て十四村とす
会所一棟　板蔵二棟　萱蔵二棟　油絞竈十四口
義温丸三艘　鯨船三艘　図合船一艘　大図合船二艘
夷船七艘　夷家十軒　夷人四十人内男十九人　女二十一人　総乙名（ルリシビ）改瑠利助　総小使（ヌントルシ）改髭助　乙名（イケシツルハ）改鶴吉　小使（シヤナシユカ）改嘉助である。

有無為村　会所より凡一里
夷船一艘　夷家一軒　夷人六人内男三人　女三人

安穏胡丹（あんなんこたん）村　会所より凡十八丁
夷船一艘　土産取（ヨクテキ）改幾助、夷人二十人
内男十一人　女九人

奈與加村　会所より凡一里
夷船一艘　夷家一軒　土産取（イタクロシケ）
改　黒市　夷人十三人内男七人　女六人

奈與前村　会所より凡三十町
夷船一艘　夷家一軒　夷人八人内男三人　女五人

○邊富郷　別つて五村とす会所より二十一里
番小屋一棟　板藏一棟　萱藏一棟　油絞竈六口
図合船二艘　夷家十軒　夷人五十八人内男二十八人
女三十人　乙名（ヤイリフカツ）改八重作

老與村　邊富郷より凡十丁

砂萬邊串村　同上凡三里

節婦慈気留去村　同上凡一里半
夷船一艘　夷家七軒　乙名（フメイリラ）改藏助
夷人四十二人内男二十一人　女二十一人

藤路村　同上凡九里
夷舟三艘　夷家八軒　乙名（イトシアイノ）改富六
同（サケロク）改酒六　土産取（シラトキ）改白助
同（ヌサクレテ）改作助　夷人四十八人内男二十人
女二十八人

巻與舞村　藤路より凡四里半
夷舟三艘　夷家八軒　土産取（クシユングル）
改復藏　夷人五十四人内男二十九人　女二十五人

○荒執郷　別て四村とす　会所より四十里餘
番小屋一棟　板藏一棟　萱藏三棟　油絞竈八口
図合船二艘　夷船四艘　夷家十八軒　夷人百十人
内男五十一人　女五十九人　乙名（ベウウク）改可助
同（ウトリキ）改太郎　小使（ニシリキンテ）改西助
土産取（ラムノイ）改蘭平

知戸村　荒執より凡十八丁
夷船二艘　夷家六軒　土産取（ヲベチヤウン）
改牛助　同（ふウシビ）改牛平　夷人三十七人
内男十五人　女二十二人

毘羅糸村　同上凡一里り半
夷船三艘　夷家九軒　乙名（イコルルテキ）改銕助
土産取（イタリアイノ）改板六　夷人七十二人
内男三十二人　女四十一人

便利別村　同凡二里半
夷舟二艘　夷家　脇乙名（イワレカアイヌ）
改和助　土産取（イキシニバ）改生助　夷人四十六人
内男二十人　女二十六人

神武井阿加生泊　同上凡六里

○瑠別郷　別て二村とす　会所より凡七里
番小屋一棟　板藏一棟　萱藏一棟　油絞竈六口
図合船二艘　夷船三艘　夷家九軒　夷人四十人
内男十九人　女三十一人

種子丑母井村　瑠別より　五丁
夷舟一艘　夷家四軒　夷人三十五人内男十六人
女十九人

羅牛村　同上一里
番小屋一棟　萱藏二棟　油絞竈六口
図合船一艘　夷船三艘　夷家八軒　乙名（シコマロク）改島六　土産取（シヲヤン）改籃助　夷人四十八人内男二十一人　女二十七人

○生都郷　別て三村とす　会所より凡十六里
番小屋一棟　板藏一棟　萱藏二棟　油絞竈六口
図合船二艘　夷船七艘　夷家十八軒　夷人九十三人
内男四十七人　女四十六人　總小使（クテキラ）改大助　乙名（シリムケアイノ）改知助　土産取（シリクアイノ）改四郎助　同（タハナ）改太助

風鈴別村　生都より二里　餘
番小屋一棟　萱藏一棟　油絞竈三口

仁世呂茂井村
夷船二艘　夷家四棟　土産取（モンシビ）改茂仁助
夷人三十人内男十二人　女十八人

鳥構村　同上一里餘
萱藏一棟

○内浦郷　別て三村とす　会所より凡四十里
板藏一棟　萱藏三棟　油絞竈四口　大図合船二艘
図合船二艘　夷船三艘　夷家十七軒　夷人七十八人
内男四十一人　女三十七人

於多須津村　内浦より一里半

澗舞村　同上凡二里半
夷船一艘　夷家二軒　土産取（コタンネマンカラ）
改彌之助　夷人七内男四人　女三人

旦根茂居村　同上凡九里
番小屋一棟　夷船三艘　夷家五軒　土産取（ラアキツ）改橘次　夷人二十九人内男十四人　女十五人

○東海邊　別て四村とす

留茶羅村
夷船一艘　夷家二軒　夷人十人内男六人　女四人

魯港村
夷船二艘　夷家四軒　乙名（クテレル）改九八
夷人三十三人内男十六人　女十六人

瀬尾野津村
夷舟二艘　夷家十八軒　乙名（ニシヨシアイノ）改
小助　小使（ヱクニシノ）改玉助　土産取（イルサンパ）改三八　夷人百四人内男五十五人　女四十九人

歳母井村
夷船二艘　夷家九軒　乙名（イベンカ）改辨助
夷人五十七人内男三十八人　女二十九人

以上各郷の村落なり、東海岸は開島の初未だ漁業に従事するに至らず、西海岸に出稼せしむ。

各郷村のアイヌは、乙名や小使などが、幕府役人や、交易和人に接し、斜那郷の総乙名ルリシビが、総小使シヤサシユカに郷村の連絡に当たらせている。

斯くして全島八郷の村々のエトロフアイヌは、十七ヶ所の漁場や海産物加工場で働き、魚油や魚粉などの海産物を大量に生産できるようになり、会所で廻船問屋が買い上げて、大阪、兵庫、長崎に運べば、海産物問屋が争って高値で買い上げた。

従来、蝦夷本島では松前藩の場所請負制であったので、悪質な商人が安値で買上げ利を貪っていたが、幕府が松前藩の東蝦夷地の知行を召上、択捉島の交易は幕府の直捌制となったので、高田屋嘉兵衛や、長崎屋半兵衛、加賀屋宇右衛門等が運上金を幕府の択捉島役人に払って物産を買い上げ、大阪や長崎に運んで賣捌く訳であった。

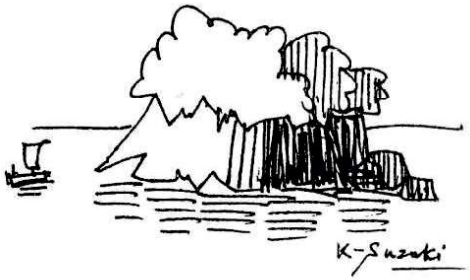
山田鯉兵衛に依れば、其の総額は十万両もあったと云う。

亦、今後益々海産物等の輸送に船舶が必要となり、幕府役人の巡察や勤番兵の輸送にも必要となるので、高田

屋嘉兵衛は、箱船（戦闘船）や物資輸送に千五百石積より、千石積の官船を八隻、七百石と八百石積二隻、六百五十石積四隻、四百石積一隻と増加したので、他の廻船問屋の船舶をも含めて、日の丸の旗印の官船が多くなったので、高田屋嘉兵衛は身分も、名字帯刀御免の『定御雇船頭役』となり、蝦夷地での全官船取り扱い役となった。

高田屋嘉兵衛の栄誉ばかりでなく、エトロフアイヌが手摑みで魚を取る半裸体の原始生活より、漁具漁網を使って収穫を豊かにし、カムイの神の栄光を得たのであった。

続く



千篇萬律

☆S氏の子供の名前は、兄を敬（たかし）、妹を愛子という。何れもありふれた名前や字である。長年の間私は迂闊にも、これが対を為して深い意味が籠められているとは思ってもみなかった。

☆敬愛という熟語がある。小学館の漢和辞典には「敬い愛する」としか書いてない。角川の漢和中辞典にも「尊敬し愛すること」としか書いてない。念の為三省堂の新明解漢和を引くと「うやまいいつくしむ。尊敬し親しみの心を持つ。呂氏春秋、必己（敬愛人者己也）」とあった。未だ釈然としない。

☆昨年十二月八日、各新聞の夕刊に内親王さまの命名記事（宮内庁の解説）が載った。出典は孟子という。「孟子曰く。君子の人に異なる所以の者は其の心を存するを以って也。君子は仁を以って心を存し礼を以って心を存す。仁者は人を愛し礼有る者は人を敬す。人を愛する者は人恒に之を愛し人を敬する者は人恒に之を敬す＝（心を存す、とは本心を失わず保持すること）」とあった。何となくすっきりした。

☆やはり敬愛とは、単に似た意味を持つ漢字を並べて熟語にしたのではなかった。右の如き由緒ある言葉だったのだ。孟子は孔子に遅れること一五〇年。孔子に私淑し孔子の言論を経典に迄高めようと掘り下げた。やがて漢代に至り儒教という一大思想体系が形成された。

☆改めてS氏（又は名付けた方）の学識を思った（く）

まんじ　第83号

平成14年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　鯨　游海（くじら　ゆうかい）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056 横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270－0－64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031 川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　　宮城正彦画

仲間、継続、積年等をイメージして描いた（宮城）。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品（く）。

まんじ

No. 84

2002.5.1

まんじ 第八十四号 目次

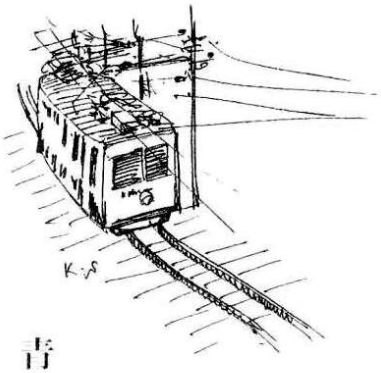


詩　この町 …… 青木昭成 … 4
吉備津路歴史ロマン …… 隆（りゅう） 恵（めぐむ） … 7
シ　ナ　イ …… 新井　宏 … 21
多治見ぶし由来 …… 大和（おお わ） 禎人（よしと） … 32
マヨネーズの神様
　中島董一郎 …… 瀧澤　中（あたる） … 37
哀愁武士道（一） …… 三戸岡道夫 … 45
お　告　げ　(1) …… 森　実与子 … 58
都市銀行「爆発物処理班」（一） …… 宅見勝弘 … 81
悪流修羅（第二話）1
　―リストラの虚構― …… 中泉聖司 … 90
宰相の橋　(二) …… 太田精一 … 96
黒　船　(二) …… 太田和貞 … 101
シナリオ　龍化妖姫　(三)
　―周の幽王伝― …… 相原精次 … 109
霧に包まれていた光　(4) …… 鍋屋次郎 … 116
体当たり戦法を強制された
　神風特別攻撃隊の人びと七）
　（七） …… 千坂精一 … 124
泰　山　木（十三）
　―紙透小太郎の一生― …… 紙透寛夫 … 134
漢詩　潮騒録（三十二） …… 鯨（くじら） 游（ゆう） 海（かい） … 144
千篇萬律 …… 編集子 … 150
表紙・カット …… 宮城正彦
カット …… 鈴木國男
カット …… 清水トム



この町

青木昭成



一、この町

この町　というとき　私は
下町の裾に点在する　それらしい農家の
庭先を起点とする町なみを　ふと　描いている

農家　それはこの町の核に違いない
数はすでに希少　しかし古い生垣の隣から町は広がる

私はここに　ついに半世紀をも住みついてきた
そもそも「ついの住処」と考えていた　若年の
それは不可思議な感覚で　願望でもあったが
それにしても農道のうねりのままに　残る道路

しかも　掘割りであった小川を覆いつくして
四車線の道路が　まっすぐ隣町までのびている
ひっきりなしに疾走する自動車のための

だから　ここは新しい町なのだろうか
それとも　何となく古いものが残る町なのだろうか
ここが好きかと問われれば　嫌いではない
ここが嫌いかと訊かれれば　好きでもある
ただ私の出生の地でなく　育った土地でなく
その故にだろう　これは究極の
感情としか言いようのない内心かも知れぬ

この頃この町でも　虫歯のぬけた歯のように一か所
また一か所と住宅が消える　やがて駐車場になる
そして平屋だった建て替えは約束のように
とんがり帽子の　三階建になる

十五階のマンションは駅まで十三分だと広告され
それが嘘であったとしても　男女の群れは日々
都心へと急がなければならない生態に身を置く

この町　それは私のものだ　日々どう変わろうと
どう老境に至ろうと　けっきょく
私が描きえる原風景は　この町　今

二、がいろ樹

年ごと　秋ごと　かり込まれ
さらに二の腕までも　刈り伐られ

だから剪定とよぶには　いかにも邪険で
工夫のない仕事が　何年　行われてきたことか

とは言え　町なみ沿いに無造作に立ちならび
お前たちはたしかに　野放図に育ちすぎてしまった
人々が　もはや　それを負担にさえ感じはじてきた緑

プラタナスの樹影よ

だが或る　冬の日　それが彼らの
落葉した姿の　最後の季節であったのだが
それはまったく　こつぜんと　一斉に
モッコクの幼い苗の列　それに変身していた
おもてが紅葉に衣装替えした細い
葉っぱ付きの姿に

人々は初め　育て　やがて愛賞し
ときには仲間としてさえ眺めたであろう
それが人々の　樹影への無邪気な所有感
それがまた人々の　かわり身のはやい情緒

ひどく気まぐれで　ひどく身勝手
だから　おのれのその不条理さえ
吹く風の気楽さに似て　ただ流れさる

消えてしまった樹影よ
それが虚構ではなかった事実と
だが　それがいつまで人々の思いの
底に襞のように実存することが出来るものか
ふっと　ため息する

三、犬たち

ついに成犬にまで育てあげられず
けっきょく　余所にあげてしまった後悔

犬　と言うとき私は　ふと
一匹のコリー　彼を思いだす
それはもう四十年もまへのことなのに

おおきな図体　でも穏健であるだけに
むしろ臆病者でさえあった一歳半　彼に
なんの教育をも与えることもなかった
どんな調教をも受けさることをしなかった
自然児のように成長し

その頃　家並みを外れれば
もう田圃のひろがりが遙かにつづいていた
首輪を外された彼は　もう一目散に走る
彼の厠の位置が田圃の一画に定まっていたのだ
彼はそんな習慣を身につけてしまっていた

いま町を歩く私に　出会う犬たちは
チンやマルチーズ　ポインターや　ときに
セントバーナードに　柴犬など大小
その愛犬と呼ばれる彼らや　彼女たちは
本能に導かれるままに　嗅ぎまわり
放尿して歩く　それは電柱や垣根の根方
であり　また　私が
散歩する町のいたるところの辻である

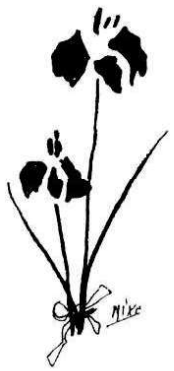
「イヌにフンをさせないでください」
もう芽吹きはじめているハナミズキの
しずかな佇む幹の根元にある　立て札
もう永いこと取り付けられたままで

その根元にあるのは「フン」ではなく
「フンヌ」であろう　怒りの形だ
そういえば　私の散歩のゆく手を
ときどき遮る歩道の花壇の土のうえにも
放置されたままの塊がある

私のはるかな後悔を　ときに引き出してくるものよ
また　愛玩することが非自己の
存在をわすれさせてしまう摩訶不思議さよ

吉備津路歴史ロマン

隆（りゅう）恵（めぐむ）



一、プロローグ

未だ盛夏の名残の日差しが強い日曜日の朝、伯備線吉備津駅に今日一日のロマンを期待して一人降り立ったのは5年前であった。

つい僅か30分前に、宿泊先の岡山ステーションホテルのレストランで、窓越しの心地よい朝日を浴び、日曜の朝の閑散としたビジネス街を見つつ、心は吉備津路のアバンチュールに思いを寄せていた筈であった。

鄙びたローカル線の伯備線に乗り、僅か5分もすると車窓には豊かな田園風景が広がり、これが大都会の郊外かと驚いているうちに、稲の黄金色のたわみと緑豊かな松並木の参道ぎわの吉備津駅に降り立った。

二、吉備津神社

駅前には、レンタルサイクリング車があったが、（こんな良い天気なのだから歩かなくては）と粋がり、簡単な観光図を片手に、今日の計画を吉備津神社から備中高松城の古戦場跡、吉備国の最盛期の造山古墳・作山古墳を経て、備中国分寺の田園風景も味わうという欲張った行程とした。

最初の目的地の「吉備津神社」は駅から参道を歩いて10分ほどの、丘陵地のこんもりとした森の一角にあり、その本堂（国宝）の優美な屋根の曲線に感心し、歴史を感じさせる長い回廊の重厚さを味わい、可憐な秋の草花に心を和ませ、これは（上々の滑り出し）と、今日の夜の着でもよい出張だったのに、わざわざ土曜の晩に来た甲斐があったとほくそ笑んだ。

神社の説明書には、日本書紀による神社の由来（大和朝廷派遣の四道将軍の吉備津彦命を祭っている）、また有名な桃太郎の鬼退治伝説の舞台の「鬼の城」と言う天智朝時代造営の城址が、この田園地帯の北部の丘陵地にあると書かれていた。

この神社の東山麓には、備前国一の宮と言われた古社の吉備津彦神社があり、同じ祭神を奉っているとの事であり、こんな至近距離の二大社が同一祭神というのも何とも不思議である。

この両神社の南山麓には大型の茶臼山前方後円墳があり、この古墳の埋葬者が誰なのか、またこの埋葬者とこの両神社との関係は何かと、大変疑問が残る神社ではある。

記紀の大和朝廷の成立論には、スサノオの征服伝説、ヤマトタケルの東国征伐そしてその途次の病死、また仲哀天皇が筑紫で遠征の途次戦死（定説は額面通り病死と解釈する）する等の英雄達の犠牲により、吉備・出雲・尾張・筑紫等を切り従えた事となっている。

これまでの私は、邪馬台国の九州説・大和説・伽耶説から始まって、出雲国の「国譲り物語」の真偽性とか、大和朝廷の成立について九州王朝の東遷説、伽邪・百済・新羅はたまた高句麗などの「半島」の征服・東遷説、また「半島」の王族の入り婿説等々、学会からは完全に無視されている巷間説の本を乱読して、自分なりの推論を楽しんでいた。

しかし、吉備国については大和朝廷が征服したとする（書紀）に何の疑問も提示されていない。

大和三輪山の麓にある箸墓古墳、つい最近まで卑弥呼の墓と言われて来たが、昨今は別人の墓ではとも言われているこの古墳を始めとした纒向古墳群から吉備国産の陶器が多々輩出しているが、服属国の吉備国が献上したとか陶工を移住させたと言うのが定説である。

こうした定説ばかり読んでいたから、単なる一属国に過ぎない吉備国には何の興味も覚えなかった訳だが、ある友人から一度吉備の造山古墳等の大きな前方後円墳を見てくれば面白いよと教えられ、騙されたと思って秋の田園風景を楽しみつつ素晴らしい女性との出会いがあれば、尚更良しとの単なる暇つぶしの旅行のつもりであった。

暫し、私なりに吉備国と大和朝廷との関わりを想像してみる。

三、鬼の城

「鬼の城」は（書紀）によれば、壬申の乱の際に大海人皇子方の城塞として大友皇子方の陣営と対峙したとなっている。

遙かに中国山脈を眺めて、この山城の築城目的は何だったのか想像してみる。

思えば、大阪平野と奈良盆地を隔てる生駒・金剛山系の山の中腹に「高安城」址があるが、この高安城は天智

朝の時に唐・新羅連合軍と倭・百済連合軍が西暦６６３年に白村江の海戦で倭国連合軍は大敗し、百済への援助どころか一転、国の存亡を懸けて飛鳥京の防衛拠点として築城されたと、（書紀）に書かれていた事を思い出す。

もしかしたら「鬼の城」もその前線基地として築城されたのではないか。

だとすると、単に飛鳥至近の高安城を急造して防衛しようとしたのではなく、総合戦略の一環としての防衛拠点を造ろうとしていた訳で、統治者の亡国の尋常ならざる焦燥感が伝わって来る。

因みに、白村江での敗戦後の倭国の状況は、（書紀）の記録によると、

① 西暦６６３年　白村江の敗戦。
② 西暦６６４年　唐使の郭務悰が筑紫に「表敬目的」で半年在留。
　対馬・壱岐・筑紫に防人等を置き、
　筑紫に水城築く。
③ 西暦６６５年　唐使の劉徳高がこれまた「表敬目的」で筑紫に来る。
　筑紫・長門に城を築く。
④ 西暦６６７年　近江遷都。　高安城・屋島城等築く。
⑤ 西暦６６８年　高句麗滅亡
⑥ 西暦６６９年　唐の将軍郭務悰率いる２、０００名余の軍隊が筑紫に駐留。
⑦ 西暦６７１年　再度、郭務悰の２、０００名の軍隊が筑紫に駐留。
⑧ 西暦６７２年　郭務悰帰国。
　壬申の乱勃発、大海人皇子の即位。

この白村江での敗戦後１０年間の倭国の状況は、唐の使節が親交を求めて、再三再四来朝するも追い返したと述べつつ、防衛の城を対馬から大和の国まで建設し、その一方近江遷都にと目ま狂ぐるしく奔走していた事を記録している。

こうした状況を冷静に判断すると、戦勝国の唐軍の筑紫長期「在留」の真相は「占領」そのものと考えるべきかも知れない。

即ち、戦勝国の唐が敗戦国の大和朝廷に投降・帰順を促す一方、唐の皇帝へ臣従する旨の遣唐使の派遣を促し、これに対して大和朝廷は何かと懐柔策を労する一方、急遽防戦体勢を作りつつあったと言うところが真相かも知れない。

因みに、この１０年の間に２度も遣唐使の使節の任命が行われている。

こうした唐の軍隊の長期駐留についての小林恵子説は、戦勝国の唐が、親百済政策の大智政権を打倒すべく、

高句麗の王族であった大海人皇子のクーデター（壬申の乱）を支援して、天智天皇を暗殺し大友皇子を自刃せしめて、親唐政策の天武政権を築いて所期の目的を達成したので、唐は軍隊を引き揚げた。

と推論している。この小林説は極端過ぎるにしても、確かに「唐の軍隊の長期駐留」の意味するところは疑惑に満ちている。

疑えば、白村江の戦の翌年には早々と戦勝国唐の郭将軍が来朝している事実、その使節団の規模は記録されていないが、平和時のような少人数で敗戦国に親交を求めてきたと解釈するよりも、相当数の軍隊を引率して来たと解釈する方が自然ではないかとも思う。

また、その数年後の唐軍の2千名の記録も、（書紀）とすれば己の先祖及び政権の権威付けのためにも、「大唐」は我が国に頭を下げて国交を求めて来たというタテマエを貫く必要性があるから、その人数を過少に記録した疑義だって大いにあり得る訳で、実際は万単位だった可能性だってある。

従って、一概にこの小林説を珍奇な説と一笑に付す事は出来無いのではなかろうか。

そうした緊迫下の「鬼の城」築城であったのであろう。

私の浅学によれば、古代の「山城」は初耳であり、それまでは平野部か小丘陵地での「砦」か吉野ヶ里の「堀」程度であるから、これらの山城築城の狙いは平野部の被占領を覚悟して、長期戦且つゲリラ戦想定の悲壮感に満ちたものであったのではないか。

後日のマスコミ報道で知った事だが、「鬼の城」城址の発掘が進み、壮大な山城である事が判明し、その築城様式は「百済」の山城様式と断定され、滅亡した百済の亡命者が指導者となって築城したもので、唐・新羅の倭国侵攻に備えた防衛拠点とする一方、【筑紫・長門の山城及びこの鬼の城、また現在の大阪府高槻市の山城、及び高安城に順次「狼煙」で唐軍の来襲を連絡、大和朝廷の本拠地の飛鳥京に伝える役目も負っていたのではないか】と紹介されていた。

抑も、（書紀）の記録の過半が「半島」の記録ばかりである事から、「列島」の国史と言うより「半島」の国史ではないかと唱える人もいる。

それでなくても、数百年に及ぶ尋常ならざる倭と百済・加羅の一心同体の記録から、大和朝廷の生い立ちに「半島」は極めて重要な関係がある事は間違いない。

この百済と倭・日本との関係は、百済滅亡後も大和朝廷に色濃く残り、天智天皇直系の子孫である後の桓武天皇の実母が旧百済の王族の子孫であったので、旧百済出身の秦氏等を重用したと言われている。（尤も、秦氏自身先祖は秦の始皇帝の子孫だと称している。）

この点に関しての私の考えはその逆で、桓武天皇が皇位を襲う事が出来たのも、桓武天皇と先祖（百済の王家出身）を同じくする秦氏が己の主要基盤である山背の国の長岡京・平安京に桓武天皇を迎えたからではないかと穿った見方をしている。

余談になるが、この「列島」が外敵に侵略されたのは、

① 紀元前、原日本人である縄文人の弥生人による侵略・同化
② 3世紀から6世紀、「半島」の王族達による「列島」の侵略、大和朝廷の創設（少数説）
③ 7世紀、白村江敗戦による唐による九州占領
④ 20世紀、第二次世界大戦敗戦に伴う全土占領

の最低3回は経験した訳であり、少数説に立てば4回以上あった事になり、唯一防止できたのが鎌倉時代の元寇だけであったという事になる。

四、備中高松城址

3世紀から5世紀の遺跡を訪ねる前に、かの有名な秀吉ゆかりの中国大返しの「高松城址」を訪ねるべく、畦道を歩き始める。

これが歩けど歩けど高松城址は遠く、汗ばかり掻いて喉は乾くは腹は空くは、正確な地図が無いから方向と距離感が皆目分からず、行き交う旅人も無く、ロマンテックな出会いどころでは全く無くなってしまった。

やっと足守川に辿り着いて土手に座り、今では小川に毛の生えた程度の静かな川を眺めて、秀吉はこんな「小川」を堰き止めて、本当に毛利軍の追撃を防いだのかと最初は不思議に思った。

こうして見渡すと広大且つ平坦な地形である。

山また山が迫る谷間の地形ならいざ知らず、こんな広大な平野に土手を巡らして高松城を囲んでしまおうという発想が突飛だし、造るにしてもとてつもなく長大なものが必要だし、如何に秀吉が土木の天才とはいえそれを実現してしまうとは、全く想像を絶するスケールで只々驚き感心するしかない。

戦国武将でこの類を思いつくのは、秀吉以外では信長しか居無かったであろう。

恐らく信長は、このような奇想天外な発想をし、それを実現してしまう秀吉を自分と価値観を共有出来る唯一の人間として、弟のように「愛い奴」と思ったに違いない。

私の大好きな謙信でもこんな発想はしても、実行には移さなかったであろう。

信玄・元就あたりでは発想さえもしなかったであろうし、ましてや家康であろう。

凡そ、この種の発想は、中国大陸的なスケールと時間観念の持ち主でなければ出来ない。

日本の有史来、秀吉と信長の2人は日本民族では正に稀有の独創的な人物であったと思う。

敢えてこの2人に付け加える人物が居るとすれば、相当異質の人間になるが、持統以降の律令制度・摂関政治を創造し、頼朝による武家政権成立までの約500年間の安定した政治システムを完璧に造り上げた藤原不比等ぐらいと思う。

この私見に対しては恐らく、西郷隆盛・坂本龍馬・島津斉彬・足利義満等もお忘れ無くと言う御仁が居られるかと思うが、私からすればスケールの桁が違い過ぎますよと申し上げ、強いて妥協案を提示するならば、政治家として尊敬する大久保利通を上げたい。

以前、この土地の古老の話を本で読んだ事があるが、戦前には現在のような立派な治水が出来ていなかったので、この足守川がしばしば氾濫し、しょっちゅう川の流れが変わる湿地帯だったそうである。だとすれば、当時はもっと酷かったであろうと思う。

また当地の郷土史家の話だが、秀吉は堰止めしてひたすら雨を待つなどという他力本願だけでは無く、今でも現存している湧水をこの土手の中に流し込むという土木工学的処理を行い、自然の雨との抱き合わせで一大湖の実現に確信をもっていたのではと言う話も聞いた事がある。

さて、秀吉は毛利輝元と和議を結び、「中国大返し」のため土手を決壊させる訳だが、この広い田園地帯が水浸しとなったら、間違いなく一面泥沼地と化して手が着けられなかったに相違ない。

歴史小説の世界では、この毛利軍の追撃が無なかった理由として、安国寺恵瓊と秀吉との密約説が語られているが、名うての猛将の吉川元春もこの一面の泥沼地を見たら、「和議」を即座に破棄して秀吉軍を追撃すれば、返って秀吉の殿軍の反撃に会って毛利軍が大軍だけに余計に大混乱し、大敗北になると判断したに違いないと自分なりに想像した。

恐らく吉川元春・小早川隆景とすれば、ここで秀吉軍を自軍の大混乱のリスクを懸けて追撃しなくても、必ずや織田軍は四分五裂となる事は必定であり、いずれ10カ国の太守である毛利の敵では無くなると判断したのであろう。

毛利家とすれば、織田家以外の対抗勢力と思われた謙信・信玄もこの世に存在しないし、ここは毛利の大軍を

温存し、後は対抗勢力に大軍を示威しておくだけで、天下は自然に転がり込んで来ると考えたのではないか。

しかし、結果はその正しかった筈の情勢分析に反して、四分五裂必定の織田家を信じられぬ程の短期間で秀吉が纏め切ったため、天下取りが不可能となった訳である。

その後は、織田家の家督を強奪した秀吉の天下取りに刃向かう気は一切無かったと思う。

やはり百聞は一見に如かずで、これで長年の疑問の一つが解決できた。

さて、秀吉はこの高松城から雨中という悪条件にも拘わらず3日か4日で2万余の大軍を姫路城に帰着させたらしいが、道路整備の出来ている今日でも大変だろうと想像されるのに、これまた信じられない。

この秀吉の用兵の俊敏さは、後の賤ヶ岳の戦の際の「大垣大返し」でも実践されるが、ただ単に部下に走れの指示だけではなく、この「中国大返し」の時も恐らく街道沿いの農民への協力根回しをするなど、秀吉ならではの人間の機微をついた【智恵】を働かせたのであろう。

更に、秀吉は姫路城から京を目指すに際して、金銀・米等の全ての備蓄を部下全員にふるまった様だが、その時部将のひとりが（明智は大軍、万一明智に敗れたとき

は姫路城で篭城の覚悟が必要であり、それでなくてもこの姫路城に毛利勢が攻め寄せる危険性もあるから、備蓄は大切に）と諫めたが、（明智との戦では必ず勝つのだから、もっと大きな報奨があるぞと兵士達に伝えよ。万一武運拙なかった時は、母なか・妻ねね等を自害せしめ城を焼け。）と言ったと伝えられている。

部下達の不安を除く一方勝利を確信させ、その報奨が大きいという期待感を持たせる人心掌握の旨さは、秀吉の信長・謙信等と違うところで、その並外れた心理学者兼合理主義者の面目躍如と言うべきであろう。

この秀吉の「心理学」に基づく組織経営術は、被支配階級・下積み生活・敗者経験から会得したもので、人は単なる命令だけでは無く、夢を与え且つ自らの意思で動かす事が如何に重要かを体験から熟知していたからである。その意味では生まれた時から支配者であった信長には求めても無理であった。もし信長にそのような人間性が備わっていれば、秀吉より数段上回る創造力・実行力からして、間違いなく天下統一を果たした事であろう。その意味では源頼朝・北條早雲・徳川家康も、世に出るまで何がしかこうした経験をして来たから、成功を収めた訳である。

しかし、この秀吉も最高権力者になるとその意識を忘れてしまうため、自分の死と共に豊家滅亡となる訳だが、

これが人間の悲しい性というものなのかも知れない。

今日でも「先祖伝来の貧乏人」から「一代で成金」に成功しても、結局自分の代で「元の貧乏人に立ち戻る」というのが通例である。

あの異常なバブル景気の際には、大勢の「俄か成金」が出現したが、大半の人達は元の黙阿弥と化して、それを守りきって「真の成金」となり得た人はほとんど皆無であった。

有史来、家康こそ正に「真の成金」に成功した稀有の人物であり、三戸岡先生執筆の二宮金次郎の「分度」を弁え、それを死ぬまで貫いたからであろう。

家康の偉さは、この「分度」を最後まで守りつつ、信長・秀吉の長所と短所を良く見習った事に尽きる。しかし何にも増して、最大長所は「長寿」に恵まれた事であった。

秀吉亡き後、相手が三成という小物だったから勝てただけであり、仮に謙信・信玄・信長・秀吉等の超一流の人物が存命であったならば、家康の天下は絶対無かったと断言できる。

脱線ついでに、日本のバブル崩壊後の長い混迷からの脱出が出来ず喘いでいる訳であるが、こういう時にこそ秀吉が姫路城で部下に督励し且つ果敢に行動した事を思い起こす必要がある。指導者が国民とか部下達に対して「将来への明るいビジョンの明示」と「自信と勇気」を持たせると言う秀吉流の人心操縦術が強く求められる。

指導者への不信感と自分達の将来への不安感を持っている限りは、真の活力は絶対に出ない。

日本の現状は、清盛亡き後の平家の公達や信玄無き後の武田軍団の奢りに似て、先人の遺産を不朽不滅なものと思い込み、過去の成功例の漫然たる踏襲を行い、小手先で解決しようとしても、根元的な解決策は見出せない。

抑も、日本が曲がりなりにもアジアで唯一の先進国に成り得たのは、

① 被植民地経験を経ないで済んだ事
② 明治維新後、速やかに近代的国民統一国家を形成出来た事
③ 人種・宗教の差異等による無用なエネルギーのロスが無かった事
④ 日清・日露・第一次大戦で、二流ながらも欧米列強に次ぐ植民地を持てた事
⑤ 第2時大戦の敗戦後、朝鮮戦争特需という天佑があった事

等から、偶々アジア諸国より「近代化のスタートが早かった」だけなのである。

またもう一つの重要なファクターとして、維新後約100年間国民全体に高いレベルでの教育熱と勤勉を持続

させていたから、第二次世界大戦の敗戦による全土焦土というゼロからの再出発であったが、朝鮮戦争特需というフロックをフォローの風とする事を可能とし、昭和40年代の高度成長の実現に繋げ得た訳である。

ところがその後の日本民族は、その栄華が自らの絶対的優秀性によるものと錯覚して、不断の向学心と勤勉を怠って「惰眠を貪っている」間に、後発国の韓国・台湾・マレーシア・中国・ベトナム等々の諸国が続々と国家体制の整備を完了させ、一斉にビジネス戦線に参加して来た為、大半の製品でコスト競争力を失った訳である。

この状況は、戦後一時期の先進欧米諸国に対する日本の優位性が、今度は日本とアジア発展途上国との関係で、日本が全く逆の立場になってしまった。

先ず我々は、従来の日本の優位性が絶対的なものでは無く、あくまで相対的なものに過ぎなかった事を謙虚に悟るべきと考える。

考えてみれば日本民族の歴史として、「自らの血を流して独立とか民主主義獲得」などの経験が皆無であるため、今日に至っても「お上のご沙汰とか指導者の指示」待ちの体質を持ち、その結果として「もたれ意識・たかり意識」と言う他人依存症が身に染みつき、今更自立だとか自己責任だとか言われても、どうしたら良いのか分からず立ち竦んでいると言うのが現況である。

非常に悲しむべき事であるが、一度大敗北（大量の失業者輩出、デフレの長期化、貿易収支の赤字化、社会秩序の崩壊等）を喫しないと日本民族は目覚めないのであろう。

その再生に当たっては、単なる経済の再生のみでなく、「地球上の全ての生あるものへの慈しみ」と言う人間性の復活を目指し、戦後のモノ・カネ至上主義の幸福感と、権利主張・義務拒否・己さへ良ければ良しと言う「餓鬼道」とも言うべき自己中心主義の価値観を、根底から払拭したいものだ。

本来、「分度」を忘れた人間には破滅しかないというのが歴史の教訓であるから、この難局に当たっては第2の明治維新を断行する気構えが国民全体に必要となる。

この日本再生論については、別の機会に寄稿させて頂き、諸兄のご批判を仰ぎたいと思う。

高松城址の視察はこの土手からの遠望で充分として、腹ごしらえの方が大事だ、食堂を探すとしよう。

五、造山古墳

腹ごしらえを済ませて、少し元気が出て来た。

さあこれからが本番だぞと気を引き締め、ひたすら国道を黙々と造山古墳を目指す。

暫くして農家の集落とその中に小高い丘陵地が見えて来た。これが造山古墳らしい。

近くで見ると、その規模の大きさに驚き、全山松の木が鬱そうと茂り、大和の天皇陵とは違って自然のままであるので、却って歴史の重みを感じさせる。

さあこの旅の最大の目的地に着いたのだから、ゆっくりと散策したいと思うが、如何せん心身共に消耗し尽くしていて周囲を巡る気力も失せ、千足古墳・こうもり塚（古墳）が近くにあるのも分かっているが、ましてや3キロも離れた作山古墳なんて（えい全部止ーめた）。

畦道の道端に座り、一服しながら古代への空想に耽る。

この古墳の規模は、仁徳・応神・履中に次ぐ日本第4位の規模を誇る前方後円墳で、履中天皇陵と酷似しているそうだ。

この履中天皇は応神天皇の弟の仁徳天皇（応神と仁徳は同一人物とする説もある）の息子であり、この酷似とは何を意味しているのだろうか。

造山古墳より小ぶりだが全国第12位の規模の作山古墳以外にも、こうした古墳がこの平野に多々あり、この古墳群の規模と広がりは単に大和朝廷の一豪族だったで片づけて良いのであろうか。

抑も、この山陽の国の温暖な気候と農業に適した一大平野と、海にも面して砂鉄を大量に算出する吉備国の方が、あの狭くて寒暖差の激しい飛鳥盆地より強大な王権を築くのに適している事は、今日の散策ではっきりした。

勿論、「列島」の統一国家の都としては、東国と西国の街道の接点である纒向・飛鳥の方が優れているが、それ以前の群雄割拠時代の連合型の王国の都としては吉備とか筑紫の方が地の利があったのではなかろうか。

尤もある説は、尾張の豪族がこの纒向に進駐して大和朝廷を創設したと解して、尾張以東と大和以西を結ぶ要衝であった三輪山周辺の纒向を都としたのだと主張する。

何れにしても、吉備国は大和朝廷に対抗した有力王国であったか、又は大和朝廷が九州からの東征の途次一時期この吉備に都を置き、後に飛鳥に進軍・遷都したとか、もしくは部族国家の集合体だった時代の「最大の大王国」であった可能性だって否定出来ない。

魏志倭人伝によれば、3世紀前半の倭国の3大国は、【邪馬台国】これに対抗していた【狗奴国】と、この時期には邪馬台国の属国化していた【伊都国】であるとしているが、この【狗奴国】こそがこの吉備国であると主張している有力説がある。

この説に立てば、数十カ国を従えていた邪馬台国に臣従せず、対峙していた吉備国が如何に強大であったかが推測される。

この造山古墳は、5世紀前半の完成とされているが、この時期は大和朝廷の応神・仁徳天皇の時代、即ち宋書の【倭の五王】の時代に当たる訳だが、だとすると【狗奴国】・吉備国はこの3世紀から5世紀に懸けての約200年余も隆盛を誇り、特に5世紀前半が最盛期だったという事になるのであろうか。

とすると、吉備国が大和朝廷（この時期は応神王朝の末期か継体王朝の初期にあたる）に服属したのは、5世紀後半という事になるのであろうか。

大和朝廷の成立過程についての学説としては、

① 3世紀前半の卑弥呼・台与の邪馬台国を母体として、即ち卑弥呼か台与を神話の「天照大神」になぞらえて、諸国の征服・統合を重ねて大和王朝に発展したと言う戦前の皇国史観延長の見解

これに対して、戦後各種の反論が唱えられているが、その中で特に興味を引くのが、

② 4世紀初頭に、初の中央集権王朝として「崇神」王朝（纒向王朝）が成立、その後4世紀末成立の「応神」王朝（河内王朝）に、そして6世紀初頭成立の「継体」王朝（飛鳥王朝）と王朝交代があつたとし、「神武」神話は「崇神」と「応神」のイメージをダブらせて創作したとの見解

で、この説が真実ではないかという気がする。

そこで何故、記紀に魏志倭人伝の邪馬台国・卑弥呼等が一切記録されていないのかが古代史の謎の一つでもある。

私の見解は、為政者・編纂者が敢えて無視したと考える。

その理由は、大和朝廷と邪馬台国とは全く無縁であったからである。

「大陸」から親魏倭王と言う正統な倭国王の認知を得た邪馬台国の存在は、「有史来一王朝を貫く」為政者にとって辻褄合わせが困難であったからであろうと考える。

また、卑弥呼と天照大神との類似性は、古代特有の「政事イコール祭事」という重要な「巫女」の必然性から偶々一致したと解釈する。従って纒向のホケノ古墳を卑弥呼、箸墓古墳を台与の墳墓と見なし、邪馬台国から大和朝廷に発展したのだと言う見解には賛同できない。

6世紀初頭の継体・欽明天皇以後今日に至る皇統が、継体王朝であるという事については定説となっている。

この定説に対しても、【一時期は蘇我王朝（馬子、蝦夷、入鹿3代）が存在したのだ】と唱える人達もいる。

しかし、蘇我氏は百済系の帰化人というのが定説では

あるも、その一方継体天皇の血統も継いでいるので、仮にその説に立っても広義の継体王朝と言えるのでは。

尚、この蘇我王朝説に立つある説は、継体天皇崩御後暫くして蘇我馬子がクーデターで皇位を簒奪したとし、従って継体王朝は短期間で一旦途絶え、その復権の反クーデターが大化改新だったのだと主張する。この辺りになると百家争鳴の感があり、事の真実は全く分からない。

（書紀）では、その応神・仁徳（応神の弟という事になっているが、仁徳は創作人物で応神と同一であるとか、否や応神こそ架空の人物で仁徳こそ実在の人物であるとか色んな説がある）両天皇の后が吉備国の王の娘であり、特に応神天皇は故郷の吉備に帰ってしまった后の兄媛を追って吉備国の葦守の宮に一時住んだとの記録もある。

また通説は、倭の五王の【武】を応神王朝の雄略天皇（仁徳の子孫）に比定するが、この雄略天皇もその后の一人が吉備国の王の娘であり、その間に生まれた星川皇子が父の雄略天皇没後、有力皇位継承者であったにも拘わらず、継承争いに敗れて自刃したという記録がある。

こうした応神王朝の歴代天皇と吉備国との血縁関係は、何を意味するのであろうか。

私は大胆な仮説として、応神天皇は「元々吉備国の大王」だった人物であって、後に河内に進出して纏向に本拠を構える崇神王朝を打倒・征服し、応神王朝を築いたのではないかと考えつつある。

但し、この「応神大王」が元々の吉備国土着の豪族だったのか、それとも九州或いは出雲国はたまた「半島」からの東征の途次、一時期吉備国に在留していたのか現時点では全く見当がつかない。

勿論、明確な論証が出来ないので一笑に付されるのは分かっているが、この吉備国の地政学上の価値、応神王朝の歴代天皇との婚姻関係、またこの壮大な古墳を目にすると、この珍説も真実味を覚える。

この仮説には、崇神王朝の纏向古墳群に吉備国式陶器の多数輩出をどう説明するのかとの反論がありそうだが、この時期の吉備国は、崇神王朝に服属して献上乃至陶工を派遣していたからであり、その後吉備国の「応神大王」が崇神王朝に反旗を翻して覇者となったと考えるから、何らの矛盾は無い。

事のついでに、古代史の謎の一つに、何故記紀の編纂者は宋書を当然閲覧していたであろうに、「倭の五王」の関連事項を一切記録しなかったのかという謎がある訳だが、次のように解釈すれば氷解するのではなかろうか。

編纂を命じた天武・持統天皇の継体王朝にとってみれば、これに触れる事は自らの皇統の正当性に疑義を生じさせ兼ねない上に、血の繋がりも無い応神王朝即ち大陸から正当な王として認知された「倭の五王」の事象は意識的に抹殺したためと考える。

こんな妄想は別としても、この「吉備」の名前は伝説上の吉備津彦将軍、実在の吉備真備（遣唐使）、吉備津姫（天武の孫、夫は天武の子の高市皇子の子で悲劇の横死をする長屋王）といった天皇家乃至それに極めて近い王族たちである。

この吉備国と飛鳥朝廷との関係は今後じっくり勉強するに値する。

六、備中国分寺

既に午後3時過ぎだ。

もう一つのハイライト備中国分寺を目指さなければと重い足を動かすことにする。

国道をひたすら西に歩くこと小一時間ほどで遠くに五重塔が見えて来た。

なんと素晴らしい光景だ。

夕暮れ前の優しい日差しの中に緑一面の野原、その中に雅な五重塔が静かに佇んでいる。

境内は既に人影もまばらで、フランス印象派の水彩画のように静かで心和む風景である。

この備中国分寺は、現存の建造物は江戸時代に再建されたもので、当初は聖武天皇の発願で建立するも、南北朝時代に足利直義により後醍醐天皇との戦か兄尊氏との戦の時に全部焼き払われたそうだ。

この吉備津路は、古くは4～5世紀の吉備王国と大和朝廷との戦、7世紀には大海人皇子と大友皇子との戦、14世紀には足利直義と南朝方か兄尊氏との戦、更には16世紀の羽柴秀吉と毛利輝元との戦の古戦場であったとは、この静かな情景からは想像もつかない。

風流を解さない私でも、この約1千年の「つわものどもの夢のあと」かと、暫し茶店の甘酒で疲れを癒しつつ、柄にもなく感傷に浸る。

この備中国分寺はすこぶる気に入った。

再訪を肝に銘じてそろそろ今回の吉備津路散策に終わりを告げる事とする。

古代へのロマンは充分に味わったとの満足感と心地よい疲労感で一杯であった。

（あれ、淡い期待のロマンがなかったな。まあいつもの事だ、仕方ないか。）

さあ、伯備線の最寄り駅を目指そう。夕陽が中国山脈の峰に沈もうとしている。

目指す駅は、遙か遠く薄暗い丘陵地の裾野の人家の明

かり辺りだろうと、ショートカットをして畦道を再び歩き始める。

急速に日が沈んで夕闇となり、辺りを見渡して見ると街路灯が全っく無く足下がおぼつかなくて、田圃の中に歩み入りそうになる。

ショートカットのつもりが段々目指す方向とはかけ離れて行き、挙げ句の果てには行き止まりとなってしまった。先人の「急がば廻れ」とはよくぞ言ったものだ。

やっと伯備線の服部駅に辿り着いた時は夜であった。

七、エピローグ

疲れた、疲れた。（何がロマンだ。）

こんなに苦労した長い一日だったのに、電車での服部・吉備津間はほんの僅かな時間ではないか。（なんてーこったあー）とひとり呟く。

車中、車掌と今日一日の徒歩散策の話をしたら、車掌が途方もない事をしたものだと呆れていた。

思えば、今日初めての人との会話であり、話をしている中に疲れが少しづつとれて行き、体の中に潤いが染み込んで来るのがはっきりと分かる、やはり一人旅は人恋しくなるものだと悟った一日でもあった。

シャワーを浴びて、ホテルのレストランでネオンに輝く夜景を見ながら、素敵なアバンチュールこそ味わえなかったものの、歴史へのロマンに充分自己陶酔出来た吉備津路であった。

明日、ビジネスのロマンが待っているからひとり寂しく寝るとしよう。

シナイ



新井宏

二月のカイロの朝は結構肌寒い。シナイ山に登る予定があるので一応の防寒準備はして来たが、あとは半袖ばかりで、何となく中途半端である。旅行社からは、五、六月の支度で参加するように連絡があったというが、私の頭ではエジプトはやはりアフリカの国、赤道のちょっと北くらいに思っていた。しかし緯度を見れば台湾よりもはるか北で、鹿児島のちょっと南の屋久島あたりである。誤解いや偏見とは恐ろしい。

今日は、シナイ山ふもとのセント・カテリーナまでの移動日。五百キロメートルを超える行程だという。ホテルを八時半に出発する。

大型観光バスにはツアーの一行十四名の他に、日本人添乗員、現地日本語ガイド、ガイド補佐とガイド見習、それに警備の警官などが同乗している。ガイドはひとりだけで十分だと思うのが私たちの感覚だけれど、これもエジプト側の事情によるらしい。とくに警官は、不意にバスに乗り込んできて、適当に立ち去る仕組みのようだ。大体は、ガイド達と話もせず、毅然とした姿勢で黙って最前列の座席に座り黙って去って行く。

同乗者が多数いるとは言っても、大型バスのこと、大抵はふたり分の座席を占領してゆったり座っている中で、私は妻といつものように隣り合って座る。

エジプトの面積はちょうど百万平方キロで日本の三倍、そこに日本の半分の人口約六千万人が暮している。日本も平野部が十七パーセントしかない山国で世界有数の過密国であるが、エジプトも大部分が砂漠の国で、ナイル河岸と河口のデルタ地帯に人口は集中しているため、かなりごみごみしている。ナイル河口のデルタ地域の始点部分に拡がるカイロは東京と同じく千二百万人の人口だと言う。世界の大都市の人口が大体千二百万人前後なのは、偶然の一致であろうか。そこには厳然たる法則があ

るようにも思える。これから向うシナイ半島は、日本の半分くらいの広さで、そのほとんどが砂漠だ。

バスはカイロの中心地から東に進む。前方左の小高い砂岩丘の上に、アイユーブ朝初代の王サラディンが一一七六年に建設した対十字軍用の城砦シタデルが見える。その中には十九世紀になってオスマントルコからの独立を果したアルメニア人の異国王モハメット・アリのブルーモスクがある。イスタンブールのブルーモスクを模して作ったというが、城砦には似つかわしくない。

砂岩丘との出会いがナイル河の恵みとの別れになり、ここから砂漠が始まる。さらさらとした砂の砂漠ではないが、草木は全く見られない。ただその中を、送電線だけが縦横に走っている。シナイ半島の石油で発電してカイロに送っているのであろうか。それにしてもその無秩序さが異様である。

ところがその理由の一部が間もなく判明した。砂漠の中のあちこちに、団地が建設されているのである。どうやって水を引いているのか判らないが、大きな給水塔の周りに中層建てのアパート群が見える。カイロ旧市街地のはずれから車で三十分以内のところにあるので新興住宅地という位置付けなのであろうか。それにしても、荒涼とした砂漠を見ていても、つぎからつぎへと疑問が生じ飽きることがない。

途中の休憩所には、従業員がたったひとりいて、売店をやりながらトイレ番をしていた。エジプトではトイレのチップがとても煩わしいが、このような水不足の地でのトイレ番にはちょっと弾んでも良い気持になる。それにしてもまわりには何もない。住居が付いている様子がないので車で来て店番をしているのであろう。

シナイ半島との境界にスエズ運河がある。日本語ガイド氏によれば、スエズ運河を越えてシナイ半島に入るとそこはもうアジアだという。オリエント（東方）をアジアというならば別に間違いではないが、アジアの中心を中国あたりだと思っている感覚からすれば、近東、中東などと言われてもアジアを連想することが出来ない。

スエズ運河については、何となく港町風の賑わいを想像していたが、バスは一九八二年にできた地下トンネルを通ってあっと言う間に通りぬけてしまう。地図で見ると運河の最も南の部分を通過したようだ。運河の岸辺でゆっくり休憩してその仕組みを見学できると期待していたのに、ガイド氏は運河の歴史さえ説明してくれない。それでも観光客への最低限のサービスのため、運河がやっと見えるところまでバスを移動してくれた。しかし下車はもとより停車しての写真撮影も認められない。

そういえば、スエズ運河は当然のことながら軍事上の機密なのだ。それにしても毎日数百隻の船舶が行き交う

中で、観光バスに対してだけ厳しくしても仕方がなかろうにと思う。しかしここはエジプトにとっては特別な戦場なのである。

ナセル率いる自由将校団が一九五二年にクーデターで英国影響下のモハメット・アリ王朝を倒したのが始まりであった。ナセルは国民生活水準の引き上げをめざし、世界銀行からの融資と英米からの借款を受けて、アスワン・ダム建設の建設に乗り出した。それはエジプト五千年の歴史を一変するほどの壮大なプロジェクトであった。ところがその後、米国は突然この借款を反故にしてしまう。ナセルの親ソ政策に米国が嫌気を出して露骨な制裁行為にでたのである。いつもの米国の論理であった。

しかしこのことがエジプトにスエズ運河の国有化のきっかけを与えることになってしまった。ナセルは一九五六年に資金調達の道を求めて、当時イギリスとフランスがその株式の大半を所有していたスエズ運河株式会社の国有化を断行する一方、イスラエルに対する優位を確保するため、アカバ湾の封鎖に踏み切ってしまうのである。

当然、戦争となった。イスラエルと英仏は共同して直ちにエジプトに攻め込む。第二次中東戦争の始まりであった。（ちなみに第一次中東戦争はイスラエル建国時に起きている）。軍事的にはイスラエルや英仏の圧勝であったが、この頃から力をつけてきた国際世論という武器がエジプトに味方する。米ソの力の均衡の中で、國際世論が機能して米ソも仲介に動かざるを得なくなる。これが国際政治の面白いところであった。結局、ナセルの外交が勝利してスエズ運河はエジプトのものとなる。

その上ナセルはシナイ半島そしてスエズ運河を守るため、いやイスラエルそのものを取り除くため、一九六七年になるとイスラエル侵攻を目論みシナイ半島に軍を集結させる。同時にシリアもゴラン高原に軍を集結させた。そしてまさに侵攻体制が整い、イスラエルに侵め入ろうとしたその時、エジプト空軍基地はイスラエルの奇襲空爆により、一夜にして空軍機の大半を失ってしまった。この第三次中東戦争の結果、エジプトはシナイ半島を失ってしまう。

シナイ半島を失ったスエズ運河がイスラエルから直接脅威を受けるの自然の成り行きで、運河を挟んでの消耗戦が勃発するのは時間の問題であった。紆余曲折はあったが、第四次中東戦争、第五次中東戦争を経て、ナセルの後継者サダトが、宿敵イスラエルと手を結ぶと言う離れ業でシナイ半島をやっと取り戻すことに成功する。このサダトの行為はイスラム教国に対する背信行為と非難されているが、これはかってベネチアがキリスト教国を裏切ってしばしばトルコと結んでいた現実主義を彷彿させる。

サダトはあらゆる意味で典型的な現実主義者であった。

現実主義者が敵味方を問わず理想主義者から憎まれるのは宿命である。サダトも暗殺により倒されている。

いまサウジアラビアのアブドラ皇太子の和平提案が大きく注目されている。アラブがイスラエルを承認するかわりにイスラエルに占領地から撤退を求めるという提案である。アラブも変わりつつある。いや変わらざるを得ないのが現実なのだ。

遠くから垣間見た運河は幅が五百メートルほどあろうか、海水の青白色が砂に映えていた。当初の幅は二十二メートル、深さは八メートルであったというから、通航船舶の増大や大型化に合わせて絶え間なく開削が続けられてきたのであろう。総長は百六十八キロである。

フランスの外交官でカイロ領事であったレセップスがスエズ運河をつくるための株式会社を設立したのが一八五八年であった。これが国の公共事業などではなく純民間の株式会社によって行われたことが時代の特徴を物語っている。

そういえば東洋を支配したオランダもイギリスもその母体は東インド株式会社という「株式会社」組織であった。利益を求めて株を買うという、この最も古典的な資本主義の風潮がまだ続いていた。運河は十二万人の死者を出すという過酷な工事のすえに一八六九年に開通する。明治維新の翌年であった。だから岩倉具視の遣米欧派遣団は帰路ここを通る。

約四十万株発行された株式の内、エジプト政府が十八万株弱を、その他はフランス人を中心としてヨーロッパ人が買い入れている。ただし、この時イギリス人は一株も申し込んでいない。この頃イギリスはスエズとアレキサンドリアの間に鉄道を敷設しており、その権益に大打撃をうけるから運河の建設に大反対であった。

しかし結果としてスエズ運河を一番利用したのが英国船であった。英国はスエズ運河の権益を狙って水面下で動き出す。そして早くも運河開通の六年後には、多額の借金で首の回らなくなっていたエジプト王朝からその持ち株の全てを買い取る離れ業を行う。価格はわずかに四百万ポンドであったが、フランスは普仏戦争に破れた直後でとても余裕がなかった。英国はその後エジプトの内乱に生じエジプト自体の実質的な支配権を手に入れ、ナセルの革命までエジプトの実質支配を続けることになる。

運河に沿って十分ほど南下すると紅海が見え始め、ほどなくアイン・ムーサにつく。モーゼがユダヤの民六十万人を連れて、エジプトを逃れカナン（パレスチナ）に向かう途中、海を割って紅海を渡り、初めて砂漠で野営したところ。水に飢える中で、モーゼが杖をつくと泉が湧き出たと伝えるオアシスである。

オアシスと言うとロマンチックな緑の豊かさを想像するが、椰子の木が百メートル四方に点在するだけの実に殺伐としたところで、ベトウィン族の女や子供が粗末な屋台で土産物を売っていた。あまりの貧しさに目をそむけながら足早に通りすぎてしまったが、そのことに気がとがめ心楽しまない。

昼食は紅海海岸バナナビーチのレストランで採る。海岸とはいっても周囲は全て砂漠。そんなところにリゾート用の宿泊設備がつくられている。誰がやって来るのであろうか。

午後もバスはひたすら砂漠の中を南下、二時間ほどすると、周囲は砂砂漠から石砂漠そして岩砂漠に変わり、山岳砂漠が見えはじめる。日本語ガイド氏が近くにワディ・ガランデル（ガランデルの谷）というとても緑の美しい渓谷があるので、わざわざ立ち寄ると言う。期待していたが、やはり全くイメージが異なる。砂漠の砂襞に沿って数百メートルほど湧き水の小川が続き、その周りに灌木がわずかに茂っているだけのオアシスである。そもそもこんなところに日本の渓谷を思い浮かべる方が間違っているのであるが、水や緑に対する基準があまりにも異なっているのに苦笑する。

それからまた一時間ほどでワディ・フェィランに着く。ここもモーゼが岩を杖で打って水をほとばしらせたレピデムの奇跡の場所だと言う。もう山岳地域に入り山間の平地に椰子やアカシヤの樹が散在するオアシスで「シナイの真珠」と名付けられていると言う。しかし標高が上がったことや山間で日がかげってきたため、かなり肌寒く荒涼とした感じである。

こんな殺伐としたところにもベトウィン族が生活している。どうやって生業を立てているのであろうか。それにしても、ひとはなぜこのようなところに住まなければならないのであろうか。しかもそこが「シナイの真珠」と言われている。理解を超える。

このあたりからバスは完全な山岳地帯に入る。しかし日本の山岳道路とは全く異なり、登り降りがほとんどない。あたかもダム上の水量豊かな山間の湖水上を舟で遡上しているかのようなのである。そうなのである。砂漠では砂が水なのだ。ここでは山間が全て砂で埋め尽くされ、それが奇妙に谷間を縫って奥へ奥へと続いている。まるで砂の氷河だ。太古の昔に大洪水でもあったのであろうか。

セント・カテリーナのホテルには五時半に到着した。標高が千五百メートルあるのでとても寒い。聖地シナイ山の麓にあるだけに完全な観光地ホテルであるが、途中でお湯が出なくなるのでシャワーだけにした方が無難だという。それにしてもどうやって水を確保しているのであろうか。余計なことを心配してもはじまらない。

シナイ山ではご来光を拝む計画である。六時過ぎの日

の出にあわせて、三時には出発しなければならない。早めにベットに入る。

日本には百名山症候群に罹った中高年が大勢いる。ひたすら深田久弥の書いた百名山を完登することだけを目標にして、紅葉映える山に春のぼり、花萌える山に秋のぼるマニア達のことである。それが嵩じて最近は世界百名山を目指すものさえ現れた。どんな基準で選んでいるのか知れないが、深田久弥の言うように、山に歴史や信仰を求めるとすれば、このシナイ山は絶対に欠かせない。何と言っても、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教の生まれ故郷、モーゼが神から十戒を授かった聖山なのだ。

標高二二八五メートルのシナイ山山頂までは七百メートル強の登りである。もちろん希望者だけの登山であるが、山頂近くまでラクダに乗っても行けるので、十人ほどが参加する。半数はラクダ組のようだ。もちろん百名山症候群の一歩手前の私たちは歩いて登る。第一この登山があるのでエジプト旅行に心が動いたのである。

バスで登山口まで移動し、三時半ころから暗闇の中をゆっくり登り始める。懐中電灯の光では足元しか照らせないが、ラクダの早さに合わせて結構急いで登る人達が私たちを追い越して行く。急ぐことはないのだ。そんなに急いだら寒い頂上で長時間待つことになるだろう。

登山列はほとんど切れ目無く続いているようだ。それでも途中でラクダに乗れとしつっこく寄ってくるところを見るとこの日は空いている方なのであろうか。途中には四ヶ所ほどの休憩所があり、挨拶を交わすと大抵どこから来たのかということになる。ドイツ人やフランス人が多いなかで、イスラム教徒たちも目立つ。英語はあまり聞えて来ないが、韓国人やマレーシアの団体もいて、実に国際的である。

登り始めたころには、くっきり見えていた夜空の星が、いつの間にか消えて、雪がちらつき始めた。砂漠の山にも雪が降る。予想もしていなかったが、異常なことではないのだという。温度計を見ると零下五度であった。途中の休憩所で時間を調節しながら登るが、やはり頂上で大分待つ事になった。

じっとして待っていると結構冷える。中には軽装で登ってきた欧米系のグループもいる。一般的に彼らの服装は暑さ寒さに無頓着であるが、それにしても寒いだろうに。太っているので芯まで冷えることはないのだろうか。

日の出の予定時間を過ぎて大分明るくなってきたが、周囲は何も見えない。雪というよりは雲の中であった。砂漠はいつも晴れと単純に思い込んで、ご来光を拝めないことなど予想もしていなかったことにまた苦笑する。

頂上には教会とモスクがあった。教会はユダヤ教のものだと説明があったが、屋根には十字架が立っている。

第一ユダヤ教は教会ではなくシナゴーグなので、これはおそらくキリスト教のものだと思うが、ユダヤ教もキリスト教も、それにイスラム教さえもシナイ山のモーゼに始まるのであるから、説明通りなのかも知れない。

モーゼがエジプトを脱出し、シナイ山で十戒を受けた頃、すなわち西暦前千二百年代は、歴史に光が当っていた。エジプト史上最大の帝王ラムセス二世の時代であった。

エジプトの観光をすれば、いやでもラムセス二世の名前だけは覚えてしまう。この自己顕示欲の旺盛なラムセス二世は帝王の座に留まること七十年余、その間カイロからルクソールそしてアスワン上流のアブシンベルまで、至るところに神殿を作り、夥しい数の巨大なラムセス二世像を残した。また、その最愛の妻ネフェルタリは、ルクソール王妃の谷にある彼女の墓に、最も保存のよい状態で壁画にその美しい姿を留めているばかりでなく、アブシンベル小神殿の主としても知られている。旧約聖書のモーゼがヘブライ人の開放を求めたのもラムセス二世に対してであり、またモーゼを紅海に追い詰めたのもラムセス二世とネフェリタリであった。映画「十戒」はチャールトン・ヘストン演ずるモーゼを軸にユル・ブリンナーのラムセス二世とアン・バクスターのネフェルタリが絡んで進行する大スペクタクルである。

この頃の大きな出来事はそればかりでない。古代の最大の戦争、カデシュの戦いはアンタキアのオロンテス河畔でヒッタイトのハットウシリ三世とエジプトのラムセス二世の間で戦われた。ヒッタイトとはかってまったく謎の民族であったが、旧約聖書のヘテ人のことであり、彼らによって人類は始めて鉄を使用するようになったと言うのが今日の定説である。その首都は中央トルコのハットウシャシュにあった。

しかし遺跡を比較するかぎり、ヒッタイトはあまりにもエジプトに見劣りする。整然とした巨大な神殿を数多く残したエジプトに対して、ヒッタイトの城砦は強固かも知れないが、あまりにも粗末で貧弱だ。鉄を持つ民族の威力とはいえ、良く対等に戦ったものだと思う。

実はカデシュの戦いはラムセス二世がアペシンベル大神殿に書き残したようなエジプト側の大勝利ではなかった。そのことは二千キロ以上離れたヒッタイトの故地からその講和条約の文書が出土したことからわかったのである。まさに歴史考古学の醍醐味であった。為政者が戦争に勝ったと宣伝するのはいつものことであるが、この古代の大戦争は結局引き分けだったらしい。そういえば、有名なツタンカーメンの王紀アンケセナーメがヒッタイトの王子に婿入りを要請したこともあり、ラムセス二世の妃のひとりにヒッタイト王女を迎えたとの記録もある。だからヒッタイトが強国であったのは間違いないのだが、

どうもその文明の落差が気になる。まだトルコのどこかに埋もれたヒッタイトの壮大な宮殿があるように思えてならない。

モーゼの「出エジプト」は、まさにそのような国際情勢のもとで起った事件であった。ユダヤの民がエジプトに入る前に住んでいたのが、このエジプトとヒッタイトの勢力が対峙した地域であり、カデシュの戦いの帰趨が、彼らをエジプトから里帰りさせる動機のひとつになったのではないか。このように勝手に歴史を考えるのが楽しい。

ところで我々に最も判りにくいのが宗教である。

いま世界で一番激しく対立しているのが、アラブとイスラエルすなわちイスラム教徒とユダヤ教徒である。だから、イスラム教徒もユダヤ教徒も共にモーゼを預言者として崇めていると聞くと非常に違和感がある。もちろんキリスト教もモーゼを崇める。いずれの宗教も一神教だということは知っていても、何となくそれぞれが別の神を、唯一の神として崇めているのだと思ってしまうのが日本人である。ところが、これらの宗教では、神は全て唯一すなわち同一であり、ただその預言者に対する認め方が違うのだと言う。

ユダヤ教はモーゼだけを預言者として認め、イエスを預言者と認めていない。キリスト教はモーゼとイエスを預言者と認めるがマホメットを認めない。イスラム教はモーゼもキリストもマホメットもみんな預言者として認める。このような関係から見ると、イスラム教徒が一番寛大なようにも見えるが、現実の世界ではそうとも受け取りがたいことが多い。

モーゼの十戒は「我は汝の神なり、我の他に何者も神とすべからず」で始まり、偶像崇拝の禁止と神の名を唱えることの禁止と続き、道徳的な規定すなわち「父母を敬うべし」「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」などは四戒から始まっている。旧約聖書、新約聖書を旧訳とか新訳と思い勝ちな日本人に対して、約とは神との契約のことだと言われても何も分った気がしない。それにしても神の名を唱えるなとか、神の偶像を作って崇拝するなと言われて、ますます判らなくなるばかりだ。

だからこれらの宗教では「神の名」も良く判らない。エホバとかヤーウェとかアッラーとか言われているが、唯一でしかも唱えてはいけないのだから、名前はなくとも良いらしい。

十戒を授かったシナイ山を下り始めるころから、雲が流れて周囲の山々が見え始めた。奇形としか言いようもない山なみが朝日を受けて、紅がかった褐色肌を浮き上がらせる。暗闇の中、左右も分らず登った登山道も眼下に一望できる。大きな山塊だ。樹木らしいものは全く見

当らないが、それでも山の窪みに墓の象徴と言われる糸杉を一本見つけた。雪が降るのだから樹木が育っても不思議ではないが、その糸杉がかえって荒涼とした景色を際立たせる。神はなぜこのような厳しい環境にモーゼを導いたのか。モーゼはなぜカナンの地に直行せず、四十年もこの厳しいシナイの地に留まったのか。

山を降りた所にギリシャ正教のセント・カテリーナ修道院がある。造りは完全に城砦だ。事実、ユスティニアヌス帝が五三〇年に外敵からキリスト教徒を守るため築かせたものだと言う。それにしても、こんな荒廃した地に誰が攻めてくるというのであろうか。

ホテルに戻って、遅い朝食を採ってから、十時半にシャルム・エル・シェイクへ向う。南下と標高降下で急速に気温が上がり始める。

シャルム・エル・シェイクはシナイ半島の南端東側に位置する。五つ星ホテルが二十もあるエジプト第一の観光地だという。ここをそういうなら、ピラミットのギザや神殿のルクソールは何なのか。それにしても全くエジプトを感じさせない砂漠の観光地だ。どこかラスベガスやフェニックスに似ていてアメリカ的な雰囲気が漂っている。イスラエルがシナイを占領していた時に開発した街だと聞いて納得する。

ここから車で三十分のところにラス・モハメットがある。一九八三年にエジプトで初めて国立公園に指定されたところで広大な砂漠と海の楽園だという。

小型バスに乗り換えて、町並みを出るとまもなく検問所らしいところに至る。はたして検問所であった。ガイド氏がパスホートを準備して見せるように言っている。最初は冗談だとばかり思っていたが、係官が形式だけだけれど車に乗り込んでチェックを開始した。なぜこんな広大な国立公園に入るのに、パスポートのチェックが必要なのか、全く理解できない。軍事基地が近くにあるとも聞くが、国立公園内にあるわけでもない。しかしイスラエルから取り戻したシナイ半島の象徴、イスラエルが造った街シャルム・エル・シェイクは軍事緊張の最前線でもあるのだと考えて納得することにした。

ラス・モハメットの国立公園内は小型バスで走り回れる。別に観光客が多くいる様子はない。徹底的に自然を保護しているとの説明にも、こんなに人がいないところで、自然の保護も何もないではないかとまたひとりつぶやく。緑あふれる日本の基準で見ると大味過ぎてどこにその美しさのよりどころを求めて良いか戸惑うが、まばゆい紺碧の海と白茶紅色の砂漠があざやかな対照は自分ひとりのための物のように思えて心なごんだ。ここは世界的なダイバーのメッカというから、海底には自然の楽園が見られるのであろう。適度に散策してシャルム・エル・シェイクのホテルに戻る。長い一日であった。

ここシャルム・エル・シェイクは、イスラエルとパレスチナの和平交渉の主舞台であった。ノーベル平和賞まで受賞した一九九三年のオスロ合意が、何とか生命を保って、一九九九年七月のバラク首相の登場を迎え、本格的な和平合意に向って歩みだしたのも、ここシャルム・エル・シェイクであった。

バラク首相は軍人出身でありながら、柔軟で現実的であった。だから国民が嫌う妥協を重ねても、和平合意に達しようと動いた。それを見て百選錬磨のアラファト議長が対応を誤った。更に譲歩をとせまり、イスラエルの世論を一気に右傾化させ、逆にバラクを追い込んでしまった。そして右派政党リクードの党首シャロンの登場を呼び、歴史が暗転してしまう。

シャロン党首はまずイスラエル国民の支持を背景に、二〇〇〇年九月イスラム教聖地、ユダヤ人にはタブーの東エルサレムを訪問し「ここはイスラエルの地だ」とぶち上げ、イスラエル治安部隊とパレスチナ住民の衝突を惹き起こす。第四次中東戦争の英雄で、バラクをして「シャロンが首相になったら平和を保つのことが出来るのは神様しかいない」と言わしめたほどの強硬派であった。

しかし国民は変化を求めていた。短期間のうちに強硬策で和平をもたらすという公約が圧倒的多数で支持され、シャロンは二〇〇一年三月には首相の座につく。そして徹底した強硬政策をとり、和平交渉を一方的に中断してしまう。

不幸が続いた。僅差で登場したブッシュはクリントンの決定事項でさえ無視し、京都議定書を反故にし、期待を裏切りシャロンのやり方を暗黙の内に支持し始める。テロそして報復の悪循環がエスカレートせざるを得なくなった。同年の九月十一日の米国同時多発テロはこのような状況で起ったものだ。ブッシュが登場しなければ、いやシャロンが登場しなければ、流れは異なっていたであろう。アフガニスタンで多くの人達が亡くなることもなかったかも知れない。

いつの時代、どの地域でも国民は問題解決に判りやすい強手を求める。やって見てダメなら別の馬に乗れば良いと、無責任に考えるのが民衆だ。だからイスラエルの国民がもうシャロンを見限り始めたのは確かである。「テロを止めるという公約も、不況を終わらせるという公約も、和平を進めるという公約もすべて失敗した」と零点の評価を公然とつけ始めている。高い月謝であった。

だからブッシュのテロ支援国家への強硬策もいずれは内部から破綻するにちがいない。強硬策はマルチ商法と同じで、いつまでも拡大させて行くことはできないのだ。

広い敷地にコッテージ風な部屋を散在させたリゾートホテルはエジプトの雰囲気を感じさせない。夕食時のステージ音楽も耳慣れたジャズやシャンソン、タンゴや日本の音楽である。こんなシナイ半島のはずれまで来る日本人がいるのだろうか。自分が日本人であることを棚に上げて余計なことを思う。明日はシナイを離れ、飛行機でルクソールに向う。ナイル遡上の船旅が待っている。



「まんじ」季刊発行内規

（発行日）	（原稿締切日）〔注〕
春季号 ……	二月一日 …… 十二月三十一日
夏季号 ……	五月一日 …… 三月三十一日
秋季号 ……	八月一日 …… 六月 三十日
冬季号 ……	十一月一日 …… 九月 三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

多治見ぶし由来

大和禎人

独特のアナウンスを知らぬ人はまずあるまい。「ひがァし、千代の富士ィ」の呼び出し同様、なくてはならぬオハヤシである。

東京五輪であれを叫びつづけた多治見義長さん（水戸市助役）が亡くなった。

―中略―

あの名調子が生まれたころ、電光掲示板どころかプログラムさえ不備をきわめ、だれがどこで泳ぐのか、場内アナウンスだけが頼りだった。役員や観客が記録をつけるためにも、ああいう間が必要だったのだ。

いま、高らかに出場選手を紹介してみても、観客はゼロにひとしく、記録は低調をきわめている。「第一のコース」どころではない。

だいいち、種目だけむやみにふえ、紹介も終わらぬうちに号砲一発、どんどんレースを処理しなければならない、という関係者もいる。

その多治見君の死を知ったのは同窓の入田紹一君によってもたらされた新聞のある切り抜き記事によるのであった。それは昭和五十七年五月二十七日付の朝日新聞の夕刊の「今日の問題」という記事だった。

「第一のコォース」という小見出しでまとめられた三段組の囲み記事である。一部を写すと次のようである。

「第一のコース、古橋くーん…」といった水泳

「第一のコース○○くん」

そして続いて、

「レイン・ナンバー・ワン……」

というプールサイドのコールアナウンスは水上競技独特の雰囲気をかもし、興奮を呼ぶ、馴染みの風景であった昔がある。しかし、競技種目の多様化とともに今や聞かれなくなった。水泳日本のかつての栄光もこれにともない陰りをもって久しい。わが多治見ぶしの多治見義長君は泉下にあってどう思われていることであろうか。

現役のころ、多治見さんは節まわしや声の延ばしかたに、ずいぶん苦心していたと聞く。「第一のコース」が忘れられてゆくのは、さぞや心残りだろう。しかし、黄金時代を歌ったのは幸福だった。葬儀には東京五輪の名調子が、録音で流れるという。

さて、その多治見義長君はわたしにとって中学校時代の幻の旧友であることを、切り抜きを提供してくれた同窓の入田紹一君の奇特の行為があって、にわかに思い出させてもらったのである。二人に共通する記憶としてはからずも呼び戻され、よみがえる機会を与えられたのだった。

今は故人の入田君だから確かめようもないのだが、同窓をまとめてなにかと面倒の良い同君の記憶に多治見君があり、目聡く記事に気づいてわざわざコピーまで送ってくれ、わたしにとって「幻の旧友」と言うべき多治見君の記憶が、まさに茫々の時空を超えてある程度の像を結んだのである。入田君とわたしは二年生で同じクラスだった。そうしてみると多治見君とわたしが机を並べた昔は間違いなく二年生の昭和四年であったことになる。毎年組変えがあり、唯一共通して多治見君を旧友とする、認識はそれ以外にないと推定できるのだった。

「多治見、元気にしているか」

ある日、とくに教師の一人が声をかけたシーンをわたしは脳裏に刻んでいるのだ。かれは一列右、わたしの隣に席を占めていた。わたしの同君に対する印象はこの一コマだけである。なにとなく、豪傑というイメージを残している。そして何時とは知らず、かれは級友の列から姿を消してしまった。「幻の旧友」とする所以である。

わたしたち同学の縁に結ばれる旧制の中等学校は旧水戸藩に濃いかかわりをもち、教職員に出身者が多く、そうした一人が同君に声をかけたものと思われる。他にも水戸関係の子弟の何人かを数えられた。多治見君が晩年水戸市の助役の職を奉じたことははじめて知った事実だが、うなずけるに十分なフシを覚えるのであった。

わたしたちの在籍した学園創立にかかわる松平氏は四国讃岐の藩主の裔であり、遠祖は水戸徳川氏の始祖頼房の長子頼重が讃岐に封をうけて始祖となっている。その後も水戸徳川氏から二例の養子縁組があり、きわめて濃く水戸とは姻戚関係にあった。伯爵のお殿様を仰ぐ学園創設の働きかけは多く水戸系の人々であった事情を想像できるのだった。少しく余事に思われるが、多治見君の背景を知る上の参考になろうかと思われる。

今ごろ二十年も以前の片々たる記事にいまさらこだわるのはなぜか、前記のごとき新聞記事のコピーは保存さ

れてすでに久しく、奇しき因縁を覚えつつも、ついつい年を過ごしてきたが、折からソルトレイク冬期オリンピックの話題の騒然とする十七日間を迎え、囂々の報道の嵐の渦中におかれ、メダル争いしきりのうち、ドイツが六年をかけたスパンの強化策が成功をおさめ、金二十二を含める三十五個ものメダルを獲得したなぞの話題もあった。やがて二年後のアテネでのオリンピック水泳競技で沸くであろうプールサイドを夢想し、スタンドの興奮で沸き返る光景を思う時、かつて、多治見君が抑揚に苦心し、ラブコールとも言うべき執念のアナウンスを続けた日を想起するとともに、この際かれの個性について知識の空白部分をできるだけ埋めたいと思った。

意外にもかれは世俗的には地方都市とはいえ、公選の首長に次ぐ公吏として頂上の地位にあったことをすでに知ったが、それだけでは曲もない。もっと深く探ってみたい。身近な人間として引き寄せて見たいと思った。

わたしは早速、水戸へ向けてリサーチの働きかけを始めた。多治見ぶしと呼ばれた特異のエピソードに生きた人物、純粋な心情を傾けて、言わば大衆へむけてのサービスに徹することのあったかれ、華やかさの一面、楽屋裏の奉仕に徹したかれの像を掘り起こし、真の像に迫り明らかにしたいという思いに駆られたのであった。

水戸市梅香という町に遺族を探りあてた。同町二丁目に知弘氏と玉枝さんの二本の電話の持ち主があり、玉枝さんは未亡人であろうかと思われたが。すでに老齢とすればむしろ子息と思われる方に、という思いから、ダイヤルを選んだ。出られたのは年若い婦人の声であった。爽やかで真実味のこもった応対にほっとする思いを与えられた。義長君とあえてこの際は呼ばせてもらう当の人は二十年前に物故は承知だが、玉枝さんの方はあらためてこの折、やはり十年前に亡くなっていることを知った。

「明日にでも母の住まいのほうへ行って、なにかお役に立つような資料を探してみます。お電話を伺っておきましょう」

と約束された。この折、とりあえず故人はベルリンオリンピックの補欠選手として出場していること、水泳の国際審判員資格を持っていたことなど、そして中学校の卒業は聖学院とか聞いたことがありますというお話であった。ポイントとして重要なのは最後の点にあったが、それ以上はお答を望むのは無理のようであった。

二日ほど経て、

「母のところにお役にたつかどうかわかりませんが、参考のものがありましたのでコピーをお送りします」

と住所を尋ねられ、電話の翌日、早速五点ほど主にローカル紙の記事などの資料を手に入れることができた。

出典の紙名の明らかなものは「イハラキ時事」（なぜか濁点がない）を称するローカル紙のみ、小見出しに「今週の顔」「この人」「常陸の人々」などとあるコラムの囲み記事がすべてである。子息夫人の寄せてくれた厚意を謝しつつ、すべてを一覧した。

社会教育課長、教育長、助役と累進した都度のプロフィル紹介記事が大方のうち、「スポーツだけが趣味」とする課長時代の紹介記事がもっとも古く、わたしの知りたい願いに答える内容を読みとれた。

全日本水泳連盟理事、プールサイドのコールアナウンスは昭和十一年から、そして学歴にふれては、

（今の日学園から商大に進み）

とある記事が注目をひく。かれがわれわれの前から姿を消したのはいつか、どうした事情にもとづくものか不明のまま、本人は履歴上は秘して、卒業したもののごとく他へ語っていると思われるフシの記事である。

昨日までは机を並べていた級友がいつか姿を消して他へ去ったケースは数多くあり、実のところかれはそうした一人だった。入学時二五五人、だが、卒業時は一七八人、これに四年生から大学予科に進んだ卒業待遇の一〇人を加えても、六十七人が欠けている。なんらかの事情で転校、もしくは退学しているのだ。転居はともかく、非行の上の論旨退学、学業不振など、憚り多いケースもあり得る。豪傑の印象を残しているかれの場合、このへんの真実は知り得ない。しかし、かれはすくなくともH中に執着する心情を持ち合わせていたと思われる記事に突き当たった。それ以上の詮索は無用であろう。

第十一回のオリンピック大会は昭和十一年八月一日にベルリンで開かれている。「前畑ガンバレ」と河西アナが絶叫、女子二〇〇メートル平泳ぎに後の兵頭秀子選手がドイツのゲネンゲルとの接戦を演じた実況放送に日本国民が熱狂したのがこの大会であった。そして同じ平泳ぎでメドレー男子のメンバーにわが多治見義長君は補欠選手として、当時二十一歳の顔があった。この事実こそが大切になる。多治見君の平泳ぎは鶴田義行という偉大なスイマーに憧憬を捧げたことから出発している。

その鶴田義行選手こそは第九回（昭和三年）のオリンピック、オランダのアムステルダムの金メダリスト、二〇〇m平泳ぎの覇者。次いで第十回（昭和七年）のロサンゼルスでも若く有望視された小池礼三選手を抑え、同じ二〇〇でチーム最年長二十八歳のキャリア勝ち、当時前人未踏の二連覇を遂げている。同選手は後年昭和四十三年に米国フロリダ州にある「水泳殿堂」入りをしている超人だった。

前記昭和七年のロサンゼルスの大会は折しもわたしたち中学五年生の時に相当し、一方、自由形泳者として若干十六歳の宮崎康二選手が一〇〇m予選、準決勝、決勝

ともに五十八秒台の記録を樹立、オリンピック新記録で金メダルを獲得した活躍が瞳目に値し、さらに八〇〇mリレーの第一泳者として遊佐、豊田、横山の各選手とともにアメリカを破り、八分五十八秒四、やはりオリンピック新記録をマークするという、めざましい活躍が記録されている。中学生のわたしたちが血を沸かしたのは当然であった。多治見君を駆って水泳競技に走らせ、その天性を生かすきっかけになったと思われる。水戸市に生まれた彼は土地柄の水府流の「水練」と呼んだ古流に少年時代から親しんでおり、平泳ぎはどちらかといえば、それに近い泳法ということもあって、頭角を早く認められるチャンスに恵まれたはずであった。

小学生で豆魚雷、やがて「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた古橋広之進選手が戦後食料難時代をサツマイモ、カボチャを主食として成長し、昭和四十七年八月、全日本選手権で四〇〇m自由形で世界新をマーク、これを皮切りにリレーをふくめ三十三回の世界新を樹立した活躍はあたかも多治見君の教育長時代に相当する。

後のIOC会長の古橋氏の著述に「力泳三十年」「地球ひとまわり半」などがあるが、多治見君の水泳の道に傾倒した情熱は決してこれに劣るものではない。

千葉商科大学を出て勧業証券に勤め、転じて印刷会社の経営、兵役にも従うなどあって市役所入りは昭和三十四年、四十四歳の時であった。遅過ぎた公吏の道であったが、かれの才幹はその以後に花を開いた。かたわら水連の理事をかね、プールサイドのアナウンスに情熱を注ぐ本懐の時代を迎えたのであった。

その多治見君は昭和五十七年五月二十二日、幽界へ忽然として去った。葬儀は神道によったために、戒名はない。六十六歳だった。多治見ぶしの録音再生に送られる葬送だった。

この稿を書き進めるうち、某日の朝、NHKテレビのモーニングインタビューでのノンフィクション作家立花隆氏の言であったが、

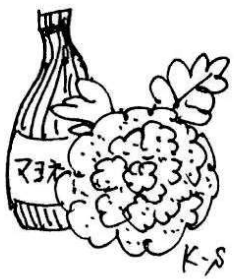
「人間大方の生き方はやむを得ざる選択の結果と言えるのではないか」

という一語があった。多治見君の人生もまた、止むを得ない選択として、さまざまな人生を歩み、役人コースに終着し、それまでの曲折と艱難が生きて、行政に手腕を発揮し得たものと思える。しかしかれの本懐はプールサイドにあって、あの多治見ぶしと呼ばれた名アナウンスに人知れず苦心を払いつづけた日々こそ、人間多治見が自足する境地として、あの世へ去ったものと信じたい。

（H一四・三・二一）

マヨネーズの神様

中島董一郎



瀧澤中

1、戦後の混乱に乗じて、マヨネーズ市場に三〇社が参入。市場争奪戦の行方は・・・

「キューピー」という名で知られる食品会社の創業者・中島董一郎について、書いてみようと思う。

キューピーは言わずと知れたマヨネーズの最大手だが、その創業時は缶詰の卸をしていた。ある時、イギリスに行く機会のあった青年・中島董一郎が、生まれて初めてマヨネーズを口にした。

「うまいッ」

マヨネーズは、中島のそれまでの食の常識を覆すほどの美味だった。

（欧米のように肉だけではなく、魚や野菜に付けて食べるのなら、日本でも通用するのではないか）

こうして、缶詰の卸販売をしていた中島董一郎が、日本で最初のマヨネーズ製造・販売に踏み切ったのは、大正十四年（一九二五年）のことである。

しかし、日本人がそれまで口にしたことのない食材を売り込むというのは、難しい。そこで董一郎は考えた。

まず蟹缶とマヨネーズを持って、小売店に行く。その蟹缶も、新しくて上等なもの。中島自身もめったに食べられない上物である。これを小売店の店主の目の前で開けて、マヨネーズをたっぷりかけて食べてもらう。

効果は絶大で、今度は他の店でも関心を持つ。

「お前のところで面白いものを売っているらしいじゃないか。ウチにも是非持ってこい」

と言われた。中島は営業マンに、

「製品の話は十分にしなければならないが、決して売り

込もうとするな。品質だけ説明して、あとは知らぬ顔をして帰りなさい」

売り込めば、卸値だリベートだ、という話になる。しかし、サンプルを食べて「これは旨い」という、味で買ってくれれば、味が変わらないかぎり買いつづけて下さる、という考えからだった。

作戦は成功し、大正から昭和にかけて、日本の食卓にマヨネーズが普及することになる。

そしてその頃流行していた「キューピー人形」をキャラクターとして使い、以後、キューピーはマヨネーズの代名詞になる、と書きたいところだが、実は、中島董一郎の苦労と本領は、これ以後に発揮されるのである。

マヨネーズ市場を巡る戦いは、特に戦後、激しさを増した。

戦前、国内のマヨネーズ市場を独占していた中島董一郎だったが、戦後は材料不足と社員数の激減（終戦直後、社員は四名）によって、最初の危機を迎えた。

「社長、ヤミで仕入れなければ、マヨネーズを作れません」

と進言する社員に中島董一郎は、「絶対にヤミには手を出さん。ヤミでなければ作れないのなら、生産中止もやむを得ない」

と言って、開店休業状態になった。生産・販売が再開されたのは、三年後の昭和二十三年である。

この間隙を突いて、三〇社近くが様々なブランド名でマヨネーズ市場に参入してきた。

中島董一郎の戦いは始まった。どう戦ったのか。

昭和二十五年頃というのは、マヨネーズが面白いように売れた。放っておくと莫大な利益が上がる。他社はそれを懐に入れたが、中島董一郎は儲かる見込みが立つとすぐに値下げをした。

「原材料費が下がりました」

「工場の合理化が進みました」

等々と理由をつけて。

そうしてキューピーが値下げをし売上が伸びると、相対的に他社製品は売れなくなる。マヨネーズは売れなければ鮮度が落ちるから、他社は太刀打ちできない。ついに戦後マヨネーズ戦争の第一ラウンドは、キューピーの圧勝に終わった。

ちなみにこの値下げは、どこそのハンバーガー屋がやっている、競合つぶしのためのダンピングとは違う。中島董一郎の信念である。

その証拠に、国内シェア九〇％の独占状態になった昭和三〇年代以降も、毎年のように値下げを行っているのである。

「儲かった利益は必ず消費者に還元しなくてはいけない」

三〇社近く入り乱れた第一次マヨネーズ戦争は、中島

董一郎の信念で勝利した。

2、第二次マヨネーズ戦争、勃発

昭和三十六年。

「大メーカーが、マヨネーズに参入してくる」

そのニュースは、キューピー全社を震え上がらせた。なぜなら、参入してきた会社が、第一次マヨネーズ戦争の時の中小企業とは比べ物にならない大企業だったからである。

日魯漁業、日本水産、大洋漁業、伊藤ハム、雪印など、ほとんどが株式を上場している大ブランドであった。

第二次マヨネーズ戦争は始まった。

マヨネーズというのは、卵と酢と油など、特別特殊な材料を使うわけではない。家庭でも簡単につくれる。生鮮食糧とはいえ、量産も簡単。ならば、大資本を投入してつくれば、容易に市場参入できるではないか、と大手は考えた。

大資本力を持つ大食品メーカー相手に、キューピーが価格競争をして勝てるわけがない。

キューピーは今でこそ大企業だが、当時はまだ中小企業の域を脱していない。

「これでキューピーもおしまいだな」

と、参入メーカーは無論、食品業界でも半ば公然と、キューピー絶体絶命がささやかれていた。

中島董一郎はしかし、社内外の動揺をよそに、泰然としてこう言い放った。

「うちの製品のよさがわかる店が販売して、従来通りキューピー・ファンが食べてくれさえすれば、わが社の地盤はゆるぐ心配がない」

しかし同時に、こうも言った。

「こりぁ、まるで軍艦の間に挟まれた、ハシケみたいなもんだな」

中島董一郎に勝算はあるのか。

キューピーは臨戦態勢に入った。と言っても、特別な施策を打ったわけではない。中島が社内で行ったのは、徹底した品質管理と合理化をより一層進めるということで、言わば通常の経営方針と変わらなかった。

逆に言えば、それ以外にとるべき方法がなかったのである。

いよいよ大手メーカーの参入が始まり、キューピーの国内シェアはこの年、十％も落ち込んだ。

キューピーの終焉か・・・。

誰もがそう思った昭和三十八年、つまり大手参入から二年目、落ち続けていたキューピーのマヨネーズ市場におけるシェアが、下げ止まった。

昭和三十九年には反転攻勢。じりじりとキューピーは

持ち直し、ついには昭和四十三年に、大手参入以前の国内八十七%にまでシェアを回復した。

晩鐘は、キューピーには鳴らなかった。

新規参入企業のほとんどのマヨネーズ部門は赤字に転落し、雪印は製造を中止するに至った。

「なぜだ！」

マヨネーズ市場に参入した大メーカーでは、誰もがそう嘆息した。

理由は簡単だった。

参入した大メーカーはいずれも、アメリカ型のマヨネーズを作ろうとした。欧米は肉をよく食べるので、マヨネーズは動物性タンパク質の少ない、あっさりしたものが好まれる。為に、卵黄が少ししか入っていないのである。ところが日本人にとっては、動物性タンパク質はいわば「あこがれの味」で、キューピーのマヨネーズには卵黄を多めに入れてあって、濃い旨味が味わえるのである。

つまり、日本人の好みの味なのだ。

大企業は吹けば飛ぶようなキューピーなど、大資本を投入して市場に参入すれば、簡単に駆逐できると考えた。だからろくに味の研究もせず、「本場の味」というだけで欧米の真似をして失敗したのだ。

「タネを明かせば、そういうことです」

淡々と語る中島董一郎であったが、大メーカー相手に彼が動揺せずにいられた最大の原因は、自社製品に対する絶大な信頼感である。

「食べ物は誰が食べても、うまいものはうまい。そこで、うまいものを安くつくって売り出せば、誰にでもわかってもらえる」

自社製品への信頼感。今の企業に、どれだけそれがあるだろうか。

3、キューピー絶体絶命！王者・味の素の参入外国資本との全面対決へ！

昭和四十三年春、つまり、第二次マヨネーズ戦争が終わり、キューピーのシェアが復活したその年、今度こそ、絶体絶命のピンチが、キューピーを襲った。

巨艦・味の素のマヨネーズ市場参入である。

味の素はその少し前、キューピーに、「親戚付き合いをしたい」という申し入れをした。キューピーの株式を持ちたいと言うのである。簡単に言えば、黙って傘下に入れ、ということだ。

「そうすれば、マヨネーズ市場に参入しないでおいてやる」

という脅しである。

現在のキューピーと味の素の企業規模は、資本金と従業員数で単純比較した場合、キューピーが味の素の約二分の一である。しかし、昭和四十三年当時には、正に「巨人対小人」。二〇倍近い企業規模の差があった。

その巨艦・味の素が、キューピーに全面戦争を仕掛けてきたのである。

社内はもちろん、動揺は全国特約店にも及んだ。

この時中島董一郎は、声明文を取引先など関係各所に発表し配布した（要約）。

「味の素といえばわが国有数の大会社であり、その上には世界的大企業である米国のコーン・プロダクツ会社が存在する。力は絶大である。これに対するキューピーをある人が、スーパータンカーの横のタグボートのようなものだと言った。

私はこのような会社（味の素）と対抗・競争する考えも力もない。

しかしながら、キューピーは依然たる中小企業ではあるが、近年皆様のご愛顧により企業規模も拡大し、その社員の生活を維持するだけの仕事は続けなくてはならない。

もしキューピーがこの戦いに敗れれば、マヨネーズ業界の大部分は味の素とコーン・プロダクツの手に帰する。日本のマヨネーズ業界は、その一生を外国資本の手に委ねなければならない。

四十余年ただマヨネーズ一途に没頭してきた私どもにとって許容し難い状況である」

そして打つべき手として、「純良なる製品をつくることを第一」とし、いたずらに競争をするようなことは避け、新製品の研究育成に力致したい、と述べた。

つまりここでも、大メーカーと正面勝負すれば忽ち潰されるのだから、まず自分の味に自信を持って地場を固める作戦に出たわけである。

対する味の素は、さすがにそれまでのマヨネーズ市場を研究し、手を打ってきた。

キューピーに敗れた企業のほとんどが、キューピーの真似か欧米型のマヨネーズをつくって失敗してきたことを教訓として、味の素は幼児向けの酸っぱくないマヨネーズをつくったのである。

これは意外な盲点で、味の素としてはキューピーの市場を奪うのではなく、マヨネーズの別味市場を創出する工夫を行ったのである。

味の素の作戦はまんまと当たり、国内シェアの比率でキューピーは味の素にかつてないほど急迫された。ところが、味の素の参入は思わぬ副産物を生み出した。

味の素の必死の売り込みがあって、それに対するキューピーの防戦もまた激しく、ついにその競争がマヨネーズ市場そのものの拡大を促したのである。つまり、味の素の好調＝マヨネーズの好調＝キューピーの売上増という図式。競争による、相乗効果である。

味の素との激戦のさなか、昭和四十五年、キューピー

は東京証券市場第二部に上場を果たすまで、業容を拡大するに至った。

この頃になると、味の素の攻勢を目の当たりにしたキューピーの若手社員などが、

「ウチも味の素のような幼児向けのマヨネーズをつくったらどうか」

と提案してきたが、中島は頑として同調しなかった。

「味の素とキューピーのマヨネーズは別物である。キューピーは自社の味を守って生き残る」

と中島は言い放った。

中島は某大手スーパーの創業者のような、自分こそが正しい、などという自己中心的な男ではない。若手の意見もそれが合理性を伴っていれば、どんどん採用して品質管理向上などに役立てた。しかし、味の素のような味づくりをしてはどうか、という提案は、単に向こうが儲かっているから、という理由だけではないか。

かつてキューピーの真似をして撤退していったメーカーはどれも、「キューピーは儲かっているから、真似をしよう」といってやってきたではないか。

「市場はバカではない」

中島はそう言って、マヨネーズ専業メーカーとしての誇りと信念をもって自社の味にこだわった。その結果現執筆時点でも、キューピーのマヨネーズ市場に於ける首位は変わらないのである。

それにしても、元を質せば小さな缶詰卸の商店が、企業規模において圧倒的な差のある大資本相手に、なぜ互角以上の戦いができたのか。

一つは、中島董一郎の自社製品に対する絶大な信頼感が上げられよう。無論、ただやみくもに信頼していたのではない。信頼に足るだけの努力を惜しまないのである。

もう一つは、正しい信念である。

いくつか例を挙げよう。

4、社長室も応接もなし。自家用車すら持たない。

清廉経営者の独特な理念とは・・・

マヨネーズの材料に使用する塩は、当初専売公社の特級精製塩であったが、この純度が九九・五%。

中島董一郎は、〇・五%の不純物の存在がどうにも我慢ならず、専売公社に純度一〇〇%の塩を要求したが、専売公社はこれを拒否した。

中島は烈火の如く怒った。なぜなら、その時の専売公社の言いぐさが、

「食料品ならこれで十分」

だったからである。食べ物を何より大切に考えている中島にとって、この一言は中島の企業家魂に火を付けた。なんと、中島は自分で工夫をして、純度一〇〇%に限りなく近い塩を作ってしまったのである。

またある時、卵黄を大量に入れてある缶の中に、小さな虫が一匹入っていた。当時のシステムでは虫を一匹も入れないというのは不可能に近く、これを気にして全て廃棄していたら、卵は値段が高いから、下手をすると会社倒産になりかねない事態になる。

それでも中島董一郎は全て廃棄させた。結果、社員たちは必死で虫対策を行うことになり、更に一段、品質が向上することになる。

営業に対しても、独自の考え方を持っていた。

ある新入社員が中島董一郎に、こんなことを言った。

「私は口下手なので商売には向きません。製造に回して下さい」

すると中島は、

「ちょっと心得違いをしてませんか。相手を口車に乗せて、うまいこと言いくるめて売るのを商売だと思っているんじゃないですか」

と尋ねた。新入社員が、「そのとおりです」と応えると、

「とんでもないことだ。商売というのは宗教と同じで、正直できれいでなくてはならない。つまり、十円のものを十円で売ることです。あなたがもし相手を口車に乗せて十一円で売って来たら、辞めてもらいます。十円のものを九円で売ってもらっても困ります。そこには適正マージンが入っている。だから、誠意をつくして十円のものを十円で売ってきて下さい。

自分は営業が下手くそだと思っている人にこそ、私は商売をやってもらいたいのです」

中島董一郎は、

(自分が正しいと思う商道を貫いて仕事をし、結果、薄利に終わるのは仕方がない。信念を曲げてまで儲けるつもりはない)

という結論を持っていた。

更に、虚栄を張らなかった事も特筆しておきたい。

売上高一〇〇億円を突破した昭和三十八年。中島董一郎のいた事務所棟は、十四坪のバラック二階建。しかも、社長自ら受付をしていた。応接も社長室もない。

自家用車も持たない。八十歳になるまで、自転車で得意先回りをしていた。周りからどうしても車を使うように説得され、しぶしぶ用いたのが、運送会社から賃借りしているライトバン。

接待は受けない。自社でも、取引先を招待することは稀である。その代わり期末に特約店へ礼金を出す。招待は一時的な遊びにすぎないが、期末の入金は商店にとってどれだけありがたいか。

「社長が贅沢をして、それを社員が羨ましく思い、いつか自分もああなろう、で仕事を頑張るんだ」

などという経営者を、中島董一郎の生きざまは笑い飛

ばしているようである。虚栄は経営と何の関係もない。

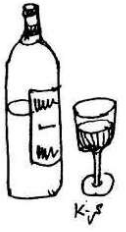
ある幹部が中島に、

「色々な関係で持った株が、値上がりまして、売ろうと思います」

と、世間話のついでに喋った。すると中島は、

「そういう考えがいかんのだ！。いいか、株式が高くなったのは、経営者の粒々辛苦の努力の結果なのだぞ。儲かるからといって売るのは、心ある者のすることではない！」

と言って叱り飛ばしたという。株式公開やキャピタル・ゲインに踊る人々に、中島董一郎の生涯は何を物語るのだろうか。



社告（内規）

☆ 同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会会員へのお誘い

本誌の発行を援助しよう、せめて購読料相当の寄賦をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ケ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

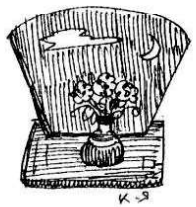
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

哀愁武士道

三戸岡道夫



（一）

江戸城には、人が知らない秘密が多くある。もちろん江戸城の中心は巨大な本丸御殿であるが、その内部は、表、中奥、大奥と、大きく三区分されていた。

表は幕府の中央政庁にあたる場所で、書院や広間、諸大名が集合する詰所、それに役人が政務をとる座敷などがあり、広大であった。中奥はいわば将軍公邸ともいうべき場所で、将軍が政務を執ったり、日常起居する場所である。それに対して大奥は将軍の私邸にあたる場所で、御台所を中心に、将軍の子女や、側室、それに大勢の女中たちが生活していた。

これまで大奥の秘密について語られることは多かったが、表や中奥の秘密については、あまり語られることがなかった。しかし表や中奥にも、大奥とはちがった人に知られぬ秘密が多くあった。将軍の側近くに仕える奥右筆の近辺などは、その秘密の宝庫の最たるものではなかったであろうか。

その日、奥右筆の朝日桜之介は、定刻よりすこし早目に白書院へ入った。老中評定に出席するためである。

老中評定は江戸幕閣の最高機関である。幕府の政治の重要事項はすべてここで決定され、毎月、日を決めて開かれることになっていたが、それ以外でも必要があれば、随時開くことになっていた。

定例の評定は、評議案件があってもなくても、開かれることになっていた。それは老中評定の機能を保持するために必要であったし、また老中評定の権威を確立させておくためにも、定期的に開催しておくことが必要であったからである。だから時には世間話に花を咲かせて解散ということもあったが、それによって老中評定の権威がゆるぐようなことは、すこしもなかった。

老中評定には必ず奥右筆が出席して、一部始終を記録し、それを評定録として保存することになっていた。

右筆とは、将軍や老中の側近にあって文書を取扱い、記録を担当する、書記役であった。しかし徳川幕府最高機関の記録をする役目であるから、たんに能筆というだけでは勤まらず、見識がなくてはならなかった。時には幕府の機密事項にもかかわり、その判断を求められる場合もあるからだった。

右筆は、奥右筆と表右筆に分かれており、奥右筆の『奥』とは、秘密を意味した。すなわち、右筆の仕事の中でも、普通の書類を作成し、普通の事項を記録するのは表右筆の仕事であるが、機密に属する事項や重要事項となると、奥右筆の担当になるわけである。

奥右筆には組頭が二人おり、その下に二十名ばかりの右筆がいるのだったが、朝日桜之介はその組頭の中の一人であった。

奥右筆は老中評定の議題文案を作成したり、評定の内容を記録したり、また先例に徴して事の当否を決定したりして、機密文書を取扱う機関係であり、時には老中評定内容についての判断や、参考意見を求められることもあったから、権威の高い部署であった。

したがってその組織も、勝手係、仕置係、隠居家督係、縁組官位補任係、寺社係、屋敷係、証文係などと多岐に分かれ、その担当する仕事も、経費出納に関する調査、意見具申、重罪の審判の調査と当否の決定、大名旗本の家督、昇進、婚姻、屋敷の下賜、家禄や扶持米の調査などと、広範囲にわたっていた。したがって運用次第では、幕政のすべてに関与することが出来たのである。

たとえばその仕事振りの一例をあげると、町奉行所から奉行所の建物の一部を修繕したいという申請が、老中のところへ上ってきたとする。老中はそれを奥右筆へ下げ渡し、奥右筆は作事奉行の方へ下げ渡す。作事奉行ではそれを評議して、その結果を奥右筆の方へ返してよこすのである。奥右筆ではそれを基にして検討し、自分の意見を付けて老中へ差し出す。そして、それが老中の腹案になるのだった。すなわち実質的には奥右筆の意見が、幕府最高機関の決定となるのだった。

これを現代の企業でいえば、秘書室、企画部、調査部、検査部、人事部が一つになった強力な部署が、奥右筆であるということができようか。いわば社長や重役を背後から動かす、陰の経営運営部署といえばよいのかもしれなかった。

さて、今日の老中評定は定例の評定だったが、朝日桜之介の方ではとくに評議の議題を事前に聞いていなかった。

（今日もまた例の世話話でお茶を濁すのか）

と桜之介も気楽な気持で出席していた。

桜之介は内藤主馬という若手の右筆を一人従えていた。内藤主馬は有能な右筆で、達筆の上に、記録する筆の運びも速かった。その上、評定内容を理解する力も高かったので、記録の出来上りが正確だった。そのため老中評定では、いつも桜之介は内藤主馬を使うことにしていた。

奥右筆は記録係といっても、たんなる記録係ではない。ただ評議内容を書きとめればいいというのではなかった。いわば公式の評定録を作成するわけである。だから正確でなくてはならないし、また整合性あるように纏められていなくてはならなかった。だから主馬が一語も書きもらすまいと、ひたすら筆を走らせる一方で、桜之介の方は評定全体の流れにたえず気を配り、評定の急所、要点などを、重点的に記録した。そして後日、主馬の速記と併せて、評定録に仕上げるのだった。二人の間は、そうした主従関係の作業分担によって結ばれているわけだった。

しかし組頭である桜之介には、さらにもう一つ、重要な任務があった。それは評定の議題の説明や、調査内容の報告を行い、時には評議内容についての意見を求められ、それにも答えなければならないのだ。いわば桜之介は記録係であると同時に、老中評定の実質的なスタッフであり、老中首座を支える進行係なのでもあった。だから評定中、桜之介はいつも頭をフル回転させていなくてはならなかった。ひょっとすると評定中、一番頭をフル回転させているのは、居並ぶ老中達ではなくて、桜之介かもしれなかった。

（二）

さて書記台を前にして桜之介と主馬が待つうちに、次々と老中たちが集ってきた。

最初に入場してきたのは松野忠秋といって、老中職の中でも最年少の切れ者である。桜之介と眼が合うと、親しげな表情を浮かべて、一番末席に着いた。忠秋と桜之介とは年令が近いという関係もあって、うまが合っていた。

次に入ってきたのは酒井政孝といって三番目のポスト。すなわち五人いる老中の中の、真中に位する老中である。福川藩の藩主という家柄のよい大名である。したがって気位いだけは高いのだが、執政者としては平凡といってよかった。

つづいて次席老中の牧野信定と、ポスト四番目の板倉久周とが、なにやら親しげに話しながら入ってきた。そして少し間を置いて、老中首座の大久保氏房がぴたりと正面の座に着くと、評定が始った。

「今日は何かありますかな」

と首座の大久保氏房が口火を切って、手に持った扇子をパチンと鳴らした。しかし、

「……」

誰からも声がなかった。

特別の案件があるときはその都度評定を開いて決裁してしまうから、定例評定にはあまり議題がないのだった。なくても何か提言を考えるとか、何か報告事項とかを探せばいいのであるが、無能のためか、怠惰なのか、老中たちはそうした準備をしてこないのである。時に見るに見かねて奥右筆の方から議題を用意することもあったが、今日はそうした準備もしてなかった。

「今年は珍らしく火事がありませんな」

とか、

「昨日の雨で拙宅の塀が崩れましてな。また修理しなければなりませぬ。出費がかさんで難儀なことですわ」

などと、思いついたことをとりとめもなく口にしていると、

「そう、そう、塀の修理で思い出しましたが、新山藩ですな……」

と酒井政孝がそう言った。

「新山藩に何かありましたかな」

次席老中の牧野信定がぎろっと眼をむいた。

「いや、ちょいと耳に挟んだ噂にすぎないのだが」

「何です、その噂というのは？」

「城の櫓を作ったというのです」

「それは重大事件だ」

「城の櫓が古くなったので、修繕の工事をした。だが修繕とは名目で、本当は古い櫓を取りこわし、新しい櫓に作りかえたのだ。それも元の櫓より規模の大きいもので、櫓の新築だというのだ」

「それでは公儀への違反ではないか」

「しかし、噂だけですからな、本当のところはわかりません」

世間知らずの酒井政孝はのんきそうに、そう言った。

城や櫓の新築、堀や石垣の増設は、公儀へ弓を引くものとして、禁止されている。それが発覚すれば、お家断絶か領国追放である。

「誰かが調べてはおらぬか」

頭の鋭い老中首座の大久保氏房がそう問いつめると、

「いや、そう聞いてはおらぬ」

「もし本当なら重大事じゃ。奥右筆の方で至急手を廻して調べてくれ」

とばっちりが桜之介の方へ飛んできた。

「はい、早急に……」

こうした案件を処理するのも、奥右筆の仕事だった。

こうして、しばらく暇な時間を弄ぶように、各藩の城郭についての話がつづいていたが、そんな中で、ふっと、

「櫓と言えば以前、水留藩にも同じような櫓増築の問題がありましたな」

という話になった。

「水留藩にですか？　そんなことがありましたかな」

「もう五年も前のことだから、拙者にも記憶は確かではないが、たしか水留藩であったと思うがな」

水留藩の名前が出たとき、桜之介はひやりとした。脇の下を、にわかに冷汗が、つ、つーっと、流れた。たしか五年ほど前に、水留藩にも同じような櫓の増築問題があった。しかしそれは桜之介がひそかにもみ消して、公にしないで処理してしまった事件であった。

評定終了の時間が迫っていたので、幸い水留藩の櫓事件はそれ以上話が進展せずに、無事、老中評定は終ったが、書記台から立ち上った桜之介の額には、べっとり脂汗が浮いていた。

評定が終ると、桜之介と主馬は、奥右筆の詰める部屋へ戻った。

評定の席で主馬がひたすら筆を走らせた記録では、文字も乱雑で、文章も整っておらず、そのままでは幕府公式の評定記録にならないので、それに桜之介の記録や所見なども加えて、文意を整える作業に入った。その段階で、主馬が、

「さきほどの水留藩の櫓の発言は、いかがいたしましょうか」

と指示を仰いだ。桜之介とコンビを組んで、ぴったりと呼吸の合った主馬には、以心伝心で桜之介の内心の動揺が判るのだった。

「うむ、そうだな」

と桜之介はちょっと首をかしげたが、

「消しておいてもらおうか」

「かしこまりました」

こうして水留藩の櫓事件は抹消され、幕府の公式記録から姿を消した。

(三)

その日は午後になると雪が降りはじめた。

背中がぞくぞくして、身震いしながら障子をあけると、低い雲の下から白いものがちらちら舞いはじめていた。

「寒いはずだ。雪が降ってきた。今日は特別用事もないし、早じまいにしようか」

桜之介はそう言いながら、江戸の町が次第に雪で化粧されていくのを遠く眺めた。

駕籠に乗って自邸へ帰る途中の道は、もううっすらと白く雪が積っていて、駕籠人足や供の者の足跡が、その上に点々と模様を描いていた。

自邸へ着くと、妻の綾乃を先頭に、家臣たちが、

「お帰りなされませ」

と玄関に頭を下げた。綾乃は桜之介とは一つ年下であるが、童顔のために年令よりずっと若く見えた。綾乃は

それを嫌って、年相応よりも地味な衣裳を身につけるといった、普通と逆の行き方をする女だった。

居間へ入ると綾乃は桜之介の着替えを手伝いながら、

「水留藩の星川様がお見えになっております」

と告げた。

今日の老中評定で水留藩の櫓増築の話が出た直後だけに、星川修理の来訪は、

（何だろう？）

と桜之介の胸を騒がすものがあった。

「星川か。珍らしいな」

櫓事件が起きたときは、星川修理は一刻（いっとき）、ひんぱんに来訪したが、事件が片付くとその足は遠のいた。しかし足が遠のいたのは無事の証拠だと、無沙汰を責めるよりも、無事をよろこぶ気持の方が強いのだが、それがまた姿を現わしたとなると、

（また何か起きたのか）

と暗い予感が頭をよ切るのだった。

着替えをすませて桜之介が出ていくと、冷えた座敷で星川修理は待っていた。

「お久しうございます」

修理は深々と頭を下げた。

「今日は冷えるな。雪がだいぶ降ってきた。もう少し、こちらへ寄られよ」

桜之介は手あぶりをすすめ、冷えた茶を取りかえさせた。修理はだいぶ長い間待っていたらしい。

星川修理は水留藩の江戸留守居役である。江戸藩邸の留守居役をもう十年以上も勤めるベテランで、水留藩にとってはかけがえのない人物だった。年令はそろそろ四十歳に近く、髪にはちらほら白いものが混りはじめていたが、顔には精気が溢れ、ずっしりとした武士の風格が身体の底から立ちのぼっていた。しかし今日は思いなしか、その顔に生気がない。

「どうだ、息災（そくさい）かな」

桜之介から声をかけると、修理は、

「は、は、はっ……」

と平伏したが、すぐ顔を上げて、

「今日はお別れにまいりました。この度、江戸留守居役の任を解かれ、領国へ帰ることになりました。そのご挨拶にまいりました」

すこし悲痛な面持ちでそう言った。

（なぜ？）

という疑問がすぐ桜之介の中に湧いた。そしてその思いはすぐ、

（星川修理のような腕利きを江戸藩邸から失くしてしまって、水留藩は大丈夫なのか）

という心配へつながっていった。

「罷免されたのか」

「……」

修理は答えなかったが、その悲痛な表情がそれを肯定していた。

（やはり何かあったのだ）

と思ったが、桜之介はそれ以上追究せず、

「あの件は大丈夫なのか」

とそれだけを、念を押すように言った。あの件とは、もちろん櫓増築事件である。すると修理の顔はいっそう悲痛に歪み、

「それは、なるようにしか、なりませぬ」

と、ちょっと投げやりな調子でそう言ったのである。星川修理にしては珍らしい喋り方である。

（やはり何かあったのだ）

すると桜之介の頭の中に、今日の老中評定記録簿を作成するにあたって、『水留藩の櫓増築事件』の発言を、すべて内藤主馬に削除させてしまったことが、黒々と甦ってきた。

星川修理は今から五年ほど前、『水留藩の櫓増築事件の処理』のために、さる筋へ紹介した人間だった。幸い、その処理は隠密裡にうまくいって表沙汰にならず、水留藩は今日まで安泰であった。しかし事が事であるだけに、この問題はいつまた火を噴くかわからない危険性をはらんでいた。現に今日も、雑談中のこととはいえ、老中評定の話題となったではないか。幸い今日は時間切れで大問題にならずにすんだが、いつまた再燃するかはわからない。

しかし事件が再燃しても、水留藩江戸屋敷に星川修理がいる限りは、なんとかうまく処理するであろう。しかし修理がいなくなって大丈夫かという心配が、桜之介の、

（あの件は大丈夫か）

という質問になって出たのである。それに対して修理は、

（なるようにしか、なりませぬ）

と投げやりに答えた。桜之介はついにたまりかねて、

「何かあったのだな」

とやんわり聞いてみた。それに対して修理は、

「いえ、別に……」

と明言をさけたが、その口ごもった言い方は、明らかに何事かを桜之介に訴えたがっていた。しかし結局修理は何も話さずに、

「では、これにておいとまいたします。長い間、本当にありがとうございました」

と最後の言葉を残して帰っていった。

星川修理が降り積った雪をふんで帰る足音を遠くに聞きながら、桜之介は釈然としない気持で、

（それにしても水留藩の藩主は、星川修理が江戸藩邸からいなくなることの危険性を十分知った上で、彼を罷免したのであろうか）

と、水留藩の前途に横たわる不吉な運命を、ふと気ず

かう眼になった。

（四）

水留藩に櫓増築問題が起きたのは、今から五年ほど前のことだった。藩主は先代の秋野綱政のときで、すなわち現在の藩主綱輝の父である。

五万石の水留藩の城は、それほど壮大な城ではない。五万石という石高相応の小振りな城だった。しかしその形が優れていて、山に囲まれて開けた水留の町の中央に、山の緑を背にしてそびえた姿は見事だった。しかしその城も築城後日が経ち、痛みもはげしくなっていたので、ある年大修理が行われた。

かねがね藩主の綱政は、城郭の形にある不満を持っていた。城郭の東と西の隅に、二つの隅櫓が置かれていたが、東の隅櫓が二層なのに対し、西の隅櫓が一層だったからである。それで、

（いつか西の隅櫓も二層にしてみたい）

と綱政はつねづね願っていた。そしてこの時の大修理のどさくさにまぎれて、西の隅櫓を一層から二層へと、作りかえてしまったのである。

当時、大名の城の増築や手直し、武器の増強はご法度だった。幕府は各地の大名の反乱を極度に警戒していたので、城の手直しや武器の増強は、幕府への反逆と見なされたのである。しかし今や天下は完全に徳川幕府の総括下に入り、泰平の世がつづいている。城を構え、武器を蓄えて、幕府へ戦を挑む大名などいる筈がなかった。

だからどの大名も、城の手入れを、見えない程度にはやっていた。城の増築は出来ないが、城の修理、保全なら出来る。屋根瓦を直すついでに城郭の角を少し拡げるとか、城門の上に飾り屋根をつけたり、大雨の排水のためと称して堀を深くしたり、また石垣を補強するようなことを、それとなくやっていた。

もちろんそうした工事は、公儀へ届けるわけではない。したがって幕府備付けの大名城郭図面にも載ってはいないし、また現代のように写真があるわけでもない。せいぜい公儀隠密の筆によってスケッチされている程度であるから、れっきとした証拠として幕府が握っているわけではなかった。

だから大名の間には、城の修理保全工事を、いかに公儀に見つからずにやるのかというのが、ひそかな競争になっているようなところもあった。それはあたかも、近頃あまりに奢侈禁止令がきびしいので、人々が、着物は地味にして、裏地や見えないところに贅をつくして、粋を競うのに似ていた。

「殿、一層の櫓を二層にするのは、外から見てすぐわかりまする。いささか限度を越えておるのではないかと思われますが……」

と家臣がいさめたが、綱政は聞きいれなかった。

「なにも新しく櫓を作ろうというわけではないし、今ある櫓をちょっと作り直すだけのことだ。どこの藩でもやっていることだ。一層を二層にすると、かしこまっていうと大袈裟に聞えるが、なに、ちょっと櫓の丈を高くして、その途中に飾り屋根を付けたと思えばいい。ひとつ屋根がふえたからといって、別に水留藩の軍備が強化されるわけではない。ちょっと城をいじくっただけで、やれ公儀への謀反だの、反乱だのと、眼くじらを立てることがおかしいのだ」

藩主自らがそう言い切って工事を進めたのだから、もう止めようがなかった。

綱政はもともと剛直な性格である。公儀の意向など歯牙にもかけないところがあった。それに水留藩が江戸から遠隔の地にあるということも、綱政の気持を油断させていたのかもしれない。

（こんな僻地の櫓ひとつの変化など、公儀の目にとまるはずがない）

こうして水留城は東西に二層の隅櫓を備えて、その美をいっそう誇ったのである。

（五）

だが水留藩の隅櫓の増築は、やがて幕府の知るところとなった。幕府の探知力は、藩主綱政が考えていたほど甘くはなかったのである。

ある日、水留の城下町へ、見知らぬ行商人があらわれた。行商人は城の櫓の見える茶店に腰掛けて、甘酒を飲みながら、じっと西の隅櫓を見ていた。そして小型の矢立てを取り出すと、すばやく何やら書き写して、懐ろに納めた。それはすばやく、かつ自然な動作だったので、茶店の客は誰ひとりとして気がつかなかったが、茶店の亭主だけははっきりと、

（お城の櫓を写しているな）

と見たのである。

それから行商人は荷物を重たげに背負うと、茶店を出て、城の堀の方へ歩いていった。そして櫓のまわりを何回も偵察するように歩くと、ときどき立ち止り、矢立てを取り出して何かを描いているのを、町を行く人の何人かが見ていた。こうして、

（公儀の隠密が櫓の増築を探索に来ているのだ）

という噂が城中にひろがるのに、さして時間はかからなかった。この噂は城の武士たちをどきりとさせた。

（まさか）

とは思うものの、そうでない保証はない。いや、そうである危険の方が強いのである。幕府の力は藩主綱政があなどるほど、脆弱なものではない。

とくに心配なのは、藩主の綱政もさることながら、国

許筆頭家老である松岡市左衛門の態度だった。藩主綱政から隅櫓の増築の話が持ち出されたとき、筆頭家老という、まっ先にそれを阻止しなければならない立場にあるのに、まっ先にそれに賛成したというのである。いや賛成したというよりも、綱政の歓心を買うために、むしろその話を煽りたてたきらいがあった。しかし、

（公儀の隠密が入ってきた）

という噂は、

（こんな遠隔地の櫓などへは、幕府の眼が届くはずがない）

と思っていた市左衛門の自信をゆるがせた。うす気味の悪いものが市左衛門の背中を走り、

（さて、この情報を殿の耳に入れた方がいいか、どうか）

と瞬間迷ったが、

（しばらくは黙っていた方がいいだろう）

と判断した。今の段階では、隠密が入ったらしいということだけで、その確証を摑んでいるわけでもなく、また公儀から別段のクレームが来ているわけでもなかった。そんな段階で下手に耳に入れれば、剛直で短気な綱政のことである。

「幕府は横暴だ。けしからん」

といきなり立ち、騒ぎ立てるにきまっている。あまり早い段階で報告するのは、かえって問題を大きくし、起さなくてもいい騒ぎを起しかねない。市左衛門は、

（こんな問題はこちらでやるのではなくて、江戸の方で処理させればいいのだ）

そう狡猾に考えると、半日ほどかけて、隅櫓の増築のいきさつと、いま起っている問題点とを、くわしく書面にしたためた。

そしてそれを使者に持たせて江戸藩邸へ走らせ、隅櫓増築事件の江戸での対処方を指示したのであった。

国許からのそんな使者が着いて、驚いたのは水留藩江戸上屋敷だった。

江戸家老の永井高之助は、市左衛門の書状を受取ると、

「む、む、むーっ……」

と全身が寒気が走った。

（とんだことになったわい）

永井高之助はただちに留守居役の星川修理と、目付の半田市兵衛を呼ぶと密談に入った。

「困ったことを国許では起してくれた」

渋面の高之助の顔に、ただならぬものを感じた星川修理は、

「いかがいたしました」

「まず、これを読んでくれ」

渡された書面を読むうちに、星川修理の背中にも寒気が走った。が、読み終った修理は、

「いつも国許のやり方は、これだから困ります。事前の相談など何もしてこないのに、困った時だけこっちへ尻を持ってくる。しかるべき対処しろといっても、どう対処しろというのでしょうか」

と怒りをぶちまけ、

「もちろん隅櫓の増築については、こちらでもうすうすは知っていました。しかし事前に相談があったわけでも何でもありません。また完成してからも、出来上ったという報告があったわけでもありません。それなのに、こうした困った事態になると、江戸で対処しろという。勝手なものです」

江戸の方でこの事件を処理するとなれば、それは一に、星川修理の肩にかかってくる。それだけに修理の不満は強く、

「ご家老さま、そうは思われませぬか」

とたたみかけて言った。

「わしとて、まったく同感じゃ。松岡殿は国許家老だというのに、いつもそのような仕事振りだから、困ったものだ」

「そうです。江戸表の仕事の重大さや、困難さが、まったくおわかりになっておりませぬ」

「うむ、国許から一歩も出たことのないお方だからな」

「松岡様は、殿のご機嫌だけを取っていればいいとの態度ですが、それでは藩政は廻っていきませぬ。それなのに松岡様は積極的に隅櫓の増築に賛成されたというではありませぬか。国許筆頭家老ともあれば、当然、お止めしなければならない筈なのに、筆頭家老みずから進んで行うとは……、これでは藩の将来が案じられまする」

「これ滅多なことを言うでない。まあ、そうしたことはさておいて、批判ばかりしていても、どうともならぬ。事が現実に起きてしまったのだから、とにかくそれを片付けなくてはならぬ」

「はい、それはわかっておりまする。まかり間違えば、お家の重大事にも及びかねない事件です。ただちに万難を廃して、事の処理にあたる覚悟は出来ておりまする」

「うむ、いまとなっては、それより外に致し方ない。わたしはわたしの方として各方面に手を廻すから、修理、おぬしの方もしっかり頼むぞ」

「かしこまりました。こうした時のためにわたしは江戸留守居役を仰せつかっておるのですから、全力をあげて解決にあたりましょう」

星川修理は決意のほどをそう述べた。しかし、

（わたくしに一切お任かせ下さい）

とまでは言わなかった。もちろん気持としては重々そう言いたかったけれども、そう言い切るには、あまりにも事件の処理は困難であった。

（六）

星川修理はただちに活動をはじめた。しかし降って湧いたような事件処理に、何を、どう対応したらいいのか、皆目見当がつかなかった。まず、

（幕府が水留藩の隅櫓増築事件をほんとうに嗅ぎつけたのかどうか）

それを知る必要があった。それが本当だとしたら、

（誰に頼んでそれをもみ消すか）

それを考える必要がある。だが考えているだけでは、いい知恵は浮かんでこない。

そんなある日、江戸留守居役の寄り合いの通知がきた。それは毎月、定例的に開かれる寄り合いで、集まる人数は三十名を下らない。会場は深川の鈴半という大きな料亭である。

（もしかしたら、なにか情報が摑めるかもしれない）

修理の胸にあわい期待が湧いた。とりあえずはそんな筋にでも頼るしかない心境だった。

江戸には、全国の三百に近い大名が、それぞれ江戸屋敷を構えているが、どの藩邸でも留守居役というものを置いていた。留守居役の役目は、現代の言葉でいえば情報蒐集と、渉外活動という重要な仕事で、いわば藩の外交官といってよかった。したがって大名家が江戸で無事世の荒波を乗り切れるかどうかは、江戸家老の採配よりも、むしろ、実際その渉に当る留守居役の手腕にかかっているといってよかった。

大袈裟にいえば、藩の存亡は江戸屋敷の活動如何にかかっているといって、過言ではない。なにか藩に事件が起きた場合、江戸屋敷が公儀にたいして巧みに手を打てば、無事に事を納めることが出来、お家は安泰である。しかし江戸屋敷の処理が不手際だと、お家断絶などの悲運に見舞われることにもなりかねなかった。したがって藩存亡の鍵を、江戸留守居役が握っているといっても過言ではなかった。

そのためにどの藩でも、江戸留守居役には人材を抜擢し、その活動に要する費用を惜しみなく使わせていた。水留藩の星川修理も、そうした留守居役の一人であるのは、いうまでもなかった。

江戸時代は現代のように電話があるわけではなく、また新聞、テレビがあるわけではない。情報蒐集はすべて人手に頼らなくてはならなかった。そのため江戸の留守居役たちはたえず仲間内で集っては酒を飲み、そうした場を通して情報を集め、交渉の糸口としていた。

寄り合いを開くとすれば、会場は町の料亭であり、ときには飲んだ勢いで、吉原や岡場所などへ繰り出すこともあった。そうした付き合いをしなければ、留守居役たちは仲間あつかいをしてくれず、外交官としての役目が果せないから、彼等はせっせとそうした遊興の道にはげんだのである。

江戸には三百人を越す留守居役がいるわけであるが、もちろんその三百人が一堂に会するわけではない。留守居役たちはいつのまにか、二、三十人ぐらいずつのいくつかのグループに分かれ、せっせと派手に遊興の巷に出入りしているのだった。それはあたかもバブルの最盛期の東京、夜の十一時、十二時になっても、銀座裏のネオン街が、酔っぱらったサラリーマンで溢れていたのと同じようで、それが江戸の繁昌の大きな原動力にもなっているのだった。

だから留守居役たちはいずれもが外交術にたけ、姿形も粋（いき）で、おしゃれで、三味線や小唄などの、芸達者であった。野暮では留守居役はつとまらない。だから役目交代で国許から来たばかりの留守居役も、最初は田舎臭くても、あっという間に江戸の水に慣れて、毛虫が蝶へ脱皮するように、粋な江戸侍へと変身していくのだった。

そうした中で星川修理は、どちらかというと剛直で、武骨者タイプだった。しかし星川修理といえどもこうした留守居役の世界に長年身を置くにつれて、次第に武骨さにもそれなりの磨きがかかり、如才なさばかりが目につく軽薄な留守居役たちの間にあって、その男らしい清々しさ、頼もしさが、どの料亭へ行っても星川修理の人気を高めていた。

（つづく）

祝出版

月岡兎平著
（瀧澤中）
「佐藤一斎物語り」
―重職心得箇条―
中経出版　九〇〇円

大和禎人著
「蝸牛（かたつむり）のうた」
栄光出版社　三、〇〇〇円

お告げ

森実与子



（一）

電話のベルは、まだ夢の途中にいた石田ユキを暴力的に叩き起こした。

重い瞼を開けると、網になった雨戸の隙間から朝の光がベッドの上にこぼれ落ちている。朝に弱いユキにとって、午前中の電話ほど不愉快なものはない。電話の音を無視してそのまま眠ろうとしたが、けたたましく鳴り響く呼び出し音に、ユキは仕方なく布団の中から手を伸ばして、ベッド横のサイドテーブルの上にある電話の受話器をつかんだ。

「もしもし……」

「もしもし、笠原ですけど。まだ寝てました？」

ユキは相手に聞こえないように咳ばらいをして、普段より一オクターブ高い声を出した。

「いいえ、起きてるわ」

「隠したって声でわかるよ。寝ているところをおこしちゃったな。でも、……今日はいい天気ですよ」

時計を見ると、まだ九時である。ウイークディならともかく、休みの日の九時というのは非常識もはなはだしいと、

「ばれちゃったか。朝早くから元気だこと」

ぶっきらぼうに答えた。しかし笠原は、不機嫌なユキにおかまいなしに続ける。

「次の日曜に、引越し祝いのパーティーをやるつもりなんだけど、よかったら来ませんか？」

「……そういえばお引越しするっていってたわね」

「一週間前に引越しました」

「どう、新しい住まいは？」

「へえっ、おかげさまで、新築で前より広いし、お風呂もクーラーもついているんです。出世しましたよ、はい」

「よかったわね」

「今回のパーティーは、スペインで買ってきた生ハムが目玉ですから」

「スペインに行っていたの？」

「……ええ、まあ。それで、会費は物納制なんです。お米でもアワでもヒエでも、食料になるものだったらなんでも結構ですから、ご持参ください。……では、睡眠中に失礼しました。おやすみなさい」

おどけたような笠原の電話は一方的に切られ、ユキは再び眠りについた。

夢を見ていた。

日陰の陰気な部屋だった。ベッドや机や本棚に囲まれた狭い部屋の隅の古びた流しの前で、エプロンをつけた笠原が甲斐甲斐しく料理を作っている。ユキはベッドの端に座り、料理ができるのを待っていた。狭いながらも小奇麗に片付いた部屋で、笠原がうれしそうに料理を作り、ユキも笑いながら彼の姿を眺めている。

そこでパッと目が覚めた。時計を見るともう十一時である。

ユキはやっと起きる気になって、ベッドから身体を起こしたが、夢と電話がごちゃまぜになって、本当に笠原から電話があったのかどうかわからなくなっていた。しかし窓をあけると、笠原のいった通りに太陽が顔を見せ、天気が良さそうだ。

その日、何の予定もなかったユキは、一週間分の洗濯をすると久しぶりに自分で料理を作り、借りてあった映画のビデオを見て、一人でゆっくりと過ごした。

笠原和樹はこれまで、風変わりな放浪生活を送っていた。少なくともユキにとって、まったく理解不可能な日常なのだ。

一年以上も日本を留守にして、世界中の風変わりな建築物の写真を撮って歩いたり、アパートを引き払って、廃車になったバスの中で旅をしながら生活してみたり、およそ普通の人間が考えつかない意表をついた行動をとる。そしてその体験記を出版社に売り込んで本を出すという、体当たりのカメラマン兼物書きのようなことをしていた。その笠原が、この一年ほどは放浪生活から足を洗い、東京の真ん中の新宿にアパートを借りて、定着した生活を送っている。

「新宿なら、たいていの仕事先に自転車で行かれるからね。家賃が安いからって郊外に住んで、交通費をかけて都心に出るよりも効率的だと思うんだ」

「そうかしら。今はインターネットもファックスもあるのだから、カサさん好みの田舎の生活を送ることもできるじゃない」

「でもね、定住するなら、やっぱり摩天楼のなかに住みたいんだよ」

たとえどんなに狭くて汚いアパートでも、新宿のど真ん中という地の利のよさを選んだのは、笠原独特の処世術なのだろう。

ユキは何度か、笠原のアパートを訪れていた。

六畳一間に風呂ナシ、共同トイレ、築四十年くらいの木造のアパートは、うらぶれた生活感が漂い、それまでの笠原の振舞いとは正反対だった。ところが、アパートの老朽化にともなう建て直しで、笠原はそこから追い出される羽目になり、不動産屋が探してくれた新しいアパートへ引っ越したのだった。笠原はその新居に親しい友人を集めて、お披露目をするつもりなのである。

パーティーの参加費は食料。それは笠原ならではのユニークな発想で、彼の特徴を端的に表わしていた。というのも、笠原にとっては食料、つまり喰うことが、なにものにも代え難い最重要課題だからだ。

半年ほど前のこと。

十二月はじめの休日に、ユキは、笠原に誘われて栗拾いに出かけた。

笠原が運転するバイクの後に乗り込み、笠原の大きな体にしがみつきながら甲州街道を突っ走り、二人で八王子に山を持つ笠原の友人の家を訪れたのだ。

そこは東京とは思えないほどのどかな田舎家で、鬱蒼とした裏山は、一面、栗林だった。

「栗のイガは痛いから、直接素手では触れないよ。ちょんと軍手をはめて、棒でつついて栗を探すんだよ」

てきぱきとやり方を指示する笠原は、慣れたものだった。

しかし、草木が複雑にからみつく山の斜面で、落ち葉に埋もれた栗を見つけ出すのは困難を極めたし、時期が遅かったため、実のほとんどは虫に食われていた。しかも、木のツルや枝が体にからみついたと思えば、Gパンやコート、スニーカーを通して茨やイガがささり、ユキにとっては、苦痛以外の何ものでもなかった。

「栗拾いがこんなにたいへんだなんて、思いもよらなかったわ」

お遊び気分の森林浴ぐらいにしか考えていなかったユキは、早々に弱音を吐き、晴れた気持ちのいい日に、暗く奥深い山にこもって困難な作業を強いられたことに、少し腹を立てた。

ところが笠原はイガの痛みをものともせずに、「こんな山のなかに小屋を持てたらいいなあ」といいながら、半日でダンボール一杯分の栗を拾って上機嫌だ。

昼食はその家の台所を占領し、冷蔵庫のなかのありあわせの材料で、三人分のチャーハンとサラダを作ってくれた。実に手慣れたものだった。おまけにその家の庭で

栽培された玉ネギやキーウィをもらって、

「わーい、これで一ヶ月は生き延びられる」

と大喜びしている。

笠原の食料に対する強烈な欲望を目の前で見せつけられ、ユキは啞然とした。栗拾いといえども遊びなんかじゃなく、笠原にとっては生活のかかったレジャーなのだ。栗でも、たとえわずかな果物でも、食べ物を手に入れることは、笠原の最優先の仕事なのだろう。

「やっぱり人間は、自給自足の生活が一番だよね。この家の雇われ農民にしてくれないかなあ。……いつか自分の畑を持って、農作物を育てながらモノを書くのが夢なんだ。いわば農民作家だね」

他人から野菜や果物をもらい受け、質素な自炊生活を送っているのは、笠原の理想の生活がシンプルな自給自足だからだであり、

「皆さんの好意に甘えながら、貧乏に徹した生活をしようと思って」

とわけのわからないことを口にする。

貧しさからはいあがろうとするのではなく、それを売りにして他人をアテにするとは、なんて身勝手でお気楽な言い草だろう。笠原はおめでたい男だと、ユキはあきれた。

笠原知り合ったのは、共通の友人の誕生日パーティーでのことだった。

「母親は、九州で小学校の先生をしているんです。私が出世したら呼び寄せるつもりなんだけど……」

確か初対面の時、幼い頃父親を亡くし、母一人子一人の境遇だと、笠原は自分の身の上話をしてくれた。そんな生い立ちが、影響しているのかもしれない。

（食料へのあくなき執念は普通ではないけれど、明日はどうなるかわからない今の時代、カサのような生き方は、むしろ堅実なのかしら。カサは人一倍、自衛本能が強いの？　それとも食べるという原始的本能が？いずれにしてもカサの思考回路は、私にはまったく解読不可能だわ）

ユキは笠原という男を知るにつれて、不思議な思いにかられるのだった。

しかし時にはユキを自分のアパートに招待して、手料理をご馳走してくれたり、彼なりのやさしさも持ち合わせている。そのメニューも、友人知人のカンパで仕入れた食材を使った大豆やひじきの煮物、春菊のおひたし、肉じゃがといった具合に、ヘルシーな家庭料理ばかりなのだ。

「おふくろの味ね。カサさんマメだから、いいお嫁さんになれるわ」

仕事に追われ、気の向いた時にしか自炊をしないユキが笠原のマメさ加減に感心して感嘆の声をあげると、

「はぁ、お嫁さんですか……」

首をすくめてしおらしく答える姿は、なんとなく憎め

ない。

格闘技が似合いそうな大きくいかつい体軀だが、髪を短く刈り込み、額が少し禿げあがった丸い顔には人なつこさがある。ハードさを売りにしながらも、笠原の持つ繊細な一面が、ユキの心をくすぐるのだった。

異質な笠原と知り合って、もう三年近くがたとうとしていた。

女性週刊誌の芸能記者のユキは、日々、芸能人のスキャンダルを追い求め、日本全国を取材に飛び回るという、めまぐるしい毎日を送っていた。

学生時代、最新のレストランやファッションのお店を取材して記事にするアルバイトをした縁で雑誌社に片足を突っ込み、そのまま就職せずに、フリーランスの記者となった。いくつかの雑誌を掛け持ちしてインタビュー記事やルポを手がけているうちに、ユキはいつしか、中堅としてのキャリアを持つ雑誌記者となっていた。

しかし一年ほど前から、女性週刊誌『週刊馬子』専属の芸能記者に転身した。複数の雑誌を掛け持ちするより、一ヵ所に腰を据えて仕事をしたいという気持ちから、女性週刊誌のなかでもトップの部数を誇る『週刊馬子』の専属フリーとなったのだ。だが、芸能関係に特別に顔がきくわけでもなかったため、かえって辛い仕事だった。

ユキは一見したところ、活動的に取材をてきぱきこなすタイプには見えなかった。いわゆる芸能記者とはかけ離れた、お嬢さん風外見なのだ。一見不似合いな仕事を続けてこられたのは、雑誌記者という仕事が、案外自分の性分に合っているのだろうと思っていた。

ユキは、都内のワンルームマンションで一人暮しをしている。

中学生の頃、母親は交通事故で亡くなった。自転車で近所を買物している途中、車にはねられたのだ。昨日まで、いや、つい今しがたまで元気でピンピンしていた母が、この世から忽然と姿を消したことに、中学二年生のユキは茫然自失とした。母親とべったりだったユキにとって、その衝撃は大きかった。すぐには、悲しさや寂しさという感情さえも沸き起こってこなかった。あまりにもあっけない死だったために、信じられなかったのだ。朝になれば、またいつものように朝寝坊のユキを起こして、学校に送りだしてくれるに違いない……。

しかし、その死は現実だった。まるでノートに書いた鉛筆の文字を消しゴムで消し去ってしまったかのように、人間はかくも簡単にいなくなってしまうことを、ユキは心に深く刻みつけ、大きな空洞を心に抱え込んだのだった。

それ以来ユキは、心を固く閉ざすようになっていた。といっても、いわゆる閉じこもり症とか登校拒否になったわけではない。普通に学校へ通い、友人との付き合いもしたが、心に鍵をかけて自分の殻を頑なに守り、胸の内は決して明かさない。いつのまにか、そんな風になっていた。

それは、父親と祖母との窮屈な三人暮しのせいだったかもしれない。祖母では母親の代わりにはならなかった。口やかましいだけで家事に無頓着な祖母は、ユキの弁当さえ作れなかった。夕食のほとんどが店屋物で、たまに自分が作ると、「今日は仕事をして疲れた」とか「心臓がドキドキする」と大袈裟に騒ぎたてた。自ずと祖母の代わりにユキが台所に立つようになり、学校から帰ると近所のスーパーへ買出しに行き、夕飯の支度をして、自分の弁当の用意をするのがユキの日課になった。

サラリーマンの父親は、母の死にも無感動で、祖母のわがままぶりも見て見ぬふりをした。そんな父親に失望し、自分のことしか頭にない祖母との息のつまるような生活に耐えられなくなったユキは、都内に家があるにもかかわらず、大学を卒業すると自分でマンションを探し、二人から逃れるように一人暮しをはじめたのだった。

それでも一人娘のユキのため、家賃だけは父親が払ってくれた。三カ月に一回、月末になると、ユキは実家へ家賃を受取りに出かける。時たま顔を見せて、無事に生きながらえていることを知らせに行く報酬だと、割り切って考えた。

一人暮しは思いのほか快適だったが、さすがのユキも近頃では、

「……このまま私はどうなっていくのかしら」

と、弱音を吐くようになっていた。

おそらくユキが一人、マンションで死んでいても、何日も発見されないだろう。若くても、突然の発作で倒れるかもしれない。いつの日か、餓死することだって考えられる。時々、テレビや新聞で、死後三ヶ月たって死体が発見されたなどと報道されている都会の孤独死は、他人事ではない。ユキ自身にもふりかかってくる可能性があるのではないかと思うと、ゾッとした。

寝る前、化粧を落とした素顔を鏡に映しながら、ユキは時々、溜め息をつくようになっていた。口を大きく開いてはすぼめ、目玉を回してみたり、笑い顔を作ったり、色々な表情を作って写し出された顔は、丸顔のせいか、実年齢の二八歳よりは若く見えるはずだ。しかしよくよく鏡を覗き込んでみると、小鼻から口元にかけての皺や目の下のクマは隠しようがなく、毛穴の一つ一つも黒ずんで汚れている。明らかに、肌に年齢が現れはじめている。

もちろん学生時代には恋人もいたし、いくつかの恋愛も経てきた。しかし自らの家庭環境からか、家族に夢を見出せないユキは、結婚・子供願望が希薄で、そう簡単には結婚に踏み切れなかった。

クールな目で男を見てしまう性癖。そして自分の内面

に、他人にズカズカと土足で踏み込まれることが何よりも鬱陶しくて、一人でいる方が気楽に感じられたのだ。すでに自分の生活のリズムができあがっているから、男と一緒に暮して我慢したりわずらわされることに耐えられないし、ユキは、仕事が好きだった。

しかし腰を落ち着けようと選んだ職場は居心地が悪く、ストレスがたまっていく一方である。

仕事に追われて落着かない毎日を送るユキからすると、笠原の生活は優雅そのものに見えた。行方不明になったかと思うと外国へ行っていたり、友達の別荘にこもってSF小説を執筆中だとか、まったく神出鬼没なのだ。ユキは笠原に対して、「気ままなご身分で……」という皮肉な思いも抱いていた。

食い意地のはったユキは、結局、生ハムにつられてパーティーに参加することにした。もちろん笠原は、手料理でもてなしてくれるのだ。

パーティー当日、六月末の日曜日は、泣き出したいのをこらえているような、いまにも雨が降り出しそうな冴えない曇り空だった。

ユキは夏を思わせるブルーの半袖のワンピースを着込んだが、肌寒い。

夕方、新宿の駅で電車を降りると、デパート地下の食料品売り場でワインとケーキを買い込み、ユキは持参した。いくら料理好きの笠原でも、デザートまでは作れまい。男の料理はそこまできめ細かくはないだろうと自負したからだった。

買い物客で賑わう雑踏をくぐり抜けると、超高層ビルの威容が見えてきた。まさにインターナショナルな街にふさわしい、近未来的な風景だ。しかし少し道をはずれると、昔ながらの木造の民家やアパートの残る一角に出る。ところどころに買収されたまま手のつかない空地や駐車場が点在し、虫食いの荒れ果てた雰囲気が漂っている。

高層ビルの林立する新宿でさえ、中心を少しでもはずれると裏側のさびれた顔をのぞかせている。灰色の空に突き刺すように聳え立つ洗練された摩天楼群と、時代に取り残されたみすぼらしい木造の民家。統一されていない雑多な町並みは、美意識が欠如している。こんなところにひしめきながら暮らさなければならない自分たちを、何となく味気なく感じながらユキは歩いた。

やがて向こうから、笠原が自転車に乗って迎えに来た。グレーのトレーナーにジーンズというラフな服装である。

「今日は何人くらい集まるの?」

「五、六人だと思うけど、もう料理の仕込みは終わったぞ」

料理疲れから体をほぐしているのか、腕を曲げたり伸ばしたりしながら、笠原はちょっとふざけながら言葉す

る。

「まあ、何が出てくるのかしら?」

「今日は私が料理人に徹しますから、任せてください」

軽口をたたきながら歩いていると、一人の少女が駆け寄ってきた。よく見ると、泣いている。

「アメさん」

笠原が呼び止めると、少女はいきなり笠原にもたれかかった。どうやら今日のメンバーの一人らしい。ジーパンにシャツ、ショートカットというボーイッシュな飾り気ないスタイルで、捨てられた猫みたいに笠原に寄り添う小柄な少女の姿は、ちょっと哀れっぽかった。

少女をなだめながら入り組んだ路地を進んでいくと、白いモルタル造りのアパートにたどり着いた。長方形の建物のワンフロアには八戸のドアが並んでいるが、階段を上った二階の一番奥の角部屋が、笠原の新居だった。

真新しい畳と白い壁、そして新建材の匂いが残る新しい部屋は、狭いながらもこざっぱりとし、笠原が友達を招待する気になるのも、わからなくもない。

部屋に着いても、少女はまだ泣き続けている。

「こちらはアメさん。ダンサーなんだ」

「はじめまして、私、石田ユキといいます。……どうしたの? カサがあなたを泣かせるような冷たい仕打ちでもしたのかな?」

「いや、彼女はすごくナイーブな人で、時々こうなるらしいんだ。……ちょっと、もう、泣きやんだら」

少女が顔を上げると、目は赤く腫れあがって充血している。

「はい、お米三キロ、カサの食料だよ」

心配をよそに、少女はぶっきらぼうに、米の入ったビニール袋を投げつけるようにして笠原に渡す。それでも、

「ありがとう、うれしいな。これで当分食いつなげるよ」

笠原は満面に笑みを浮かべ、うれしそうな表情を見せる。

部屋には、以前の住居と同じように、ベッドや机、本棚……などが置かれている。独身男のネグラにしては整然としていて、彼の几帳面な性格が表われていた。

「いい部屋じゃないの。明るいし、何より新しくていいわ」

「バス、トイレ付き、クーラーもついているんだぞお」

好奇心旺盛なユキは、バスとトイレが一緒になった洗面スペースを覗いた。小さなバスタブが申し訳なさそうに鎮座していて、笠原の大きな体には窮屈そうだ。しかし、狭くてもバスルームはないよりましだし、これまでの日当たりの悪い陰気な部屋に比べると、長足の進歩である。

ネグラがなくては人間は生きていけない。ましてや仕事場兼となると、自分のかけがえのない領域である。その神聖なる場所を皆に披露するのだから、笠原はよっぽ

どこの部屋が気に入ったのだろう。ユキは、笠原のこんな無邪気な一面をほほえましく感じた。

「お酒は各種用意してありますから、どうぞご自由に」

白いテーブルクロスをしいた仕事机は即席のワゴンと化し、その上に、世界各国の酒が並んでいる。

「ギリシャのウーノ、ロシアのウォッカ、フランスのワイン、スコットランドのスコッチウイスキー、焼酎、ビール、ブランデー……なんでもござれだよ」

「外国で買い揃えてきたの？　ちょっとしたバーね」

感心していると、二組の夫婦がやってきた。

ジーパンに黒いTシャツのペアルック姿でやってきた朝永夫妻は、まだ新婚まもないサラリーマンと専業主婦のカップルだ。一方、シルバーメタリックのパンツスーツに身を包み、ショートヘアをジェルで固めた宇宙人のようないでたちの妻と、ダフダブの黒いスーツ姿に長いストレートの髪を後ろで束ねた夫という組み合わせの高島夫妻は、ファッション業界人らしいいでたちである。

そして少女とユキ、笠原。七人のメンバーが勢ぞろいした。

「お引越し、おめでとう」

ビールで乾杯すると、

「ありがとうございます。僭越ながら、私の新居のお披露目パーティーとさせていただきます。……、では、そろそろはじめましょうか」

まずは、生ハムをフランスパンに乗せたオードブルからスタートだ。

「スペインから持ち込んだ生ハムだからおいしいはずだけど」

「カサさん、スペインに行っていたの？」

おっとりとした口調で、朝永氏がいう。

「建築の写真を撮りにスペインを回ってきました」

「いいなあ、しょっちゅう外国に行かれて」

「カサさんはまるで異邦人みたいね。うらやましいわ」

朝永夫人も相槌を打つ。

なるほど、日本で売っているいいかげんな生ハムよりよほどコクがあっておいしく、食は進む一方である。

BGMにラテン音楽を流し、机の上のスタンドだけを灯したほの暗い照明の部屋は、パーティーにふさわしい空間となりつつあった。

アメという女の子は、まだブスッとした表情のまま飲み食いをはじめたが、他のメンバーと十歳以上も年が離れているせいか、何となく違和感がある。涙はもう乾いたらしかったが視線が定まらず、どこか落ち着きのない様子をしている。自然とアメに対して質問が集中する。

「こんな若い女の子と、カサはどこで知り合ったの？」

高島夫人が、まず素朴な質問を投げかけた。

「居酒屋だよ。彼女、そこでバイトしているんです。本業は、ダンサー見習でいいのかな」

「そうだ、金がなくてな。……カサ、この生ハムはなかなかうまいぞ」

彼女の声に、皆、一瞬目を見張った。

男のようなドスのきいた声で居丈高にものをいう様子は、尋常でない。初対面なのにおなしな子だと感じたのは、ユキだけではなかった。格好をつけて、男言葉で喋るのが面白い年頃なのかもしれないが、泣いたり不機嫌になったりぞんざいな口をきいたり、よっぽど感情の起伏が激しい人間なのだとユキは思った。

「本当ね、やっぱり本場の味は違うわ」

朝永夫人が、アメに同調して頷いた。

「税関をごまかして持ち込んだんだもの。苦労の甲斐がありました」

笠原は得意げである。

「ウーノもウォッカもアルコール度が高いですから、皆さん気をつけてね」

「本当だわ、強い」

ウーノを一口含んだだけで、口のなかに燃えるようなしびれを感じたユキは、思わず叫んだ。取り揃えられた世界各国の酒を賞味すれば、当然酔いの回るのも早いだろう。

「生ハムとお酒だけで、お腹が一杯になりそうだわ」

高島夫人の言葉を遮るように、何を思ったのか、黙々と食べていたアメが腕をぐるぐる回しはじめた。居心地が悪くて、ついに狭い部屋で暴れ出したというような風体だが、依然として、焦点の合わないうつろな目だ。

「この人、時々こうなるらしいんだよ。……まさか、今日は大丈夫だと思っていたけど。噂には聞いていたけど、凄いね」

困惑顔の笠原が苦笑しながらいう言葉の意味が、誰もすぐには理解できなかった。

「強いお酒を矢継ぎ早に飲んで、悪酔いしたんじゃなくって。……アメさん、お水持ってくるわ」

朝永夫人が女らしい配慮を示すと、それを遮るような強い調子で、

「水なんかん必要ないぞ。……俺はおまえたちとは違うんだ」

アメはわけのわからないことを口走りはじめた。

「俺は、人間ではないのだ」

「人間じゃないってどういうこと？」

「……実はな、俺は神様なんだ。神が俺の体を借りて乗り移っているんだ」

アメは呪文ような言葉を吐く。

呆れ顔で目配せし合う高島夫妻、心配そうにアメの顔を覗き込む朝永夫人、きょとんとした朝永氏、興味津々のユキ、それぞれの反応におかまいなしに、アメはブツブツと呟いている。見るに見かねた笠原が、説明をはじめた。

「神様が、時々アメさんの体のなかに入り込んでくるっていうんだ。そうなると、神の言葉が自然に口をついて出てきて、自分でも自分がわからなくなるらしいんだ。……話には聞いていたけど、僕も彼女のこんな姿を見たのははじめてだよ」

小柄なアメの口から出てくる声と言葉は、外見とはまるで別人である。

集まった六人は、車座になって彼女の回りを取り囲み、質問を浴びせる。

「神様なんて、本当にいるのかしら」

からかうように、高島夫人がいう。

「当たり前だ。この宇宙を作ったのは、この俺、神なんだぞ」

強い口調に、一瞬、白けた空気が漂う。

「なんで腕を回してるの?」

朝永夫人が優し気に問うと、

「地球が回っているからだ。地球の回転のリズムを、この腕が示しているんだ」

幾分落ち着いた調子に戻っている。

「いつからそうなったの?」

「ダンスのワークショップでニューヨークへ行った時、道路を歩いていたら、突然こうなった。俺の体に神が宿ったのだぞ。かれこれ一年になるかな」

「アッハッハ、おかしい」

我慢できなくなったユキが大声で笑うと、

「おい、神を冒瀆するな。地球は回っているんだぞ」

大真面目でユキをたしなめる。

神がかりな人間とは、アメのような子をいうのか。おかしな少女を目の当たりにしたユキは、面白くて笑いが止まらなくなってきた。少女の目は虚ろに宙を舞い、ひたすら片腕を回しているから、なおさら滑稽だ。

「神様なんて、存在しないわ」

おちょくるようにユキが続けると、

「うるさい、俺のいうことを聞け。わからない奴に、俺が神の真理を説いてやる。よく聞け。……人間はだな、誰しも愛を知るために、祝福されて生まれてきたんだ。……だから、自分が人から愛されていることを、まず知らなきゃならんのだ。憎しみや怒りだけの人生では、幸福にはなれないぞ。愛することが一番なんだ」

神様の口調は神妙になってくる。

「地球上の生き物のなかで喜怒哀楽の感情のある動物は、人間だけだ。特に愛するという感情は、人間に与えられた特権なのだ。この感情を大事にして生きていかなくてはいけない」

「あら、動物にだって感情はあるんじゃない」

ユキが突き返すと、

「いや、動物には感情はないぞ。動物は本能だけで生きている。笑ったり泣いたり、感情を持って表現できるのは人間だけなのだ」

「そういえば、犬も猫も涙を流さないし、うれしくても笑わないものね」

「だから、動物には霊というものは存在しない」

「じゃあ、動物は死ぬとどうなるの?」

「魂が宇宙を浮遊して回り、またすぐに生まれ変ってくる。動物の魂は、その繰り返しなんだ。だが、人間は違う。いろいろな感情を持っているから、死んで体がなくなっても霊は生き続けている」

「ふぅん、そんなものなのかなあ」

「それに感情だけではない。物事を考え、反省し、学習するという能力は、人間特有の能力なのだ。……それからな、特に女はなあ、結婚して子供を生まなきゃいかんのだ」

「あら、私たちそろそろ子供が欲しいと思っているのよ。ねえ、あなた」

朝永夫人が夫を見ていう。

「そうだ。女なら、愛している男の子供が欲しくなるに決まっているんだ。子供を生むのが、女の務めなんだ」

神様のわりには、愛だのなんだのまともなことをいっているだけではないか。お説教をたれているような少女の言葉は、断定的でまったくの懐疑を許さない。その異様で強烈な話しっぷりに、完全に皆が引き込まれていた。

「神様は何でもわかるの?」

「たいていのことはな」

「東京に、地震は来るかしら?」

何より地震が恐いユキは聞く。

「来るね、来る、来る。絶対来る。天災は、忘れた頃にやってくるもんだ。人間が地球を粗末にするから、その罰なんだな。この地球は、宇宙の法則によってできているんだ。その法則を破って、森林を伐採したり、宇宙のエネルギーを破壊するから、神が怒って災害を起こすのだ」

アメは滑らかな口調で、澱みなく喋り続ける。

「たとえばだな、インスタントやレトルト食品は石油から作られているからな、こればっかり食べていくと体が汚れていって病気になるんだ。……カサみたいに、自炊して自然食品を食べていれば、まあ、いいだろう。体は大切にしなくてはならないんだ」

「あらカサ、あなたの自給自足の生活は、アメさんに教えたからなの?」

「違いますよ」

「しかしカサ、お前はちょっと体が弱っとるな、自分でも自覚しているんだろ」

「まあ、そんなところです」

「注意しないと、お前は長くは生きられんぞ」

「わかっています」

「えっ、カサさん、どこか悪いんですか?」

朝永氏が心配そうに問う。
「えー、肝臓とそれから通風の気がありまして」
「カサは見かけはごっついが、体は衰弱しとる。無理してはいかんぞ。自重しろよ」
アメが、カサを睨みつけるようにしていう。
「……そんなことより、メインディッシュにいこうよ」
笠原の一声で、すっかり話に夢中になって食べるのを忘れていた一同は、我に返った。
「この照明がいけないのかもしれないな」
そういいながら笠原は立ち上がり、蛍光燈の電気をつけた。
すると明るい照明のしたで、血の気が失せてとんがった顎をしたアメの顔が、亡霊のように浮かんでいる。密閉された空間に、何か場違いなものが入り込んで来た。そんな異様さが漂っていた。
「一日かけて煮込んだんだぞっ」
何時間もかけて煮込んだという、笠原の得意の鳥の手羽肉のシチューの大鍋がキッチンから運ばれてきた。途端に部屋のなかに、肉と野菜のコクのある匂いがたちこめ、さらに食欲がそそられる。
「ああ、いい匂いだなあ」
「あせらずに、お待ちください」
笠原はおっとりとした口調で答え、皆の前で、手羽肉と付け合わせの人参、じゃがいもを、湯気の漂う鍋から皿に取り分けた。
「さすがぁ、よく煮込んであるから、お肉が柔らかい。付け合わせのお野菜も肉の味がしみこんでいておいしいわ。カサさん、作り方教えてね。私もうちで、作ってみたいから」
「カサには、独特の料理の才能があるのかもしれないね」
それぞれが感嘆の声をあげると、笠原は得意気にガッツポーズを見せる。
「カサ、こういう物を食べていれば、長生きするぞ。……ああ、う、うまい！」
アメも、笠原の料理に満足した様子を見せる。
「お店でもはじめればいいのに。これだけ料理の腕があるんだから、もったいないわ」
「居酒屋でもやれば、儲かるかなあ」
笠原は満更でもなさそうな微笑みを見せる。
「神様、カサさんの病気、治せないの？」
朝永氏の一言で、また話が蒸し返された。
「いやいや、神といえども人を救うことはできんのだ。人間は、結局自分自身でしか救われない」
「神様は、予知能力しかないってこと」
「そういう言い方もできるな」
「なあんだ、それで神様っていえるのかしら？ギリシャのデルフィの神託の巫女か、ジャンヌ・ダルクかってとこかしら？」

ユキのからかいもおかまいなしに、アメは続ける。
「うるさい。おまえは黙ってろ。朝起きたら窓を開けて深呼吸し、左手を太陽にかざして、神のパワーを受取るのだ。そしてきれいな空気を吸って心まで洗い流す。夜寝る前には、今日一日の感謝の気持ちを、神に祈るのだ。そうやって、いつもきれいな魂を保っていれば、必ず救われる。いいか。……それに、人間、一人きりでは生きていけないことをよく肝に命じていればいいのだ」
「謙虚に生きろっていうことでしょう。単純なことよね」
「言葉で言うのは簡単だが、実践するのはなかなか難しいことなんだぞ」
肉をほおばりながらも、アメはまだ腕を回している。
「腕、疲れない？」
「ううむ、大分疲れてきたな」
かれこれ二時間近く経過していた。
神経が高揚し続けたためか、さすがの神様も疲れてきたらしく、腕を回すのをやめて食べることに集中しはじめた。
メインディッシュの次は、笠原オリジナルの、アワやヒエを使った五穀ごはんときゅうりの浅漬けが登場する。
「体のためにいい、素朴なごはんです。お口に合うかどうかわかりませんが……白米より、実はお金がかかっているんだから。漬物も自家製なんです」
「カサ、この調子なら長生きできるぞ」
白米よりも歯ごたえのある五穀ごはんをほおばりながら、アメが相づちを打つ。
最後に、ユキの持参したチーズケーキとコーヒーで、お開きとなった。
結局、パーティーは、神様ことアメが主役で、彼女の講義を聞くために集まったようなものだった。二組の夫婦はタクシーで帰路に着き、アメとユキは笠原に見送られて駅まで歩いた。
飲みすぎたせいか、ユキは、湿気を含んだ重苦しい空気に体がとりつかれているようなけだるさに見舞われていた。いやそれはもしかしたら、アメに乗り移った神様とやらの霊が自分にも伝染したような、妙な不快感だった。
さすがのアメも、やっと自分を取り戻していた。
「今日は疲れた。ふらふらだわ」
口調は普通の女の子に戻っているが、疲れ果てた顔は土気色だ。
「まさか、今日、現れるとは思ってなかったのに」
笠原は呆れた調子でいう。
「どんな時に、神様はやってくるの？」
「突然くるからわからない。予測できないのよねえ。でもやっぱり、体調の悪い時かなあ」
「こんなことがしょっちゅうあったら、アメさんたいへんね」

「仕事も手につかなくて、困ってる」
アメは下を向いて目を伏せ、女の子らしいしおらしい表情を見せた。
日曜の夜のせいか、副都心周辺は歩く人もまばらだ。高層ビルの照明がコンクリートの舗道や樹木を照らし、無機質な街のなかに明るく穏やかなエアポケットを作り出している。かろうじて雨は降っていないが、星ひとつない曇り空だ。湿った風が、明日、雨を運んでくるだろう。
駅に着き、雑踏の喧騒でユキは現実に引き戻された。
「今日は、楽しかったわ。カサさん、おいしい料理をありがとう。アメさんにも楽しませてもらったわ」
「いいえ、とんだことになってしまって」
帰る方向が反対のアメとユキは、それぞれの電車に向かい、笠原も家へ戻っていった。
コンパ帰りか、酒の匂いをさせた学生のグループやカップルがポツリポツリと乗っているくらいで、車内は空いていた。席に座ったユキは、向かいのガラス窓に写る、ネオンにまみれた街や自分の顔の輪郭をぼおっと見つめた。
神も仏も信じない無神論者のユキにとっては、神様もどきのお説教など、一笑に付する出来事である。しかし、現実に目の前に神がかった人物が現れ、神や霊、宇宙の話を聞かされると、やはり興味をかきたてられるから不思議なものだ。誰もがそういう話に真剣に聞き入ってしまうのは、やはり人は皆、心底では、何かにすがりたいという願いや救い、神の存在を求めているのではないか。
この夜のアメの言動は、異常としかいいようがなかった。しかし、どうしてそうなったのかはわからない。
「アメの出現は、何かの予言、暗示？カサは本当に病気なのだろうか」
酔いが回ったぼんやりとした頭に、ふとそんな思いがよぎっていた。

（二）

翌日、ユキは朝から会議だった。
毎週、週明けの午前中に、取材記者数人と編集デスクが集まり、『週刊馬子』の企画を立てるのが習わしだった。それぞれが持ち寄った茶の間受けしそうな芸能ネタや情報を出し合い、その週の取材の分担を決めるのだが、実際のところ、皆、ネタ不足で困っていたから、会議はダラダラと昼過ぎまで続いた。
雑誌社のビルの五階の一室で、会議は行なわれる。窓のない部屋には、壁にそって徹夜明けの仮眠用の二段ベッドが三組置いてある。大きな机を囲んで座る五人の記者とデスク一人のなかで、ユキは紅一点だった。会議中、机の上の灰皿には、タバコの吸い殻が山積みになる一方

で、換気の悪い部屋には紫煙がたちこめ、澱んだ空気が沈殿していく。明らかにここは、男の職場なのだ。
デスクの無理難題に、血の気の多い記者が苛立ち、ケンカになることもしばしばで、この日も、一人の記者が怒りを爆発させた。
「バカヤロー！人を何だと思っているんだ。虫ケラのように使うだけ使いやがって」
内野アラシというその記者が、突然、大声でデスクを怒鳴りつけた。丸々とした顔からメガネがずり落ちるほど興奮している。そして席を蹴立てて立ち上がると、脂肪たっぷりの太った体をドアにぶつけるようにして、部屋から出ていった。記者たちの気持ちを代弁したような迫力ある言動は、内心スカッと小気味よかったが、皆、固唾をのみこんで押し黙ったままだった。下手にデスクに逆らって仕事を失うよりも、内心はどうあれ、デスクのいう通りにしていた方が都合がいいのだ。
取材はすべて記者に任せっきりで、デスクはトラブルが起きても謝罪に行くわけでもなく、責任はすべて記者に押しつける。ゴシップネタにされた芸能人との間で、裁判沙汰になることもしょっちゅうだった。そんなやり方に憤りを感じていたのは、ユキ一人ではないだろう。
芸能人の男女関係に関する情報を追って面白おかしく記事にする作業は、いわば秘密裏に行われる取材と情報の駆け引きであり、まるで人間の排泄物やゴミを拾い集めて処理しているようなものだと、ユキは自嘲していた。『週刊馬子』は醜悪な読み物には違いないが、現実にはゴシップネタが読者の興味をひき、売り上げにつながっている。競合誌との抜いた抜かれたの部数争いは、当然、取材合戦を過熱させハードなものにしていた。しかし、個人のプライバシー、しかも男と女の関係を嗅ぎ当てるのは、並大抵のことではないのだ。
けれども、鼻先に贅沢なエサをちらつかされた動物のように、ギャラにひかれて身動きできないというのが、本音である。特ダネを札束で買い取る。大雑把にいえばそんなことで成り立っている世界なのだ。
「アイドルのOと脚本家のAが付き合っているという噂があるんですが」
アラシの剣幕に一同が呆気にとられているなか、記者の古沢が、真面目な顔つきで持ちネタをひけらかし、張り詰めた空気を打ち破った。
「へーえ、裏はとれてるの？」
肉付きのいい体をずり落ちんばかりにして、ふんぞり返って椅子に座っていたデスクは、冷静な声で、悠長に答える。他人事のようなクールな口の聞き方も、記者たちの心を逆撫でする。
「最近、麻布界隈のレストランやバーに、二人でよく現れているらしいんです」
「じゃあ、その取材、続けてみて。ツーショットの写真

が手に入るといいんだけどな。……石田くん、古沢くんに同行して二人を追ってよ」

ちらほら白髪も交じっているのに、童顔で丸顔のデスクは、顎をしゃくったぞんざいな言い方でユキに指示した。

翌日の夜、ユキは目撃されたレストランを古沢とともに訪ねた。

新しくできたばかりの和食バーは、素朴な木材や和紙を随所に採り入れ、和を強調した凝った造りの店である。間接照明の薄暗い店内はテーブルごとにのれんで仕切られ、芸能人がお忍びで通うにはもってこいだ。最寄り駅から遠いという地の利の悪さも、車で移動する芸能人にとっては逆に通いやすい。

「古沢さん、いつも楽しそうに仕事しているわね」

食前酒に冷酒を飲みながら、ユキは言った。

「そう見える?」

「そうよ。この間だって、鼻歌を歌いながらトイレから出てきたじゃない」

ユキの言葉に、古沢はプッと吹き出しながらも、

「鼻歌ぐらい歌うさ。だからって楽しいわけないでしょ」

顔をしかめた。

「毎晩こうやって張り込みしたり、しんどいことばっかりさ。それに二件も裁判を抱えているんだ。……あ、でも今日は石田さんと一緒だから楽しいな」

ユキの機嫌をとるような、思わせぶりの口調である。

「アラシさん、あの後どうしたかしら?」

「今朝、デスクに謝まりをいれたって聞いたよ」

「ほんと? 本気だと思っていたのに」

「内野はああいう奴だよ。血の気は多いけど、すぐに頭を下げるんだ」

「カッとなって大見栄を切っても、腰砕けってやつね」

「謝るのなら、ケンカしなきゃいいのに。まったくおかしな奴だよ」

「その点、古沢さんは大人ね」

歯がゆさを感じながらユキは言った。

古沢は大学の法学部を卒業後、司法浪人を続けているうちにどういうわけかこの業界に足を踏み入れてしまったという、変わり種だ。

「近くまで来たからお茶しよう」

と、電話をしてきてはユキを呼び出し、この夜のように取材と称して一緒に食事をしたり、飲み歩いたりする仲であり、気楽に仕事の愚痴をこぼせる同僚記者の一人だった。

去年のユキの誕生日に、古沢はプレゼントをくれた。二人でデパートへ行って見て回り、ユキの気に入った靴を買ってくれたのだった。それにお互いのマンションを何回か行き来しているが、二人の間には男と女の関係は

なかった。

所帯臭くなりたくないからと、食事はすべて外食で、古沢は自分の部屋でお湯さえも沸かさないという。皿一枚も鍋も、食器類や調具類は一切なく、冷蔵庫のなかは野菜ジュースと栄養ドリンク剤がびっしり詰っている。それに、電話やパソコン、冷蔵庫、テレビ……と、家具はすべて黒で統一されている。部屋の真中には、健康を考えて買ったという五十万円もの大きな黒いウォーターベッドが置いてあるが、無味乾燥とした部屋は生活感が欠如している。

「どうして黒なの?」

「死をイメージしてるんだ」

「どうして?死にたいの?」

「いや、死を恐れないように今からイメージしている」

古沢が何をいいたいのか、ユキは少しも理解できなかった。

ギャンブルで儲けたお金で都内に投資用のマンションを持っているとかで、その家賃収入のおかげか古沢は金払いがよかった。ユキに食事やお酒を御馳走し、タクシーで家まで送ってくれるという豪勢な使いっぷりだ。笠原とは、まったく正反対の生活ぶりである。

古沢は過去の女の話をよくした。そのどれもが、別れる時に女に泣かれて困ったとか、女にもてたという話ばかりなのだ。ユキは、話は眉つばだと踏んでいた。古沢がそれほど女にもてるはずはなく、ユキの嫉妬心を煽るために作り話をしているに決まっている。

ユキに気があるくせに、思わせぶりな態度と言葉だけで、いざとなると引いてしまうようなところがある。素直になれないのは、エリートの道から外れてしまったためで、コンプレックスの裏返しから、気持がねじれているのか。心情的には笠原よりも通じるものがあるが、いつも苦虫をつぶしたような顔をしている古沢は、どこか得体の知れない男だと、ユキは感じていた。

三十代半ばという年齢と、法律関係に人脈を持っていることから、古沢は部員のなかではデスクに一番信用されていた。デスクに対しては恨み、辛みを抱いているだろうが、表面的には忠実に仕事にこなしている。

この夜のように噂の源の店で網を張ったり、当事者の家の近所に出向いたり、身辺から情報を集めるという地道な取材が雑誌記者の仕事だが、大抵はカラぶりに終わる。確証を得るにはそれ相当の時間がかり、簡単にスクープや特ダネを得ることはできないのだ。今のユキは他に仕事のあてがないのだから、これで食いつなぐしかない。デスクにいわれたことをいやでもこなしていくしか、生活の糧はないのだ。

それにあぶく銭のようなギャラのおかげで、けっこう贅沢な暮しができた。記者仲間と豪快に飲み食いできたし、買い物好きのユキは、ブランド物の洋服や小物を衝

動的に買い込んだり、エステに行ってはマッサージでストレス解消に励んだりしながら、ウサを晴らしている。

食事をしながらユキはふと、一昨日のパーティーを思い出し、マイペースな笠原の生き方をちょっぴりうらやましく思った。しかし実際には、自分は貧乏生活には耐えられないという思いの方が強かった。多少の不自由さはあっても、経済的な基盤がなくては生活できないというのが本音だ。お金欲しさから奴隷のように働き、その呪縛から逃れられないのも情けないが、何より自分が欲しいものを自分のお金で手に入れることができる自由さも、代え難いものだ。

その時突然、アメの言葉がよみがえった。

「カサは体が悪いな。長くは生きられんぞ」

あんなに頑丈な体をしているのに、笠原は本当に体が悪いのだろうか。放浪生活のせいで無茶をしすぎて、どこかに故障を起こしているのか。そういえば、顔色はいつもドス黒い。それに、あれほどつつましい自炊生活を送るからには何かわけがあるのかもしれない。病気の恐怖におそわれているのだろうかと、何だかアメの言葉が不吉な予言のように思えて、心にひっかかった。

OとAの情報がとれないまま、ユキは写真集めや簡単な電話でのコメントとりなどに明け暮れ、一週間はあっという間に過ぎ去った。

締め切りの金曜日の夜、誰もいない会議室でユキが原稿を書いていると、月曜日にタンカを切った同僚のアラシが部屋に入ってきた。

「あれユキちゃん、もう来てたの。早いねえ」

ユキが顔を上げるといきなりアラシは近づいてきて、

「ユキちゃん、疲れただろう。肩を揉んであげるよ」

そういうなり、大きな手で遠慮なく肩を揉みはじめる。

「このところ肩こりがひどいの。……ああいい気持ちだわ」

「頼むから、そんなに感じないでくれよ」

夕食に用意された弁当を食べながら、仲間同士で意味ありげな会話を楽しみ、原稿を仕上げるのが締め切り日のいつものパターンだった。それはそれで楽しくなくもない。

ユキは、脂肪のついたムチムチとした体に銀ブチの鼻メガネをかけたこの男が、何故か憎めなかった。ユキより一歳年下という気安さもある。オーストラリアの大学に留学したものの、アルバイトに明け暮れているうちに、アラシはドロップアウトして日本に帰ってきたという。押しの強さと堪能な英語のおかげで、けっこう重宝がられている。

「あなた、あんなに威勢良くタンカを切ったのに、次の日には、デスクに頭を下げたんですってね。情けないわ」

ユキが会議でのことを揶揄すると、

「仕方ないじゃん。生活がかかってるんだもん」

ケンカなどなかったように、あっけらかんとアラシは応える。

「だらしないわ。アラシさんて男らしいなって見直したのに、がっかりしちゃった」

「ユキちゃん、そんな薄情なこと言わないで。今度ゆっくり飲みに行こう」

ケンカも一種のポーズであり、内心はどうあれ、結局のところデスクに従順になるしか手だてはないのだ。部員それぞれが、当たり前の道からレールを踏み外した経歴の持ち主で、個性派が揃っている。組織には従属していないというわずかなプライド、一匹オオカミ的な生き方だけがよりどころだった。実に慌ただしく、粗雑に一日一日が過ぎていくが、こんな風に生きるしかすべがないからこそ、ユキとても、アラシのやり方を責めたてることができなかった。

「噂によると、アラシさんは高校生の幼妻を養っているんですってね」

「……それはいわないでよ、秘密なんだから」

「公然の秘密？」

「いいじゃないの、それくらいの秘密や楽しみがあっても。ユキちゃんこそ、ついに古沢さんと結婚するんだって？」

「えっ、今はじめて聞いたわ」

ユキが真顔で驚くと、

「古沢さん、自分でいいふらしてたよ」

その時ドアが開き、古沢が姿を現した。

「あれっ、噂の張本人が現れたねえ。ユキちゃん、お待ちかねよ」

アラシの言葉に、古沢は怒ったような顔をしながらくるりと向きを変え、慌てて逃げていった。

夕方、部員たちが編集部に集まり、記事の選別、誌面のレイアウト、原稿書き、最終的なチェックなど、翌週発売の雑誌へ向けて、一連の作業が行われる。その作業は深夜過ぎまで及び、帰途につくのは真夜中から明け方になる。

この夜は、三時過ぎに仕事が終わった。まだ他の記者たちは仕事中だったが、ユキは一人、会社の前に止まっていたタクシーに乗り込み、家路に着いた。

寝静まった都心の道路は人影もなく、タクシーはかなりのスピードでコンクリートの街を走り抜ける。ユキは、深夜の東京をこうして一人で帰るのが好きだった。静寂した街を見渡していると、仕事をやり終えた充実感や、この大都会で、まがりなりにも一人で生きているのだという、満足感に浸ることができるからだった。

とりわけ車が国会議事堂あたりを通り過ぎるとき、ユキはいつも窓から外の景色に魅入ってしまう。ライトに

照らされた議事堂が、森閑とした暗闇のなかに鎮座し、車や人の行き交う日中の雑多な風景とはまったく異質な貌を見せている。また帰りが早朝になると、ジョギング姿の人を見かけることもある。

深夜の神秘的な威容やすがすがしい朝の風景を目にする度に、ユキは東京にも美しい時や季節感があることを肌で感じ、妙に心が高ぶってくる。都会の暮しもまんざら捨てたものではなく、慌しい一週間が終わったことに、ほっと安堵の息を洩らすのだった。

こうして深夜帰りの日は、家に帰りついてもまだ精神が張り詰めているため、すぐに眠りにつくことができない。白々と夜が明ける頃、バスタブにお湯を一杯に満たし、湯船につかってゆっくりと疲れを癒す。もしかしたらこういうひと時が、自分の生活のなかで一番満ち足りている時間なのかもしれないと、ユキは考えた。朝方ベッドに入り、週末はゆっくりと過ごすのが、このところの習慣となっていた。

その夜、笠原から電話があった。

「この前はすみません。おかしなパーティーで」

アメのおかしな剣幕に、お詫びの電話を入れてきたのだった。

「ううん、結構楽しませてもらったわ。神様が登場するなんてこと、滅多にないもの。でもあの娘、本当はクスリでもやっているんじゃなくって」

「僕もよくわからないけど、何か変なものが取りついたらしいんだ。キツネとか、動物霊とかね、神様っていうのは出鱈目で、何かおかしいものに取りつかれているんじゃないかな」

「それは困ったものね、おはらいでもしないといけないんじゃないの」

「両親が離婚して、家族が崩壊してからああなったらしいんだ」

「じゃあ、一種のノイローゼ？」

「まあ、そういう見方もあるかもしれないけど」

「ねえ、明日、お昼、食べに行かない？　パーティーのお礼に、私が御馳走するわ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

いつもジーパンのラフなスタイルの笠原は、何を思ったのか、紺のブレザーにグレーのズボン、えんじのネクタイという正装スタイルでやってきた。

二人は原宿のイタリア料理店へ向かった。

厨房が席の真中にある明るいレストランは、雑誌にも紹介される流行の店である。

「カサ、お洒落してきたの」

笠原をからかうと、

「ええ、たまにはちゃんとしないとね」

真面目な顔つきで答えた後、天井を見つめて一瞬白目を剝く。笠原特有の照れ隠しの表情に、ユキは思わず笑

いを噛み殺した。

実際のところ、せっかくのジャケットも古ぼけていて、大人が中学生の制服を身につけているみたいで、決まっているとはいいがたかった。

「流行の店にも出入りしないと、時代に取り残されるからね」

運ばれてきたパスタを前に、

「こういうパスタも、お料理のレパートリーに入れたら？」

ユキがいうと、

「そうだね。……うん、ここのパスタはコシがあっておいしいな。買って帰ろう」

笠原は、あくまでも食にこだわる。運ばれてくる皿を丹念に見つめながら味わい、作り方を探っている様子だ。その仕草がおかしくて、ユキは思わず笑いを洩らした。

「おかしいかな？」

「ううん、微笑ましいわ。新しいアパート、かなり気に入ったみたいね」

「まあね。少し定住しないと。人様の厄介になりながら、貧乏に徹します」

「腰を落ち着けるのは、年のせい？」

「もう三四歳だもんね。それに今は、日本が一番面白いんじゃないかな」

真面目な顔で、笠原は答える。

「ついに昨日、縫い物をしちゃったよ」

「へえ、私より凄いわ」

「シャツとGパンのほころびを、自分で直したんだ」

「やっぱりあなたは、いい主夫、間違いなしよ」

ユキは呆れながらも感心していった。料理は嫌いではないが、裁縫は大の苦手だ。自分よりよっぽど笠原の方がいい主婦になるだろうと、ユキはこの時、本気で思っていた。

店を出て、二人は中高生で混雑する竹下通りを歩いた。狭い道に軒を連ねる洋服やアクセサリーの小さな店、ボリュームいっぱいに流れる音楽、店を覗き込む若者の姿は、まるで小さなアリの群れを見ているようだった。疲れを知らない若者たちは、終わりのないお祭り騒ぎを繰り広げている。人込みが嫌いなユキは、彼らがほおばるクレープやアイスクリームの匂いにむせるような不快感を覚えたが、笠原は、けっこう楽しそうな表情で回りを見渡している。

「平和な光景ですな」

おじさん風な口調でいう。

「こんななかを、外人の格好で歩いたら面白いなあ」

回りの雰囲気に刺激されてか、突拍子もないことを口走った。

「どんな格好？」

「ターバンでも巻いていれば、私はインド人に見えるでしょう」

「体は大きいし色も黒いから、中近東の人間に見えなくもないわね。アラブの石油王の息子とでも名乗ってみたら、女の子がついてくるかも……」

そして間口の狭いタレントショップを覗き込み、笠原はキャラクター付きの灰皿やキーホルダーを買い込んだ。

「おじさんなのに、私はミーハーなんですよ。実は来月から、またちょっと日本を留守にしまぁす」

「まあ、放浪生活はやめたっていったばかりなのに。今度はどこへ行くの？」

「海の底に眠る金塊を探しに、南の海の方へ……」

「へえー、すごいじゃないの」

「十日ぐらいで戻ってきますよ」

「金塊探しなんて、カサさんの冒険心が疼いているのかしら」

「まあ、そんなところですな」

貧乏生活に徹するといいながら、舌の乾かぬうちにまた旅行へ行くというから、ユキは拍子抜けした。おそらく、じっとしていられないのだろう。男っぽい冒険心か、少年のような夢か、何がしかの情熱が笠原を駆り立て、世界を股にかけて飛び回らずにはいられないのだ。それは男らしい行動力といえなくもない。

しかし現実感に欠け、子供っぽく、自己中心の浮世離れした摑みどころのない男。それが笠原に対するユキの率直な思いだった。

本当は、ユキは自分も一緒に外国へ連れていって欲しかった。こんな時、「私も一緒に連れていって」と素直に口に出せない自分自身がもどかしくもあるが、笠原は、自分のことだけで精一杯なのだ。

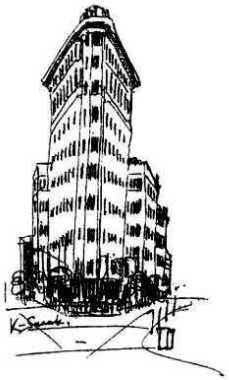
原宿をしばらく歩くと、今日はやることがあるからと、笠原はそそくさと帰っていった。

笠原も古沢も、どこか地に足がついていないような、宙ぶらりんの男たちだ。一緒にいても物足りないというか、ピントがぼけた写真を見ているような失望感を抱いてしまう。しかし二人とも、ユキにとって気の置けない男友達には違いなかった。



都市銀行『爆発物処理班』（一）

宅見勝弘



一、抗争事件

一九九七年八月二八日は、武神優一（たけがみゆういち）にとって災厄（さいやく）の始まった日であった。

東西銀行大手町支店の融資課に勤める武神優一は、仕事を終えて独身寮へ戻ってきた。

「未だ十一時前ですね。今日は早い方ですね」

一緒に居た山名係長に向かって、優一は話し掛けた。山名は優一の上司で、単身赴任で同じ独身寮に住んでいた。

「『ＭＯＦ検（モフケン）』の時は、午前三時に帰る日があったのだから、四時間も早いぞ」

ＭＯＦ検とは大蔵省（現財務省）の検査のことである。

「あの時に支店に来た検査官と当行のＭＯＦ担（モフタン）が、『ノーパンしゃぶしゃぶ』で逮捕されましたね」

ＭＯＦ担（銀行の大蔵省担当者）と大蔵省検査官との贈収賄事件である。

「今日もジッパ（実質破綻先（じっしつはたんさき））から、回収した金でノーパンしゃぶしゃぶに使うのか、て言われたよ」

優一と山名は先に食事を済ませるために独身寮の食堂へ向かった。

食堂にはテレビが備え付けられており、この時間帯はニュース番組が放送されていた。他の支店の行員が三人いて、食事をしていた。

「お前の死亡ニュースが流れているよ」

山名は優一の向かいの席に座ると、テレビに眼を向けて、笑いながら言った。

優一はテレビに背を向けていたが、何事かと思い、振り返った。

「広域指定暴力団ナンバー2射殺」

というテロップに続いて、六十歳位の男の映像がテレビ画面に映されていた。
「武神優矢内組若頭（武神組組長）」
男の映像に重ねて、画面に名前が表示されていた。
スーツ姿の男は暴力団組長というよりも上場企業の役員の様な印象であった。
「自分と似た名前の人が殺されるのは、嫌ですね」
「お前の『武神優一』から一字取れば、同姓同名になるな」
「関係あると思われると、本当に迷惑な話ですよ」
テレビでは、現場記者がカメラに向かって話していた。
「本日午後三時二十分、京都オリエンタルホテルの喫茶室に、帽子を被りサングラス姿の四人組の男が押し入りました。四人組は、日本最大の暴力団矢内組ナンバー2の武神優組長に向かって拳銃を乱射しました。
武神組長は頭や胸に七発の銃弾を受け、約一時間後に、運ばれた京都病院で出血多量のため死亡しました」
ニュースの映像は殺人現場の喫茶室を写していた。
「日本の暴力団でナンバー2の組長が、白昼に大勢の一般人のいる所で銃殺された、というのは衝撃的だな」
山名係長は優一より五歳年上の三十六歳であるが、ヤクザ相手に対等に交渉できることで、支店でも信頼を置かれていた。
「武神組長は、矢内組で若頭だが、経済力から考えても実際はヤクザの中でナンバー1だろう」
「武神組長は矢内組五代目の鍋山組長を擁立したので、影響力は五代目組長を上回っていたでしょう。実質的にヤクザ社会の頂点にいた人です。武神組長は特にオモテ経済にかなり影響力を持っていました。
自分の名前に似た人だからでなく、TFの関係で調べました」
TFというのは、トーキョーファイナンスという優一の担当先のノンバンク（貸金業）を指している。
「矢内組系のフロント企業は全国で二千社だそうですが、その内の千社以上が武神組長の関係会社のようです」
『フロント企業』とは、暴力団が表の世界で経済活動を行うために設立した企業のことである。フロント企業の経営者を『企業舎弟』と呼んでいる。
「武神組長の資金力はバブル当時で三千億円と言われています。
バブル期には、商社とゼネコンと武神組がそれぞれ協力して、大型都市開発案件を手掛けたそうです。商社やゼネコンが武神組に地上げを依頼していたのですね。
武神組は関西国際空港やJR京都駅再開発なども深く関係しているようです」
「ヤクザの中では『神戸戦争』が勃発している、と言われているらしいな」
「昨年から神戸で発砲事件が続いて、先月も警戒中の警

官が間違えられて、射殺されました」
「ところで、武神組は株の買占めもやっていたな」
「九〇年に武神組の会社が東証一部上場の黒崎紡績の筆頭株主になったことがありましたね」
「元警察官僚が、この平成不況のことを『ヤクザ・リセッション（＝不況）』と呼んだが、経済学者の説明よりも説得力があったよ」
山名は、言った後、食堂にいる他の行員に聞こえないように声を落として続けた。
「武神組長の射殺事件にTFは関係しているかな」
「その可能性は有ると思います。TFは、武神組にとって最大の資金源です。利害関係は複雑に絡み合っていて、対立する暴力団との利権争いが有りますから」
優一も小声で答えた。
「当行はTFにいくら貸しているんだ」
「本体（銀行）で二十七億円です。東西ファクター（子会社）で百五十六億円を貸してます」
ノンバンクへの貸出は銀行本体で対応できない場合に、銀行の子会社を経由して行われていた。
「TFからは組関係に、どれくらい出ている」
ノンバンクは、銀行から金を借りて、他の企業に貸出している。
「TFの最大の貸出先は、明治総合開発で、武神組のフロント企業です。現在は四百七十億円が残っています。
他にも武神組が関係する企業が多くあります。他の組を合わせると、TFの貸出金千四百億円の九割が暴力団関係と言われています」
「役員にもヤクザがいたな」
「矢内組系の暴力団組長がTFの取締役になっています」
「数十億円、数百億円単位の金が絡めば、『殺し』まで請け負う奴はいるだろうな。東南アジアから殺し屋を連れてきて、殺しが終われば日本から送り出すそうだからな」
テレビのニュースでは、殺害現場を報道していた。
「武神組長の隣のテーブルに座っていた内科医の平野学さんが巻添えになり、頭に銃弾を浴びました。平野さんは救急車で京都病院に運ばれましたが、午後九時過ぎに死亡しました」
「ヤクザの抗争で怖いのは、全く関係のない善良な市民が巻き込まれることですね」
「お前は名前が似ているし、TFの担当だから、巻き込まれるかもしれないぞ」
その言葉が後に現実になるとは、その時の優一には想像することもできなかった。

二、融資課第三班

翌朝、優一は六時に鳴った目覚し時計を止めると、テ

レビのスイッチを入れた。
組長射殺事件が気になった優一は、なかなか眠りに付けなかった。最後に時計を見たのが、午前三時を過ぎていた。
朝のニュースでは、昨日から特に新しい情報は無かった。寝不足で頭が重いまま、優一は朝食も摂らずに独身寮を出た。
「矢内組ナンバー2、射殺される」
「武神組長　京都のホテル　四人組乱射」
「巻き添えの医師死亡」
通勤途中の地下鉄の中で、優一の隣の人が持っている新聞記事の第一面の見出しが見えた。優一は日本経済新聞を読んでいたが、組長射殺事件は社会面で大きく扱われていた。
（組長射殺事件が銀行で話題になると、嫌だな）
優一は普段より遅れて東西銀行大手町支店に着いた。
大手町支店は東西銀行本店ビルから地下鉄の駅を挟んで反対側にある。
優一は融資課第三班の自分の席に着いた。第三班の席は二階のローン窓口の奥にある。第三班の机は五つあるが、現在使っているのは、二つだけである。
「殺された組長は、お前の親戚か」
副長の伊馬が、優一の顔を見ると、待っていた様に声を掛けた。
「お前の顔も、新聞の組長の写真とよく似ているし、どっかで血が繋がっているだろ」
「実は、叔父さんです。葬式に行かないといけないので、忌引きで休んでもいいですか」
優一は、冗談で軽く流した。赤の他人が死亡して、忌引きで休める筈が無い。
山名が優一に近づくと、声を掛けてきた。
「支店長と副長はY情報を持っているから、念のため確認したのかもしれないな」
東西銀行では、『Y情報』と呼ばれる暴力団関係の情報が支店長と副長限りで本部から連絡されていた。
「TFと武神組の関係は、副長は以前から知っている筈だ。お前が組長の血縁関係と勘違いして、担当にしたかもしれないな」
「シャレになっていないですよ。もし、私がヤクザの親戚だったら、都市銀行に就職できる訳ないでしょう」
優一は仕事の準備をしながら、言い訳をするように答えた。
「お前は一九九〇年のバブル採用だから、仮に組長の息子でも間違って採用したかもしれないぞ」
「確かに初めて会社訪問した当日に内定しましたね。バブルの時期にも拡大路線をしない堅実な銀行と私は思って、第一志望でした」
「その後は、銀行業界の再編が進む中で、東西銀行は合

併や統合を経験していないから、望み通りだな」
「ホールセールの仕事をしたかったので、志望したのですが」
東西銀行は、個人・中小企業取引よりも大企業取引の方が多いホールセールバンクと呼ばれていた。
「当時は、八年後に不良債権を担当するとは思わなかったですよ。間違ったというなら、銀行で無く、私の方ですね」
「赤残です」
優一と山名の会話に割って入るように、当座預金係の女性が一覧表を優一に渡した。
東西銀行では、手形や返済金の資金不足先の一覧表を『赤残リスト』と呼んでいた。資金不足先は全部で五十八先あった。
「四十二件か」
赤残リストの中で優一が担当する先の数であった。
「飯田さん担当の十三先も含めてですが」
第三班で優一や山名と一緒に仕事をしているのは、他に優一の二年先輩で、主査の飯田が居た。しかし、飯田は七月から胃潰瘍で休んでおり、飯田の担当先は全て優一が担当することになった。
「実質的には、今日が月末だぞ」
三十日、三十一日が土日のため、二十九日が実質的に月末の繁忙日に当る。月末が休日の場合、手形は翌月初の決済になるが、融資の返済金は前日に設定している。そのため、通常の日よりも資金不足の先が多い。
「TFの件は後回しだ。先ず赤算先の連絡を優先しろ」
当日中に入金が出来なければ、倒産か延滞債権の発生ということになる。
「七月末は二件延滞発生で、六月末は一件不渡りがあったからな。今月も、赤残が解消できないかもしれないぞ」
午後四時を回って、山名は一息ついたように言った。
「今月は、とりあえず赤残が消えたな。八月は他の月と比べると落ち着いているな」
「月末期日の手形の決済は、九月一日の月曜日ですから、未だ油断できませんが」
優一も落ち着いたため、話をする余裕が出てきた。
「武神は、最初からTFの担当だな」
「この支店に転勤した時からですから、二年二ヶ月になります」
「債権回収はこの店が初めてだよな」
「最初の赤坂支店では融資の事務担当でした。京都支店では営業で外を回っていました。その後は研修で本部に三ヶ月いました」
「俺は前の店では、業種で担当が別れていたから、貸出の一方で回収もやったな。この支店の融資課は武神が来

た時から三班に分かれていたのか」
「三班体制になったのは、私が来た時からです。第一班がローンと一般貸、第二班が大口融資先、第三班が倒産した先・しそうな先、というように取引先の状態と仕事の内容とで分けました」
第一班が、個人ローン等の窓口営業や通常の融資先、第二班が貸出金十五億円以上の融資先および関連会社、第三班が、破綻債権・延滞債権といった不良債権になった先を担当していた。
つまり、第三班は貸出金の回収を専門に行っていた。
第一班が事務担当の女子行員三名を含めて八名、第二班が係長・主査という役席が中心で六名、第三班が三名で構成されていた。
「支店長や副長のように管理する側としては、都合がいいのだろうが、全部の担当先が倒産だとか延滞だという俺達は気が滅入るな」
「第一、二班の先がヤバくなると、私達の担当になるんですから」
「貸した本人は支店の業績を上げたから栄転して、尻拭いした俺達が、銀行に損失を与えた悪者扱いだよ」
「先週も全国銀行相談センターに、苦情の電話があったようですね」
「担当が替わったら貸してくれなくなった、お前らのせいで倒産した、と言われるからな」
「取引先が第三班の担当になると、支店長・副長は全く会わなくなりますね。私達が交渉で板挟みになって大変ですよ」
「飯田も、それで病気になったからな」
先週、優一は飯田の見舞いに行った。仕事が原因で病気になったのに、伊馬副長から「給料泥棒」と言われた、と飯田は嘆いていた。
「正直言って、私も限界ですよ。頑張っても評価されないし、精神的にも辛いです」
優一も最近かなり胃の痛みが激しくなってきた。
「ここで弱音を吐くな。俺達の仕事は歴史が評価してくれるよ」

三、爆発物

融資課第三班は、組長射殺事件の約一年前の九六年夏頃から『爆発物処理班』と呼ばれるようになった。
九六年七月、大口融資先のトライ商事が東京地裁に破産を申立した。三億円ほどの回収不能が見込まれていた。
「お前ら実損を出しやがって」
伊馬は狂ったように怒鳴り散らした。
優一と山名は、三十分ほど黙って怒鳴られると、第三班の席に戻ってきた。
「副長は、今期を問題無くやり過ごせば、支店長で転勤

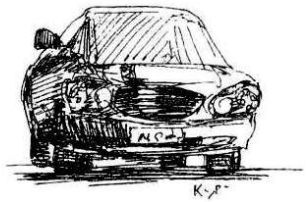
と思っていたから、荒れているな」
山名は優一に同意を求めるように言った。
「本当に問題の無い取引先にしか会わないで逃げていたのに、運が悪いと思っているんでしょう。」
「しかし、この先の責任も俺達にされそうだな」
トライ商事は、伊馬本人と第二班が、二年前に新規で取引開始したものであった。しかし、最初の融資を実行してから、一年半後に粉飾決算が分かり、第三班に担当替えになった。その半年後に、あっけなく倒産したのであった。
伊馬は第三班の席へ向かって、大声を出した。
「お前らは、一つでも処理を間違うと、首が吹っ飛ぶからな。覚悟して仕事しろよ」
伊馬は、人事権を武器に部下を恫喝するような言い方をすることが多かった。
「喩えるなら、『爆発物処理班』だ。命懸けで回収しろよ」
伊馬の恫喝に対して、優一は、できるだけ聞き流すようにしていた。
「あの人は常に安全圏に居て好き勝手言って、本当に卑怯な人ですね」
いつも温厚な飯田も顔を真っ赤にして、伊馬の後姿を睨みつけながら言った。後にストレスで仕事を休む様になったが、当時は出勤していた。
「先日も、ハケ（破綻懸念先）が来て、トラブルになっていた時に、あの人を呼ぼうとしたら、一時間もトイレに隠れていましたからね」
「支店長が外出中にトラブルが重なっていたな。おそらく全部、自分が解決したことにして支店長に報告しているよ」
山名も伊馬に対して、表面的には敢えて逆らわなかったが、批判的であった。
「『爆発物』が、俺達の抱えている融資案件を指していると思えば、これほどピッタリした表現は無いかもしれないな。取引先を喩えるのは失礼な話だが」
山名の言葉に、飯田は溜息を吐きながら続けた。
「僕も何となく警視庁爆発物処理班の心境が分かるような気がしますよ」
「『死体置き場』だと、前に言っていたことに比べると、未だ良い名前だよ」
第三班の三人は自嘲気味に爆発物処理班と自称する様になり、やがて爆発物処理班の名前は第一・二班や営業課・渉外課にも広がっていった。
第三班では、定期的に三人集まって、担当先の融資案件を調べていた。
「これは『時限爆弾』だよ」
山名は稟議書を指差しながら言った。稟議書に貸出先

に対する融資条件を定めている。
「なぜですか。金額一億円で五年返済、毎月遅れずに返済してますよ。期日の来年三月には残り全部返済して終わりですから、何も問題は無いでしょう」
担当になったばかりの飯田が尋ねた。
「よく見ろ。毎月百万円を返して一年で一千二百万円だったら、期日までの返済額は六千万円だ。期日に百万円の他に四千万円残るぞ。この会社が四千万円も返せるか」
飯田は感心したように頷いた。飯田は預金集め主体の個人店舗を多く経験していた。顧客に好かれる性格だが、融資業務の経験は少なかった。
「もっと露骨なものがあるぞ。三年後の期日一括返済だ」
ベンチャーで当時売上を伸ばしていた企業であったが、融資した一年後にスキャンダル事件を起こして、売上は半減していた。
「三年後には自分は大手町支店に居ないと思って出した卑怯な案件だよ。当てが外れて、当の本人は未だいるけどな」
山名は言うと、伊馬副長の方へ目を向けた。伊馬は大手町支店に既に四年目に入っていた。
「時限爆弾は期日があるので、事前に対策が立てることができるのですが、『地雷』は突然、爆発しますね」
優一は、回収の経験が飯田よりも長いので、説明した。
「地雷は表面的に普通の融資案件なのですが、トラブルの原因が隠れています。第三班の案件では、こっちの方が多いし、厄介ですね」
「ここにも地雷が埋まっているよ」
山名は別の会社の稟議書を飯田に示した。
「これって普通の運転資金ですね」
「全部ゴルフ会員権購入資金だよ。稟議書には何も書いていないが、社長に転貸してゴルフ会員権に化けているよ。しかも、このゴルフ場は、もうすぐ倒産するよ」
「このゴルフ会員権って、銀行の方で勧めたものじゃないですか」
バブル期には東西銀行行員自らがゴルフ会員権を売って、購入資金を全額融資する行為が行われていた。
「この関連会社の社長にも貸出金はありますよ。資金使途は大四生命の一時払い養老保険です」
「『生きる屍』のあの生保なの。自分が死ぬよりも先に生保の方が死んじゃうよ」
大四生命は、生命保険会社の中で最初に倒産するという噂が絶えなかった。
溜息ばかりの飯田に山名は別の稟議書を見せた。
「これは『自爆』だな」
「株式購入資金一億円で、購入株式を担保に取ったが、現在は五分の一まで下落ですか。何とも情けない株を買ったものですね」
「この株は東西銀行だ」

「えーっ。これだけ担保不足だと、これ以上は支店決裁で貸せないですよ」
「副長からこの先の追加担保を交渉しろと言われているよ」
「そんな理不尽な」
飯田は顔をしかめて、胃の辺りをさすりだした。しばらく飯田は自分の担当先の稟議書ファイルを見ていたが、何か見つけたように持ってきた。
「これは、名付ければ『細菌爆弾』ですね。爆発自体は大したこと無いのですが、潜伏期間を置いて、色々トラブルを引き起こしますよ」
飯田が持っているのは既に倒産している先の稟議書ファイルであった。
「倒産した当初は、信保（信用保証協会の保証）なんで実損も無く、代弁（協会による代位弁済）して終わりの筈です。
実は、第三者保証人が偽者で、金は社長個人の借金返済に使われるんですよ」
「少しネーミングが苦しいが、処理終了と思っていたのに、後で次々と問題が出てくるものがあるな」
優一は今期、直接償却（銀行の決算書から債権を消す）する先の稟議書を持ってきた。
「これは『不発弾』ですね。直接償却以外にどうしようもないですから。無担保無保証の貸出ですが、債務者は同時破産廃止になっています」
「ドウジハサンハイシって何なの」
「破産手続費用すら無い場合に、破産宣告と同時に破産廃止になることです。銀行に配当はありません」
飯田は優一の説明を聞いて頷いていた。
「とっておきの案件があるぞ。『核爆弾』だな」
「最も物騒な名前ですね」
「殺傷能力が高いという意味だからな」
体を震わしている飯田に向かって、山名は平然と続けた。
「社長は飾りで、実質的なオーナーは暴力団組長だ。殺人の前科のある奴を抱えている。
担保物件が暴力団事務所になっていて、手が出せない。お前の名前で競売の申立をしてみるか」
「娘が生まれたばかりなんで、勘弁してくださいよ」
飯田は泣き出しそうな声で言うと、頭を抱えた。
「僕の方がストレスで『爆発』しそうだ」

悪流修羅（第二話）1
リストラの虚構

中泉聖司



（一）

ゴールドコースト、サーファーズパラダイスの海辺は静かな夜を迎えていた。

それでも、南太平洋の遙か沖あいでひねり出された波の帯びが無数の白蛇のように迫り、広遠に伸びたなぎさの砂上を這い回る。

透明な夜の空に今は、半身を隠した月が、南十字星の輝きを消すことも無く南太平洋の上空を支配しているように見えた。悠久の天空を舞台に演じている主役と脇役を、漆黒の永遠の彼方から銀河の帯が終章のない楽譜のように煌き和がれている、何と言う壮麗な調和だろうか。

その月明かりを受けて、なぎさに白髪を靡かせて一人の男が昂然と立っていた。

サーフボードを抱えた黒い裸体姿の影が近づいて言葉を投げる。

「山野社長！」

「広田か・・」

「はい！先ほど到着しました。」

「テロの影響か・・遅れたようだな」

「セキュリティチェックが厳しくてブリスベン空港には五時間遅れです。」

「困った時代になったものよ」

人も虫の集団と同じなのか、日本人も同じだろう！拡大しつづける覇権勢力は歴史的に見ても永遠のものではない、富国強兵は慢心をはびこらせ、人の心を腐らせて自滅していく、すでにアメリカ主流時代が、そのような飽和期にきている、と、いうことか。

「どうして彼らは自爆し、無関係な人間を殺傷するのだろうか、平和や人権とは無関係の国なのか？」

「平和か？・・・今の日本人であるわたしには到底推し量ることはできないが・・・だが・・戦前の特攻隊を想うと、日本もなあ、同じような時代があった」

山野は特攻機が敵艦に消えていく当時の戦闘機の映像を思い起こしていた。

長い時空を耐えてきた民族、人間の心の奥に溜まりにたまったエネルギーの暴発だろうか、覇権者への妬み、怒り、屈辱、それに自分の利欲のため、いつの時代も同じなのかも知れない。

「戦争になるのでしょうか」

「すでに各地で戦争を起している、おそらく、どこかの民族、どこかの国が、みじめに大敗して傷つくまでは続くだろうなあ、かっての日本のように・・」

「戦勝国の援助を受けて、ここまで成長して来た日本のようにですか・・」

「戦争で何百万の生命や英知を失い、焦土にされ、生き延びた人間の心が傷だらけになっても、その時点からの教育次第で敵国と同朋にもなれる、時空が怨念も消しさっていく、教育しだいで、な、キミもアングロサクソンの教育を受けてきた一人だろう」

山野は天を仰いで首を振った。思い出したくもない事案が脳裏をかけまわる。

「まったくイヤな時代になったものだ！ところで、国内や社内の状況はどうだ。」

「はい、F議員への献金疑惑で家宅捜査が入る、との噂があります。ただ、党がF議員をつぶせない裏事情があるために、検察にたいして相当の圧力がありますし、証拠が確定的でないために、流動的です。」

「マスコミはどうだ」

「相変わらずハゲタカのように社長の家の周りで監視しています。疑惑の社長は一週間も家から一歩も出ないで、謹慎をしているのでしょうか、と、馬鹿げたレポーターがわめいています」

「ハハハハ・・まだ気が付いてはいないのか、家政婦の馬場君には、やがて特別手当をやってくれ！・・オレの家から隣地へ隠し道を造ったことは成功したな！獲物の逃げた後で、もぬけの殻を見張っているってかい！まあ、そのうち事実に気がつくだろうが、その時はこのリゾート地にもやぶ蚊のように奴等は飛んでくるだろうな・・・」

嘲笑に似た笑いがこぼれた。

「会社にも大勢の記者たちが来ていますが、まるで礼儀のない者も多くて・・まるで検察官のように我々までもが罪人扱い、総務部や秘書課は困っています」

「礼儀か・・」

照れくさい、困惑した表情がかけ抜ける。いま、礼儀は自分も含めてどちらにもないのだが、これが時代なのだ。

「手は打ってありますから・・当分は分かりませんよ、

ここは社長と何の縁もゆかりも無いところですから。わたしの友人のコンドーミニアムですし、その友人も秘密は守る男です。」
「内部告発はないか」
「出来るだけ秘密にしてありますが・・・それは社長、今回の目的でもあるのでしょう」
「おー、その通り、しっかり監視をするんだ、それが大事よ！闇の献金の一つや二つで、このオレの首は取れまいさ・・」
「それにしても日本もひどい時代になりましたね」
「フフフ・・お前の口からそんな言葉を聴くとは・・・大分、成長したな！善人つらだけでは生きてはいけないのよ！バカだワルだと言っていても、それに対応していかねばならないのよ！眼にはめを、歯には歯を・・だよ」
「わたし達も悪なのでしょうか」
秘書の広田哲夫がため息をついた。これまで山野悦治社長のために尽くしてきたことは正しいことだけでもないのだ。

「菊枝に会ったか・・・昨日から来ている。」
「はい！先ほど・・・グレッグ・ホーソン様の奥様らとにぎやかに飲んでおられます。」
「菊枝らにはオレの醜聞も無関係のようだ・・いまさら巻き込みたくはない。」
「秘密にして良いのですね」
「当然だ！おまえだけに頼むが真実は言うなよ、だが変な奴にまで汚されることはない、フォローはたのみたい。」
「娘さんと二人で悲しまれますよ、いいんですか」
「ばか者！毒をくらわば、骨まで・・だ！この策が成功するためにはな」
「わかりました。わたしもその船までお供をします」
「かまうな！旧友のグレッグ、ホーソンは、信じていい、この一週間で、アクアラングは卒業した。このゴールドコーストの引潮に乗っていく、計画がうまくいくことを考えてくれ」
「誰かがすぐに騒がなければ良いが・・・」
「何が起こると言うのか、ポリスの影すらめったに見たことは無い、この平穏な街に、・・予定通りに頼むぞ！」
今夜は風が弱い、心配はない。月を隠す雲すら流れてはいなかった。あとの言葉は潮騒の音に消されてしまった。
暗い沖の方から絶え間なく、押しあげてくる小波の帯が、リズミカルに寄せては消えていく。
が、海流は間もなく引潮に変わり沖の方に確実に引き戻されていくのだ。
ゴールドコーストの砂質は砂時計のように粒子が細かく、足裏の砂が引く波に削られ消えていく感触に、広田の顔が神妙に固まった。

これからの演技には自信がなかったが、今となってはやるしかないのだ。
山野悦治は振り向いていたが、残念ながら広田の困惑した表情には気が付かなかった。

サーフボードを引きながら山野悦治は浅瀬をジャブジャブと沖に向かっていく。
山野は株式会社オートネックの社長で今年五七才、創業四五年で、今や日本の空調メーカーでは独自のシェアーを持ち定評がある。これも創業者の大利根健が独創的な配管の素材を開発、ジョイントの特許を取得し、加工と販売組織も改革してコストダウンを計り、日本の高度経済成長とともに躍進してきたからだった。
ところが、去年の夏に突然、創業者の大利根健は心筋梗塞を起して他界した。
大利根には後継ぎはなく、後継社長の選考には山野と坂口の二人が候補にあがっていたが、社内の大方の予想を裏切るかたちで山野が社長に選任された。
技術屋より営業畑の山野が株主や政界に顔がきくために、主力銀行に強力に推された結果であった。
F代議士との親密な関係が噂にのぼり始めたのも、その頃だった。
もっとも、先代時代から蜜月交際を引継いできただけのことである。

広田が秘書室に入って六年が経つ。朴訥だが他意がなく実直に勤めてきた男だった、社長に就任すると、すぐに山野は広田を専任秘書にした。実直さ、これはこれでいい、だからと言って特別に光る人材でもない、と、思っている。秘書室長の指示だけを的確に処理することだけで勤めてきた。今回の計画には俊敏な男は似合わないと考えていた。
広田はカナダ、バンクーバーのブリテッシュ・コロンビア大学に留学し、経営学を専攻して入社していた。
語学は仏語、英語をこなすが、世間ずれをしていない独身の地味な男だ。

（二）

一人残された広田は、躊躇していた。
ボートは持っていたがサーフを楽しむ気にならない。
半日以上かけて、旅をして来た疲れも覚えていた。
背後に聳えるコンドーミニアムの最上階のベランダに人影が見える。
山野の愛人、菊枝とその友人、ホーソン夫人、その友人たちだった。
広田の声が届いたのか手を振って答えている、ように見えた。

日本のリゾート地と違うのはこの静けさなのだ。
広大な浜辺がその気風を生んだのか日本の観光地のような喧騒が見られない。この街は多勢の他国籍の人々がバカンスを楽しんでいるのに日中から姦しい雰囲気がないのだ。
今年は、特にテロの影響だろうか、例年より窓の明かりが少ないように思う。

二月の南半球、オーストラリア、クインーズランド州の避寒地、ゴールドコーストの白い砂浜がえんえんと続く、そのメインビーチのある中心地のビルの最上階が、今の山野の隠宿として借りたコンドーミデアム。
ベランダが三方に突き出して東海岸に拡がる南太平洋の全てと南北に開けた大陸の勇壮な景観を見わたせる。
淡い月明かりが渚から沖に向かう山野のすがたを、彼女たちは視野に入れているはずだった。
しかし、その先には海と夜の空とが融合し、山野の様子は見分けることはできないだろう。
一週間前に山野が秘書の広田に手配して寒い日本からやってきた。そして今日、ブリスベン空港から約一時間の当地に秘書の広田が着いたところだったのだ。

山野の愛人、菊枝は、山野と同行して当地に来た。
菊枝は山野が妻を亡くした以来の付き合いで、今では後妻と言われても仕方の無いほど周知の女性だが、入籍について菊枝は娘の紀子に気がねしているのか、何も触れようとはしないし、山野も入籍する煩わしさを知っており、面倒なことがイヤで今日までつきあっている。
自分はずるい男かな、とも思うが、お互いにマイナスになることもないのだが、娘ももの心がついて以来、菊枝の世話になっており、折り合いも悪くはないと思っている。その娘の気持ちも聞いて、すまいの環境を変えれば考えても良いのではないか、と、自答して今日まできた。
今回の計画が完成したのちには、愛を完成したいと、いま、痛切に感じ始めていた。

ゆらゆらと揺れるサーフボードに背中を預けた山野が波のうねりにまかせて海に浮んでいる。
天空を眺めて、これまで自分のしてきた仕事の回想に耽る。
景気の低迷化の中でも海外の販路は順調に伸びていたし、提携先から受け取るロイヤリテイも滞りはなかった。
しかし、今は円安の効果が寄与していたが、山野は日本の節操の無い施策には信頼を置いてはいなかった、現実に国内の需要は伸び悩みはじめていたし、いつ逆風に曝されるともわからない、このままではやがて中期的な計画に狂いが生じて不測の影響を受けることは目に見え

ていたので、その打開策に悩んでいた矢先に、F代議士の献金疑惑に巻き込まれたのだった。
F代議士との出会いを思いおこす。
「大利根君とは刎頸の友だ！なんだって言って来い」
「将来は、日本の舵取りをする男だ、大切におつきあいをしなさい」
先代との交流は義理と人情によって結ばれていた。
山野は営業部長の時代、香港、シンガポール、バンクーバーでF氏の外交能力に頼って仕事を伸ばしてきた。
F氏は在外日本公館では絶大な権力を発揮しており、国際的関連プロジェクトに参加し、納品をしてきた。
その裏には当然のように政治献金が生れ、その金は政治集団をつくりあげ、維持して、多数決の原理を遂行し政策の具現化をめざす、ある時代の常識ではあった。
それが、いまの時代には通用しなくなってきた。資金の流れを公開し透明化することは野党の攻撃を受ける格好の餌食になりはじめていた。
しかも、先代の時代から慣習化していたことだがその裏の金に、疑惑が発生していた。
F氏のミスで秘書を傷つけその金の存在がクローズアップし、国会で騒動がはじまったのだった。
退職した秘書が野党へ情報を売ったことが引き金になったらしい。
大宇宙の果てに思いを馳せながら、人間の微小さをおもう。それでも人間として生を受け先代にめぐり合い、幸運にも社長を引継いだ今、人の集団の中で企業を生かして社員を生かしていかなければならない。悪運をなげいているだけではじまらないのだ。悪の証人にだけはなれない。山野も義理と人情を引継いだ男の一人だったのかもしれない。死をもって対抗することも考えてみたが、その前に一策を投じようとしていた。
企業を生かし、人を傷つけないで、この難局を切り抜けるために。
そして、人の本質を見極めるために、ある計画を山野は実行しはじめた。

その時、すぐまじかでアクアラングに身を包んだ二人の男がいたのを知っていたのは広田だけだった。
その先に一艘のクルーザーが室内灯を消して揺れていた。
アクアラングに身を包んだ二人の影が、海中にヘッドライトを照らしながら、山野悦治のサーフボードに忍び寄ってきた。

（つづく）

宰相の橋

（二）



太田精一

大量の資材がヴィシェグラードの町に運び込まれた。町の各所に天幕が張られ、人馬の行き交う音が、静寂に包まれたこの山峡の町の眠りを覚ました。

森の木が倒され、ドリナ川の両岸に、うず高く材木が積み上げられた。

トスンは、川の中に橋脚を立てる位置を決め、その周りを木の杭と板の壁で囲むよう、人夫頭に命じた。架橋技術は、古代ローマからビザンチンを経て、オスマン帝国に伝えられたものである。トスンは、その技術を親方のケマルから学んだ。彼は、橋の建設には、自信と誇りを持っていた。だが、口数が少なく、町の人たちや農民に、どのような橋を作るのか、また、その橋が町の人たちにいかに利益をもたらすか一切説明をしなかった。町の人たちも総監督のアビダガや技術主任のトスンには、遠慮して直接聞くことはなかった。こうしたことが後になって橋の建設を遅らせる結果となった。

工事が進むにつれ、賦役は増した。その負担は、セルビア正教徒に重くのしかかり、彼等には、橋の建設が疫病神のように思えてきた。

立杭の工事だけで、晩秋を迎え、冬が迫ってきた。ヴィシェグラードの冬は厳しい。工事を続行することは、到底無理である。

アビダガは、町の長老と有力者を集め「春には戻って来るが、その時に、車、鋸、金槌などの道具類や木材が少しでも減っておれば、お前たちを含めて、厳罰に処す」と言い残して町を出た。一方、トスンはコンスタンチノープルのケマル親方のもとで、冬を過ごした。

長い冬が終わり、四月の春を迎えた。アビダガは、アドリア海沿岸のダルマチア地方（現在のクロアチア共和

国）の石工三十人を引き連れ、ヴィシェグラードに戻ってきた。石工たちは、ローマ時代から続く石造建築の技術集団で、カソリック教徒である。親方は、ローマ人の末裔と称しており眉毛の太い、思慮深そうな偉丈夫であった。石工たちは、町の近郊から切り出した石を岸辺に積み上げ、これを一つずつ削って行く。

道は荷車や資材でごった返し、足の踏み場もない。賦役に駆り出された人たちの大多数は無報酬で働かなければならなかった。この小さな町に多くの人が、一度に流入したため喧嘩騒ぎや盗みが横行し、治安も極度に悪化した。女は家の中に閉じ籠り、外出時には顔を隠し、人目のつかないようにひっそりと暮すようになった。

ムスリムたちは当初郷土の誇りである宰相の橋の建設に興味を示し、どんな橋ができるのか期待して眺めていた。だが、想像を超えた騒音、煙、埃に悩まされ、昔ながらの生活を懐かしむ声が次第に高まってきた。ましてや異教徒であるセルビア正教徒の男子にとって橋は怨嗟の的となった。農作業や鍛冶仕事などがあっても強制的に賦役に駆り出されたからである。荒れ果てた畑や仕事場が、あちこちに目につくようになった。

三回目の秋が来た。冷たい雨が降り、道はぬかるんで、作業は滞りがちとなった。賦役に駆り出された農夫たちは、ぬかるみの中を汗まみれになって石や木材を運んだ。粗末な服に浸み通った雨が、体を冷やし肺炎を起す者も少なくなかった。

アビダガは、それでも工事を中断しようとはしなかった。日はますます短くなる。夕闇が迫る頃になるとアビダガのいら立ちは募り、回りの人々に当たり散らした。

十一月のある寒い晩、農夫たちは、アビダガの怒りを避け飯場の隅にひと固まりになって、暖をとっていた。するとかすかに弦を奏でる音に合わせて歌う抑揚のある鼻にかかったような声が聞こえてきた。農夫たちは、監視人がいないかどうかを確かめ、その歌声の周りに集まった。

男はグスラ（一弦の楽器）を弾いていた。コソボの戦い（一三八九年）で、オスマン・トルコ軍に敗れたセルビアの英雄たちの悲しい物語を語っている。ろうそくの明りが引き寄せられ、グスラ弾きの顔が照らされた。頬がこけ、苦悩に満ちたその顔は、キリストの受難の姿を思わせた。目を閉じて一心不乱に弾くさまは、平家物語を語る琵琶法師のようでもあり、聞く者の涙を誘った。

この日を境に妙な噂が流れはじめた。「水の精が工事を邪魔して、昼間造った個所を、夜壊している」という。実際、夜のうちに堰や石垣が壊され、土手にもしばしば穴が開けられていた。

この噂は、たちどころに広まった。ムスリムもセルビア正教徒も好んで口にした。多くの農民たちは、「これで工事が中止され、苦役から逃れられるかも知れない」

とかすかな希望を抱く者も少なくなかった。ムスリムに改宗したセルビア人も、当初はこの橋の完成を期待したが、工事が長引き、同じセルビア人の正教徒が苦しんでいる様子を見るにつけ、橋の建設に対する批判を次第に強めていった。異国から来た職人たちも、あまりの難工事に、橋の完成を危ぶむ者さえ現れ始めた。

トスンは、何とかこの噂を打ち消す方法はないものかと知恵を絞った。そこで彼は、セルビアのスカダル城築城の際のストヤとストヤン姉弟の伝説を利用して、人柱を立てることを思いついた。その伝説とは次のようなものである。

ムルニャヴチェヴィチ家の三兄弟が、ボヤナ河のほとり、スカダルの築城にかかった。ところが、三年を費しても礎さえ据えることができなかった。石工が昼の間に築いたものを、妖精が夜の間に壊してしまうからである。そんな時、長男のヴカシン王のところに、壊している張本人の妖精が現れた。妖精は、「ストヤとストヤンという、よく似た名前の姉弟を見つけこの二人を人柱として塔の礎に塗り込めれば礎は定まり、城を築くことができる」と叫んだ。これを聞き、ヴカシン王はストヤとストヤンの姉弟を国中捜させた。だがそんな姉弟は見付からなかった。そこでしかたなく妖精の言葉を無視して工事を続けたが、礎は造る片端から壊されてしまった。

執拗に工事を続ける三兄弟に根負けした妖精は、「お前たちの妻のうち、石工らに昼食を届けることになった者を塔の礎に塗り込めれば礎は定まり、城を築くことができる」との代案を示した。

長男のヴカシン王は、二人の弟を呼び、このことを妻には決して口外しないよう約束させ、誰れの妻が石工に食事を届けるかは天運にまかせることにした。ところが、ヴカシン王自からこの約束を破り、二男のウグレシャ将軍も、妻に秘密を打開けてしまった。

三男のゴイゴは、誓を守って、妻に何も言わなかった。ゴイゴの若い妻は、二人の義姉の命に従い、昼食を石工に届けた時悲劇は起った。塔の礎として塗り込めるための人柱として捕えられてしまったのだ。若妻には乳飲み子がいた。彼女はその乳飲み子を不憫に思いちょうど乳房の位置に、窓を作ってほしいと石工の棟梁に頼んだ。彼女は、乳飲み子に七日間乳を与え、息絶えた。だが、彼女が死んでも、乳は一年間、窓から流れ続けた。子供はその乳を飲んで育ったという。

この伝説は、宰相の橋にもとり入れられ現在も受け継がれている。橋には、哀れな母親が人柱となったわが子に、乳をふくませることができるように、橋脚にいくつかの盲窓が作ってあり、今ではそこに鳩が巣をかけている。そのためか、時によって壁面からあたかも人柱となった母親の乳房からあふれ出たかのような白い乳液が流れ出ている。

トスンは「橋を壊した妖精が、アビダガの夢枕に立って、ストヤとストヤンの名前を持つ姉弟を人柱にすれば、橋脚を壊すのを止めると言った」という噂を、まことしやかに農民の間に流した。彼は、人柱を立てることによって、農民の間に広まった「水の精の邪魔」の原因を取り除こうと考えた。だが、彼は、実際に生きた人間を人柱に立てるつもりはなかった。

彼には、一つの秘策があった。知能の低い一人の聾唖の娘が、双子の子供を死産したとの情報をもとにその双子を橋脚に塗り込め、あたかもストヤとストヤンを人柱としたかのように見せかけるというものである。

いよいよ冬も近づいてきた。雪が回りの山々を白く覆い始めた。ヴィシェグラードの町にも雪雲が重く垂れ込め、粉雪が舞い落ちてきた。

工事の遅れが目立つ。しかし、冬将軍の到来を前にして囲った橋脚部分の川床を深く掘り下げ、石材を積み重ねたまま、工事を中断しなければならなかった。

トスンは、今年の冬は、このヴィシェグラードの町に残る決心をした。工事現場の近くのセルビア正教徒ラドヴィッチの家の隣に、小屋を建て、自炊生活を始めた。ドリナ川の水量を測り損壊した個所の点検を行い、その修復を行うよう人夫に指示することが彼の日課となった。

アビダガも、コンスタンチンノープルへの帰省を遅らせた。「水の精が工事を邪魔している」などという噂を流し、工事の妨害を図る不届者をどうしても許すことができなかった。トスンの計画に乗り、人柱を立てたようにして、噂を打ち消したものの、夜になると、必ずどこかが損壊していた。

トスンは、総監督のアビダガに、監視人を増やし、警備を強化することを勧めた。アビダガの嗜虐的な性格は、近在に知れわたっていたので、警戒が厳重であることを犯人に見せつければ、危険を犯してまであえて損壊行為をしようとする者もいなくなるだろうとの読みが彼にはあった。

しかし、アビダガは、何としても犯人を逮捕し、串刺しにするのだと息巻いて警吏隊長に「三日間のうちに、損壊工作を止めさせ、犯人を挙げることができなければ、貴様を同罪とみなし、串刺しにする」と脅した。警吏隊長は、アビダガの恐ろしさを知っていたため、単なる脅しではないと考え、早速部下全員を集めた。「二日のうちに犯人をとらえなければ、お前たちの生命はないものと思え」と厳命し、犯人の出現しそうな場所に、部下を配置した。

犯人も警戒したためか一日目、二日目は何事もなかった。

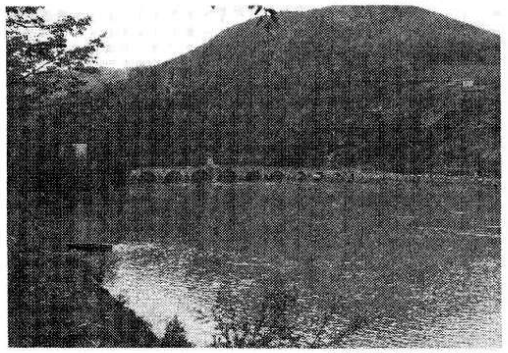
三日目の夜、真夜中を過ぎた頃、わずかに水音が聞こ

え、足場の土台として打込んだ杭に、ゴトンとぶつかる鈍い音がした。二人の農夫が、夜陰にまぎれて、梁に近づき、いかだを結びつけようとしていたのだ。警吏たちは、二人に近づき、棍棒をもって飛びかかった。一人は頭をなぐられ、気を失って捕えられた。だが、もう一人は、水中に飛び込み逃げてしまった。捕えられた農夫は、近隣の村から徴集されたセルビア正教徒であった。かねてから、橋の必要なのは、商人や軍隊で、貧乏な農民には、橋はいらないと喧伝していた人物である。

アビダガは「犯人の一人が捕った」との知らせを受けて、すぐ身支度を整え、犯人の留置されている物置の前に姿を現わした。

（つづく）

この物語は旧ユーゴスラビア連邦共和国のノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチの「ドリナの橋」（松谷健二訳）の一部をもとに、作者の主観を交え、とりまとめたものである。



ドリナの橋（1984.5.5 撮影）

黒船（二）

太田和貞

御台場御普請

三郎右衛門は不満を持ったまま御奉行所から公事宿佐野屋惣左衛門に帰ってきた。佐野屋は御奉行所の差紙を届けてくれた公事宿だった。

差紙の飛脚代のほかに心付けも添えたので、手代の藤兵衛は愛想がよかった。

「ところで、藤兵衛さん、本日のお呼び出しはなんだったのでしょうかねえ」

「さあ、……。この佐野屋だけでも、十本のお差紙を触次さんにお届けしたので、公事宿全体では、たいへんな数になります。はい」

藤兵衛は心付けを貰った手前、なにか話をしていなければならないと思ったらしく、三郎右衛門の話し相手にはなってくれたが、なんのために差紙で触次を呼んだのかは、なにも知らなかった。

（お役人さま方にもう少し、しっかりして貰いたい）

御奉行所で見たお役人の血走った目を思い出して、三郎右衛門は思わず目を閉じた。

（百姓が米をつくってお年貢を納めるのはお役人さま方に、国を守って貰おうという思いが強い。それを、たかが四隻の黒船が来たくらいであのようにあわてられては、わしら百姓はお年貢を喜んで納める気にはなれん）

そんな愚痴を藤兵衛に言いたかったが、三郎右衛門はぐっと我慢した。

「公事宿」は江戸時代に訴訟や裁判のために、地方から出てきた者を宿泊させた。

馬喰町と小伝馬町付近に集中していた。それは馬喰町に関東郡代、伊奈半左衛門の役宅、小伝馬町に牢屋敷があったからだ。

公事宿は公事訴訟人の依頼で、訴状の作成・訴訟手続きの代行・御奉行所の命令で差紙の送達・関係者の身柄預かりなどを行ない、公事宿の主人や手代は現代の弁護士の前身とも云えた。

三郎右衛門も藤兵衛から公事方御定書をひそかに写させて貰ったことがあった。

それは、「秘密録」と表書きされてはいたが、内容は八代将軍吉宗が制定した公事方御定書であった。

「本当に珍しいものが手に入りましたので、お見せしようと考えておりました。いかがでしょうか？」

藤兵衛は三郎右衛門の気をひくように、小声で言った。

「うーん。わしに譲ってはくれぬか、……」

「残念ですが、それはできません。この公事宿でお写しいただきます。それでよろしければお貸ししたしてもよろしいのですが、……」

「借り賃はいかほどかな、……」

「相場は五両になっておりますが、お名主さまには、いつもお世話になっておりますので、三両ではいかがでしょうか、……」

公事方御定書は三郎右衛門が兼ねてから手に入れたいと望んでいたものであった。

相場という藤兵衛のことばに、三郎右衛門はちょっと眉をひそめた。

「いま持ち合わせてはおらんが、……」

写し終った時点で支払うという意味をこめて、藤兵衛の顔を見た。

「え、え。それで結構でございます。ただ、ものが、ものでございますので、奥で書き写していただきますが、よろしうございますか、……」

「おく？、ああ、あの座敷牢のことか、わしも一回は入ってみたいと思っておった。あの座敷牢で筆がとれるとは、勤皇の志士のようで胸が躍るわ」

公事宿にはお裁きで宿預かりになった者の逃亡を防ぐために、二階の奥に座敷牢がつくられていた。

公事方御定書には、

「右の趣、上聞に達し相極め候、その掛り御役人のほか、他見あるべからざるものなり」

と、三奉行（寺社奉行・町奉行・勘定奉行）以外の他見を許さぬ旨が明記されてはいたが、公事宿では、ひそかに書き写されていた。

御用屋敷でのお役人様方のあわただしさに、三郎右衛門が感じた不安が適中した。九月二十三日付で、

「明廿四日、晴雨共、正九ツ時、東小松川村東善寺」で名主の会合を開くとの触れを廻した。

しかし、会合当日の九月二十四日付で、

「御出役様、渋江村始ニて拙宅え御越被成村々江御用談」

と会合の場所と時刻の変更を急廻状で触れなおした。

「正九ツ時、東善寺」と心づもりしていた名主たちは、三郎右衛門の第二便に、あわただしく衣服を改めて三郎右衛門宅へ駆けつけた。

火急御用筋ニ付、今日昼九ツ時御出会相触候処、御出役様、渋江村始ニて拙宅え御越なられ、村々え御用談の上、金町村え御越なられ候哉も計がたきとの御先触ニ付、此状被見次第、即刻拙宅え御出張ならるべく候、此状大急ニて御順達、留り村より御返しならるべく候、

丑九月廿四日　　触次　三郎右衛門

奥之宮村

御奉行所手付の岡田半兵衛が三郎右衛門の役宅にきて、名主たちに話したことは、三郎右衛門の予想に反して、明俵の供出だった。

差紙で御奉行所に呼び出され、「火急の御用筋のため名主の会合を開け」と申し渡されたとき、三郎右衛門は、「何を相談したらよろしうございますか？」とおうかがいをたてた。

それに対しての返答は、「その会合に我等も出張る」と答えただけだった。

葛西領下之割の奥之宮村まで御奉行様手代の岡田半兵衛様がおいでになって、

「御台場建設のため土俵をつくる明俵が必要である」

と頭を下げられては、何も知らない名主たちは、ありがたがった。しかし、差紙で御奉行所まで呼び出されて、明俵の供出と知らされていなかった三郎右衛門は不満だった。

せめて、御奉行所で、「明俵供出に尽力して欲しい」と頼まれれば、三郎右衛門も働き甲斐があるというものだった。

この不満は御用屋敷で見てしまったお役人さま方のあわてぶりが三郎右衛門の心の奥に、澱となって沈んでいたためであろうかと三郎右衛門は思ったりした。

内海御台場御譜請御遣方ニ相成候明俵、某村々の内、高百石ニ付、凡百俵位のあたりを以て新規編立、尤明俵所持のものは、編み立てるに及ばず、壱俵毎桟俵弐ツ宛添、村毎取揃当月廿七日まで銘々組合村々の分、残らず河岸場壱ケ所ニ定め置き、俵数相揃い候村々ハ右日限以前ニも右河岸場え持ち運び、御見分済の上、送り状御渡しニ相成るべく間、右日限迄ニいささかも御積立方御差支ニこれ無きよういたし、上乗のもの壱人付添、高輪如来寺ニ御出張これあり候斎藤嘉兵衛様御手代中え相渡し、右俵代銭・舟賃とも御同人よりこれを請け取り、勿論右俵値段の儀不相当の儀これ無きよう仕る可き旨、仰せ付けられ一同承知畏まり奉り候、これに依りお請印形差し上げ申す所、件の如し、

嘉永六丑年九月廿七日

東葛西領下之割　村々役人　印

竹垣三郎右衛門様御手付
岡田半兵衛殿

この九月廿七日の文書によって、下之割の村々が割り当てられた明俵の総数は、一六、六〇四俵であった。さらに、十一月九日付で八、三〇〇俵が追加されて、総合計で二四、九〇四俵となった。

下之割の村々では、毎晩、夜鍋仕事が続いた。

持高拾八石九斗弐升七合四勺の三郎右衛門の家にも、二十九俵の供出が割り当てられたが、三郎右衛門は村内の無高（田畑を所有していないこと）の勘七・音吉・平兵衛・文五郎の四人に、稲藁を与えて明俵をつくらせた。

黒船の出現によって、莫大な儲けをして、

「武具馬具師　アメリカさまと　そっと言い」

とからかわれた武具屋、馬具屋とは、いかなくとも、夜鍋仕事をした江戸近郊の百姓たちに、莨銭ぐらいは落していった。

夏から秋に季節が移り、暑い日射しがいつの間にか、秋のおだやかなきらめきに変っていた。

かねがね、三郎右衛門は名字帯刀をゆるされることを願っていたが、なかなか思うようには、いかなかった。

（御台場を築きあげれば、名字帯刀もゆるされるであろうし、わしの名も後世まで残るやもしれぬ）

そんな功名心にかりたてられて三郎右衛門は早々に願書を認め、下男の松助を従えて、御奉行所に向った。

従弟の柴又村の年寄五郎左衛門が御台場の築立請負人に願書を出したと聞いて、三郎右衛門の闘争心に火をつけたのだった。

馴染みの公事宿佐野屋で、紋付き袴姿に着替えた。

佐野屋を出るとき手代の藤兵衛が目を丸るくした。

「きょうはなんの御用でございますか？」

「御台場の御普請を願い出ようと思ってな」

「ほおう！御台場の御普請を、……。御奉行様もさぞかしお喜びになられると思いますよ。はい。なにしろ、海の中に御台場を築き上げる膨大な工事なので、どなたもご希望がございません。そう、そう。柴又村の名主の五郎左衛門さまが願書を出されたと聞いておりますが、……」

（名主ではない。年寄役だ！）

三郎右衛門は心の中で、そう否定した。五郎左衛門の名を聞いた不快さが三郎右衛門の眉間のあたり漂ったが、藤兵衛は気付かなかった。

「お名主さまが、ご出馬とあれば、御台場はもう出来上がったも同然でございます」

藤兵衛の追従を背中に聞きながら三郎右衛門は佐野屋を出た。

「おう。そちが請負ってくれるか、そちならば願ってもないことだ。御奉行様は、まだ御城からお戻りではないが、わしから御奉行様によくお伝えして置く。一、両日のうちに、連絡するゆえ、ご苦労だが、この御用屋敷にきて貰いたい。その際、そちの印鑑を忘れぬようにな。……。鑑札、御用提灯、御奉行様の任命書など渡すものがあるでな」

御用人の佐藤孫太夫は機嫌がよかった。

三郎右衛門が佐野屋に戻ると、藤兵衛が飛んできた。

「ご首尾はいかがでしたか？」

「御奉行様はお留守であったが、御用人の佐藤さまがたいそう喜んでくださった」

「そうでございましょう。お名主さまが請負われたら、御奉行様にとっても鬼に金棒でございますよ。ところで、御台場御普請に、まことに、うってつけの本をみつけました。どうぞ、お手にとってごらんください。それ、これでございます。浪除石垣之事と書いてございますでしょう。浪の荒い場所の石垣は、このようにして仕立てるのだと説明しております。御台場御普請のご参考になさっては、いかがでしょうか、……」

藤兵衛は三郎右衛門の顔色をうかがいながら、和綴じの本を開いたまま渡した。

大石久敬著述、『地方凡例録』と書かれた冊子を三郎右衛門は黙読した。

「浪欠強き場所の乱杭等にしては、保ち難き海表の分、又は船入・波止場等は石垣に仕立るなり、……」

三郎右衛門は名主としていろいろの現場を経験してきたが、海での普請（土木工事）は初めてだった。

「どうなさいますか、……」

藤兵衛は気をひくように三郎右衛門の顔をのぞきこんだ。

「貰おう！」

「ありがとうございます。十巻ございまして、それぞれの巻が上下にわかれておりますが、……」

「この際だ。みんないただこう」

「貴重なご本でございますので、少々、値が張りますが、……」

三郎右衛門は藤兵衛の顔を見た。

「三両では、いかがでございましょうか、……」

「下男の松助に持たせておくれ。金は、みそかに名主屋敷に取りにきてくれ。この巻は、みちみち読んでいきたいので、わしが持っていく」

『地方凡例録　巻之九下』を懐にして、三郎右衛門は佐野屋を出た。

『地方凡例録』を懐にしただけで、三郎右衛門は御台場を普請するという夢が、どんどんふくらんでくるのを感じた。

人々の噂によれば、黒船は、小山のように大きく、鳥の飛ぶように速いと聞いていた。

（小山のように大きな船であれば、目をつぶって大筒を撃っても百発百中、間違いなし）

そんな思いが三郎右衛門の心に湧いてきた。

ゲジゲジ眉毛に、どんぐりまなこ、馬鹿でかい鼻が顔の中央に鎮座しているペリーの異相の顔は瓦版で承知していた。

（あの馬鹿でかい鼻の穴に、大筒を打ち込んでペリーの鼻をあかしてやらねば、江戸の百姓の名折れになる）

つぎから、つぎへと熱い思いが、こみあげてきて三郎右衛門の足はひとりでに早くなっていた。

三日後、三郎右衛門の名主屋敷に飛脚が届いた。

飛脚は馴染みの公事宿佐野屋の手代の藤兵衛だった。

御奉行様の池田播磨守の差紙を届けにきたのだった。

公事宿は株仲間を組織し、役所の腰掛といわれているところに常時、詰めており、御奉行様から差紙が下付されると、飛脚を立てて送っていたのだった。

飛脚を以啓上　仕候、然ば今般御奉行池田播磨守様より私方へ御渡し被遊候間、飛脚を以御達し申上候間、無遅滞御出府可被成下候、右御受書は此ものへ御渡し可被成下候、且飛脚賃之義は御出府の上、私方へ御勘定可被下候、先は御達しまで如此御座候、早々頓首、

十月三日　　馬喰町四丁目

佐野屋惣左衛門　印

池田播磨守様からの召喚状が出ましたので、即刻出府してください。受領書は飛脚の藤兵衛に渡してください。また、飛脚賃は出府のとき、清算してくださいとの趣旨であった。

一方、三郎右衛門への差紙はつぎのように記されていて、御台場御普請を願い出たことは、誠に殊勝であるとの気持ちは微塵もなく、高圧的な文言であった。

尋儀有之間、早々罷出可相届、若於不参は可為曲事もの也

十月　日

播磨　花押

興之宮村

名主　三郎右衛門

播磨とだけ書かれているのは池田播磨守の片名で、名前を省略することによって己の権威を誇示した。

差紙の形式が通常と何等変っていないことに、三郎右衛門は驚きを覚えた。

（これでは、なにか悪いことをしでかした罪人のお呼び出しと、まったく同じではないか、……）

差紙を貰いなれている三郎右衛門にも、差紙の文言は不満であった。

差紙の差図通りに、翌日佐野屋を通して着届けを提

出した。

「御奉行様が、たいそう喜んでおられた。本日は、あいにくと城中で緊急の会議が開かれるので、この佐藤孫太夫が御奉行様の代理を仰せ付かった。『大儀に思う』とのおことばもちょうだいしておる。三郎右衛門、御奉行様のおことば、確かに伝えたぞ！」

「は、はーッ」

三郎右衛門は平伏した。

しばらくして三郎右衛門が顔をあげると、佐藤孫太夫が乱れ箱を近習から受け取っていた。

「三郎右衛門、よく承れ。この度の御台場御普請を願い出たること、誠に殊勝につき、お羽織をくださるとのありがたい御諚である。丸に揚羽蝶は当池田家の代々の家紋、粗末に扱ってはならぬ。そちは果報者よのう。五ツ紋のお羽織、そちの家の家宝にいたせ」

「へ、へーッ」

思いがけない孫太夫のことばに、三郎右衛門はさらに低く平伏した。

「お名主さま、ご首尾はいかがでしたか、……」

三郎右衛門の姿をみて、藤兵衛が駆け寄ってきた。

「御奉行様のお羽織をいただいた」

「お羽織をちょうだいした、……。それは、まあ、ようございました。それでは御台場完成の暁には、念願の名字帯刀も夢ではございませんね。お名主さま、これからが正念場でございますよ。この藤兵衛、およばずながらお名主さまのお役に立ちたいと思います」

「わしの親戚の柴又村の年寄五郎左衛門も御台場御普請を願い出ておるゆえ、ふたりで協力して一つの御台場を築いては、どうかと佐藤孫太夫さまに言われた」

（あまり、気はすすまぬが、……）

ということばを心の中で押し殺した。

「あの柴又村名主五郎左衛門さまとご親戚でございますか、……。これは驚いた。天下国家の一大御普請に、ご親戚のおふたりが名乗りをあげるとは、百年に一度あるか、ないかです。ご協力なさいましな。きっと、瓦版にでかでかと大きく載って、江戸中の評判を呼びますよ」

藤兵衛の瓦版ということばに、三郎右衛門の心がチラッと動いた。

（佐藤孫太夫さまのおことばもあることだし、柴又村まで出張ってみるか、……）

先刻まで思っても、みなかったことが三郎右衛門の心にフッと浮びあがってきた。三郎右衛門と五郎左衛門は小さいときから仲が悪るかった。

（お羽織をいただいたことで、おつねの反対も押えることができる）

お羽織の入った乱れ箱を胸に捧げ持った松助を従えて、三郎右衛門は大股で歩いていた。

その日の朝も、
「ええい！。うるさいわ！。女に貢ぐ金ではないぞ。御台場を築くために使う金ぞ。女房のお前に、断るいわれはない！」
御台場御普請を願い出ようとする三郎右衛門に、おつねは強く反対した。
姑のおよねまでも味方に引き入れて、三郎右衛門に文句を言い立てたので、三郎右衛門はおつねを叩かんばかりに強く叱った。
「あるじのこのわしにあくまで反対するのであれば、去り状を書いても、いいぞ！」
三郎右衛門から去り状といわれて、さすがのおつねも口をつぐんだ。
おつねの心配も分からぬ訳ではなかった。
黒船来航による御用屋敷でのお役人さまのうろたえ振りを知っているだけに、三郎右衛門にも一抹の不安はあった。しかし、おつねに反対されれば、されるだけ、その不安は消えて、なにがなんでも、御台場御普請に入札したいという気持ちに変っていた。
それに、柴又村の五郎左衛門も入札に参加したという噂が三郎右衛門の心を波立たせた。
（名主が、年寄に負けてなるもんか、……）
そんな気持ちであった。
翌日、松助を供にして三郎右衛門は柴又村の五郎左衛門を訪ねた。途中、柴又の題経寺で黒船退散・祈願成就を祈ったあと、門前の川甚で鯉の甘露煮を買い求めた。
川甚は二百年以上も続く川魚料理屋で、特に近くの江戸川でとれる鯉料理が有名であった。
題経寺は人々から帝釈さんと呼ばれ、その祭りの庚申の日には、参道は夜通し参詣人で身動きがとれなかった。
庚申の夜に、身中の三戸の虫が天に上って、その人の罪過を天帝に告げるというので、人々は夜通し眠らないで、次の日の朝を迎えた。
参道の途中の茶店で、三郎右衛門はさらに草餅団子を買い求めた。五郎左衛門の好物の鯉の甘露煮と草餅団子を買ったことで、三郎右衛門の心も晴れやかになった。
（ほ、ほおうッ。ずいぶん大きくなった）
門冠りの赤松の見事な枝振りを見て、三郎右衛門は驚いた。
約二十年前、初めて門の脇の赤松を見たとき、幹も枝も細くヒョロ、ヒョロしていたが、今では見事に成長して門から門へと枝を伸ばして門冠りの役目を果していた。
ここら辺では赤松は珍しく、赤松の赤い幹や枝があたたかい雰囲気をかもし出していた。
（五郎左衛門もやるのう）
年寄役では建てられない長屋門の代りに、赤松を門冠りに仕立てた五郎左衛門の才覚を見る思いであった。

シナリオ〔大人の見るアニメーション映画の試み〕

龍化妖姫（三）

―周の幽王伝―

相原精次



40　**夏の時代**（画面に文字で示す）
孔甲帝の居室

孔甲　劉累よ、その後、ワシの夢枕に立つ二匹の龍をどう治めた？
劉累　はっ、孔甲様、二龍の内の一匹を殺し、ここに肉として持って参りました。
孔甲　どうして二龍とも殺してしまわなかった。
劉累　できないことではございません。しかし、二龍を共に殺せば、すぐさま天の怒りに触れ、あなた様の命も、即座に滅びることになります。
孔甲　何！　ワシの命も？　……う、うん、では仕方がない。
劉累　孔甲様、この肉をお食べなさい。
孔甲　この龍の肉をか？
劉累　左様でございます。
孔甲　ワシがこの肉を食えばどうなるのだ？　命が永遠に続くとでも言うのか。
劉累　わたくしめが占いによって知りました。この国の祖、禹帝様のご意志でございます。
孔甲　我が祖、禹帝の意志とあれば仕方がない。
劉累　さァ、今この場で、
孔甲　仕方があるまい。（肉を食う）
劉累　お味はいかがでございますか？
孔甲　なかなかうまい。こんな味の肉は今まで知らぬ。また機会があれば食いたいものだ。
劉累　孔甲様、この肉を食べた、たった今このとき、天はあなた様を突き放されました。これからは天の力を

借りず、自分の政治力で事を切り抜けなければなりません。禹帝の高い徳から、完全に切り離されました。

孔甲　何だと！　なぜそれを食う前に言わぬ。（胸ぐらをつかもうとする）

劉累　（あわてず）二龍を畏れず、このわたくしめに殺すことをご命じになったときから、これは避けられぬことでございました。

孔甲　天はこのワシを見放したと言うんだな。

劉累　致し方ありません。

孔甲　残った一龍はどうなるのだ？

劉累　ここに櫃を用意いたしました。これは大切に蔵の中にしまって置かなければなりません。今度、あなたの前に龍が現れたとき、おびただしい泡を発し、あなたを包み込むでしょう。そのとき、すぐこの櫃を出しなさい。泡は龍と共にこの箱の中に閉じこめられます。そしてこの櫃は代々大切に保管して、今後、帝を継ぐ人物にこの櫃を開けてはならないと伝えることです。

41　孔甲の寝室

孔甲　ウウーッ、苦しい。（夢にうなされるように寝室の中で苦しむ）誰かおるか。誰か！（目を開ける。そこには怒る龍が赤い口を開け、泡を吹いて孔甲に向かって来る）龍だ！　龍だ！　誰かおらぬか？　おおそうだ、あの櫃はどこだ。櫃は。

孔甲、手探りで櫃を探す。その間にも、龍は口から泡を吹く。泡は次第に部屋に広がり、孔甲は泡に埋もれそうになる。そのとき櫃を見つけ、蓋を開ける。するとたちまち泡は櫃に収まり、龍も櫃に吸い込まれて行く。

孔甲　（大きくため息をつく）

42　周・十代厲王の時代（画面に文字で示す）
王の居室

厲王　夷公、おぬしをわざわざワシの側近として抱えた意味を知っておるな？

夷公　十分承知しております。蔵を守るためでございます。お集めの財宝は命に代えてお守りいたします。

厲王　それで、今この時期に周王室の蔵を閉じてしまったのはどうしたわけだ？

夷公　それは、口さがない諸侯や民の目を一時くらますためでございます。

厲王　この周王室が何をはばかるのだ。蔵は王室を継いでいるこのワシのもの。これを悪く言うような者があったら、誰であろうと墨、劓、臏、宮、そして大辟、

どうにも処分すればいい。

芮良夫　畏れながら王様、このように利のみを求め、意見する者に刑を処す、これではこの王室の将来に決してよいことではございません。川の水と、民の口を封じることはできないことを知る必要があります。

厲王　黙れ！　芮良夫、今言ったとおりワシに口だしする者は刑に処す。それがワシのやり方だ。お前のそれは、さしずめ臏の刑に当たるであろう。

芮良夫　（憮然としている）

夷公　ところで王様、蔵の中を見ておりましたところ、かような櫃を見つけました。

厲王　ほほう、珍しい箱だ。一体何であろう。芮良夫、おぬし知らぬか？

芮良夫　厲王様にものを言うと、刑に処せられるのではございませんか？

厲王　何を言うか！　事と場合によってであることくらい分からぬか。

芮良夫　それでは、申し上げましょう。

これは、言い伝えによるのでございますが、夏の時代の孔甲帝の頃から代々、夏・殷そしてこの周王室に伝えられて来た謎の櫃でございます。決して開けることはならぬと言い伝えられております。

厲王　そんな古い時代からの物か。中は一体何であろう。

芮良夫　開けて、よいことは起こらぬと存じます。

厲王　そう言われると、益々気になってくる。

芮良夫　どうぞ、蔵の奥にしまい、ゆめゆめ蓋を開けるなどということをなさらぬように願います。

厲王　くどい。一度言えば分かる。もう一度言えばお前を臏の刑に処すぞ。

43　厲王の寝室

厲王、侍女達を侍らせ、櫃を眺めながら一人ほくそ笑んでいる。

厲王　開けてはならぬと？。周室の王にして、してはならぬことがあるとは。全くバカげている。

厲王、しばらくためらっているが、櫃の蓋を開ける。たちまち、泡があふれ出す。

厲王　な、何じゃ、これは。泡が出るわ。泡じゃ、泡じゃ。ワハハハッ、泡が出る。女ども、この泡の中で遊べ。裸になれ。この泡の中でころげ回れ！

厲王は興奮する。侍女たちをあたりかまわず裸にして、泡の中で遊ばせて喜ぶ。

裸になって遊ぶ女の中に後宮で生まれ育った七歳

ほどの幼児もあった。
泡と共に櫃の中から一匹の玄黿（とかげ）がスルスルと出てくる。そして、その玄黿は幼女の身体の中に侵入して行く。
幼女は「くすぐったい」と言ってわめき、転げ回る。

44 周・十一代宣王の時代（文字で示す）

宣王の居室

宣王、宰相の召公と語り合っている。傍らには、まだ幼い王子の宮涅（きゅうでい）が座っている。

宣王　（しみじみと）ワシは我が父厲王の乱れた政治の中で、成人するまで苦労のし通しだった。できればこの宮涅に同じ苦労はさせたくない。
召公　確かにその通りでございます。厲王様が民の反乱に合って以来、わたくしは王子様であったあなた様をお守りしてきたのですが、確かにあなた様は数々のご苦労を経て参りました。でも、そのご苦労あっての、このお優しさ、といえるのだと存じます。
宣王　召公よ、長い栄光あるこの周室再建には、どんなことをしたらいいだろう。
召公　まず民を富ませることと存じます。そして、西方の戎（えびす）の侵入に十分気をつけることでございます。西の戎は、こちらに少しでも隙があれば、待ちかまえて攻めて来ることでしょう。
宣王　戎の侵入か。予測のつけられぬ相手だけに、確かに油断できないが。日頃心がけておくことは？
召公　その件について、近頃考えていたことがございます。戎の様子に少なからず通じておる者をごく身近に置くことがよろしいかと。
宣王　戎によく通じた者か。
召公　例えば、諸侯の中でも姜（きょう）姓の流れを汲む申侯などは、西の戎をよく知っております。しかも、この周室とも古来近い関係にあることを考えますと、小国とはいえ、高く買うに十分です。申侯の娘を王子宮涅様と娶（めあわ）せ、後の周室の后となされ、申侯をより身近なものとなさるのがよろしいかと存じます。
宣王　申侯か。よし、お前のその進言をよく考えておこう。まだ、わが子宮涅も、申侯の娘も幼い。あわてることではあるまい。
ところで、近頃巷で不愉快な歌がはやっておるように聞いたが、どんな歌だ。聞いたことがあるか？
召公　はい。
宣王　どんな歌だ。
召公　確か、こんな歌でした。

山桑の腰の強い弓が鳴る
箕（たご）のえびらに矢を満たし
つぎからつぎへ射かければ
周の王様逃げまどう
周の王様逃げまどう

宣王　何だ！　その内容は。一体どこからはやり始めたのだ。
召公　一向にその正体がつかめません。
宣王　あまりにも不愉快な歌だ。歌の真意をつきとめてくれ。
召公　はい。

45 鎬京の街の中

雑踏する街の中で一組の夫婦が物売りをして歩いている。

夫　山桑で作った強い弓はいかがですか。
妻　箕で作った矢房（えびら）はいかがですか。

役人が通りかかる。夫婦の売っている物を咎めて二人を捕らえる。

役人　お前たちはなぜそんな物を売っている？　周王室の中では何ら必要とせぬ物騒な物。しかも近頃、はやっている妙な歌の中に出てくる物と同じではないか。不吉な怪しいやつだ。
夫　どうぞ、お離し下さい。私どもは何も怪しい者ではございません。諸国を回って、昔からこれを商っております。
役人　とりあえず、一緒に来い！

話している隙に夫婦は役人の手を逃れて雑踏の中に紛れる。役人あわてて大声で追う。

46 後宮の部屋

侍女頭が心配そうな顔で部屋に入り、床に横になっている少女のところへ行く。

侍女頭　こっそり子供を産んだというのはお前か？

若い女。生まれたばかりの子供に添い寝をしながら、うなずく。

侍女頭　いつ、いったい誰とこんな間違いを犯したのですか？

女　（怯えたように黙っている）
侍女頭　ああ、気づかなかった。まだまだ幼いと思っていたのに。さァ、誰とこんなことに、……さァ、言いなさい。
女　全く身に覚えはございません。
侍女頭　そんなはずはない。知らないなんてバカなことがありますか。
女　何度言われましても……。
侍女頭　ええい、ふてぶてしい。あなたは、後宮でゆくゆくは王様をお慰めするために育てられた大切な身体です。この不始末はどんな言い訳も許しません。相手は誰なのです？
女　私は、一度も男の方と交わったことはございません。全く知らぬ間に……
侍女頭　ええい、もう聞きません。あなたの処分は後に決めます。（少女のそばについていた侍女に）王様に聞こえぬ先に、この子供を始末してしまいなさい。

侍女、子供を連れ去ろうとする。

女　どうか、子供の命は、どうか。

侍女、かまわず赤子を連れ去る。

女　（叫びながら）どうか、どうか、その子の命は助けてください！

47　鎬京城外・夕方

夫　旅の途中でたまたま都に立ち寄って商いをしたにすぎないのに、なぜ我々は罪人のように追われたのだろう。
妻　よほど山桑の弓と、箕の矢房が周王室の方々に嫌われる理由があったのでしょう。このまま捕まれば、殺されるかもしれませんね。
夫　予定通り褒の国へ行こう。静かで、余生をゆっくり過ごせるようなところだという。その褒の国へな。
妻　（耳をすまして）ちょっと静かにしてください。どこかで、赤子の泣く声がします。

森にかかる大きな木の下で、布にくるまれた赤子が火のつくように泣いている。

夫　確かに、赤子の泣き声だ。あの木の方から声がきこえる。

赤子を見つける。

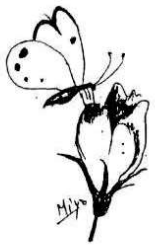
妻　おお、可愛い子。こんなに可愛い子を捨てた親は、何かよほど深い事情があったのでしょう。
夫　鎬京の思い出だ。このまま見捨ててもおけないから、連れて行くことにしよう。

妻、その子供を抱き上げる。子供泣きやむ。

48　宮中の執務室

義　その拾われた子供こそ、今、幽王が片時も身近から離そうともしないあの褒姒だ、というわけですね。
博士　全くその通り。つまり、長い、長い時の流れの中で、もう夏の時代の禹帝の頃より、褒姒と、幽王が巡り会うべく運命づけられていた、と考えてよかろう。
義　どういうわけで？
博士　「時」じゃよ、周が終わるべき時の流れじゃ。天の怒りが幽王のもとに集約されて流れていた。
義　では、何としてもあなた様は、この時代を以てこの周王室は終わってしまうのだと……
博士　そう、それは私が言うのではない。これはあくまでも天の意志。
義　だとすれば、私の孫の宜臼（ぎきゅう）は、この周室を継ぐことのないまま終わってしまうということですか？
博士　天の考えじゃから。
義　博士のおっしゃることですが、その点についてだけは私は信じません。
博士　それは、どのように考えようとあなたの自由じゃ。私の占いによれば幽王を以て周室は滅びる、と出ておるが。
義　私は、孫を守り、この周王室を守ります。私の意志によって、あなたの言われる天の定めを変えて見せましょう。
博士　さよう、その心意気が天に通じないとも限りません。その先のことは、私の知るところではありませんな。

（つづく）





霧に包まれていた光（4）

鍋屋次郎

旅籠吉川の離れ座敷で目を覚ました清吉が暗い部屋の中を見渡すと、雨戸の隙間から洩れてくる光で外が白んできていることを感じた。シモンは清吉の気配を感じて清吉の方を向いた。他の泊まり客の全てを断った旅籠は静寂そのものであった。

丁度その時刻、まる二日間歩き続けた喜作は、梅ケ島街道の喜作の樵小屋の見える近くまでやってきて、いつもするように人の気配がないかどうかじっと樵小屋を伺った。すると閉めてあった筈の入り口の引き戸が少し開いている。半刻ほど物陰から様子を見ていたが人の気配は感じられないので、草の上をあるくようにして足音を忍ばせながら樵小屋に近づき、中を覗いた。

畳三畳程度の広さしかない小屋の中は、数少ない日常の衣類が散乱し、きちんと敷いてあった蓙も何か探した後のように乱れている。

喜作は樵小屋をそのままにして、辺りを見回しながら林の中に入り、幹の太い大きな楠の根本に目を落とし、安全を確認するとそのまま樵小屋に戻った。その楠の根本には、以前小笠原様から拝領したロザリオと、彼が学んだキリシタンの教えを書き留めた綴りが、油紙にくるんで根の奥の土中に隠してあった。

自分の小屋に戻り駿府でのことを思い浮かべてみたが、ご城下では灯り一つない暗闇の中で昔の信徒仲間を訪問したが、あとをつけられた様子は感じていなかった。

昔の仲間の誰かが拷問の中で喜作のことを口にしたとしか考えられない。今回の取り締りは、お上がまだ情報を得ていない「キリシタン」を探し出すことに重点が置かれていた様子から、あり得ることと考えた。

暫くして、シモンと清吉がいた小屋を覗いたが、もとも蓙しかない小屋であったので、人の気配が感じられなかったのか敷いてある蓙が少し乱れている程度であった。

彼はいつもの作業場に行き、何も変化のないことを確認して、その奥の竹藪の先の小屋に入り、どこに隠してあったのか金子を懐にしてそのまま梅ケ島街道を北に上り身延へ向けて歩き出した。

喜作が感じていたとおり、そのころの駿府ご城下では、キリシタン取り締りの役人が五人一組となって、元キリシタンの家をくまなく回り、

「隠している者はキリシタンと同罪である。昔一緒にキリシタンであった者の名前を言え。もし知らなかったならば知っていそうな者の名前を言え」

と厳しく詮議し、様子がおかしな者は番所に引っ立てて打据えて白状させていた。

一方、都では、伏見の天主堂は内部が全て打壊され、バードレやイルマンの書き付けは没収、オルチーノ神父とイルマン北川は堺の大店の奥深くに潜伏して姿を見せない。

播州屋徳右衛門も時折伏見の天主堂の前を通るが、天主堂の入り口は板で閉ざされ、恰も廃屋のような感じになっている。

番頭の嘉介は、キリシタンの詮議が厳しい様子を耳にしては主人徳右衛門に報告している。

徳右衛門は、江戸と駿府の迫害の状況を調べにやった弟の清吉から、何の連絡もなく既に一ケ月を過ぎようとしているので心配でならない。

江戸、駿府の状況は全く分からない。都でこれだけ厳しく取り調べが行われていることを考えると清吉の身の上が不安で眠られない夜が続いていた。

そんなある日、番頭の嘉介が店の帳場に座って書き物をしている時、かすかな人の気配で店先を見ると、四十才を一寸過ぎた年格好の品の良い婦人が立っている。嘉介と目が合うと丁寧にお辞儀をして

「これを大旦那様にお渡し下さい」

と言って折り畳んだ紫色の袱紗を嘉介に差し出した。

嘉介はハッとして、「そうだ、二年くらい前か、バードレのお使いで来た婦人だ」と思いだしてその袱紗を受け取った。と同時に婦人は一礼して、嘉介が引き留める間もなくアッという間に店を飛び出していった。

主人徳右衛門は、人を避けるようにして奥の仏間に入りその袱紗を開けて、中の一枚の書き付けを取り出した。イルマン北川の筆跡で

「オルチーノ神父はこれから山科に行きます。山科の一軒の農家に大阪を追われた信徒二家族七人が隠れています。祈りと慰めと励ましのために出掛けます。清吉さんからの情報が入ったら、播州屋さんの店の入り口近くに塩の空俵を置いてください。山伏を訪問させます。合い

言葉は水と魚」
とだけ書いてある。徳右衛門はその手紙をその場で火鉢の火で燃やした。

遠州森町の北、吉川村の旅籠吉川の離れ座敷で、シモンと清吉は旅籠の主留蔵と朝から夕方まで、これからの都までの道中、シモンの旅姿をどうするか考えあぐねていた。

清吉は
「うん、これしかないな。」
と言ってから
「留蔵さん、虚無僧の姿を二人分用意しよう。絹布の小袖と丸ぐけの帯は、森町の古着屋の山田屋さんに調達をお願いしよう。尺八と深編み笠を留蔵さん何とかなりませんか」
「それから、シモン様の髪の毛、もう少し短くして黒く染めましょう。深編み笠を被っていれば目に付かないように」
と言いながらシモンを見た。シモンは意味が分からないといった感じで清吉を見ている。清吉は更に続けて
「それから、留蔵さん、シモン様に合った大きさの股引と足袋を用意してください。足の方も隠しましょう」
清吉は詳しくシモンに説明しシモンは了解した。ただ
「虚無僧は仏教の僧侶か。自分はキリシタンで仏僧になることは出来ない」
と抵抗していたが
「道中の安全のための仮の姿。それで銭を乞う門付けをするわけではない。カモフラージュだ」
と説明してやっと納得した。

翌日、亀松と彦次は清吉の手紙を持って遠州森町の古着の大店「山田屋」に行き、虚無僧が着る絹布の小袖と丸ぐけの帯の調達を依頼して、その足で見附の天神様の門前町でもある見附宿に出掛け、尺八と深編み笠を二人分買って戻ってきた。

それから三日の後、亀松が山田屋から注文の品物を持って帰ってきた。シモンに着せてみると、六尺豊かな偉丈夫の立派な虚無僧ができあがった。ただしシモンも清吉も尺八は全く吹けない。

シモンと清吉は、旅籠吉川で七日間を準備のために過ごし、八日目の夜秋葉山を目指して出発した。秋葉街道を北に向かい、秋葉山の南から天竜川を渡り浜名湖の北側の山中を抜けて鳳来寺近くまで、時たま出会う里人に道を聞きながら辿り着いた。里人が虚無僧姿のシモンを拝み、喜捨をしてくれたときは、ドギマギするシモンの耳に「黙って押し戴くように」と囁いて、無事済ませたこともあった。

それから十日後、埃にまみれた二人の虚無僧が京都伏見の塩問屋播州屋の店先に立った。

番頭の嘉介が虚無僧に喜捨する銭を持って店先に行くと、密かな声で
「嘉介さん、清吉です。黙って奥に通してください。人目に付かないように」
と言ったので嘉介は腰をぬかさんばかりに驚いて、清吉の横に立っている六尺豊かな大男の虚無僧を見て
「お連れさんですか」
と清吉に小声で質問した。
「あとで話す」
と一言言って清吉はシモンを誘って奥に入っていった。

徳右衛門は突然の清吉の帰りとシモンの来訪に喜びと戸惑いを感じながら、番頭の嘉介には口止めをして、シモンと清吉が旅の埃を落として奥座敷に来るのを待っていた。

その夜、徳右衛門は清吉やシモンから聞いたことを書き付け、店先に空の塩俵を置かせた。と同時に、都のキリシタン摘発の厳しさと、山科に隠れている人達のところにオルチーノ神父が危険を冒して出掛けたことを話すと、それを聞いたシモンは即座に
「自分も是非行きたい。行ってその人達の力になりたい」
と言いだした。
「兎に角、今シモン様が出掛けることは危険この上ないことだ。心配のことはよく分かるが暫くここにとどまっているように」
と徳右衛門と清吉が代わる代わる諭してようやく納得させた。

二日後の夕方、一人の山伏が店の入り口で経を唱えだした。嘉介は徳右衛門を呼びに行き、徳右衛門が「水」と言うと「魚」と答えたので、喜捨のふりをして書き付けを渡した。それには「江戸と駿府を逃れて辿り着いたシモンがあなた方に会いたがっている」ことも付け加えられていた。

数日後、この前来た品の良いご婦人が播州屋に来て、嘉介に袱紗を渡した。徳右衛門が開けると
「シモン様に山伏の姿をさせて待っていてください。山伏が迎えに行きます」
とだけ書かれていた。

伏見で古着を商っている清吉が山伏姿一式と法螺貝をどこで仕入れたか用意して播州屋にやってきた。シモンに着せ法螺貝も持たせると吹き出すほどピッタリと似合っている。

暫く何の連絡もなかったが、雨と風の強い夜、一人の

山伏が播州屋の閉まっている戸を叩いた。徳右衛門が出て「水」と言うと「魚」と答えてから囁くように
「シモン様をお連れに参りました」
と言った

山伏姿のシモンが夜の強い風雨の中を山科に向った。途中、夜回りの警備の侍が番所の中から二人を見ていたが何の咎め立てもなかった。

二人が山科の農家の母屋から離れた物置小屋に着いたのは今で言うと午前二時頃だった。

そこにはオルチーノ神父と大人四人、子供三人が身体を寄せ合って横たわっており、片隅にシモン達大人二人が辛うじて横たわることが出来るスペースが残されていた。

立ち上がったオルチーノ神父はシモンに感謝の挨拶をして、夜更けでもあり明日詳しく話をすることを伝えて、シモン達の雨に濡れた衣類を脱がせ、着古した物であったが乾いた寝間着を着せて休ませた。

やがて雨も風も収まり、静かな朝を迎えた。

起き出した婦人二人と十歳くらいの少女の三人が粟粥を炊き終えた頃、オルチーノ神父の周りに全員が集まり、祈りのひとときを過ごし、全員にシモンを紹介した。

シモンに対して一人一人が挨拶した。昨夜播州屋まで迎えに来た山伏姿の男は、何と、もともと山伏であり鬼嵐坊と言って、嵐の中の山中を走らせれば誰よりも早いと言う男であった。

二組の夫婦は、年輩の方が丑松とツル、十歳くらいの娘は糸、もう一組は徳治とスギ、五歳の男の子が徳松、三歳の男の子が銀次と言った。

この二組の夫婦は大阪住吉神社からそう遠くないところに住んでいて、ある日、足を痛めて歩けなくなっていた年取ったバードレとイルマンを自宅で三～四日介抱したことが切っ掛けでキリシタンになった、

彼らは文字通り貧農であり、現世に生きる望みと楽しみが薄く、同じ人間として、どうしてこの世での望みがなく、その上虐げを受け続けて生きてゆかなければならないのか、そう考えると、三～四日お泊めして介抱したバードレとイルマンの、清貧と、謙譲で礼儀正しく、そして愛に満ちた終日の姿は、彼らが生まれてから接したこともない人間の生き方であり、たった三日間であったが優しく教えられたキリシタンの教義に感激し、死してからのパライソこそ憧れの場所である、と確信していた。

そんな彼らであったので檀家等とは絶縁状態になっており、同じ檀家の親しい農家から「役人が行った寺の檀家調査であなた方にキリシタンの嫌疑がかかっている。明日にでも役人の取り調べがあるらしい」との情報により、あるだけの粟と少々の衣類を持って逃げてきたとのこと。

何故山科のこの家に逃れてきたかと言えば、介抱したバードレが後日お礼に来たときに
「何か困ったことがあれば、この書状をもって京都山科の里の金兵衛さんを訪ねなさい」
と言って渡してくれた書状だけを頼りにしてやってきたとのこと。

ところが、彼らの頼みの綱の金兵衛は、彼らを匿ったものの、現在京都市中でのキリシタン取り締りと摘発の厳しさを耳にする度に不安が高じてきていた。彼の妻女は一度も顔を出したことはない。そんな中で一昨日、彼がこの物置小屋に来て
「オルチーノ様、大変言いにくいことでございますが、この辺りまでキリシタン探索の手が伸びてきております。あと十日くらいでお立ち退きいただけませんか。その間は食事も粗末なものですがお困りになるようなことはいたしません」
と言ってきた。

オルチーノは即座に礼を述べて出来るだけ早く立ち退くことを答えると同時に
「金兵衛さん、お願いですがこの二組の夫婦をお宅の住み込みの農夫として雇っていただけませんか」
と頼み込んだが、金兵衛は
「今は時期が悪うございます。見知らないものを置くわけにはいけません。それはこの方々のためでもあります」
と丁重に断った。

オルチーノとシモンは朝食後裏山に登り、昼近くまでお互いの持っている情報を全て出し合い、これからのことを相談した。

オルチーノは、
「自分たちは出来るだけ都の周辺にいて、弾圧の状況を見守ってゆくこと、二組の家族には安全な仕事場―一家で住み込んで農作業が出来る―を与えること。そのため当面は鬼嵐坊の生家丹波篠山の奥へ移動する」
ことを提案、早速実行に移すことにした。そして、オルチーノは夜陰に紛れて堺に戻り、丹波篠山へはシモンが同行することとした。

出発はその日の夜と決まった。慌ただしいが、シモンが夕方空を見上げて、「少なくとも三日は雨が降らない」と言ったことから急な出発が決まった。

その日の鬼嵐坊と二組の夫婦との関係に、言葉に言い表せない、何かしっくりしていない不安を感じたシモンは、オルチーノにそれとなく聞いたが、「貴方の考えすぎではないか、大丈夫」と言われ、鬼嵐坊については、「自分を匿ってくれている堺の大店の主人の紹介であること。ここにいる理由は、上位の山伏の金銭と女性に関

する醜さと、他の山伏の同性愛の醜悪さから山伏の世界から飛び出して来ていると聞いている」から大丈夫、と言ったのでそれ以上は聞かなかった。

丹波篠山へは、シモン、鬼嵐坊、二組の夫婦とその子供達計九人で出発した。出発に際して金兵衛は言葉では丁寧であったが安堵の色は隠さず、鬼嵐坊に「皆のために」と言って当座の食料として少々の米と粟を持たせてくれた。

明け方、人気のない寺にたどり着いたときには、鬼嵐坊の足と、子連れの足では自ずとテンポが違い、それが原因で気まずい雰囲気も出てきた。

そこで丑松と徳治は、鬼嵐坊とシモンに

「あなた方に迷惑を掛けるのでお二人は先に行っていただきたい。私たちは女子供がいるので遅くなる。丹波篠山の訪ね先を教えていただきたい」

と言いだした。鬼嵐坊は

「そうさな、それもいいかもしれない。そうしよう。丹波篠山に入ったら、五作の家、と聞けば分かる」

と言って、山伏姿に、手拭いで顔を隠して目だけを出して、三歳の銀次を背負っているシモンを見た。最初から気まずさを感じていたシモンは

「自分は丑松さん達と一緒に行くから、鬼嵐坊さんは先に行ってください」

と言って丑松と徳治を見た。二人とも頷いたので鬼嵐坊は

「それではお先に行くで」

と言って直ぐに出掛けた。

その日の昼過ぎ、鬼嵐坊が山道をそれて街道の茶店に立ち寄ったところ、お客同士の話から高札が出ているということを耳にした。場所を聞くと直ぐ先の辻とのこと。鬼嵐坊が行って見てみると

「キリシタンの禁制のみならずキリシタンを匿った者、宿泊させる等援助した者及びキリシタンを知っていてお上に届けない者を処罰すること。キリシタンを見つけ訴え出て捕縛出来たとき銀五枚を、バテレンの場合は銀二十枚を報償として与える」

と書いてある。

暫く眺めていた鬼嵐坊は、高札を見ている群衆の中に山伏の姿を目にすると、逃げるように、持ち前の早足で丹波篠山を目指して歩き出した。歩きながら、高札を見ていた人達の話し声を思い返していた。

「今回ほど徹底した取り締りは過去になかった。今まで人間のお付き合いの中でキリシタンを黙認していた人達まで、今度は自分が可愛いから知らない振りをすることにも限度があるだろう」

と言っていた声が彼の頭から離れず、何度も繰り返し浮かんできた。

彼が行動を共にしていた山伏の仲間達は、彼がキリシタンと同行していることは知らない。しかし、彼が仲間から逃げるようにして抜け出してきていたので、もしも出会うようなことがあれば厄介なことになるだろう。

そんなことを思いながら篠山の近くまで来て、峠を登り切ったときに、後ろに人の気配を感じて振り向くと、何と山伏仲間だった玄海坊が息せき切って上って来る。

「おい、鬼嵐坊、待てよ、高札のところでお前を見かけて追いかけてきたのだ」

と大声で呼び止めた。彼は「しまった。あの山伏がそうだったのか」と思ったが既に遅く、やむなく立ち止まり玄海坊の来るのを待った。

松の根方に腰を下ろした二人は、暫くの間は静かに話し合っていたが、やがて玄海坊の大きな声が響きだした。

「おい、鬼嵐坊、貴様は仲間の規約を破り再三女犯を犯し、本来は追放されるところを勝手に逃げ出した。仲間に詫びに来るのが筋というものだ。丁度十五日後の夜半、仲間全員が瀬田の橋の上に集まる。必ず出てこい」

「手ぶらでは行かれまい」

「そうさな、これから親のところに行くのであれば、親に工面して貰って銀の二十枚も持ってこい。山中の修行のためには必要なのだ」

「それは無理というものだ」

「無理をしないで詫びを入れるつもりか」

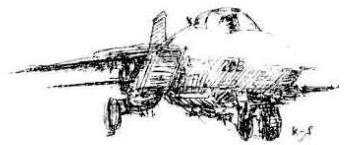
「二十枚は無理にしても、必ず詫びに行く。先達に宜しく取りなしてくれ」

やがて玄海坊がもと来た道を早足で駆け下りて行った後、鬼嵐坊も立ち上がり篠山の里を目指して歩き出した。歩きながら、「銀二十枚」の調達が出来なければ半月後に瀬田に出向くことなく逃げるか、などと頭を巡らしていたが、「全国どこへでも飛び回っているあの連中から逃げおおせることは出来ない」ことは考えるまでもなく分かっており思案に倦ねていたところへ、あの高札の文面が頭にひらめいた。



体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（七）

千坂精一



悪魔の囁き

海軍首脳部は、開戦時のハワイ真珠湾とマレー沖での大戦果が、艦隊ではなく航空隊の活躍に因るものであることを判然り認識したはずなのに、三十七年まえの夢を忘れられず、日本海海戦で大勝利した大艦巨砲主義が相変わらず主流を占めていて、航空機の大量生産と搭乗員養成の急務を怠ったまま、半年後のミッドウェー海戦を迎えてしまった。

そして、開戦時の大勝に酔い痴れている自信過剰の油断が禍して、四隻の正規空母と多数の熟練搭乗員を一挙に喪ってしまい、それが戦局の転換になって、以後は主導権をとることが出来ず、守勢いっぽうに追い遣られてしまった。

戦闘であるからには、作戦稚拙、伎倆未熟ならば諦めもつくが、ただ物量に押し捲られての敗戦つづきに、切歯扼腕する高級将校たちは、起死回生の奇手妙手はないものかと、溺れる者の藁の心境で模索しはじめ、それが昂じて途轍もない方向へ暴走していった。

ミッドウェーの敗戦から一年後の昭和十八年六月、侍従武官城英一郎大佐は、航空本部総務部長大西瀧治郎中将に、

「敵艦船を飛行機の肉弾攻撃により撃滅する特殊航空隊の編成」

構想を開陳して、自分をその指揮官に任命してくれるよう要請した。

現役の高級将校でありながら、戦闘に参加出来ず、予備役のような立場におかれていることで、悶々としていたであろう城大佐は、ハワイ真珠湾につぐインド洋での連勝で無敵を誇る南雲機動部隊が、あろうことかミッドウェー海戦で完膚なきまでに打ちのめされた未曾有の大敗北に衝撃を受け、地団駄踏んで口惜しがったに違いない。

この敗戦で、戦力の差を思い知らされた城大佐は、実施部隊の指揮官として考えたときに尋常一様の作戦では勝てぬことを覚り、切羽詰まった心境に追い遣られて、海軍伝統の〈九死一生〉の鉄則を破った途方もない発想に思い至ったのであろう。

また、真珠湾攻撃で使用された特殊潜航艇（甲標的）乗組員の黒木博司中尉と仁科関夫少尉は、二人乗りから三人乗りに改造された新型特殊潜航艇にも飽き足らず、鈴木溥技術大尉の協力を得て人間魚雷の発想に取り組んだ。

そして、城英一郎大佐が、

「飛行機で肉弾攻撃する特殊航空隊の編成」

を上申した半年後の昭和十八年暮れには、

「一、五〇〇キロの炸薬を装填、速力四〇ノットの人間魚雷」設計図を書き上げた。

すぐさま、青写真を持参して、軍令部に出頭した黒木中尉と仁科少尉は、血書して採用を嘆願したが、首脳部は、あまりにも人命を無視した非人道的な兵器であることに驚愕して、採用しなかった。

この年の戦局は、まえにも述べたが、

二月一日、ガ島撤退開始。

四月十八日、山本連合艦隊司令長官、ブーゲンビル島上空で戦死。

五月二十九日、アッツ島守備隊玉砕。

七月二十九日、キスカ島撤退。

十一月二十五日、マキン、タラワ両島守備隊玉砕。

と守勢いっぽうに追い込まれていて、〈起死回生策〉を模索はしていたが、それでもまだ軍令部は、〈九死一生〉の鉄則を守る意志を喪ってはいなかった。

ところが、アッツ島守備隊玉砕の悲報が届いた一カ月後の六月二十五日に、『学徒戦時動員体制確立要綱』が決定され、学業を休止して軍需生産に従事する勤労動員命令が発令されたのを契機にして、十月十二日に『教育に関する戦時非常措置方策』が決定され、理工科系と教員養成系以外の学生の徴兵猶予が停止された。

この〈徴兵猶予〉というのは理解しにくいであろうから簡単に説明しておくと、当時の『兵役法』で満二十歳

に達する男子を徴兵適齢者として兵役を課したのであるが、学生や国外にある者は猶予されていたのである。

その学生の特権が消滅して、二カ月後の十月二十一日神宮外苑競技場に七七校の学生二五、〇〇〇人が出席して、雨のなか出陣学徒壮行会が行われた。

そのときの映像は、現在でも折にふれてテレビのニュースやドラマに挿入されているから説明の必要もないと思うが、在学校の制服制帽に脚絆を巻いた学生が、降り頻る雨の中を、銃を担ぎ歩調をとって分列行進しているあの場面がそれである。

この学徒動員によって、一億国民総蹶起の気運を高めたのだが、戦況のほうは捗々しくなく、軍令部は緊張が高まっていった。

人命無視の兵器ということで、いちどは採用しなかった黒木中尉と仁科少尉発案の人間魚雷も、こう戦況が切迫しては〈九死一生〉の鉄則を顧みる余裕も失せて、翌年二月、ついにその生産に同意した。

㈥兵器といわれたこの人間魚雷が、特攻兵器になる『回天』である。

ちょうどこのころ、神奈川県厚木基地に新設された一〇八一空（輸送航空隊）の大田正一特務少尉も、ロケットで推進する人間爆弾を考案していた。

頭部に爆薬を装塡し、尾部にロケット発動機を取り付けた一人乗りのベニヤ板製滑空機で、改造した一式陸攻が目的地域まで運んでいって発進させるというものである。

発案者の名をとって㈥兵器と称ばれたこの人間爆弾が、特攻兵器『桜花』として知られるようになる。

これらの特攻兵器を採用した軍令部では、第二部長黒島亀人少将（海大26期）が、同期の第一部長中澤佑少将にその一覧表を提出した。

『桜花』も『回天』も、目標に命中する直前に搭乗員が脱出することの出来る装置をつけるという条件で承認されたのだが、そんなことが不可能であることは誰もが承知で、結局建前で終わり、実際には取り付けられなかった。

特攻への跳躍

昭和十九年六月十五日、アメリカ軍の海兵隊がサイパン島に上陸を開始してきたので、十九日から二十日にかけてマリアナ沖でミッドウェーを凌ぐ最大の艦隊決戦がおこなわれたが、とっておきの空母翔鶴、客船改造空母大鳳、飛鷹の三隻と航空機四三〇機を喪い、惨敗してしまった。

この敗戦でマリアナ海域の制海権を奪われたことによって、サイパン島を維持することが難しくなった。

二十五日に開催された皇居での元帥会議で、その対策が協議されたが、どう検討しても、

「サイパン島奪回は困難」

との結論に達した。

そのおりに兵器のことが話題になり、一般的なものはほぼ優劣がないが、電波探知機などの科学兵器がかなり劣っているために好ましい戦果が得られないのだから、戦局が困難な状態に陥った現状においては、航空機や軍艦、小舟艇などは特殊なものを考案しなければならない、ということに意見が一致した。

〈元帥府〉というのは、陸海軍大将のうち特に功労のあった者たちで組織する軍事上の最高顧問機関で、元帥は階級ではなく、元帥府に列せられた陸海軍大将の称号である。

このときの元帥は、海軍では伏見宮博恭王と永野修身の二大将、陸軍では梨本宮守正王と杉山元、寺内壽一の三大将であった。

この日の元帥会議には、ほかに海軍軍令部総長嶋田繁太郎大将と陸軍参謀総長東條英機大将（首相が兼任）が出席していた。

元帥会議を終えて軍令部へ戻った嶋田総長は、ただちに関係者を招集すると、すでに開発されている奇襲兵器の促進掛を設けて、元帥府の意向を早期実現することとし、その実行委員長に水雷学校長の大森仙太郎中将を任命した。

水雷学校長のまま兼務した大森委員長は、嶋田軍令部総長の意を汲んですぐさま掛員に㈣兵器（爆装小型舟艇『震洋』）と㈢兵器（有翼小型潜水艇『海龍』）の設計にとりかかるよう命ずると、すでに試作品が完成している㈥兵器（人間魚雷『回天』）については操縦試験を急がせた。

そして、八月六日には航空技術廠長和田操中将監督のもとに㈤兵器（人間爆弾『桜花』）の製造が極秘裡に開始された。

頭部に一、二〇〇キロ爆弾を搭載する胴体は軽合金製のセミモノコック（単一構造体）、両翼は木製の『桜花』は、単純構造なので熟練工でなくても量産出来たし、操縦も簡単で練達搭乗員を必要としない好都合の兵器であった、という。

飛行時間の多寡を問わないということは、高度の伎倆を必要としないということであるから、まさに爆弾そのものであって、現在ならなにも人間を乗せずとも自動制御出来ないものかと思われるのだが、当時は電波探知機がようやく一部の主力艦船に取り付けられた程度であったから、とてもそんな技術力はまだなかった。

『桜花』の資料を探し出してみたところ、一式陸攻に懸吊されて高度三、五〇〇メートルで切り離され、速度四六三キロで二七キロ航続するとあるから、一式陸攻から一、二〇〇キロの巨大爆弾を投下して命中させると

いうわけにはいかず、やはり人間が操縦して滑空させなければならなかったのだろう。

大森実行委員長は、九月十三日付で新設された特攻部の部長に就任し、海軍省と軍令部からそれぞれ血気の若い士官たちが配属されてきた。

そして、広島県倉橋島（安芸郡倉橋町）の大浦崎が、特攻兵器の特別基地になった。

このへんから、自爆兵器による体当たり戦法で切迫した戦況を打開しようとする発想が現実的になり、急速に具体化していった。

十月一日、茨城県百里ケ原基地（東茨城郡小川町）に七二一空が新設され、館山基地の三四一空司令のとき城大佐と同様の意見を上申した岡村基春大佐が司令、岩城邦廣少佐が飛行長、野中五郎少佐が陸攻飛行隊長に着任して『桜花』要員の訓練が開始された。

もっとも早く大量生産されたのが爆装小型舟艇『震洋』で、搭乗員も多数確保されたことから、横須賀の海軍水雷学校と長崎県東彼杵郡川棚町の臨時魚雷艇訓練所で訓練が開始された。

二人乗りの有翼小型潜水艇『海龍』も生産速度を上げていった。

こうして、搭乗員を強制的にあの世へ旅立たせるための容器が増産されていった。

七月末には、人間魚雷『回天』の基地が倉橋島大浦崎から山口県の徳山湾にある大津島に移されて、本格的訓練が開始された。

その猛訓練最中の九月六日に、『回天』生みの親の一人黒木大尉が殉職した。

もう一人の仁科中尉は、このあと十一月の第一回出撃で、黒木大尉の遺骨を抱いてアメリカ空母群が在泊している西カロリンのウルシー環礁攻撃に向かうことになる。

太平洋戦争緒戦でフィリピンルソン島のマニラから駆逐されたアメリカ極東軍司令官ダグラス・マッカーサー大将は、フィリピンへの帰還を果たすべく、十月初旬ニューギニアを出港した。

その極東軍のレイテ島上陸作戦を援護するウイリアム・F・ハルゼー大将の第三艦隊に、ミッチャー中将の第三八機動部隊が行動をともにして、台湾、沖縄海域まで北上してきた。

そして、十月十日ミッチャー機動部隊に沖縄本島の北飛行場が空襲され、十一日にはルソン島北端の町アパリが爆撃された。

さらに、十二、十三日には台湾全土が空襲されて、前述の台湾沖航空戦になった。

大本営は、台湾沖の打撃から立ち直る暇もなく、アメリカ軍の侵攻を防衛せねばならなくなり、〈捷号作戦〉発動の決意を固めた。

マッカーサーの極東軍にフィリピンを回復されれば、

必要不可決の石油供給地帯を遮断されてしまうのだから、なんとしても死守しなければならなかった。

〈捷号〉は陸海軍の協同作戦で、防衛戦としてすでに七月に準備されていた。その内容は、

一号、フィリピン方面。

二号、九州南部、南西諸島及び台湾方面。

三号、本州、四国、九州方面と小笠原諸島。

四号、北海道方面。

に分類されていた。

豊田連合艦隊司令長官は、軍令部からの指令を受けて、作戦準備をすすめつつあった。

十月十日に沖縄が空襲を受けるに及んで、軍令部は〈捷一、二号作戦警戒〉を発令した。

「海軍を空軍にしろ」

とまで言い切った、傍若無人の硬骨漢で、航空畑一筋を歩いてきた軍需省航空兵器総局総務局長大西瀧治郎中将が、十月五日付で一航艦司令長官任命予定で南西方面艦隊司令部付を発令され、八日に羽田空港を出発した。

途中、台湾の新竹で豊田長官と会い、十二日から三日間にわたるアメリカ空軍の猛烈な空襲で足止めを食ったあと、十七日にルソン島マニラに飛んで一航艦司令部に着任した。

寺岡謹平中将は、在任僅か三カ月で本土防衛を任務とする三航艦司令長官に転補された。

死神到来

大西中将は、着任してみてそのあまりにも貧弱な現有兵力に憮然とした。

零戦約三〇機のほか、彗星、銀河艦爆、天山艦攻、一式陸攻、彩雲艦偵あわせて僅か五〇機に満たなかった。

〈捷一号作戦〉の最前線にあって、確実に使命を果たさなければならないというのに、これではまったく手の打ちようがなかった。

もっとも、ひと月まえまでの一航艦は、保有機数を誇っていた。

それが、九月一、二、四日とつづいて群島南端ミンダナオ島のダバオがアメリカ陸軍大型爆撃機B－24と双発戦闘機P－38の大空襲を受け、さらに五日後の九日に、こんどは艦載機による襲撃を受けた。

空襲しておいて上陸してくるこれまでの戦法から推して、陸戦間近と判断した駐留の陸海軍部隊は、応戦準備を急いだ。

十日早朝、ダバオ湾岸の海軍見張所から、

「敵輸送船団見ゆ」

の報告が入ったあと、しばらくして、

「上陸用舟艇接近」

と情勢が切迫してきたので、陸海軍部隊は戦闘態勢を整えた。

ダバオに司令部をおいていた一航艦の寺岡司令長官は、かねての計画どおり所属零戦隊の全機をミンダナオ島の北に隣接するセブ島のセブ基地に集結させた。

ところが、ダバオは敵機の来襲もなく、上陸作戦を援護する艦船からの砲声もきこえず、孤につままれた状態がつづいた。

不審に思った二〇一空副長玉井浅一中佐が、零戦を飛ばしてダバオ湾の周辺を偵察してみたが、艦船は見当たらず、一航艦司令部も同様の状態を確認した。

ほっと胸を撫でおろして、緊張が解けたところへ、十二日セブ基地が艦載機に奇襲され、ついで爆撃機の猛攻撃を受けて、アメリカ軍のダバオ上陸に即応すべく集結させておいた一航艦の零戦約一〇〇機のうち、大部分を爆破されてしまったのである。

大西中将がマニラのニコルス飛行場に到着したその日の朝、アメリカ軍がレイテ湾口にあるスルアン島に上陸を開始した。

連合艦隊司令部は、決戦要域をフィリピンと決定して、〈捷一号作戦警戒〉を発令した。

翌十八日、アメリカ空軍が北部ルソン島、中部レイテ島、セブ島、南部ミンダナオ島のフィリピン諸島全域にわたり攻撃をかけてきたので、かねての計画どおりただちに〈捷一号作戦〉が発動された。

空母を主力とする機動部隊に対しては、台湾、フィリピンの基地航空部隊が、「機略に富む短切なる攻撃を以て敵を奇襲し、これを漸減する」

敵が上陸部隊を伴って上陸地点にきたならば、まず遊撃隊が出動して敵機動部隊を誘い出し、北方遠洋へ導いて上陸兵力を孤立させておいて、主力艦隊が基地航空部隊の護衛のもとに手薄になった上陸地点の輸送船団に突入して、上陸兵力を殲滅する。

というものであった。

航空部隊については、このときすでに、

「臨機応変の計略をもって奇襲しろ」

と暗に〈特別攻撃〉を示唆していたし、艦隊については、こんな幼稚な策で勝てると本気で考えていたのであろうか。

もっとも、別の資料によると、豊田長官は、「全く兵術の常道に外れた奇道であるが、ほかに手の打ちようがない状況で立案された苦しい作戦だった」

と述懐していたという。

ほかに手の打ちようがなかったというのだから、つまりお手上げ状態だったわけで、それならこの時点で終戦工作に入っていれば、以後の特攻、玉砕、非戦闘員を巻き込んだ沖縄戦や、広島、長崎に原爆を投下される悲劇は避けられたはずである。

軍事行動は外交の道具であるという。

ならば外交は政治だから、政治手段のひとつとして軍事行為があるはずなのに、その政治を無視して軍事だけが独り歩きしてしまえば、勝ち負け以外に収拾のみちはなくなる。

負けても負けても、面子に拘って敗北を認めない軍首脳部の意地と自尊心が、徒らに犠牲を積み上げてゆくことになってしまう。

それは、さておき——。

このフィリピン戦における一航艦の使命は、第二艦隊司令長官栗田健男中将直率の第一遊撃部隊（栗田艦隊）が無事レイテ島に到着出来るよう敵機動部隊を阻止することであった。

着任した大西司令長官は、麾下の保有機数があまりにもすくなすぎて、

（正攻法では目的を達せられない）

ことを覚り、着任前にすでに軍令部の許可を得て、実施時期について一任されていた、

（あの戦法を執るしかない）

と決意を固めた。

その戦法というのは、一航艦司令長官を拝命してマニラへ赴任するにあたり、日比谷の軍令部総長官舎で開かれた首脳会談の席上、大西中将は総長及川古志郎大将、次長井上整一中将、作戦担当の第一部長中澤佑少将らに、航空機による必死必殺の体当たり攻撃隊編成を急務とする自論を述べた。

それは、前にも書いた航空本部総務部長のときに、侍従武官城英一郎大佐や館山三四一空司令岡村基春大佐から上申されたものとおなじ発想を、具体化したものであった。

「小官が一航艦を指揮するにあたり、この攻撃方法よりほかに良策はないと思うので、大本営においてもこれを諒解していただきたい」

そう大西中将に迫られて、首脳たちは戸惑い、声もなく、重苦しい雰囲気に包まれた。

しかし、軍令部は海軍の中央統帥機関であるからには、作戦の上申に対してなんらかの回答を示さなければならなかった。

やむなく、及川総長が徐ろに所見を述べた。

「大西中将の意見はよくわかった。大本営海軍部としては難局に対処するためやむなしとして承認することとします。だが、実行にあたってはあくまで本人の自由意志に任せて下さい。決して命令して下さるなよ」

及川総長は、大西中将の血気に逸る特別攻撃隊編成の意見に、〈九死一生〉の鉄則を守らせるのが精一杯の歯止めだったようである。

〈捷一号作戦〉の主役第二艦隊の編成は、第一部隊が戦艦大和、武蔵、長門ほか重巡六隻、軽巡一隻、駆逐艦九隻、第二部隊が戦艦金剛、榛名ほか重巡四隻、軽巡一

隻、駆逐艦六隻、第三部隊が戦艦山城、扶桑ほか重巡一隻、駆逐艦四隻で、第一部隊は栗田司令長官直率（栗田艦隊）、第二、第三部隊は第二戦隊司令官西村祥治中将指揮（西村艦隊）であった。

十八日早朝、〈作戦発動〉を受けた第二艦隊は、ボルネオ島ブルネイ泊地で燃料を補給後、第一、第二部隊は二十二日〇一〇〇に進攻を開始してサン・ベルナルディノ海峡から太平洋に進路をとり、第三部隊はその日午後レイテ島とミンダナオ島の間のスリガオ海峡からレイテ湾南口を目指して進攻を開始した。

十九日の午後、大西長官はマバラカット基地の戦闘機部隊二〇一空司令山本栄大佐と飛行長中島正少佐を司令部に呼んだ。

ところが、四時まで待っても到着しないので、途中なにか事故でもあったかと気遣った大西長官は、門司親徳副官を伴い公用車でマバラカットへ急いだ。

その一時間後、所属飛行隊の出撃を見送ってから駆け付けた山本司令と中島飛行長が到着した。擦れ違いだった。

マバラカット基地では、二〇一空戦闘指揮所で玉井副長が実地指導にきていた同期の一航艦先任参謀猪口力平中佐と、少数の可動機で最大の戦果を挙げる妙策を模索していた。

そこへ、突然黄色の将官旗を立てた黒塗りの車がやってきて、大西長官が現れた。

玉井副長と猪口先任参謀は、大西長官を町中にある本部へ案内した。

本部といっても現地人の高級住宅を数軒借り上げたもので、士官宿舎も兼ねていた。

大西長官が本部に着くと、指宿、横山両飛行隊長と二六航戦吉岡忠一航空参謀も呼び出されて、六人が会議室の卓子を囲んだ。

大西長官は、五人の顔を睨むように眺め回しておいてから、徐ろに話しはじめた。

「このたびは、連撃作戦であるから、断じて失敗は赦されぬ。栗田艦隊のレイテ突入を成功させるためには、わが一航艦が敵空母を叩き、少なくとも一週間ぐらいは甲板を使用出来なくする必要がある」

玉井副長は、咄嗟に僅か三十機の手持ちでどうやって叩くかに思いを馳せた。

しばらく沈黙がつづいたあとで、大西長官が重い口を開いた。

「そのためには、零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせて体当たりさせるよりほかに、確実な方法はないと思うのだが――」

そこでふっと話を切り、一拍おいてから、

「どんなものだろうか」

そう押し付けるように言った。

玉井副長は、手持ちが減るいっぽうでいっこうに補充して貰えぬお手上げ状態に苛立ち、起死回生の奇策考案を焦っていたところだったので、大西長官の話を聴いて、（それだ）

と妙案を摑んだ思いだった。

だが、即答を避けて、

「私は副長でありますから、一存で決定するわけには参りません。山本司令の意向を伺ったうえで至急ご返事をいたします」

と司令を立てた。

「いや、山本司令とはすでにマニラで打ち合わせずみである。副長の意見を司令の意見として差し支えないとのことであったから、副長の存念でよいのだ」

大西長官は、急いて畳み掛けた。

列席者の刺すような視線を一身に受けた玉井副長は、大西長官に暫時の猶予を願い出ておいて、先任飛行隊長の指宿正信大尉を伴い、二階の自室に移った。

そこで二人は、果たして体当たり攻撃はどの程度の効果があるものか、またそれを命じたときの隊員たちの心理状態はどうか、などあれこれ忌憚のない意見を述べ合った。

そして、二人の意気込みが一致したところで、玉井副長は、

「司令からすべてを任された自分としては、大西長官の意見に同意するつもりだ」

と初めてその胸のうちを明かした。

「副長のご決断を支持いたします」

指宿隊長の賛意を得たうえで、階下の会議室に戻った玉井副長は、大西長官の提案を受諾する二〇一空の決意を述べたあとで、

「体当たり攻撃隊の編成については、すべてわが二〇一空司令部にご一任下さい」

そう熱望して、承諾を乞うた。

「うむ。よろしく頼む」

このとき、沈痛な面持ちで許可を与えた大西長官の眼に、幽かながら我が意を得た安堵の色が窺えたという。

司令が隊員の父なら、副長は母であった。

息子たちを死地へ赴かせることが避けられぬなら、せめてこの手で準備万端整えてやるのが母親のつとめであろう。

想像の域を出ないが、このとき玉井副長はそんな心境だったのではないだろうか。

大西長官は、二〇一空の特別攻撃隊編成が出来上がるまで、山本司令の私室で休息しながら待つことになった。

（つづく）

泰山木（十三）

―紙透小太郎の一生―

紙透寛夫



第四章　新天地

二　山梨

山梨の家には、祖父の鈴木義平と、祖母のさと、叔母にあたる祖父母の七女みさ子と、八女の一三の四人がいた。そこへ私が身を寄せたので、五人家族の生活が始まった。

叔母の一三は、十三番目に生まれたから、一三と名付けられたと聞いている。私より二歳年長で、小学校高等科の二年生だった。私は『叔母さん』ではなく『一三さん』と呼ぶことにした。ほかに大勢いた親戚の呼び方は、ほとんど、この一三叔母にならって呼んだ。

みさ子叔母は、私より十歳くらい年上で、とても優しかった。一三叔母が『みいちゃん』と呼んでいたので、私も同じように『みいちゃん』と呼んだ。

私が朝鮮にいた時は、皆が卓袱台を囲んで一緒に食事をしていたが、山梨では祖父と私は別々にお膳で食べた。祖母と叔母たちは、いつ、どのようにして食べたのか、まったく見た覚えがない。

「食べたら、あっちに行きなさい」

と多分、言われたのかも知れない。

祖父は、よく中庭に面した廊下に座り、皆が生け簀と呼んでいた小さな池を眺めながら、食事をしていた。夕食は、いつも晩酌をしてご機嫌だった。私のお膳は祖父と少し離れた畳の上に置かれていた。

ある日、祖父は杯を干しながら、昔のことを思い出したのか、あるいは、孫にも語り継ごうと思ったのか、私に、

「傘を売りに行って、血の小便が出たほど、働いたもんだよ」

と話したことがあった。

どれほど苦労したのか、―血の小便―。私は今でも祖父のこの言葉は忘れていない。

私が言い付かった役目は、とりあえず、毎朝、表通りに面した七、八枚の雨戸を開けることと、土間に続く昔の店だった畳の部屋と、その奥の六畳と八畳二間の掃除だった。障子の桟をパタパタと叩きをかけ、畳の上を箒で掃いた。

部屋はほかにも沢山あった。祖父は傘屋を営んでいた時分に、儲けが貯まると、部屋の建て増しを続けたのである。居間や傘を作る作業場を、一部を二階建てにして、部屋を増やし、表通りから裏通りまでの敷地のなかには、離れや、庭や、畑もあった。皆が裏木戸と呼んでいた裏門を潜ると、狭い道の先は、ずうっと田圃が広がっていて、よく、

『げろげろ、ぎゃあー、ぎゃあー』

と鳴く蛙の合唱が聞こえたものである。

私が山梨へ行った時は、夏休みの最中で、祖父の家には、親戚の人たちが入れ代わり、立ち代わりやって来て、その都度、私は顔見世をした。

（これが朝鮮の山奥から一人でやって来た寛夫か）

皆それぞれの思いで私の顔を見たことであろう。

祖父の長男（母茂登子の兄）であり、千葉県市川市に住んでいた始一伯父は、東京に本社のある昭和製袋工業株式会社を経営しており、この時は忙しくて来れなかった。しかし妻のとよ（伯母）と、一人息子の永一（従兄の）二人は来た。従兄は私より五歳ぐらい年上ではあったが、皆が『永坊』と呼んでいたので、私もこれにならった。

永坊と私は、すぐに気が合った。

「こちょ、こちょ」

と私の脇腹をくすぐったりして、二人はふざけ合った。伯母と永坊が太田川に遊びに行った時は、私もついて行った。永坊は水門の近くで、小さな海老を、たもで掬い上げていた。

いよいよ帰る日に、伯母は、

「東京見物に連れてってあげるから、一三と二人で、一緒にいらっしゃい」

と誘ってくれた。私はうれしくなり、朝鮮にいた時の小学生の服を着、一三叔母はセーラー服という出で立ちで出発した。

「市川市の本八幡駅を降り、歩いて五分もしないうちに門構えの邸に着いた。始一伯父には、その夜、会えた。食事は一人一人、別々に朱塗りのお膳で食べた。

翌日、伯母と永坊の二人が東京を案内してくれた。東京は日本晴れの上天気だった。日本橋を渡っていた時、

一人の男が急に、私たちにカメラを向けてシャッターを切った。

（あれ、なんだろう？）

私はびっくりした。後で分かったことだが、スナップ写真屋だった。

デパートの三越本店にも寄った。

明治神宮では、永坊が自分のカメラで、伯母と私を撮ってくれた。この写真は今でも私のアルバムに納まっている。

あちらこちら、方々を案内してもらったが、私が一番印象に強く残っているのは、なぜか、ぽんぽん蒸気で隅田川を下った時のことである。さわやかな風を受けながら、あの真っ青な水の流れを見たことが私には忘れられない。碧いと書くべきかどうか、私は知らないが、その綺麗で水量豊かな川面に見入ってしまい、しばし、両岸の風景には目が行かなかった。

今から十年ほど前のこと、私は都営観光のバスツアーで隅田川のほとりを北上したが、そのときのガイドの説明を聞き逃さなかった。

「昔は隅田川の水が綺麗で、おいしくて、上流でお酒を作ったそうですよ」

（さもありなん）

私は、あの真っ青な流れを思い出しながら、うなずいたものである。

思いがけない、楽しい東京見物が終わり、市川の家に戻ると、東京に住んでいた末男叔父（始一伯父・母の弟）がやって来た。

（寛夫が折角、市川まで来たんだから、横浜に寄ってから、山梨に帰らせたらどうだろう）

始一伯父と末男叔父が相談し、気を配ってくれたものと思う。横浜とは、父小太郎の生家で、南区永田町にある農家のことで、『まんじ』七十一号から七十五号で述べたところである。私はまだ物心つかないうちに行ったことはあるが、今回初めて訪れるようなものであった。

そこで私は市川で一三叔母と別行動になり、末男叔父は私を横浜まで送り届け、祖母の紙透ソメに引き合わせて、後事を託し、東京に帰っていった。

ソメ祖母は元気だった。私の成長した姿を目のあたりにして喜んだようである。祖母のほかに、伯父の亀松、伯母トリ、従姉フジ、従兄賢次郎・孝治、従姉ヨシ子、従弟貞雄・政義がいた。大勢だったので、その時、私は伯父母のほかは誰が誰だか分からなかった。皆も、この珍客は誰だろうと見詰めていたようであった。たゞ、従姉ヨシ子は、私と同じ六年生だったので話をした記憶はある。

食事は、卓袱台を三台ほど並べて、皆で一緒に食べた。風呂は母屋の裏庭に桶が置かれてあり、突き当たりは崖であった。電灯があったかどうか覚えてないが、私はお客扱いで、明るいうちに入ったように思う。

近所の親戚で、同じ農家だった清宮つる伯母や、内田かつ叔母の家などを案内されて、そこでも私は顔見世をした。かつ叔母の家では、縁側に二人の少女が並んで腰掛けていた。おかっぱ姿で揃いの浴衣を着ていた。従姉たちだったと思う。お互いに一瞥を交わしただけであったが、思い出の一こまとして残っている。

帰りは、ソメ祖母が山梨まで送ってくれた。久し振りに会った鈴木義平祖父とソメ祖母は、しばらく、なごやかに談笑していた。

間もなく、こんどは重一叔父が山梨にやって来た。祖母鈴木さとの実家は、見付にあった種茂家で、祖母の弟茂平は機織りを営んでいた。妻よしとの間には子宝に恵まれず、重一叔父が養子となったのである。

「寛夫、そばを食いに行こう」

私を袋井から森町の間を走っていたチンチン電車の、通りにあった食堂に連れて行き、二人で食べた。私としては、外食は初めての体験であった。

次の日に、

「海水浴に、連れてってやろう」

と、浜名湖か弁天島だったか忘れたが、二人で行った。

私は朝鮮で、プールを見たこともなく、海にも遊びに行ったことがなく、泳げなかった。おずおずしている私を見て、

「ハッハッハ」

と笑い、泳ぎ方をすこし教えてくれた。砂浜で遊んだりして楽しい一日を過ごした。

後日談となるが、その後、重一叔父は出征し、私は一通の葉書を受け取った。当時は軍事郵便だったので、日付の記入がなく、いつごろのものか、よく分からないが、次の文面だった。

紙透寛夫君

満洲国遼陽
満洲第五七四部隊湯川隊
種茂重一

日増しに寒く毎日氷の見られぬ日がなくなり自然ペーチカの周囲が賑やかです。昨日、手紙有難く読みました。中学も四年で卒業する様になったんですね。まあうんと勉強して士官学校でも航空隊でもいって一生懸命御奉公する様心がけて下さい。紙透少尉殿にも早速手紙を出して見ます。

山梨の人達も皆元気ですか、又皆の写真でも送って下さい。一三の相変わらず人を喰った文章には吹

き出します。自分が読まん先にいつも戦友達にぶん捕られてしまう始末ですが、さすがの私も『イナゴ』の足だけにはあいた口がふさがりませんでした。時折便りしますが皆に宣しくいって下さい。

その後、叔父は南方戦線に移り、この葉書が最初にして、最後のものとなった。昭和十九年七月七日、八日、サイパン島の守備隊は飢えと疲労におちいりながらも最後の総攻撃が行なわれ、約四千人が玉砕した。このなかに重一叔父がいたのであった。

穏やかな笑みをたたえた、愉快な叔父であった。

：：合掌：：

もう一つ、後日談がある。

永坊は、その後、学徒出陣で出征し、名古屋の高射砲隊に入った。偶然、私もその頃、（掛川中学の四年生のとき）、学徒動員で名古屋の三菱重工業枇杷島工場で勤労奉仕をしていた。

米軍の空襲は名古屋でも激しくなってきた。空襲警報になるたび、私たちは作業を中断して、工場外の畑だったか、原っぱにだったか忘れたが、逃げた。私はそこで、仰向けに寝転んで敵機B29の来襲を見ていた。四本の飛行機雲をもくもくと吐きだしながら悠然と飛んでいた。見ていて、癪に障ったものである。昭和二十年一月十九日の名古屋空襲では、高射砲陣地はその標的となり、爆撃され、永坊は、この時、直撃弾を浴びて戦死した。

人生わずか、二十年であった。

いま、山梨にある正福寺の鈴木家墓誌には、

永学院釋一精正定聚位
昭和二十年一月十九日　子永一　二十
昭和四十四年六月二十八日
勲八等瑞宝章受章

と刻まれている。

：：合掌：：

はからずも、いろいろと見聞を広められ、大勢の親戚の人たちにも会えた、私の夏休みも終った。

六年生の二学期から、周智郡周南尋常高等小学校に転校した。これで私は小学校を、朝鮮の会寧・灰岩・南陽と、この周南で四校目の転校をしたのである。もう転校は慣れっこになっており、すぐに皆と友だちになれた。転校した日に、朝鮮から、わざわざ、お土産として持参した、張鼓峰事件で、ソ連軍が投下した爆弾の破片を、受持ちの先生に贈った。職員室では、多分、先生方が、このとんでもない土産に当惑し、吹き出したのではないかと、今では思っている。

先生のなかに、いつ子叔母がいた。

祖父の家の向かいに、祖父の弟である鈴木仙吉が住んでいた。皆が仙兄と呼んでいた。帳面などを売っていたので『帳面屋』とか『向かい』と呼んでいた。仙兄と妻みつの間には、子宝に恵まれず、母茂登子の妹であるタキ子叔母を、生まれてすぐに、養女にした。ところが、仙兄は、どうも名前が気に入らなかったらしく、『いつ子』と改めたと聞いている。長じて、周南小学校の先生になった。町中の人たちから『いつ子先生』と呼ばれ、親しまれて人気があた。一三叔母も私も、公私ともに、いつ子先生と、いつまでも呼んだものである。

私にとって、いつ子先生は、学校では百万の味方を得た思いであると同時に、私の行動が何もかもすぐに、祖父母や叔母たちに筒抜けとなってしまって、なんの悪さも出来ない、煙ったい存在でもあった。

向かいには、ほかに、清次叔父と幼い従妹の百合子、従弟の昌浩・重男、従妹露子の八人が暮らしており、向かいどうしとも、毎日のように行き来していた。

朝鮮では、内地の各地の人たちが集まっていたせいか、いわゆる、標準語を使っていた。が、山梨に来てから、私自身が聞いたことがない、まだ知らなかった標準語や方言を、いくつか耳にした。

ある時、だれかが『いそうろう』という言葉を話のなかで使っていた。

「一三さん、いそうろうって、どんな意味？」
「寛夫のような人のことを言うの」
「ふぅーん、どういうこと？」
「ただで、食べている人のことよ」
「ふぅーん」
（お父ちゃんが、お金を送っているんじゃないのかなあ）

私は、この時、内心そう思った。

よく、祖母は『おうかん』と言っていた。話の前後から、私は道路のことだなと解釈した。後年、辞書を引いたら『往環』と出ていた。祖母が明治時代から、ずっと使っていた言葉のように思った。

静岡弁に『ずら』がある。

ちゃっきり節（静岡）
へ唄はちゃっきり節　男は次郎長
花はたちばな
夏はたちばな　茶のかおり
……
……
蛙が啼くんて　雨ずらよ
ここのところで『ずら』が出てくるが、
（雨蛙が鳴くから、雨になるでしょう）
と、ずらは、でしょうの意味だった。
祖母がよく使った言葉に、

『ぶしょったい』があった。
不精からきている言葉で、静岡県では、外見のだらしなさだけでなく、内面のいいかげんさや、腹黒さなども表しているようだ。まさか、祖母が私のことを言ったのではないと思う。
『とんじゃかない』
は頓着無いで、気にしない、構わないと解釈した。
それと、もう一つ、よく祖母が使っていた言葉に、
『やくたいもない』
があった。これは京都府の方言と、ものの本に書いてあったが、祖母が京都にいたことは聞いたことがないので、祖母はどこで覚えた言葉だろうか。大辞林によると「何の役にも立たない。つまらない。めちゃくちゃだ。とんでもない。くだらない。」と解説しているから、私がいたずらをした時に、言われた言葉だとすれば、ふに落ちる。

六年生の受持ちは、岩田武夫先生であった。一時、学校か先生の都合で、村松範三先生に習った時もあった。岩田先生はまさに恩師。村松先生は好きであった。私は良い先生方に恵まれた。岩田先生に教わって中等学校の入試に受からなかった人はいないと言われていたが、本当だった。いつも、心から児童のことを思い、進学希望の児童たちを、夜、自宅に呼んで、無料で教える先生がいただろうか。いつも真剣そのものであった。一方、村松先生は明朗闊達であり、児童に好かれており、私も、その人柄に惚れた。

六年生全員が、先生から日記を書くように言われ、時々、先生が目を通し、判を押したものが、私の手元に残っている。当時の世相と、私の幼稚さが如実に描かれている。

昭和十六年（一九四一年）

一月一日　水　晴　四方拝
僕は六時半におきて（山名）神社に参拝をして、お雑煮をたべて（学校の）お式にいきました。お式をしながら。僕は今年も元気よく勉強し又運動をして、かならず中等学校に入学して見せるぞと決心しました。

一月二日　木　晴
（向かいの）機械屋のおじさん達と一しょに、法多山にお参りに行きました。道路は自転車や自動車や人で、あふれそうでした。僕達はお参りをして頂上に行きました。方々を見渡すと、太田川も白く見えました。雲の上に富士山が姿をあらわしていました。

一月三日　金　晴　元始祭
稲夫君と一夫君と僕と三人で可睡（斎）に行きました。護国塔にお参りをして、大きな火ばしや、すりこぎや、

じゅうのうなどを見て、六の字形の穴に入りました。その穴は昔、（徳川）家康のかくれた所でした。それからスタンプをおして帰りました。

一月四日　土　晴
今日は今年はじめて予習がありました。午後じゅんぼうが雀をうちに空気銃を持って来ましたので、一緒についていきました。じゅんぼうは三匹とって帰りました。僕たちは自転車に乗って方々走りました。

一月五日　日　晴
午後僕が自転車に乗っていると、稲夫君と勝ちゃんが押したので、家にぶつかって怒られた。それからぶらぶらしていると、又たくさん人が集まったので「じゅんどろ」をしました。（巡査と泥棒）僕はじゅんになりました。そして手足をよごして帰りました。

一月六日　月　晴
今日は登校日でした。一時間目は地理で二時間目は紙芝居でした。三時間目は掃除でおしまい。お昼が終って勝ちゃん達と遊んで帰ると、見付の重ちゃん（重一叔父）が東京から帰っていました。おみやげをもらった。

一月七日　火　曇
冬休みも今日で終りです。僕は勝ちゃんと二人で勉強して裏の方に行くと、土合戦をしていました。それにかたって（仲間に入る）土をなげたので後で、しかられました。午後、森町のおばさん（祖母の妹の種茂とみ）がいらっしゃいました。そして干いもを下さいました。

一月八日　水　晴
第三学期が始まりました。学校に行き大掃除をして、通告表（通信簿）を出し、剣道をして帰りました。午後一寸勉強をしてから遊びました。夕方みいちゃん（みさ子叔母）が芝居を見に行ったら満員で帰ってきました。

一月九日　木　晴
今日学校に行きました。予習の時、僕が当番でしたが忘れて帰ってしまいました。夕方みいちゃんが夕楽座に早く行ったので、僕も早くごはんをたべました。おじいちゃん達は後でたべました。

一月十日　金　晴
二時間目に卒業記念写真をとりました。男子だけと女子だけでした。家に帰ってお酒を買って帰ろうとすると、僕の家の前に気違いがいたので、裏から帰ってきました。夜、岩田先生の家に予習に行きました。

一月十一日　土　曇

学校で国民学校のように、やってみました。授業は四十分で休みが十分でした。

夜、袋井のおばさん（鈴木しの伯母）と、としぼうが来た。僕はとしぼうとあばれました。としぼうを打ったら泣いてしまったのでやめました。

一月十二日　日　曇

今朝、手紙を父に出して、学校に予習に行きました。そしたら幡鎌君がいないので、皆で行くとおみかんを下さった。午後竹馬にのって、そこらを歩いていましたが、後でトランプをやって夕食となりました。

一月十三日　月　曇

今日は貯金日です。僕は一銭も持って行きませんでした。全校運動の時は寒くて皆、はあはあ、ほうほう言っていました。帰って予習に行ったら、級長の命令にしたがってやれと言いました。終った頃、男と女とけんかをした。

（この日に村松先生の判が押してあった。）

一月十四日　火　晴

今朝、起きて顔を洗おうと思って、井戸に行くと氷がはっていました。もう大分寒くなりました。高等科の衆が課外（活動）をしていました。それは二十日に森町で剣道の試合があるためでした。

一月十五日　水　晴

学校に行ってお宮に参拝しました。授業が終ってかえると千葉のおじさん（始一伯父）がおりました。僕はあいさつをしました。今日は静岡の大火の一周年記念日で、朝早くから消防の衆が大ぜいおりました。

一月十六日　木　晴

九時から映画を見学に行きました。『海軍爆撃隊』という題で、とてもすばらしい活動でした。午後二時間勉強して今日は終りでした。夜大勢親類の人が来てお話しをしていました。夕方千葉のおじさんが三円下さいました。

一月十七日　金　晴

学校から御飯をたべにかえりました。すると千葉のおじさんはもうかえっていました。ふと縁側を見ると『国民六年生』と『われ等の陸海軍』という本がありました。それは末男さんが下さったのです。僕は手紙を出した。

一月十八日　土　晴

高等科の衆が袋井商業に剣道の試合に行って、二等賞

になって帰って来ました。学校で予習をしていると、おすゑちゃんが踊りをしながら校庭に入って来ました。僕は驚きました。

（派手な着物に帯を締め、髪をぐちゃぐちゃに振り乱した姿で町のなかを徘徊していた女の気違いで、私が、かつて日生劇場で観た唐人お吉の、見るも無惨な老醜をさらす坂東玉三郎の名演技も、到底かなわない鬼気迫る感じに私は、怖かった。みいちゃんに、

「そんなことをしていると、おすゑちゃんが来ますよ」と、よく脅かされたものである。）

一月十九日　日　晴

午前八時に剣道の試合がありました。僕らも参加しました。僕は帳面一冊（個人試合）紙挟み（団体試合二等）をもらいました。午後一時から予習がありました。そして午後三時半家に帰りました。

一月二十日　月　晴

会礼（朝礼などのこと）の時、村松先生の送別式を行いました。僕は村松先生がすきでしたが、御国のためにおつくしになるのだから仕方がありませんでした。午後三時半、男女一緒に男は剣道優勝旗、女は珠算優勝旗を持って卒業記念写真をうつした。

一月二十一日　火　晴

今日から榛葉先生に教えられることになりました。先生は忙しいから今日は自習だと言われました。自習の時、皆がさわぎましたが僕はさわぎませんでした。それはよいことだと思いました。

一月二十二日　水　雨

今日は村松先生が出発されるので僕達はお送りに行った。村松先生は元気でした。午後、五、六年が山科に行きましたが、予習の衆は予習をして山科に行きませんでした。そして一生懸命運動しました。

一月二十三日　木　晴

村松先生からお便りがきました。

『今は汽車の中で外は夜でくらやみです、皆さんにあいさつをするつもりでしたが……』と言うようなことが書いてあった。今日は午前中で授業が終ったので、父母に手紙を出した。それは今年になって四度目だ。

（つづく）

漢詩

湖騒錄（卅二）

鯨游海

東京會館拜謁文豪早乙女貢先生奉祝畢生
大著會津士魂全二十一巻成就・七律

辛巳申月

行間無涙不能讀
紙背有情更難前
七道遙聞戎馬喘
故山一望砲狼烟
月溶白霧兵愈迫
風躍紅連城欲燃
非直忠臣哀哭史
會津士魂永可傳

押韻・前烟燃傳

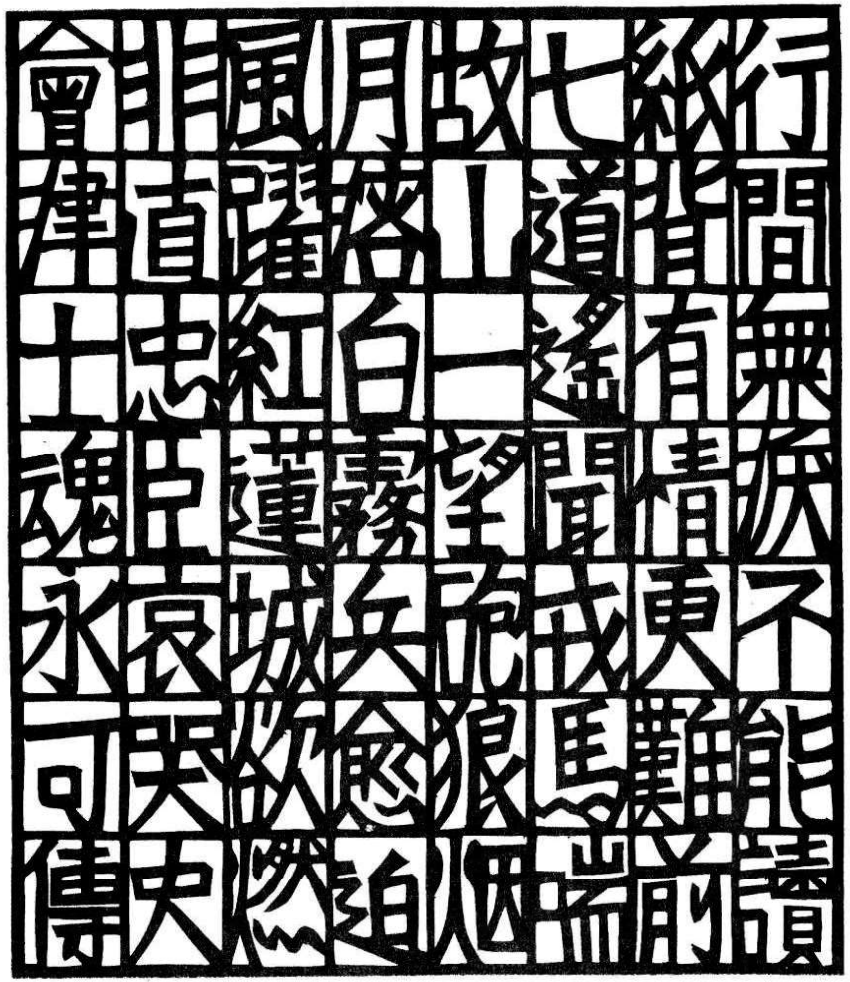
〈東京会館にて文豪早乙女貢先生に拝謁し畢生の大著会津士魂全二十一巻の成就を祝い奉まつる・七言律詩〉

行間涙なくんば　読むあたわず
紙背情ありて　更には前み難し
七道遙かに聞く　戎馬の喘ぎ
故山一望すれば　砲狼の煙
月白霧に溶けて　兵いよ〳〵迫り
風紅蓮を躍らせて　城燃えんと欲す
直に忠臣哀哭のみの史に　非ざらん
会津士魂　永えに伝えらるべし

〔注　解〕

吉川英治賞を受賞された早乙女貢先生の大著作「会津士魂」全二十一巻が完結した。これを祝うパーティーが東京会館で催され、私も同郷の誼もあり参加した。

先生は曽祖父が会津藩士。今は鎌倉にお住いだが「限りなく会津を愛惜した」功により会津名誉市民の顕彰も得ておられる。確かに会津は維新史の主役であり、その武士道、儒教の倫理観等日本人が失って了った大切なものを想起せしめる。早速七律と七絶の二句を作り先生に



お贈りした。

所で先生は書も絵も玄人。私の拙ない字では恰好がつかず、思案の末「切り字」の名匠で友人の八木明美氏を煩わせ製作して戴いた。

頷聯の七道とは五畿七道。即ち京に通じる主要街道。ここでは「全国到る所」。狼烟はのろし＝戦争を寓意。紅蓮は炎の形容＝紅い蓮の花で仏教用語紅蓮地獄より。非直は不直と同じ。直に……にあらざらん、と訓じ「ただ……だけではない」の意。漢語独特の用語である。

申月は漢語で陰暦七月。なお起句の前は動詞で前む。

又・七絶

辛巳申月

故山囘望熾紅連
彈雨砲雷忠義燃
非直維新新哀哭史
會津士魂永連綿

押韻・蓮燃綿

〈又・七言絶句〉

故山回望すれば　紅蓮熾んなり
弾雨砲雷に　忠義燃ゆ
直に　維新哀哭のみの史に非ざらん

会津士魂　永えに連綿たり

☆読み尽きて眼閉ずれば汚れなき
花の如かる会津士魂は

鎌倉山下桂臺邊中司州俊先生新卜堂成祝之酬以田寺芳山人画伯描良寛沙門山水圖

辛巳林鐘

鐘閑月照桂臺邊
新卜堂成墨客筵
祝贈幽玄山水圖
讚無定韻瑟無絃

押韻・邊筵絃

〈鎌倉山下桂台の辺りに中司州俊先生が
新たに卜せる堂成る。之を祝うに田寺芳
山人画伯描く良寛沙門の山水図を以て酬ゆ〉

鐘閑かに月は照らす　桂台の辺り
新たに卜せる堂成りて　墨客ら筵す
祝い贈らん幽玄の　山水図
讃に定韻なく　瑟に絃なきを

〔注　解〕

桂台は地名。沙門は梵語で僧。林鐘とは陰暦六月。卜は卜占＝うらない。往古、居宅を新築する際卜占によって土地の良否を決めた。筵は宴に通じる。讃は画讃のことで、山水画に副えて書かれる詩句。瑟は大琴。

畏友、中司州俊大兄が還暦を迎える機に居宅を新築された。さてお祝は何にしようか。数人の親しい仲間と想談したが結論が出ない。

ふと想ったのが田寺芳山人画伯。親炙する先輩で拙著「潮哨錄」の表紙の絵を描いて下さった高名な山水画人。早速、麻布のアトリエに参上した所ご快諾下さり、見事な良寛草堂の図を描いて下さった。讃に「靜夜草堂裏　獨奏沒絃琴」とある。沒絃琴とは陶淵明の故事を引用した良寛の詩の一部。淵明は弦の張ってない琴をいつも離さず爪弾いて詩を詠んだという。良寛の詩は次の七律。

無題

靜夜草堂裏　靜夜草堂の裏
獨奏沒絃琴　独り奏す没絃琴
調入風雲絶　調は風雲に入って絶え
聲和流水深　声は流水に和して深し
洋洋盈溪谷　洋々として渓谷に盈ち
颯颯度山林　颯々として山林を渡る
自非耳聾漢　自からは耳聾漢に非ざるも
誰聞希聲音　誰か聞かん稀声の音を
実に良寛の面目躍如たる素晴らしい詩ではないか。

新居成った一日、仲間達とこの山水図及び拙詩を携えて訪問、初夏の一夜奥様の手料理を肴に楽しい筵を持ったことであった。

なお良寛は江戸時代の漢詩人多数の中で広瀬旭荘と共に最も優れた詩を作った人との定評がある。また韻や平仄等漢詩の近体詩の決まりを全く無視して奔放に思いのままに詠んだ事でも有名である。私の拙詩の結句はその故事に由来する。

☆高堂の佳人しのばる山水図
讃に韻なく琴に弦なし

摩天樓崩落卽事

辛巳戌月

色卽是空如此乎
摩天樓閣忽被屠
蠻行不止三千歲
泉下荊軻顔色無

押韻・乎屠無

〈摩天楼崩落す・即事〉

色即是空とは　かくの如き乎
摩天の楼閣　たちまち屠らる

蛮行止まず　三千歳
泉下の荊軻　顔色無からむ

〔注　解〕

「色即是空」は般若心経に書かれた仏教用語。「形ある物一切は本来空無である」の意。

摩天は天を撫でる。迫る。被は受身の助辞で、「るる、らるる」。見と同じ。

荊軻は史上有名なテロリスト。史記によれば「戦国時代の衛の人。燕国の太子丹に見込まれ、秦の始皇帝を暗殺しようとしたが土壇場で失敗し、八ツ裂きにされた」という。秘命を帯びて愈々出発する時。易水の畔で自から詠んだ句「風蕭蕭兮易水寒　壮士一去不復還」は有名。

後年初唐の駱賓王は次の五絶を詠んだ。

此地別燕丹　この地　燕丹に別る
壮士髪衝冠　壮士の髪　冠を衝く
昔時人已沒　昔時の人　已に没し
今日水猶寒　今日　水なお寒し

さて拙詩を口語訳してみよう。

「色即是空＝形ある万物は本来一切空無である」とはこのような事をいうのか。

マンハッタンの象徴たる巨大華麗なビルがあっという間に屠り去られて了った。

それにしてもテロの蛮行は三千年来止む事がない。

然し今回のテロ程、大胆、残酷、大規模な例は未だかつてなかった。社会の三千年に亘る進歩は何だったのであろうか。あの壮絶なテロを敢行した荊軻も泉下で嘆じおそらくは顔面蒼白となっている事であろう。

☆天に非ず人の命なり摩天楼
　色即是空熔けて無と帰す

贈同袍細野俊男大兄退官

辛巳亥月

仰高對溫發胸襟
得意相斟失意斟
星替忽焉揮手別
一期一會憶深沈

押韻・襟斟沈

〈同袍細野俊男大兄の官を退るるに贈る〉

仰げば高く対えば温かく　胸襟を発きて
得意に相斟み　失意にも斟みしが
星替り忽焉として　手を揮って別れたれば
「一期一会」の　深沈たるを憶う

〔注　解〕

起句「仰げば高く」は論語・子罕篇「此之彌高鑽之彌堅……」より。胸襟を発く、は心の裏を開く意。

転句「星替り」は歳月を経ること。星座の位置が変る。

結句「一期一會」は、一生に一度しか会う機会がないような不思議な縁をいう仏教用語。後年、茶道の精神にも援用された。また「揮手」は李白「揮手自茲去」より。

詩題の「同袍」は綿入れの着物を共に着る仲をいい出典は詩経。江戸の広瀬淡窓は桂林荘雑詠・示諸生で「休道他鄉多辛苦　同胞有友自相親」と詠んだ。

さて、口語訳してみよう。

貴兄を仰ぎ看ればいよ〳〵高く、また貴兄と対面すればいよ〳〵温かい。恰も孔子の如き仁徳ある君とは心の裏を開いたお付合をしていただいた。

意を得た時も酒を斟み交したし、失意の時もそうだったね。

星変り時移って、或る日突然手を揮って別れたが、今始めて「一期一会」の意味の深く重い事を憶う私だ。

☆春秋の眩しき日々は知らざりき
　一期一会の重く深きを

《漢詩の流れ23》中唐の詩人⑧――韋應物、李益、錢起

王維、孟浩然の詩風を継承した山水詩の名手韋應物は「王・孟・韋・柳」と併称され優れた自然諷詠を残した。

秋夜寄丘二十二員外（秋夜丘二十二員外に寄す）

懐君屬秋夜　君を懐うて　秋夜に属す
散歩詠涼天　散歩しつつ　涼天に詠ず
山空松子落　山空しうして　松子落つ
幽人應未眠　幽人　応に未だ眠らざるべし

※属す……～である。散歩……魏晋の頃、五石散という劇薬を服用して、熱を発散させる為に外を歩き廻った事から出来た言葉という。松子……松かさ。

大暦の十才子、と呼ばれる李益の辺塞詩二首並に錢起。

夜上受降城聞笛（夜、受降城に上りて笛を聞く）

回樂烽前沙似雪　回楽烽前　沙雪に似たり
受降城外月如霜　受降城外　月霜の如し
不知何處吹蘆管　知らず何れの処にか　芦管を吹くを
一夜征人盡望鄉　一夜征人　尽く望郷

従軍北征（軍に従って北征す）

天山雪後海風寒　天山雪後　海風寒し
横笛偏吹行路難　横笛偏えに吹く「行路難」（曲名）
磧裏征人三十萬　磧裏征人　三十万
一時回首月中看　一時に首を回らして　月中に看る

歸雁（帰雁）

瀟湘何事等閑回　瀟湘　何事ぞ　等閑に回るや
水碧沙明兩岸苔　水碧に沙明らかに　両岸苔むせるに
二十五絃彈夜月　二十五絃　夜月に弾ずれば
不勝清怨却飛來　清怨に勝えずして　却飛し来たるならむ

千篇萬律

☆「何れの御代にありしか　女御更衣あまたさぶらい給いける中に　いとやんごとなき際には非ねど優れて時めき給うありけり……」「祇園精舎の鐘の声　諸行無情の響あり……」「ゆく河の流れは絶えずして　しかももとの水にあらず　よどみに浮ぶうたかたは　かつ消えかつ結びて　久しくとどまりたるためしなし……」「夫天地者萬物之逆旅　光陰者百代之過客……」「子曰　學而時習之　不亦説乎　有朋自遠方來　不亦樂乎……」「武士道はその表徴たる桜花と同じく日本の土地に固有の花である……」「隧道を抜けると雪國であった……」「往古　西域に樓蘭と呼ぶ小さい國があった……」

☆私の世代ならこの程度の文は殆んど暗記しているのではなかろうか。今私自身これらの文章を曲りなりに書ける事に驚く。少年時の暗記力の凄さに驚く。つまり文章を読み、書き、理解する事は、頭の発達、即ち言語を司る左脳を活生化すると同時に、想像力、創造力を司る右脳をも刺激するという。柔い頭を造るという。

☆国語は全ての学科の基本といわれる。小学校の特に低学年は国語と算数だけをたっぷりと教えるべきだと説く識者は多い。同感である。理科や社会は高学年からでいいと思う。まして英語をや！自衛するしかない。

☆国語の時間が大巾に減るという。役人に任せておくと碌な事はない。子供達に本を読ませ暗誦させよう。

(く)

まんじ　第84号

平成14年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　鯨　游海（くじら　ゆうかい）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056 横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270－0－64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031 川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　宮城正彦画

仲間、継続、積年等をイメージして描いた（宮城）。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品（く）。

まんじ

No. 85

2002. 8. 1

まんじ第八十五号　目次

誠　涙　抄 …… 大和禎人 …… 4
詩　この町（二） …… 青木昭成 …… 11
「政治ニュース」雑記帳
―本には書けなかったことなど― …… 瀧澤中 …… 13
誤解から始まる …… 新井宏 …… 25
城ケ島異聞（二） …… 島津隆子 …… 36
都市銀行「爆発物処理班」（二） …… 宅見勝弘 …… 55
悪流修羅（第二話）2
―リストラの虚構― …… 中泉聖司 …… 62
哀愁武士道（二） …… 三戸岡道夫 …… 70
黒　船（三） …… 太田和貞 …… 82

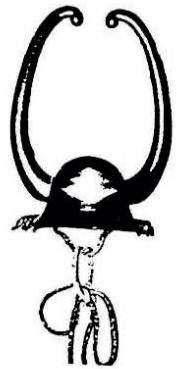


宰相の橋（三） …… 太田精一 …… 90
シナリオ　龍化妖姫（四）
―周の幽王伝― …… 相原精次 …… 96
霧に包まれていた光（5） …… 鍋屋次郎 …… 104
体当たり戦法を強制された
神風特別攻撃隊の人びと（八） …… 千坂精一 …… 114
紙透家の人びと（十四）
―〔泰山木〕改題― …… 紙透寛夫 …… 125
漢詩　潮騒録（三十三） …… 鯨游海 …… 140
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（三十三） …… 金子正義 …… 145
千篇萬律 …… 編集子 …… 150



表紙・カット …… 宮城正彦
カット …… 鈴木國男
カット …… 清水トム

誠涙抄



大和人

（父長行は聊か変物で、嘗て余に向かい「俺の墓石には声もなし香もなし色もあやもなし、さらばこの世にのこす名もなし」とだけ刻んで、俗名も戒名もなしにしてもらいたい……）と言ったことがある。たとえ冗談まじりにもせよ、そんなことを口にする心理を忖度すると伝記編纂などということは決して好んでいなかったことが分かる。）

子爵、海軍中将小笠原長生は父の元壱岐守長行の伝記を編むにあたって、その序としてこう書いている。父子の情として、とりわけ逆賊の汚名に晩年を息を殺すように生きた父を思えば、躊躇、逡巡が無かったわけではない。伝記を編む機運は郷国の肥前唐津の人々による熱心な慫慂があったからである。長生が唐津藩の小笠原長国の後嗣として家督を継承したのは明治七年、八歳の時である。幼名捨丸さらに捨蔵から賢之進、さらに明治十三年長生と改名し、学習院に入学している。

子爵を授かったのは明治十七年、二十二年唐津を訪問し、藩育英塾久敬社社長に就任する。在任は昭和二十年までであったが、この社中に委嘱して父の伝記編纂に着手、十数年を費やし、昭和十七年に至って公刊の運びに至っている。旧菊判、七〇六ページ、往時の頒価六円というもの、長生の手厚い孝養の事業実現だった。

小笠原長行がわが子から見て怪物とされた前半生をここで概略しておかねばなるまい。もちろん長生の側に立てば、深い骨肉の情をもってのあえての言辞として、理解が必要としても、この父子が翻弄された人生の数奇は

いまだ嬰児であった長生は父長行の会津への亡命、そして蝦夷地戦線より離脱、潜行の果てに、ようやくめぐり逢う日を迎えるのだから、まさに運命的と言える。

長行の身辺にはまず家系上の煩わしい藩内の係争があった。奥州棚倉から入封した唐津藩の藩祖は長昌、その死去に際し、長行は二歳、ために信濃松本の戸田氏から養子として迎えられたのが当代長国。長行はやがて世子として藩政に関与するが、棚倉以来の財政建て直しに敏腕を振るう。ために長国との関係に気まずさを招いた。あまつさえ長国の女、十五歳も年下の満寿姫との婚姻を余儀なくされる。この二人の間には夫婦関係はついになかった、と伝えられる。

次いで長行は定府の身となり、図書頭から抜擢をうけ慶応元年に老中格、やがて老中へとスピード出世を遂げる。かれは生麦事件の賠償金を独断で支払い、鎖港談判の中止を唱えて、いったん罷免されるが、すぐ復活、やがて兵を率いて上洛、開国へむけての勅許をもとめようとクーデターを起こす。この行動はさらに物議をかもすが、結局、蛤御門の変以後に宥免され、かれは開国の旗手という評価をうける。また再度の長州征討にあたっては派兵の総督という任にあたっている。

大政奉還、そして急転する政情の中、薩長二藩を主力とする官軍が錦旗を翻し東進する趨勢に、江戸を家臣十八名とともに脱出し会津へ向かう、東北列藩の同盟に期待をかけ、一時は孝明天皇の弟宮の輪王寺宮が彰義隊の戦争に敗れ、会津に逃れ、米沢を経て仙台に迎えられていたのを迎え、即位を願って東武皇帝と称し、新天皇政府を樹立する構想まで白石会議で決定する。東北に逃れていた幕府の要路者は他に長行に同じ老中の備前松山の板倉勝静があったが、二人を新政府の執政にあてるなどの構想が描かれた。一時は奥羽越三十三藩の同盟成立の盛威も、次第に戦況不利のうちに足並みは崩れ、脱落が相次ぎ、主力と頼む仙台藩まで離反に傾いた。幕府艦隊の引き渡しを拒否して仙台入りをしていた幕府海軍総裁榎本武揚の兵員、会津の戦線から合流した陸軍奉行大鳥圭介率いる部隊、また孤軍に等しい新撰組の土方歳三らの合流があって、仙台藩説得の努力にかかわらず、その翻意は得られないまま、蝦夷地への転進が決断される。実兄の会津藩主松平容保の京都守護職を援け京都所司代の任にあった桑名藩の松平定敬も会津入城をしていた一人だが、決意の時を迎えた兄に諭されて仙台に退いており、長行ら老中二名に加えて大名身分の三公が蝦夷地入りの行を共にしている。蝦夷地共和国政府を榎本らが宣言、祝勝に酔ったのは十二月であった。だが、平穏は翌明治二年三月までであった。

（三公を抱えてはわれらの真意を疑われかねない）

桑名藩家老の酒井孫八郎が津軽海峡を渡って主君の松

平定敬の恭順を懇請するなどのこともあり、榎本は五月の決戦を前にして三公の退陣勧告を決意するに至った。そこで三公それぞれに退陣をするのだが、長行の場合は四月二十三日、停泊中のアメリカ船によってであった。五稜郭の陥落、榎本らの降伏は五月十七日になった。

長行の横浜に着いてからの足どりは一切謎に包まれる。アメリカへ亡命したとする浮説が流れたが、専ら側近によるものであった。江戸を離れた慶応四年三月三日からかれの転戦、流転は九月八日の明治改元を超えて同二年にわたる約四〇〇日を数えられる。

東京に潜行したのが事実らしいが、ついに自らは真相を語ることがなかった。かつて再度の征長役では幕軍総督の任にあったかれだから、逮捕されれば勝利者の裁きをうけ死罪を免れない。そのための潜行だった。新発田藩士で漢学上の友人で工部小丞の大野誠の家にしばらくかくまわれ、次いで藩邸出入りだった本所の古本屋、和泉屋金右衛門のところに潜伏し、一番長くいたらしい。

その後、大野の世話で本郷湯島天神に近く、妻恋稲荷脇の御家人の隠居が住んでいた荒れ屋敷にしばらく潜んでいた。旧知行時代の御弓町中屋敷に近い所だ。なにかと便宜があったと思われる。それから今の駒込動坂薮下に移ってきた。

ここへ居を構えたのは明治五年の浅い春のことであった。それまで湯島の妻恋の潜伏先から、さながら啓蟄を迎えた生き物のように居を移している。身辺の事情によくやく光明の気配を悟ったからであった。蝦夷地共和国の夢空しく投獄されていた榎本武揚、大鳥圭介らの釈放の事実が伝えられていた。かれはようやく帰朝報告を政府に差し出し、前罪の咎めなく、自由の身となった。

動坂の住居は界隈に多い植木職が親の隠居所として建てた粗末で狭い建物だったが、なお、世間をはばかり、ひそとした暮らしには十分であった。近隣の職人たちの手ほどきをうけ、花卉、盆栽に親しむようになり、また杖を引いて坂を上り千駄木の町並をぬけ、白山上に出て寺の多い町を散歩することを楽しむようになった。

しかし、かれはこれまで潜伏中の歳月と同様に一切旧知やかれを慕う家臣、また親族の誰とも交渉を断ち、会おうとしなかった。

潜伏中からつづいての生活の資は東京藩邸の勘定役が為替を横浜在住のアメリカ人あてに振込み、かつての従者太田俊介というものが隠れ家に運んだとされている。

その日、長行が日課にしている散歩から帰ると、家主のおかみが走り出て呼び止めた。

「おお、ご内儀、なんぞご用でしたかな」

「また、ごたいそうに、ご内儀はやめてください」

「や、これはあいすまぬ、で、なにか」

「お客さんですがな」

「ほう、で、もう帰ってもらったのであろうの」

「いんえ、旦那さんはどなたにもお会いにならないといつものとおり申したんですが、たってとのこと、上がって待つとおっしゃってからに、……」

「はて、押し強く、だれかな、どんな風の、男か、女か、」

「女のお客さんなら、いっそのことお断りですよ、堅い旦那さんにも心当たりでもおありですかいな」

「なにを申す」

「お若い海軍さんですよ」

植木職のおかみは蕪雑な会話のあと、豊かな胸を揺すりあげるあんばいに、そう言った。

「海軍の軍人ならわかる、そうか、とうとう来たか」

「お知り合いですかいな」

「うむ、まぁな、とうとうな」

「とうとうなんて、どうしたお知り合いかいな」

「まぁ良い、造作をかけてあいすまぬ」

長行はそう言葉を返し、枝折戸を開けて住居の方へ足を運んだ。

この日の来訪者についてははっと胸をつく心当たりがあったのである。（長生がとうとう来た）

と熱い感情が走ったのである。

数奇と言える親子関係であった。長生は慶応三年十一月二十日、江戸八重洲の老中役宅で生誕した。母は儒者松田迂仙の女美和、父たる老中の小笠原壱岐守長行は慶応四年三月には唐津藩主長国が恭順を決め、新政府から定府中の長行の処分を命ぜられ、とりあえずの帰国命令出していたが、長行はこれに応ぜず、会津亡命の道を選んだことはすでにふれたとおりである。

一方、長生は誕生の翌日から下総の藤倉家に預けられていたが、明治五年にいたりいったん実家に帰ったが、実母の慈愛に抱かれることわずか三ヵ月で同年十月十七日にその母の死没に会っているのである。したがって物心つくころには父も母も身辺にいない育ちかたをしているのである。とくに父については風貌すら覚えがない境遇であった。

海軍兵学校入学したばかりの凛々しい四号生徒、小笠原長生が瞼の父と対面していた。

「父上」

と子としてはじめて父の長行をそう呼んだ。

万感が双方の胸に上った。

動坂に移ってきてはや十二年を経ていた。明治十七年四月のことである。時に、長行は六十二歳、長生は十八歳である。消息として、明治七年には長生が唐津の小笠原長国の後嗣として家督を継承したという事実は承知し

ている。長国は明治十一年四月、すでに世を去っているが、長行も同じ長国の世子であった昔がある。幕閣に列し、定府の身となってからは唐津とは疎遠に過ごし、かつ会津への亡命のいきさつによりかれは廃嫡をうけているのだ。この事情を思えば、長生にいたり宗家相続は少しく皮肉の感を禁じ得ない。

「そなたに会う日がわたしは恐ろしく思えていた」

「は、それはなぜでございましょう」

「わたしは無責任な男じゃ、そなたに対し、またそなたの母に対しても詫びねばならない」

「……」

「美和の命を縮めたのは多分わたしのせいであろう」

「父上、過ぎたことはもうなにも仰有いますな、なにごとも時世でございました」

きりっと軍人らしく姿勢を正している長生はそう制止の言葉を吐いた。

「時世と片付けて良いことかどうか、だが、もう言うまいぞ、許してくれよ」

長行は言いつつ万感の呵責を胸に上らせていた。

「そなたが海軍の学校に入ったことは、誰とのう聞き及んでいた、自立の道を選んで軍人とは士族おのずからな選択かも知れぬ、陸は長州、海は薩摩のご時世じゃ」

「いえ、時流を追うての志願ではありませぬ」

若者は眉をあげてきっぱりと言い返した。

「身を海軍の軍籍におきましたが、父上もかかわる奥羽の戦争では国内初の海戦として宮古湾海戦がありましたが、その折の政府海軍の少壮士官に東郷平八郎閣下がおられました。いま自分の尊敬する上官です」

「そうか、それは、あの折は新撰組の土方くんらが無謀にも政府軍の艦船を奪取しようという画策だった」

東郷を尊崇した長生は私淑して、後にその詳伝を手がけることになる。長生は文筆の才に恵まれていた。

「そういう話はもうなしにしよう」

「タブーですか」

海軍の息子は耳慣れない英語を使った。

二人の会話がそこで途切れた。

長行はしばらく沈黙の後、こんなふうに言いだした。

「いや、わたしの歩んだ道は間違っていたとは断じて思っていない、そなたは軍人として国家のため生きる道を選んだ、世の中本当に立派なことと言えるのは忠にせよ、あるいは義にせよ、もう一つ奥にある真心が大切だと思う」

（もう一つ奥にある真心）

という長行のこの言葉にはそのおのれが貫いて生きた過去をかえりみ、すべてを凝縮して息子に伝えようとする真摯な響きがあった。長生は襟を正す思いで父の顔を仰ぎ見た。

長行はその身上のうえで、この時より少し以前に、形

式上内室の満寿女を離縁している。同女は家付きの子女として、今は長生の重荷になっているはずであった。

「そなたの母の早世を詫びねばならぬさへあるに、満寿女はそなたの厄介をうけているようだが、まことに申し訳ないことだ」

「いえいえ、満寿さまは橘翠女史と号されて、書画をよくされ、自適のご様子、なによりに存じております、お気兼ねなさいますな」

「さようか、それよりはなおのこと、わが一族の胖之助くんのことはご先代はどう思われてであろうか、これがいちばんわたしにとっては辛いことだ、藩命を伝えるため江戸へ遣わされた使者の同くんが先代に叛き、そのままわたしらを追うて合流した、小笠原胖之助一個の存念によるとは申せ、薩長許すまじと燃えるような若者の一途、天晴れの奮戦をして、蝦夷地緒戦で十七歳の若さで戦死を遂げた、わたしにとっては甥じや、痛恨胸を嚙んで、いまなお、わたしの妄執は払い切れぬ」

そう言いつつ、ここで長行の目頭に涙の光るのを長生は見た。強くその志を貫いて生きた父の意外な姿であった。

小笠原胖之助は三好胖と名乗って新撰組隊士として組み込まれていた。松平定敬が身分を秘して一色三千太郎と名乗り、一介の士分として戦陣に伍していたケースに似ている。胖之助は蝦夷地の異郷七重村宝林院に葬られている。唐津の近松寺にも供養墓が後に建てられているが、二つながら戒名は同じで三好院殿儀山良忠居士となっている。院殿は大名格式である。だが、三好の二字にはさきのような哀話が秘められているのだ。

「胖之助くんの若い命を散らしたのはわたしの咎だった、かれこれ思い、わたしの生き方は間違いであったろうかという思いに苛まれる、人間として大事なものをわたしは忘れて生きてきたように思う」

わが子を前にして、はじめての気のゆるみであろう、亡命潜伏の辛苦が重なって、気づかれまいとしつつも、長行の涙腺は止めどをなくしていた。

「いえ、すべては父上仰せの真心にすべてもとづき、大義のため、誠をお尽くしになられたのですから、ご自分をお責めなさいますな」

長生は父の手をとってそう言った。

「手前などが出過ぎたことを、申し訳ありませぬ」

薄暮の時を迎えていた。

「そろそろお暇を頂かねばなりません。訓練の都合上横須賀停泊で半舷上陸を許され、お訪ねいたしましたが戻らねばなりませぬ」

父と子の逢瀬がこの日を限ることになろうとは、二人にとって予測できないままの別れになった。

小笠原長行は明治二十四年一月二十二日、本郷動坂の住居で生涯を閉じた。六十九歳であった。帝国議会開設の翌年である。開国主唱者だったかれは近代日本の曙を見届けてこの世を去った。長生はたまたま房州館山碇泊の軍務中で臨終に間に合わなかった。

長行は東京谷中の天王寺に葬られ、同寺の過去帳に墓碑の所在記号まで明らかであるが、東京都の谷中霊園への移管の事情とともに、管理事務所の帳簿にはかろうじてその名までを見出せるが、所在記号にダブリがあり、残念ながら確定できない状況にある。故人は霊界に去ってなお隠棲の姿勢を保つかに思える。

「是真俠魂（これしんのきょうこん）」

小笠原長生はここに掲げる四文字を後年、昭和十八年になって清水市の清水次郎長の墓に添える記念碑「壮士之墓」の撰文を嘱され、約三〇〇字を草し、自ら揮毫して、その題額にこのような言葉を選んでいる。懇切を極めた関係筋からの再三の委嘱をうけ、承諾したものだったようだが、任俠の真髄を昇華する言葉を選ぶにあたって、長生の心の奥には父長行の義に篤くその己を捧げた生涯を、脳裏に思い浮かべることがあったと想像するとしても、あながち間違いではなかろう。

（もう一つ奥になる真心こそが大切）

と語った父長行の言葉はあの少壮の昔日、これぞ父長行がその生涯を貫いた信条とうけとっていたのだ。

長生は日露戦争では報道と広報を担当、広瀬武夫をはじめ「軍神」を創造し、戦意高揚と国民教育上に影響を与え、軍令部参謀、香取艦長の任にあり、大正七年中将、同十年退役後は宮中顧問官、学習院御用係などを勤めるとともに、文筆に長じて、「東郷元帥詳伝」「海戦日誌」「撃滅」などを著している。

昭和二十二年公職追放令により、以後伊豆長岡に隠棲する。

木枯らしの狂うに任す落ち葉かな

かれの失意を詠じた一句である。

この時からなお十一年を生きて昭和三十三年九月二十日、長岡鉄桜荘に逝去の時を迎えている。九十二歳であった。かれの墓は分骨して東京烏山の幸龍寺、伊豆長岡の宗徳寺、多摩東郷寺、唐津の近松寺にある。

かれが晩年を過ごした「鉄桜」を冠する山荘の命名は桜に碇の海軍の誇りに生き、鉄石の真心を貫いた生涯を象徴するかに思える。

父と子ともに誠を生きて、時代の滔々とした流れの中に心ならずも押し流され、埋没する運命をたどり、無念の思いを至し、時には密かに一掬（いっきく）、男の泪（なみだ）を催すことがあったと考えることは、必ずしも誤りではなかろう。

（H十四・六・十八）

＊カットは長行が征長役に使用した兜、前立の紋章は三階菱。

この町

青木昭成



四、さくらかいどう

宿場町の　なごりを残す道すじ
旧街道はカギ型に曲がり　新しい水戸街道を横切る
一車線の巾で道は南へ下る
すると　またもカギ型に東へ折れる
名前ばかりの亀田橋を渡る
ここからが　わが町
ここは日々　挨拶をかわし　そぞろ歩きをする道

だが　それを町の幹道と呼ぶのには　いささか猥雑で
だから　これは旧道なんですとばかり　ことさらに
弁明したくなる幅員でもある　つまり
これは江戸時代からの主要往還だったのだ
それにしても　今日の
時勢はなんとせっかちで　なんとせち辛いことよ
この道がやっと裏街道の余命を保っているのも
ふしぎな気がする

この道が初めて誕生したであろう時代　それは勿論
江戸の初めなどとは言えないだろう
いや　鎌倉でも　平安でも　いやいや　それは
弥生でも　縄文でもなかった筈だ
と私は　ふと想ってしまう

なぜなら　私の脳裏では　何者かが
それは「けものみち」でしかない一筋の足跡を
音もたてずに走りさって行くからだ
たしかに　今もその痕跡は踏み固まれて何処かに
残っている気がしてならない

もっとも　今でも土地の人たちは
この道を　「さくらかいどう」　と呼んでいる
いまは補修のうえに補修がかさねられて
舗装のあいまには　桜並木さえ添えられていて
だから「さくらみち」と呼称する人たちもいる
あながち勘違いとは　言いきれぬ風情でもあるのだ

ここが私の「ついの住処」に違いない
と　さらに想う　たしかに私のこの時間は
心のおくの襞のように　打ち寄せる造形の波になる
しかし　やがて己の叙情のすべてを空に放ち
私は　そこに消えゆく波の余韻となることだろう

ところで「さくらかいどう」は
西の端から町なかを　東の端にむかう
わずかに「への字」にまがり
わずかに「くの字」になおし
やがて　江戸川堤に突きあたる　南へ折れる
かって江戸川渡りの関所跡地の方向へ
「さくらむら」の聚落をいまも目指している
と言って
今更それを数え　いまさら嘆息することもないが
信号は七箇所　しかし　車で走れば七分
電車の踏切が二箇所　それは設置されてすでに七十余年
でも半世紀ちょっと以前までは　まったく
どんな邪悪をも生みそうにない家並みであったろうに
はて　浪漫はどこへ隠れてしまったというのか

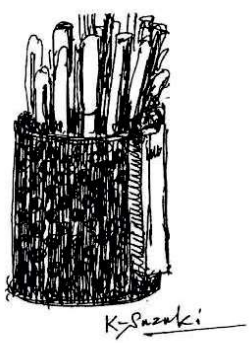
だから私はもう一度　あの亀田橋の袂まで還ってみる
それは単なる舗装道路の一角にすぎない　が
しかし　路傍には風雨に晒された小屋が建っていて
三本の石塔の「みちしるべ」をひっそりと囲んでいる
そこへ還る　すると　私の懐古は独りでにひろがる
それは歴史のひとこまへの回帰　それとも　幻想の屈折
が成せる彼方へなのか
ここに現実に「みちしるべ」が在って
（三猿像庚申供養塔）と名ずけられていて

（右側面に）これより左下の割への道
（正　面に）是より右
　　下河原村
　　左
　　さくら海道
（左側面に）元禄六年
　　酉七月吉日

道標の設立は一六九三年七月である

「政治ニュース」雑記帳
―本には書けなかったことなど―

瀧澤中



昨年から今年にかけて、何冊か政治にかかわる本を書かせて戴いた。
政治関係の話というのは、実に微妙できわどいものもある。だいたい政治家の本音などは、普通活字にはできない。
また、取材中に関係のない話になって、本には載せられなかったがあまり知られていない逸話など、埋もれさせるには惜しい話もあった。
さらに、次の著作の準備で調べ物をしていて、作品には載せないが「これは面白い」という話もある。
「雑記帳」という表題の通り、集めたメモを少し整理したもので、体系的な文ではない。また相当程度セレクトしたので、物足りない部分もあるかもしれない。ただ、政治家の吐息や、あるいは思考の一つのヒントとして、いっときの渋茶の如きものと感じて戴ければ幸いである。

1、政治家素描

バラエティー番組によく出演するH元議員。
取材で彼と二日間、八時間近く話をしたが、原稿用紙にするとわずか十枚足らず。
声と態度は大きかったが、内容は薄かった。
唯一、印象に残った言葉は、石原慎太郎都知事を評した一言。
「彼は、右手に万年筆、左手にヨットの帆だよ」
つまり、作家業とヨット遊びの人で、政治家としては「?」印だというのだ。
ちなみに石原氏は左利きである。

愛知揆一という代議士がいた。
総理総裁の器と言われながら、惜しくも田中内閣の蔵相の時に急死。
後継蔵相を決める為、目白の田中角栄邸では、大蔵事務次官と田中角栄が密談を行っていた。
そこへ、田中派の大番頭・二階堂進がやってきた。
すると、それまで蔵相候補者を書いていた紙を田中は「サッ」
と隠し、二階堂を適当にあしらって帰してしまった。
派閥の大番頭といえども、閣僚を決める相談相手ではなかったのだ。
二階堂進は「趣味は田中角栄」と言って憚らない男だったが、田中の二階堂に対する認識を如実に表している。

自民党の副総裁だった大野伴睦は、平民宰相・原敬に可愛がられていた。
原のモットーの一部を、大野はこう言っている。
「金の欲しいやつには金を、女の欲しいやつには女を、名誉の欲しいやつには名誉を」

大野は典型的な党人派政治家として、よく頼まれごとをされたが、票にも金にもならないこともやった。
ある老婆が、自分の家の周りのドブを整備して欲しいと、市役所に頼んだ。が、何もしてくれないどころか、話も聞いてくれない。そこで老婆は、新聞で知っていた大野のことを思い出して手紙を書いた。
数日後、大野の事務所から、
「ぜひおいで下さい」
と事務所に招かれた。秘書が話を聞いてくれるのかと思ったら、案内された部屋には、大野自身がいた。
大野はじっと老婆の話を聞くと、
「わかりました、何とかしましょう」
と言って、老婆を帰した。
翌日、市役所の助役と担当の課長が、菓子折りを持って老婆を訪ね、今までの非礼を詫び、ドブも整備されることになった。
老婆は大野の選挙区民ではなく、また大野と他のいかなる関係もなかった。
陳情政治は悪なのかどうか。役人の体質が変わらない限り、こういう政治も必要なのだろうか。

大野伴睦については逸話が多い。
今では同時代を生きた方の記憶にうっすらと残る程度だが、当時は独特の人気があった。
今の官僚上がりの政治家や、「政策オタク」みたいな若い新人議員にはない、泥臭い人間味があったのだろう。
なぜそんな人間になったのか。

元々の性格が磊落だったことに加え、次のエピソードが大野の人間味の鍵を解く一つのヒントかもしれない。
大野は色紙を頼まれると、よくこう書いた。
「監獄は人生の大学である」
大野はその生涯、三回も獄につながれている。
古くは、大正二年の第三次桂太郎内閣倒閣運動の、いわゆる「大正政変」。大野は、「反・藩閥（桂内閣）」を掲げて大暴れ。日比谷焼き討ち事件の首謀者の一人とされた。
続いて二回目は、大正四年の「対華二十一カ条」に対する政府の外交姿勢を批難し、それが「騒乱煽動」ととられて入獄。
三回目は、昭和二十三年。いわゆる「昭和電工疑獄事件」に関連して小菅の刑務所に入った。
獄につながれて政界から去る人は多い。しかし、そこから不死鳥のように蘇る政治家には、例外なく妙な人間的魅力がある。
大野が生涯嫌悪し続けた佐藤栄作が、大野をうらやましがった話がある。大野は周りから「伴ちゃん」と愛称で呼ばれていた。そこで佐藤は、
「私も『栄ちゃん』と呼ばれたい」
と語ったという。
その佐藤栄作。

七年八ヶ月もの長期にわたって政権を維持した最大の要因は、ライバルが死んで行ったことだった。
大野伴睦は昭和三十九年、河野一郎は昭和四〇年に死去。佐藤の好敵手・池田勇人は政権を佐藤に渡して昭和四〇年に死去。その派閥を継いだ前尾繁三郎は派内をまとめきれず、三木武夫は小派閥で問題にならなかった。
もう一つ、政権維持の大きな要因は人事配置の巧みさだった。その一例が、佐藤派の実力者であった田中角栄と福田赳夫を両輪として競わせたことに如実に表れる。
佐藤は第一次改造内閣で福田を蔵相に、田中を党幹事長に据えた。
続く第二次内閣では幹事長を福田に。
第二次改造内閣では田中を再び幹事長に。
第三次内閣で福田を蔵相にして田中は引き続き党幹事長。
第三次改造内閣では福田外相、田中通産相。
「人事の佐藤」の面目躍如である。

政治家は、その最も得意とすることで頂点を極め、その最も得意とすることで足元をすくわれる。
「人事の佐藤」と言われた佐藤栄作が、政権末期に迎えた状況は、人間の離反だった。
佐藤の秘書であった楠田實が、佐藤の言葉として日記にこう記している。

「竹下（登。官房長官）も大津（正。秘書官）も信用できない」

竹下登は早い時期から佐藤派に入り、佐藤の信頼を得て自ら地位を上げてきた。竹下は政治家としては珍しくハッタリが少なく、ハッタリの嫌いな佐藤はそういう意味でも竹下を可愛がっていた。

一方の大津秘書官は、「佐藤の影法師」とまで言われた側近中の側近である。

その側近たちのことを信じられない・・・。

いかに政権末期とはいえ、この状況はあまりにも寂しい「人事の佐藤」の末路であった。

もっとも、竹下は後々まで佐藤を敬愛し、その政治手法は佐藤に近いと言われた。竹下が首相時代、借りていた東京の住まいは、かつて佐藤栄作が住んでいた世田谷の淡島だった。

自民党の中では「お公家集団」と揶揄される宏池会。池田勇人、大平正芳ら歴代総理を輩出し、今は加藤紘一と堀内光雄の二派に分かれ、加藤派は加藤の議員辞職で空中分解寸前。

この宏池会の中でかつて、異彩を放っていたのが田中六助。宏池会の中では最も田中角栄に近いとされ、良くも悪くも「策士」と言われる人物だった。

その田中六助が第一次大平内閣の官房長官をやった時に、靖国神社参拝問題が噴出した。

田中六助は中国や韓国からの反発を和らげるために参拝をしない方針を表明した。すると、脅迫電話や、短刀が送られるという嫌がらせを受けた。

さて、問題の八月十五日早朝。

人もまばらな靖国神社に、ＳＰを連れず、ただ一人で神殿に向かう田中六助の姿があった。

もちろん、マスコミは来ていなかった。

田中は特攻隊の生き残りであった。

（早朝参拝は田中の死後に判明した。戦友たちの御霊の眠る靖国に、正々堂々と参拝できないことに、内心、忸怩たる思いがあったのであろう）。

浅沼稲次郎。刺殺された社会党の党首。

かっぷくがよく、太っ腹な人物に見られたが、実は非常に神経が細やかで、精神的にも弱い部分があったと言われている。しかし、歴代社会党党首の中では、人気が高かった。

浅沼が刺殺された原因は、浅沼が中国で、

「アメリカは日中共同の敵」

と言ったことに怒った右翼による犯行だが、浅沼自身は社会党員としては珍しく、天皇のことを

「天皇さま」

と言って敬っていた。

これは本にも書いたのだが、あまりにも強烈なので再録する。

池田勇人の国会答弁での一幕。

野党議員が、農産物自由化反対の立場から、

「池田総理、あなたの地元・広島のレモンは、輸入自由化になったら、ひとたまりもありませんよ！」

と質問。

答弁に立った池田勇人、たった一言。

「広島のレモンはダメでございます」

広島は池田の選挙区である。その選挙区の特産品をこともなげに「ダメ」と言ってしまう池田。

議場は少しの間静まり返り、質問した野党議員は面食らって二の句が告げずに立ち往生してしまった。

それにしても池田は正直な男である。

「貧乏人は麦を食え」

というのは、お金が無ければ一時的に我慢して、麦でしのげば如何だろうか、という発言である。それがマスコミによって「貧乏人は麦を食え」というフレーズになったものだから、大騒ぎになって蔵相をクビになった。

しかしこの時のクビは価値があった。

池田はバカ正直であるという印象が植えつけられて、彼が総理になり「所得倍増」を訴えると、国民はそれを信じた。

（あの池田がウソを言うはずがない）。

もっとも、日本経済は年率で七～八％も経済成長を続けていたのだから、放っておいても「所得倍増」にはなったかもしれない。

ちなみに、池田は終生、麦を食べ続けていた。

その池田の師であるワンマン・吉田茂。新聞記者嫌いの吉田は、どうやって記者をまくか、ということをいつも考えていた。

大磯の吉田邸には、吉田番の記者がいて、吉田が屋敷の中にいるかどうかを確認するために、自動車の出入りする正門の門扉にマッチ箱を挟んでおいた。

当番の記者が時間で見回りに来ると、マッチ箱が門扉から外れて落ちている。

（さては吉田総理、出かけたな）

すぐに記者仲間に連絡を取ろうとして、ふと気がついた。マッチ箱に墨で何か書かれている。よく見ると、

「あばよ」

の三文字。マッチ箱を見つけた吉田が書いたのだが、果たして、本当に吉田は出かけたのかどうか、逆に判断がつかなくなった。

2、政治の矛盾

この章は、取材中に感じたこと、政治の事象やシステムなどについて稿をまとめる前に書き連ねたものを少し整理した。

参議院の存在意義、などと大袈裟に論じる必要は無い。平日の真っ昼間、参議院の議員会館に行ってみれば、参議院議員が仕事をしているのかどうかが一目瞭然。もちろん、開店休業である。

政治家が悪い、という話は聞き飽きた。

政治家を選んでいるのは国民である。マスコミは偉そうに政治家を批難する前に、国民を批難すべきである。もっとも、視聴者や読者におもねって視聴率や販売部数を伸ばしたいだけのテレビや新聞などに、それは出来ぬ相談だろう。

第一、就職活動で青田刈りを最も早く行うのは新聞とテレビだ。社会の木鐸が聞いて呆れる。

派閥と族議員は、どうして悪いのか。

人間は三人集まれば派閥が出来る。およそ人間の集団で派閥をつくらないものは無い。

「派閥があるから政治家は悪いことをする」

という理論は、

「包丁があるから人が刺される」

というものと同じで、問題はもっと根源的なものである。つまり、一人一人の政治家の志、その政治家を選んでいる国民の意識に由来するのだ。

族議員についても、無茶な論理が横行している。

族議員は自民党で言うと「政務調査会」という所に属して、そこで各専門の部会で勉強をし、省庁などとつながりを持つのだが、もしこの政調会や族議員を廃止したら、官僚に対抗する立法を行える人など、消えて無くなる。

マスコミは、そんなに日本を役人天国にしたいのだろうか。

台湾の人と話をしていた時のこと。

「お願いだから、日本が中国に援助を行なうのを止めさせてくれ」

と言われた。

中国・福建省の海岸近くに、幅の広い直線道路を日本のODAで中国がつくった。

これは、明らかに戦闘機や爆撃機が離着陸できる滑走路を想定している。（不自然なまでに直線である）。

福建省、といえばすぐ目の前が台湾である。

対中ODAは、すでに三兆円にのぼっている。年間およそ二、〇〇〇億円。もちろん、靖国神社参拝問題などで熱狂的反日デモを行なう中国国民に、その事実は知らされていない。また、どんなものを日本の援助によってつくったか、ということも、中国国民は中国政府から知らされていない。

私が理解不能なのは、日本からこんな大金をせしめている国が、他国（ミャンマー等）に対してお金と武器の軍事援助を堂々とやっていることだ。

何で日本は、他国に軍事援助をできる国に、金をやらなければならないのか。

とにかく最低でも、大量の核兵器を持つ超軍事大国の中国から、「日本の自衛隊は軍事的脅威」などと言ってもらいたくはない。

また選挙制度をいじくるらしい。

選挙制度を調べていて驚いたのは、選挙制度の専門家の中でも、最良の制度、というのは無いそうである。

ただ、これはダメ、というのはある。

まず二院制の国で、両院が同じ選挙制度ではいけない、ということだ。両院が同じ選ばれ方をしたら、同じ結果しか出さないのでムダ、ということである。

日本は衆参とも選挙制度が似通ってきている。

さて次にダメなのは、地域格差があってはいけない、票は平等でなくてはいけない、ということ。

日本では票の重みが都会と田舎で大分違う。最高裁が示している許容範囲は、単に今の衆参両院の選挙結果を後から認めたにすぎない。

これじゃあ、ムダな公共事業が減らない訳だ。

『非武装中立論』を書いた石橋政嗣。佐世保の地区労組を経て来た苦労人で、個人としては嫌いなタイプではないが、『中立論』は理想に走り過ぎていた。

最大の欠点は、「非武装の日本にどこか敵が攻めて来たらどうする」という点にある。

その時は、国連軍に守ってもらう、というのが、苦し紛れの回答であった。日本人で組織されている自衛隊は信用できないが、アメリカを主体とする外国人の軍隊なら信用できるという。

佐世保はかつての帝国海軍の一大軍港。いまは米軍の空母が出入りする。そんな中で石橋は何をどう感じていたのだろうか。

そう言えば、社会党は現在の社民党に至るまで、日本国憲法を守る「護憲政党」だと言っている。しかし、社会党、社民党議員や社民党政審会長の発言、著作では、「憲法一条などは変更しなければ」と言っている。彼らも「改憲派」ではないのか。

年金制度改革を行なう上で、絶対にやって欲しいことがある。

それは、審議をする議員、答申を出す諮問委員会のメンバーのすべてを、四十歳以下にするというものである。全員が全員、とは言わないが、老齢議員たちの思惑は見え透いている。

（自分たちが関係なくなるまでもてばいい。今の受給年齢、受給金額を変えずにギリギリまでやって、あとは野となれ山となれ。サッカー見てバカ騒ぎしている頭の悪そうな若者がどうなろうと、知ったことか）。

ここまで考えなくても、自分が在職中にはイヤなこと、嫌われることをしたくない、というのは他の職業でも同じことである。

しかし、それでいいのか。

戦前の日本が陸軍の中堅佐官クラスに動かされていた時、指導的立場にあった将官の一人でも、

「貴様らッ、いい加減にせいっ」

と言っていれば事態は変わった。

部下から嫌われたくない腑抜け将官が、日本をダメにした。

「このままではダメだ。年金でつくった旅館やホテルなどの統廃合を行い、民間に売却できるものは売って、まず贅肉をおとし、こういう状況にした世代も、年金が受け取れないかもしれない若者同様に痛みを受けようではないか」

と、勇気を持って言う政治家はいないのか。

それにしも、公的資金で作られた宿、あれは一体何なのだ。

安くていい、というのは当たり前だ。建設費など、普通民間でやれば借金をしょいこまねばいけないものを、年金などからピンハネして作ったのだから。

これを民業圧迫と言わずして何と言うのか。

しかも作った理由が不純である。

けっきょく、役人の天下り先ではないか。

高速道路の料金所に、奇妙なゲートが出来た。

その名を「ＥＴＣ」。

あらかじめ自動車に機械をとりつければ、ほとんど止まらずに料金所を通過できる。お金はカード払いと一緒。

ちょっと待てよ。

たしか、高速道路の料金というのは、二〇年、あるいは三〇年たって元がとれたらタダになるはずではなかったのか。それが変てこりんなゲートをつくって、「これで渋滞緩和になる」など、噴飯物だ。

聞けば、車にとりつける機械も数万円で自腹だそうな。

さらにさらに。

汚職議員のごり押しでつくった、熊が歩くための高速道路の赤字補てんに、まともに自動車が走れない設計ミスだらけ、渋滞だらけの首都高速や、あるいは東名高速の料金値上げで対応するという。国民をバカにするのもいい加減にしろ、と言いたい。

日本はいま、経済の活性化をしなくてはいけないのではないか？。ならばどうして経済の動脈である流通の通り道が、熊道路のために値上げの憂き目を見なければいけないのか。

これをもし国民が、政治の貧困だと声を上げないのなら、それは仕方がない。たぶん日本経済は潰れて、首都高速も空いてくるだろう。そうなればＥＴＣも用はないか。

賄賂の形態はどう変わってきたのか。

結論から言うと、明治時代の「単発型」から、現代は「恒常型」「連続型」になった。

明治の政治家も、山県有朋や井上馨をはじめとして、賄賂を積極的に受け取った人が結構いた。旧・山県邸の椿山荘などに行くと、その片鱗が伺える。ためしに鹿児島の旧・西郷邸も見に行った。ああ、西南戦争で西郷が勝っていれば、と思う人は多いのではないか。

明治の賄賂は連続性が小さかった。

例えば、民間に何か施設を払い下げるについて、要路に金をまく。しかしそれは払い下げをしてもらう時だけで、その後もずっと金銭を渡し続けるようなムダ金を使う商人は少なかった。

選挙が普通選挙になり、選挙という登竜門を通らねば国家指導者になれないとなると、事情は変わる。選挙に金がかかることを前提に、役所に口利きをした見返りとして金を受け取るということが始まる。

ただし、戦前までの議員は普通選挙を行なわない貴族院議員でなくても、つまり衆議院議員でもずいぶん金持ちがいて、賄賂など受け取らなくても、天下国家を論じて議員になれる連中がゴロゴロいた。

昭和十二年。政友会の浜田国松議員が国会で、一種の反軍演説を行なった。陸軍大臣の寺内寿一は激怒して反撃したが、それに対して浜田は、もし自分の言っていることに間違いがあるのなら自分は腹を斬る、と言い、続けて、

「しかし、もしそうでなければ、君（寺内）、割腹して謝せよ」

と言って、寺内を追い詰めた。有名な「腹切り問答」である。

この勇気ある発言をした浜田国松議員は、三重県の大地主である。こういう人は金があるから、妙な話にも乗らず、汚い金も受け取らなかった。ちなみに浜田は政界

では常に犬養毅と行動を共にしたが、金に対して潔癖症だった犬養の下に浜田が来たのは、偶然ではあるまい。

さて、戦後になってもしばらくは賄賂の形態に変化はない。典型的な事件は大野伴睦のところで触れた「昭和電工疑獄事件」。

国の復興資金を優先的に融資してもらうため、昭和電工の社長が政治家に金をばらまいたというものである。後のロッキード事件は、民間航空機導入の際、田中角栄が口利きをしたというもので、これも旧来型の贈収賄である（ロッキード事件は不自然な点が多く、田中の犯罪と言い切れないというのが私の見方である）。

では、その形態が変化したのはいつ、どのような形であったのか。

A代議士が、証券会社から情報を得て、確実に儲かる株を取得していたという事件が数年前に起きた。損失補てんも受けていたようだ。

リクルート事件も株を巡る贈収賄事件だったが、あれは未公開株を持たせて、公開になったら売って儲けて下さいというもので、いわゆる「単発型」である。

が、A代議士の事件は、恒常的に証券会社、もしくは企業が情報を提供し、恒常的に金を生み出していた、という点で真新しいものであった。

つまり、第一に取引されたのは現金ではなく「情報」であったということ。

第二に、恒常的に行なわれていたということ。

これは、今までの贈収賄がある事柄のみに限定されて発揮されるのとは異なり、常にある企業や団体によって議員が「飼われて」いる状態を示す。

株情報の事前漏洩は「インサイダー取引」として違法であり、また証券会社が客の損害をかぶることも商法に抵触することから、最近ではさらに贈収賄が巧妙化している。

たとえば。

今度どこそこの原野で大規模な開発が行なわれる、という事前情報を役人が知ったとする。役人は、普段世話になっている議員にこれを教える。教わった議員はそれを後援会に属している不動産会社に教える。不動産会社はその原野を買いあさる。

国が開発のためその原野を買いに来る。不動産屋は売り渋り、高値まで粘って売る。

さて、従来の贈収賄は、情報を議員が漏らした段階で不動産屋が議員に金を贈っていた。しかし最近はこれが変わってきたのである。

後援会に属している不動産会社は、議員に所定の手続きを踏んで政治献金をする。それも、絶対目立つような多額の献金はしない。そのかわり、議員が何もしてくれなくても、ずっと後援会費、少額の政治献金、パーティー券の購入は続ける。

つまり、金は単発にドカンと来るのではなく、年がら年中、「何の見返りも期待しません」という顔をして行なわれるのである。議員がアウトプットするのは情報であり、インプットされる金は「政治資金規正法」に則ったキレイな金になる、ということ。

もちろん、何かの見返りとして献金していれば、どんなに正当な手続きをとっていても違法だが、過去十年間、まったく献金額が変わらず、情報のやりとりが成された後もその金額に変更がないとなると、あとは検察の腕である。

公共事業を見直すとなって、なぜあんなに大騒ぎをするのか。勘繰りたくはないが、恒常的収賄システムの中にいる議員にとって、出した情報を修正しなければならないということは、いわば贈賄側に対する背信行為である。

「きっと実行させますから、どうか献金は続けて下さい」と頼んで、なんとか公共事業獲得を目指す。もっと違う面で、公約を守ってもらいたいものである。

田中真紀子の話については、随分取材が行なわれて様々な話が出されている。一応目を通して、まだ世間に出ていない話を一つ。

代議士の秘書をしている友人から直接聞いたのだが、通常、議員秘書が議員の失職以外でクビになると、決して他の議員はその秘書を雇用しない。

ヤクザの世界の「破門」と同じ意味にとるようである。（ヤクザの世界では、破門になると他の組では絶対に雇わない）。

しかし、田中真紀子事務所をクビになった秘書は、他の議員に雇われるケースが多いという。

辞めさせられた理由があまりにも理不尽だからだそうな。

最後に田中真紀子の話では気分が悪いので、政治家のちょっといい話で締めくくる。

明治の新政府になって、ある日西郷隆盛が太政官府から退庁しようとした。履物を探したが、たまたま下僕がおらず、履物も見つからない。そこで西郷は足袋のまま退出した。

と、にわかに驟雨が降り出した。が、西郷はかまわず、雨に濡れるにまかせて門を出ようとした。

ずぶ濡れの大男が、履物無しで出てきたので門衛が怪しんだ。

西郷は事情を説明したが、門衛は納得しない。

そこへ岩倉具視が通りかかり、ずぶ濡れの西郷を見て

驚き、門衛をとがめた。門衛はただ恐縮して平謝りするばかりであったが、

「いや、職務に忠実でよかごあす」

と言って、逆に門衛をほめたという。

さて、舞台は昭和三十年代後半のある日。

内幸町の民主社会党（後の民社党）本部に、一人の品のいい老人がやってきた。

とことこと中に入ろうとした老人を受付嬢が引き止めた。

「あの、恐れ入りますが、どちら様ですか？」

老人は向き直って、

「西尾です」

と言う。

受付嬢は要領を得ず、

「どちらの西尾様でしょうか？」

と再度問うた。老人、重なる質問に怒りもせず、

「委員長の西尾です」

と言う。

受付嬢、さらに（どちらの委員長・・・）と問いかけようとして、ハッと気づいた。

民主社会党委員長、西尾末広である。

たまたま、最近採用された受付嬢で、新聞やテレビ以外で委員長の顔は見たことが無かった。テレビでの様子と実物は雰囲気が違う。

西尾は一切とがめず、「なかなか物腰の柔らかな質問の仕方だったね」と、受付嬢をほめたという。

嗚呼、人物の余裕、器の差。

秘書に指輪を買わせに行った議員よ、彼らの爪の垢を煎じて呑むべし。否、それでは爪の垢が可哀相か。

おわり

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）

春季号……二月一日……十二月三十一日

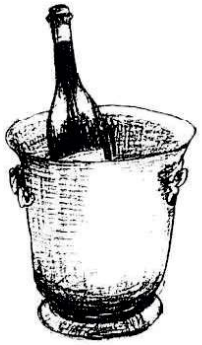
夏季号……五月一日……三月三十一日

秋季号……八月一日……六月　三十日

冬季号……十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

誤解から始まる



新井宏

今度のドラマもまたいつものように誤解から始まった。

奈良に似通う新羅千年の王都慶州は四方を山に囲まれた小さな盆地にある。どこを掘っても遺蹟が出てくるのも奈良と同じで、そのため高層の建物が禁止され、ちょっと近代化に取り残された趣きがあるところだ。

その中央部の南側に位置する半月城は東西千メートル程に三日月状に拡がった台地で、四周に垓字（堀）を廻らせ、内部に王宮があったと伝えられている。慶州を散策するときには、ここに立ち寄ってから住いの晋州に戻るのを習慣としていた。

その日も朝から佛国寺と石屈庵を歩きまわり、足裏にはまめが出来始めていたが、散策の仕上げのつもりで、慶州国立博物館の側から道のないところを半月城によじ登った。半月城の外周部は二重、三重、四重の木立になっているが、内部は芝の広場になっていて、初夏の陽射しが照りつけていた。日陰を求めてちょっと歩き難いが木立の中の瓦礫石を伝い歩いている内に突然ひらめいた。

たしか尹武炳の論文にここから見下ろす南北路のあたりに新羅王京の朱雀大路があり、その幅が百二十メートルだと報告されていたはずだと。それなら大変なことになる。三十年来の私の学説が『三国史記』の古文書で検証されることになる。

……今頃こんなところをのんびり散歩している場合か……すぐに資料に当って見なければ……でも資料の多くは日本に置いてある……それなら金海空港に直行しようか……いやもう今日の飛行便はない……韓国の大學の図書館にだって資料があるはずだ……。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通す

る古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。研究論文も多数書き、その結果を研究書として出版もしている。その結果、一部の学者には積極的に認められ、韓国ではその本の海賊版が出ているほどであるが、世の中の常で従来学説とぶつかるところもあるため、無視し続けている学者も多い。それは、私の学説が主として考古学的な遺構とか遺物などの間接的な状況証拠に依存していて、古文献の裏づけなど直接的な証拠に乏しいためでもある。

……決定的な証拠がない限り、従来学説に忠実にしていれば間違いはない……第一いままでに従来学説に則って多くの論文を書いてしまっている……アマチュアの学説にうっかり乗っかって笑いものになったら大変だ……。そんな蔭の声が聞えて来るようであった。

だから、私の学説が『三国史記』の記事で裏付けられれば、仮説が定説になる。はやる気持を抑えきれない。かくして、今度のドラマも突然のひらめきで始まった。

しかしそれが誤解であったことが間もなく判明する。美しい誤解はいつも醜い現実によって覆される。

突然のひらめきとはこういう話しであった

慶州には昔から方格地割が残っていて、この方格の単位が約百六十メートルだとする説が古くからあったが、近年になって考古学的な調査が進むにつれてますます確実になってきた。その方格が百六十メートルと言う事実と朱雀大路が百二十メートルであることを組み合わせると『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千一十七歩、三十五里、六部」という記事がうまく説明できるのである。

すなわち「王都長三千七十五歩」の記載は王京が百歩単位の方格に区切られ、中央に七十五歩の朱雀大路を持っていたことを意味しているのではないか。それならば、百歩が百六十メートルで、七十五歩が百二十メートルに対応し、一歩は百六十センチ、一尺は二十六・七センチと計算される。それは、遺構から求めた古韓尺そのものの長さに他ならぬではないか。……もう間違いない……。

はやる気持で次の文章を見れば、「廣三千一十七歩」とある。この十七歩すなわち百尺は古韓尺で計算すれば二十六・七メートルで、これも今までに発掘された古代道路幅の十三・四メートルのちょうど二路分である。ますます確実だ。高揚する気持を抑えきれない。

しかしこの美しい誤解は成立たなかった。百二十メートルの朱雀大路が存在していたとする尹武炳の学説が、その後の発掘調査で否定されていたからである。それに良く見れば、「長三千七十五歩」とは王京の長さを南北

に測った時のことで、東西に走る朱雀大路がその長さに含まれるはずがないではないか。その上、私の見た『三国史記』にミスプリントがあり、「広三千一十七歩」は「広三千一十八歩」の誤りであった。

単に夢から醒めただけなのに、もう前の仕掛りの研究に戻ろうとする気分になれない。

……それにしても良い線を行っていたのに……発掘調査の理解が間違えているのではないか……長を幅の意味で使った例だって探してみればどこかにあるのではないか……。失ったものが大きかっただけにいつまでたっても夢から立ち去りがたく、あれこれと仮説を再構成してみるがうまく行かない。

しかし私には確信に似たものがあった。かってもそんな誤解から始まって深い失意を味わいながら、もっともっと厚みのある着想に至ったことが何回も何回もあったではないか。平坦な道で得た着想には深みがないが、挫折の後に得た着想には何人も到達しえない豊かさがあるではないか。新井君、諦めるな。

そして間もなく本当にもっと素晴らしい夢を見ることになる。美しい誤解が醜い現実に覆された挫折の後に、想像もしていなかったほどの広々とした世界が拡がっていたのである。

心がふたたび高揚するが、いまは伝える言葉を知らない。この感動を伝えるには、ただただ自己の研究遍歴を語るしかあるまい。

ものさしの研究というニッチな世界に目を向けるきっかけとなったのは、森浩一の岩波新書『古墳の話』を読んだ昭和五十年頃のことである。歴史や考古学の本を読んでは、自分勝手な意見を楽しんでいた頃だったので、そこに出ている古墳の大きさとものさしの関係に釘付けとなってしまった。古墳の大きさを測ると中国の晋尺（二十四センチ程度）で完尺（端数のない尺数）を得ると言うのである。

そして古墳の大きさを書いた一覧表を眺めている内に誤解が始まった。数字を見る限り、晋尺よりももっときれいに当てはまる尺度があるではないか。なぜ著者はそんな簡単なことに気付かぬのだろう。私ならもっと合理的な方法で最も良く当てはまる尺度を求める方法を知っている。それは統計学とそれに基くコンピューター計算ではないか。私の出番がやってきたのではないか……。折から、コンピューターが一般企業にも普及しはじめていた。

しかし、着想自体は今考えても優れていて誤解とばかりは言えなかったが、古墳の大きさが規則正しく出来ていると思ったのがそもそも間違いのもとであった。第一、文献によって古墳の大きさがかなり違うし、どこを起点

に測った数値かもわからない。無数にある古墳のどれを対象にすべきかも大きな問題であった。数学的な解析方法は開発できたが、肝心の古墳のデータはとても明解に尺度を語るにはほど遠かった。いくら試行錯誤して解析して見ても満足行く結果は得られない。美しい誤解が醜い現実によって覆されてしまった。

折から専門の学者を含めて、古墳の設計や尺度について多くの学説が出され始めていた。しかし、どのアプローチを見ても主観的、恣意的に過ぎていて納得の行くものではない。私も一日も早く自説を発表したいと思いながらも、すっかり行き詰まってしまった。ただただ、いつの日にかコンピューターを使った解析方法が脚光をあびることを信じて、余暇を見つけては全国の古墳の計測図面を集め続けていた。

しかし四十歳代のサラリーマンが自分だけの時間を持ち続けることは難しく、いつのまにか情熱も醒めてしまった。

それからちょうど十年近くたった昭和五十八年のことであった。仕事上で責任を取る形で選手交代する時期がやって来た。研究部門を担当することになったのである。左遷の意味が込められていた。

しかし、この職場が私の人生に幸運を呼び込こむきっかけとなった。美しい誤解が醜い現実に覆され、そしてもっと大きな夢を育む。そんな研究の世界がよほど体質にあっていたらしい。ヒットが出始めた。

そして仕事上で博士号を必要とするというので、取り組んでいた研究で、全く期待もしていなかったような理論を編み出すことに成功した。神仏を信じない私が神仏の加護を感じた瞬間であった。

仕事が再び順調にまわりはじめ、精神的に多少の余裕が持てるようになり平成と年号が変わる頃から、また尺度の研究を再開しようという気持が高まった。

ひとつの突破口となったのが、古墳ばかりでなく、古代宮殿や古代寺院にも目を向けることであった。そこで出会ったのが、かの有名な「法隆寺再建・非再建論争」である。

わが国の歴史論争史上、最もよく知られているのは「邪馬台国論争」といってよいだろう。専門の学者の間では、大和説が有利であるが、アマチュアには北九州説が多く、いまだ両説が拮抗していて、考古学的な新発見がある度に新聞紙上を賑わしている。この状況はこれからも当分続くであろう。しかし日本の歴史論争史上もっと有名だったのが「法隆寺再建・非再建論争」である。

実は、この大論争も一部の学者の美しい誤解が始まりであった。『日本書紀』には天智九年（六七〇）に「法隆寺が一屋あますことなく焼失」と書いてあるにもかかわらず、建築様式の研究者の関野貞が明治三十八年これを推古朝すなわち飛鳥時代の建築であるとして「非再建論」を唱えたのである。それは様式論からすれば尤もな主張であった。どう見ても唐の文化が大量に流入した白鳳時代以降にこのような古風な建物が建てられるはずが無かったのである。

この関野貞の「非再建説」は折からの日露戦争で高揚したナショナリズム的な世論に熱烈に受け入れられた。法隆寺が例え再建であったとしても世界で最も古い木造建築であることには変わりがないが、国民感情としてはもっともっと古くなければならなかった。聖徳太子の創建した寺そのものでなければならなかった。

これを強力に支えたのが美術史家の平子鐸嶺であった。古籍に通じるこの新進気鋭の平子は様式論とともに史学の面からも「非再建論」を次々に立証した。あたかも「非再建論」が完全に歴史学界に受け入れられたかの様相を呈した。

これにびっくりしたのが文献史家達であった。すくなくとも大化改新以降の書紀の記述には信を置く彼らにとって、書紀の書かれるわずか六十年前の出来事が間違いであって良いはずがない。それまで一度も法隆寺を訪れたこともなかった若き日の喜田貞吉が「非再建論」に戸惑う恩師小杉温邨に代わってするどい反論の筆をとる。これが大論争の始まりであった。

学者ばかりでなく一般人を巻き込むような大論争の条件は、テーマが判りやすいことである。この誰にでも判る「燃えたか燃えなかったか」と言うテーマは、専門学者ばかりでなく、多くの歴史ファンを惹き付け、以降三十年以上に渡って延々と繰り広げられることになった。

しかしこの問題は昭和十四年に実施された若草伽藍の発掘調査により、突然幕が下ろされてしまう。若草伽藍の一部が、法隆寺西院伽藍の一部に重なっており、「非再建説」が成り立たないことが判明したからである。美しい誤解は醜い現実によって覆されてしまった。

ところでこの論争において、非再建論者が一貫して主張したのは、法隆寺が高麗尺により造られているという点であった。それは、法隆寺の建物を詳細に測ればすぐに判ることであるが、この建物が七世紀中頃以降の公式尺すなわち唐尺（二十九・七センチ程度）で作られたとは到底信じられなかったからである。ここに高麗尺が華々しく登場した。

もっともその頃、高麗尺と言う尺度の証拠があったわけではない。平安時代の書『令集解』や『政事要略』に、それらしき記事があり、解釈によっては大化以前に唐尺より二割長いものさしが存在していたと考えられること、それが中国の東魏尺に近いことが最大の根拠であった。そして高麗尺を、法隆寺の建物に当てはめて見たと

ころ唐尺よりもはるかに良く合ったのである。

たしかに有力な論拠であった。しかし法隆寺が高麗尺すなわち東魏尺で作られたと言う説も今となってみると美しい誤解であった。

それは東魏尺が唐尺の二割増しではなく、唐尺と同じ程度の三十センチであることが今の中国では定説となったからである。すなわち『隋書律歴志』に書いてある東魏尺が晋尺の一・五〇〇八倍という記事は誤りで『宋史律歴志』にある一・三〇〇八倍が正しいことが検証されてしまったのである。

しかし一度日本で信認を得た東魏尺は、日本や韓国の学者たちを惹きつけ、未だ東魏尺に基く考察が相次いで行われている。藤村新一による旧石器捏造に乗って大合唱をしていた考古学界と同じ構造で、皆で渡れば恐くない。

法隆寺建築に高麗尺を当てはめて見ると多くの寸法が良く合うことは確かであった。しかし全てがうまく合っている訳でもなかった。高麗尺を知らない者が、法隆寺を詳細に調べれば、百人中百人がもっと良く合う尺度を示すはずである。それが古韓尺の長さである。古韓尺なら建物細部にいたるまで実に良く一致するのである。しかし古韓尺などと言う記録はどこにも無いし、法隆寺にだけうまく適合してもそのことだけでは誰も認めるはずがなかった。

それからは夢中になって古代寺院の寸法を渉猟した。そして法隆寺に続いて法起寺も法輪寺も古韓尺に良く合っていることを知った。しかしまだまだ不十分だ。そして発掘調査に目を向けると日本最初の寺院飛鳥寺遺蹟も古韓尺に良く合っている。その他の飛鳥・白鳳寺院遺蹟も正確な寸法を得ることができなったけれど、古韓尺なら矛盾がない。ますます確信が深まる。

しかし、尺度問題の恐いところは「そう思って見るとそう思える」ところにあった。恣意的な解釈なら誰にでもできる。誰でも納得できる客観的な判定基準でなければ、いわば水掛け論に終わってしまう。これを如何にして乗り越えるか。そして想い至ったのが古墳の尺度を論じる時に開発した統計学利用によるコンピューター解析法であった。しかもかってはコンピューターを個人で使うことなどなかなか望めなかったが、パソコンが簡単に使える時代が始まっていた。

例え不正確であっても数多くのデータを解析すれば真の姿が浮かび上がってくる。それが統計学の教えるところである。法隆寺のように品質の良い測定値はこれからはいくら望んでも簡単に手に入る訳ではない。しかし、不正確で良ければいくらでもデータはあるではないか。発掘調査報告書を求めて国会図書館通いが始まった。そして当然の帰趨として朝鮮半島にも目が行った。

時が熟していた。この頃から韓国では古代寺院の学術調査がいわば国の威信をかけた形で行われ始めていた。その中でも慶州の皇龍寺跡の調査は絶好な資料を提供してくれた。東大寺を凌ぐこの巨大寺院跡には、礎石を残した九重塔、金堂、講堂や廻廊が残っていたからである。そして古墳や宮殿、寺院の膨大なデータが手元に集まった。さあどうやって料理するか。

とにかくデータをコンピューターで機械的に解析し、その結果を時代・地域別に並べて見ることにした。そして驚いた。期待していた以上に、古韓尺が色濃く浮かび上がってきたのである。

いつのまにか五十路に入り、相変わらず仕事と格闘する日々であった。時間の余裕があるはずがなかった。しかしサラリーマン生活にも波があり、ちょっとした失意を味合う時に、あたかも代償を求めるかのように夢中になって論文を書き始めた。心の中では、博士論文の時の「柳の下の泥鰌」を再び狙っていたのかも知れない。書き出しは順調であった。

しかしそんな時に限って、仕事が順調に回りはじめ、時間が足りなくなる。朝早く起きて書き進めるしかなかった。もう勢いは止められない。それが例え美しい誤解に基いたものであっても、もう後ろ戻りはできなかった。そして三篇の論文を書き終えて、それをもとにして『まぼろしの古代尺』という研究書を脱稿したのが、平成四年のことである。

もともと本として出版することが前提であった。地味な研究誌にアマチュアの論文を発表しても専門家からは無視されることぐらい良く承知していた。だから研究成果は本として紹介しなければならなかった。それも歴史や考古学の世界で権威ある出版社でなければならなかった。しかしそんな願望を簡単に受け入れてくれる出版社があるはずがないことも良く知っていた。

失うもののない者の強さであった。とにかく迷わず第一希望の出版社からアタックすることにした。吉川弘文館である。誰の紹介もなく草稿を送ってみた。

人生にはつきがある。いままでも随分ついていた人生であった。しかしこの時ほどつきを感じたことはなかった。編集者がかって高麗尺に疑問をもった経験のある方で、とにかく出版を検討してくれるという。吉川弘文館と言えば、専門の学者でさえそこで本を出せば勲章になる出版社であった。定説にもなっていないアマチュアの本など余程のことがなければ引き受けるはずがなかった。それが本にしてくれると言う。

ただし出版社の知恵もあって本のタイトルは研究書としては異例の『まぼろしの古代尺』となっていて、逃げの姿勢があったが、その代わり異例の三千部を初刷して

くれた。有名な歴史考古学者坂詰秀一先生が新聞書評でも取り上げてくれた。神仏の加護を再び感じた。

出版が終わってしまえば一段落と思っていたのが大間違いであった。背伸びをし過ぎてしまった。いたるところに美しい誤解が満ち満ちていた。そのことにはまず自分で気がつき次に読者が教えてくれた。自分ではこれしかないと思った論理も冷静になれば、別の見方もあった。使ったデータがミスプリントだった場合もあった。晴れがましい本を開くのが恐いと思う日もやって来た。しかし基本的な間違いではない。何とかしてもっと自論を強化したい。世の中にはそんな資料が必ずあるはずだ。

またデータとの格闘がはじまった。突破口があるはずだ。それを求めて毎朝五時には起きだして机に向う日々が続いた。段々深みにはまり、朝鮮半島の中世から近世にかけての計量史や土地制度史の研究、それに中国の土地制度研究史にまで手をひろげるようになった。

その結果、生まれたのが、中国・朝鮮半島・日本にまたがる壮大な土地制度史の構想であった。主観的には個々の構想を繋ぎ合わせれば、自然に出来上がる構想であるが、他人に説明するには肝心の古韓尺がもっと直接的に検証されなければならないし、その古韓尺による土地制度の証拠が見つからなければならない。そのミッシングリンクをいかにして探すか。それはかならず朝鮮半島にあるはずだ。韓国に行きたい。

そんな姿を見ていた妻が言ってくれた。……早く会社を卒業して、韓国に行っていらっしゃい……。この一言が決定的であった。

私たちには武という知的障害を背負った子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れるようになれる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰って働いている。ゆっくりではあるが確実に一歩づつ進んでいる。その進歩を見る度に、私たちふたりは喜び合ってきた。夫婦の気持ちがひとつになるのはいつも武のことであった。だから、その子を置いて韓国へ行くことなど願望にすぎなかった。しかし武のためにも良いかも知れないと妻は言ってくれる。嬉しかった。

そもそも韓国に行きたいと思ったのは、史遊会の外谷正之さんの影響である。外谷さんは定年で職場生活に区切りがつけると同時に韓国の大学院に陶芸の研究のため留学した方である。そう言う方法があったのかとても新鮮な思いをした。

アマチュアとして研究していると、アマチュアの良さ悪さが良く判ってくる。それと同時に何かと専門家をけなしながらも、専門家の本当の凄さも判ってくる。だから、自分の学説を本気で専門家に認めさせるにはよほど強固な証拠を見つけるか、または専門家集団の内側に入って同じ論理で発言して行くしかない。そのためには、日本でも韓国でもいいから大学院に入学するのは妙案である。……いやもっと妙案がある……大学の先生になってはどうか……もちろん、歴史や考古学の世界で、大學の先生になれるわけがない……あるとすれば金属工学の分野だが……。

たまたま博士論文の時に見出した理論は金属工学の分野ではちょっとした勲章となっていた。これに民間会社出身ということを逆手に取ってアプローチすればチャンスは十分にある。

願望は口に出してみるに限る。口にすることで道が開ける。そして親しい友達の前では会社を卒業したら韓国で大学の先生になるのだと公言するようになった。しかし何か具体的な話があったわけではなかった。

そうこうする内に、平成十一年には会社卒業が現実のものとなった。しかも非常勤顧問と言う願ってもない待遇をしてくれると言う。いよいよ古韓尺学説の完成を目指して動ける環境が整った。

ところが現実は皮肉であった。もうひとつの趣味の金属考古学の研究が目前に大きく拡がってきたのである。会社卒業までは職業としての金属を表に出した活動は無意識の内にひかえていたが、制約がとれた途端、蓄積があっただけに、いきなり一軍入りしてしまい、引くに引けなくなってしまった。それだけに成果も面白いほど上がった。古韓尺の研究に比べれば、何をやっても論文に書ける気分であった。

そんなある日、韓国で講演をして欲しいという話がふたつ飛び込んできた。そのひとつが外谷正之さんを経由してであった。チャンス到来である。講師の略歴を送るようにとの連絡に、「待ってました」とばかりに送ったのが、私の特製履歴書である。

韓国語で書いたその履歴書には、実に巧みに自己宣伝を織り込んでおいた。韓国の歴史や考古学にあこがれを持つ日本人としても、金属工学の専門学者としても、高度成長期を生きぬいた企業人としても、どの点から見ても関心を持ってもらえるように書いた履歴書であった。あわせ技で一本というのがあるが、てらいもなくそれを狙ったものであった。

それが慶尚大学の日本文化研究所名誉教授姜東湖先生の目に留まり、実行力抜群でオーバーランなど全く気にしない金属工学科の許甫寧教授に手渡されたのが幸運であった。そして平成十三年の初めから韓国での生活が始まった。

教授と言う名称は予想通り私の研究活動に大変好都合

であった。名刺には慶尚大学教授とだけ書いて、工学部とは書かない。相手が歴史か考古学の先生と誤解することは一向に構わない。それをひそかに期待しているのだから。

それに私の名前は韓国の歴史や考古学の関係者の間では多少知られていた。いくつかの講演会を頼まれるたびに、知人が加速度的に増えていった。その時にも慶尚大學教授の名前は効果的であった。韓国は日本よりも肩書の世界であり、日本よりも教授の地位が高かった。

韓国では早速古韓尺の研究を始めるつもりであった。しかし初めは、金属考古学分野を優先した。書くべきテーマがたまっていたし、折から韓国の慶州で開かれる第五回の金属考古学の世界会議にも論文を二件提出する予定があり、金属工学科の教授という立場もあったからである。それも一ヶ月ほど前に終わった。その慶州がまた私の古韓尺研究に火をつけることになった。

『三国史記』や『三国遺事』の記載が古韓尺の文献的な証拠になるという確信には変わりがなかったが、尹武炳の朱雀大路説が否定されていたのは痛手であった。なんとか敗者復活の道はないかを模索し続けた。そして思い付いた。

『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千一十八歩」に出てくる七十五歩と十八歩は共に九の倍数になっているではないか。すなわち七十五歩は四百五十尺で五十尺の九倍、十八歩は二歩の九倍であり、それぞれが九本の道路幅を意味しているのではないか。それなら王京三千歩を一里（三百歩）ずつに区切った時に必要な九本の道路と一致する。古韓尺の五十尺は発掘遺構の大路十三・四メートルと完全に一致するし、二歩はその四分の一で小路の単位だ。

そう気がついた途端、全てが見えて来た。『三国遺事』にある「京中 三百六十坊 五十五里」の意味は京が三百六十坊と五十五里で成り立っているということだ。計量史を知らない学者は里を距離のことだと思っているから、さっぱり判らないだろうが、里が一里四方の面積を意味するのは常識であり、これは町が距離の単位であると同時に一町四方の面積を意味したのと同じことなのである。

そうであれば王京は方三千歩すなわち方十里であるから面積が百里である。だから王京の総面積百里の内五十五里が村落であり、残りの四十五里の内に三百六十坊が出来ていたことになる。後は簡単に、里の中に方百歩の坊が九つあったことが判る。すなわち三百六十坊は四十里分である。この四十里と五十五里を合わせると九十五里で残りの五里は王宮分に違いない。

そこまでの考察は一本道であった。この結果一坊すなわち百歩が百六十メートルとなり、その尺度は古韓尺と同じ二十六・七センチとの結論がでる。……うまくいった……もうこれで十分だ……。

……でも待てよ、それなら里と坊は王京のどの位置を占めていたのだろうか……確か『梁書新羅傳』には王京の中心部に坊の部分があると書いてあったはずだ……それに『三国史記』には『三国遺事』とは異なって五十五里ではなく三十五里と書いていたではないか……。

これらの疑問が結局最終的に王京復元図に左右対称の美しい配置図をもたらすことになる。そのプロセスを紹介したいが煩わしすぎる。……とにかく美しい復元図だ……その上これらの復元図が従来の学者たちが道路遺構の観察や発掘調査から作っていた復元図に完全に一致するではないか……。また神仏の加護があった。

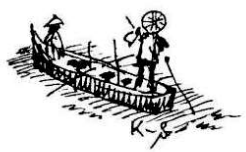
かくして古韓尺が文献的な証拠を得ると同時に中国・朝鮮半島・日本を結ぶ壮大な土地制度変遷史の神秘のミッシングリンクも見つかった。そして夢中になって論文を書き始めた。

……論文を書き上げない内に飛行機が落ちては絶対に困る……出来上がったらどこの学会誌に載せようか……急ぎたいが安売りもしたくない……それに中国・朝鮮半島・日本の壮大な土地制度変遷史も書かねばならない……土地制度変遷史は計量史ほどニッチな世界ではない……歴史学の根幹部分だ……大満足だ……大満足だ……妻に感謝する……。

かくしてまた美しい誤解が始まっている。



城ケ島異聞（二）



島津隆子

一方的な離縁宣告

天候の異変で海の景色が様相を一変するように、この夫婦にも非情な運命が襲いかかろうとしていた。

その年の暮、つまり永正七年（一五一〇）十二月のある夜、新井城内の大広間に三浦氏諸城の主だった武将が参集した。この場に同席を求められた小桜姫は、嫡男の正室ゆえだろうと理解したのだが、なぜかこの夜にかぎり、異様な雰囲気を感じて胸騒ぎがした。

「伊豆韮山の妖怪が、いよいよ動き出したようじゃ」

「われらの後ろ盾である両上杉氏にも魔手の毒が廻った気配にござる」

武将たちが口々にもたらす諜報には緊迫感が漂う。

山内上杉氏が妖怪北条早雲の手玉に乗り、関東管領の座をめぐって内部分裂をしていた。三浦氏の主家筋に当る扇谷上杉氏もそれに巻き込まれて、両上杉の結束が乱れに乱れている。状況は関八州の制覇を目指す早雲にとって、またとない好機到来である。

その野望を早くから見抜いて、そうはさせまいと立ちはだかっていたのが、独り三浦氏であった。

両者の勢力圏図は、北条が伊豆一帯と地豪十四家が抑える西相模と、関東興国寺領であるのに対して、三浦は東相模と橘樹・久良岐・都築郡の武蔵三郡である。

いまや、勢力圏も大きく傾きかけた頼りない主君・上杉を戴く宿命を背負った三浦道寸は、暗い現実に怯むことなく覇気を漲らせて強い調子で言い切った。

「今にして早雲を叩き潰さねば、悔いを千載に残そうぞ。されば、岡崎城にてわし自らが陣頭に立つ」

そして、そこに控える小桜姫に目を留めると、言葉を

和らげて言った。

「わしも義意も共に城主ゆえ、城を枕に討死は覚悟の上じゃ。だが、その方は女ゆえ、別に身の振り方もござろう」

武将たちは話の内容について、すでに心当たりがあるのか、軽い肯きをみせ合う。

たとえどれほど状況が悪くなろうと、この新井城中に少しの動揺もないことがよくわかっているだけに、小桜姫には義父の言葉は不可解である。何が言いたいのだろうと、怪訝な表情を浮かべる小桜姫に道寸は言う。

「そなたの武術、器量、才覚、どれをとっても、死の道連れにするにはいかにも惜しい女人と、かねてより思っていたのじゃ」

「それでは……」

「小桜、勘がよいのぅ。この城にできすぎた正室を留め置くことは、無用なのじゃ」

いつでも死の覚悟ができている自分の真意を、どうしたら伝えることができるかと、混乱している小桜姫は道寸に尋ねる。

「変ではござりませぬか。剣は戦さのためにこそ役立つものにございましょう」

道寸はきわめて冷静に言った。

「並の男を凌駕する女人が戦さに加わることは、武門の誉れを尊ぶ者には恥なのじゃ。平時であれば女人にとって名誉なことも、非常時にあっては、むしろ邪魔なこともあるのじゃ」

「私には、何がなにやらわかりませぬ」

「美しすぎる女人が男を惑わすのと同じように、強すぎる女人もまた城兵の意気を殺ぐのじゃ」

留めを刺す義父の言葉に、小桜姫の眉根はひきつり、それでも懸命に言葉を探そうとする。だが、急遽岡崎へ帰城するために道寸はさっと座を立ってしまった。

つづいて武将たちも去った。最後尾の一人が大広間を出ていくと、それまで腕組みをしたまま、まるで傍観者のように黙然としていた義意が目を開いた。それは小桜姫がかつて見たことがないほど厳しい風貌であった。

「おぬしは、今夜からわしの妻ではござらぬ」

やはりきっぱりとした婚姻解消の宣言である。義父との問答の間、一言も発しなかった夫に対して、小桜姫の胸に敵意が湧いた。

「私は城のお女中のごとき、人形にすぎなかったとでも言われるのでございますか」

「わしが望んだのは、つくろわぬ生身の女らしい女だったのじゃ。おぬしと暮してみて、そのことがはじめてよくわかり申した」

小桜姫は想像だにしなかった成り行きに困憊し、のた打ち回っていた。

―これが八十五人力などと謳われる勇士の言葉なのだ

ろうか……。こんなふうに言われてみると、返す言葉はないようだ。たしかにこれまでの私の生き方は女らしいところは何ひとつなかっただろう。心はいつも剣のことで一杯だったのだから。それならなぜ、夫婦でいた間に言わなかったのか。やぶから棒に夫婦解消を告げられたとて、何をどう答えればよいのか。いや、答えたくもない。ただ、はっきりわかったことは、私が義意殿を慕うほどには、義意殿は私のことなど、露ほども考えていなかったということだ—

小桜姫は、自分が義意の相手として、路傍の石のような存在だったと思うと、屈辱的な気分に陥った。

—ならば、……誰が何と言おうと、私は義意さまの正室にございます。別れるなんて嫌じゃ、嫌じゃ……そんな女らしい台詞を並べればいいというのか。だが、口が裂けても私には、そんなことは言えない。私が去ったあと、城内の女たちは義意殿の品格ある武者ぶりに、ますます心を吸い寄せられてゆくにちがいない。しかし、今までの私には女同士の嫉妬の経験もなかったし、義意殿の前で、淋しげな風情や仕草など見せたくもない。しいて言うならば、女の髪の一本にも価しない、義意殿の見せかけの偉丈夫さに未練を残して、華美な化粧や衣装に身を包み、鬱々とした日常を送るなど、真っ平なことだ—

小桜姫は無理にでも自身に言い聞かせると、離縁の受け入れを心に決めた。

「おぬしはまだ十分幸せに再婚できる年齢じゃ。おぬしの父上にはわしから謝罪を伝えようぞ」

「いえ、この縁組はいわば私どもが勝手にとり決めたものにございます。双方の親にとれば無理に認めさせられたも同然な仕儀ゆえ、何も伝える必要はございませぬ。その上、別れる女に向かい、再婚云々などと、あなたさまもずいぶん差し出がましいことをおっしゃいますな」

怒りを含む小桜姫の言葉に、義意は悪かったというふうに、

「小桜、わしを憎むがよい」

と吐き出すようにいった。

「べつに、人など憎みたくもございませぬ」

「存分に恨んでもよいのじゃ」

「憎しみ、恨みをもつなど、それでは私が負けたことになりまする」

「何か、わしに望むことはないか」

唇を噛んで考える間をおいた小桜姫は、顔を上げてきっぱりと言った。

「郷里には帰らずに、私はこの地に留まりとうございます」

「それはそなたの自由じゃ。望みはそれだけと申すか」

小桜姫の無言の肯きをみると、

「では、今夜は遅いゆえ、城でやすむがよいぞ」

義意はほっとした表情にかえって言った。小桜姫は一

瞬だが、義意の双眸に暗い光が横切るのをみた。

明け方、従者一人に手荷物を担がせて城を出た小桜姫は、十二月の寒風に思わず襟をかき合わせながら、引き橋を渡るとき城の二の丸の方を振り返った。だがそれは、後ろ髪を引かれたためではない。眠れない短い夜、夜着の中で輾転と煩悶しながら、どうしても別離の理由が不可解に過ぎて、何か重大な秘密が隠されているという思いのためである。

小桜姫は三浦半島を出なかった。

身を寄せた親戚筋に当る伯楽寺家の長老に事の経緯を訊ねられたが、小桜姫の口調は重く、要領を得ないままに終わったので、長老にも本当のところはわからずじまいであったが、城主の元正室である大切な預かり女として受け入れることにしたのである。

「あの姫君は出家でもなさる気じゃろうか」

長老は家族や物見高い村人たちの問いに、さりげなく告げた。

「いや、あの姫は尼僧などになる気はなさそうじゃ。当分、わが家で面倒をみることにした」と。

小桜姫はここでも早朝から庭の空き地で、城にいるとき以上に、まるでものに憑かれたごとく剣の修練を日課とした。そして、その噂はたちまち半島中に聞こえた。おかげで伯楽寺家での小桜姫の存在は、夜盗などが押し入るのを未然に防ぐ、いわば女人の用心棒と化していた。だが、小桜姫はそんなことは歯牙にもかけず、剣のみに執念を燃やしつづけた。

醜く変えた貌

小田原城の北条早雲と岡崎城の三浦道寸は一発即応の形勢のまま年が明け、永正九年の八月を迎えた。

道寸は自ら三浦の出城に赴いた。それには母の遺恨を晴らすという意味があった。道寸の母は小田原城主大森氏頼の娘である。父の氏頼が没した後、早雲の甘言に乗った子の藤頼は箱根の鹿狩りに誘い出され、その隙にまんまと城を乗っ取られたのだ。早雲は以前にもこれとほぼ同じ手口を用いて、足利将軍家に繋がる堀越公方の伊豆韮山城をも奪っていた。

もっとも、早雲の小田原城乗っ取りの前年には、道寸も城盗りをやっているが、早雲とは事情がまるで違う。

新井城主の三浦時高には子が無かった。そこで扇谷上杉家の道寸を養子に迎えたわけだが、時高に子が生まれると道寸は疎まれつづけ、挙句、命まで危険にさらされるしまつであった。

道寸は母の郷里である小田原に逃れて出家する。道寸とはこの時の法号で、本名は義同といった。ともあれ、道寸を支持する三浦の家臣の数が圧倒的に多かったので、その輿望の下、新井城に夜襲をかけた道寸は、時高とそ

の実子を殺して城主になったのである。
まるで戦国の幕開けを告げるかのような両者の国盗り模様だが、もとは貧乏だったと噂されるほどの身から、単身、屈起した早雲と、生まれながらに名族を誇り、『古今集』の秘伝を諳んじ、和歌を好む風流人道寸とでは、乱世に賭ける覇気や姦計に雲泥の差があった。

同年八月十二日、突如、
「そろそろ機運も熟したようじゃな」
早雲は部下たちに向かってうそぶくと、戦備を整えつつある岡崎城に襲いかかった。
不意をつかれた形の道寸は、疾風のごとき早雲勢を前になす術もなく、鎌倉由比ヶ浜にある第二の拠点、住吉城に壊走したのである。
数日後の深夜—
数騎の武者に護られた道寸は新井城に入ると、数刻後、慌しく住吉城へ立ち去った。
別れ際、道寸は義意に励ましの声をかけた。
「住吉が陥るのももはや時間の問題じゃ。……ではよい な、後々のことはすべておぬしに任せる。無事に生き延びるがよい」
道寸が部屋を出るのと入れ違いに、覆面をした一人の大男が義意の前に進み出た。
身形が同じ二人は無言で頷き合い、男が覆面を取るとその顔は、お互いがお互いの鏡をみているように瓜二つであった。

さて、再会した小桜姫と義意のいる洞窟内に話を戻そう。
「その男があなたさまの影武者でございますか」
「そうじゃ」
義意が語り始めた話の内容は、炉で火を炊く夜の巣窟内にいっそう怪奇な趣を漂わせた。
「……はじめ鼻梁を軟木で打ち、しだいに硬木で、最後には石でくだいた。鼻からは血が迸った。息は鼻を通らずに、口で呼吸をするたびに胸部がはげしく震えた」
その時の苦しみが蘇るのか、義意の顔がゆがむ。小桜姫が問う。
「その刀傷もご自分でつけられたとでも」
「そうじゃ。手で喉元を絞め、一方の手に酒を滲ませた小刀をかざし、顳顬をはずして左右斜めに、錐でもむように顔面を切り裂いてゆくのじゃ。そして、血が吹き出る顔を何度も何度も酒樽に浸した。その後、油状の薬草を塗り、顔全体を晒布で何度巻き直しても、血は止めどなく白布を濡らして、どれほど厚く巻いても、溢れて止まらなかった。あまりの激痛に青虫さながらに身もだえ、寝床に転がると意識さえ失いかけたほどじゃ。
やがて、血が黒ずんで固まりはじめたが、顔の神経は

麻痺していた。そのうちに、鼻や頬の傷口をミミズでも這い回るような感触に、背筋がぞっとした。急いで鏡の前で晒しを解いて見ると、刀傷が化膿した頬や、膿汁の滴る砕けた鼻に、蛆が蠢いていた」
義意は思わず指で払い除けようとしたが、
「蛆は膿を舐めて傷を清浄にするものだ。蛆が湧けば、命は助かる」と、かつて聞いた医師の言葉を思い出し、しばらくは目を閉じて、身の毛が総立ちになるかのような不快さを必死で耐えたのだと義意の説明はつづいた。
「そうはいっても、やはり虫酸が走る不愉快さには耐えかねた。顔を仰向けにして、酒壺から酒を傷穴という傷穴へどくどくと流し込んだものじゃ」
それから約一ヶ月後、赤黒く光る皮膚が蘇り、凸凹の激しい痘痕のように盛り上がった固い肉塊が、貌一面を覆っていたと言うのである。
義意の一言一言に背筋は凍てつき、全身の神経が震えだすような感覚に襲われながら小桜姫は思った。
—どのような苦行僧や修行者でも、これほどの自虐には及ぶまい—
義意はなおも語り続ける。
「夢の中では昔日の面影のままに、あらゆる想念が躍動して駆け巡る。美しい女人を思へば、やはり若い命がうずき悶えるのじゃ。だが、醒めれば、泥のような半腐れの傷跡が貌中を埋め、衣服をまとった鬼が、鏡の中に写っているばかりじゃ。その貌へ、故意に自嘲の笑みを作っても、割れた口は裂けた頬に繋がって、ひきつっているばかりじゃ」
怪奇な心理状態を打ち明ける義意の言葉に、小桜姫は驚愕していた。
—この男は自らの人間らしい貌や、営みを拒絶した果てに、酸鼻な自虐の歓び、陰湿な陶酔、孤独な自慰に独り戯れているというのか—
無表情だがものすごい義意の形相から逃れるように、小桜姫は叫んだ。
「もうこれ以上、聞きたくはございませぬ」
「いや、話はこれからじゃ。それにはわけがござる……」
「どんなわけであれ、あまりにも惨たらしすぎます」
小桜姫は両耳を両の掌でふさぎ、目を閉じてしまった。
「そうするより止むを得なかったのじゃ。それはおぬしが戦の末路というものを知らぬからじゃ。捕われ、討死、自害、いずれにせよ、首級は晒しものにされ、屍骸は鳥に啄ばまれるか、腐るにまかされるのみじゃ。すべてはただの藁屑に過ぎぬ。それよりも、わしにはやり遂げねばならぬことがある。おぬしにはそれを手助けしてもらいたい。この秘密は、父上と、新井城の主だった武将と、わしの影武者以外、誰も知らないことじゃ」
そういいながら義意は燭台を持つと、「こちらへ参られよ」と先に立って行った。

洞窟の内部

洞窟の奥はなお暗く、狭い通路が枝分かれしていて迷路のようだ。

厚い板戸の扉を開けると、さらに厳重な鉄格子があり、その錠をはずした義意が「入れ」と手招きをする。

真っ暗闇に灯がぼうーっと広がると、板敷きの上に何十という大箱が積み重なっている。義意が燭台を近づけて蓋を取った。大箱は黒漆の櫃で、その幾つかには何百枚かの金貨・銀貨がつめられている。また、黄金の壺・青磁の小瓶・茶器の入った櫃もある。あるいは虎・鹿・熊・豹の毛皮、何十疋の鞍置物、絹糸・生糸等など。そして、黒塗蒔絵の文箱には三浦氏の重要文書など、無類の財宝が収納されている。

「鎌倉期の重鎮である三浦が滅亡の後、後三浦と称す盛時から八代目になる父・道寸まで、蓄えに蓄えたものじゃ。これらの財宝があるかぎり、たとえ道寸の三浦が滅びようとも、かならず新たな三浦が再興できるはずじゃ」

「あの新井城が陥るとでもおっしゃるのですか」

「わからぬ。だが、籠城が長引くことになれば……」

「でも、なぜ、あなたさまお一人でこの島に？」

どうしても納得のゆかない表情の小桜姫の問いに義意は、

「こんな小島に多くの兵士を隠しおくことは、かえって怪しまれよう。お伽話じみた一匹の鬼が棲息するほうが、人々の目を眩ますことができるというものじゃ。早雲もそんな噂を真に受けて、鬼退治に出向くほど幼稚ではあるまい。人間とは不思議なものよ。わしは己の貌を失ってから、己はもはやこの世になく、さらに特殊な力を得たと実感する。わしはこの小島で鬼の主と化して、三浦の遺産を護るのじゃ」

少しの気負いもなく、むしろ魂の静けさを保っているような義意の言葉である。

小桜姫は思わず共感をこめて言う。

「一人で八十五人の兵士に匹敵するあなたさまが、さらに私という援軍を得たといわれますのね」

「そうじゃ。やっとわかってもらえたらしいのぅ」

小桜姫は肯づきながら、その鬼面をはじめて畏敬する気持になった。

何という胆力、不敵さであろうか。これほどの鉄の意志を持つ男なら、三浦の家名はきっと死守できるにちがいないと思いながら、今まで地元に寄せられてきた、鬼に関する漁民たちからの嘆願が一笑に付され、長老たちが雇った浪人たちの死が不慮の事故として処理されていることも、小桜姫にはすべてが納得できた。

―庶民の間だけで囁かれている鬼の噂。これこそ安全な手段なのだ―

小桜姫は自身が対岸の世界から全く隔離され、謎に包まれてしまったことをはっきりと悟ったのである。

愛の再燃

多くの財宝が隠されている洞窟から、刀剣や弓矢の置かれている倉庫や、非常の際の縄梯子の隠し場所や、地上へ抜ける脱出路など、義意は詳細に説明した。小桜姫はその一々を絵図面でも見るように記憶に留めた。

これから二人の寝所となる洞窟は狭くて天井も低い。隅には年代物らしい長持ちが据えられ、その上に鏡や頭巾が無造作に置かれている。入り口に近いため、磯の香りに男の匂いが混じり合って、いかにも殺風景だ。

「もはやお互い、秘密にする何ものもない。わしは島へ来る前に、以後、女色を絶つと毘沙門天に誓った……だが」

「そのような約束を、破られてもよろしいのですか」

「二人だけの秘密の世界で、女盛りのおぬしを前にして、手をこまねいておるのも惜しくなった」

すると、女盛りと言われた小桜姫はその言葉に合わせるように言った。

「私も鬼殿の巻き添えになるのが、なぜか嬉しいような気持になっております」

燭台の光の中で羞恥心のなくなった小桜姫は、膝を義意の体に傾けた。解いた髪が妖しく波うって背に流れ、薄ものの衣装を透して、しどけない胸や腰の膨らみが、義意の弾力のある腕に引き寄せられる。

「もはや再会することもあるまいと思っていたが、これも……あの世までの深い因縁であろうか」

「今、あの時と同じく、ただいちどの恋が蘇りました。私の生涯に、身も心も捧げるお男はあなたさま以外、現れることはないのでございましょう」

別離して三年も経たないのに、幾十年も逢わずにいたような感慨が義意の心に湧いた。正室の座を失っても、気性と肉体は少しも変らないばかりか、以前よりも逞しさが増した色香の漂う小桜姫を身近に感じ、義意は、

―この類いの女人を好んだからこそ、城中の女には目もくれなかったのだ―

愛しさと同時に、自身の罪深さを思った。

小桜姫は暗に義意の胸中を察して、できることなら独り密かに耐え忍んでいる心の傷を労わってやりたかった。

義意の首にしなやかな両腕を巻くと、いきなり、甘えた仕草の頬ずりをした。そして、唇をよせ、口の中で舌と舌を戯れさせながら、少しだけ弾みをつけて義意の舌を噛んだ。

「うむ……、痛いっ」

さっと舌をはずした義意に向かい、悪戯っぽい笑みを浮かべた小桜姫は、

「決闘に敗れ、のしかかると見えた鬼殿を仰ぎみたとき、私は舌を噛み切る覚悟でございました」

「ほうー、いずれの舌かな?」
「もちろん、鬼殿のでございます」
「それでは、勝負は最後に逆転いたしたか。さすが、わしの見込んだ女よ」
小桜姫はその微笑をみると、道寸と義意から離縁を申し渡された口惜しさで、二度と古臭い武門などに近寄るまいと決意した記憶が、あやふやになってゆくのを感じた。

新井城にはゆうに三年分の兵糧が蓄えられていて、島には、そこから十日に一度、深夜、密かに糧米や野菜や漬物などが運ばれてくる。他に、島では魚が面白いほどよく獲れた。長い棒に糸をつけて投げると、かなり大きな魚がかかったし、岩間に短い糸を垂れても小魚がよく釣れた。日照りがつづくと、開いた魚は干物になった。食べ物の豊富なことが二人にとっての強みである。
小桜姫は義意にしたがって島の地形をくまなく見て廻った。とくに城から来る船着場から、人が容易に上陸できそうな個所の巡回は何度もおこなった。夜の探索は殊のほか念を入れる。交替で夜明けまで巡回に出かける前の夕食は、おおかた干魚と握り飯で済ませる。
二人は黙々と食事をとった。薄暗い灯が微かに義意の貌を映している。
鉛色を帯びて赤く盛り上がった頬の肉。ものを口に入れるとき、唇がねじれて歯がのぞく。その悲劇的な相貌は、もう、小桜姫にわずかな動揺も与えはしない。これからずっと、あるがままの義意の貌を見てゆくのだと、諦観にも似た心境になっていた。
夕食の後、小桜姫は、
「では、今夜は私が……」
と剣を帯びて立った。
……月夜の下、岬に面した砂浜が鮮やかな曲線を描いて延びているが、波濤が洗う奇岩のつづく岩礁地帯は轟くような喧騒である。そこを行く小桜姫には巡回の恐怖もなければ、生活の不安もない。剣を好む者同士が孤島に漂着して、世を忍ぶ姿に成り果てた境涯は、むしろ歓ぶべきことだとさえ小桜姫には思えるのだ。
時として海が荒れる豪雨の夜は巡回を中断する。そんな時の小桜姫の役割は、洞窟の内部をくまなく点検してから、義意のあとで床に就くのだ。
一方、義意の用心深さは寝ても覚めても徹底している。例えば用をたすときなど、黒漆塗りの便器が置かれている洞窟内の厠では、入り口を前にしてしゃがみ、かならず抜刀したまま利き手で柄を握って肩にかつぐ。万が一賊が近づこうものなら、そのままの姿勢で戸板もろとも一瞬の間に、拝み討ちに斬りさげるためだ。
最も危険なのは就眠中である。
とくに仰向けに寝ると、敵に斬られる面積が広くなる。

そこで、体を片側に傾けて刀の鞘を左手に持ち、貌の辺りに添わせ、利き腕の右手で柄を握って腹部あたりに添えるのだ。このため、小桜姫との添い寝のときすら、義意はいつも背を向ける姿勢になる。常に丸腰でいることがなく、不覚をとるまいとする義意の姿は小桜姫に、今が戦乱の時なのだと納得させるのである。
だが小桜姫は、異常ではあるが、潮騒の音がしている以外は、このように静かで平穏な雰囲気に身を委ねたことなど、かつて、なかったように思う。対岸の半島で騒乱が起き、人々がどんな生活を送っていようが、別世界の出来事として無関心でいられることが不思議なくらいだ。
小桜姫は義意と再会したことで、生まれたときから私はずっと、この男の恋女房だったのだと、奇妙な錯覚すら覚えるのである。
夕刻、頭巾姿の義意が巡回のため洞窟を出て、空を仰いだ。
「雨がくるやもしれぬのう」
「降りましょうか……」
「降るであろうな。日照りのつづいた後は毘沙門の感応があって、必ず風雨が強まる。天の恵みじゃ」
義意の言うとおり、島には泉がない。洞窟の上にしつらえた樋から流れ落ちる雨水を桶に蓄えて、飲料水にしているのだ。雨はまさに天からの恩恵である。
見送りに出た小桜姫の視界から義意の姿が消えて、急に湿った風が出てきたと思う間もなく、ぽつりと雨滴が体に当った。
近くの空に光りものが走り、雷鳴が耳を打つ。俄かに土砂降りの雨が岩肌を叩き、雷の光と音が交錯しだした。髪と肩を少し濡らしただけの小桜姫は洞窟に駆け込み、蓑を持ってすぐに義意の後を追おうとした。だが、風雨はいよいよ激しさを増して、樋に溢れる雨水が滝となって流れ落ちる。濃密な雨粒が降りしきって、霧に覆われたように視界をさえぎった。
夜明け近く、ずぶ濡れになって戻った義意は、着替えをしながらも悪寒が走るらしく、全身に鳥肌を浮かべて、紫色に変った唇を微かに震わせながらすぐに床に入った。
やがて、高熱を発した義意は何度も同じようなうわごとを繰り返した。
「……われらを侵す者は、容赦せぬ。あらゆる者を、この鬼面で懾伏させようぞ」
小桜姫が煎じる薬草の匂いが辺りに立ち込める。
目覚めた義意は粥をすすり、薬湯を飲むと、また深い眠りに落ちた。
だが、四、五日ほど経つと、義意の熱は下がってもとの気力を取り戻した。
「すまぬ、疲れたであろう」
「いぃえ、これも修行のうちにございます」

言葉とは裏腹にここ数日間、ほとんど眠っていなかった小桜姫の顔には疲労の色が濃い。しかし、二人は妙な安堵感に満たされて、どちらからともなく抱擁した。小桜姫の手が義意を求めてまさぐり、張りつめたものを優しく握り、義意もまた小桜姫の柔らかな処に触れた。外からは、また降りしきる雨の音が微かに伝わってくる。

そのとき、小桜姫の耳元に感じていた義意の熱い息が急に止まった。途端に、わずかな戸の隙間から夜気がすうーっと流れ込み、燭台の灯が吹き消されるようにゆらめいた。

洞窟に忍び入ったものの気配に、小桜姫の体が反射的に引き締る。静かに体を離した義意はそっと身に添わせた刀の鞘を払っていた。闇の中で、戸口にちらちらと侵入者の姿が見え隠れする。

「他人の閨を覗くとは、無礼千万、何奴か」

人影はそれには答えず、

「……うふふふ、島の鬼が、女と抱き合ぅているとは、奇態な光景よな」

低く、不敵な声が近づく。

咄嗟に義意の巨体が丸まって蝙蝠のように撥ね、小桜姫を背に寝所の中ほどに身をかがめた。すると、地に映る半身の影が義意の膝辺りに、正確な歩幅をつめる。

光の中に現れた相手は五尺に満たないずんぐりした体型である。

「うふ、ふ、ふ……勃起して立てぬらしいのぅ。ならば、地面に這わしてくれようか」

侮辱とも放胆ともいえる賊の言葉を浴びながら、義意は切っ先二寸あまり出した小刀を小脇にかかえ、次第に近づく地べたの影を凝視したまま、化石のように動かない。

小桜姫の目に、相手は希代の遣い手と写る。この天井の低い内部でまともに斬り合えば、義意が死ぬだろうと直感する。

小柄な影はぴたりと止まると、急に弾みをつけて、突きの体勢で数歩突進してきた。その一瞬、義意の体は毬のように一回転し、屈した膝を軸に独楽の迅さでくるくると回りながら、相手の脾腹を二度、三度、深深と切り裂いていた。

小桜姫は、あっ！と息を呑む。

よろよろと二、三歩よろめいた相手の体は横一文字、胴から上下にすっぽりと切断されて、二つの肉塊はゆるやかに崩れ落ちたのである。

小桜姫は義意の想像を絶する凄まじい剣の冴えに改めて驚嘆したが、それ以上に義意の残忍さに衝撃を受けた。愚弄された憤りとはいえ、義意は冷たくなった二つの屍骸を表情も変えず、素早く外に運び出した。

やがて、岩礁に寄せる波間に漂う二つの死体から滴る血が、薄明かりの海水に赤い花弁のように広がった。小桜姫には海がまるで墓場のようにみえた。と同時に、自分が野獣にでもなったような、いや、すでに義意の化身でもあるかの錯覚に囚われて、身震いしながら感じていた。

―人間のあらゆる情念のなかで、力への恭順ほどたわいがないものはない―

そして、波のまにまに消えてしまった屍骸に向って呟いた。

「魚の餌にでもなるがいい」

海の季節の移り変わりは早い。だが、戦乱がもたらした地上の変化はさらに早く、三浦半島の情勢はこの間に一変していたのである。

永正九年（一五一二）八月、岡崎城を抜いた北条早雲は、秋までに鎌倉由比ガ浜の住吉城も落とし、半島に怒濤のごとく雪崩れ込み、秋谷、長坂、黒石、佐原の出城も次々と席巻した。ここに、道寸以下の三浦一族は、もはや後のない新井城に立て籠ったのだ。

八十一歳の早雲は老いたりとはいえ奸雄であった。

堅固不落を誇る道寸の新井城が兵糧を存分に蓄え、武蔵方面からの援軍を待って、敵を挟み撃ちにする持久戦に出るであろうことを、さすがに見抜いていた。

「されば、力攻めには及ばぬ。籠城は飯と救いの手を絶てば、ひとりでに滅ぶものよ」

そう看破した早雲は半島への関門であり、交通の要地でもある鎌倉の北端に、広大な玉縄城を築いたのである。

この早雲の計略には寸毫の狂いもなかった。

翌年九月、道寸の娘を娶っている太田道灌の長男資康が、舅救援のため江戸城を出撃するも、満を持す北条軍の返り討ちに遭い、あっけなく敗死してしまうのだ。

以後、新井城では籠城が三年つづき、ようやく兵糧も尽きかけて、落城の憂色が濃くなった。

永正十三年（一五一六）初夏、新井城の危機存亡に扇谷上杉朝興が武蔵の軍勢を率いて玉縄城に攻め寄せた。しかし、この〝相模無双の名城〟を前にして、壁にぶち当る生卵さながらに粉砕され、敗退し去ったのだ。

あたかも昇天の老龍が、落日の痩せ細った虎に巻きつくように、早雲は今や全く孤立無援となった道寸の喉元を締め上げていったのだ。それは、六十二歳で伊豆一国を攻略したのが事実上の出発であった早雲最晩年の、関東制覇に賭ける執念でもあった。

その頃、島も異常に緊迫した静寂に包まれていた。

ここ三、四年、島に忍び寄る者は絶えなかったが、今は遠望する対岸の民家に人影もなく、灯も見えないのが不気味である。だが、新井城が早雲の重包囲下にあるとはいえ、連絡がすべて途絶えたわけではない。三方が海に囲まれた城の断崖の横穴から忍び出て、島に糧米を運

んでくる舟が時々は来ている。しかし、その回数も減って、島の食料も少しずつ乏しくなってきていた。

数日來、義意は今までにない鵜鳥の大群が空を覆って鳴き騒ぐのを見て、近く、何か不吉な異変が起りそうなことを漠然と予感する。

そんなある夜、高波に翻弄されながら小舟が来て、わずかな糧米と道寸からの伝言が届いた。そして、兵士は疲れきったかすれた声で告げた。

「これが最後の連絡となりましょうぞ」

義意は即座に、

「援軍が絶えた今、敵が示す開城のどんな条件も呑むべきであると、父に伝えてくれ。島に隠した財宝だけは、何としても隠しおおせてみせる」

と言葉したが返答はなかった。

二日後、対岸の彼方から薄く煙の上がるのが義意と小桜姫の目に止まり、やがて、煙は鮮やかな黒煙となって、二人の目に映った。

永正十三年七月十一日、前面は陸路ただ一つ、後方は海という背水の陣を敷く新井城兵も矢折れ、兵糧尽きて、ついに門を開いて最後の決戦を挑んだ。

合戦は阿鼻叫喚の大殺戮の場と化して、ある者は討死、ある者は敵と組み合ったまま眼下の海に身を投じたのである。

湾内は敵味方の累々たる屍で満ちて、海面が血の脂で染まったため、ここを油壺と呼んだというほどだ。道寸は死に臨み、

討つものも　討たるるものも土器杯よ
　くだけて後は　もとの土くれ

と辞世を詠じて自刃した。

ここに、義意ひとりを除いて、三浦一族は半島から完全に消滅し去ったのである。

島の高台の岩陰に身を潜めた義意と小桜姫は、対岸の様子を監視しつづける。

落城の翌日、辺りが闇に包まれる頃、岬の突端に点滅する光が数を増してゆくようだった。やがて、その光は夥しい数の篝火となって海岸線に浮かび上がったのだ。

二人は、まるで不知火のように海面を赤く染める壮観な敵陣営の光景に眼を据え、早雲の圧倒的な力を感じていた。小桜姫は、あの難攻不落を誇った新井城が、たった一日にして忽然と消えてしまったことに、「信じられない……」と小さく呟く。

もしかして、残された自分たち二人も敗北するのではないかと弱気になったが、いや、義意がいるからには、きっと勝つのだと、小桜姫は煩悶する自身の心を鼓舞しつづけた。その頬を、急に冷たくなった夜気が撫ぜていった。

翌日は、朝から沛然たる雨であった。

午後になっても視界がきかない。それでも二人は頭から蓑を被り、雨に打たれながらじっと身をかがめて四方の動静を窺っていた。火を焚くこともできない。手足に凍てつくほどの冷たさを感じ、二人は瓢の冷酒を呑んだ。生温かいものが四肢に流れて、小桜姫の頬がぽっと紅らんだ。そして、眠気の誘惑を払うように、たどたどしい口調で言った。

「波も高く、この雨では、戦までには少し余裕がありましょう。大事を前に、また風邪でもひかれてはいけません。洞窟に戻ってお休みになられては？」

「もうすぐ雨は止む。敵は必ず今日中に動き出す」

義意の言葉に小桜姫の動悸が早まる。すると突然、突き放すように義意が口走った。

「敵影をみない今のうちに、そなたは落ちのびるがよい」

「もしや、負けるとでも……」

「死ぬのは、わしだけでよい」

小桜姫の顔からはすでに紅色が消えて、見開いた眼から涙がこぼれた。

「別々に逝くなんて、寂し過ぎます」

涙声で訴える小桜姫を、義意はやにわに抱きすくめた。

ほとんど糧米を口にしない生活がつづいたため、二人とも痩せ細ってしまったが、義意の抱擁には渾身の力がこもっている。篠つく雨の中、小桜姫は薄くなった義意の胸に顔を埋め、身悶え、呻き声を洩らす。躊躇いの心も消え去り、目前に迫った死の淵で、お互いの背に羽織った蓑を重ねて契る光景は、赤裸々な獣の交尾にも似ていた。

刀傷の走る暗い沼のような義意の貌を濡らして流れるのは、雨滴とも涙とも、小桜姫にはわからない。だが、小桜姫はふと感慨を抱いた。

―戦乱の時代が、極度に官能を高ぶらせる時でもあることを、今、やっと知った。男女一通りの営みはすべて終わったのだ。もう、悔いはない―

夫の戦死

気まぐれな夏の雨雲が去り、雨が止んだ。濃霧が晴れた海上を見ると、北条軍の旗差しを翻した幾十隻もの船が島をぐるりととり囲んでいるではないか。

とたんに、血走った眼を見開いた義意と小桜姫の胸の鼓動は早鐘を打つように高鳴った。

武装した兵士を乗せた船団との距離がみるみるうちに縮まり、すでに上陸を始めている船団もある。

敵勢は大きく二つの集団に分かれ、一方は内海の海岸から、他方は外海の岩礁地帯から扇形に開いて、高台を

月の輪に包囲する態勢が看て取れた。

突然、「走れ！」

と叫び、弓矢を手にして覆面もせずに高台を駆け下りる義意のあとに、小桜姫がつづく。

洞窟近くの岩場に立った義意は、かっ！　とまなじりを決して、立て続けに強弓を放つ。唸りを上げて飛ぶ矢は、正確に幾人もの敵兵の胸板を貫いてゆく。慌てふためく敵の隊伍が散らばると見えた時、法螺貝が響いて一斉に反撃に転じてきた。

「これは二人合戦であるぞ、行け！　小桜、決して捕らわれまいぞ」

義意は後ろを振り返りざま、小桜姫に声をかける。そして、髪を逆立て眼をむいた義意は弓を捨て、長刀を抜き放って、密集隊形で迫り来る敵の真っ只中に突入していったのだ。

「私も敵をひきつけまする！」

小桜姫も洞窟上に通じる岩の階段に向かって走った。バラバラと数人の敵兵が後を追う。

階段をのぼる途中で、小桜姫の剣が一人の兵の腰を刺し、もう一人の肩を斬った。二人の男は悲鳴とともに下につづく兵士たちの上に倒れかかり、みな一緒に転げ落ちた。

義意は、と見れば、洞窟前を中心に、凄まじい修羅場が展開されていた。刃列を揃えて襲ってくる敵兵を右に左に交わしながら、兜もろとも唐竹割りにぶった斬ってゆく。

それでも、前の隊列が崩れると、次の隊列が竜吃（鉄熊手）を振るう中、錨型の爪で引っ掛けようと鎖の竜吃を投げかける者もいる。義意は体に絡まる幾筋もの鎖を一気に束ねて片腕で引き寄せるや、瞬時に数人の首を刎ねた。周囲は血の海と化し、屍が重なる。

だが、防ぐ義意と、攻める者との差は余りに歴然としていた。

小桜姫はことさら足もとの悪い崖面に敵を誘って、巧みに身を交わしながら眼下の義意に眼を配る。乱戦の中で、義意もまた小桜姫の姿を探しているらしかった。一瞬、血みどろな義意の貌が振り返って笑ったようだ。その優しさのこもった笑みが、小桜姫の視界を掠める。それが最期であった。

傷ついた獣のようにずたずたに引き裂かれ、血に染まった義意は、彼岸の世界へ赴くために、波頭の打ち寄せる断崖へ血路を求めて逝った。

小桜姫が血塗られた剣をさげたまま呆然とその方を眺めやったとき、鋭い剛鉄の刃が小桜姫の耳から唇を切り裂いた。義意に気をとられたわずかな隙に、小桜姫は前と左右の退路を絶たれて、敵兵の群れの中に取り残されていたのだ。

血の滴る頬に片袖をあてて、ついに力尽き、足を引きずるように二、三歩歩んだ小桜姫を槍で突こうとした兵

士がいた。それを、

「待て、そのまま生け捕りにせよ」

武将らしい男が制した。数人の兵士が縄をかけようと小桜姫に近づく。

「お待ちくだされっ。女の最期の身嗜みを待つのが、武士のお情けでは……」

そう言うと、小桜姫は乱れた髪や襟元をただし、地面に正座するふうに体を沈めて瞼を閉じた刹那、懐刀を手に身を一回転させると、取り囲む兵士たちの下腹部から腿のあたりを斬った。一瞬、小桜姫の脳裏にひらめく。

―ああ、わずかながらも義意殿の秘剣を伝授されていたのだ！―

敵兵が悲鳴を上げ混乱して怯む隙に、小桜姫は身を躍らせて崖下に舞い降りた。

無数の松明が洞窟の内部を真昼のように照らし出している。

洞窟に逃げ込んだ小桜姫は、暗闇の中、記憶する迷路の途中に隠された縄梯子を一気に昇り、それを手元にたくし上げた。そして、身動きもできないほど狭い岸壁の裂け目に身を潜めたのだ。

やがて、どやどやと兵士たちが入ってくる騒音が伝わり、灯りに浮かぶ岩の割れ目という割れ目を長槍で突いているらしい。一人の男の怒声が飛ぶ。

「どんな裂け目も見逃すな」

岩をひき剝がし、裂け目をこじ開ける響きがして、ばらばらと岩の破片が降る。すると、小桜姫の目の前に鋭利な槍先がすぅっと伸びて、爪先立った足元まで下ろされた。息を殺している小桜姫の脈拍が激しさを増す。だが、

「女はどこにも潜んでおりませぬ」

という兵士の声に、さっきの怒声が応じた。

「是が非でも探し出せ。隅々までもほじくり出せっ！」

「もはや、この洞窟からは、鼠一匹すら見つかりませぬ。今頃は、あの鬼面の男のように、秘密の抜け道から海に飛び込んだのでござろう…」

「何、海へ逃したと。たわけめっ！早ぅ追うのじゃ」

「それより、戦利品の山がござります」

兵士の言葉に、怒声は和らいだ。

「うむ、戦利品じゃと？　それはよい」

岬の孤影

敵兵が一人残らず島を去るまで数刻を要したが、もはや、小桜姫の爪先は体を支える限界にきていた。やっと、蝙蝠のように岩に張り付いていた姿勢から開放されてみると、洞窟の至る所は狼藉三昧に踏み荒らされ、目ぼしい品々はあらかた持ち去られていた。

わずかに欠けた茶碗や破れた竹籠などが、義意との無

量の思い出として残っているばかりだ。激しい疲労のなかで、急に静寂が小桜姫の体を浸しはじめた。

外に出ると、雲間から蒼い光がさして岩と海が金色に溶け合っている。義意が身を投げたあたりの鋭く突き出た崖にたつと、早い潮流のためか、その崖が、まるで舳先になって、寄せ来る白波を切り裂き切り裂き、沖に向かってゆく舟のようだ。

―この舟の行く手に次々と現れ、形を変えていく波頭は助けを求める人間か。それともものの怪なのか？　ああ、その波間に浮きつ沈みつ漂う仄黒い影は、義意殿か、幻覚だろうか―

小桜姫に際限のない孤独のときがつづく。

たった独りになってしまった島の生活は、恐ろしいほどの寂寥感が身を包んだ。

そして、小桜姫は独り言のように自問自答を繰り返した。

―「捕らわれまいぞ」その言葉どおり、私は捕らわれなかった。だが、義意殿は死んでしまったのか。どこかで生き永らえているのか。もう、この島には護るべき何ものもない。私はこれからどうすればよいのだろう―

じめじめと雨の多かった夏がすぎ、からりと晴れ上がった秋が訪れたが、小桜姫は次第に季節感もなくなってしまった。

糧米がわずかに残っている。小桜姫は火打石で火をおこし、米と雑草や海藻で一椀の粥をつくったが、秋が去る頃には食料も枯渇していった。

冬はことのほか辛かった。

夜が明けると小桜姫はまたしても糧を求めて島内を彷徨うのだ。

磯には自ら跳ね上がったのか、波に打ち上げられたものか、生干しになった数匹の魚が冬の日差しを浴びている。また、砂地を掘ると、小さな魚やカニが眠っていることもある。小桜姫はそれらをむさぼるように食べた。

海水の満ちた岩肌の穴や窪みには、さまざまな種類の生き物たちが、侘しい音を立てて蠢いている。その穴に手を入れると生暖かい。小桜姫は年が巡り、季節が春になったことを知った。

ある日、小桜姫は気力のない足取りで海蝕岩に沿ってふらふらと歩いていた。

自分がどこをどう歩いているのかさえわからなかったが、と、ある岩陰で不思議な声を聞いた。小桜姫が岩陰から覗くと、それは、すぐ近くにいる何艘かの小舟の上から、魚網を引き上げている漁師たちの掛け声であった。瞬間、小桜姫の目には網の中の魚群が人間の生首にみえた。そして、深く裂かれた二つの唇が、恐怖に激しく痙攣しているように映ったのだ。

小桜姫はいたたまれずに、一目散にその場を逃れた。

気温が上昇して日ごとに暑さをます。

童たちが歓声を残して岩から海に飛び込み、水飛沫をあげる頃から、この童らの間で島に口の裂けた乞食女がいると、噂になっていた。

小魚や小海老、貝や海藻などを手摑みで口に入れながら彷徨う小桜姫を〝化け物〟〝気ちがい女〟などとからかった。痩せ細った体にぼろぼろの衣を着て、ぼうぼうの髪が腰まで伸びた幽鬼ただよう小桜姫を、はじめは遠巻きに見ていたが、今は近寄ってくるようになっていた。

貝を拾う小桜姫の姿をみつけると、日焼けした素っ裸の童らは、周囲の岩に攀じ登って、まるで奇形女の見世物でも眺めるように大声で囃し立てた。小桜姫が岩陰に隠れると、なおも岩を乗り移り、小桜姫を囲むように頭上から嘲笑して止まないのだ。

「それっ、化け物女を捕まえろ」

「ほれっ、そっちへ逃げたぞっ」

わめき散らす悪童たちをめがけて、小桜姫は手に持った貝を投げつける。

だが、そのうちに、遊びに飽きた悪童たちは乞食女が可哀そうだといいながら散っていった。

小桜姫は夢をみた。

「恥ずかしいかぎりだ。笑え、嘲り笑ってくれっ」

兵士に捕縛された義意が叫びながら、群衆の見守る中を処刑場に引かれてゆく。

しかし、小桜姫の脳裏からは、今までに知り尽くした戦の過酷さも、敗者の悲哀の想念もとうに消えていた。目を醒ましさえすれば、飢餓感に苛まれて、人間らしい食べ物を口にしたいと願い、生き永らえるのが精一杯だったのだ。

だが、命の限界はすぐ目の前に迫っていた。

陽が没しようとする時刻、小桜姫は茜色に染まった空を、影絵のように旋回する数羽の鵜鳥を仰ぎ見ていた。すると、急に目の前が暗くなり、地が大きく揺れ動いて、その場にしゃがみこんだ。そして、両膝を抱いて顔をふせると、激しく不規則に打つ心臓の音を聞きながら、不意に義意の幻をみた。

「わし以上に、そなたを世間に出られぬ顔にした奴の仇を、きっと討ってやるぞ」

剣を振りかざして敵陣に突入する義意の姿を、幻の中の小桜姫は、ただ悲しげな表情で見送った。

突然、嵐の前触れのような強風が吹きつけて、われに返った小桜姫は、やっと立ち上がると、のろのろと洞窟に入ってゆく。そして、手探りで錆付いた懐剣を取ると、ぼろきれのような身じまいをただして、正座した。

―今日はあなたさまの命日です。この日までと定めて、あなたさまを待ちました。でも、もう生死の境目を越える時が来たようです―

そう呟くと、腹部を撫で下ろし、懐剣を左脇腹に突き立て、渾身の力をこめて左手で剣の柄を押した。だが、もう力がなかった。

小桜姫は剣を抜くと、よろめきながら岩壁につかまって立ち上がり、外に出た。

そして、夜空いっぱいに照り渡る月の光で、流れ出た血が驚くほど少ないことを知った。

風はいぜん強く吹いていて、白い薄雲が流れてゆく。風の咆哮に急かされるように岩礁まできた小桜姫は、血に染まる懐剣を左の乳下に押し当てた姿勢のまま、物が倒れるように岩肌にうつ伏した。身をえぐるような呻きと同時に、剣先が背を徹っていた。

小桜姫は体を捻り、岩肌を這って海へ出ようとしたが、波頭は限りなく遠いところで視野をかすめるばかりだ。

小桜姫は動きをとめた。

そして、岩に砕けるすさまじい波の音や、降りかかる飛沫が、まるで自分の死に様を嘲笑っているような念いに包まれながら、息絶えたのである。

ところで、古老の話によると、新井落城の時、義意は城門を開いて阿修羅の奮戦の後、自らの首を掻き切ったといわれる。

その生首は小田原の海岸に飛び、松の木に懸かって、人々を恐怖に陥れた。

そこで小田原総世寺の僧侶忠室が懇ろに供養すると、たちまちただの白骨に化したとされる。

義意の辞世、

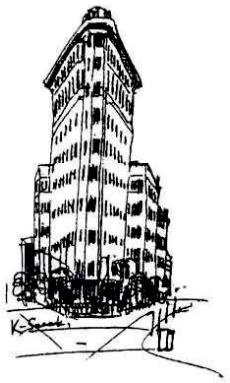
君が代は千代も八千代もよしやただ
　現のうちの夢の戯れ

解釈によっては、「君が代、つまり義意の世も、夢の戯れのごとく空しかったな」と、多少の皮肉を込めた第三者の詠歌と読み取れないこともない。

実際に辞世を詠んで、新井城で死んだのは義意の影武者であつた。

都市銀行『爆発物処理班』（二）

宅見勝弘



四、トーキョーファイナンス

武神組長射殺事件の翌々日（一九九七年八月三十日土曜日）朝九時に、独身寮の部屋をノックする音で優一は目が覚めた。

優一がドアを開けると、山名が立っていた。

「ＴＦの本社を見に行くから、付いて来い」

トーキョーファイナンスを見に行くのに、優一は気が進まなかったが、仕方なく出かけることにした。

二人は、銀行の独身寮のある渋谷からバスと地下鉄を乗り継ぎ、三十分で八丁堀駅に着いた。八丁堀駅を出ると、八重洲通を東へ向かって歩き出した。

土曜日でサラリーマンが少ないので、二人は周りを気にせず話し出した。

「ＴＦの稟議書を見たか」

「十年前の四十億円の稟議書が一本入っていました。銀行で出しているのでは、一件だけです」

「当行が直接ノンバンクに貸せなくなったので、東西ファクターを使って迂回融資したのか」

「ファクターはピークで二百億円近く貸していました。迂回融資したというよりも、ファクターの方が積極的に貸出を伸ばしたのが実態です。

当行だけでは融資順位で十位にも入りませんが、ファクター分を合せると四番目になります」

二人とも半袖シャツであったが、かなり汗をかいていた。八月が終わろうとするのに蒸し暑さが残っていた。

「ＴＦは新東京信金系列だったよな」

「三十年前に新東京信用金庫が自動車ローン専門のノンバンクとして設立しました。一九八〇年代になって自動車ローンは少なくなり、殆んどが不動産融資になりました」

「新東京信金は、『西の大京都、東の新東京』と言われ

るくらいで、大京都信金と並んで、信金業界のトップクラスだな」
「当行もファクターもＴＦに貸すというよりも新東京信金に貸したつもりのようです」
優一は当時の貸出稟議書の意見を思い出した。
『当社は新東京信金一〇〇％出資子会社であり、返済について全く懸念無し』
稟議書の採択意見欄には、そのように書いていたが、全く意味の無い稟議意見であった。
「たしか、新東京信金の理事長派と専務派との派閥争いが激しくなって、信金を追い出された専務派がＴＦに行ってから両者の関係が悪化したのだな。
新東京信金はＴＦから出資も融資を減らして、今では単に一取引先に過ぎないと言っているのだから、無責任だな」
「未だ、ＴＦの筆頭株主は新東京信用金庫共済会の筈です。
しかし、融資金額は新東京信金が百億円を下回っていますから、当行とファクターを合せた額の半分しかありません」
「ＴＦに融資している金融機関は何社あるんだ」
「全部で五十以上の金融機関が融資をしています。都市銀行・長信銀・地銀と、その系列ノンバンクが融資しています。他にも生命保険と損害保険、さらに外国の銀行もあります」
「融資残高で最も大きい銀行はどこだったかな」
「墨田信託銀行で二百五十億円ほどです。地銀の東京中央銀行、さらに日本長期興業銀行が続いています。
プロラタ方式ですから、五十社の融資順位は変わりません」
プロラタ方式とは、融資残高に比例して返済する方式のことである。
二人が五分ほど歩いたところで、トーキョーファイナンスの本社の看板が八重洲通の反対側に見えた。三十メートルほど手前で、山名が立ち止まった。
「あまり近づくと怪しまれるので、ここで見張ろう」
トーキョーファイナンスの本社は七階建のガラス張りの建物で、一階から四階までを使用している。五、六階はトーキョーファンドという保険代行会社の本社である。最上階は川段前会長の事務所である。
「新東京信金の派閥争いから、東京政財界の黒幕と言われる大物フィクサーの川段氏が新東京信金に介入してきました。
その川段氏がＴＦの代表取締役会長になってから、暴力団関係者への巨額の融資が増えました」
「今では川段前会長の影響は薄れてきたんだろう」
「現在ではＴＦで最も影響のある人物は森田中一監査役だと思います。おととい射殺された武神組長の顧問弁護士です」
「森田中一というと『ヤメ検』のか」
ヤメ検とは、検事出身の弁護士を指す言葉である。
優一はヤメ検という表現が好きでなかったので、曖昧に頷いて続けた。
「森田弁護士は『東京地検特捜部に森田あり』と言われた敏腕検事でした」
優一は検事か弁護士を目指して、早稲田大学法学部に進学した。司法試験は諦めたが、検事出身の弁護士に憧れを感じていた。その中で尊敬する人は、大学の先輩の大澤孝征弁護士であるが、かつては森田中一であった。
「日本撚糸社汚職事件を摘発したのは、森田検事でしたね」
日本撚糸社汚職事件とはロッキード事件以来の十年振りに政治家逮捕に繋がった汚職事件であった。
「安全相互銀行不正融資事件で現場の指揮を執ったのも森田検事です」
安全相互銀行は関西系都市銀行の墨田銀行に吸収されていた。
「不正融資で経営が行き詰まって、安全相互銀行は墨田銀行に身売りしたわけか」
「安全相互銀行事件で逮捕された酒井監査役も東京地検特捜部の検事でした。
東京地検特捜部の元検事が、経済犯罪で古巣の東京地検特捜部に逮捕されるということが、今回も繰り返されるかもしれません」
トーキョーファイナンスの件で森田監査役が東京地検特捜部に逮捕されるような予感が優一はしていた。
「森田氏は他にも顧問弁護士をしていたな」
「最大の経済事件である糸丸物産事件の京英宗と末光一統。兜町の神様と言われた、ヒカリ産業事件の大谷博光。北海道開発銀行の破綻の一因となったシーシーイーの丘上社長」
「最近の経済事件の被告人全部じゃないか。善悪は別としてかなり影響力のある人物なんだろうな」
三十分ほど二人はトーキョーファイナンスの本社を見ていた。特に出入りする人も居らず、平穏な様子であった。
山名が少し期待外れという感じで舌打ちをした。
「何も動きは無いな」
「ヤクザや警察に自分がマークされるのは嫌ですから、先に帰りますよ」
優一は、この場に居たくなかったので、山名を置いて立ち去った。

五、債権回収

九月一日月曜日、優一は銀行に出勤すると、毎月初に

本部へ提出する不良債権報告書に取りかかった。
破綻債権報告書・延滞債権報告書・開示債権報告書・問題先報告書・共同債権買取機構報告書・未収利息報告書…
（無駄な報告書が多いな）
延滞債権報告については、融資先ごとに資料を添付して提出する。
延滞先の中には関連会社が二十先あり、一社ごとに作成するので、コピーだけでも二百枚以上になる。
「今回の武神組長射殺事件でＴＦの取引が直ぐに変わる訳でもないだろう。
報告書の目処が着いたら、九月十五日に期日が来る江頭不動産の返済条件の交渉に行ってくれ」
江頭不動産は毎月利息のみを支払っていて元金を返済していなかった。
「本業の古本屋の様子も見てきます」
「古本屋を続けていれば良かったのに、周りの地価が急上昇したので、関連会社で不動産に手を出した。バブルの時期には何億と儲けた訳だが、バブル崩壊と共に当社も多額の借金を抱えることになったのか」
「不動産購入資金が五物件で、私が転勤してくる前に既に損切り処分しています。物件売却後の残った借入金のみで三億七千万円ですね」
「本社ビルは三階から七階まで賃貸事務所にしている。このビルは五億円の抵当権が付いたままだ。この借入金はバブル期に儲けた金で全額返済している。賃料で損切り後の残債を減すように交渉してくれ」
「先方の都合が良ければ、今日にでも行ってきます。いつも社長夫人と話すだけなので、社長に直接会って交渉してきます」
優一は答えると、江頭不動産へ電話をした。不動産業も古書店も社長と夫人の二人だけで経営していた。
その日は電話に社長が出たようで、優一が銀行名を言いかけている途中で、受話器を転がすような音がした。
三十秒ほど待っていると、社長夫人が電話口に出た。
「こちらから銀行に出向く気はしませんが、来たければ勝手にどうぞ」
銀行に対して好意的でないことが電話の口調にも表れていた。
優一は十一時前には着く旨を伝えて、電話を切った。
「債権回収の仕事って、お客さんと一緒に喜びあえることが無いので、辛いですよ」
優一は前任の京都支店では営業担当だったので、取引先から感謝されることが働きがいでもあった。
「何を甘えたことを言っているんだ。遊びでやっているのではないぞ」
山名は強い口調で叱責した。優一は居づらくなって、直ぐに出かけることにした。

優一の仕事は、取引先の破産処理や不動産競売の手続きの方が多かった。法的な事務手続きの方が、精神的に楽であった。
優一は憂鬱な思いで、目的地に向かった。地下鉄東西線で大手町から竹橋まで乗って、後は十分ほど歩いて、江頭不動産に着いた。
（三億七千万円の貸出金がある会社とは思えないな）
古ぼけた七階建のビルが建っていた。七年前に築十年の中古のビルを一棟買って一部改築していた筈だが、実際には老朽化が進んでいた。
一階は古書店だが、開店休業という感じであった。不動産会社としての看板は無かった。
書店の奥と二階が社長夫婦の自宅であった。三階以上は書店の左横からエレベータで行くようになっていた。
過去のトラブルが全く引き継がれないまま、優一が担当することがあった。事情を知らないで初めて挨拶に行った時に、いきなり相手から罵倒されたことがあった。
優一は、恐る恐る書店の中に入って声を掛けた。学者風の年配の男性が座っていたので、優一は名刺を出して挨拶をした。
相手は優一の名刺を放り投げるように机に置いた。相手が黙ったままだったので、景気の話など一方的に優一は話しかけた。
「俺は自殺しようかと真剣に考えとる」
優一の話が途切れた時、江頭社長は脈絡も無く呟いた。
「自殺する前に、道連れに銀行員を殺そうと思っとる」
社長の感情を押し殺した口調にかえって、優一は恐怖を感じた。
事務所の奥の方で何か落としたような音がしたので、優一が振り返ると、夫人が包丁を握り締めていた。
気まずい雰囲気を変えようとして、優一は話し続けた。
「このビルの賃料は一室平均二十四万円で五室在りますから、月に百二十万円の収入がある筈です。その賃料収入を、返済に充てていただければ……」
「五部屋の内の一つは空部屋だ。四部屋の家賃は全部、銀行の利息で消えている。利息を払っていない不動産屋は沢山いるのに、なんで俺だけ払わんといかんのか」
江頭社長は話している内に感情が高ぶったようであった。
「銀行に勧められるままに、借金して不動産を買って、言われるまま不動産を売ったら、このビル以外には何億円もの借金しか残らなかった。このビルは銀行の抵当に入ったままだから、最後には取り上げるつもりだろ。
お前らのせいで、俺達の生活は滅茶苦茶になってしまった。普通に古本屋だけしていれば、こんな目に会わなかったのに。
もともと俺は不動産に手を出すつもりは無かったんだ。

書店と別で不動産会社を作ったのも、銀行が勧めたからだ」

江頭社長は過去の恨み言を一時間ほど話し続けた。優一は黙って聞いていた。社長の話が終わったところで、夫人が近づいて続けた。

「主人が物騒なこと言ってるけど、私達の辛さの何分の一かは銀行さんにも負担してほしいと思っているの」

夫人は、皮を剝いた林檎を出した。夫人が手にしていた包丁が林檎を切るため分かって、優一は安心した。

「主人は去年、睡眠薬を大量に飲んで、救急車で病院に運ばれたの。命に別状は無かったけど、それから鬱病で入退院を繰り返して、先月やっと退院したところなのよ」

社長は、余計な事を言うな、という感じで夫人を睨みつけた。

「社長さんが銀行を恨みたくなる気持ちは良く分かります」

優一は相手を感情的にさせないように言葉を選んだ。

「このビルは当行子会社の東西不動産の紹介で全額を借入金で購入したものです。この借入金は返済しましたが、それは当行が融資し東西不動産で紹介した別の不動産の転売利益によるものです。そのような経緯がありますので、ビルから生まれる利益は銀行の返済に回していただきたいと考えています」

社長夫婦の住居でもある物件を、優一は競売にかけたくなかった。競売しないためには、利息の支払いと元本の返済をさせる必要があった。

「現在、毎月の利息として約九十六万円を戴いています」

当時の短期プライムレートは一・六二五%まで下がっていたが、江頭不動産は引下げ対象外で、三・一二五%の金利であった。利息よりも元本返済を優先すべきだ、と優一は考えていた。

「金利は短プラに〇・三%上乗せの一・九二五%で検討します。利息は五十九万円か六十万円くらいになります。その代わりに毎月五十五万円を返済していただけますか」

「全部屋が入居した場合で、収入は百二十万円だ。その殆んどを持っていくつもりか」

江頭社長は未だ納得しなかったが、夫人が話に応じてきた。

「子供はいないし、古本屋の他に私も生命保険の外交のパートをしているから、二人の生活費はなんとかなるわ。一部屋は空いているけど、来月には入居が決まっているの」

社長は椅子を蹴飛ばして立ち去った。

「一・二%の金利引下げの条件で毎月五十五万円の返済です。毎月の支払いは九十六万円から百十五万円になりますが、ご主人を納得させて下さい」

残っている夫人に優一は告げて、帰ることにした。

優一は地下鉄の竹橋駅まで戻ると、江頭社長の言葉を思い返した。

(初対面の相手から『殺す』と言われる職業に就いたつもりは無かったな)

自分の銀行員としての全存在を否定されたような気がした。

(もう銀行を辞めようかな)

優一は、胃の痛みが酷くなるのを感じた。三ヶ月前に胃カメラを飲んで、自分の胃の中が出血している写真を見ていた。

暫くの間、地下鉄のベンチで蹲っていたが、休む時間が無いので、這う様にして支店へ戻った。

支店に戻った時には、かなり融資の窓口が込んでおり、騒然としていた。

優一が自分の席に着くと、伊馬副長の罵声が飛んできた。外出前に江頭不動産の方針を書いて回覧していた。

「たかが返済条件をつけるのに、二時間もかけやがって。三億七千万円の融資先に数十万程度の内入れをして、完済まで何年かかると思ってるんだ。この給料泥棒がっ」

社告(内規)

☆ 同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の(ひろば)として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ケ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

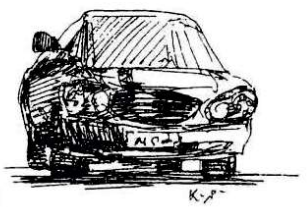
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座 〇〇二七〇ー〇ー六四五九二

加入者名 まんじ

悪流修羅（第二話）2
―リストラの虚構―

中泉聖司



（三）

「パパが帰ってこない！」

ホーソン夫人とその友人がパラダイスポイントの別荘に帰還して、しばらくベランダの手摺に身体を寄せて沖を眺めていた紀子がつぶやいた。

来るべき時が来たことを広田は混迷した胸に感じている。具体的な手順は予め用意はしてあったが、いざ、紀子の不安を目の前にすると動揺をかくせなかった。

「早く海から上がって来るように！行って探してきてください」

居眠りしていた菊枝が、ソファーから広田に声をかける。

広田は言われるままに渚に下りていった。

だからと言って、いま何かを具体的にするわけにはいかない。広大な海は潮騒の音だけを発生して、人の姿は一人も見えない。すでに深夜に至り、ビルの窓には明かりがぽつぽつとのこっているだけだった。

すでに山野社長はクルーザーに引き上げられてウエットスーツを着込み、アクアラングを身に付けて、二人の案内人に挟まれて、メインビーチをはずれて内海のパラダイスポイントにあるホーソン邸に向かっている筈であった。

遠浅の海に入って胸の上から携帯のライトを沖に向かってグルグル回してみた。おそらく四十三階のベランダから紀子と菊枝が見ているだろう。むなしい行動だとはわかっていたが、紀子の心中を思うと胸が締め付けられるような悲しさが湧いてくる。

人のこころを欺くことが、自分のこころを傷つけることを知ったが、今は大義のために計画を遂行しなければならない立場にあることを考えなければならなかった。

シナリオどおりにサーファーズパラダイスの夜は狂気のような混迷を残して明けていった。

夜明けと共にその異常さを白砂の渚が証明していた。

砂浜には無数に踏み散らされた足跡が人の心を掻き毟って、パニックに至らしめた事実をもの語っていた。早い夜明けを待ちきれずに紀子と菊枝は渚を走り巡って山野を探し、名前を呼んだ。

「事故に遭ったに違いないわ！」

「早く、さがして！何かあったら大変よ！」

菊枝は山野がなぜ今回日本を逃げてきたかを知っていた。妙な胸騒ぎを覚えたのだがその事実を言って紀子の悲しみを増幅させるわけにもいかないこともわかっていた。

広田は困惑のなかで、州の警察に捜索を依頼した。

ポリスカーが到着したとき、白い夜明けは凪の状態で姿をあらわし、まもなく残月は空の青に溶けて消えていった。

やがてゴールドコーストの海はいつものように乳青色のオパールのように輝いてきたが、急に、海上のあちらこちらには異常な喧騒がおきはじめていった。

この異常に感づいた人々が白い砂浜に点在し、沖のほうを眺めている。

日本人社長、山野悦治がゴールドコーストの海で失踪したことはクイーンズランド州のニュースで流れはじめている。事件の少ない平穏なゴールドコーストの街では晴天のへきれきであった。

オーストラリア、シドニーにも拠点を置いた、オートネック、カンパニーの社長であることを報じている。

クイーンズランド州の警察がヘリを飛ばし、何機ものキャッチボートを駆動して大掛かりな沿岸捜索をはじめていた。

菊枝と紀子が悲しみを押さえて白い砂浜に佇んで、捜索の報告を待っている。

息を飲んで、捜索の朗報を待っている二人の姿に、バカンスの逗留者たちは立ち止まって、悲しそうな視線を送っていた。

大海原を前にした大方の人々の胸には、憐憫の泡沫が浮んでは消えていった。老人の生命は藻屑のように海に流されて消えていく宿命を想像して、絶望していた。

翌日の朝、山野の名前を書き込んだサーフボードが海岸に漂着した。

山野の肉体とを結んだセーフロープは、千切れて、そのボード装着部分と千切れた繊維には大量の血液が付着した痕跡があると鑑識が報じていた。

「サメに襲われたのか」ブリスベンに駐在した日本人記者たちが到着すると、すぐに憶測で州警察に派遣された

州政府のスポークスマンに質問を投げつける。
「バカな推測はするな！今までにこの海岸にシャークが現われたことは一度もない！」
観光が州税を潤していることを認識している局員が日本人記者にクレームをつける。
「日本人記者はフェアーネスではない！前後のみさかいも無く、一人か二人の憶測を採用して、すぐに記事にする。」
もう一人の局員が後を続ける。
「同感だ、最近の日本人記者は、密告を好み、それをニュースソースにして、デモンストレーションしているね。それはキミたちの会社がスキャンダルを売り物にして、食っているからだ。わたしどもから考えるとベリー、クレージーだ。」
サメに襲われて行方不明になった、と日本で報道されると日本の景気の悪さに追い討ちをかけて日本人の観光客がゴールドコーストに来なくなる、観光資源に寄りかかっている州政府も観光客の減少にかなり神経質になっているのだ。
「しかし、この海にはエキサイティングなホワイトシャークがたまには現われるけどね！」
スポークスマンが眼鏡の奥から真剣な白目を、日本人記者たちにむけた。
一瞬、記者たちの顔に緊張が走る。
「それは、人を襲うようなシャークではないよ！」
彼はこの記者の真顔の表情に向けて、ニヤリと笑った。
「わが国のみんなはホワイトシャークが大好きだしね！たまに、この海に現れると、みんなウェルカムだよ！ただし今はいないね、おそらくアメリカのフロリダの海をスイミングしているのではないのかい、やがて彼は米ドルをたらふく飲み込んで、オーストラリアに戻ってくるよ」
外人記者らが喝采した。ニックネームをホワイトシャークと呼ばれ、世界的プロゴルファーのグレッグ、ノーマンをジョークでコメントしたのだ。
間もなく、山野悦治が日本で政界の疑獄事件に関連した男であること、自殺の可能性が否定できない、ことが、日本人記者から漏れた、これがすぐに地元のニュースに流れ始めた。
州の警察はそれを確認すると、たちまち捜索を打ち切った。
日本的な政策は、この国にはないし、中途半端な東洋哲学は通用しない。日本の国会に贈賄罪で証人喚問を予定された男が、逃亡したのか、あるいは何処かで自殺したかもしれないと言う不安定な生命の特別な捜索は打ち切られた。
広田はこのなりゆきにホッとしていた。すでに国際的な虚言罪だ。事実が判明すればどうなるのだろう。広田や紀子、菊枝、それにホーソン家を巻き込んだ重罪事件になってしまうのだ。
日本から司直の手を逃れてきた容疑者に望外な捜索費を投入することには、この国民の民意を考えると継続はできない。続行するためには日本国の要請を待って日本の費用で活動を決める、それが当然のことになるし、それを即時決定したのだった。
「自殺だろう、いや、逃亡したのではないか！日本の政変に必要な人材なら日本から捜索の要請があるだろう、それに従えばよい。」
が、外人記者にも、大概の見解になって興味を失なってきた。
入違いにまもなく、日本の記者たちだけが、スクープを目論んでゴールドコーストにハゲタカのように襲来して獲物をまっていた。

（四）

山野が逗留していたコンドーミニアム、アイエスビル四十三階のフロアーにゴールドコースト警察署から三人の担当官があらわれた。
ホーソン亭の山野が見つかった、と報告にきてくれたのか？
一瞬、期待したが、もしそうだとしたらどうなるのか。
「もう一度、詳しい状況を聴きたい」
彼らは山野が逃亡したか、自殺の可能性が強いのか、について詰問を用意してきたようだ。日本政府の要請によるものかどうかは広田にはわからないし、彼等もアンノーウン。
まず、家族と秘書の広田の供述を取りたい、と言う。
「ブリスベン空港以外も、国際線をターゲットにして手を打て、クーランゲッタエアポートはまず、オーケーだ。国内線の乗客には外人は二名しかいないし、ミスター山野らしき日本人はいない・・・」
携帯電話で指示をしている内容を聴いている限りでは、ブリスベン国際空港警察からは山野が出国した事実の確認は取れてはいなかった。
「そのうち網にかかるかもしれないよ・・・」
年輩のポリスが携帯を切った。一応、その事件の夜の行動について、予測しながら手を打っているようだ。
若いポリスが広田、菊枝、紀子をソファーに座らせ聴取していた。
氏名、年齢、山野との関係をメモした後、パスポートをださせて老刑事に言った。
「失踪者はどこにも動いてはいない。自殺の線でいくしかないのではないのか、パスポートも置いたまま、出国できるわけがない」

「トリックがない犯罪ならね！キミが言う通りだ。まったく・・・この犯罪者の脳ミソがキミと同じなら、わたしは今日、トローリングに出てカジキマグロと格闘しているところだよ」

同僚の老刑事が苦虫を噛んだような顔で、一番若そうなポリスに向かって叫んでいるのを紀子が聴いた。

「父は犯罪者ではありません！自殺もしないわ！これまで幸せに暮らしていたわ！幸せに暮らしている人間がなぜ死ななければいけないの・・理由がないわ！」

娘の紀子がリビングルームのソファーから立ち上がり長い睫毛を海に向けて言った。

「サーファーではないようですね、あなたのパパは・・」

「波に乗って遊ぶのは、上手ではありません。でも・・・」

若者のように多様な波乗りの技術はなかった。パパには不似合いよ！おかしい！と、笑って止めたこともあったが・・・。

菊枝は紀子に従って立ち上がり、肩をだいて紀子の説明を聴いていた。

「静かな海に、サーフボードを浮かべて楽しむのは、父の行動では異常なことではありません。毎年、あちらこちらの海に旅行していましたし、この海にも何回となく来て遊んでいましたし、今回は広田さんも一緒でしたし・・」

「ミスター、ヒロタ、ノ、コトヲ、アナタニ、キキマス」

「わたしに・・・ですか？」

不安な表情で菊枝が日本語の通訳を兼ねたポリスマンに眼を合わせて尋ねた。菊枝には英語はわからない。

「ソノ、セクレタリー、ヒロタ、ハ、プレジデントヤマーノ、トハ、アノ、ウミデ、ワカレテカエッテキタ、ココニ、ベツベツニノ、コウドウヲシテキタ。ナゼダトオモイマスカ？」

このポリスの眼は広田を観察しながら菊枝に聴いた。広田の表情に、何か疑問を感じているように思えた。

まさか！広田は硬直し、顔が赤く充血するのを感じた。わたしが、何をしたと考えているのか？

「なぜなの？どう答えたらいいの・・・広田さん」

広田が受けた。

「別行動ではありません。ゆったりと浮んで楽しんでいる社長に遠慮しただけです。・・もう帰れ、と言われて・・・」

俯いて、それが残念だと、いう表情をつくってみた。

「ナガメテイタ、オンリー、デスカ！」

「月明かりの中にサーフボードを枕にして空を眺めていました、ほんのしばらくでした。疲れてくれば、まもなく海から上がってくるだろうと・・・考え、上がってきたのです」

「わたしたちは、このベランダに出て見ていました。広田さんは渚から戻って来ました。パパは一人で沖に向かったわ、一緒にいるべきだったの、・・・わたしも」

紀子が涙ぐんで言った。広田には、なにも知らない紀子には自分に対する責めのこころも噴出しているように思えた。

「パパは誘拐されたのよ、そうよ！そうだわ！」

菊枝が泣き声になりポリスマンに訴える。

「ミセス、マダム！ソーリー、ソーリー、デモ、デモデスー、ユーカイ！キッドナップ・・・ナニカコンキョハ、アリマスカ？」

菊枝の泣き顔に日本語を話すポリスの顔が柔和になった。女性に対する英国男性の歴史が、今にも、この老警官に流れているのだろうか。

「何か犯人から要求がきましたか？」

日本では、このような尋問や供述書のとりかたはありえない。事件の少ない環境にもよるだろう、広大な自然が住む人の心を、おおらかにさせているのだろうか。

それを見たもう一人の年輩のポリスが訛りのある英語で広田に尋問しはじめた。

「プレジデント山野は日本の官憲に追われていたのではないのか、日本を逃げてきたと言っているが？」

広田が英語で答える。

「単なるメディアの中傷だ、日本は今、活躍する政財界の逸材を過去のスキャンダルで追い落としにかかっているのだ。」

「それでかね？日本の宰相は変りすぎて覚えられないよ、まるでイタリアのようだ、これは余談だが・・・」

「日本は経済の舵取りを失敗した、バブル時代がはじけて、人の頭の中もはじけて、とても混迷している。山野社長は優秀な経営者だ、日本で儒教を学び、人を育て、人の縁を大切にして来た、その結果が、いまの日本ではスキャンダルになるのだ」

本音のことは言っても彼等には理解がしてもらえないのを承知でしゃべっている。

「マスコミがミスター山野は国会での証言や逮捕をのがれて当地に逃げてきたと、言っているが」

「山野社長は利己的なメディアの記者たちを逃げてきただけだ。今の日本人は他人のスキャンダルがとても好きだし、日本のレポーターは弱った獲物を追う狩人のような存在だ。」

「山野は悪いことをして逃げてきた、追われても仕方がないのではないのか」

その通りだ！とも言えない。古来日本人の義理とか、人情の分からない国民には理解は難しいだろう。広田も政治家と金の結びつきが政治を動かすことには正義を感じてはいないが。

だからと言って、いっこうに良くならない日本の現状にうんざりしているし、今は追われている山野の背中の方に、人間的な魅力を覚えてついて来た、広田は山野

仕組んだ計略を遂行しなければならないのだ。
「山野社長は冷静に事態の収拾を考えにこの街に来たのだ、あなた方にも解るはずだと思う、失礼な取材記者が多いと感じておられると、思う、今の日本のマスコミは狂っているから注意したほうがいい」
マスコミは報道の自由を御旗にたてて他人の恥部をさらけ出し、メデアを売り利益をあげる、不況に喘ぎ、出口の見えない多くの国民はこれに同調する！
「そうだね、この建物に布設したホールにたくさんいるよ、キミ達を待って機関銃のようにカメラレンズを向けて待っている、君たちにインタビューしたいのだろう、それにしてもキミが言うことにも同感するね！バッド、マナー、変な日本人だと思うよ」
「そうだ、でも彼らはここまでは上がってこれない、セキュリティがしっかりしているから、このコンドーミニアムのシステムは素晴らしいよ！」
エレベータはこのビルの部屋に逗留する者だけが自分たちの部屋まで専用で動き、無関係な他人には作動しない。目的のフロアーに行くには、その部屋の住人とフロントマンの許可がいるのだ。
「この国では当たり前のことだ！みんなプライバシーは保護されている。」
老警官が親指を立てて誇らしげに言った。
「もちろん、俺たちもあなたがたから聴いた事など、関係の無い日本人には何もコメントはしないさ！」
「ありがとう！感謝する。真実は一つしかない。わたし達の山野社長が一昨日の夜、あの美しい海で消えたことだけだ。私たちはなにもわからないし、とても悲しい。」
菊枝は紀子の肩を抱いて、ソファーに戻っていた。
そして、英語の不自由な菊枝に、紀子が二人の会話を小声で通訳して告げている
広田はこの二人には真実を話そうと思った。やはり山野社長の家族にはウソはかくせない。
そして、山野に会い、今回の計画は間違っていることを指摘し、芝居の幕を降ろすように説得をしようと考えていた。
「捜索は打ち切られたが、何か思い出したら、ここにコールしてくれ。」
老警官がテーブルに置いたカードを指差す。
「ヒ、ヨ、ウーガー、カカリマス。アナタガター、オカネ、スベテヲ、ハラウナラ、ヘリヲ、トバシテ、ソウサクスル、テツズキガアルノデ、ソノトキハ、ワタシタチヲ、タズネルコトガ、デキマス、オーケーデスカ、ワカリマシタカ」
「費用は会社が持つと想うわ、広田さん、すぐに手配をして、ね！そうでしょう、あなたからも会社にお願いして下さい、お願いね！ノリちゃんからもお願いするのよ」
菊枝が紀子をうながした。

広田は、黙って視線を二人に向けて笑顔で答えた。
すべてを話して山野社長の独断的な芝居を終わりにしよう、まずは家族を安心させよう。
しかし、州警察やマスメディアにはどうしたらよいか、片方では、その事実を隠しとおさなければならない。どうすればいいのだ。
しかし、真実は突然に、広田には予測もできない残酷なかたちで出現した。
帰り支度をはじめた老警官が突然、鳴り響いた着信コールの携帯電話を耳に当てると、みるみる表情が緊迫していった。
広田を玄関に呼び出して、その耳に、その内容を囁いた。
その情報は広田の脳天を打ちのめした。
山野と思われる死体がサンクチャリコーブの内陸の海にあがった、と告げた。
そんな！ばかな！間違い情報であって欲しい！死体は別人であるはずだ。日本人の顔は外人には分かりずらいだろう。特徴を見誤っているのではないか、広田は祈った。
取りあえず、死体の検案に出向いてくれ、と言う。
状況は、サンクチャリコーブの小さな中州の磯に、引潮とともに浮出してくるマングローブの根蔓が籠のように編み込まれた中に首を挟んだ状態で発見された、とのことだった。

つづく

祝出版
三戸岡道夫著
「二宮金次郎の一生」
栄光出版社　一、九〇〇円

哀愁武士道（二）

三戸岡道夫

（七）

さて、寄り合いの当日。

会場である深川の鈴半へは、いずこからともなく留守居役が三々五々集ってきた。

寄り合いといっても、特にきまりがあるわけではない。特に席順も決っていない。逐次集ってきた者が、気の合った仲間同志で適当に座って飲みはじめているうちに、やがて席が全部埋まり、気がついた時には、座敷全体が宴の渦中にあるという感じだった。

三十名を越えた留守居役が居流れる座敷は盛会で、その間を芸者衆が妍を競って行き交っていた。客の中には相当酔って芸者にからんでいる者もいれば、芸者の方もしたたかに飲んで、逆にからみついている者もいた。

「おい、もっと飲めよ」

ぐっと銚子を突き出すと、

「あなた、さっきから、飲めよ、飲めよとしか言わないのね。もっとほかに何か、言いようないの」

「ほかに言うことだって…そんなもの、あるはずがないじゃないか。それにしても染吉のやつは遅いなあ」

と酔眼をあげて、ぐるっと座敷の中を見廻した。

「そう、染吉、染吉っていわなくたって、あたしがいるじゃありませんか。憎らしい。染吉姐さんなら、もうすぐ来ますわよ」

染吉というのは深川で一、二をあらそう売れっ子芸者。顔と姿がいい上に、気っ風もよく、浮世絵の三枚絵に描かれたこともある、深川の名物女だった。留守居役たちがこの鈴半を贔屓にしているのも、目的の半分はこの染吉にあるのだった。それが現れるのがなかなか遅い。口にこそ出さないが、誰の顔にも染吉を催促する色が浮かんでいた。

そのとき座敷の端に、ふわっと華やかな花が咲いたか

と思うと、

「今晩わ、おそくなりまして」

染吉が姿を現わした。が、染吉の方もかなり酔っていた。すでにどこかの座敷を廻ってきたのであろう。

染吉のすらりと、はかなげな花が伸び上ったような身体に、着物をなよやかに着て、粋な幅広の帯をぐるぐると身体に巻きつけたさまは、着物全体が身体からずり落ちそうなしどけなさだった。それは酔ったために着物が乱れているのではなくて、なよなよと柔らかななで肩の身体は、どう着付けても、着物も帯も身体から脱げ落ちてしまいそうな、自堕落な感じになってしまうのだった。それが妖しい色っぽさで、居並ぶ男たちの心をくすぐるのである。

「おい、来たぞ、来たぞ、染吉だ」

「待ってました。さあここへ来て、酌をしてくれ」

あちこちから声がかかるのを無視して、染吉はよろめくように星川修理の前へぺたりと座ると、

「まあ、おひとつ」

銚子を持って酒を注ぐと、修理も太い眉をぐっと下げて、

「いつも、きれいだな」

「いつも同じことしか言わないのね。さあ、ご返杯。あたしにも飲ませてよ」

染吉は修理に注がせて、二、三杯、あっという間に飲んだ。

「おーい、染吉、どうしてそっちにばかり居るんだ。はやくこっちへも来い」

方々から声がかかってうるさいので、いつまでも修理のところにばかり座っているわけにもいかず、

「星川さま、たまには一人で、しんみりと来てくださいな。待っていますわ」

「うん、うん」

「いつも、うん、うん、ばかり。うん、うんでなくて、きっとですよ」

染吉はゆらりと立ち上ると、

「はい、はい、染吉、ただいま参上」

と声のかかる方へ寄っていった。

染吉の出現で座敷は一段と華やかになり、

（染吉、染吉…）

の引っぱり凧の染吉の姿を、修理は眼の端に浮かべながら、静かに酒を飲んでいた。

修理の頭の片隅には、櫓の一件がある。それが邪魔になって、いつものように浮いた気分になれなかった。

（八）

どのくらい時間がたったであろうか。

修理の眼の前へ明るい色彩が、牡丹の花が崩れるよう

に拡ったかと思うと、また染吉が座っていて、
「星川さま、あちらの方がお呼びですわよ」
と、座敷の反対側を指さした。そこには生島左内が座っていた。
「あちら様が、何かおっしゃりたいことがあるんですってさ」
そのことを染吉は伝言しに来たのである。
生島左内は榎谷藩の江戸留守居役で、修理が親しく付き合っている人物だった。情報蒐集力が強く、何でもよく知っていた。そして知っていることは、何でも親切に修理に教えてくれた。
だから今度の水留藩の櫓事件についても、生島左内なら何か情報を摑んでいるのではないかと、ひそかに期待していたのだった。ところが会場へ到着する時間が違って、座が離れてしまい、いままで話す機会がなかった。いつ生島に近づこうかと、その機会を狙っていたところだったので、ちょうどよかった。
修理は徳利を持って立ち上ると、
「やあ、久しぶり…」
生島左内の前へ座りこんだ。二人はしばらく酒を飲み交わしていたが、生島は、つと、修理の耳許へ口を寄せると、
「貴藩の櫓増築の件だが、なにか国許から言ってこられたか」
ささやくように、そう聞いてきた。
「実はそのことで難儀いたしておりましてな。ちょっと相談に乗っていただこうと思っていたところだったのです」
「油断なさらぬがよい。公儀の内偵がだいぶ進んでいると聞きました」
「やはり…」
と修理の眉根にしわが寄った。生島はつづけて、
「話が老中の耳に届いてからでは、もう遅い。情報をその手前で止めてしまうことです」
「と言いますと、どの辺で？」
生島左内は情報力にも強かったが、幕府への遊泳術にもたけていた。
「左様ですな。奥右筆あたりで止めておかないと…」
「奥右筆…」
修理がはじめて聞く名前だった。もちろん奥右筆という存在は知っていた。幕府最高機関に密着する記録係である。が、それがこのような場合に力を発揮する立場にあろうとは、これまであまり公儀対策に力を入れてこなかった水留藩には、考え及ばなかったのである。生島左内はさらに教えてくれた。
「公儀隠密がすでに動いているとなると、探った情報をすべて消してしまうということは、難しい。彼等は集めた情報を必ず上へ報告する。それが彼等の任務であり、

また、存在価値（存在証明）であるからだ。だが、報告は一挙に老中の手許へ届くわけではない。その途中に、ひとつ関所がある」
「なるほど」
「その関所が奥右筆なのですな。老中へ届く前に、まず情報は奥右筆へ報告される。情報はそこでよく整理され、吟味されて、その結果が老中へ提出されまする」
「すると奥右筆の動き方いかんによっては、事件が大きくもなり、小さくもなる、というわけですな」
星川修理は眼が開かれる思いがした。
「お察しの通り。ですから今の段階では、下手に老中などの方へ手を廻すのは、かえって藪をつついて蛇を出すようなもの。それよりも奥右筆へ手を廻した方が、よいと思いますな。奥右筆にはいろいろ物の判った方達がそろっているから、貴藩の櫓事件も、動きようによっては何とかなるのではありませんかな」
「貴重な御意見、かたじけない」
修理は思わず生島左内の前に頭を下げ、今夜、この寄り合いに出席してよかったと思った。修理はしばらくの間、
（奥右筆か）
と思案にくれていた。水留藩ではこれまで幕府に対して、そのような高等戦術を使ったことがなかった。そのため奥右筆へのルートなど、まったく見当がつかないからだった。
「わかりました。さっそく動いてみましょう。ですが、お恥かしいことながら、手前どもの藩には、まったく奥右筆への手蔓が…」
すると生島は謎めいた笑いを顔に浮べて、
「それなら、あそこに居りますよ」
生島の指さす方向を見ると、そこに染吉の後姿があった。
「えっ、あの染吉が…？」
「染吉はなんといっても深川の売れっ子、江戸の売れっ子だ。顔も広いし、気っ風もいい。蛇の道は、蛇といいますよ」
生島左内が奥右筆朝日桜之介の手蔓へと染吉を考えたのは、
（朝日桜之介の、染吉への想い入れは相当強い）
ということを、かねて聞いていたからだった。もちろん、それに対して染吉がなびいたという噂は聞いていない。しかし染吉からの依頼ならば桜之介が動いてくれるはずだと、生島は読んだのである。
染吉は星川修理に首ったけである。修理のためとあらば、染吉はよろこんで動くはずである。

（九）

翌日、星川修理は染吉の自宅を訪れた。

江戸の留守居役としていくら紅灯の巷へ出入りしているとはいえ、まっ昼間から芸者の家へ行くなんてことは、はじめてである。修理は少し気恥かしいような、てれ臭いような気分で、駕籠に揺られていった。

永代橋を渡り、富岡八幡宮の近くの横丁を曲った、小粋な感じの一角に、染吉の家はあった。入口に柳が緑の糸を垂らしており、みがき抜かれた格子戸を開けると、

「あら、いらっしゃい」

染吉の華やいだ声がした。その声には、修理の来訪を待ち受けていたひびきがあった。きっと昨夜、鈴半で生島左内が染吉の耳へ、それとなく修理の来訪を吹きこんでおいたのにちがいない。

家の中は隅々まで小粋な感じにみがき上げられ、武家屋敷住いの修理には新鮮な感じだった。

「いま髪を洗ったばかりですのでね…」

洗い髪に黄楊の櫛という染吉は、夜の座敷で見る姿とはまったく変った仇っぽさだった。

修理が長火鉢の前にかしこまると、染吉は、

「こんな家などにおいでになったことは、ござんせんでしょうから、落着かないでしょうが、そう固くならないで、お楽になさってくださいましよ。何もありませんけど、一本おつけしますから」

すでに勝手場の方では、小女がなにやら酒の支度をはじめているらしい。

「あ、いや、今日はそのようなことで参ったのではござらぬ。そんな心配、ご無用に願いたい」

「そんなことおっしゃらずに、ごゆるりとして下さいな。ご用件の方は、昨夜、生島さまの方からお聞きしておりますから、万事、染吉にお任せくださいましな」

長火鉢をはさんで酒を飲みながら、

「お武家さまに来ていただいて、長火鉢をはさんでの差し向い、さぞ無礼とお思いでしょうが、これが下町の唯一のご馳走ですのさ」

修理も酒は嫌いな方ではない。すすめられるままに、銚子の数をふやしていった。

「おなぐさみに三味線でもひきましょうか」

染吉はよろめく足どりで立ち上り三味線を手にとると、柱にもたれてぺたりと座り、流行唄を一つ、二つ、爪びきした。酒を飲みながらそれを聞いている修理は、何のためにわざわざ深川まで訪ねてきたのか、わからなくなるような気分になった。

だが染吉の方は、修理が用件をあらためて口にしなくても用件は片付く、すなわち惚れた男に頭を下げさせまいとする心使いから、わざと遊びの気分に持っていっているのだった。修理が、

「御奉公のことなど忘れて、まるで町人の身分になって、のんきに日を送っているような気分だな」

と三味線の音色に陶然となると、

「いっそ武士など捨てて、町人におなりなさいましな。はばかりながらこの染吉、星川さまぐらい一人立派にお世話いたします」

「なにを馬鹿な、そんなことを言ってはおられん身の上だ」

「やはり昨夜のお話のことですか？」

修理の身体にいら立ちが現われはじめたのをすばやく染吉は感じとって、そう聞いた。

「うむ」

「奥右筆朝日桜之介さまへのお取次ぎのことにつきましては、ご心配なく。どのようなご用件がおありなのかは知りませんが、この染吉、必ずお引き合わせいたしますから、ご安心なされて下さいませ。辰巳芸者の意地にかけても、立派にお役目を果してみせます」

「うむ、頼んだぞ」

「後日、ご連絡させていただきますから、しばらくのご猶予を下さいませ。それにしても…」

と染吉は格子戸の外に揺れる柳の糸を眼で追いながら、

「今日はほんとうにうれしい一日を過すことができました。星川さまとこんな刻が過せるなんて、夢にも思いませんでした。なんだか一日夫婦になったような気がして、うれしうございました。こんな毎日がずっとつづけば、ほんにいいのにねえ」

染吉は、意地と張りに生きる夜のお座敷姿からは想像できない、女らしい姿をさらけ出して、一人つぶやいた。

（十）

こうして芸者染吉の協力によって、星川修理ははじめて奥右筆の朝日桜之介に会うことが出来たのである。

桜之介は奥右筆の組頭として実力者であり、かつ将軍からも覚えがめでたい。桜之介は幼い頃から将軍の近習として仕え、将軍の遊び仲間、また学問の相手として仕えてきた人間である。長じては側小姓として仕え、将軍の推薦によって奥右筆に登用されたのである。だから星川修理がそのような人物と接点が持てたということは、水留藩の櫓事件のもみ消しが、半ば達成されたのも同じだといってよかった。

しかし事が事であるだけに、桜之介と修理との対面は、夜の席でということになった。そしてその席の設営は、すべて染吉に任せた。

場所はすこし小ぶりながら、深川でも超一流の錦泉亭が選ばれた。ここならばめったな客が入ることはなかったから、秘密が洩れる心配はなかった。

修理が早目に出掛けて控えていると、染吉に案内され

て桜之介が入ってきた。修理が平伏して挨拶すると、
「あいや、今夜は堅苦しいことは抜きで気楽にいこう」
桜之介の方から部屋の空気をほぐしてくれた。修理は桜之介にちょっと近寄りがたいものを感じたが、それは奥右筆組頭という桜之介の立場が、そうさせるのだった。
「今夜はぱっと賑やかにいきましょうよ、ねえ、朝日さま」
染吉の声に応じて、きれいどころが二、三人入ってきて、あっという間に賑やかな座敷になった。
染吉も三味線をひき、唄い、若い芸者衆といっしょに踊った。桜之介は賑やかな座敷が好きらしい。その辺の壺を心得た染吉の配慮で、座敷はおおいに盛り上った。
桜之介と修理との間では、仕事の話はいっさい交されなかった。が、今夜の席はそれでいいのである。こんな席で仕事の話を持ち出したら、野暮になる。ただ大いに飲んで、唄い、賑ぐだけでいいのである。そうした中で桜之介は、じっと修理という人間の人柄を、観察していたのである。
もちろん今夜の費用は水留藩の負担である。
（今夜の勘定は高くなるな）
と、一瞬さめた思いが修理の頭をかすめたが、しかしいくらかかろうと、仕方のないことだった。とにかくお家の大事がかかっているのである。

翌日、修理は服装を更め、供を一人つれて、桜之介の自宅へ、昨夜のお礼の挨拶に行った。
土産は蜜柑を籠に盛って持参した。土産については家老の永井高之助と、
（何がよかろうか）
と散々に迷った。奥右筆の宅などへはいろいろな品物が届けられるであろうから、なまじっかの物を選ぶよりも、さりげないものの方がいいということで、折しも国許から届いていた水留名産の蜜柑を籠に盛ったのである。問題はそれに添える金子だった。
（五十両か、それとも百両か…？）
土産物を選ぶ以上に、迷いに迷った。こうした場合の金額は難しいのである。少なすぎてもいけないし、多すぎてもいけない。少なすぎては効果がないし、また多すぎると、その下心が見えすぎて汚い感じになり、逆効果になる危険があるからだった。すると直感的には、
（五十両）
が相場のような気がするのだが、しかし今回はお家の重大事件である。下手をするとお家断絶にも発展しかねない。とすると、
（やはり少し気ばったところを見せたほうがいいのではないか）
ということで、百両が袱紗に包まれて、修理の懐ろに納められていた。

登城前の桜之介は忙しそうだったが、それでも機嫌よく会ってくれた。
「やあ、昨夜はどうも…」
桜之介は颯爽と入ってきて、修理の前にぴたりと座った。修理は、
「昨夜はあのような席ゆえ、土産も持参せず失礼いたしました。これはささやかながらわが国許から届きました果実、お納めくだされればと持参いたしました」
蜜柑の籠に添えて、百両の袱紗包みを差し出した。桜之介に抵抗感があるかなと思ったが、
「それは、それは…」
と桜之介は両方すんなり受取り、籠の蜜柑をひとつ手に取ると、
「うむ、お国許の名産とあって、見事な蜜柑じゃな」
と眼を細め、
「水留藩の国許には、いろいろ名物がふえているようで、結構じゃな」
すらりと言ってのけた。瞬間、修理の全身に悪寒が走った。
（隅櫓のことを言っているのだ）
修理は、
「はっ」
と平伏すると、
「申し訳ございませぬ。実は…」
と隅櫓増築事件についての経緯をつぶさに話した。
「うむ、そのことなら、ちょっとは聞いておる」
やはり公儀隠密の調査報告は、すでに桜之介のところへ届いていたのである。修理は必死の形相を顔に浮かべて、
「そんなわけでございまして、決して他意があっての増築ではございませぬ。どうか穏便に願いたく、朝日様のお力におすがりする外はないと、まかり出ました次第でございます」
修理は畳にすりつけた頭を、いつまでも上げずに、桜之介の反応を待った。
「では、さる人を紹介いたしましょう」
桜之介は短かく、淡と言った。
「はっ」
「その人に会いなされ。その人が、万事うまく取りはからってくれるであろう」
そう言って桜之介は、手許の紙片にある人物の名前を書くと、修理に見せた。そして修理が見終ると、火鉢の炭火の上にかざして燃してしまった。その人物が、御庭番頭の弓野佐兵衛であった。
桜之介が星野に力を貸そうとした理由は、染吉からの依頼だったこともあったが、結局は修理の人柄に打たれたからだった。

染吉から話があったとき、桜之介が修理に会ってやろうと思ったのは、

（染吉が惚れた男とは、どんな男なのか、見てみたい）

という気持が動いたからだった。桜之介がいくら秋波を送っても受けつけない染吉が、惚れた男というのは、どんな男なのか、興味があったのである。その底にはちょっぴり嫉妬心があったことも、否定できない。

会ってみると星川修理は、最近のへらへらした留守居役たちの中で、珍らしく一本筋の通った剛直なタイプだった。

（染吉はこの剛直なところに惚れたのだな）

と思った。修理の全身には『お家大事』の思いが溢れていた。その態度があまりにも一途で、いじらしいほどだった。その一途さに桜之介は心を打たれ、

（力を貸してやらずばなるまい）

と思ったのである。

だがその他に、もうひとつ理由があった。それは桜之介の方にも、水留藩の隅櫓事件を表沙汰にしたくない事情があったからである。

御庭番頭の弓野佐兵衛が支配する隠密が、行商人の姿に化けて、水留藩の国許へ入りこんで探り出した隅櫓増築のことは、すでに桜之介の手許に報告されている。これが表沙汰になれば、水留藩は一騒動まぬがれない。まかり間違えば、改易か、お家断絶である。

しかし事がそう大袈裟になると、水留藩の処罰だけではすまなくなり、それを統括している幕府の監督不行届きという、責任問題が起きてくる危険があった。そうなると、その責任を、老中に代わって奥右筆がかぶらざるをえなくなる危険があり、そんな事態はなんとしてでも避けねばならなかったからである。

（十）

お庭番というのは、一口にいえば、諸大名の不審な動きや、密貿易などの秘密事項を探索する、将軍直属のスパイ、いわゆる公儀隠密である。だから旗本の中でも優秀な人材が登用され、ふだんはお庭番として、将軍の起居する中奥の庭や、広い吹上の庭の警備に当っているが、いったん密命を受けると、ただちに隠密御用の旅に出るのである。

だが同時にお庭番はいつのまにか、奥右筆の下働きとしても密偵の働きをするようになってもいた。

奥右筆は表むきは何の手足も持たない、文書係、記録係にすぎないのであるが、実際はこうしたお庭番という強力な隠密を手足に持った、恐るべき存在なのだった。記録係、お庭番という、表面上は平穏な名前のセクションが、裏では強力に結びつき、将軍、側用人、老中という幕府の最高権力者に密着して、恐るべき力を持ってい

た。

桜之介が星川修理に紹介した弓野佐兵衛は、そのお庭番を束ねる頭だった。

修理はただちに弓野佐兵衛の自宅を訪れた。会うと、佐兵衛はほんとうの庭職人の頭かと思うほどの、背のひくい、丸顔の好々爺で、

「朝日様よりご指示を頂戴いたしております」

と短かく、それだけを言った。

「よろしくお願い申し上げます」

修理もそれだけ言って、深々と頭を下げた。修理がここへ来た理由など、聞かなくても十分わかっている。だから用件など、互いに聞いたり、説明などしない。それがこの世界のやり方である。そして細かい打合せなどは担当の者とすればよいのであって、

「ではこの者に会って、細かいことは相談されよ」

と佐兵衛は、火鉢の灰にある名前を書いた。修理がそれを読み終ると、佐兵衛はなれた手つきで、すばやく消した。

灰の上の名前は、足助甚蔵と読めた。甚蔵が、行商人に姿を変え、水留藩の隅櫓探索のために国許へ潜入した、隠密だった。

翌日、修理は甚蔵の自宅へも挨拶に行った。すでに佐兵衛の方から話は通っていたので、甚蔵はすぐ会ってくれたが、修理が、

「よろしくお願いいたします」

と頭を下げても、

「いや、こちらこそ」

と言っただけで、佐兵衛の方から話を聞いているとも、いないとも、何とも言わなかった。

（無愛想な人間だな）

と修理は思った。味方にすれば頼もしいが、敵に廻せば怖い人間である。その無愛想な顔をしげしげと見つめながら、修理は、

（決して敵に廻してはならない）

と心に言いきかせた。

それから二日ほどおいて、修理は弓野佐兵衛と足助甚蔵の二人を、深川の料亭に招いた。料亭は先日桜之介を招いた場所と重複しないようにと、笹竹という、少し離れた料亭を選んだ。奥右筆とお庭番とが、同じ料亭に出入りしたという噂が立つのを警戒した、配慮だった。

しかし座敷へはもちろん染吉が入って、宴を盛り上げてくれた。星川修理が幕府の要職にどんな用件を持ちこんでいるのか、染吉にはわからなかったが、奥右筆の接待につづいて今度はお庭番の接待だということで、染吉にもその内容が、

（お家の大事にかかわること）

ぐらいの見当は、十分ついていた。

事の重大さがわかっているだけに、染吉は腕によりを

かけて席を盛り上げたが、しかし佐兵衛も甚蔵もむしろ静かな席を好むらしく、桜之介のときのような賑やかなものにはならなかった。隠密という職務がそうした性格にしたのか、あるいは職業柄自重しているのか、それともそうした性格なので隠密になったのか、その辺はよくわからなかったが、

（こういう人種の方が攻め落すのが難かしいな）

と修理は感じた。

翌日、修理は供もつれずに一人で、弓野佐兵衛と足助甚蔵の自宅へ、もう一度、昨夜のお礼の挨拶に行った。手土産には国許の蜜柑を一籠ずつ持参したが、佐兵衛の方へは三十両、甚蔵の方へは二十両が入った袱紗包みが添えられていた。こうして、水留藩の隅櫓の増築を公儀隠密が調査したが、

（奥右筆がそれを握りつぶしても文句を言わない）

という了承を取りつけたのである。

こうして水留藩の隅櫓増築事件は表沙汰になるのを押え込むことができたのである。もちろん解決までには、一回や二回の挨拶や接待で事が運んだわけではない。桜之介やお庭番へは心をこめた挨拶や接待をくり返し、その結果やっと事は納ったのである。

とくに修理はお庭番の弓野佐兵衛との付き合いの度を深めた。そのため最後の頃になると、互いにまるで親戚同士の付き合いのようになり、お庭番の中に、

（星川殿のためにわれわれの力を貸そう）

という雰囲気さえ盛り上ってきたのである。政治的配慮というのは、たんに『上から指示されたからやる』というだけでは、うまくいくものではない。上からの指示はそのきっかけにすぎないのであって、事が真に成るか、成らぬかは、担当者がその気にならねば、成らないのである。修理はそれに成功したのである。

事の処理の目途がほぼついたと弓野佐兵衛から報告を受けると、奥右筆の朝日桜之介は、老中首座の大久保氏房にだけにはそっと、

（水留藩の隅櫓増築事件のもみ消し）

を耳打ちしておいた。いくら闇から闇への処理といっても、老中首座の暗黙の了解だけは得ておく必要があったからである。大久保氏房は、

「うむ、よかろう」

と返事をしたが、同時に、

（なぜじゃ）

という眼つきになった。桜之介はそれを見逃さず、すかさず、

「さる筋からのご指示もありまして…」

と付け加えた。

「うむ」

と大久保氏房はうなずいた。『さる筋』というのは微

妙な表現である。将軍という線も考えられるし、老中の誰かという線も考えられる。またうるさい大身の旗本や、大名の口きききだという可能性もある。だが、ここではそれを穿鑿するよりも、奥右筆に任せておいた方が無難だという瞬間的判断が、大久保氏房に、

（うむ）

という返事をさせたのだった。

こうして水留藩の隅櫓増築事件は闇に葬られ、表沙汰になるのを免れることができた。

隅櫓増築事件があった翌年、水留藩の藩主秋野綱政は参勤交代で江戸詰めとなり、江戸の上屋敷へ入った。

だが江戸へ来てみても、内心、気になっていた隅櫓増築についてはそれほど噂にもなっていないようだし、江戸城へ登城しても誰の口からも話題にならなかった。老中あたりから嫌味のひとつも言われはしまいかと心配したが、それもなかった。水留藩の江戸藩邸内では『大変なことになる』と大さわぎしたようだが、大したことはなかったではないか。

（家臣どもの腰抜けめ）

と、江戸家老や星川修理の命のちぢむような陰の苦労を知らない綱政は、のん気なものだった。

だがその安堵感に慣れてしまうと、綱政は逆に、誰もが隅櫓の見事さを話題にしてくれないことに、不満をおぼえるようになった。たまには、

（美麗な隅櫓を増築されたそうですな。さすが秋野殿ですな。秋野殿のように肝のすわった方でないと、そうはできない芸当ですな）

ぐらいのことは、言ってもらいたいものである。そこで時々綱政の方から、

「昨年、一層の隅櫓を二層に増築しましてな。城郭の美観が一段と上りましたわ」

などと吹聴して、星川修理の心胆を寒からしめるのだった。

同じようなことは綱政の嫡子の、綱輝についても言えた。綱政の後継者にあたる綱輝は十九歳になり、江戸中屋敷に住んでいた。もちろん綱輝も隅櫓が増築されたことは知っていた。しかしそれが幕府との関係において、どんな重大な問題を含み、そして江戸家老以下の家臣たちが、表沙汰にならぬよう、水面下で如何に動いたなどということなどは、知りもしなかった。

隅櫓事件はいまのところ無事におさまっているが、しかし、いつまた爆発するともかぎらない。そんな危険にも気づかずに、藩主の綱政も、若殿の綱輝も、のんきに構えているのだった。

（つづく）

黒船（三）

花火絵

太田和貞

五郎左衛門は在宅していた。

久闊の挨拶をかわしたあと、ふたりは顔を見合わせて笑った。

「すこし、ふとられましたな」

三郎右衛門がそう言うと、

「おぐしが白くなられました」

五郎左衛門は三郎右衛門の髪を見詰めながら言った。

「あれは私が十三のときでしたから、もう四十年になります。おやじに名主さまの坊ちゃんに怪我をさせて、ただですむと思っているのかと、十五、六発なぐられました」

「わしは柿の木が折れやすいとは知らなかったもので、柿の木の上へ、上へと逃げたのがいけなかったのです」

「市之助さん、いや、名主さまに若いのに年寄だ、年寄だ、とからかわれたのがくやしくて、どこまでも追いかけていった私が悪るかったのです」

「いいえ、いいえ。子供のこととはいえ、年寄りおやじとからかった私がいけなかったのです。それに、枝が折れて落ちた私の下敷きになって怪我をされた松造さんに申し訳なかったと、今でも思っております」

「おやじが村の年寄役を務めておりましたので、その年寄役から抜け出したくて、がんばってきましたが、とうとう名主にはなれませんでした。お武家さまと同じように、百姓にも家柄があることを思い知らされました。それで、年寄役の私にも、名主以上の働きができるんだぞとわしは御台場御普請に名乗りを挙げました。年寄役風情がなにをしゃしゃりでるのだとお叱りをいただいておりますが、わしは決して一歩もあとにひく気は持っておりません」

「そう、そう。そのことで、きょうはうかがったのです。松造さん、どうでしょう。その御台場御普請にわしにも片棒をかつがせて貰えんだろうか、……。御用人の佐藤孫太夫さまに、ふたりで一緒に、力を合わせてはどうかと、おすすめもあったことだし、……。それにお奉行さまからお羽織を頂戴したので、……」

「わしは年寄役だから、羽織も、口添えもいただいてはおりません。わしひとりの力で御台場を築き上げたいと思っております。せっかくの市之助さんのありがたいお申し出ではありますが、お断りさせていただきます」

市之助という三郎右衛門の幼名が出てきたが、その口調は三郎右衛門の口をとざさせるきびしいものがあった。

「到来物で申し訳ありませんが、……」

そう言って五郎左衛門が渡してくれたみやげのたしかな重さに、三郎右衛門は鯉の甘露煮と草餅団子とを持ってきたことを後悔した。

当時、虎屋のようかんは江戸みやげの筆頭にあげられていた。

（お羽織を頂戴したことを口にしたのはまずかった）

三郎右衛門がそう言ったとき、五郎左衛門の表情がキッとなったのを見逃がさなかった。口調が急にきびしくなり、とりつく暇もなかった。

（お羽織のことをいわなくとも、わしと組んで仕事はせんだろう）

思いがけない五郎左衛門の心の傷を見せつけられて、三郎右衛門はせつなかった。

（わしがお武家様にいだいていた反発を、五郎左衛門は名主のわしに持っていたのだ）

そう気付いて、親戚でありながら、なんとなく疎遠であった理由が納得できた。

公事宿（くじやど）佐野屋の手代藤兵衛が月末にならぬうちに名主屋敷に突然やってきた。

（みそかにくるように、言って置いたのに、……）

先日、購入した『地方凡例録（じかたはんれいろく）』二十冊の代金三両が手文庫にあるか、どうか不安に思いながら三郎右衛門は玄関に出ていった。

「これは、これは。お名主さま、お忙しいところを申し訳ありません。いいえ、先日の『地方凡例録』のお代をいただきにあがったのでは、ありません」

藤兵衛は三郎右衛門の心を見透（みす）かしたかのように、そう言って、右手を顔の前で左右に振った。

「お名主さま。こんな瓦版をつくりましたので、お目にかけようと思いまして飛んでまいりました」

藤兵衛は懐から二枚の瓦版を出して、三郎右衛門に渡した。

「二枚一組になっております。はい。これが一枚目でございます、……」

藤兵衛は一枚目の瓦版を渡したあと、三郎右衛門の表情をうかがった。

「お名主さまのお許しを得ないうちに、お名前をだす

のも、どうかと思いましたが、こうゆうものは早さが勝負でございますので、すらせていただきました。はい」

藤兵衛はもみでをしながら小腰をかがめて、下から三郎右衛門の顔をみた。

「……」

その瓦版は三郎右衛門が思ってもみなかった図柄だった。瓦版の上部から中央にかけて、

見事／奈利／名主／乃／快挙／と大きな文字が五行にわかれて板刻されていた。

左の上半部には、

文永七年／江戸湾／品川沖合／築立予定の／御台場御普請／葛西領／興之宮村名主三郎右衛門／柴又村名主五郎左衛門／入札致し候／

と小さな文字が九行寄り集っていた。

「文永七年、……」

そうつぶやいた三郎右衛門は藤兵衛の顔をみた。

「文永七年なんていう年号はありゃしません。お上の目をのがれる方便です。さっと売って、さっとひきあげる。これがこの商売のコツです。いかがでしょうか、お名前を出させていただいたのを許していただけるでしょうか、……。二枚目をご覧いただければ、お名前を出した理由もおわかりいただけると思います」

藤兵衛が瓦版をめくろうとする手を、三郎右衛門は払いのけた。

「これがわしか？」

長屋門の屋根の上で、右足を大きく前に突き出し、屋根の傾斜なりに体を沈めて、両手を広げている様子は、

「待った！。待った！」

と大声をあげているようだった。

「これがわしなら、こちらは五郎左衛門さんか？」

「はい。赤松の大きな枝から沖の黒船を睨みつけているところでございます」

はるか眼下に、黒船四隻がたよりなげに黒煙を吐いている図が小さく描き込まれていた。

「どうぞ、二枚目をよくご覧ください」

藤兵衛はそうせきたてた。

「子供が使い残した線香花火が一枚目の瓦版に偶然に置いてあったのをみて、ひらめいたわたくしの工夫でございます。あぶなくはございませんが、びっくりされるといけませんのでわたくしめがやってご覧にいれます」

藤兵衛は二枚目の瓦版を三郎右衛門に、よく見えるように両手で持った。

右の隅に大筒を据えた陣地が描かれていた。旗差し物や吹き流しが林立し、その前に引かれた幔幕に丸に三郎、丸に五郎の文字が見えた。

左手のはるか、かなたに波間に浮ぶ三本柱の黒船が描かれていた。

「よろしうございますか、……。みおとしのないように、しかとご覧ください」

藤兵衛は大砲の筒先に線香の火をつけた。

瓦版はシュ、シュと火花を散らしながら燃えてゆき、黒船に到達するとドンと腹に響く音を立てて爆発した。

三郎右衛門は思わず顔をそむけた。

「いかがでしょうか、わたくしが工夫しました花火絵でございます。御台場を三郎・五郎砲台と名付けましたのでお名前をぜひともお貸しいただきたいと存じます」

「五郎左衛門さんはどうかな、……」

藤兵衛を見る目が笑っていた。

（絵師は、よう見ている）

三郎右衛門は、そう思った。

瓦版では、二人の名主の快挙と書きながら五郎左衛門の屋敷は、赤松の大枝の上からはるかかなたの海を小手をかざした姿であらわしていた。

三郎右衛門は長屋門、五郎左衛門は赤松の大枝と、描き分けることによって名主と年寄の違いをそっと風刺していた。

絵師のその風刺が三郎右衛門にはここちよかった。

虎屋の羊かんで受けた負い目が、三郎右衛門の心からフッと消えた。

御台場の下見分にいく前の晩に、三郎右衛門は年寄役の儀兵衛、百姓代の勘八を名主屋敷に呼んだ。下男の松助には廊下に控えていなさいと三郎右衛門はいいつけた。

名主、年寄、百姓代は村方三役といって村の行政をおこなっていた。そのうち、名主、年寄は世襲制で、村の富農がその任にあたることが多かった。百姓代は、その名の通り百姓たちの代表で、名主、年寄に不正がないか、その監視にあたった。世襲ではなく、百姓から選出されるために、頭が切れ、弁舌がさわやかな者が選ばれた。

三郎右衛門は最初、海辺の葛西村で育って、舟もあやつれる松助だけを連れていこうと考えたが、それではあまりにも、みじめだった。

御台場御普請という大工事を成し遂げるためには、どうしても協力者が必要なことは、三郎右衛門にも分かっていた。

柴又村の五郎左衛門に、三郎右衛門が御用人の佐藤孫太夫さまのおことばもあるので、いっしょにやろうと申し出たのをすげなく断わられてしまったから、自分の村から協力者をみつけなければならなかった。

筆が立ち、算盤も達者な儀兵衛は御台場御普請に、うってつけだが、すこし年をとりすぎていた。

腰がやや曲がりかけた儀兵衛に、御台場御普請の大役を背負わせるのは酷であったが、儀兵衛の柔和な笑顔は、困難が予想される御台場御普請に欠かせないと三郎右衛門は信じていた。

「滅相もございません。ここでお話しをうかがわせていただきます」

三郎右衛門が儀兵衛たちを奥座敷に案内しようとしたのを、そう言って断った。

「この度のことで、池田播磨守さまからいただいたお羽織を見て貰いたいと思って、こうしてお前たちを呼んだのだ。台所でいいといわれても、お羽織をここまでお持ちするのは恐れ多い。なんとしても、奥に移って貰わなければならない」

三郎右衛門は囲炉裏の横座から立ちあがって、儀兵衛たちをうながした。儀兵衛と勘八がモジモジしている姿に、「わしの言うことに、さからうのか?」と一喝した。

奥座敷の廊下に、おずおずと入ってきたふたりに、三郎右衛門は、

「さあ、さあ、わしがいただいた御奉行様のお羽織を見ておくれ」

尻込みする儀兵衛の両手をとって、奥座敷に案内した。

「松助も座敷に入りなさい。廊下では、話がちと遠すぎる」

松助が座敷に入ったのを見定めてから床の間の前に立った。

「先日、わしは御奉行様に御台場御普請の申し入れをおこなった。その志、誠に殊勝であるとのことで、このお羽織をいただいた」

床の間に飾られているお羽織に、三郎右衛門はふかぶかと頭を下げた。それにならって、儀兵衛たちも平ら蜘蛛のように平伏した。

「丸に揚羽蝶は池田家の家紋である故、御奉行の池田播磨守様にお仕えするようにいたせと、御用人の佐藤孫太夫様から仰せ付かった。このお羽織をいただいたからには、どうしても、御台場御普請を成し遂げたいと思う。そのためには、みなの協力が得たい」

ここで三郎右衛門はことばを切って、儀兵衛たちの顔を見た。

「それは、もう、……」

儀兵衛が最っ先にそう言ったが、途中でことばをつまらせてせき込んだ。

「お名主さまのためなら、わしたちは体を張ります。みんな、そうだろう?」

儀兵衛の問い掛けに、勘八も松助も力強くうなずいた。

「そうかい。今の返事を聞いて、わしも安心した。御台場御普請に賛成してくれたのは、この三人とまだ少ないが、金平糖のしんになるケシ粒のように、まわりに賛同者を集めて、大きく成長させてゆきたい。そこで、御台場御普請とはどんなものか、明日、舟で見分に出掛けたいが、どうだろうか、……」

「喜んでお供させていただきます。わしも若いころは江戸川で舟を操って鯉やうなぎをとっておりましたから舟には自信があります」

三郎右衛門も、儀兵衛が江戸川で漁をしていたとは、初耳だった。

「おおものは獲れたかな、……」

「へい。あるとき鯉やうなぎが仰山に獲れましたので、川甚まで売りにいったことがあります。あんなに獲れたのは、一回こっきりでしたが、……」

「わしもおおものを獲ったことがある。そのときは、こんなにあばれるとは、思ってもみなかった。おとなしい娘だと思っていたが、いつの間にか、化け猫になりおった。わしがおつねを知ったのは、笹ケ崎村の地先の三太の渡しで釣をしていたときだった。笹ケ崎村の飛地で対岸の畑にいくため、川岸におりてきたおつねたち親子が困っているのを見兼ねたわしが釣り舟に乗せてやったのが、はじまりだった。渡し舟が壊れていたのが、わしら夫婦の縁結びとなったが、今となっては、よかったか、どうだか分からぬ」

「舟が御縁でございましたか、名主さまと奥さまの御縁にあやかって、舟で御台場御普請の見分をしては、いかがでしょうか、三太の渡しから舟出しましょう」

「そうして、貰えれば、ありがたい」

「幸い、わしに勘八、松助とみな舟が漕げますので、街道を歩くよりは楽だと思います」

儀兵衛がうまくまとめてくれたので、三郎右衛門は満足した。

「おつね!。膳を運んできておくれ!」

そう台所に声を掛けた三郎右衛門の声は明るく弾んでいた。

三郎右衛門たちを乗せた伝馬舟は引き潮に乗って江戸川を流れ下った。

松助はときどき櫓を軽く動かして舟の方向をなおしていた。舟の近くで鯉が水面から跳ね上がった。

「この舟が潮に乗ったことや飛び鯉といい、きょうの実地見分を祝っているようです」

儀兵衛は三郎右衛門の同意を得るかのように、三郎右衛門の顔を見た。

「ことしは鯉のそだちがよいとみえる。その鯉にあやかって、御台場が完成できたら、どんなに嬉しかろう」

「人望のあるお名主さまのことですから、みんなが協力しますだ。みんなが協力しあえば、どんな普請でもできます」

「そう言って貰えると、わしも心強い。おつねは、三百年も続いたこの名主の家を旦那さまの代でつぶしてしまうのですか?。ご先祖さまに顔向けができますかと言うばかりだ」

儀兵衛は返事に困って、三郎右衛門の顔から視線をはずした。

「お名主さま、お揃いで、きょうはどこへおでかけですか？」

突然の人の声に、三郎右衛門たちはギョッとした。

河口近くのヨシのかげで、ベカ舟を腰にゆわえた男が助簾で川底をあさっていた。

「おおッ。次兵衛か、こんなところでなにをしているのか？」

「へい。おふくろが肝の臓をわるくしたので、シジミをとりにきました。シジミ汁は肝の臓にいちばんよくきくとお医者さまから聞きましたので、……」

「それは、親孝行だのう。大事にしてやれ」

「へい、たったひとりの母親ですから、……」

この会話をしおに、松助は櫓をはずして舟にあげ、積んでいた水竿を川底に突き立てて舟をとめた。

「シジミはとれたかな？」

「へい、おかげさまで、とれやした」

次兵衛は腰の紐をたぐってベカ舟を引き寄せた。

片手をベカ舟にかけて、ベカ舟を傾けて三郎右衛門に舟のシジミを見せた。

「おお、ようとれたのう。みごとなシジミだ。おばばもこのシジミ汁をのめば、きっと元気になるぞ」

「ありがとうございます。砂を吐かせてから、夕方お屋敷にお届けいたします」

「それはありがたい。わしもおばばのご相伴にあずかって、精をつけて御台場御普請といこうか？」

「御台場御普請？」

「黒船を撃退する御台場御普請をわしが仰せ付かったので、これから品川の代官山まで下見分に出掛けるところだ」

「それは、それは、ご苦労さまです。わしで、できることはなんでもいたしますので、ぜひ言いつけてやってください」

「人手はいくらでもいる。ぜひ助けてくれ。おばばによろしくな」

「はい。ありがとうございます」

次兵衛が頭を下げたのを合図に、松助は水竿を川底に突いて舟を進めた。

江戸川の河口は海に大きく口を開き、真水と海水とがほどよく入りまじっているので、シジミの成育に適していた。このシジミをとった漁民たちは、浦安のシジミとして江戸の町に売っていた。

隅田川の江戸前のシジミより、浦安のシジミの方が粒も大きく、味がいいと江戸の町人たちに好まれていた。

松助は海岸線に沿って舟を進めた。

「潮の香りは、いいのう。心の奥まで洗われる」

「さようでございますね。お天道様の光を浴び、潮の香りに包まれていますと、黒船がきたことなど忘れてしまいます」

「こうゆうのを極楽というのかのう」

三郎右衛門と儀兵衛が話し込んでいるうちに、舟は代官山に近付いてきた。

最初は、ゴマ粒のように見えたものが、顔と手足がはっきりと見えてきて、立ち働いている様子が手にとるように見え始めた。

三郎右衛門は儀兵衛に、舳先へ池田播磨守様からいただいた丸に揚羽蝶の家紋入りの提灯を立てさせた。

赤穂四十七士の墓のある泉岳寺を参拝したことはあったが、三郎右衛門は海上から泉岳寺一帯を望むのは初めてであった。海が泉岳寺の近くまで迫っていた。

高輪大木戸から始まる東海道は海沿いに大きく湾曲していた。

ほとんど半裸の人足たちが泉岳寺一帯の高台から土俵を担いでおりてきて、東海道沿いの空地に積んでいた。

それを車町の牛車に積んで、幕府の荷揚げ場である御用地に運んだ。

土砂を詰める明俵は江戸近郊の農家が夜鍋仕事で編みあげたものであり、土砂は泉岳寺の山、品川の御殿山、松平駿河守下屋敷の山などが切り崩された。

人足たちの土俵運びのかけ声、牛車のわだちの音、舟の往来、櫓の音などが三郎右衛門の乗った伝馬舟が御用地に近付くにつれて響いた。

黒船来航以来、江戸は不景気になり、普請する家もなかった。大工をはじめ、人夫たちは仕事を求めて、この品川に集ってきた。

死んでしまおか
台場へいこか
台場いくのは
わが口のため
さきで飯喰って
二百と五十
品川宿も
目と鼻のさき
死んじゃつまらん
ドン、ドン、ドドン

ドンドン節という俗謡が江戸で流行し、不景気な江戸でも、五〇〇〇人分の木綿頭巾、暑気払薬、米、味噌などを寄進する商人が出てきた。

また、品川沖廻船の瀬取宿茶船持一五人の運送方や相撲雷樹太夫以下二〇〇人が御殿山の土取りを願いでたので、品川一帯はいやが上にも活気が溢れでた。

松助は器用に水竿を使って、舟をよけながら御用地脇の海岸に伝馬舟を着けた。

見張りの詰所から五、六人の武士が駈け寄ってきて、三郎右衛門の前に立ちはだかった。

宰相の橋

(三)



太田精一

アビダガは尋問を開始した。「いかだで川下りしていただけだ」捕えられた農夫は必死になって弁明した。しかし、アビダガは、一切聞き入れなかった。彼には、死産の双子を橋脚に塗り込め「人柱」に仕立ててまで工事の妨害を阻止しようとした、その苦心をあざ笑うかのような橋の損壊行為は、オスマン帝国への反逆であり、許し難い暴挙に思えた。

それだけではない。知能の低い聾唖の娘は、自分の双子の子供が死んで生まれたとも知らず、半狂乱となって子供を探し求めた。乳の張った胸をはだけ、子供の行方を訪ね歩く娘の姿は、村びとの涙を誘った。冷酷なアビダガも、その娘の姿を見るたびに、哀れを催し、時々食べ物を与えるよう部下に命じた。

アビダガは、この娘の姿に村びとの無言の抵抗を感じ、いらだっていた。それだけに、犯人への憎しみが募り、厳罰をもって処する方針を固めていた。

「さあ、すっかり白状してしまえ」アビダガは叫び、農夫の胸に焦げた鎖を巻きつけるよう警吏に命じた。鎖は、農夫の胸毛を焼き、魚の焦げるような臭いを発しながらその肌に喰い込んだ。農夫は、苦しみもがき、渾身の力を振り絞って鎖を解こうとした。だが、もがけばもがくほど鎖は肌に喰い込み、真赤な傷痕が残った。農夫は、苦痛にゆがんだ顔を上げ、ラディサヴと名乗った。そして橋の損壊工作を仲間と二人で実行したことを白状した。

「仲間の名前を言え。誰れがお前を唆かしこんな大それたことをしたのだ」アビダガは執拗に問い詰めた。

「一緒にやった男の名前は、よく知んねえ、自分ではヨヴァンと言っていただが。この村の者でないことだけは確かだ。また、誰れにも唆かされたわけではねえ、悪

魔に唆かされたとしか言いようがねえだ」それを聞いたアビダガは怒りに震えた。鍛冶屋に命じて鋏(ヤットコ)をもってこさせ、警吏に足の爪を一本一本引抜くよう命じた。ラディサヴは、ただ呻き声をあげるだけで、それ以上のことは何も言わなかった。

農夫が捕まり拷問されていると聞いたトスンは、物置小屋に駆けつけた。あまりの惨(むご)さに目を覆いアビダガに言った。「これ以上痛めつけても何も吐きませんよ。この農夫の目を見て下さい。農民の恨みを一身に背負って、死を覚悟で抗議している目です。橋を損壊した罪は、死罪にも値いしますが、このやり方は、かえって農民の憎しみをかきたてるばかりです」

アビダガは、トスンを睨付け物置を出た。外は、霧が立ち込め、東の山の端が明るくなってきた。トスンに言われるまでもなく、ラディサヴの口から共犯者を聞き出し、その背後関係を洗い出すことは、恐らく至難の業であると思った。イスタンブールにいるソコル大宰相の威厳に満ちた顔がアビダガの脳裏をかすめた。大宰相の沈鬱(うつ)な声が聞こえたような気がし、不興を被る恐ろしさに震えた。「この工事の遅れをトスンは、どうみているだろう。すべてこのアビダガの責任と考え、大宰相に告げ口するのではないか」アビダガのトスンに対する不信の念は深まるばかりであった。

沸き上がる恐怖や猜疑心を振り払い、アビダガは、住民に次のような布告をした。

「正午には、橋の先端の足場の一番高いところで、ラディサヴを生きたまま串刺しの刑にする。刑場には、ムスリム、セルビア正教徒ユダヤ教徒を問わずヴィシェグラード近在の住民全員が集まること」

布告を聞いた住民は、工事半ばの橋の近くにぞろぞろと集まり、黒山のような人だかりができた。子供たちは木に登ったり、石の上に乗ったりして、橋の先端の足場を不安そうに見ている。見物人は皆、初めて見る串刺しの刑を固唾を呑んで見守っていた。

アビダガは、トスンと石工の親方を連れて、小高い丘の上に立った。尖った柏(かしわ)の杭が置いてある。鉄をかぶせ、タールを塗り込んですべりを良くしてあった。モスクの正午の祈りが聞こえる。物置からラディサヴが、彼を括りつけるために用意された杭を担いで出て来た。見物人は、橋を壊した勇者を一目見ようと全員立ち上った。ラディサヴは、警吏にとり囲まれゆっくり足場の先端まで来た。下には、緑色をしたドリナ川の急流が渦巻いている。

警吏隊長は、ラディサヴの罪状を大声で読み上げた。スルタンの財産に手をかけた罪は許しがたく、万死に値するとし、串刺しの刑が宣告された。直ちに着物が剝ぎ取られ、上半身が裸にされた。胸には鎖の火傷の跡が残っ

ている。手を後に縛られ、俯向にされた後、二本の丸太の上に乗せられた。両足の踝は、綱で結びつけられ、外側に大きく引張られて足を拡げさせられた。尖った杭は、ラディサヴの両足の間に入るように仕組まれている。ジプシーの警吏は、スボンを裂き肛門を拡げた。杭は肛門から差し込まれ、体の中に打ち込まれて行く。杭が打ち込まれるたびに、上半身がのけぞり痙攣した。あまりの苦痛に身をよじり、血管が皮膚から突び出さんばかりに膨れ上がった。

警吏は、杭が内臓を傷つけないように注意しながら打った。杭が肩に達し、肩の筋肉が盛り上った。警吏は、素早く肩の筋肉を十字に切り裂いた。杭の先端は、その切り裂いた個所から現われ、耳の脇にまで達した。血は、杭の根元と先端から流れ出ているが、内臓を傷つけていないため、ラディサヴは生きていた。

両眼をかっと見開き、大きく開けた口から涎を垂らし、顔は蒼白となっていた。だが、心臓は波打ち呼吸も止まってはいなかった。

警吏隊長は、アビダガに処刑の終ったことを報告した。「罪人は、生きております。内臓に傷を与えてはおりませんから、もうしばらく生き続けるでしょう。すべてご命令通り行いました」アビダガは、黙ってうなずき、馬に乗って刑場を立去った。その背中には、淋しさが漂っていた。

ヴィシェグラードの町の人びとと人夫たちはこの残忍な処刑を見て震え上がり、串刺しにされたラディサヴの姿に目を覆った。セルビア人は、声をそろえて祈りの言葉を捧げた。

「聖者さまだ」「聖者になったんだ」群集の中から悲痛な声が聞こえ、やがて大合唱となってヴィシェグラードの町にこだました。腰から上を裸にされたラディサヴは、目を見開き、陽の光の中で凄惨な姿を晒し、浩然と群集を見続けていたが、やがて力尽き息絶えた。セルビア人たちは、ラディサヴを神に召された殉教者として讃え、十字を切りながら、アビダガへの憎悪を深めて行った。

これまでムスリムの支配に柔順であった人たちも、アビダガの残忍で、偏執的な性格への反感が募り、次第に反抗的な態度を示すようになった。アビダガの命により、ラディサヴの遺体は道端に棄てられた。烏(カラス)が遺体に群がってきた。鋭い口嘴で血のついた肉片を啄ばもうとしたその瞬間、四方から礫が飛んできて、烏の群を追い払った。監視人の二人のジプシーは、礫の雨に危険を感じ、ただ手を拱いて見ているだけであった。カラスの群は、近くの松の木に止まり、群集の立ち去る機会をじっと窺っていたが、夕闇が迫る頃、いずくともなく飛び去った。

肌を突き刺すような寒気が、ヴィシェグラードの谷間に下りてきた。監視人のジプシーは、遺体の側で、焚火

を囲み暖をとっていた。セルビア正教徒たちは、爪に火をともすようにして貯めた金を集め、彼等を買収し、遺体を貰い受けた。「死骸を野晒にし、鳥や獣の餌食とせよ」アビダガの命令は、二人のジプシーの耳に地鳴りのように響いていた。だが金の魔力には抗しきれず、発覚の恐怖に怯えながら、遺体を正教徒たちに引き渡した。遺体は、山に運ばれ、セルビア正教の儀式にのっとり、秘かに葬られた。

ラディサヴの処刑は、ヴィシェグラードの町の人たちや人夫たちの心を一つに集め、キリスト教徒としての誇りを結集する結果となった。トスンは、正教徒たちの怒りの眼差しを敏感に感じとった。「このままでは暴動も起きかねない」トスンは、暴動による工事の中断を何よりも恐れた。正教徒ラドヴィッチの隣に住むトスンは、ラドヴィッチや野菜売りの農民などから、工事への不満の声が耳に入っていた。トスンは、来春の工事再開までに、イスタンブールのソコル大宰相に実情を説明し、同宰相の口からアビダガのやり方を改めるよう命じて頂こうと決心した。

「水の精の噂」もまだない九月の穏やかな金曜日のことであった。トスンは飯場で、石工の親方と工事の打合せをしていた。すると若い娘の声がした。「卵はどうですか。今日とれたての卵ですが」戸口に、金髪で蔦色の目をした美しい娘が立っていた。飾り気のないふくよかな娘であった。娘はナダと名乗り、卵の入った籠を抱えていた。

トスンは、籠の中の卵を残らず買って、人夫の夕食用にと親方に与えた。「有難う。また買ってね」ナダは少こし含羞みながら微笑んで、立去った。伸び伸びとした四肢、大きな胸のふくらみ、きらきらした蔦色の目、優しい微笑み、いずれもトスンの心をとらえて離さなかった。トスンは、これまで思ってもみなかった不思議なときめきを感じた。

ナダは、その後も時々卵や野菜を売りに飯場に来て、トスンとも親しく話をするようになった。十一月、トスンが正教徒ラドヴィチの隣に小屋を建て、自炊生活を始めると、卵、チーズ、野菜を毎日売りに来て、時々炊事を手伝うようになった。トスンは、ナダの来るのを秘かに期待した。来るとつい余分に買い過ぎて近所に配るはめとなった。

ナダもトスンの都会的な雰囲気の漂う知的な風貌に、初めて会った日から魅力を感じていた。トスンとの会話を重ねるうちに、トスンの橋の建設にかける強い意志と情熱がナダの心をとらえ、ますます魅かれていった。ベッドに横たわると、トスンの面影がまぶたの奥にちらつき、胸を締め付けるような甘美な想いに悩まされるようになった。

トスンの帰りが遅くなる日が続いた。十一月のあの運命の日のことである。ナダは、トスンのために食事を用意して帰りを待っていた。すると激しく戸を揺する音がして、トスンが飛び込んできた。彼は焦燥した顔付きでいきなり、ナダの手を取り引き寄せた。ナダは突然のトスンの態度に驚き、思わず身を引いた。「どうしたんですか。いきなりそんな顔をして」何か不吉な予感がナダの胸を掠めた。

「今日、ラディサヴという男が工事の妨害をした廉で捕えられた。共犯者がいるらしい。極刑は免れないだろう」トスンは、何かいい知れぬ不安に駆られ、吐き捨てるように呟いた。この地で唯一人心を許すことができるナダの暖たかい体に触れ、安らぎを得たかったのだ。

ナダは、トスンに抱き寄せられ、その胸に顔を埋めた。激しい陶酔が躰を駆け巡り、気が付いた時には、口唇が塞がれていた。

ナダには、どこをどう歩いて家に帰ったのか分らなかった。夢見心地で、家の戸を開け中に入ると、突然衝撃が彼女を襲った。兄のスロボダンがラディサヴとともに架橋工事の妨害をしていたことを告白したのだ。「ラディサヴが、俺の名前を白状したらおしまいだ。彼は口を割るような男ではないが、拷問に耐えかねて白状するかも知れない。その時はお前も覚悟してくれ」ナダはスロボダンとラディサヴが友達であることは知っていたが、まさか二人が橋の工事の妨害をしていたなどと夢にも思わなかった。「もし俺が共犯者だと名乗って出たら、ラディサヴが助かるのならそうしてもいい。だが、アビダガは、ラディサヴや俺を許しはしない。極刑は免れないだろう」兄は悲痛な声でナダに語った。

それを聞いて、ナダは突然暗闇の中に突き落されたような思いがした。トスンとの結婚を夢みて、イスラームに改宗しようとさえしていたナダの心に兄の言葉は、あまりにも残酷に聞こえた。ナダは、敬虔なセルビア正教徒で、日曜日には欠かさず教会に通っている。しかし、トスンへの愛は、キリストの教えを超えるものであった。ムスリムのトスンは、自分と結婚しても、将来他に複数の妻を持つかも知れない。そうした不安がないわけではなかったがナダはトスンの変らぬ愛にすべてを託すことにした。実際、ヴィシェグラードに住むムスリムで複数の妻を持つ人は、ごくわずかしかいなかった。

ラディサヴは、いかなる拷問にも耐え、口を割らなかった。スロボダンの名を漏らすことなく、串刺しの刑を受け、最後まで正教徒としての誇りを失わなかった。スロボダンは「聖者」とあがめられたラディサヴの遺体を仲間とともに埋葬した。彼は、しばらく家に身をひそめていた。だが警吏の探索は厳しくなるばかりであった。スロボダンは、村人や家族に迷惑のかかることを恐れて、秘かに村を立去った。

ナダは、兄にトスンへの想いを打明けることができなかった。激しく切ないトスンへの思慕に我を忘れ、繰り返しトスンの名を呼ぶ日々が続いた。だが、ナダは、ラディサヴが串刺しにされたその日から、トスンの小屋に近づかなかった。

急にナダが来なくなって、トスンは空虚な孤独感に苛れた。そんな時スロボダンが家を出たとの噂を耳にした。「橋の損壊工作をしたもう一人の犯人は、ナダの兄ではないか」疑念がトスンの心をとらえて離れなかった。「愛するナダの兄がそんな大それたことをするはずはない」トスンは、そう思うことによって疑念を振り払おうとしたが、心のわだかまりは消えなかった。ナダの兄を犯人と思いたくない気持が、トスンの心をとらえ、共犯者の究明を避けようとする自分に嫌悪感を覚えた。

ナダは、ラディサヴの凄絶な死を同じ正教徒として、見過すことはできなかった。また、兄がラディサヴの信念と友情によって救われたことも心の重荷となった。「私だけが幸福になって良いものだろうか」苦しみ抜いた末、トスンへの想いを胸の奥に封じ込め、甘美なあの一夜の想い出だけで生きて行こうと決心した。

「橋の損壊工作」といった大事件があったにもかかわらず、工事は続けられた。しかし十二月に襲ってきた大寒波は、地上のすべての活動を停止させずには置かなかった。地面は凍り粉雪が舞い、工事は中断せざるを得なくなった。さすがのアビダガも村を去った。トスンもナダの来なくなった侘しい小屋に一人で過ごすことはできなかった。吹雪の夜、風の音が戸を叩くたびに、ナダが来たのではないかとしばしば戸口に出てみた。だが、ナダは現われなかった。何度、自分からナダの家を訪ねようと思ったことか。そのたびに、ナダの兄への疑惑が心のわだかまりとなって、ナダの家族への接触を避けることになってしまった。

やがて、トスンもヴィシェグラードを後にした。ヴィシェグラードの長い冬はすべてを封じ込め、アビダガの恐怖をも雪の中に閉じ込めた。

（つづく）

この物語は、旧ユーゴスラビア連邦共和国のノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチの「ドリナの橋」（松谷健二訳）の一部をもとに作者の主観を交え、とりまとめたものである。

シナリオ〔大人の見るアニメーション映画の試み〕

龍化妖姫（四）

―周の幽王伝―

相原精次



49　后の居室

義　怨麗よ、ワシの胸の中で、今メラメラ燃えるものがある。

怨麗　何をそう興奮していらっしゃいます。

義　いよいよ、その日に向かって細かな計略を立てる時が来たようだ。

怨麗　それでは、父上様、いよいよ……

義　やむを得まい。

怨麗　事はどんな風に？

義　幽王には一日も早くこの世から消えてもらわなければならない。可愛い孫のため、そしてこの周という国のために。

怨麗　殺す？

義　天も許してくれるはずだ。幽王、宮涅はこの周室を滅ぼすためだけに、この世に生まれてきた男だ。

今、王の身近にいるあの褒姒という女はな、王を腑抜けにし、周室を滅びに導く使者なのだ。神龍の化身じゃ。

怨麗　神龍の化身？

義　幽王も、お前もまだ幼児の頃の話だが、この鎬京の街の中に、妙な歌がはやってな。

怨麗　それは、どんな歌ですか？

義　山桑の腰の強い弓が鳴る
　箕の矢房に矢を満たし
　つぎからつぎへ射かければ
　周の王様逃げまどう
　周の王様逃げまどう
　と、な。こんな歌だった。

怨麗　周の王様逃げまどう、ですか。不吉な歌ですね。

義　褒姒というのは、この歌とも深い深い因縁を持った、周王室滅びの使者なのだよ。

怨麗　そんな女に魅入られてしまった王を、どうすれば

いいのですか？

義　取り返しのつかぬ事になる前に、手を打つより仕方がない。そこでな……

（怨麗に近づいてなにやら耳打ちをする）

50　王宮の庭　（木立の中）

葉が枯れたままさがる木々が並ぶ。幽王は褒姒を連れ、大勢の侍女を従えて、王室の庭を散策している。そこに義が登場。

義　宮涅様、お変わりはございませんか？

幽王　ワシは至って元気だ。これまでに知らぬほど、心は爽やかだ。褒姒というこの女を知って以来な。

義　それは何より、と申し上げたいのですが、それは恐ろしいことの前触れのように思われます。

幽王　何をバカなことを言うか。ワシはこの女を正式に后とすることにする。ワシの身近では既にそうなっている。皆の者、この褒姒は……？

侍女達　はい、お后様でございます。

幽王　その通り。こういうわけじゃ。

義　お戯れはいけません。王室には后は一人。そして、我が娘怨麗こそ誰もが認める后でございます。

幽王　ワハハハッ。そう思いこむのは、お前たち親子だけというのも、もう間近であろう。今のうち、十分その意味をかみしめておけ。この褒姒の腹にはな、我が子が宿った。この子供が生まれたら、めでたくワシの後継ぎとなることも、ワシは決めたぞ。

51　王宮の庭　（池の畔）

幽王　義よ、この空を見よ。黄砂はここズッと衰える様子を見せていないではないか。ワシは西の戎のことが気にかかる。ワシへの意見より、その事の方に気を遣ったらどうだ？

義　宮涅様、私は、十分我が身の役割は心得ておるつもりです。王こそ、その池に、水がほとんどなくなっていることを憂えて下さい。地震によって岐山が崩れました。そして、恵みの三つの川には水の流れが止まり、この池にもこの通り水がありません。水を正しく支配できない王がどのような王であるかを、お考え下さい。この九国の全ての水を治められた夏の時代の禹帝のお怒りを。

幽王　ううん、言わせておけば。ワシはこれまでお前のこと、と思えば言葉も大目に見てきた。それをいいことに、近頃、明らかにワシに反抗するような様子が増してきた。そんな様子がなお続くようであればワシも我慢をせぬぞ。よく承知しておけ。

義　昔、夏の時代に禹帝文命様は、家来儀狄が作った酒をひとたび口にして、これは国を滅ぼす魔性の水だと予言し、その後、桀の代になって桀は酒におぼれ、酒の糟で山を築き、とうとう夏の国を滅ぼしてしまったといいます。

52　紂王の乱脈

（儀、以下声のみで）

そして、殷時代になって紂王は、やはり酒で池を満たし、毎夜、長夜の飲をなすばかりでなく、これに意見した者全てを、炮格の刑に処したといいます。さしも栄えた殷の国もそのために滅びました。幽王様、なんとあなたに似ていることではありませんか。

幽王　バカめ！　我が王室がそれほど脆弱なものと思っておるのか。

53　崑崙の山

（幽王、以下声のみで）

我が周室、五代目の穆王の時だった。遊びの足は崑崙の山に崑崙の神仙境で穆王が愉快そうに仙女、西王母と酒を飲む。

急を知らせる使者が来て造父の御す馬車で空中を飛び、穆王は鎬京に帰る。

西戎を平定する。

義　いいえ、一時たりとも、この義、周室を心配しないときはありません。

幽王　そうか、周室には常に造父あり、ということだな。ワハハハッ。

二人は冷たい目でしばしにらみ合う。

54　王の居室

幽王　虢石父はおるか？

虢石父　ははッ、幽王様、いつでも王の身近に影のようについております。王様のご命令に対し、瞬時にして役立ちますようにと。

幽王　それでこそ我が宰相。よいか、今から言うワシの言葉をよく聞き、すぐにも九国全ての諸侯に内容を知らせよ。

虢石父　ははッ、して、その内容は、いかような。

幽王　ワシの大切な褒姒が身ごもった。きっと立派な男児を生むに違いない。今後、后は褒姒であり、宜臼は廃嫡し、今度生まれる子供こそ、我が後継ぎであるとな。

虢石父　それはまた急なことでございます。

幽王　そうじゃ、ワシは決心したことはすぐに実行する男だ。

虢石父　幽王様、そのご意志に反対するのではありませんが、このようなことは慎重になさいませんと、諸侯の間にいらぬ不安を与えかねません。

幽王　ワシの命令だ。

虢石父　褒姒様は、たかだか、褒という小国から、しかも貢ぎ物として出された方にすぎず……

幽王　黙れ！　虢石父、ワシの命令がすぐに聞けぬと言うのか。

虢石父　（あわてて）いいえ。

幽王　では、すぐに実行しろ。

虢石父　はっ。かしこまりました。ただ、今後のために怨麗様と、宜臼様の扱いをどうなさるのか、そして后の交代と廃嫡をいかに諸侯に不安なく理解させるか、この件を確認しておく必要はあるかと存じます。

幽王　ううん……そうか。虢石父、もっと近くへ寄れ。

55　后の居室

義　怨麗よ、いよいよ事を起こさぬと、とんでもない事態になりそうだ。宮涅の迷いはますます深まっているようだ。私は、すぐにも我が領国の宰相に西へ走ってもらい、戎と事を相談してくるよう命じようと考えている。

怨麗　いよいよ実行、ということですね。

義　くれぐれも、幽王には気づかれないように。

怨麗　はい。

義　宜臼の命をしっかり守れ。血迷った宮涅は、いつなんどき、命をねらわぬとも限らぬ。宜臼は常に危険にさらされていると思え。

怨麗　はい、分かりました。

義　宮涅は褒姒が子供を産むのをしおに、きっと何か動き出すと私は見た。その先に手を打ってしまう必要がある。

56　王の居室

幽王　申侯義に手抜かりがあり、よって斬る。こういう

筋書きを作るというのだな。

虢石父　はい、左様でございます。そして兵を申の国に向け、一気に申をつぶす。怨麗も宜臼も、義の不始末の廉で、処刑される、というわけです。

幽王　なるほど。諸侯も、后の交代をやむなしと見るだろう。それで、義は何の不始末をしでかしたことにする？

虢石父　あまりあわててはなりません。もうしばらく時をください。わたしめが、自然な形で義に不始末を犯させてみせましょう。

幽王　そうか、よし、それはお前に任せよう。ところで虢石父よワシの褒姒が、とんと笑顔を見せたことがない。生まれてこの方、笑うということを知らぬという。ワシは何としても、褒姒の笑顔を見たい。これについても何とかならぬか。近頃、また顔色がすぐれないのだ。

虢石父　左様でございますか。褒姒様の喜びそうなことを、何か考えてみてはいかがでしょうか。

幽王　うーん。そうだな、あれは日頃から瀧のたぎり落ちるところで成長したので、もっと水のある風景が見たいと言っている。どこかそういうところへ連れて行くのもよいが、どうかな？

虢石父　瀧のある場所でございますか……それでは、いかがでしょう、この王宮の庭の中に大瀧を造るというのは。

幽王　なに？　王宮の庭に瀧をと？

虢石父　左様でございます。どこへ出かけるより、王宮の庭に出さえすれば、豊かな水がたぎり落ちる瀧が、居ながらにして見られるということでございます。さぞかし、褒姒様もお喜びになると存じます。

幽王　ワハハハッ、それは愉快じゃ、それは面白い。よし、お前のその意見を聞くことにしよう。小さなものではつまらぬ。庭にとてつもなく大きな瀧を造れ。

虢石父　いかがでしょう。その仕事を、義にお命じになっては。

幽王　義にやらせるのか。

虢石父　はい。山を築き、郊外の川から多量の水を引かせる。大事業でございます。この事業の途中で、義に何か不始末を犯させる、ということにしては。

幽王　なーるほど。名案じゃ。さすが虢石父。……ただし、まず瀧の完成が先じゃ。義を始末することは瀧を完成させてから。……いいな。

57　王宮の庭

瀧を造るため、大工事が始まっている。申侯の義はあれこれ仕事の指図をする。

大岩や土砂が運ばれ、庭には大山が築かれ、水路も造られている。

58　農民の畑

畑は干上がり、作物はない。農民達は頭を寄せ合い、何かヒソヒソ話し合う。

59　川の堰

ほとんど水の流れていない川を堰き止めて水を溜めている。傍らで水路を造る作業が続いている。

60　王宮の庭

幽王　褒姒よ。よく見ておれ。間もなく庭に瀧が出来るのだ。外の川から水が引かれ、この庭に大きな瀧が完成する。すべてお前を喜ばせるため。……どうした、嬉しくはないのか。

褒姒　いいえ、王様、もったいないほどのお気遣いと感じております。

幽王　それなら、もう少し嬉しそうな顔をしてくれ。

褒姒　こんな大がかりなことをしていただいて感謝しております。ただ……

幽王　ただ……どうした。

褒姒　このように尽くしていただけばいただくほど、私の心の中には言いしれぬ不安が募って参ります。

幽王　どういう不安だ？

褒姒　これが、人のねたみを買い、私のこの身体に宿った子供は決して幸せになれないのではないかと。

幽王　ワハハハッ、ねたみ、だと。お前の出産する子は民たちの祝福は受けても、ねたみなど持たれる道理はない。いらぬ心配だ。

褒姒　いいえ、気になります。この庭の瀧に水が流れると共に、何か事が起こるのではないかと。

幽王　どうしたのだ。気の弱い。このワシが付いておることを忘れてはならぬ。（褒姒を強く抱く）

61　川の畔

農民たち、堰と水路の工事現場に大勢集まり、申侯義を取り囲み「水をよこせ」と騒いでいる。

62　幽王の居室

家臣　幽王様、鎬京城下で農民どもが水をよこせと騒いでおります。反乱を起こしかねない勢いだとのことでございます。

幽王　何だと、農民が騒いでおると？　義は何をしてお

る。申侯の義は。

家臣　現地で、農民たちを説得しているとのことでございますが。

63　川の畔

義　皆の怒りは私もよく分かっている。近々、必ず皆の心をくめる日があることを約束する。今日のところはこれ以上騒がないでくれ。

農民たち口々にののしり、幽王への不満を叫ぶ。

義　必ず、王が皆の望むような政治を執るよう説得しよう。私にも考えがあるのだ。どうか、今度私が皆の前で話をすることがあったら、それに力を貸してほしい。それまであとわずか、待ってほしい。

農民Ⅰ　おい、みんな、申侯様がああ言っておられる。あと数日待ってみようじゃないか。

農民Ⅱ　もし、近い内に事がかなわなければ、我々は殺されてもいい、王城へなだれ込むぞ！

農民Ⅲ　そうだ、城の蔵を襲って、食い物を奪い取れ！

農民Ⅱ　俺たちはもう我慢できないところまで来ているんだ。

義　分かった。私にも考えがある。命を懸けて約束する。

農民Ⅰ　申侯様もこうおっしゃっている。今日のところは静まれ！

64　王宮の執務室

虢石父　申侯様、私は、幽王様の政治の執行官として、王のお言葉を伝えよう。

近頃、農民が不穏な動きを見せているようだが、王様はそのことをひどく心配しておられる。あなたが農民をそそのかしているのではないかと。

義　何を言われる。事は全て王のやり方に民たちが不満を持っているということだ。私は、農民たちを抑えこそすれそ、そのかしておるなどとはとんでもない言いがかり。そそのかして、何の益がありますか。

虢石父　しかし、王様はそうは思っていない。いずれ、事が大きくならないようにしないと、あなた様の将来の大きな汚点となりますよ。

義　宰相殿は、私にそう言う前に、むしろ執政官として王を諫める必要がありましょう。王城内に瀧を造るなどということが、いかにばかげたことか、と。

虢石父　（皮肉を込めた言い方で）そのお言葉、確かに王に伝えておきましょう。

65　王の居室

褒姒　王様、私の胸騒ぎは益々高まります。お腹の子供が元気よく動くのが分かります。でも、このままでは安心して産めません。

幽王　褒姒よ、ワシはお前が安心出来るよういろいろ考えておる。きっと喜んでくれるはずだ。

后の怨麗と、その子宜臼はな、近々この世から姿を消すだろう。虢石父が今、申侯義の様子を窺っておる。近い内に義が何か不始末を犯すことになっている。そのときは、義も、怨麗も、宜臼も命を落とすときだ。機が煮詰まるまであとしばらく待て。

晴れてお前が后となり、生まれてくるこの腹の中の子供は、ワシの世継ぎだ。

褒姒　そんなに都合よく事は運ぶのでしょうか。

幽王　ワシに出来ないことはないのだ。もし、事が起きても褒姒よ、九国の諸侯の兵士をたちどころに呼び寄せることも出来るようになっている。

ワシが太鼓をたたかせ、烽火の合図をすれば、瞬時にして煙が空に向かって昇り、近隣の諸侯から順次兵士がこの城を守りに馳せ参じるのじゃ。

褒姒　そうですか。烽火、ですね。空に昇るのですね。

龍が空に昇るように。

幽王　龍が空に昇る。なるほど、面白いことを言う。そうじゃよ。龍が昇るように煙が空に昇るのじゃ。

褒姒　その様子を見てみたい。

幽王　ほう、褒姒は見たいか。よし、よし、ワシの威力がどんなものか一度見せてやろう。虢石父よ、烽火を上げる合図だ。太鼓をたたけ。烽火を上げよ！

命令と同時にドンドンと太鼓の音が王城の中に響き渡る。

66　農民の働く畑

農民Ⅰ　おい！　あれを見ろ！　烽火だ。烽火があがった。

農民Ⅱ　西の戎の侵入だ。戦が始まるぞ！

農民Ⅲ　家族たちを山の方へ避難させろ！

農民Ⅳ　一体何という世の中だ。自然の異変に加えて、戦とは。

農民Ⅰ　さあ、避難しろ！

農民たち大騒ぎになる。

（つづく）



霧に包まれていた光(5)

鍋屋次郎

シモンや清吉と別れて山科を出発したオルチーノ神父が、堺の大店「丸大」の裏口通用門から足音を忍ばせて、離れの一室に入ったのは翌々日の明け方近くであった。そんな時間にもかかわらず主人の桐兵衛が待っていたかのようにその離れの入り口から声を掛けた。

「神父、急な話がありますので一寸お邪魔してもいいですか」

と言いながら、オルチーノ神父の返事も待たずに離れの座敷に上がってきた。挨拶もそこそこに

「神父、あの鬼嵐坊がご迷惑をお掛けしたのではないでしょうか。紹介者がしっかりしていたので神父のご用にたてればと思って使い走りをさせたのですが」

と切り出した。

オルチーノは、よく分からないといった面もちで桐兵衛を見つめていた。

「神父、実はあの鬼嵐坊と言う山伏は食わせ物でして、山伏仲間との間に女と金の問題を起こして、いられなくなって逃げ出してきた男でした。三日前の夜、鬼嵐坊が仕えていた山伏の先達が彼の行方を捜して私の所にやってきました」

オルチーノは目を丸くして桐兵衛を見つめている。

「そして心配になったのは、昨日から京の都内外にキリシタン探索の高札が建てられ、バテレン情報には大きな懸賞金が掛けられていると言うことです。鬼嵐坊が食い詰めていて何をするか分からないと思うと心配でなりませんでした」

オルチーノはここまで聞くと、シモンと丑松と徳治達のことが心配になってきた。

「桐兵衛さん、夜が明けたら伏見の播州屋さんまで使いを出していただけませんか。用向きは、清吉さんにシモン神父一行を追い掛けていただきたいのです。彼らは鬼嵐坊の道案内で丹波篠山を目指して、二日前の夜、山科

を出発しています。警戒の少ない北回りで八木に出て丹波篠山に行くと思います。幼い子供もいるのでそう早くは歩いていないでしょう」

これを聞いた桐兵衛は

「かしこまりました。直ぐその旨をしたためてお志乃に持たせましょう。播州屋の近くまでは身内同様の駕籠を出しましょう」

と引き受けてくれた。

それから二日後の昼前、お志乃が持ってきた紫色の袱紗に包まれた手紙を開けた播州屋主人徳右衛門は、読み終わると番頭の嘉吉に直ぐ弟の清吉を呼びに行かせた。

その日の午後三時頃には清吉は播州屋を飛び出して、丹波から京都寄りの八木を目指して急いだ。

一方、高札の文面を頭に描きながら、丹波篠山の実家に向かって歩いている鬼嵐坊は、その時は既に八木を過ぎて観音峠にさしかかっていた。篠山が近くなるに連れて、鬼嵐坊の頭の中は、彼にとって何よりのご馳走である「銀二十枚」の高札の文章で一杯になっていた。

彼は、シモン達よりも少なくても三日行程は早いと考え、シモン達を探して引き返し始めた。彼の頭の中は、全員を丹波篠山まで連れて行き、丹波篠山を含めた近郷全体を持ち場にしている村役人に、そのまま引き渡すことを考えていた。

シモン達は昼は人気のない寺の縁の下等で休み、出来るだけ夜歩くことにしていた。夜も昼も歩き続けている清吉が、伏見を出て三日目の夜、今の亀岡市の北の街道でシモン達に追いついた。

清吉は事情を話し、一同と共に街道から北に入った愛宕神社を目指して休息場所を探し、松林の奥にお寺らしい建物を見つけて近づいてゆくと、誰も住人のいないお堂があった。そこの縁に座り込んだ。

清吉の話を聞いたシモンは黙り込んでしまった。どうしていいか分からない。丑松の女房ツルは

「やっぱり悪人だ、あいつは。私を見る目が気味悪かった。父ちゃん、これからどうしたらいい?」

と言って丑松を見たが、丑松もこの先どうしていいか分からない。少なくとも、このまま丹波篠山を目指すことだけは出来ないと思っている。

突然、徳治が大声で

「丑松、お前が大阪の住吉を捨てようと言わなければ、そしてキリシタンを捨てていればこんな惨めなことには

ならなかった。どうしてくれるんだ。もう食べ物も底をついているし、金もない」

とわめきだした。徳治の女房スギは徳治の剣幕に、そうだそうだと言わんばかりの顔をして、丑松とその女房ツルをにらみつけている。

丑松の十才になる娘お糸は、おびえている徳治の五才の息子徳松と三才の銀次を両脇に抱えて、これからどうなるのかと、表情も硬く大人達を見上げている。

ツルは

「徳治さん、今喧嘩している場合ではないでしょ。先に進むことも出来ず、引き返すことも出来ない。もう歩くのもこの子供達には限界。皆で死にましょ。これ以上バードレ様や清吉さんにご迷惑を掛けられない」

と言って丑松を見た。丑松はシモンを見て

「バードレ、俺たちはここで死ぬ。どうか清吉さんと逃げてくれ」

と言うと、シモンは

「丑松さん、徳治さん、スギさん、ツルさん、デウスは愛の神だ。皆さんを決して見捨てることはない。皆で祈りましょう」

と言って、手を胸の前で組み、頭を垂れて祈りだした。

「神様、この僕に、今のこの状況を切り抜ける方法を授けてください。丑松さん、徳治さん達がどの道を歩いていくべきか教えてください。ここにいる全ての僕が、仲良く進むことが出来ます様にお導き下さい。私の命は御心に任せます。この家族を救ってください」

大人も子供も皆頭を下げて、このたどたどしいシモンの日本語での祈りを聞いていた。清吉は、祈りの姿勢はしていたが、頭の中で

「本当にキリシタンの神様はいるのだろうか。いるのであれば、この切羽詰まった状況に何故手を差し伸べないのだろうか。シモンはこれからどうしようとしているのか」

と考えていた。

やがてシモンが祈り終えて最後に「アーメン」と言ったが、徳治とスギはこの「アーメン」の言葉に唱和しなかった。

暫く沈黙が続いた後、丑松が漸く口を開いた。

「徳治、お前の言う通りかもしれない。が、しかし、俺たちは覚悟の上で大阪住吉を捨てたのではないか。捕らえられるよりも、死んでパライソへ行こうと誓ったのを忘れたのか。スギさん貴方も同じだ」

徳治もスギも黙ったまま返事をしない。

そこで清吉が、

「バードレ、夜が明けたら丑松さんと街道の警戒状況を見てきます。鬼嵐坊に出くわさないような道を考えましょう。そして堺にいるオルチーノ様を訪ねて歩きましょう」

と言うと、スギが

「私たちはこのような幼い子を連れて、もう一歩も歩けない。私たち一家はここで死ぬ」

と喚きだした。シモンが

「デウスは、殺すなと教えています。自分で自分を殺してもいけません。自殺は駄目です。パライソに行けません」

ここまで言うと、徳治は

「バードレ、じゃ、どうせよと言うのか。黙って鬼嵐坊が連れてくるかもしれない捕り方をこのまま待っていろというのか」

と言うと、続けてスギが

「あーいやだ。あの鬼嵐坊が私を見る目を思い出すだけでぞっとする。捕まれば鬼嵐坊は私を辱めるに決まっている」

誰も言葉を発することも出来ず、時はそのまま過ぎていった。

夜が明けてきて、子供達はそこでそのまま寝かせ、清吉と丑松が街道に出て、街道警護の状況を探った。特に警戒があるような気配はないので、昼過ぎ、皆が待っているお堂まで戻り、夕方にはここを出発してオルチーノ神父がいる堺を目指して引き返すこととした。

暫く歩くと、街道が二股に分かれているところに、身なりの良い大家の番頭さん風の男性が、従者を連れ、提灯を掲げて、道行く人に声を掛けている。道中改め?と驚いた清吉は、一行を物陰に隠しその男に近づくと、その男が

「一寸お尋ねします。あなた様は薬師か医師様ではないでしょうか」

と尋ねられた。清吉が事情を聞くと

「この先の村の名主の一人息子が熱が高く、意識も朦朧としています。とても都の医師様まで連れてゆくことは出来ません。そこで旅の薬師様か医師様を捜しています」

と言う。

清吉はシモンの所まで戻りその旨を告げると、彼は

「私の持っている薬を差し上げよう。ローマを出る時、自分の病の時に使うために持ってきている薬がある。私は健康で今は必要がない」

との答えを聞いた清吉は、男の所に戻り

「南蛮医薬ならあります。それでよろしければ差し上げると言っています。処方がありますので、その子供さんの寝ているところまで案内してくれますか」

と言うと、その男性は一瞬迷っていたが、直ぐに

「是非お願いします」

と言って、暗がりにいるシモン達の方を見た。清吉は「二家族が一緒ですのでその方々もご一緒に連れていっ

てもいいですか」
と言うと、シモンと一緒にいる丑松達を一瞥した後
「ご一緒にどうぞ」
と言ってから歩き出した。

一時間ほど歩くと、右手に大きな屋敷があり、ここが名主善右衛門の家だった。清吉とシモンが座敷に通され、丑松達は女中部屋に通された。この家に入ったとき、シモンは既に頬被りを取っている。
善右衛門は清吉とシモンから話を聞き
「息子のために宜しくお願いします」
と挨拶して、シモンに投薬を依頼した。
十歳くらいの息子は、呼吸も荒く、シモンが額に手を当てると凄い高熱であった。シモンは部屋を全て閉め切らせ、数個の桶に熱湯を満たさせ、湯気で部屋を暖かくさせた。そして懐中から生薬を出して少量を茶碗に溶かして、杯様の小さな湯飲みに少し宛移して、息子を自ら抱き起こし、何回も繰り返して全てを飲ませた。
「今晩中、この部屋を暖かくして、乾燥させないで湿気を多くしてください。三時間もすれば熱が下がり、呼吸も平常になるでしょう。私はそうなるまで隣室に待機します」
と言って善右衛門を見た。
善右衛門とその内儀お久は、シモンに深々と頭を下げ、隣室に案内して膳を出した。清吉が丑松達のことを聞くと、家族七人に対しては女中部屋で食事をとらせ休ませていると言うことで、清吉は礼を述べた。
投薬してから二時間くらい経過すると、息子の寝息が静かになり、そのうちに熱も下がり、三時間後には目を開けて両親を見た。
お久が声を掛けると、にこっとして
「何か食べたいよ」
と小さな声で言った。
善右衛門夫妻は喜び、シモンにこれからの治療はどうすればよいか尋ねた。シモンは
「朝まで食べ物は我慢させてください。今は少量の塩水を飲ませてください。明日朝、もう一度投薬します。その後調子が良くなれば昼食時に軽いお粥等を少しだけ与えてください」
と言って、桶の中の湯を熱いのに替えさせ、隣室に用意された蒲団の中に入った。

朝、シモンが起きると、善右衛門夫妻が待っていたかのように挨拶にきて
「お陰様で息子禎吉は何日かぶりで静かに休んだようです。有り難うございました。これからはどうしたらよろしいでしょうか」
と聞いた。シモンは

「体力が回復するまでは無理をしてはいけません。ご子息はかなり衰弱しているから、三日間くらい投薬を続ける必要があるでしょう」
と言うと
「お医師様はそれまで我が家に逗留してくださいますでしょうか」
とすがるような目でお久がシモンに尋ねた。清吉が
「分かりました。急ぐ旅でもありませんので」
と言ってから
「実は私たちのことは外部には内密にしてください。率直に言ってシモン様はバテレンのバードレ様です。顔つき、髪の毛の色等で昨夜からお分かりのことと思います。幸い夜でしたのでシモン様を見ている方々はこの家の方々だけと思います」
「息子禎吉の命の恩人です。いつまでご逗留されてもかまいませんし、またあなた方のことは下男や女中達にも絶対に他言致させません。よく言って聞かせます。ご安心下さい」
と善右衛門夫妻は深々と頭を下げた。

その日の夕方には、禎吉の顔は血色が良くなり、話す言葉にも力がついてきた。シモンの言ったとおりそれから三日後には、起きあがって善右衛門夫妻と軽い食事をとるまでに回復した。

四日目の昼過ぎ、善右衛門夫妻が清吉を奥座敷に招き、
「昨夜もお久と話したのですが、バードレ様は遠い異国からやってくるに当たって、ご自分の命を救うために待ってこられた薬を、息子禎吉のために使ってくださった。これを思うとどのようにこのご恩に報いて良いか分かりません。お医師様が今ご禁制のバテレンのバードレ様であることも最初から承知しておりました。ご恩は絶対に忘れません。またお役に立つことは陰ながらどんなことでもさせていただきましょう」
と言ってから、どのようなお礼をしたらよいか尋ねた。
清吉は
「お礼はいりません。もしも出来ることであれば、丑松と徳治の二家族を、一年でも二年でも結構ですから、キリシタンのご禁制が解けるまで、住み込みで働かせてやっていただけませんか。彼らはキリシタンで、どこにも行くところがありません。今、彼らを外に出せば、待っているのは捕らわれるか、死があるのみです。人前でキリシタンと分かるようなことは絶対にしない様に良く言って聞かせますので。お宅にご迷惑が掛かるようなことはしないと誓わせます。お願いできますでしょうか」
夫妻は暫く顔を見合わせていたが、お久が
「貴方、あの方達は礼儀正しいし良い方達と思います。家に来た翌日から、下男や女中達の仕事を手伝ってくれ

て、あの十才くらいの娘さんも働き者と見受けます。家も人手が足りないところですから居て貰ってもいいのではないですか」

と善右衛門に言った。善右衛門は

「分かりました。お引き受け致しましょう。しかしお礼はお礼としてとってください。どのようなお礼にするかはまたご相談しましょう」

と言って、夫妻は立ち上がった。

清吉とシモンは女中部屋に行って、丑松夫妻と徳治夫妻を招き、女中部屋の板戸を閉めてから、先ず清吉が

「あなた方を、ここに住み込みで置いていただくことをお願いした。名主様ご夫妻は快く承知してくださった。勿論あなた方がキリシタンであることを承知の上で。名主様のご厚意に応えるように忠実によく働きなさい」

と言って、次にシモンが

「あなた方の信仰は外部に分からないようにしっかりと守りなさい。名主様にご迷惑を掛けてはなりません。従ってキリシタンの信仰が許される時が到来するまでは、たとえこの家の中でも、人前ではキリシタンであると言わないように。それから見知らない土地で外にでると兎角目立つから、このお屋敷の外には一切出ないようにしなさい。丑松さん、徳治さん、ツルさん、スギさん、ここに置いていただけることは、ゼウス様の助けです。祈りが聞かれました。あなた方は決して喧嘩をしてはいけません。喧嘩したくなったらゼウス様に祈りなさい。そうすればどうしたらよいか必ずお導きがあります。仲良く過ごすこと、それがあなた方の生命です。このような助けを下さったゼウス様にみんなで感謝のお祈りを捧げましょう」

と言って短い祈りを捧げた。

丑松、徳治夫妻は、お互いの子供達を抱き寄せ、涙を流して感謝していた。

その夜、シモンと清吉は善右衛門夫妻に別れを告げ堺に向けて出発した。出発の前、シモンと清吉は、善右衛門夫妻から「お礼」として受け取った十両のお金を出して、善右衛門夫妻に

「丑松や徳治達、そして子供達も着る物も、金子も何もありません。どうかこのお金で彼らの必要な物を買って与えてください」

と渡そうとしたが、善右衛門夫妻は

「お預かりした以上は全ての面倒を見させていただきます。このお金は私たちのお礼の気持ちだから受け取るわけには行きません」

と受け取ってもらえなかった。

同じ頃、鬼嵐坊は篠山近くからもと来た道を引き返して、シモン達を捜したが、嵐山近くまで戻っても見つけることは出来なかった。途中茶店でもこのような一行の通行があったかどうかを聞いたが分からなかった。彼の頭の中は、銀二十枚のことだけで一杯で、最初の頃は

「神も仏も俺を見放しては居ない。異国の神様を捕まえて銀二十枚が手に入る」と浮かれていたが、シモン達が見つからないとなると焦り始めた。

再び街道を八木近くまで戻っても見つけることが出来なかったので、オルチーノ神父の潜伏先である堺の大店「丸大」に向かって歩き出した。そこへ行けば何らかの情報が得られると考えていた。

シモンと清吉は、一度は堺に向けて歩き出したが、鬼嵐坊が堺と播州屋への使い走りをしたことを思い出し、伏見の清吉の自宅に行くことにして、シモンにしっかりと頬かぶりをさせて夜道を急いだ。

深夜、堺の大店「丸大」の通用口を叩く音がして、番頭が出てみると、一人の山伏が大旦那に会いたいと言う。以前見たことのある山伏でもあり、庭先に招き入れて桐兵衛にその旨を告げた。桐兵衛はオルチーノ神父が居る離れの灯りが消えていることを確認してから、番頭に引き下がるように言って、一人で庭先で鬼嵐坊に会った。

「オー鬼嵐坊殿か、お達者で何より。ところでこの夜更けに何の用事かな」

と尋ねると、

「キリシタンのお客人はまだこちらにいますか。神父様に急な報告があってきました」

と言う。桐兵衛は

「鬼嵐坊さん、何を言っているのだ。このキリシタンご禁制が厳しいとき、そのような人を家に入れて置いたら、こちらの首が胴体から離れるよ。私が訴え出ることを感じたのか、どこかへ行ったきり戻ってこないよ。いつの間にか大切なものは持ち出したらしい。戻ってきたらその時は訴え出るよ。あんな厄介者は二度とご免だ。海を何千里越えてきたか知らないけど、拝むものをお節介焼いて。私たちには私たちの神仏がある。余計なことだ。全くな」

と言うと、鬼嵐坊は不思議そうな態度でそのまま引き返した。しかし昼頃まで裏口の出入りを伺っていた。

鬼嵐坊の昔の山伏の仲間が瀬田の橋の上に集まる日時は明日の夜に迫っていた。

銀二十枚を持って行かなければ顔は出せない。手ぶらで謝ることは許されない掟だ。明日は顔が出せなくても、銀二十枚を手に入れれば、いつでも探してあうことは出来る。銀二十枚を諦めるわけには行かない。

「そうだ、清吉だ。あいつは伏見の播州屋。そうだ、播州屋を狙おう」

思い立つと足は伏見に向かっていた。

彼の足は速く、翌日の夕方には伏見の播州屋の出入り口を伺っていた。

やがて日も暮れて、番頭の嘉介が店の扉を閉めようとして一寸表に出た。その時を逃さず鬼嵐坊は

「以前お使いに来たことがある山伏です。大旦那さんか清吉さんにお目に掛かりたい」

と挨拶した。これを聞いた主徳右衛門は

「厄介なやつが来た。形の上は丁重に応対しよう」

と考えて店先に出て、嘉介には座を外すように目配せをした。

「いつぞやはお世話になりました。ところでどんなご用で」

と聞くと、鬼嵐坊は

「清吉さんにはお世話になりました。頼まれたことで一寸お伝えしたいことがありますので、清吉さんにお目に掛かりたいのですが」

「そうですか。さぞ清吉がお世話になったことでしょう。お礼を言います。ところで出ていったきりまだ戻っていません。どこへ行ったかご存じでしょうか。キリシタンでもないのにキリシタンの世話を焼いて、お役人に叱られたらどうなるか。怖くて夜も眠れません。帰ってきたら知っていることを全てお役人に話すようにさせようと思って帰りを待っているのですよ」

ここまで言ったとき、清吉に瓜二つのよく似た清吉の息子が、まだ締め切っていない店の入り口から入ってきた。鬼嵐坊は見逃さなかった。

「あの若衆は清吉さんの息子さんですか」

と尋ねて徳右衛門の表情を伺った。徳右衛門は

「そうですよ、時々使いに来るので」

と受け流した。

清吉が不在と言うことで一旦外に出た鬼嵐坊は、我慢強く清吉の息子が出てくるのを待っていた。この間、徳右衛門は番頭の嘉介を裏口からそっと出して清吉の家に「鬼嵐坊がお前の行方を捜している。気をつけろ」とのメモを持たせていた。

やがて出てきた清吉の息子の後を付けた鬼嵐坊は、あっさりと清吉の家を突き止め、朝まで出入りを見張っていたが誰も出入りする人はいなかった。その翌日も終日見張っていた。清吉の家の店先は古着屋になっていて、店は昨日見た息子が切り盛りしていた。清吉のいる気配は感じられなかった。

清吉の家の屋根裏部屋にいるシモンと清吉は、播州屋からの連絡で暫くの間、身動きが出来なくなっていた。

シモンの方はオルチーノ神父の状況が心配で、オルチーノ神父はシモン達がどうなっているのか、丑松と徳治家族一家がどうなっているのかも心配であった。しかし動くことが出来ないのでどうにもならない。

京都でのキリシタン摘発は、今までの信徒名簿に限られて、今のところその親戚縁者や知人までは手が伸びていなかった。この時期はまだ駿府よりも厳しくはなかった。

二日後に、外の様子を見て安心を確かめた清吉は、息子に古着を風呂敷に包ませて、その中にオルチーノ神父宛のシモンからの手紙を入れて播州屋に届けさせた。しかし、どこにいたのか、いつの間にか山伏姿から町人風に変装した鬼嵐坊はその後を付けていた。そして、そのまま鬼嵐坊が見張りを続けていると、どこから来たのか品の良い婦人が播州屋に入り、間もなく、清吉の息子が持ってきた風呂敷包みを抱えて出てきた。

怪しいと感じた鬼嵐坊は婦人の後を付けた。次の辻を曲がったところに婦人が乗ってきた駕籠が止まっていて、婦人はそれに乗った。鬼嵐坊はその駕籠の後を付けてゆくと、堺の方向に進んでいる。「これは丸大へ行くのか。そうとなれば大きな手柄になる」と思い、人気のない暗がりにさしかかったとき、その駕籠に声を掛けて止めさせた。二人の駕籠かきは五間ばかり離れて、いつでも逃げられる様におびえて様子を見ている。鬼嵐坊は

「中にいるご婦人に用事がある。その包みをこちらに寄越しなさい。そうすれば乱暴はしない」

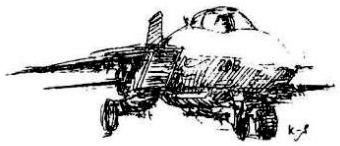
と言って駕籠の中のお志乃の手から包みを奪い取り、それを小脇に抱えるやいなや、そのまま走り去った。

お志乃は、おびえている二人の駕籠かきを招き、堺に向かって急がせた。

翌日の昼過ぎ、堺に着いたお志乃は疲れも見せず桐兵衛に全て報告すると共に、長襦袢の裏に縫いつけてあったシモンからオルチーノ神父宛の手紙を差し出した。手紙は巻紙に横書きで異国の文字で書かれており、桐兵衛には読むことは出来なかった。

体当たり戦法を強制された
神風特別攻撃隊の人びと（八）

千坂精一



指名された甲飛一〇期生たち

マニラの一航艦司令部で、

「大西長官は、待ち兼ねてマバラカットへ行かれた」

ことを知らされた山本司令と中島飛行長は、

「飛行機を使えば、三十分足らずで戻れる」

そう判断してニコルス飛行場へ行き、脚は引っ込まず発動機も不調で予備機になっていた他隊の零戦を借り受け、制止を振り切って飛び立ったのだが、天罰覿面、途中で燃料漏れを起こして水田へ不時着してしまった。

山本司令は左足を骨折し、操縦していた中島飛行長は顔面を負傷したが、折よく通りかかった陸軍の貨物自動車に救出されて、マニラの病院に収容されたので、結局大西長官とは会うことが出来なかった。

だから、大西長官の言う、

「山本司令とはマニラで打ち合わせずみ」

発言は真っ赤な嘘で、玉井副長もそのことに気づいていたに違いないが、体当たり攻撃隊の編成を委せて貰ったことで真偽のほどはどうでもよくなった。

むしろ、大西長官が副長の意見を司令の意見と認めたことで、玉井は指宿先任、横山次席両飛行隊長に自分の意見を押し付けて隊員名簿を作成し、山本司令には事後承諾でよいということになったのだから好都合であった。

というのは、玉井はこの難局を打開するためにはいずれ起死回生の奇襲策を執らねばならなくなるときがくるだろうと予測していたので、すでにそのときの腹案を持っていた。

その腹案というのは、

（現在二〇一空所属の四飛行隊にいる甲飛一〇期生の教え子たちに、名誉ある死場所を与えたい）

とする親心からの発想であった。

甲飛は、昭和十二年（一九三七）中国戦線の拡大に伴ない、従来の乙飛（少年飛行兵）丙飛（一般兵科からの転科）だけでは搭乗員不足が深刻になりつつあったことから、急遽新設された飛行科幹部養成制度で、兵学校とおなじ旧制中学卒業程度が受験資格であった。

甲飛一〇期生は、二年半前の昭和十七年（一九四二）四月一日土浦航空隊入隊、半年の教育期間を経て操縦と偵察に分かれて専修生となり、さらに半年後、飛練（飛行練習生）となって北海道の千歳航空隊分遣隊と青森の三沢航空隊分遣隊とに分かれて配属された。

そして、半年間の初歩教程のあと、徳島航空隊で延長教育を受けて雛鳥となり、今年一月四隊の戦闘機部隊に分割配属されてさらに猛訓練を受けた。

そのうちのひとつ、四国松山基地の二六三空『豹』部隊の司令が玉井淺一中佐で、配属されてきた一〇〇名の甲飛一〇期生に実戦訓練を指導したのである。

ところが、一カ月半後に一航艦が連合艦隊に編入されたことから、練成中の甲飛一〇期生たちはまだ慣熟にいたらぬ状態のまま、マリアナ方面の戦場に駆り出されていった。

テニアンに司令部をおいた一航艦のもとで、パラオ、ヤップなどの戦闘に参加したが、正攻法では勝てず、消耗に消耗を重ねて転進（後退）また転進、八月初旬、二〇一空に編成替えされてフィリピンに集結したときには、半数以下になってしまっていた。

玉井副長は、敵空母の飛行甲板に体当たりして機能を麻痺させ、栗田艦隊のレイテ湾突入を確実に成功させる名誉ある任務を是非教え子の甲飛一〇期生に与えたい、と切望した。

体当たり攻撃などという異常な戦法は、この海戦に限ってのことであろうし、栗田艦隊の突入が成功すれば、散華した甲飛一〇期生たちは真珠湾攻撃の特殊潜航艇員のように軍神と崇められて、後世に名が遺るに違いない。

玉井副長の決断は早かった。

「甲飛一〇期生総員集合」

本部の従兵たちが闇の中を走り、点在する搭乗員宿舎に触れて回った。

非常呼集をかけられた甲飛一〇期生たちに緊張が奔った。

従兵室に集合したのは三三名であった。

あとの者は、S三〇六（戦闘三〇六）飛行隊長管野直大尉とともに名古屋の三菱重工業と群馬県太田の中島飛行機工場へ補充機受領に出張していた。

玉井副長は、このときのことを、こう回想している。

集合を命じて、戦局と長官の決心を説明したところ、感激に興奮して全員双手を挙げての賛成である。彼らは若い。彼らはその心のすべてを私の前では言いえなかった様子であるが、小さなランプ一つの薄暗い従兵室で、キラキラと眼を光らして立派な決意を示していた顔つきは、今でも私の眼底に残って忘れられない。その時集合した搭乗員は二三名だったが、マリアナ、パラオ、ヤップと相次ぐ激戦で次から次へとたおれた戦友の仇討ちをするのは今だと考えたことだろう。これは若い血潮に燃える彼らに、自然に湧き上がった烈しい決意だったのである。

私は、この談話を読んだとき、甲飛一〇期生たちはなんの躊躇いもなく即応したのだろうかと疑問を抱いた。

彼らはこのとき満十九歳と二十歳で、学齢に達した年に満州事変が勃発して、以後日中戦争、太平洋戦争とつづく軍部主導のもとで人間形成され、国家ぐるみの精神統制によって筋金入りの軍国少年に育て上げられた。

戦後育ちの人には理解出来ないだろうが、

「悠久の大義に生きる」

「断じて行えば鬼神もこれを避く」

「死して護国の鬼となり、皇国の礎とならん」

などの信念を植え付けられて、国土を防衛する軍人を志した世代である。

土浦航空隊に入隊したのはミッドウェー海戦の二カ月まえだから、もっとも戦意が昂揚した時期であった。

戦時に軍人を志したからには、当然死は覚悟しているはずなのだが、戦闘隊の空戦は一対一の格闘戦だから、相手より伎倆が優れていれば生き残れる余地があるので、切迫感がない。

つまり、これまでの出撃は九死一生の〈決死行〉であって、十死零生の〈必死行〉ではなかったのだ。

それが、突然征きて還れぬ十死零生の出撃を命ぜられたら、その前代未聞の戦法に途惑わぬ者などあろうか。

玉井副長の談話には、極限状態に追い詰められた若者たちの心理状態が欠落している。

私が練習生教程を終えて南九州の基地に配属されたのはこのときから三カ月後で、もはや特攻は日常化されていたが、それでも出撃前夜の隊員たちは生への執着を断ち切れず、心が千々に乱れるさまを屢々目撃している。

十数年前、偶々玉井副長に非常呼集をかけられた甲飛一〇期生のうちの一人浜崎勇一飛曹の証言を読む機会を

得て、当夜の様子が納得出来た。

その談話の概略は、こうである。

本部従兵室に集合した甲飛一〇期生は三三名であった。

玉井副長は、全員整列した前に立つと、

「このたびの捷一号作戦で、栗田艦隊のレイテ突入を成功させることが出来れば、フィリピン戦は勝てる。それには、あらかじめ貴様たちの零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせ、敵空母に体当たりして飛行甲板を叩き潰しておく必要がある。今日大西長官がこられてわが二〇一空にその戦法を命ぜられた。日本の運命は貴様たちの双肩にかかっているのだ」

そう士気を鼓舞しておいて、

「この名誉を教え子である貴様たちに与えたい。いいか、突っ込んでくれるか」

玉井副長の異常な命令に、一同啞然となったという。

それはそうだろう。体当たり攻撃などというのは未だ嘗てない戦法で、甲飛一〇期生たちはわが耳を疑い、夢ではないかと思ったことであろう。

この沈黙を躊躇いとみたのか、玉井副長は、

「行くのか、行かんのか」

そう叱責するように怒鳴ったそうだ。

上官の問い掛けには即答しないと、意に満たない奴として鉄拳制裁が加えられる。

戦闘機乗りは、空中での格闘戦が任務であるから、搭乗員たちは反射神経が研ぎ澄まされていて、頭脳で判断するよりも躰の反応のほうが素早い。

玉井副長の一喝に甲飛一〇期生たちは我に返ると、全員反射的に挙手したというのだ。

熟慮して賛成したのではなく、賛意のほかに余地のないところへ追い詰められていた。

一見すると、やるかやらないかの選択を迫られて、自主的にやると決断したのであるから、全員志願したようにもとれるが、たとえどういう経過を辿ろうとも、それを拒絶出来ないからには命令であるに違いない。

ではあるが、十九、二十歳の純粋な若者たちは、十死零生の戦法を命ぜられて、いつまでもくよくよしていたわけではなかった。

制海制空権を奪われて追い詰められ、死期が迫ってきつつあることを自覚していた彼らは、親族や友人たちを守るために散華することを潔しと考えたのだ。

非常呼集の内容を厳重に口止めして、甲飛一〇期生たちを宿舎に返したあと、玉井副長は指宿、横山両隊長を同席させて、猪口先任参謀と隊員の選抜にとりかかった。

指揮官を命ぜられた関行男大尉

攻撃隊員一二名、直掩隊員一〇名の選出を終えた玉井副長は、

「さて、指揮官を誰にするか」
顔を天井に向けて、そう呟いた。
「体当たり戦法をかける特別攻撃隊の指揮官は、兵学校出身者でなければならない」
猪口先任参謀が当然のようにそう主張した。
玉井副長と指宿、横山両隊長の眼が合ったが、玉井はどちらをも指名せず、二人もまた率先垂範しなかった。
二〇一空には四飛行隊が所属していて、大尉の隊長、分隊長が五人いた。いずれも兵学校出身者だった。
序列は、S三〇五飛行隊長指宿正信（六五期）、S三一一飛行隊長横山岳夫（六七期）、S三〇六飛行隊長管野直（七〇期）、S三〇五分隊長平田嘉吉（七〇期）、S三〇一分隊長関行男（七〇期）である。
管野、平田、関の三人は兵学校同期だが、飛行学生は関だけが一期後輩だった。
「管野がおればいいのだがなあ」
玉井副長はそう呟くと、頭を抱えた。
管野は戦死した森井宏大尉の後任で、なにごとも率先垂範して猪突猛進する豪胆な指揮官だったから、この場に居合わせれば玉井副長が迷うまでもなく、
「願います」
と申し出るに違いなかったが、生憎まえに述べたように補充機を受け取りに内地へ出張中だったのである。
管野を除く四人のうちでは、指宿と横山が水上戦闘機出身の熟練操縦者（ベテランパイロット）で序列も先任と次席だったから、当然、
「願います」
と申し出るはずのところであるが、なぜか二人ともちゃっかり人選する側に廻ってしまっていて、玉井副長もまたそう錯覚を起こしてしまっていたようだ。
そうなると、あとは平田か関のいずれかだった。
指宿は、おなじ水上戦闘機出身の平田とは呼吸（いき）が合っていて、分隊長に据えておくのに好都合だったから、庇って推薦しなかった。
消去法でいって、最後に関が残った。
関は、九月二十五日付で台南航空隊付教官から転任してきたばかりの艦爆乗りで、戦闘機隊は場違いだったが、二期先輩の鈴木宇三郎大尉が隊長に坐っていての分隊長だったから目立たずにすんでいた。
ところが、その鈴木隊長が一週間まえの台湾沖航空戦で戦死してしまったので、関は分隊長でありながらS三〇一飛行隊を指揮する立場になっていた。
まだ着任してひと月も経たぬ関であったが、速やかに戦闘への参加を要求するその向こう意気の強いところが管野大尉に似ていて、玉井副長は頼もしく思っていた。
関行男は、大正十年（一九二一）八月二十九日愛媛県新居郡大町村（現西條市）で生まれた。
負けず嫌いの性格で、小、中学校を級長でとおし、西

條中学時代すでに一七〇センチを超す長身だったという。
四年生のときに家庭の事情で旧制高校へ進学出来ぬ無念の思いを断ち切るようにして陸士と海兵を受験したが失敗、翌年海兵に合格して七〇期生になった。
開戦寸前の昭和十六年十一月十五日に兵学校を卒業、少尉候補生になって乗り組んだ戦艦扶桑（ふそう）は、十二月八日柱島泊地を出港したが真珠湾攻撃には参戦しなかった。
この年二月、父勝太郎が喘息悪化で死亡。母サカエは夫の長患いで貯えが底をついたことから、関の生家を処分して親戚に身を寄せ、草餅の行商をして生活した。
この家は、隣家の村上印刷店が買い取ったのだが、関が休暇で帰省するたびにサカエに提供してくれたという。
翌十七年四月、水上機母艦千歳（ちとせ）に転勤した。
千歳は、五月下旬にサイパンからミッドウェーに出撃した。特別陸戦隊を護送してキューア島を占領する目的だったが、南雲機動部隊の惨敗で作戦中止になり、空振りで六月中旬に柱島泊地に戻った。
関はこの出撃中、六月一日付で少尉に任官した。
千歳は八月上旬に横須賀を出港して、こんどはトラック泊地に行き、前に述べた丸山政男中将率いる陸軍第二師団のガ島奪回戦の上陸輸送にあたり、十一月中旬佐世保へ帰港したところで、関は飛行学生を命じられた。
正月休暇に帰省して、村上印刷店主好意の西條の生家で母サカエと過ごしたあと、一月十五日に茨城県稲敷郡阿見町の霞ヶ浦航空隊に三九期飛行学生として入隊した。
三月目の適性検査で操縦員となり、赤トンボ（九三式陸上中間練習機）に搭乗して後部座席の教官の指示に従い、霞ヶ浦から鹿島灘上空を飛行して訓練に励んだ。
六カ月の飛行基礎訓練を終了すると、いよいよ操縦専修に振り分けられる。
関は、大分県宇佐航空隊で艦爆操縦を専修することになった。
このとき関に、こんな挿話（エピソード）が残っている。
乗艦の水上機母艦千歳が横須賀で船渠（ドック）入りしたときに、料亭『魚勝』の宴席で知り合った美人芸者の朝日に好意を抱き、霞ヶ浦航空隊の飛行学生になってからも休日には足繁く通いつづけたが、花柳界出身女性との『結婚許可願』を人事局が承諾するはずはなく、朝日のほうも置屋丸抱えの身ゆえに勝手は許されない。
九州へ赴任してしまえばもう会うことも叶わず、ついに別れのときがきた。
関は朝日に、想い出として兵学校時代の短剣を与えた。
朝日が、記念になにか書いてくれ、と言って色紙を差し出すと、関は、遺筆のようで嫌だなあ、と照れながら、

みのらぬ恋と　あきらめて
御国のために　実を結ぶ
その名も哀れ　若桜

と墨書した。このとき関は満二十二歳の中尉であった。

鬼とも地獄とも言われた宇佐空で、四カ月の濃密な実用機教程を終えた関は、霞ヶ浦航空隊付教官となって戻ってきた。海兵三期後輩の四二期飛行学生担当であった。

旧制高校生の間で流行した弊衣破帽の蛮カラな風俗に憧れていたので、軍服は垢塗れ、軍帽は針金を抜いて型を崩していたが、その獰猛な姿の関教官の指導は厳しく、すぐに体罰を加え、全体責任のときは学生長を殴った。

下級者の前で上級者を殴らない法度を破る関は、無頼教官と非難されても仕方なかった。

そんな獰猛の関だったが、ひょんなことから結婚することになった。

同期生の教官六人が集まった酒席での座興で、馴染みの女性についての話題が拡大して合同結婚式を挙げようということになり、五月二十七日の海軍記念日に水交社でと日時と場所まで決まってしまった。

それぞれに婚約者がいての話ではなかったから、誰も彼もが伝手を頼って嫁探しに大童になった。

だが、関にはすでに意中の人がいた。

千歳に乗り組んでいた少尉候補生時代に、内地から送られてきた女学校単位の慰問袋が配布され、鎌倉在住の東京家政学院生渡邉恵美子のが関に当たった。

ミッドウェー作戦を終えて横須賀に帰港した関は、少尉任官後の初上陸（外出）に鎌倉名越の渡邉家を訪ねて慰問袋の礼を述べた。

渡邉家は、恵美子の両親と姉弟の五人家族であった。

関は、慰問袋をくれた恵美子よりも姉の満里子のほうに好意を抱き、密かに結婚を申し込む機会を狙っていた。

「武士に二言なし」を標榜する海軍軍人の信条が、行動せねばならぬ破目に立ち至った。

関は、勇を鼓して鎌倉の渡邉邸を訪ねると、母静子に満里子との結婚を申し込んだ。

媒酌人も立てぬ関の強引な行為に、渡邉家では途惑ったと思いきや、父滋は二つ返事で承諾したという。

滋は、関の強引な性格を、青年の直情とむしろ頼もしく思っていたようだ。

誓約した六人のうち、転勤したり両親に無謀を咎められたりして、約束を果たしたのは関ら二人だけであった。

『軍隊小唄』という戯れ歌に、

大佐中佐少佐は老い耄れで
と言って大尉にゃ妻がある
若い少尉さんにゃ金がない
女泣かせの中尉どの

という一節があって、大尉になると結婚していたようだが、それは平時の話であって、劣勢挽回に生命を懸ける苛烈な戦局状態においては、結婚など論外であった。

関のこの行為は、先のことはともかく、戦局多難な現状を把握していなかったのかと批難されても仕方がない。

弁護するわけではないが、私もこのころ練習生であったが、内地ではまだ緊張感が乏しく、圧倒的戦力差についても実感が稀薄で、切迫感がなかった。

だが、土浦の士官宿舎での関の新婚生活は僅か三カ月で終わった。

八月三十一日に四二期飛行学生の卒業式を終えたあと、台南航空隊への赴任を命ぜられたのである。

横浜航空隊の飛行艇に便乗することになっていたので、妻の満里子はそこまで見送った。

台湾は前線基地であったが、当時は日本の領土であり、任務が練習航空隊教官だったので二人のあいだに悲愴感はまったくなく、これが永遠の訣れになろうとは知る由もなかった。

九月四日に着任した台南航空隊は、予科練と一三期予備学生の飛行訓練が主体であった。

司令は、江口夜詩作曲『月月火水木金金』の作詩者で三重空副長だった高橋俊策大佐、飛行隊長は一期先輩の戸塚浩二大尉だった。

関は隊付教官として指揮所には出たが、練習生たちに手を取って教えることはなかった。

そして、三週間後にまた転勤命令が出た。待望の実施部隊で、フィリピンニコルス基地の二〇一空であった。

S三〇一飛行隊分隊長の辞令で着任した関であったが、その精悍な風貌にも拘らず、

「戦闘機に乗れない分隊長」

という耐え難い恥辱を受けた。

艦爆乗りがなぜ戦闘機隊へ配属されたのか定かでないが、足手纏いの厄介者扱いで孤立していった。

分隊長といっても実戦経験がないのだから肩身が狭く、歯車が噛み合わぬ苛立ちが昂じて、あるとき関は予備学生出身の同い年の分隊士久納好孚と長門達両中尉を戦闘指揮所二階の搭乗員休憩室に呼び出すと、教官時代に見せた獰猛な本性を露にして二人を激しく殴打した。

下級下士官が上級下士官から修正を受けることは日常茶飯であったが、士官同士の制裁は見たことも聞いたこともないから、関のこの行為は異常だったであろう。

十月に入って台湾沖航空戦がはじまると、関の赴任したS三〇一飛行隊は台湾新竹基地に移動したが、艦爆乗りの関は行動をともにすることが出来ず、独りクラーク基地で悶々としていた。

そんな最中に、関は熱帯性の下痢に罹り、発熱はなかったが極度の食欲不振で体力が消耗していった。

特効薬がなく、症状が治まるまで寝台で安静にしているよりほかなかったが、それでは衰弱するばかりだと軍医に窘められて、粥を食べる努力をつづけ、ようやくす

こしずつ体力が回復してきていた。
玉井副長は、猪口先任参謀に関の軍歴を説明して、
「どうだろう、俺は関を出してみようかと思うんだが」
すでに決めていることを、そう持ち掛けた。
「よかろう」
猪口先任参謀は玉井副長の人選に同意した。
従兵が、二階の士官私室で寝ている関を呼びに行った。
(こんな深夜になにごとだろう)
関は訝りながら、第三種軍装を着けて階下へ降りた。
士官室兼食堂には、玉井副長のほかに猪口先任参謀と指宿、横山両隊長がいた。
玉井副長は、関を認めると眼で前の椅子をすすめた。
関が坐ると、玉井副長はその肩を抱くようにして、
「関、今日長官が直々こられたのは、捷号作戦を成功させるため零戦に二五〇キロ爆弾を搭載して敵に体当たりをかけたい計画を諮られるためだったのだ。これは貴様も薄々知っていることだろうが、ついてはこの攻撃隊の指揮官として貴様に白羽の矢を立てたんだがどうか」
そう問いかけたが、関は答えず、机に肱を乗せ両掌で長髪の頭を支えると眼を瞑り、微動だにしなかった。
関はこのとき、なにを考えていたのだろう。
いや、頭の中は真っ白だったに違いない。
関は、開戦時には戦艦扶桑、ミッドウェーでは水上機母艦千歳に乗り組んでいたが、いずれも後方部隊であったし、あとは飛行学生と練習航空隊教官で、死と紙一重の戦場経験がまったくないのに、いきなり生死の選択を迫られたのだから、途惑うのは無理もなかった。
甲飛十期生のところでも述べたが、人は誰も自分の死期を予知出来ないから暢びり過ごしていられるのであって、いきなり死の刻限を宣告されたら正常な精神状態でいられるはずはなく、その心境は想像に難くない。
おそらく、関の脳裡には、僅か三ケ月の新婚生活で別れた妻満里子のこと、ひょっとしてすでにわが子が授かっているかも知れないこと、そして西條で一人暮らしの母サカエのことなどが駆け巡っていたに違いない。
「ひと晩考えさせて下さい」
関は、蒼白の顔を上げると、玉井副長にそう告げた。
「関、すでに捷一号作戦が発動されたからには、明日にも攻撃隊を発進させなければならないのだ。隊員はすでに甲飛十期から選抜してある。どうだ、征ってくれるか」
玉井副長の物言いは穏やかだったが、その内容は選択を許さぬ命令であった。
こう追い詰められては、即断するしかない。
「承知しました」
関は、玉井副長を見詰めて呟くように漏らした。
「そうか」
玉井副長の顔が一瞬綻んだ。
猪口先任参謀が、二階の山本司令の私室でおそい夕食を摂ったあと休息している大西長官を迎えに行った。
玉井副長が大西長官に、指揮官となった関を紹介した。
そのあと、猪口先任参謀が関に、
「貴様は、まだチョンガーだっけ」
と訊いたというから、この征きて還れぬ攻撃隊の選抜にあたって、親一人、子一人、長男、妻子ある者を除外する考慮はなされなかったことになる。
関は、私室には同室者がいるのでその場で隅の机に向かい遺書を書いた。一通は西條の母サカエと満里子の両親、もう一通は愛妻満里子に宛てたものだったという。
こうして、体当たり攻撃隊員指揮官関行男大尉以下一三名、直掩隊員一〇名の名簿が玉井副長から大西長官に提出されたのは、十月二十日午前一時過ぎであったと記録されているから、その時間的経過からみて、関がどれほど悩み、苦しんだであろうことかは、充分察せられる。

神風特別攻撃隊編成

名簿提出を受けた大西長官は、一航艦先任参謀猪口力平中佐と副官門司親徳大尉を立ち合わせて、山本司令不在のまま二〇一空に対し『特別攻撃命令』を発した。

一、現戦局に鑑み艦上戦闘機二六機(現有兵力)をもって体当たり攻撃隊を編成す

(体当たり機一三機)

本攻撃はこれを四隊に区分し、敵機動部隊東方海面出現の場合、これが必殺(少なくとも使用不能の程度)を期す　成果は水上部隊突入前にこれを期待す　今後艦戦の増強を得次第編成を拡大の予定

本攻撃隊を神風特別攻撃隊と呼称す

二、二〇一空司令は現有兵力をもって体当たり特別攻撃隊を編成し　なるべく十月二十五日までに比島東方海面の敵機動部隊を殲滅すべし

司令は今後の増強兵力をもってする特別攻撃隊の編成をあらかじめ準備すべし

三、編成

指揮官　海軍大尉　関　行男

四、各隊の名称を　敷島隊　大和隊　朝日隊　山桜隊とす

隊名は、江戸中期の国学者本居宣長が『日本人の心』を詠んだ歌、

「敷島の大和心を人とわば朝日に匂う山桜花」

からとったものである。

ついでながら、この総称と隊名は大西長官の命名ではなく、赴任するときすでに軍令部から示されていたのだ。

というのは、一週間まえの十三日に軍令部第一課源田

實中佐が起案した電文のなかにあって、大西長官が編成して体当たり攻撃を実施したら、すぐさまこの総称と隊名を使うべく、あらかじめ用意されていたのである。

こうして、二十三歳の指揮官関行男大尉と、十九、二十歳の一飛曹たち一三名の搭乗割が発表された。

〈敷島隊〉

関　行男（S三〇一）
中野盤雄（S三〇一）
山下憲行（S三〇一）
谷　暢夫（S三〇五）

〈大和隊〉

宮川　正（S三〇一）
中瀬清久（S三〇六）
塩田　寛（S三〇六）

〈朝日隊〉

上野敬一（S三〇一）
崎田　清（S三〇一）
磯川質男（S三〇一）

〈山桜隊〉

宮原田賢（S三〇一）
瀧澤光雄（S三〇一）
藤本　壽（S三一一）

であった。

こうして列記してみるとよくわかるが、関大尉のS三〇一が九名、内地出張で不在の管野大尉のS三〇六が二名、玉井副長の選抜に立ち合った指宿大尉のS三〇五と横山大尉のS三一一はそれぞれ一名であった。

（つづく）

紙透家の人びと（十四）

―〔泰山木〕改題―

第四章　新天地

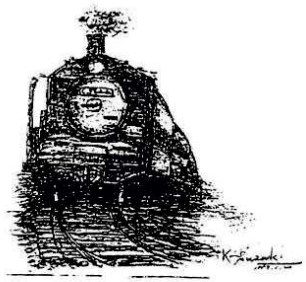
二　山梨（つづき）

一月二十四日　金　雨

村松先生からお便りが来ました。二時間目は修身でしたが、校長先生が休まれたのでドッジボールをしました。その最中に手紙を読んで下さった。四時間目も、体操でドッジボールをしました。

一月二十五日　土　晴

読方は第十五課をすませて、算術は自習で、地理は北アメリカをしました。剣道でもらった紙挟みを持って、唱歌をしました。学校におすゑちゃんが来て、おどっていました。風がとてもひどく寒かったです。



紙透寛夫

一月二十六日　日　風

中等学校の試験を受けるのは、あと、わずか五十日とせまりました。今日、学校にいって予習をして帰り、午後、村松環（たまき）君のうちで、おもちを食べて、空気銃をうって面白く、ゆかいにあそびました。

一月二十七日　月　晴

早起きをして、店の雨戸を出して、学校に行きました。そして夜は予習に行ってきました。それから勉強を一時間位してねました。試験のことは、ねていても忘れられないです。もういよいよ日が近くなってきました。

一月二十八日　火　晴

二時間目は、二年生の研究授業で、僕等は自習でした。

その時、修身でしたので、僕は教育勅語を空で書いたら四十ちがっていた。前は七十もちがっていたが、三十も出来るようになった。夜二時間勉強してねました。

今から、数年前の四月初旬、私は家内と、千鳥ケ淵を、満開の桜の花を愛でながら散策して、靖国神社を参拝した。その時、社務所に立ち寄ったら、傍らの箱に、印刷された教育勅語が積まれていたのを見た。懐しく思い、その一枚をもらった。表には原文、裏には口語文訳が載っていた。

……

国民の皆さんは、子は親に孝養をつくし、兄弟、姉妹はたがいに力を合わせて助け合い、夫婦は仲むつまじく解け合い、友人は胸襟を開いて信じ合い、そして、自分の言動をつつしみ、すべての人々に愛の手をさしのべ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格をみがき、さらに進んで、社会公共のために貢献し、……

口語文訳の一部を転載したが、いいことが書いてある。

一月三十日　木　雪

近頃だいぶ寒さが加わった。今日は少し雪がふった。勉強をして掃除をして山名先生のところに行き、それで予習をした。いよいよ試験まで、あと四十日余りとなり、僕らをふんきさせるものがありました。

一月三十一日　金　晴

この一箇月を反省してみます。僕は今年になって、二学期の終り頃にくらべると、勉強をしなくなりました。それではいけないというので、今はだいぶするようになった。正月、お小遣いは凡そ全部で十二円位でした。末男さん（叔父）からは、陸海軍のことを書いてある本や、国民六年生をもらいました。皆しんせつにしてくれるので、感謝しても感謝しきれないものと思いました。

二月一日　土　晴

神社参拝日で朝八時に行きました。今日は興亜奉公日なので、一銭も使わずに勉強して、はたらきました。午後予習の時、岩田先生がいらっしゃって予習をしてくださった。ボールが十五米をこしました。

二月二日　日　晴

午前九時半頃、環君が、笛を作る竹を取りに行きましょう、と言ったので取りに行った。三本長いのを取って環君の家で分けて、別れました。午後予習の時、身体検査をした。体重三十六瓩、身長一四六・二糎位で、胸囲七一・五糎でした。

二月三日　月　晴

綴方の時間に、先生が何にしようかなと言ったら、皆が自習と言ったので先生がおこって、自習という字が書けるかと、いいました。そして、あとで、とうとう読方の書取りを、不意にしてみましたら、出来た人が三人で、僕はその一人になったので、うれしかった。

二月四日　火　晴

二時間目は考査でした。書取りで上にある字だけでした。僕は九十二点を得ました。あとで事務室へ先生が来いとおっしゃった。行くと、九十点以上はよしと言って、八十九点以下はおこられた。僕はおこられずにすんでよかった。

二月五日　水　晴

九時半から映画を見に行った。題は「美の祭典」で、オリンピック大会の、すてきなのでした。僕は映画を見て体は丈夫にせねばならぬと思って、こんどから体に気をつけ、なお体力を作ろうと思いました。

二月七日　金　晴

きょねんの十二月下旬に、三人同盟（僕と加藤（泰）君と環君）を結びました。今日不公平なことが出来て、加藤君が三人同盟をだったいしました。そして、ついに僕と環君と二人でこれから助け合うことになりました。これを世に二人同盟と号す。時に紀元二千六百一年二月七日です。

（昭和十五年九月二十七日、ベルリンで日・独・伊三国軍事同盟が調印された。これは米国を刺激し、対日禁輸を強化させ、大東亜戦争（戦後、大平洋戦争と呼んだ）突入の要因となった。私達少年は、この三国同盟をまねて、よく〇〇同盟を作って遊んだものである）

二月八日　土　晴

僕は今日、かん護当番でした。予習の時、岩田先生が見にきました。三回とびは五・五五米でした。懸垂は五回で、ボール投げは十六米で、千米も走りました。百米は約十六秒で走れます。

二月九日　日　晴

午前十時から身体検査でしたので、午前八時頃、頭をかりに行きました。今年になって一回目でした。十時に石塚さん（医者）の家に行って見てもらったら、どこも悪くないらしいようすでした。虫歯は一本もありません、それはよいことだと思いました。

二月十日　月　晴

今月の月訓は敬神崇祖だったので、僕は今朝お宮にお参りをしました。そして僕達九人同盟は学校でおもしろく、たのしく遊びました。

試験の日まで、あといく日あるだろう……。

二月十一日　火　晴　紀元節

今日、勝雄君の家に、（学校の）お式に行こうといったら、まだ早いと言いました。僕が待っていると、勝ちゃんが竹トンボをこしらえてくれた。お式に行き、僕は心から、たのしかった。終ってお式のお菓子をもらって予習をした。今日は二千六百米走りました。

二月十二日　水　曇

一時間目にどんぐりのお金を下さいました。僕は七銭で、男では一番多くもらいました。女子は十二銭が最高でした。三時間目は時間割が変りました。それは榛葉先生のつごうによってだそうです。

二月十三日　木　曇

三時間目、とつぜん会礼の場所に集まった。僕は何をするかと思ったら、こんど新しい先生が来たのでした。先生の名前は菅沼といい、非常に若い先生でした。こんどから、その先生に国史・算術・書方・綴方・手工を教えてもらうことになった。

二月十四日　金　晴

修身の時間、藤田先生に習い「至誠」というところでした。学校の校訓は「至誠」でした。そこには乃木大将のお話がのっていました。僕も乃木大将のような立派な至誠をまもる人になろうと思いました。午後体操で榛葉先生が、うんとおこりました。

二月十五日　土　晴

算術を菅沼先生にならいましたが、僕はどうしたことか、一つもわかりませんでした。皆に言ったら、皆も、ぜんぜんわからないと、いいました。岩田先生は、もう大体、願書を書いて、十七日に出すといいました。いよいよ目の前に試験がきました。

二月十六日　日　晴

今朝八時頃、入学願いに押す（紙透）印を取りに行ってきました。約一時間で帰って来ました。それから武内（たけうち）（董夫）君と、環君と、幡鎌（志計雄）君と、僕で雀をうちました。午後受験料三円を持っていって岩田先生に渡し、予習をやりました。

二月十七日　月　雨

今日、先生が手紙を集めて出した。いろいろ封筒や葉書がいっぱいになった。

（戦地の兵士を慰めるため、慰問袋に入れる手紙だったと思う）

今日は雨が降ったので予習をやめ、家で手紙を父母に出した。試験のことを書いてやった。夜勉強をしてねました。

二月十八日　火　晴

今日、村松先生から手紙がきた、僕とおじいちゃんにきた。それから予習をしに行き、いろいろなことをしました。が、皆ちょうけて、なかなかできませんでした。雨も降ったので割合じゅるかった。

二月十九日　水　晴のち雨

今日は衛生日でした。僕は爪（つめ）を切り、ハンケチ・ちり紙を持っていきました。午後雨が降ったので予習をやめました。家であそび、それから手紙を村松先生に出した。夜勉強してねました。

私は村松先生から、前後、四通の手紙を受け取った。第一信は出征後、間もなく発信したものらしく、本文はがり版で、配属先だけが万年筆で書かれ、満州国の切手が貼ってあった。児童全員に送られたように思う。

紙透寛夫君

なつかしい周南の皆さんへ

先生は大陸の戦野に皆さんの成功を待っています。

先生方や御両親の教えを守って、

日本の十年後を守る人になるように十分に心身を修錬して強い日本人になって下さい。

先生は天皇陛下の為にお国の為に死ぬ覚悟で戦います。

寒さに負けないでね、さらば

満州国東安省勃利　第九三九部隊山田隊

村松範三

第二信は、多分、私が二月十九日に出した返信だったと思う。

御手紙ありがとう。

薫風山野を渡る頃となりました。

内地はさぞ住み良いでしょう。君も初めて内地の春を知ったわけですね、先生も初めて大陸の冬を知りました。先生の居る勃利は、君の居られた所から丁度汽車に一日乗りました。

国境のある駅で、憲兵の人が乗ったので、その人に君のお父さんの事を聞いたら、「前にはこの駅に居

られたが、転任されて一つ前の駅だ」とか言われて居た事もありました。
君の知って居る様に満州は今雪解けと砂で非常に困って居るよ。
しかし、もう春だ、間もなく夏が来る事でしょう。赤夕日が西の空を真っ赤に染めて地平線に沈むのも今です。満州で一番きれいなものはこの夕日でした。
乱筆にて　健康を祈る　　不一

二月二十日　木　晴のち雨のちくもり
朝は晴れていましたが、昼から雨が降り出した。正午、深見のじゅんちゃん（従兄の奥野山洵一）が来ました。予習をするときは、もう雨がやんでいたので、懸垂と鉄棒だけやってやめました。幡鎌君たちと墓を拝んだ。

二月二十二日　土　風
二時間目は自習でした。午後予習をして終ったら、掛川中学校から受験番号がきた。僕のはちょうど五十番でした。だんだん風がつよくなり、夜はとても風がひどかった。夜九時頃まで勉強してねました。ねてからも、とてもさむかった。
（深見の洵一従兄は、この春、見付中学校の五年生で、じきに卒業することになっていた。そこである日、私に「見付中学校を受けろよ、いい学校だよ。教科書もノートも、服も全部あげるから、入れよ」
と勧めてくれたことがあった。しかし、私は中等学校に進みたいが、どこがいいのか全く知らなかったので、返事は保留した。
一方、祖父母は、私にはどこが適しているのか、岩田先生に相談したのではないかと想像する。岩田先生は、かつて祖父の家に下宿していたと聞いていた。そんな関係で、祖父母と岩田先生は親しい間柄であったようだ。
「寛夫君は、掛川中学がいい」
岩田先生のこの一言で私の進路は決まったのである）

二月二十四日　月　晴
修身の時間に、この日記の四月と五月が、ぬりつぶしてあるかどうかを調べた。それで、せん別を二銭づつ持ってきたかもしらべた。夜、岩田先生の家にないしょで行きました。そして八時頃帰ってきた。僕は試験が近づいたので、がんばるつもりだ。

二月二十五日　火　晴
体操の時間に元気で歩いた、榛葉先生がほめて、すぐ、すきなものをやらせた。僕等は青年の衆がやっていたのをした。とても面白かった。夜、満州の平八郎おじさんの所に、つとめているおじさんがいらっしゃった。

二月二十六日　水　晴
ラジオで珠算のきょうぎをした。入営兵士の送別式が三時半にありました。送別式がすんで予習をしました。夜、岩田先生のうちに行きました。

二月二十七日　木　曇
今朝六時半に、昨日の兵隊さんをおくった。それから学校にいきました。三時間目に急に考査をした。僕は大体書けました。予習の時に岩田先生がいらっしゃった。

二月二十八日　金　雨
今月も今日でおわりです。明日から、久しぶりに岩田先生にならいます。修身の時間に藤田先生によい話をしてもらったが、『〝〝〝すかっと〟〟〟』を二回言いました。四時間して家にかえり、ずっと、勉強しておもちを食べましたが、少し食べすぎたのか、おなかが痛くなりました。
（高等科二年生の一三叔母が、ある日、
「藤田先生がね、授業中に、（気持が）〝〝〝すかっと〟〟〟するって、よく言うの。この間は四回も言ったわ。何回言うか、寛夫も、数えてごらん」
と、面白そうに、にこにこしながら言った。一三叔母は、いつも授業中に、先生の話を一言半句も聞きもらさなかったようである。
「うん、じゃあ。今度数えてみる」
そして、この日は〝〝〝すかっと〟〟〟を二回言ったのであった。無くて七癖か。）

三月一日　土　晴
今朝八時に神社参拝をした。岩田先生も、きていらっしゃった。四時間して家にかえり、また学校に行き予習をしました。僕のあやまちで、仲のよい武内君のはなにあたって、はな血が出たので、僕はあやまった。これからあやまちはしかたがないが、なるだけ気をつけようと思う。

三月三日　月　晴
今日、母の会があるので、午前中でしまいました。僕はかえって、すぐ手紙（母へ）の下書きをかき、それから、おつぼをひろいにいきました。三時から予習をした。夕方になると、ひえこみ雨が少しふってきました。

三月五日　水
衛生日でした。僕はハンケチも、ちり紙ももっていき、爪もきっていきました。会食日でしたが僕はもっていきませんでした。合同体操をして、予習をした。夜岩田先生が僕の家にこられた。

三月六日　木　晴　地久節

今朝お宮の掃除をしました。そして全校運動の時間に通学会を行いました。午後は図画と算術をしました。一年の教室を掃除して、予習をしました。口頭試問と運動をしました。

三月七日　金　雨

一時間は算術で二時間は修身で、三時間は高等一年の研究授業でしたので、算術がおくれていたので算術の自習をした。雨はどしどし、すごく降ったので予習はなく、五時間目に（出征兵士に送る）慰問画を一枚づつきかきました。夜まで雨は降り続いた。

三月八日　土　晴

二時間と三時間は算術でした。地理はずいぶんすゝんでいます。唱歌の時間に僕がわらかしたので、皆がどっと笑った。ちょうけることはよくないと自覚して、これから、せんように、こころがけました。

三月十日　月　晴　陸軍記念日

国史の考査を今日しましたが、僕は皆かけました。午後は陸軍記念日なので剣道の大会がありました。僕は運悪く帳面一さつだけもらってきました。もっともっとがんばろうと心がけました。予習からかえってねた。

三月十一日　火　雨

今日は地理の考査がありましたが、僕は皆かきました。算術をして、読方なども非常におくれていたので、たくさんしました。予習をしました。僕等はどんなに力がついたかわかりません。早く受験して上がりたいものだなぁ……

三月十二日　水　晴

今日は卒業の記念に法多山まで旅行しました。本当なら伊勢までいけるけど、しかたがないので、僕はよろこんで、おすしを持って行きました。頂上にのぼると僕が一番乗りでした。足が棒のようになり、くたくたになってかえった。たのしかった。

（六年生の卒業記念旅行は、去年（昭和十五年）までは、伊勢神宮参詣が慣例になっていたと聞いているが、今年（昭和十六年）から廃止されて、遠足になったのである。日中戦争の泥沼化と、さらに、世界に暗雲が立ちこめている、時局だったからだと思う）

三月十三日　木　晴

読方の考査があった、僕は全部書けましたが、どうだか。地理は百点で国史は九十五点でした。まあ、それぐらいならよいと思いました。予習の時は一人づつしました。そして体操をしてかえりました。試験もすぐだ。

三月十四日　金　雨

とてもひどい雨だ。今日は算術の考査があった。読方を返して下さったが、僕は九十八点でした。体操の時間は雨が降っていたので、お話をして下さいました。五時間目は算術がおくれていたのでしました。

三月十五日　土　晴

今日は修身の考査がありました。僕は皆かきました。算術をかえして下さったが、皆、今度は出来なかったといって、僕が一番出来たと先生がいいました。九十点でした。×と十と違っただけで十点へらされた。校長室で一人ずつ試問した。

三月十六日　日　晴

試験もすぐだから、頭をかりに行きました。そして、服を洗うため、違う服を着ようとしたら、とても小さくて、みんな大笑いでした。午後は予習に行きました。二階の大掃除をしたので、とてもきれいで快いです。

三月十七日　月　晴

勝雄君と僕が習う場所にいったら、皆は試験のことをきゝました。卒業もすぐなので算術や読方は終りまで大急ぎでやりつつあります。地理国史は終った。早く卒業して中等教育を受けたい。夜八時ごろ、ねた。

三月十八日　火　晴

試験も日に日に近づき、胸はだんだん、どきどきする。口頭試問のけいこも今日で終りになるだろう。早く受けて入りたくなった。体操して平均運動をしてかえり、さつまいもをたべ八時半にねた。

三月十九日　水　雨

今日は衛生日だったが、雨が降ったのでやめた。もうすぐ試験だから僕等は一人づつ校長室にいき口頭試問の練習をしました。なんだか、あがれるような、落ちるような、へんな気がしつゝ、体力の方をしました。夜はつかれをとり早くねました。

三月二十日　木　晴

今日はもう六年生が、一緒にゆかいに、たのしく十分に勉強する最後の一日です。あすは春分で休みだから…すこしづつやってかえりました。夜は口頭試問をしました。そして九時頃ねました。ああ、あやうき試験は、はたしてどうだろう……？

三月二十一日　金　晴　春季皇霊祭

翌日、試験だから口頭試問のけいこをしていると、墓に行ってこいと言われたので、お墓に行き、花をかえて水をかけてきました。予習に行きました。そして一通り復習しておわりました。夜、風呂に入ってぐっすりねむった。

三月二十二日　土　晴

いよいよ試験が始まった。僕は第一班でした。今日は体力考査があり、足かけさか上がりと、六十米疾走と、正確なげをしました。午後は身体検査をしましたが、身体けんさは割合よかった。かえって、また、ぐっすりねた。

三月二十三日　日　曇のち雨

今日も試験だ、雲っているから、こうもりを持って行った。口頭試問をした。僕には戦争のこと、慰問袋や文のことをきゝ、朝鮮からきたこと、家のことをきかれました。午後は内部的な身体検査をしました。雨が降りだした。

三月二十四日　月　曇

今日学校に行った。すると皆が僕のところにあつまって「どうだった」ときゝました。僕はいろいろ話してあげた。そして今日は終った。予習がないので、ひまがあったから手紙を出した。そして製材所にリヤカーと、かますをおきに行きました。

三月二十五日　火　晴

見付中学を受けた幡鎌君と武内君と高一の小林君が入学出来た。僕等は翌日だ、どうだろうなって、思いながら学校に行った。晩になればなるほど心配になり、元気がなくなりました。そして夜八時半ねた。どうかはいれますように……。

（この日記に、目を通した岩田先生の判が、この日に押してあった。）

三月二十六日　水　晴

今日、掛中（掛川中学校の略称）の発表です。僕はどうも危ないと思っていたら、二時間目の休み時間に四人とも通ったというしらせがあったので、僕はあんどの胸を撫でおろした、安心した。（近藤君と村松環君と加藤君と僕）僕は入学してからも一生懸命しようと思って、父母に電報をうった。

三月二十七日　木　雨のち晴のち風

今日は雲っていたが、雨が降りだして来た。が、また

はれて風がつよくなった。環君、近藤君と僕三人はパスに入れる写真を袋井までペタルハイヤー（自転車）にのっていきました。そして、うつしてかえりがけ風がつよく、とてもなんぎでした。

三月二十八日　金　晴

今日は晴の卒業式だ。僕は卒業證書と成績一等賞と一ケ年皆勤賞の賞状をいたゞき、賞品にエンピツ一本と、すゞり箱をもらいました。午後は謝恩会をしました、そしていろいろおもしろいことをしました。記念の写真をもらった。

三月二十九日　土　晴

今日は試験休みです。中学校の用意や机のせいとんをし、手紙を横浜（紙透亀松伯父）と淑子ちゃん（妹）と千葉の八幡（鈴木始一伯父）におくりました。午後はこの日記を書き、そして手紙を父母に出した。今日は四通出した。それから雑記帳に小遣い表のようなものをこさえた。

三月三十日　日

向いのおじさん（鈴木清次）に入学祝に万年筆をいただきました。手紙を父母に書いて、それから学校に、きがん祭をしに、いきました。午後は森までおくりにいきました。二里歩いたので、おなかがすき、夜たくさんごはんをたべました、ふろに入ってねました。

三月三十一日　月

今日は手紙を書いた。桃南（満州の紙透平八郎）のおじさんの所に出した。また父母に出しました。返事が来てお目出度うとしてありました。今年になってから父母に何回ぐらい手紙をかいたかというと、それはちょうど十回です、一箇月平均三通です。今月は試験にパスし、卒業し、成績一等賞と皆勤賞をもらい、とても目出たかったが、一面、僕は中学校に入ってからも一生懸命勉強するつもりだ。金は一銭もむだをしないつもりだ。立派な人になって見せる。

（私の拙い小学生日記は、この日で終っている。中学校に入ってからは、もう日記は書かなかった。）

三、掛川中学校へ入学

周南小学校の同級性は、卒業記念写真を見ると五十四名で、そのうち、中等学校の入試を受けたのは、私の覚えている範囲では、九名で全員が合格した。いずれも、静岡県立で見付中学（現磐田南高）に幡鎌志計雄君・武内董夫君、磐田商業（現磐田東高）に高林清司君、掛川

中学（現掛川西高）に加藤泰・近藤宏・村松環君と私、掛川高等女学校（現掛川東高）に山崎まさ・鈴木昌子さんであった。なお、当時の中等学校は男女共学ではなかった。

四月一日から、小学校は国民学校と改称された。恩師岩田武夫先生は周智郡熊切村熊切国民学校に転任された。

昭和十六年四月五日、私は胸を張り、夢を抱いて掛川中学校に入学した。見回すと、みんな緊張した面持ちの紅顔の美少年ばかり（私もその一人）、いかにも、利発そうに見え、希望にみちて、目は輝いていた。私も、いよいよ頑張らなければ……と思った。山梨から袋井までは、チンチン電車（静岡鉄道秋葉線）に乗って、袋井からは東海道線で掛川への通学が始まった。

ここで少し、掛川中学校の歴史をひもどくと、明治十年（一八七七）、冀北学舎の開塾にはじまり、揺籃の時期を経て、明治三十四年（一九〇一）に、静岡県立掛川中学校として開校した。そして、昭和二十三年（一九四八）、新しい学制に移行して、掛川第一高等学校となり、翌年四月には、掛川西高等学校（掛川西高）と改称され、男女共学制が始まって、現在に至っている。平成十二年（二〇〇〇）には、創立百周年を迎えた。

静岡県下、屈指の伝統校であり、また、県下有数の進学校でもある。しかも、この間、幾多の人材を輩出している名門校である。

私は、この素晴らしい中学校に入学出来たことを、誇りに思っている。

しかしながら、私たちが入学した年に、大東亜戦争が勃発し、一年繰り上げて四年生で卒業した年に、日本は連合国に無条件降伏をした。私たちの学年は、まさに、戦争に始まり、戦争に終った時期の軍国少年となった。

入学すると、まず、国防色といわれたカーキ色の制服となり、戦闘帽にゲートルを巻いて通学したまるで、兵隊のような服装となった。

一年生から、軍事教練がばっちりあり、また、働き手が応召により、または戦死によって、手不足になった農家へ、応援の勤労奉仕も始まった。

それでも、私たちが一、二年生のころは、まだまだ、銃後といわれた直接戦闘に加わらない、内地の一般国民には、戦争の緊迫した情勢は感じなかったと思うし、学校の授業も、まず、大体、普通に受けられた。

そんなある日、授業の休み時間に、私が便所で小便をしていると、隣に同級生の鈴木学君が立った。

と、彼は途端に私の方を覗き込んで言った。

「あっ、紙透の、毛が生えていらあ、あっはっは」

私も、すぐに、彼のを覗き返したら、ちょろちょろと、

二、三本生えていた。

「お前のだって、生えているんじゃないか」

「わっはっは」

「わっはっは」

（俺だけではないぞ）

彼は安心した様子であった。

私たちが、春に目覚め始めたのも、このころであった。

また、ある日、授業の二時間目だったか、

「起立。礼。着席。」

級長の号令で、挨拶が終って、皆が腰掛けると、先生は、すぐに、私に、

「紙透、お客様だ、職員室に行きなさい」

と言われた。

「はいっ」

（授業中なのに、なんだろう？だれだろうか？おかしいなぁ）

私は、訝しみながら、足早に廊下を歩いて、職員室に入った。留守番の先生が一人いて、応接室を指差しながら、声を出せずに、目で、入りなさい、と言った。

私がドアを開けると、なかに、軍服を着た竹内憲兵曹長が腰掛けていたので、びっくりした。

「やあー、しばらくだったねぇ、元気だな」

私を見て、懐かしそうに、にこやかに言った。

「はいっ」

「今日はね、君が、しっかり勉強しているか、どうか、見て来てくれと、お父さんに頼まれて、来たんだよ」

「はいっ」

「勉強しているよね」

「はいっ」

「よーし、じゃあ、よく言っておこう」

「はいっ」

私は、まるで軍隊調の返事ばかりをしていた。

（朝鮮から、わざわざ僕のことだけを聞きに来たのかなあ？）

私は教室に戻りながら思った。

竹内曹長は、朝鮮の南陽憲兵分遣隊で、父小太郎の部下であった。当時、私は何度も会って、よく知っていた。

祖父の家の二階は、和室が三部屋あったが、襖は全部、取り外されており、だだっ広く、すべてが見通せて、隅に座卓が一つ置かれていた。この二階は、私一人だけの勉強部屋となっていた。寝るのは一階であった。

学校で、竹内曹長と会ってから、何日か過ぎた日に、私は下校し、いつものように、復習をしようと、階段を上がりかけて、二階の部屋が見えた途端に、また、びっくりした。だれもいないはずなのに、みいちゃん（みさ子叔母）と竹内曹長が、二人並んで、窓際に寄り掛かり、すっかり、くつろいだ雰囲気のなかで、愉快そうに談笑

しているではないか。二人は私を見ると、みいちゃんが、
「寛ちゃんが、よく勉強しているかどうか、小父さんが見に来たのよ」
と、二人を代表したように言って、また、二人は笑顔をつくった。私は、ここにいては邪魔だと思い、すぐに、
「うん」
と言って、踵を返し、一階に下りていった。

その後のある日、私が家で、何となく土間に接する廊下に腰掛けていると、土間を歩いていたみいちゃんが、私に近寄ってきて、
「みいちゃんね、こんど、お嫁に行くの」
と言った。
「えっ……」
「もう、この家から、いなくなるの」
私は驚き、急に寂しさが込み上げてきた。私はみいちゃんには甘えきっていた。それに、だれよりも頼りにしていた。
「寛ちゃんね、これからは、おじいちゃん、おばあちゃん、一三の言うことをよく聞くのよ」
私は、うつむいたまゝ、うなずいたが、急に涙がぽろぽろと出てきた。こぼれる涙を隠すのに困った。
やがて、みいちゃんはお嫁にいき、家からいなくなった。
その日、私は皆の陰に隠れるようにして見送った。みいちゃんは私に一瞥を送り、家を出ていった。
しばらく経って、私の父母が、竹内時雄曹長とみさ子叔母の仲人をしたことを知った。
〝みいちゃんは時雄の嫁になる〟
こうして私には、時雄という叔父が一人増えたのであった。

私は何度も、父母に手紙を出したが、生まれて初めて父小太郎から手紙を受け取った。

拝復
御手紙拝見。其の後元気で勉強して居るとの事、何よりです。
何をするにも、身体が元気でなければ、駄目。次は勉強して学を修める事。
扨て、将来の事は、幼年学校希望なれば、しっかり勉強して身体を丈夫にして来年受験する事とせよ。決して急ぐ必要はない。身体には充分気を付けて、先ず健康から、それには剣道をやるに限る。勉強は学校の先生の教えによってやればよろしい。決して無理をせずにやれ、物事は総て、真剣に真面目にやれば必ず成功する。
こちらは元気です。久代（妹）の百日ゼキは殆ど全快、幹郎（弟）のセキは未だ一寸全快せんだろうが心配はいらない。
（昭和十六年）十一月六日　（終り）
父より
寛夫君

当時は、軍国時代であったし、しかも、父が軍人であったから、私も父のようになりたいと思うのは、自然の成り行きであった。掛川中学二年生の時、私は静岡聯隊で、あこがれの陸軍幼年学校の入学試験を受けた。しかし、一次試験は通ったものの、力及ばず二次試験で不合格となった。
平成十年八月四日のある新聞に、
……
将来の将校育成を目的とする陸軍幼年学校は、全国に東京、大阪、仙台、熊本など六か所あり、教育年限は三年間、現在なら中学生に相当する子供たちが生徒となった。定員は一学年五十人で、競争率は五十倍以上にのぼり、陸幼生徒は全国から選び抜かれたエリートだった。
……
と、述べていた。
同級生で、同じく受験した、小嶋淳、鈴木静夫君の二人は見事に合格、入学して、いわゆるエリートとなった。
私は羨ましく思った。
鈴木静夫君は袋井から通学していた。親しくしており、よく下校をともにした。彼が東京陸軍幼年学校に入ってからも、しばらくの間、文通をした仲である。
「……多いに今後も頑張られて必ず陸士（陸軍士官学校）突破の栄冠を得て下さい。今年から軍隊関係の学校の志望者は非常にふえたから、よほど頑張られないと駄目だよ。君の合格を私も大いに祈って居ります……」
などという励ましの手紙をもらったものである。

私が中学一年生、二学期の時、昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本軍が真珠湾のアメリカ軍を奇襲し、大東亜戦争が始まった。次いで、マレー沖海戦で、イギリス東洋艦隊の主力を壊滅し、更にグアム島、ウェーキ島、香港を占領した。
翌年、マニラを占領。南ボルネオ、セレベス、アンボン島、チモール島、バリ島に上陸。ラバウル、シンガポール、スマトラ島を占領。スラバヤ・バタビヤ沖海戦では、集結していた敵艦隊を、ほとんど壊滅した。次いで、ジャワ島に上陸、バンドンに入城した。
緒戦の戦果と、相次ぐ戦闘の勝利は国民を狂喜させた。
（つづく）

漢詩

潮騒錄（卅三）

鯨游海

五つのグループに集約されて了った。

戦後の経済をリードして来た銀行のあの往年の元気な姿は見る影もない。しかし自由主義経済にあっては銀行がしっかりした力を有し続けることが不可欠なのである。

そこで業界新聞の銀行新報社の依頼に応じ、銀行を励ます漢詩一首および同紙の創刊五十周年を祝う一首の計二首を作った。（平成十四年二月二十八日号所載）

経世＝経世済民＝世を治め民を済うこと。荘子・齊物論より。経済という語はこれに由来する。

合縦連衡＝戦国時代の蘇秦と張儀が説いた策。合縦は強国の秦に六国が南北縦に同盟し対抗せんとする策。連衡は六国が各々に秦と横に同盟し安全保障とする策。

纜を解くは船出する。訓読の「かし」は強調の終助詞。

☆帆を揚げよ纜を解け黄金丸
　波高けれど潮はかないぬ

勵銀行　　平成十四年二月

往事銀行經世雄
近年迷走怒濤中
合縦漸了潮流好
解纜揚帆向疾風
　押韻・雄中風

〈銀行を励ます〉

往事銀行は　経世の雄たりしが
近年迷走す　怒濤の中
合従　漸やく了えて　潮流好し
纜を解け帆を揚げよ　疾風に向えかし

〔注　解〕

バブルの崩壊による不良債権の多発等により、日本の銀行は経営の危機を招いて了った。往事十五行余も存在した都市銀行も、今や再編成＝合従連衡を余儀なくされ

暗雲＝不況は何れ去って明るい春がやって来るだろうがその時にはまっ先に緑風＝明るい情報を世に送り出してくれるであろう。

☆木鐸を鳴らし来たれば五十年
　怒濤の最中緑風を聞く

越後六日町温泉泊客舎龍言　　平成十三年霜月

國境通過雪未酥
越山曖曖溫泉湲
待望浴後珍肴膳
秋滿龍堂紅舞園
　押韻・酥湲園

〈越後の六日町温泉にて客舎龍言に泊す〉

国境通過すれど　雪いまだ酥がえらず
越山あい〳〵として　温泉湲々たり
浴後　珍肴の膳を待望すれば
秋は龍堂に満ち　紅は園に舞えり

〔注　解〕

起句は川端康成の「雪国」の冒頭を連想している。
曖々は、うす暗くかすんでいるさま。湲々は擬声語で

祝銀行新報創刊五十周年　　平成十四年二月

知命論調半世紀
銀行新報任金融
更鳴木鐸貫斯道
雲去春來送緣風
　押韻・融風

〈「銀行新報」創刊五十周年を祝す〉

知命の論調　半世紀
銀行新報は　金融に任じたり
更に木鐸を鳴らして　斯の道を貫ぬき
雲去りて春来たりなば　緑風を送らむ

〔注　解〕

知命とは論語・爲政篇「五十而知天命……」および同堯曰篇「不知命　無以爲君子也……」ここでは使命を自覚している事の意で用いた。また五十の縁語でもある。

木鐸を鳴らす、は世を善導する、警告を発すること。木鐸は打楽器。論語・八佾篇「天將以夫子爲木鐸」とある。なお斯道も孔子の説いた儒教の道をいう。

口語訳してみよう。

使命を自覚され半世紀に亘り新聞で論陣を張りつつ「銀行新報」は金融情報発信の一翼を任って来られた。

これからも更に木鐸を鳴らして世論を善導し、斯の道一筋にその使命を貫いていかれることを希望致したい。

さらさら。潺と同じで潺湲とも表現する。
八海山をはじめとする越の山々が遠望出来るひなびたいで湯であった。旅館の建物は龍の名に恥じない立派な和風木造で、江戸時代のままの姿で再現されていた。

☆越後路を馳せ越え来れば雪ならで
今を限りと紅の舞う

愛惜老舗雪印消滅

平成十四年二月

酥酪名門痛恨謀
何爲狗肉懸牛頭
無信不立百年雪
一夜雲消萬事休

押韻・謀頭休

〈老舗雪印の消滅を愛惜す〉
酥酪の名門　痛恨の　謀
なんすれぞ狗肉もて　牛頭を懸げたるや
「信なくんば立たず」　百年の雪も
一夜にして雲と消え　万事休したり

〔注　解〕

近年、不況で倒産する企業は多いが、雪印の場合は消費者の不信が嵩じ、これが引き金となって売上が劇的に減少し倒産に至った。業界No１の名門で業歴八〇年の老舗だっただけに消費者の反発も大きかった。その後似たような事件が続くがインパクトは雪印程ではなかった。度重なる不祥事であったことが命取りとなったと判断される。危機管理及び経営トップの初動体制が何よりも大切であることを教えてくれた。併せて企業の倫理観の欠如を象徴する大事件であった。経営幹部は「論語」をもう一度繙くべし。

起句酥はミルク、ヨーグルト類、酪はバター、チーズ類をいう。

承句は恆言錄「懸羊頭賣狗肉」を捩ったフレーズ。表示と中味が違うこと＝看板に偽り有り。

転句「無信不立」は論語・顔淵篇の有名な句。小泉純一郎総理の座右の銘の由であるが、さて総理の実践の程は怪しい。

口語訳してみよう。

酪農食品の名門企業であるあの雪印が何たる事ぞ、痛恨の策謀を巡らして消費者を騙していた。
何たる事か狗の肉を売るのに牛の頭の看板を懸げていたとは……。ああ已矣乎。
論語にもいう「信無くんば立たず」と。百年の老舗雪印も一夜にしてあっという間に雲が消えて了うように溶解して了った。ああ、万事休す。

☆舌とどめ眼閉ずればふと覚ゆ
バターの味に遠き日の母

責白馬朱衣鈴木宗郎大司空

平成十四年三月

背命忘仁暴利謀
虚言恫喝轉無羞
但教越女蝦夷在
不使親沽馬一頭

押韻・謀羞頭

〈白馬朱衣の鈴木宗郎大司空を責む〉
命に背き仁を忘れ　暴利を謀り
虚言恫喝　転た羞ずることなし
但だ越女をして　蝦夷に在らしめば
親をして　馬一頭を沽らしめじものを

〔注　解〕

起句の命は天命、使命。論語・子罕篇「子罕言利與命與仁」を想起する。転句の越女とは、ここでは越後の女傑田中眞紀子女史を比喩している。国会で鈴木宗郎議員と虚言発言で対決し、嘘つき宗郎の正体を暴露し遂に政治生命を断つに至った。この事実を踏まえ、二人が若し青年期に北海道で邂逅していたなら、とする。

結句の馬一頭も今や有名な逸話となった。鈴木宗郎の父親が息子の学資を作る為「唯一頭残っていた馬を売った」とする自称美談。これで有権者のお涙と票を頂戴して当選を重ねて来たというが、事実は少し異なる。彼の実家は牧場を経営する豪農。これ即ち嘘の始まりだった。

なお転結句の冒頭の二字「但教……　不使……」の用例は王昌齢の名句に見られる。出塞と題する辺塞詩。

秦時明月漢時關　秦時の明月　漢時の関
萬里長征人未還　万里長征して　人未だ還らず
但使龍城飛將在　但だ竜城をして　飛将在らしめば
不教胡馬度陰山　胡馬をして　陰山を渡らしめじを

飛將とは漢軍の名将軍李廣のこと。あの名将軍の李廣さえいたら胡軍にやすやすと陰山を越えさせないものをとの意となる。なお詩題の朱衣は高官の代名詞。大司空とは漢代の官名。ここでは国会議員を指す。さて口語訳。

天（使）命に背き、仁礼徳義の儒教の倫理を忘れて暴利を貪ぼり、国会でも嘘をつき又外務官僚らを恫喝してもますます羞ずる様子もない。

若し越後の女傑田中眞紀子が若かりし頃北海道に居て同じく若者の宗郎と対決していたら（嘘が暴露されて）馬を売るような無駄を親にはさせなかったであろうに。

☆国政の大事託する人という
定まらぬ眼にこの国を恥ず

《漢詩の流れ24》晩唐①――ものの哀れは中国にも――

九世紀前半から九〇七年唐王朝滅亡迄の八〇年間を晩唐と呼ぶ。

政治の腐敗に加え、各地に起こった王仙芝、黄巣、李克用等の叛乱が続発し、三百年の栄華を誇った大王朝が崩壊した。

政治的、社会的には斜陽とはいえ、文学＝詩の世界に於ては盛唐に劣らない美の世界が現出した。亡びゆく哀感が人々の共感を呼ぶが、唯それだけの故に留まらない。

洗錬された技巧や芸術的な熟成が醸酵し、盛唐の雄渾、格調とは一味違った大人の美が究められた時代でもあった。これは時代の反映でもあるが、併せて杜牧、李商隠溫庭筠らの天才詩人が輩出したことにもよるであろう。

杜牧（八〇三～八五三）

字は牧之。京兆府萬年縣（長安）の人。晩唐を代表する詩人で、盛唐の杜甫を「大杜」「老杜」というのに対して「小杜」と呼ばれる。

祖父の杜佑は宰相を務めた人で「通典」の撰者でもあった。従弟の杜悰も宰相になった等名門の一族である。

才能豊かで教育環境にも恵まれた彼は、二六歳で進士に及第し、エリート街道を走った。しかし単なる出世盲者ではなく清濁併せ呑む巾の広い視野も有していた。

眼を患った実弟の為に敢えて収入の多い地方官を自ら志願し、どさ廻りを厭わない一面がある等暖かい人柄であった。

また狭斜の巷に流連した風流才子であり、更に節を曲げない剛直さも持ち、上司に誤解される面もあったが、小事にこだわることなく、国難に際しても大事を論じる豊かな識見を示している。

某国の外務官僚の如き形だけのエリートとは異なる眞の実力を有する識見十分な、兵事、政事に通暁した有能なキャリア官僚であった。

詩は流麗で色彩鮮明、情感あふれる七言絶句は、多くの人々が暗誦し愛唱する所である。

江南春　（江南の春）

千里鶯啼綠映紅　千里鶯啼いて　緑紅に映ず
水村山郭酒旗風　水村山郭　酒旗の風
南朝四百八十寺　南朝　四百八十寺
多少樓臺烟雨中　多少の楼台　煙雨の中

清明　（清明）

清明時節雨紛紛　清明の時節　雨ふんぷん
路上行人欲斷魂　路上の行人　魂を断たんと欲す
借問酒家何處有　借問す　酒家は何処に有りやと
牧童遙指杏花村　牧童遙かに指さす　杏花村

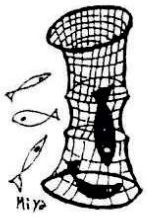
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（三十三）

第一部　北方探検近藤重蔵　下

第一章　重蔵の栄華と失脚

五　蝦夷地開発は功名手柄に非ず

金子正義



（一）

享和元年（一八〇一）三月、近藤重蔵より先に択捉島に戻った山田鯉兵衛は、品川霊岸島船出の前に、特に老中首席松平伊豆守信明に呼ばれ、内示を受けた。

『五月より蝦夷奉行は箱館奉行と改称され、七月より東蝦夷地は幕府の上知借り上げでなく、全くの幕府の直轄地となる。従って幕府の蝦夷地御用役が、今迄松前や箱館或いは様似と番役所を移して、連絡が取れない事もあったが、今後はいずれ箱館奉行が任命され駐在する事になるが、近藤重蔵は蝦夷地御用択捉島専任であるので、奉行が決定する迄目付羽太正養と箱館奉行所に居て松前藩より在勤していた詰合勘定役の水越源兵衛等を督して、箱館奉行の到着を待つように』

択捉島と江戸が遠く離れている為に、開島初年に莫大な収益があったようだが奉行が決定せず問着があっては困る。

東蝦夷地全体で全くの幕府の直捌による海産物の収益で、売り上げが、七万両収益が六千両もあった。幕府御用に依る収益であるから勘定奉行を通して、幕府の金庫に納めるべきであるが、近藤重蔵が関東郡代付の支配勘定であるので十二月十三日に、蝦夷地御用専任の支配勘定に任命されたので、収益金の全ては近藤重蔵の処置保管に任せられる。

恐らくは、勘定奉行の中川飛驒守忠英と、石川左近将監忠房の推輓に依るものであろう、と推測した山田鯉兵衛は、択捉島に戻った重蔵に尋ねると、

「左様、始めての収益は上々であった、使途も任せられている訳であるが、其の方と良く談合して決めよう。然し乍ら、海山の狩猟、用具の充実、港湾設備の改善、船舶の増強、いくら金が入っても不足である。然るに、異邦人の侵入攻略に対する国境警備、非常事態に備えての戦力の確保は、現在南部藩、津軽藩の兵力で箱館、様似、根室等で警備に当っているが、不幸にも厳寒に病に犯され倒れる者多く、家族を不幸に落し入れ重大な影響を与えている。今後其の補償を充分与えなければならない」

「結構なことで御座居ますが、海産物等の収益は年度ごとに変化があるようですから、年度ごとに予算が変動が無いように、収益の多い年には近藤様の下に保管する事も必要です。

経済的な事についてはともすると、商品経済の発達した大坂や長崎等の株仲間や廻船問屋などの商才に長けた者共、産物売渡しの差益を今見られない様取引役人に注意が肝要と思います。

大体、天下泰平に馴れ安眠を貪る士分の者が多く温暖無事の江戸に為すことも無く過して己れ一族の安らぎ繁栄を保つを善とするご仁が多くなったのはどうしたことでしょうか。

先頃蝦夷地の御用、箱館奉行の任命に係る件につき、御用奉わり乍ら応ぜず、不将の事に依り役儀召放、御目見得以下に命ぜられ家籠められた御任も出る有様も、残念に思います。」

士道も地に墜ちたと、暗然と嘆く山田鯉兵衛は、更に士道批判の穂先を変えて、

「其れにしても、松前福山城の松前章広侯は、何んと不運な方でありましょうか、寛政十一年に幕府に東蝦夷地を七年間の期限ですが召し上げられましたが今度は更に拡大され、蝦夷地全体を召し上げるとか、然も期限は無期限とか、松前藩の家臣は、職を失ない家族の者も路頭に迷うとか、暗い噂が流れているようです。」

と同情するかのように嘆いた。

「左様か、然し乍ら寛政十一年の上知の時は、箱館は勿論、各地の松前藩の家臣は、詰合御用役より足軽小者に至る迄、幕府御用役として在勤している。

今後西部蝦夷地の召上となっても、同じく身分職域は変らず、動揺する事は無いであろうと思う」

との近藤重蔵の言葉に山田鯉兵衛は納得したが、後日、実際に松前藩の全領地が召し上げられた文化四年（一八〇七）以後、松前藩の家臣三百五十名程の家臣（足軽小者を除き）二百十名程は御暇となっていた。

幕閣として、松前藩が室町時代より武田信玄（源氏）

の流れの名家である松前氏を軽んじている訳ではなかった。従って寛政十一年の東蝦夷地の上知の時も其の代償に武蔵埼玉郡久喜に五千石の地を与えていた。

亦、北辺の地に異国船の問題多く対応失費として一万両費用を出していた。

後日の事になるが、西蝦夷地が上知された時には、陸奥伊達郡梁川を中心として総高一万八千石の領地を与えられ転地となったが新領地よりの収入は六千五百両であった。然し移封直前は、松前藩の各場所よりの運上金、沖之口の役金（税）収入が一万二千両もあったので助かった。だが次年度より減収となる訳である。

然し乍ら藩が滅亡した訳でない、其れよりも何にか天命のようなものを山田鯉兵衛は感考せざるを得なかった。

「僭越乍ら、松前章広侯一族は、本土の諸大名と違って不遇であるように思います。例えば一国一城の主として高層華麗な天守閣を仰ぐことが出来ない様です。

天下騒乱の時代は別として二代公広侯以来、焔硝蔵の失火、駒岳の度々の爆発、地震等々で被害を被っていたが、寛保元年（一七四一）には大津波があって城ばかりでなく人家山林をも押し寄せ倒される大被害があった。

幸い古来より金鉱や砂金が未だ豊かな松前藩であるので其の都度旧より堅固に補修し、難しくなりつつある北方防衛問題の急にはならなかった。

処が寛政六年に再び出火し、寛政九年に再建したばかり六月六日、又々出火し焔硝蔵に引火し寛政十一年、漸く再建されたが、寛政十二年駒ケ岳の爆発で再度被害を受ける。

火山爆発もさり乍ら、諸外国の探検船や、米国等の捕鯨船等が日本列島の沿岸に出没し、飲料水、野菜を求めて上陸したりする海洋の騒然たる状況に応じて、（一七九二）林子平が『海国兵談』を書いて処罪され、版木迄取りあげられたが、知床半島目無地方の乱とか、米、英の捕鯨船の近海航行や、漂流民光太夫を送って根室に来航し通商を求めたラクスマン等で、北方事情は急変し、最上徳内の『蝦夷草紙』とか、近藤重蔵の師本多利明の『国家豊克策』も世に出て、今度は政治に関わるな、政事に嘴を入れるな、と咎められもせず、多くの庶民にも読まれ、幕閣より御三家に意見を求めたり、水戸藩や薩摩藩では藩主が蝦夷地探索に、探検隊を差し向けるようになり、志ある武士や町人迄も辻の市中目安箱に蝦夷地対策の意見を書いて投書したり、探検隊や開拓人になる事を希望して申し入れたりした。

特に八王子の千人同心が熱心に志願しているので特に許されて、千人同心百人組頭の原半左衛門、弟の新介は二手に分れて入植した。

組頭の半左衛門は白糖に五十人の同心が、槍五十、銃炮二十五の武器を携行して入植し、弟の新介も同じ装備で五十人が勇払に入った。

寒冷の地で米が出来ないと伝えられていたので、古代防人の栄誉を示して、戦の無い時には米を作ろうと、不毛の寒土に鍬を振って悪戦苦闘した。

二年がかりで二十町程開拓し、大根、芋、ささげ、大麦二斗、粟二斗程は収穫したが、自給の主食は生産し得ず野菜不足、寒さの為に浮腫が出て用便も止まり軀中に水泡が出て次々と落命した。

其の状況でもアイヌに接して、アイヌの猟を手助い、鮭や鹿の肉を得て体力を養い、アバシリ山道、シャリ山道を開鑿する彦十郎などもいて、四年後迄頑張っていた。

元々蝦夷地は全くの水田耕作は不適で米作などは殆ど不可能とされ、アイヌも大古本土で大和民族と住み分けしていた頃はともかく蝦夷地より千島、樺太、カムチャッカに及ぶ寒土を耕するなど愚の骨頂であった。

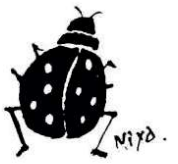
古来極東の独孤民族として山野、海辺に移動生活をしていたアイヌの広範な生活圏に、農耕弥生の文化を元とする大和民族が入り込んで来た。

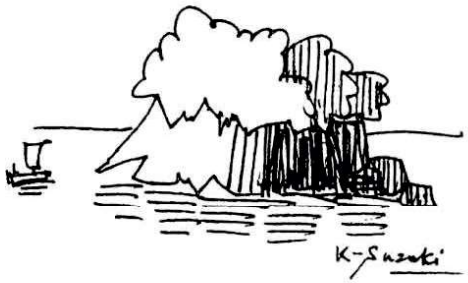
特に大和文化を持ち来ったが、大和文化は弥生の米作文化である。寒冷の地蝦夷では不適である。アイヌの狩猟を媒介として、漸く大和文化の衣食住を維持する事が出来た。

蝦夷地の鮭、鱒、鰊、鹿、猟虎、大鷲の羽根等所謂、蝦夷地の三品と云われる鮭鱒、鰊、昆布を箱館、厚岸、松前等の場所請負の廻船問屋が、商い場に分担金を納めて買い集め、大坂、兵庫、長崎等で売り渡すのであった。

大きな商品経済の中にアイヌも和人も包拡されていくのであろう。

未完





千篇萬律

☆日本列島が一つに盛り上がったサッカーワールドカップ。観る者にとっては、攻守が截然（せつぜん）としルールが複雑で心理的駆け引きのある野球の方が面白いと思っていたが、今度ばかりはサッカーに熱中させられた。目を開かせ偏見を正してくれた。日本で開催された効果の一つであろう。

☆夫々のチームは各大陸の代表で個性的で興味津々。選手の肌の色、髪の型、体格等さまざまであるようにチームとしても如何にもその大陸独特の個性に溢れていた。選手の表情やユニフォームにもお国柄が出ていて楽しかった。

☆これらが何れも同じだったら何とつまらない事だろう。異質の者が共通のルールの下で死力を尽す。スポーツに限らない。人種、言語、宗教、習慣、文化や価値感が違うから面白い。千篇一律でなく萬律だから面白い。然るに戦後の日本は全てが格一化し、特に教育面で一律を指向し失敗した。

☆「漢籍なんか興味ない。英語を覚えたい」と若者はいう。「英語が喩えしゃべれても自国の歴史や言語文化を解さない者は相手にされないよ。漢籍こそ日本語や日本文化の根源なのだが」と私は呟（つぶ）やく。（く）

まんじ　第85号

平成14年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　鯨　　游海（くじら　ゆうかい）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056 横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270－0－64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031 川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　　宮城正彦画

仲間、継続、積年等をイメージして描いた（宮城）。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品（く）。

まんじ

No. 86

2002. 11. 1

まんじ第八十六号　目次

和泉式部譚（一）……島津隆子……4
犬小屋賦役……大和禎人……14
詩　ふたたび私……青木昭成……16
重債務貧困……新井宏……20
お告げ（2）……森実与子……30
悪流修羅（第二話）3
―リストラの虚構―……中泉聖司……53
哀愁武士道（三）……三戸岡道夫……58
都市銀行「爆発物処理班」（三）……宅見勝弘……74
黒船（四）……太田和貞……79
宰相の橋（四）……太田精一……87
シナリオ　龍化妖姫（五）
―周の幽王伝―……相原精次……97
霧に包まれていた光（6）……鍋屋次郎……105
体当たり戦法を強制された
神風特別攻撃隊の人びと（九）……千坂精一……118
紙透家の人びと（十五）……紙透寛夫……125
漢詩　潮騒録（三十四）……鯨游海……133
千篇萬律……編集子……138
表紙・カット……宮城正彦
カット……鈴木國男
……清水トム





和泉式部譚（一）

島津隆子



一、少女の冒険

雲をわけた群青の空から、光が燦々と地表に舞っている。ここ数日来雨が無く、乾燥しきった朱雀大路には土埃が立ちこめ、往来する人々の体にまといついていた。

その日、少女御許丸（おもとまる）は「西の市」と呼ばれる葛野郡七条の右京の市へ、一人で出かけた。早熟な御許丸は、都でいちばん頽廃の匂いがする繁華なこの巷を気に入っていた。

大門を入ると、そこには織物や薬草、干した魚や生魚、鶏や牛馬を売る店が軒を並べ、一種異様な臭気を放っている。貴人、賤民、市女、山伏、僧侶など、あらゆる階層の人々が行き交う賑やかな市のなかを、市女笠を被った御許丸は足早にゆく。お堂の周りにたむろする浮浪者の一団が御許丸に目を留め、酔っ払いが卑猥な言葉を投げかけるが、御許丸は一向に気後れする様子もなく、楽しそうに市の中を闊歩している。

散楽や雑芸なども行われる一大歓楽街は、同時に犯罪の温床でもあった。日常茶飯事のように大倉庫には盗人が押し入り、また上臈など女人がいずこともなく連れ去られたり、逆に名のある貴人に拾われて、どこかへ隠し置かれたりすることも度々起っていた。非力な検非遣使の権力では、それを捜索することなどほとんど不可能だった。それだけに単調で決まりきった日常をおくる上流の人にとって、ここは、妖しい刺激を予感させる場所でもあった。

御許丸は白粉や香料の素材を売る店の前で、ぴたりと足を止めて中を覗き込んだが、顔なじみの少年の姿は見当たらない。

「伊勢の童なら、鴻臚館（こうろ）に行ってるよ」

店番をしている老婆が、御許丸に声を投げかける。

鴻臚館と呼ばれる館は、北小路のすぐ近くにあった。鮮やかな色彩の異国風な建物には、異朝の服装を身にまとった高麗人や宋人たちが絶えず出入りし、全く意味のわからない、軽くて早い調子の言葉で話している。

御許丸が、かぶっていた市女笠を取って異邦人たちに見とれていると、ふいに少年が声をかけた。

「今日は一人なの？」

いつも一緒の女中の姿がみえないので、いぶかしげに少年が尋ねた。

「ええ、そうよ」

独り行動が得意なのか、御許丸の声ははずんでいる。

「そう、それにしてもまたいつもの清水が要（い）るようだね。酷（ひど）い顔だよ。埃だらけだもの」

少年は微笑しながら、お国訛りのある言葉で言った。

「そうね。暑いなかをずいぶん歩いたから、喉が渇いたわ」

御許丸は小袖の袖や裾の埃を払いながら言った。

少年の言うとおり、三、四ヶ月前から女中と市に来るたびに、御許丸は今日と同じように埃にまみれ、いつも喉を渇かしていた。

御許丸はちょっとばかり少年に馴れ親しんでいるせいか、少し大げさに甘える様子をみせた。

「そう遠くないところに湧き水がある、案内するよ」

「この建物の中にはないの？」

「ここは普通の人は出入りできないんだ」

「竜丸さんは普通の人ではないのね」

一度入ってみたいという願いがはずれた御許丸は、がっかりした表情をつくってみせる。

「そうだよ、なにしろオレは闇商人だからね」

御許丸に竜丸と呼ばれた少年は、父親と水銀を持って伊勢からやってくる闇行商人の一人だった。

日本からは出向くことのできない一方交通の交易だったが、高麗や宋から来朝する人たちは、この鴻臚館を舞台に闇取引を行っていた。

異国人のもたらす貨幣はもとより、各種薬品、陶磁器、宝石類などは、公家の、それも特定の人しか手に入らないきわめて高価な物だった。それと引き換えに水銀や金、刀剣、扇などが取引されるのだが、国際的に商売に長けた彼らは、より安く仕入れるこつを心得ていた。もっとも危険な航海をおかしてまでやって来るのだから、それは当然なことといえた。

だから竜丸のように盗品を安値で持ち込む者こそ、彼らの歓迎するところであり、それによって交易もますま

す盛んになるのであれば、役人も黙認せざるをえなかった。鴻臚館はいわば治外法権の場所であり、竜丸たち闇商人は、表向き市に香料を売る店舗を構えるという名目で、この館に出入りしているのだった。

二人は連れ立って都の外郭に聳える羅城門を通り、郊外に出た。

鴨川に沿って湿った野原が開け、蜻蛉が舞う。風が色濃く吹いていて、川面から陽炎が眩しくきらめく。

やがて、蒸された草いきれの中から、そこだけ別世界のようにしゃんとして林立する杜の中に入った。騒々しい蝉時雨が頭上から降っている。

すると、竜丸が言ったとおり、苔むした岩間からいかにも冷たそうな清水が流れ出ていた。杉の葉に遮られた陽射しが、風に揺られてチカチカと葉末に反射し、光の粉を散乱していて、野原にいるよりも眩しいくらいだ。

御許丸はその場にしゃがむと手を洗い、華奢な両手に水をすくって、小さな白い喉を濡らして飲んだ。それから、絞った手ぬぐいを顔や首筋に当てる。そして、襟をはだけた胸元や丸みのある肩先を拭くとき、少し恥らいを含んで、竜丸の目から肌を隠すようにした。

冷たい清水で生気を取り戻した御許丸は、白い歯をみせて悪戯っぽい眸で竜丸に微笑みかけた。そんな御許丸の少し性急で大胆な仕草を、惹かれるように見つめていた竜丸は、はっとわれに返ると慌てて目を逸らした。そして、汗の滴る顔を拭おうともせず、この場の息苦しさから逃れるように、

「この先に、宿にしている家がある。少し休んでゆかないか」

と、ぶっきら棒にいった。

御許丸は広く白い額を上げ、長い髪を指先でとかしながら、精悍で利発そうな竜丸の顔をまじまじと見つめる。褐色の胸肌に風をあてようと竜丸の上衣ははだけている。

「遠いの？」

「あの竹林の中にある」

竜丸の指差す方向にこんもりとした林が見え、茅葺きの屋根が点在している。

御許丸は歩き出した竜丸に従った。

野原には穂先の伸びた雑草の中に百合、霞草、露草などが咲き乱れて、夏風にそよいでいる。野原が尽きて竹林に入ると、ひんやりとした空気が漂い、陽をさえぎっていた。

都にいる間、間借りをしているというその百姓家は、想像していたよりも広くて、梁や桁も頑丈なものである。

「家の人は留守なの？」

中に入るとき御許丸はちょっと躊躇するように聞いたが、皆、市や畑に行っているといいながら、竜丸は早くも土間に立ち、

「腹がへったよ。朝から何も食べていないんだ。大根の粥って美味いよ。一緒に食べないか」

と言った。

二人は土間につづく板の間で、向い合って食事をした。千切りにした大根を入れた粥はそれほど美味いものではなかったが、家の中の涼しさは、都のどの家も及びそうになかった。粥をすっかり食べ終わると、寛ぎの気分を取り戻した御許丸は、珍しそうに周囲を見廻していた。そして、奥の狭い部屋の片隅に置かれた文机の上の硯箱と薄い冊子に目を留めると、尋ねた。

「あれは誰の机なの？」

「おれのだよ……、どうして？」

御許丸には文机とこの百姓家とはいかにも不似合いなものに思えた。

だが、竜丸がその部屋に入ると御許丸もついていった。

「この机で何をするの？」

「何をするって、ものを書くのさ」

「どんなものを書くの？」

「今は古い歌謡の書写をしている」

「どうして書写するの？」

「親類に都の役所に勤めている者がいる。暇をみつけてその人のところに行き、本を借りて写しているのさ」

竜丸はしつこいくらいに、どうしてと聞いてくる御許丸の質問に応えながら、何気なく文机の上の冊子を手にした。そのとき、冊子からパラパラと二枚の和紙が床に散った。和紙には歌が書かれている。竜丸が拾うよりも早く、御許丸はその一枚を手にして読んでいた。

下毛野美可母の山の小楢のす
ま麗し児ろは誰が笥か持たむ

「わぁ、難しくて、わからないわ。意味を教えて」

少しむきになって御許丸の手から和紙を奪った竜丸は、御許丸の無邪気な問いかけに、一瞬ぱっと耳朶を染めながら、

「見られてしまったんだから仕方がないね」

と呟くと、簡単に和歌の説明をする。

「東国の美可母の山は麗しい。あの美しい少女は誰の食器を持つのだろうか。つまり、いったい、どんな人の妻になるのだろうか。といった意味かな」

「もう一首はどういうの？」

あどけない視線の御許丸をみつめながら、竜丸は思いなしか感慨深げにもう一枚を渡した。

解衣の念ひ乱れて恋ふれども
何の故ぞと問う人もなし

「あらっ、こっちの方がわかりやすい」

御許丸はそういうと、
「解いた着物のように思い乱れるけれど、どうしてですかと尋ねる人もない、という意味でしょう」
「歌は意味よりも、心でよむんだよ」.
「心でよむって？　そんな思いを尋ねる人は誰もいなという真情が、この歌の心でしょう」
「それだけじゃぁ、とても歌の心をよんでないよ」
「どうして？　わからないわ」
「今、おれの目の前にどうして？　どうして？　って、しきりに尋ねている娘がいる。それでいいのさ」
御許丸はその時、竜丸の内に秘められたものを感じて、手足の先からすぅっと力の抜け出るような、虚ろな気分に襲われていた。
それと同時に、自分がどうしょうもなく未熟に思えて恥かしい気がした。そして、こんな賤しい生業の少年の中に、これほど大人びた心があることを感じて、御許丸は瞠目した。
開け放された格子窓から斜めに差す光の輪が、上気した御許丸の顔を眩しく射る。御許丸はしだいに息苦しさを覚えて、土間に戻った。
この身分の低い竜丸がひときわ優れた才能の持ち主だと思うと、御許丸の内にむらむらと反発心が湧き、自尊心が頭をもちあげたが、それはますます自分の劣等感を意識させるものでしかなかった。
御許丸は竜丸が背後に立っている気配に、今ならこのまま竜丸に抱きしめられても、抵抗できそうもない自分を想像することができた。しかし、苛立ちの中で振り向いた御許丸に、竜丸は屈託のない笑顔を向けて、片頬にかかる御許丸の髪を、厚みのある掌で優しく撫でただけであった。
陽はかなり傾いていたが、都はまだ明るかった。
羅城門で別れるとき、竜丸は懐中から小さな紙包みを出して御許丸に渡した。御許丸が顔を近づけると、香料の香りにむせた。御許丸にはそれが何かわかったが、
「これは麝香といって、髪につけるといい匂いがするよ」
竜丸の説明に、鷹揚に頷いてみせた。そして、差し出した御許丸の手に、竜丸の掌の感触が脈打つように伝わった。握った掌に竜丸がなお力を入れて、何か言おうとしたが、それを制するように、
「とっても楽しかったわ。ありがとう……」
御許丸はそう言って手を離した。
竜丸は口をつぐんだまま、朱雀大路へ消えてゆく御許丸の姿をいつまでも見送っていた。
真夜中になった。
竜丸は家中の人の寝息を聞きながら、得体のしれない闇の精気に組み伏せられていた。皮膚が驟雨に濡れたように汗ばんで、のたうった。

木洩れ日に光るしどけない御許丸の白い肩や胸が、赫く燃え立ち、いつまでも網膜に浮かんで消えないのだ。その秘色めいた像に、いつしか衣を解いた裸身が重なり、今にも現実のものとなって、手の届きそうな所にあることを竜丸は実感する。
あの時、御許丸の背後から襲えば襲えたものを、そのような行為をとらなかったのは、決して臆病のためではなかった。自分が賤しい階級の者であり、御許丸が高貴すぎたというのでもない。もちろん、ゆっくりと御許丸を掌中に入れて楽しみを味わおうという大人びた恋の技巧のためでもなかった。ただ、柿本人麻呂のような偉大な歌人を志すためなのだ、と竜丸は無理にでも自分に言い聞かせる。
だが、目を閉じても開いても、幻の御許丸の裸身はいよいよ妖しく艶めいて、竜丸を禁断の闇の世界へ手招きする。
（あぁ、おれは偽善者か、それとも偽悪者なのか。そうだ、御許丸はおれを待っているのだ、きっと）
竜丸は、かならず御許丸が自分を待ち焦がれているのだと、信じたかった。そして、夜が明けたらきっと御許丸の家を訪ねようと決心した。だが、朝になると、闇の中の衝動的な想念は幼稚に思えて、竜丸の心は萎えた。それからの竜丸には逡巡の夜が繰り返された。
しかし再び、この界隈に御許丸の姿を見かけることはなかった。

二、結婚と別れ

この気紛れで早熟な少女御許丸こそが、後の和泉式部である。
冷泉天皇の后昌子内親王の病が重くなり、療養のため、内親王の大進役である大江雅致邸に入られたのは、長保元年（九九九）の秋、十月二十五日のことである。
当時、天皇家の方が病気になると、宮中伺候の者の屋敷に移る習慣があった。このため雅致邸は宮御領となり、寝殿のほか塗籠や車宿まで大改築が施された。
しかし、内親王の病状が思わしくないので、間もなく、同じく大進である近隣の橘道貞の屋敷に移られた。だが、その甲斐もなく十二月一日、昌子内親王は道貞の三条邸で寂しく崩御されてしまわれたのである。
このように皇室と深いかかわりのある大江と橘の両家にとって、まことに由々しい問題が、これより少し以前からおこっていた。
母宮超子が亡き後、遺された親王たちの養育の立場にいた、いわば継母である昌子内親王の見舞いに、たびたび訪れる皇子弾正宮為尊親王と、橘道貞の正妻和泉式部との仲が、人々の間で噂されるようになっていたのだ。

和泉式部の父大江雅致は漢学をもって代々朝廷に仕えた家柄の出で、長保元年頃には「太皇太后宮大進」の役職にあった。太皇太后とは朱雀院の内親王で、冷泉天皇の后であつた昌子のことである。

また、式部の母は越中守平保衡の娘で昌子内親王の乳母であったといわれる。したがって式部も少女時代から昌子内親王に宮仕えをしていた。式部の御許丸という童名はこの頃の呼び名であろう。娘時代には式部といった。

父雅致は娘のあらぬ噂のために額に汗して、釈明と謝罪に婚家先である橘家へ再三足を運んだ。しかし、平然と悪びれることもない式部の態度に、橘家では両家断絶も辞さないほどの怒りようであった。

そのための配慮であろうか、病身の昌子内親王が大江邸から橘邸へ移られる慌しい最中に、夫の道貞は和泉守に任命され、式部を伴うと早々に和泉国に赴任していった。

だが、両家がこれで一安心と、安堵の胸を撫で下ろしたのも束の間、和泉国に行ったはずの式部は、頻繁に京へ舞い戻り、その都度、為尊親王と逢う機会をもった。

京から淀川を大阪湾へ下り、和泉国に帰る途中、心を京に残す式部は歌を詠んだ。

ことはばありのまにまにみやこ鳥
都のことをわれにきかせよ

もちろん二十四歳になる式部にも、保身のための周到な配慮はあった。

和泉国におもむく四年前、式部は花のような女の子を産んだ。式部は、襟元を開いて赤子に乳房を含ませると、

「ああ、可愛いこと！」

道貞の前で母性本能そのままに、頬ずりをしながら赤子を強く抱きしめていた。

「なんと色の白いややこではありませぬか。まるで仏様が授けてくだされたようじゃ。よい名をつけてくだされ」

だが、一児の父親になった道貞は人の良さそうな顔をほころばせるばかりで、一向に名付け親になろうとしない。煮え切らない道貞の様子をみて、

「依怙贔屓になりましょうが、私の可愛い子という意味で、〝小式部〟と名づけます」

式部は前もって用意していた名前をはっきりと告げた。

「大人になっても小式部か。それは面白い」

道貞は何の抵抗も示さずに愉快そうに笑った。

「そうですわ。老女になっても小式部です」

式部はそうたたみかけた。これでこの子は永遠に私のものだわとほくそえむ式部の心を、このときの道貞は気づくはずもなかった。

時の権勢家藤原道長に目をかけられほど切れ者の道貞だったが、微妙な女性心理を見抜くことはできなかった。

そして今―任地和泉国の官舎では、道貞一行を迎えて、歓迎の宴が華やかに繰り広げられていた。配下の役人たちを前にし、道貞の視線の動きに合わせて、式部も挨拶の微笑を送る。だが、酔った勢いの男たちが歌を吟じる順番をめぐって騒ぐころには、式部はこの様子を冷えた気持ちで眺めやった。

やがて役人たちが三々五々引き上げてしまうと、急に官舎内に静けさが訪れ、酒食の酔いに道貞の目元は潤い、寛ぎの表情をみせる。式部は膝を崩して寄り添い、改めて夫に酌をした。

さもいとおしそうに式部を抱え、長い髪をゆっくりと掻きあげる道貞の五本の指が、式部の官能を撫で起こすと、ここでの生活が、再び自分を道貞の許に包み込みそうな予感がして、式部は恐れを覚えた。そして、その心の奥で、遠い都にいる親王に向って、妖しく訴える欲望のあることを強く知った。

「私も小式部のように、生涯変わらない名をつけてみたくなりましたわ」

式部は呟くように言う。

「どんな名かな」

「あなたさまが和泉守に赴任された今宵から〝和泉式部〟と」

「イズミ……おお、よい名じゃ、まるで乾いた大地に清水が流れ、喉を潤すような感じがするのう」

道貞の言葉はそのまま、かつて少女のころの式部が、少年から与えられた清水によって、乾ききった喉と心を潤された場面を思い起こさせた。

言いえて妙なるその名を持って、一旦都に帰りたいという式部の願いを真に受けた道貞は、口元に笑みさえ浮かべて頷いたのである。

三、為尊親王との恋

為尊親王は端麗な容姿に加えて、噂に違わず〝少し軽々におわす〟情熱家だったから、式部を楽しませつつ、自らもその道に耽溺している風だった。

親王が母超子を亡くしたのは、六歳のときであった。藤原兼家は娘超子を冷泉天皇の女御とし、為尊、敦道の二人の親王が生まれたが、超子は天元五年（九八二）に亡くなり、親王たちは冷泉帝の后昌子内親王や祖父である兼家一族の保護のもとに育てられたのである。

しかし、かつて、冷泉帝の寵愛を競い合った皇后昌子と超子を失い、時代は冷泉上皇系から、長女彰子の立后によって一条帝と藤原道長系の手中に移ってゆきつつあった。そんな不安定で寂しい境遇にあった親王は、その寂寥を埋めるように、一夜の逢う瀬に式部を抱いて官能の渦へと巻き込んでいった。

一方、式部にもまた、時世とはいえ、天皇家と外戚関

係が強固になってゆく道長系に夫道貞がくみこまれ、権大進になるなど出世をしてゆくことに、節度の無さを感じて嘆息する思いがあった。

ともに満たされない心をもった親王と式部の二人は、ごく自然に寄り添ったのである。

「そなたのように美しい女人は、受身になって堪能なさるがよい」

と親王は口癖のようにいって、式部を遊戯三昧の境地へと誘った。

長保三年（一〇〇一）の夏、式部は自ら正妻の座を放棄して、道貞の屋敷を出た。当然のように父の憤慨をかった式部は、大江家から勘当された。

翌年二月、道貞は和泉守の任期を終えて都に戻った。任国で得た愛人左京命婦（さきょうみょうぶ）を同道しているという噂がもっぱらであった。

式部は小式部を連れて、正式に離縁を告げるため今は嵯峨野に居住する道貞に会いに行った。

道貞は式部の後ろに控える小式部をみてから、式部を睨む様にしていった。

「自らいずみなどと名乗って、なかなか見事なものじゃ」

「この名は生涯お借りいたします」

「もはや遠慮におよばぬ。そのいずみとやらの名を以って、存分に泳ぎ廻るがよかろう」

「皮肉にございますか」

「いや、ちがう」

そういって式部をみる道貞の目には、別離を決意する強い光りがあった。その気迫に抵抗するように、思わず、

「あなたさまには左京命婦とかいわれる方が」

式部が言いかけると、

「もうよい！」

と道貞は一言で遮った。二人の間にはもはや埋め難い亀裂のあることは決定的であった。

「その子は、いかがいたす」

小式部を指して道貞が尋ねる。

「和泉式部の小式部にございます」

「ふぅむ、すべては計算どおりというわけか」

謎解きのような言葉で皮肉る道貞の前から、はやく立ち去りたい思いに駆られた式部は、

「お別れでございますね、これで」

と消え入るように呟いた。

しかし、式部はかつて恋をして結ばれた道貞を完全に忘れ去ったのではなかった。

雨の降る日、つれづれと眺むるに、むかしあわれなりし事などいひつる人に
おぼつかなたれぞむかしをかけたるは　ふるに身をしる雨か涙か

と道貞への未練心を滲ませるのである。

だが、はっきりと道貞と別れてしまった式部は、改めて若い貴公子に置き去られることを恐れはじめた。

出逢い以来、親王はわれを忘れて式部に恍惚としていた。それはただ単に、色好みからだけではなく、歌人としての式部をも敬愛していた。しかし、式部は陶酔境から抜け出て、一受領の娘である自身の立場に気づくだけの醒めた意識が常にあった。

この艶聞家の令名高い親王は、幾人の女人に巡り逢っても、常に倦み、女人たちもまた彼の許を去っていった。だが、決して親王の許を去ることのできない自分を思うと、式部は必死の思いに駆られる。事実、どう考えても式部の去るべき別の世界はなかった。

いや、ただ一つある。恋を恋して生きる世界だ。しかし、そういう思いに追い込まれること自体、ぬきさしならない深みに迷い込んでしまった証拠であろう。女の運命はどこか風に似ていて、さりげなく残酷なものだ。

式部が道貞と別れた長保四年六月、奔放な夜遊びが災いして、折から都中に猛威を振っていた疫病に罹り、親王は二十六歳の若さで、あっけなくこの世を去ってしまわれた。

実家からの勘当、道貞との離縁、強まる世間の顰蹙（ひんしゅく）と孤独感、式部が最も恐れていた一切の結論でもあるかのように、茫漠とした奈落の底に、式部はただ独り取り残されてしまった。

輝くばかりの貴公子との恋の顛末は、夢よりも儚く、悲哀と言うにはあまりにも冷厳な幕切れであった。

予　告

90号記念

“まんじ”傑作集　刊行予定

発行日　平成15年11月1日

お蔭様で“まんじ”も来年11月の刊行で90号となります。これを記念して各同人の渾身の力作を集めた傑作集の刊行を予定しております。

ハードカバー320～420頁を予定

ご期待下さい！

犬小屋賦役

森家



家紋
鶴の丸 根笹

大和人

「生類憐みの令」により江戸市中、四谷、大久保、中野に犬小屋が元禄八年に完成した。総奉行は旗本米倉丹後守昌尹で、数名の大名が賦役を命ぜられている。作州津山藩主森長成はその幕命をうけた一人であった。旗本身分の総奉行の令下に大名が置かれる破格もさることながら、賦役を命ぜられた大名は工事に要する諸費用すべての負担を余儀なくされ、実質は賦課に外ならない、貧乏くじというべき実情であった。

森氏は小早川秀秋断絶の後を襲い、信濃、川中島に在城していた森忠政が慶長八年、津山一八万六五〇〇石をもって封ぜられ、始祖となった。忠政は三兄弟で、次兄長定は本能寺変で織田信長に殉じた森蘭丸その人であり、賦役を命ぜられた当代長成は四代藩主であった。

森氏の受け持った中野のそれは、たかが犬小屋とは言えない膨大な規模である。付帯施設の餌飼所、釜屋、番所など、一六万坪の敷地に建物の総坪数一二万二六〇〇坪に及んだというから大変なものである。東京ドームの芝生の約三〇倍に相当する。

「森の殿、お加減はいかがかな、大分お疲れのご様子、案じておりまする」

「いや、これはこれは、お役目ご苦労に存じまする、某のこと、ご懸念にはおよびませぬ、お役目大切に日夜励みおりますればお構いなく」

長成は「日夜」という言葉を使った。覚えずそれは口に上ったものだったが、かれの性格からそれは律儀な本音を吐露するものになった。

「ほどほどにおん身大切になされよ、大方のところは藩士にお任せあればよろしかろうと存ずる」

総支配の米倉が中野の現場に来合わせた。身分をわきまえた、一応丁重な話しかけであった。

長成の蒲柳は生来で、他から見て気づかいを誘う弱々しさは覆いがたいものがあり、工事の采配にあたって実直を貫いてきた。米倉の官僚としての立場から言えば、融通を知らない愚直とむしろそれは思えるものなのであった。

（田舎の殿様は息抜きをご存じでない、困ったことよ、ご奉公大切はわかるが、どんなものであろうかのう）

世故にたけた米倉の惻隠の情からでた呟きである。

犬小屋の完成後は数名ずつの旗本を犬小屋支配の役にあて、仲間十六、七人を配している。四谷は規模小さく狂犬を収容したらしく、大久保は二万五千坪、中野が先のとおり一六万坪で完成後、元禄十年には中野、大久保に収容した総数四万八千七百四十八匹で、なお残り五百五十一匹あったと言われる。飼育の費用は江戸市民に課し、日本橋では間口一間につき金三分であったという。

森長成は賦役の期間は当然定府の身、江戸屋敷にあって、遠く支配地の空を思い、山河に思いを馳せた。

藩祖長政が山名氏の旧城を改新し元和二年、平山城として鶴山城を完成、鶴山を津山と改称した美作の自然、そして城下の町並み……、

当面する苦衷に人知れず泪を禁じ得ないのであった。

（四代目の自分の代におよんで賦役のため、藩情の窮迫は避けられない今、どうすれば良いのであろう）

長成は苦悩を抱き続け、ついにかれは藩士の士禄四分の一の上納まで決断、実行を止むなくした。怨嗟を避けられない事態である。

賦役に心身を労し、元禄十年、長成は二十七歳の若さで死去した。実子がなく、その危篤に際し藩は叔父衆利を急ぎ養子としたが、衆利は幕命で江戸へ向かう途中、桑名でにわかに発狂（一説では失神）し、出立できず、廃嫡を余儀なくし、森氏は治世四代、九十五年で世継ぎ無しのかどで除封された。賦役の悲しい結末である。

総支配の米倉は竣工の翌元禄九年、功により大名に列し、若年寄になった。

将軍徳川綱吉の「生類憐みの令」は貞享二年、以来その死に至る宝永六年まで二十四年、自らはついに悔いず死に臨んでも、家宣に対して百年の後も行われるよう遺言している。柳沢吉保は家宣に詳しく実態を述べ、今後は将軍のお考え次第であると進言した。罪を得たもの何万とも知れず、刑の定まらぬ中に死んで、塩漬けになっているもののあるなどを知り、自身は遺言を奉ずるが、人民の苦痛には代えられぬとし、綱吉の遺骸にその旨を告げて、未だ葬儀の行われぬ前にこれを廃した。

森氏は長成の叔父長治が分家して新見藩祖となっていた関氏の子孫長直にいたり、播州赤穂浅野氏の廃絶の後を襲い、赤穂郡南半二万石の再興を迎え定着している。

（H一四・九・一）

ふたたび　私

青木昭成

（一）　ふたたび　私

ビルの角を曲がる
そのとき　わたしは一匹の羊
わたしは蹄を鳴らす
いそぎ　群れの背中を追いかける
ホルンの音響を聴き
中空をあおぐ
すると　わたしの視野は
鋭角に裁たれていて
わたしは　つと
ふたたび　私

（二）　ゆめを

しばらく歩く
と　「黒鍵」にゆきあたる
しばらく歩く
と　また「黒鍵」にゆきあたる
そんな華やかで　どこか儚いゆめを弾く
やがて向こうから　やって来る
ショパンが　きっと

（三）　たえまなく

みち子の部屋は二重窓
彼女のピアノの音は跳ね返り
たえまなく
みち子の内部を駈けめぐる
だから　彼女は指を無限に
ひろげて拾わねばならぬ
めくるめく音を拾わねばならぬ
まったく　リストのように

（四）　脆弱に

セントポーリア
その葉脈のみどりに
みどりいろの広がり
その花弁のむらさきに
こむらさきいろの高さ
そして
みち子のピアノには透明な奥行き
彼女は頷きながら弾き
小鳥のかたむきで聴く
おのれの脆弱に　そっと近づくために

（五）便り

便りをしない間に
いつしか　あおきの実が赤く
万年青の実が赤く
わたしの庭で　ひそかな音に
変貌していました
来年が　くるまでには
碧い庭石の　いくつかを
置いてみます

（六）観覧車

「凧　凧　あがれ　天まであがれ」
両手を挙げて
かわるがわる子供たちが叫ぶ
それはいつの頃であったろう
と　ふと想う

人の高さで芝生の
かげろうが燃えている
向こうがわの空の
広さでゴンドラがゆっくり
瞑想している

回帰を続けるゴンドラの
向かい合わせのベンチ
老夫婦は二人だけの想いで
二人だけの天に向かって
すこしずつ　すこしずつ
昇る

ゴンドラは滑り
ゴンドラは仄かな
風に溶けてゆく

やがてもう　それ以上には
遠くへ離れられない水平線が
にびいろに光る
それはまた　それ以上には
低くはなり得ない地平線であって

ゴンドラは導く　二人の情念を
しだいに地上へと誘う
ついに夢心地を地上へ降り立たせる
ひどく曖昧な安堵のなかに　だが
大地にいる己たちを確かめる足取りで
二人は歩きはじめる

重債務貧困

新井宏



金を貸す者は豊かな人、金を借りる人は貧しい人、金を貸して利子をとると貧しい人から豊かな人に富が移動し、ますます貧富の差が広がる。だからイスラム教ばかりでなく歴史的にはキリスト教も金利を禁止してきた。そればかりか世界の金融業を牛耳るユダヤ人すなわちユダヤ教でさえ、もともとは金利を禁止していて、他民族からなら金利を取っても良いと勝手に割り切っていただけの話である。

金利のない世界を理想とするならば、今の日本は将に金利がゼロの社会、理想の世界を達成しているかのようである。しかしサラリーマン金融の会社が駅前の目抜き通りに店を構え、空前の好業績をあげ続けている。その一方で、国家予算の半分以上を対外債務、つまり国の借金の返済に充てざるを得ない国が世界に四十以上もあり、日本もそれらの重債務貧困国に多額の債権を有している。

近代社会を動かすための原動力ともいうべき金利。それ自身は何の価値も生まないにもかかわらずマルチ商法的に虚構の富を生み続けるこのシステムは、歴史的には時間経過と共に貨幣価値を減ずること、すなわち通貨インフレで地域内の調和を保ってきた。しかしいまやグローバル化の時代であり、地域的なインフレだけでは調和を保ち得ず、運営を誤ると国ごと貧者に転落してしまう。IMF体制がそれだ。

愚者は経験に学び賢者は歴史に学ぶと言う。もちろん歴史に学んだからと言って愚者が賢者になれるはずもないが、歴史に遊んでいると時々、この巨大で魅力あふれるテーマをつまみ食いしてみたい誘惑に駆られる。

まずは愚者らしく経験論から始めよう。

今の韓国は十年から三十年前の日本とそっくりである。二十年ほど前に大ヒットした五輪真弓の「恋人よ」という歌が「離別後の愛」とリメイクされ、若者達のあいだで流行っているし、どこに行っても道路が掘り返され、コンビニ等が次々と開店しているのもかっての日本の風景そのものである。異なるのは日本が五十年かけてやってきたことを二十年でやっている慌ただしさ位であろうか。だから日本人なら専門家でなくとも韓国の現状や将来を何でも判ったような気分になる。米価問題しかり、健保問題しかり、年金問題しかり、教育問題、少子化問題、不動産投機問題しかりである。その中に消費者金融の問題もある。

高度成長期の日本もそうであったが、韓国の場合はとにかく日本という先行馬を追いかければ良いのでスピード感にあれている。あまりに急ぎ過ぎたため五年前に通貨危機を迎え、国民総所得を一時的に四十パーセントも減少させてしまったが、銀行の不良債権問題では思い切って公的資金を投入し、不動産価格を高目に誘導し、不良債権比率を大幅に引き下げることに成功して見事に危機を脱出した。いま世界経済が低迷する中で韓国は個人消費が堅調で六パーセント台の経済成長を遂げている。だから韓国では、日本も韓国のやり方を学ぶべきだとの主張さえが目立ち始めている。たしかにその通りかも知れない。しかし、日本人だから韓国の成功の影にバブルが見え隠れしているのが良く判る。

バブルと言えばもちろん日本が大先輩である。高度成長が一段落したあとでさえも、バブルという手品を使って成長を続け、ついには国民一人当りの所得で米国を五十パーセントも追い越してしまった。なにしろこの間に国民総所得の二倍に匹敵するほど不動産価格や株価が上昇したのであるから無理も無い。だからその後の資産デフレで日本の経済がすっかり衰退したとは言っても元々のことであり、それでも一人当り所得で米国と共に世界のトップクラスを占めている。その米国の国民総所得も今はバブルで下駄を履いた数字である。

一方の韓国は、一気に先進国入りしたとはいえまだ日本の三分の一以下の所得水準にある。だからいまの教育水準や社会インフラの整備状況から見ると、中国の猛追を振り切って日本を追い上げる潜在力は十分に持っている。しかしどこか危ういのである。

例えばソウル江南のアパートの平均価格がついに坪当り百五十万円を突破し、所得格差を勘案すれば東京のアパートの一・七倍になっているという。この一年間で二倍に暴騰した六十四坪のアパートの例では一億円以上の価格である。アパート入手の競争率はいつも五十倍を超える過熱ぶりである。世界的な株安の中でも韓国の株式市場は堅調である。その結果持てる者と持たざる者の貧富の格差が広がりカード返済が滞っている多重債務者の

数が百十万人を超えた。さらに「私金融」問題がこれに追い討ちをかけている。ブラック・リスト登録者数が二百五十万人を超え、九月から五十万円以上の貸出し情報が共有化されると三百五十万人になってしまうとの予想もある。成人十人に一人が小額多重債務者に転落してしまうという恐ろしい話である。

しかもこの「私金融」の後にはノウハウ豊かな日本のサラリーマン金融がついている。いや後についているばかりでなく続々と直接進出して来ている。地場の「私金融」が金利を百パーセントから二百パーセントも取る中で、資金力と無担保金融のノウハウに長ける日本系は金利を百パーセント前後に抑えて勢力を急拡大している。これを見て韓国の市中銀行も子会社を作り小額金融に進出し始めた。

韓国の「私金融」も暴行や脅迫などによる取立てで、利用者を自殺や家出はては強盗や売春に追いやっている状況は三十年前の日本にそっくりである。マスコミが「私金融」のあくどさを社会問題としてやっきとなって報道しているのもそっくりだ。そのため韓国では最近「金融利用者保護法」を定めて、金利上限を六十六パーセントに規制するようにした。日本では「サラ金二法」を制定して金利の上限を四十パーセントに制限するまで十年ほどかかったのに比べると、さすが対応は早い。それにしても六十六パーセントでも暴利である。

日本では「サラ金二法」が制定されてからというものは、あたかもサラリーマン金融会社が社会的な認知を受けたかのように大手を振って歩くようになった。見かけをソフトなイメージに衣替えし、役員に各界出身の著名人を加え、株式を上場し、新聞・テレビに連日広告を載せ、目抜き通りに店を構え、経営者は長者番付に名を連ね、株式は業績の優良会社としてもてはやされている。しかし「サラ金二法」が制定されたからと言って、サラ金の本質が変わったはずはない。消費者金融会社の融資残高はかっての数十倍に達していて、ますます深刻な社会的、経済的な影響をもたらしている。

こんな経験があった。六年程前の正月早々のことである。会社で費用を持ち鉄鋼短大を卒業させた部下が休み明けに出社せず、事故にでも会ったのではないかと心配していたところに、異様な電話がかかってきた。何か犯罪にでも巻き込まれたのではないかと想像するに十分なミステリアスな電話であった。身分は明かさないし、連絡先も教えない。とにかく本人の居場所を探すことが先決と心当りを探させた。そうこうする内に次ら次へとサラ金らしいところから電話が架かり始めた。

結局、サラ金とクレジットカード、それに銀行のカードローンでどうにもならなくなっていた。とにかく総額でいくらになるのか執拗に問い質したところ、三百万円になるという。総務の担当者は、必ずそれ以外にも借金があるはずだと言うが、本人は頑強に否定する。将来もある若者なので、金利の比較的に安い銀行カードローンを除いて、親元からの送金や給与や賞与の管理を条件に金策し、本人に付き添ってサラ金に返済して回った。

日頃、縁のなかったサラ金とはこんなところにあったのか、それにしても電話の主とは似つかわしくない女性が手馴れた態度でてきぱきと応対している。きっと親や会社の上司に付き添われてやってくる風景など珍しくもないのであろう。返済と引き換えにカードをハサミで切り裂く。これで若者を救えるならばとの快感もあった。二度とここに来ることもあるまい。

しかし総務の担当者が言うのが正しかった。やはり二百万円ほど別の借金が残っていて、再びサラ金から電話が入り始めた。今度はもう親元も周囲も手の打ち様がない。退職金で返済することができたのがせめてもの救いであった。

その後も身の周りでおこったサラ金問題を観察するとそこには一定の法則性がある。借金の総額は大体五百万円前後である。複数のサラ金を巧みに利用すると五百万円までは借り換えで凌げるらしい。しかしいくら問い詰めても大体はその半分程度しか打ち明けない。全部話して完全に突き放されてしまうのを極度におそれ、当座必要とする分だけしか明かさず、また借り換えで時間かせぎをしようとする。

それにしても五百万円という数字はいい線を行っている。仮に平均三十パーセントの金利としても年間百五十万円程度の利子返済が必要となる。この程度の返済が給与生活者の破綻限界である。それに今の日本では身内にサラ金多重債務者がでても五百万円程度まではなんとかしてお金を工面する。なんだかんだといってもそれだけ日本の社会の蓄積は厚い。だからサラ金側が本当に回収不能に陥る比率はわずかに五パーセントに過ぎないという。現在法定金利は二十九・三パーセントに引き下げられたとは言っても、これで荒稼ぎできないわけがない。

今日本には一部上場の八社を含めて約五十社の消費者金融会社があり、その融資残高合計は十一兆円、口座数は二千万人を超えている。一口座当りにすれば平均五十万円で、これは一般にサラ金から借りられる上限額にほぼ等しい。すなわち限度いっぱいまで借りている利用者がほとんどで、しかも問題の性質上複数の口座をもつものが多数いるから、多重債務者の数はおおよそ見当がつく。韓国のブラック・リストの実数に近いのではなかろうか。しかし日本の人口は韓国の三倍であるから、韓国よりは多少ましかも知れない。

消費者金融会社はこの不況の中、テレビや新聞雑誌広

告の最高のスポンサーであり、企業所得十位以内にいつも顔をだしているし、その経営者は世界的な経済誌などにも登場する。そこにはかってマスコミから社会悪として忌み嫌われた面影がすっかり消えうせてしまったかのようである。しかし誰が考えても、今日の消費者金融の社会的な影響力はかっての悪徳サラ金の比ではない。警鐘を鳴らすのを責務と考えているマスコミが有力スポンサーの前ですっかり骨抜きされているのはどうしたことか。高利貸は社会の裏側でひっそりと営業しているのが相応しいのに、マスコミは表に出てきた消費者金融会社を持てはやしている。

ところで韓国は日本以上にカード社会である。第一、政府や自治体がカードで買い物をするように指導し要請している。もちろん真の狙いは商店等の所得把握すなわち脱税防止である。そのためスーパーなど極めて小額の買い物でもカード支払いが普通である。カードでの買上げ比率の低い商店は徹底した税務調査を受ける結果となるので、わずらわしい手続きを厭わない。それに支払い側にもカードで支払った分は年末調整でその三十パーセント分が所得控除されるメリットがある。

だからクレジットカードの各社はカード乱発に大あらわで、競争上かならず現金融資の機能をつけている。その結果カード各社の融資残高の内、本来の代金決済分は

四十パーセントに過ぎず、残りの六十パーセント、すなわち三兆円の巨額が現金サービスあるいはカードローンの融資残となってしまっている。その中には学生も多く、返済のため金利の高い「私金融」に走るケースが後をたたない。卒業してうまく就職できれば良いが、いま大学生は深刻な就職難に喘いでいる。借り入れが小額でも金利が百パーセントを越しているからいずれ大変なことになる。親が代って返済するにしても韓国の家庭の蓄積は日本ほど手厚くない。ブラック・リスト入りが三百五十万人にも達すると聞くと、その深刻さは日本の比ではないであろう。

それに加えて韓国は不動産投機ブームである。それは庶民が過度なローンを組んでいることを意味している。家計における借金が急速に増大している。このままインフレにつなげて、走りきってしまえば良いが、日本のようにバブルがはじけ資産デフレに苦しむようになると、これも日本以上に問題である。それにうまく資産インフレに乗って逃げきったとしても、そこにはまた通貨危機の二の舞が待っているかも知れない。

いまは韓国でも設備投資は不振で行き場所を失った約三十兆円の短期資金が市場を彷徨しているので低金利に向いつつあり、一般家計貸出し金利は数年前の十三パーセントから七パーセントに低下している。そのため韓国特有の不動産賃貸方式である伝貰（チョンセ）が成立た

なくなり、アパート購入が活発化している。伝貰（チョンセ）というのは、売買価格の七十パーセント位の保証金を預けると家賃を払う必要がなくなる制度で、保証金は期間満了時に全額払い戻される。その間、貸主は保証金の運用で家賃分を稼ぐ仕組みである。韓国では家賃がタダだというのはこのことを意味しているのである。日本人から見ると保証金だけで家賃なしで暮せるので、とても結構な制度であるが、いずれ消え去るであろう。

高金利であっても通貨価値がその分目減りしつづけていれば、社会全体としては「金利のない世界」と等価である。問題は貨幣価値が安定している中で高金利をはらわなければならない弱者達がいることである。その小さな例が消費者金融の借金地獄だとすれば、規模を大きくしたのが重債務貧困国の問題である。

国家予算の半分程度を対外債務、つまり国の借金の返済に当てざるを得ない国が、世界には四十一カ国ある。

たとえば、ウガンダでは保健医療予算が年間八十億円なのに対し、債務返済に四百五十億円が使われ、ザンビアでは四十五億円余りの初等教育予算に対して、債務返済にその四十倍近い約千六百億円が使われている。またタンザニアでは一九八〇年代後半に約十ドルだった児童一人あたりの教育予算が、債務返済のあおりで最近は約三ドルにまで落ち込んでいる。医療や教育、福祉といっ

た民政予算を削り、自家消費作物を換金作物に換え、森林を伐採し、返済に努力しても、本来返済すべき額の半分にも満たない国が激増中なのである。

重債務貧困国の対外債務の合計は二千二百億ドル（二十六兆円）で、日本の経済規模から見れば巨額とは言えない。しかしこれら諸国の国民総所得の合計も対外債務と同程度に過ぎず、産業基盤が未構築の後進国にあっては、債務返済がまた新たな債務を呼び、雪だるま式に借金が増大している。まさにサラ金地獄そのままの構図が発生しているのである。

企業や個人なら当然破産により清算される。しかし、これだけ資本主義経済の発達した今日にあっても、未だ国を対象とした破産という清算方法は認知されていない。自由競争と自己責任を標榜する現代社会にあって、弱肉強食の世界に堕することを避けるために、今もっとも求められているのが、後進国の債務帳消し問題なのである。

ところで日本の江戸時代は、歴史的に見ると、今の世界の状況を先取りしていた面がいくつかあった。それなりに発達した経済社会のなかにあって、鎖国により擬似的な世界をつくり、過密な状況のもと、とにかく折り合いをつけながら平和裡に暮らしてきたのが江戸時代である。その生活の知恵には、学ぶべきことが多いが、それ ばかりでなく、今の世界政治経済の状況と江戸の世界に

は、極めて類似点が多いのである。ちょっと挙げてみよう。

一、米国経済の大きさは、国民総所得で見ると約九兆ドルで、世界総所得の三十数兆ドルの四分の一程度である。一方、江戸時代末期の総知行高は約三千万石であるが、その内の幕府直轄領（四百二十万石）と旗本知行地（二百六十万石）は合せて六百八十万石であったから、幕府の経済力も日本の四分の一に相当していた。

二、米国は全世界の軍事費の四十パーセント以上を使い、圧倒的な軍事力を保有しているが、幕府も各藩に対して軍事的な威力を保っていた。

三、米国はドル紙幣を発行し、それを世界の通貨として通用させている。一方、幕府も貨幣発行権を持ち、紙幣的な性格を持つ計数金貨・銀貨を発行することが出来た。いずれも無制約に発行できる訳ではないが、ある意味で「打出の小槌」であり、幕府が政治経済的、軍事的な権威を保っている限り破綻することはなかった。

四、今、各国政府は経常収支の赤字・黒字にかかわらず、例外なく財政赤字に悩んでいる。同様に、江戸時代の各藩も例外なく著しい財政赤字になやんでいた。

五、金融資本は多国籍国債資本として巨大化し、今の世界経済を支配している。江戸時代も大阪商人などの商業資本は、幕府や藩に従属することなく、巨大な規模に成長し、経済をおさえていた。

六、世界は今やエネルギーや食料・環境問題に関して成長の限界を感じさせる状況にある。江戸時代も元禄を過ぎて後半になると成長期を終えて停滞期に入っており、社会状況にも類似性があった。

このように多くの類似点があるのだから、重債務貧困国の債務問題についても、江戸時代の各藩の財政赤字問題は、その行方を占うひとつの資料にはなり得よう。

その意味でいえば、江戸時代の大名の財政赤字は凄まじいものであった。諸大名の年収の七割以上が大阪商人の手に渡ったとする説さえあるのである。

その中でも良く知られているのが、薩摩藩の借金である。もともと、貨幣経済が主流になる中で、米収に基礎を置く諸大名の財政は破綻に向っていた。その上、外様の雄藩は、幕府に刃向かうなどという野心を起こさぬように、膨大な費用を要する参勤交代や土木普請を命ぜられ、所詮貧乏になるように宿命つけられていた。寛永九年（一六三二）に十四万両あった借金が、寛延元年（一七四八）には五十六万両に達し、木曽川治水普請を命ぜられた宝暦五年（一七五五）には、それまでの借金六十六万両に三十万両を加え、ついに百万両の大台に突入してしまった。そうなるともう止まらない。いくら倹約しても借金は膨れるばかりで、文化四年（一八〇七）には

百二十六万八千両に至り、ついには天保六年（一八三五）に五百万両になってしまう。

当時の薩摩藩の年収は二十万両程度であるから、五百万両の金利すなわち八パーセント相当の四十万両の分だけでも払えるわけがない。しかもこれが薩摩藩だけの特殊事情ではなかったことは、京都上賀茂の社家梅辻規清が、当時の大阪商人が全国大名を相手に六千万両もの貸付金を持っていたと言っていることで分かる。結局、調所笑左衛門が借りられるだけ借り手元流動性を確保した上で、借金棒引きという強硬手段にでた。誰でも借金棒引き以外に解決法がないのを知っていたが、手元資金がない状態でデホルトすれば、その日からたちまちお金が入ってこなくなるので、単に帳簿上のやりくりで返済の見込みのない借金を巨額化しつづけていたのである。その点では調所笑左衛門の方がむしろ良心的であった。

一方の江戸幕府はどうしていたのであろうか。もちろん、幕府も米収に基礎を置いている以上、困窮していたのは変わらない。四百万石以上の直轄地を持つ幕府とはいってもその財政規模は、薩摩藩の約十倍おおよそ二百万両に過ぎなかった。ただし幕府には貨幣発行という「打出の小槌」があった。銀貨と言えば体裁が良いが、銀純分の価値とは無関係な「一分銀」という紙幣のような通貨を文政元年から安政四年までの四十年間発行し続け、合計で千八百万両の差益を得ていたのである。幕府にとっては、実にうまい「隠れ国債」であった。しかしそのため、ペリーの来日によってこの「隠れ国債」の存在が白日のもとにさらされ、猛烈なインフレが起こり、幕府は倒れてしまったのである。

全く良く似ている状況が今の世界であり、米国である。重債務貧困国の対外債務合計が二千二百億ドルだと言うが、米国の対外債務は七兆ドルもあり、そこから対外債権を差引いても一兆三千億ドルもある。これは重債務貧困国の対外債務の六倍に相当している。しかも米国の純債務が毎年二千億ドル程度すなわち重債務貧困国対外債務の合計と同じ額づつ増え続けている状況で、通常ならとっくにＩＭＦの管理下に入っているはずである。そうなっていないのは、ひとえにドルに対する信認があり、不足分をドル発券でおぎなえるからである。そしてドルの信認を支えているのが他ならぬ日本である。日本は逆に一兆ドルの対外債権を持ち、両国が同一の国であったとすれば、債権債務が相殺され健全な姿になるのである。

すなわち日本がドルの体制の崩壊を願わないかぎり、米国ドルは健全であり、「打出の小槌」によってドルを世界中に撒き散らすことができる。江戸幕府が「一分銀」を発行し続けていたようなものである。しかしドルの虚構が白日のもとにさらされ、猛烈なインフレが起るのが間近にせまっているように思えてならない。

今の世界経済はあまりにも実体からかけ離れて動いている。世界の総年間所得が三十数兆ドルあると言っても、その内の穀物生産額は米、麦、豆、トウモロコシ類を合計しても四千億ドル程度に過ぎない。原油産出額や金属地金産出額も同程度以下である。それでも総所得の場合は付加価値の実体が伴っているから良いが、日本の個人金融資産が十兆ドルあるとか、バブル後の資産デフレで千兆円（八兆ドル）も失われたと聞くと桁が違うのではないかと疑りたくなる。例えばの話であるが、日本の個人金融資産を米国の銀行にでも預けておけば、その利子だけで全世界の一年分の穀物を買い占めることができる。

そんな馬鹿なことがおこるわけは無いのは承知している。三十年ほど前の話になるが、ソ連が食糧難のため米国で小麦を二十億ドルほど買い付けたことがある。ところがたったそれだけの買い付けで小麦の価格が四倍に暴騰してしまった。二十億ドルでも、このような激震をおこしたのであるから、お金でお金を買う虚の経済は恐ろしい。デリバティブなどと称して、言葉上はリスク分散を意味しながらハイリスクハイリターンの金融商品が実経済をはるかに超えた規模で世界を彷徨している。その取引残高は全世界の総所得をすでに超えている。

江戸幕府が「隠れ国債」のつけを払わされて、つぶれてしまったことは既にふれた。それはけっして幕府だけのことではなかった。明治四年には廃藩置県によって薩摩藩も長州藩もなくなってしまった。世界史的に見ても稀なほどの大革命「廃藩置県」がいとも簡単に行われてしまったのである。それはあたかも財政赤字に苦しんでいた諸藩が、借金さえ棒引きにしてくれるなら、大名などという割りの合わない商売から逃げ出しても良いと思っていたかのようであった。

藩がつぶれるとはそんなことなのか。それなら国がつぶれるのも似ているのかも知れない。国などというやっかいなものはさっさと止めて、まるごとどこかに買ってもらえないものであろうか。そんな声が聞えて来そうである。事実、東ドイツが西ドイツに買い取られたし、北朝鮮もいずれは韓国に合併されるであろう。重債務貧困国だって、どこかに買い取ってもらえたら良いと思っているにちがいない。米国のひとつの州にしてくれるなら泣いて喜ぶであろう。いやひとつの植民地にしてくれるだけでも大満足である。もっとも今さら重債務貧困国を植民地にする物好きな国もあるまいが。さすがの中国でも香港や台湾は欲しくても重債務貧困国をほしがるかどうかは判らない。

冗談はおいて、消費者金融債務者から重債務貧困国の問題まで、如何にして社会復帰できるようにするか、すなわち如何にして敗者復活ができるようにするかが、強食弱肉的な世界の最低限のルールである。富める者がますます富むことのできる世界では、せめて敗者には再度

立ち上がれる仕組みが必要である。事実そのために個人や法人の場合には自己破産や会社更生法が整備されている。しかし国の破産や更生に関する国際的な仕組みは未だできていない。

そもそもこれだけ国債資本が世界を彷徨している中で、重債務貧困国が自国民や自国企業を囲い込み、独自の通貨を発行していることには無理がある。だから破綻した国々に対しては独自の通貨を廃止させ、増刷したドルを公的資金として投入し、通貨もドルに統一させると良い。要はどこかで大量の贋ドル札を印刷して重債務貧困国に与えるようなものである。つけが米国にまわるが、その米国も通貨発行権で凌ぎ、いずれはそのつけをインフレという形で全世界に回すのであるから五十歩百歩であり一蓮托生である。

また冗談に陥ってしまったが、重債務貧困国の場合は個々の借金棒引きよりも世界的規模での公的資金の投入の仕組みが必要である。その影響下で個々に分かれている多様な民族や国家を統合して、大きな単位にまとめ挙げることが有効なのではなかろうか。インドの国民総所得は重債務貧困国並に低いがサラ金苦の状態にはない。

ドルが崩壊して一番困るのはドルを沢山持っている国である。さしずめその最たるものが日本であろう。もちろん米国も困る。両国の利害が一致しているから、結果的にドルが支えられている。しかも現状ではドルに代り得る通貨などどこにもない。ドルが崩壊すれば世界経済がめちゃくちゃになり、各国の通貨も崩壊するから、逆説的にドルは生き延びるに違いないとの見解がある。その通りかも知れない。しかし最富国である米国だけが、ドルという虚の貨幣を発行しつづけて裕福な生活を楽しんでいることには、いずれつけが回ってくるに違いない。ドルは「一分銀」と同じように暴落する。

だからと言って、米国ドルが各国通貨に対して為替レート的に暴落するとはかぎらない。むしろ全世界的なインフレとして、ドルの暴落が現れる可能性の方が高いのではないか。原油が暴騰し、穀物相場が暴騰し、金価格も旧に復する形でドルの減価が起るのではないか。それとともにドルに対する信頼が揺るげば、為替的にもドル価が減価するであろう。それは重債務貧困国にとっては、債務の減価となるので助かるはずである。ドルが不当に強すぎたために被っていた不利益を多少取り戻すことには役立つであろう。

……お金に困っている人にお金を貸してはいけません……お金に困っている人にお金を貸す時はあげたと思って貸しなさい……。

お告げ（2）



森実与子

（三）

それからしばらく、梅雨特有の鬱陶しい日々が続いた。

部屋の布団もカーテンも、机の上の本もノートもすべてが湿気を含み、気持ちまで湿っぽくなってくるから、もともと雨が苦手なユキは、この季節を何より嫌悪している。だから本心は外に出るのも億劫なのに、相変わらず雑多な仕事に追われていた。

七月の中旬、ある大物歌手が死んだ。

記者たちは早速、手分けをして家族や親族たちへの取材に散ったが、ユキは故人の友人歌手二人を追うことになった。

まず、友人の家探しから始まった。雨の中、ユキは住所をたよりに都内の住宅街に向かったが、入り組んだ道はわかりにくく、道行く人に尋ねてもなかなか見つけられない。二時間ほどさまよった末、やっと目的の家を探しあてたが、洋服もサンダルもびしょ濡れになり、雨と汗が体にしみついていた。

しかもインターホンごしに出てきた留守番の人間は、

「事務所を通してください」

とニベもない。

同じように別の友人宅へも足を向けたが、こちらはいくらインターホンを押しても誰も出てこない。二人とも、取材されることを予期して、行方をくらましているのだろう。

結果をデスクに電話で報告すると、

「事務所通しのコメントなんて、つまらないものはいらない。本人たちをつかまえて、コメントじゃなく、手記を書いてもらえよ。家にずっと張り込んでいれば、そのうち帰ってくるはずだ。へばりついて、相手をつかまえるまでねばるんだ」

ユキは返す言葉が見つからなかった。

真正面からいったら必ず断られる裏ネタを何とかして手にいれ、他誌を抜いて『週刊アミーカ』だけのスクープをものにするには、当たり前のことをしていたのではダメなことは、十分承知している。デスクのいうことも、もっともなのだ。

ある時ユキは、カメラマンと一緒に、離婚の噂が絶えない芸能人夫婦の家へ出向いたことがあった。意外や意外、玄関から手に手を取り合って出てきた二人は、夫の運転する車で外出していったのである。別居中と噂されていた二人が、仲良く家から出て来るという思わぬ場面に遭遇したことで、こういう仕事は、結局は自分の足を使った地道な取材が基本であることを、ユキは痛感していた。

しかしユキにとって、そういう体当たり取材は、苦痛以外のなにものでもなかった。

（こんなどしゃ降りのなかで張り込みなんて……私にはできないわ。どうせ古沢さんやアラシが張り切っているんだから）

すっかりやる気をなくしたユキは、仕事をさぼって家でふて寝を決め込んだ。

テレビのワイドショーをつけると、大物歌手の死のニュースで持ちきりだ。次々と流れる関係者のインタビュー画面のなかに、『週刊アミーカ』の部員の姿がないか、ユキは目で追った。古沢やアラシたちは、雨の中、今ごろ大真面目な顔で走り回っていることだろう。そう思いながら、昼間から家でのんびりテレビを見て過ごすことに愉悦を感じ、その週をやり過ごした。

それでも締切り日に、編集部に行かないわけにはゆくまい。夕方、いつものように何食わぬ顔で会社に顔を出すと、早速、デスクの小言がはじまった。

「石田くん、ちゃんと仕事してくれよな。みんな足を棒にして歩いているんだから」

「……すみません。気候が悪くて、体調を崩してしまったんです」

「……締切りに来て、弁当だけ食べて帰られたんじゃ困るんだ。……だから女の記者は使えないんだよ」

嫌味たっぷりの言葉を、ユキは無表情で聞き流した。

実際には、古沢やアラシたちの取材も難航しているらしく、ただでさえ慌しい編集部は、大ニュースのために混乱していた。

そして、週明けの会議の日――。

朝、いつも通りの時間に家を出たのに、電車が遅れてユキは十分遅刻した。会議室に入っていくと、

「どうして時間通りにこられないんだ。理由なく遅れる

なよ」
開口一番、デスクは言う。
「学校に通っていた頃は、遅刻なんてしなかっただろ？　どうして、大人になるとみんな遅刻をするのかなあ。……ねえ、古沢くん」
「僕に振らないでくださいよ」
迷惑そうな顔をしながら、古沢は答えた。
自分が遅刻した時は平然としているのに、他人のことになるとイヤミたらたらのデスクの態度と言い草は、まるでできの悪い生徒を叱る田舎教師のようである。
先週に引き続き、大物歌手周辺の取材は、続行と決まった。しかしそれ以外の新たなネタは、出てこない。
「何か、面白い話はないのかなあ」
デスクのぼやきに、部員たちは相変わらずため息をつくばかりだ。その時、部員のなかで一番年若いカメラマンが口を開いた。
「ＡＭっていう若手タレント知ってますか？」
「聞いたことのない名前だなあ。アラシ、知ってるか？」
アラシは黙って首を振る。
「二人組のお笑いコンビで、関西では人気が出ているらしいんです。これからの期待株じゃないかと思って……今のうちから追ってみたいんだけど」
「……そうかなあ。人気者になるかどうか、まだわかんないじゃない」
デスクは興味のなさそうな口ぶりだが、カメラマンは懸命だ。
「これから芽が出そうな若手に、目を向けてみたいんです」
「関西と東京じゃあ、受けが違うからね。そいつらが全国区になるかどうか、まだわからないよ。無駄なことはしない方がいいんだ」
その言葉に、カメラマンは憮然としながら続ける。
「でも、もう人気タレントたちもマンネリじゃないですか。新人を発掘するのも面白いと思うけど」
「それは僕たちの仕事じゃないよ。危ない橋は渡りたくない。未知数の芸人に賭ける気はないね」
こういえばああいうで、人の揚げ足を取るデスクの口の聞き方に、ユキはもういい加減うんざりしていた。
また、多忙な週がはじまった。
芸能人の結婚・離婚会見が開かれると聞けば会見会場に駆けつけ、恋の噂のあるタレントの自宅にカメラマンと一緒に張り込みに行き、その合間にテレビ局の番組宣伝用の出演者インタビューに向かうなど、ユキの仕事は山積みだった。
締切り日、ユキはテレビ局を十ヵ所回り、話題のＣＭの写真を揃えて編集部に行った。しかし、
「こんなのちっとも面白くないじゃん。もっと笑える写

真が欲しいなあ」
デスクの一言でボツになり、一日歩き回ったことがすべて徒労に終わった。代わりに急遽、芸能人の〝笑える話〟の記事を書くことになり、ユキは資料室にこもってネタを拾い集める。
「うちの読者はバカだから、くだらなくて面白い話を作って欲しいな。……オチのある記事にしてよね」
深夜、ユキが書いた原稿をソファに横になっているデスクのところへ見せに行くと、デスクは寝そべったまま、チェックを入れる。
「こんな原稿の、どこが面白いの」
苦笑しながら、いかにも小バカにしたように原稿をけなして押し返す。
行ったり来たりを繰り返し、何十回も原稿の書き直しを命じられ、その日、ユキが仕事から解放されたのは朝の四時だった。帰りのタクシーの窓から、ユキはうつろな目で、白みかけていく外の景色を眺めていた。
週末、ユキは古沢の家へ遊びに行った。
自炊をしない古沢のためにユキはシチューを作って持参したが、古沢は少しもうれしそうな顔を見せず、手をつけるどころか、包みを開こうともしなかった。
そしていきなり、「競馬に行かない？」と、思い立ったように言う。
古沢は頻繁に競馬場に足を運んでいるらしいが、ユキはもちろん、行ったことなどない。急いで家を出ると、ＪＲからモノレールに乗り換えて、大井競馬場へ向かった。競馬場の周辺には、競馬新聞や雑誌を手にした、おびただしい数の男たちがひしめいている。予想屋、一攫千金を狙う男たち。いや、そんななかに、ちらほら女性の姿もあるが、人の多さに、ユキは啞然とした。
競馬場に入って行くと、馬場にはオレンジ色の照明が灯り、馬が一心に走って行く。その光景は、意外にも美しかった。馬への声援が、怒涛のようにけだるい空にこだまする。見上げると、羽田を離発着する飛行機が飛び、夏の夜の不思議な光景をかもし出していた。
せっかく買った馬券は、ハズレだった。
「今日は調子がよくないな。来るのも遅かったし……。帰ろう」
帰り道、古沢は言う。
「万馬券を当てたことがあるんだ」
「それで競馬の味をしめたの？」
「そう簡単に当たるもんじゃないよ。ただ僕は、馬が好きなんだ」
レースが終わって、男たちはそそくさと帰って行く。辺り一面に、負けた馬券の破片が乱れ散っているすさんだ眺めは、宴の後の虚しい風景といったらいいだろう。
それから夕食を食べに行くが、二人とも気分が乗らず白けた空気だけが流れた。自然と、会話は仕事のことに

なる。
「デスクのいうことは、無理が多すぎるよ。いきなり張り込みや直撃なんて、できるわけがないんだ。だから動いている格好だけ見せていればいいんだよ。……あんな人のいうこと、気にするだけ損だよ」
古沢は、仕事をしているポーズをとっていればいいという。
「それとも、ユキちゃんにとげとげしいのは、デスク特有の愛のムチかもしれないね」
「あの人きっと、サドの気があるのね。人をひいひい言わせて泣かせるのが好きなんだわ」
ユキは自虐的にいう。
「アラシだって、俺の前で泣くんだよ。悔しいっていいながら。……俺だって、酒も飲めないのに毎日のように飲んでる」
そういいながら、古沢はジョッキのビールを一挙に飲み干した。
「なんで、そんなに飲むの?」
「破滅したいんだ。自己破滅型ってとこかな」
「かっこつけちゃって」
一週間の疲れが雪崩のように押し寄せ、会話もはずまなかった。
古沢はいつものようにユキをタクシーで送ってくれたが、別れ際、

「それよりさ、夏休み、どこか行かない?」
と言う。
「日帰りで沖縄ってどう?」
「せっかく沖縄まで行くのに、たった一日?」
ユキが興味なさそうに答えると、その問いかけには答えず、
「でもどうしよう……飛行機が落ちたら。『二人は清い関係でした』って遺書を書いておかないと。帰りの飛行機がとれなくて泊まりになったら、ちゃんとシングルの部屋を二つとるからね」
古沢は一人でブツブツいっている。
(どうせ酔いの戯言だわ。いざとなると怖気づいて、実行力なんてないくせに……)
ユキは本気にしなかった。

そんな時、一枚のポストカードが届いた。差出人は笠原である。
梅雨が明けたというのに、まだ鬱々と湿った気持ちでいたユキは、笠原の滞在するフィリピンの青い海が、ユキのせわしい日常をあざ笑っているかのように感じられて、むしょうにうらやましかった。
出かけてからもう一ヶ月近くがたっている。すぐに帰ってくるといっていたのに、笠原は一体どこへ行ってしまったのだろうか。好きな時にフラっと出かけて、予定に縛られることなく気が向いたら帰ってくる、自由奔放な笠原をうらめしく思い、ユキはますます落ち込んでいた。
一週間の夏休みが目前に迫っていた。
いつもあくせく動き回っている『週刊アミーカ』の部員たちにとって、束の間、仕事から解放される貴重な時間である。部員たちもみな浮き足立っている様子だ。
「どうする?沖縄行きは」
編集部で顔を合わせると、古沢は大真面目な面持ちでユキに聞く。
「私、九州の友達の家に遊びに行くのよ」
古沢の誘いを蹴って、ユキは、親友の家へ遊びに出かけるつもりでいた。
中学時代からの親友K子は、半年ほど前に結婚したが、夫の転勤で九州に引越したばかりだ。夏休みに遊びに来てと誘いを受けていたため、ユキはそれに応じることにしていたのだ。
お盆休みを間近に控え、空港は帰省客で混雑していた。羽田から飛行機に乗りこみ大分の空港に着くと、K子が車で迎えに来ていた。その足で湯布院の豪華旅館に向かい、一晩疲れを癒してから、新婚家庭を訪れた。
四LDKの社宅は、新婚には十分すぎる家である。しかし新聞社の支局勤務の夫は忙しくて、夕食を食べに夜遅く帰ってきては、また出かけてしまうほど慌しい。
「田舎で何もないところでしょ。毎日、退屈だわ……」
東京から友人もいない九州へいきなり転勤となり、寂しい思いをしているらしい。それに多忙な夫が自分をかまってくれないとK子はぼやくが、鮭のムニエルやマーボー茄子など、料理本を見ながら一時間以上も時間をかけて夕食を作る姿は、新妻らしい喜びに満ちていた。
派手な性格のK子は、結婚前はかなり遊び回っていた。主婦向きとは思えなかったが、何とか健気にやっている様子だ。かいがいしく料理を作るK子の姿を見て、やっぱり新婚家庭はいいなと、ユキはほろ甘いものを噛み締めた。
休みはあっという間に過ぎ去り、新しい週がはじまった。月曜日、編集部へ行くと、部員たちはみな真っ黒に日焼けしている。
「ユキちゃん、元気?」
鼻の頭を真っ赤にしたアラシが声をかけてくる。
「アラシさん、まるでやけどでもしたみたいに真っ黒じゃない。どこに行っていたの?」
「ちょっとバリ島までね」
アラシは得意気だ。
「幼妻と婚前旅行ね。いいわねえ……」
「もう天国よ。女は家具と同じだね」
「それどういう意味?」
「一度やっちゃえば、後は同じってこと。……ユキちゃ

んこそ、どこかでかけたの？」
古沢は、結局、一人で沖縄へ行ってきたらしい。
デスクも家族とハワイ旅行へ出かけたというし、それぞれが夏休みを満喫した様子で、撥剌としている。
仕事が再開された。
ユキは早速、テレビの人気ニュース番組の取材を命じられた。番組出演者のファッションチェックやプライベートな時間の過ごし方を紹介し、特集するという企画だ。
しかし、ユキがテレビ局の広報に取材を申し入れると、
「ニュース番組を興味本意の内容で紹介して欲しくない」
と、またしても取材拒否の答が返ってきた。
「それならキャスターの家に直接いって、キャスターの奥さんにネクタイや服の好みを聞いてくればいいじゃない」
デスクから直撃を命じられた。
たかがネクタイやスーツの趣味を聞くために、家を突然訪れ、インターホーン越しに話を聞けという。見ず知らずの記者に、夫の洋服の趣味やプライバシーを喋る人間が、この世の中のどこにいるだろうか。不躾な取材は、非難されるに違いない。どう考えたって、直撃は空振りに終わるだろう。
休み明け早々に、また無理難題をいいつけられたユキは暗澹たる気分に陥り、ため息をついた。
（そんなくだらないことを聞くために、直撃に行くなんて。……毎週毎週、やりたくもない礼儀知らずの取材を命じられ、相手には拒否されて。難航不落の取材ばかりいいつかって、もうどうしていいかわからない）
ユキのストレスは爆発寸前となっていた。
夕方の編集部は、人の出入りも多くて慌しい。
自分の席で電話中のデスクは、ユキがやってきても一向に電話を切ろうとしない。その横で、ユキは内心イライラしながに電話の終わるのを待った。
「取材の進行はどう？」
「……私、こういう仕事合わないみたいです」
ユキの言葉に、椅子に座ったデスクは顔を上げ、下から覗くようにユキの顔を見た。そして神経質そうに、貧乏ゆすりを始める。
「皆、自分の足で歩いているんだ。きみだけじゃない」
「でも、自分に興味のない取材は、私にはできません」
「興味がなくたって、仕事じゃないか。自分の好きなことや興味のあることと仕事は別だよ」
「それはわかっています」
ユキは、みじめな心境に陥っていた。
「僕だって、こんな仕事くだらないと思っているさ。でも地道な取材が、この仕事の基本なんだ。芸能に限らず、ジャーナリストっていうのは、こつこつと足で歩くことから始まるんだ。はじめは断わられても、相手にされなくても、めげずに何度も足を運んでいくうちに、相手も折れてくるものだ。そうだろう」
「それはわかっています。けど、私にはできないんです」
「お嬢サンなんだね。でもせっかくこの道に入ってやってきたんだから、ここでやめちゃうのはもったいないんじゃない」
「でも、なんだかばかばかしくなっちゃって……」
「ばかばかしくないことなんて、この世の中にあるかい」
「毎週、毎週ストレスがたまって、もう限界です。私、辞めます」
デスクと話しているうちに我慢できなくなったユキは、思わず「辞める」と口走っていた。そしてくるりと後を向くと、足早に編集部を後にしていた。
翌日、ユキは古沢に呼び出され、喫茶店で会った。
「本当に辞めるのかって、デスクから聞いてくるように頼まれた」
古沢は苦虫を潰したような顔をしながら、ぼそりと言う。
「古沢さんはやっぱり、デスクのご用聞きだったのね」
「感情的になっていったのならいい。芸能班がきついのなら、他の班に代わってもいいっていっているんだ」
「そんなこと、古沢さんに頼まずに、自分でいってくればいいのに」
ユキが頑な態度を示すと、古沢は最後通牒を言い渡した。
「女のヒステリーだって、デスクはいってたよ」
「そんな……」
ユキは口ごもった。
「辞める決心はとっくについていたのよ。古沢さんだって、わかってたでしょ」
「だから女はわからないってさ」
ユキの言葉におかまいなしに、古沢は幾分、意地悪そうにいう。
専属フリーという同じ立場にいたからこそ、今までお互いに仕事の不満をぶつけ合っていたのに、ユキが仕事を辞めた途端、会社側を弁護するような口調にユキは苛立ちを覚えた。
「やめて、どうするの？」
「別に、あてなんかないわ」
アイスコーヒーをすすりながら、ユキは答える。
しばらく沈黙が続いた。
本当は泣きだしたいのをこらえながらうつむいているユキの様子を、古沢は窺っている。
「……じゃあ、僕の仕事を手伝ってくれないかな」
「仕事って？」
「……芸能人のエッセイのゴーストライトなんだけど」
古沢が週刊誌の他にもそんな仕事をしているとは、意

外だった。ユキが不思議そうな顔で古沢を見つめると、
「どうしたの？そんなに改まって見つめないでよ」
怒ったように古沢はいう。
「さすが古沢さんは大人ね。いろいろな仕事をしているんだ」
「『週刊アミーカ』だけやってたって、どうしようもないだろう」
「いいわ、手伝わせて」
「じゃあ、近日中に資料を送るよ」
ユキの窮地を救おうと、古沢は手を差し伸べてくれたのだ。憎まれ口をききながらも、古沢なりに優しさを示してくれる。ユキにとってはありがたいことだった。
しかし家へ戻ると、ユキは重い疲労感に襲われていた。『週刊アミーカ』をやめれば、重荷を降ろしたように何もかもすっきりして、晴れ晴れとした気分になるのではないかと思っていたが、実際には後味の悪さだけが残った。古沢にヒステリーといわれたことにも、傷ついた。
「来る日も来る日も、芸能人のゴシップを追ってたら、脳ミソがくさっちゃうわ。みんなバカじゃないの。古沢もアラシも弱虫のいくじなし！」
デスクを、そして仲間を呪いながら声に出して叫んでいるうちに、最後はすすり泣きに変わっていた。
潔く辞めたものの、これで収入源はたたれてしまった。フリーの身だから、失業保険ももらえず、仕事をやめたその日から、もう収入はないのだ。マンションの家賃だけは父親から受取ることができるが、生活費はどうやって捻出すればいいのだろう。これまでの貯えで、数ヶ月くらいならなんとかなるかもしれないが、その後はどうすればいいのだろう。新たな仕事を見つけなければ、早晩、マンションを引き払って、実家に戻るしかないかもしれない。
ユキは、行き場のないあせりを感じながら、ベランダに出て、うつろな目で外を眺めた。
夏の終わりをはかなんでいるのか、激しいセミの声が耳鳴りのように響く。雲ひとつない真っ青な空からはまぶしい太陽の光が射し、まさしく夏であることを感じさせた。……人気のない裏道を、若い主婦が乳母車を押しながらゆっくりと通り過ぎていく。そんなけだるい夏の眺めも妙によそよそしく、ユキの心は、膨らんだ風船から空気が抜けたように虚ろだった。

笠原から連絡があったのは、九月に入ってからのことだった。
原宿で昼食をともにしてから、すでに二ヶ月余りがたっていた。
「カサがいない間、不愉快なことばかりあったのよ。…仕事もやめちゃったの。もう、気持がクサクサしているのよ」

「瞬間湯沸し器ですな。……それじゃあ今度の週末あたり、気分転換にドライブに行こうか」
笠原の懐かしい声を聞いて、ユキは肩の荷が下りたような思いにかられた。世の中の些事にとらわれず、何が起きても我が道を行く鷹揚に構えた声をきき、少し気持ちが楽になっていた。
数日後、ユキのマンションまで笠原がバイクで迎えに来た。
笠原が持参したヘルメットをかぶり、Gパン、ジャンパーというライダーらしい服装でバイクの後に乗り込んだ。笠原のいかつい体は、ユキの細い腕では届かないほど太い胴回りだが、風が遮られてかえって都合がいい。
バイクは、渋滞の車の合間を縫うように器用に走り抜けた。面白いほどスイスイと進むことに小気味よさを感じているうちに、わずか二時間余りで三浦半島の漁港に着いた。
久里浜は入り江の小さな魚村で、網を繕う漁師の姿や魚を干した網が海沿いに点在し、素朴な風景が広がる。潮の香りが、風情をかきたてる。
「この辺はよく来るの？」
「時々一人で、フラリと飛ばしに来るんだ。ここからフェリーに三十分くらい乗ると対岸に着く。ちょっと行ってみようよ」
桟橋には、出港間際の大きなフェリーが待ち構えていた。大小の車が整然とフェリーに積み上げられていく片隅で、笠原のバイクも船に乗せられた。
夏の終わりを告げる太陽が、最後の力をふりしぼって照りつけている。船の甲板に吹きつける潮風は、体に心地良かった。
「ついに週刊誌の仕事やめたんだね」
「そう、失業中の身分よ。私って無謀でしょ？」
「いや実をいうと、今まで、何が楽しくて必死に仕事ばっかりしているのかと不思議に思っていたよ。ユキちゃんも変わった人だなあって」
東京湾はすれ違う船もなく、穏やかな海が陽光に輝いている。三浦半島と房総半島のなだらかな稜線が、うっすらと海を囲むように見渡せた。いつまでも見飽きない、遙かな眺めだった。
船内に入ると、ユキが昼食用に握ってきた小さなおむすびを、笠原はおいしそうにほうばった。簡単な食事をとっている間に、船はもう対岸の金谷の港に着いた。船を下りると、笠原はすぐさま港の目の前の土産物屋に飛び込んだ。
何をするのかと、ユキが不思議そうに見つめていると、笠原はイカの塩辛や岩ノリなど海の幸の瓶詰めを四瓶も買い込み、
「へへっ、ごはんのおかずを仕入れたぞ」
それらを大切そうに風呂敷きで包み、バイクの中にし

何かに駆り立てられているような、追い詰められた気持でいたが、この陽の光によってときほぐされていくような、感覚を覚えた。晴れて自由の身となり、また別の一歩を踏み出さねばならない。その記念日のような感じさえする。

横の笠原は本当に寝入ってしまったようだ。

「あーあ、よく眠った」

小一時間ほど休むと、笠原はゆっくりと起き上がり、肩や腕をほぐしてから再びバイクに乗り込んだ。

笠原は、東京方面へ向かう道路を走りはじめた。

工場地帯が連なる渋滞の海岸道路は、無味乾燥としていて、実のところあまりいい眺めとはいえなかった。もっと遠くへ向かい、房総半島を回って青い澄んだ海を見たかった。それでも運転する笠原は、けっこう楽しそうな様子である。運転しないユキにはわからないが、どこへ行くというあてもなく、バイクを飛ばすこと自体が笠原は楽しいのだろう。

落ち込んでいるといったユキをなぐさめるために、こうやってバイクで連れ回すことが、笠原なりのやり方なのだろうと、ユキは好意的に解釈した。

「以前は、木更津から川崎に出るフェリーがあったんだけど。アクアラインができたから、なくなっちゃった。不便になったね」

「バイクでも、アクアラインは走れるんでしょ？」

まいこんでいる。笠原らしい食へのこだわりに、ユキは目を丸くする。

「どこへ行くの？」

「この辺をドライブしよう」

バイクは海岸沿いの道路を走りはじめた。田舎っぽいさびれた海岸通りをしばらく走り抜けると、小さな海辺にたどり着き、笠原はバイクを止めた。忘れ去られたような閑散とした海岸には、ウインドサーフィンをする若者やドライブ客がまばらにいるだけだ。

笠原は持参したビニールシートを地面に敷き、横になる。

「レンタカーでも借りて、箱根あたりをドライブしようかなとも思ったんだけど、いい車が見つからなくてね」

そういいながら、申し訳なさそうにバイクから缶ビールを二個取り出した。一つをユキにすすめると、笠原はすぐに栓をあけて口にした。

「ああ、おいしい……疲れたから、ちょっと昼寝をしよう」

海水浴場ともいえない小さな砂浜は、笠原のいう通り、のんびり昼寝をするのにもってこいの穴場のスポットかもしれない。

ユキはジャケットを脱いでノースリーブのカットソー姿になると、素肌を晒して横たわった。目をつぶると、じわじわと汗がにじんでくる。この数ヶ月余り、ずっと

「でも二人乗りはダメだもん」

海ホタルを経由すれば簡単に対岸に戻れるのに、トラックが多い幹線道路を東京に向かって走らなければならない。東京湾を一周するような長距離コースだ。

ただひたすら走ることで、胸のなかのむしゃくしゃした思いをぶつける。それが笠原流の蘇生術なのかもしれない。車のライトが川の流れのように続く道路を走りながら、ユキは笠原の体温を感じ、そんなことを思っていた。

新宿の笠原のアパートに戻ったのは、真夜中を過ぎていた。

一日中走り続けたせいで、アパートに戻ると二人ともぐったり疲れていた。笠原はいきなりベッドに倒れこんだ。

「泊っていかない？」

笠原の言葉に吸い寄せられるように、ユキもベッドの笠原の横へ行った。軽くキスを交すと、ユキも疲労感に襲われそのままベッドに横たわった。

「疲れた。今日は随分走ったわね」

「毎度のことですから……」

そのまま、静かに眠りに落ちていった。そして夢うつつのなかで、笠原がユキを求めてきた。これまでも、ユキは何度か笠原と寝たことがあった。笠原の大きな体がかぶさってくると、ユキも自然とそれに応じ、笠原のなすがままに身を任せた。

カーテンのない窓から、日の光が差し込んできた。薄目をあけて部屋を見まわすと、

「よく眠れた？」

先に起きている笠原が尋ねた。

「もう、お昼だよー」

「えっ、もうそんな時間？」

部屋いっぱいに漂うコーヒーの香りが、鼻腔をくすぐる。レンジの上で、エスプレッソマシーンが、ぐつぐつと音をたてていた。笠原は慣れた手つきでコーヒーをいれ、パンとヨーグルトの簡単な朝食兼昼食を用意してくれた。

食べ終えると、前日の疲れが一挙に消えているのがわかった。

「夕べはぐったりしちゃったけど、回復したわ。元気になったみたい」

「若い証拠だね」

素早く台所の後片付けを済ませると、

「話があるんだけど……」

いつになく神妙な笠原の顔つきに、ユキは怪訝な顔をする。

「話って？」

何か深刻な話がありそうな笠原の口ぶりに、ユキは戸

「腸捻転を起こして、ヘリコプターでシンガポールの病院に運ばれて、手術を受けていた」
「そんな大掛かりなことになっていたなんて、ちっとも知らずに……。具合はどうなの？」
「今はピンピンしているさ。おかげさまで貴重な体験をさせてもらったよ」
笑いながらいったが、急に笠原は真顔になった。そして
「僕の父親のこと、話したことなかったよね」
妙にしんみりした口調で言う。
「ええ。……カサさんの小さい時に亡くなったって聞いたわ」
「三十五歳で死んだ」
「そんな若くして……」
ユキは思わず絶句した。
「僕がまだ小学校に上がる前のことだね。父親はもともと病弱な人で、喘息、肝炎、糖尿、病気のデパートみたいな男だったらしい。どうやら僕も、それを受け継いだらしいんだ。あと半年で、僕はちょうど、父の死んだ歳になる。果たして、父親より長く生きられるかどうか……」
笠原は首を垂れて、口をつぐんだ。
今まで、こんな気弱な笠原を見たことはなかった。頑丈な体つきとタフな生活ぶりから、病気や死とはほど遠

惑った。改まって話があると切り出されるのは、はじめてのことだ。何かいいたいことがあるのだろうか。その時、狭いけれど新しいアパートは結構心地良く、このまま居座ってしまってもいいかなという思いが、一瞬、ユキの心をよぎった。
笠原は、プレイヤーにCDを入れ、静かなクラシック音楽を流した。その様子から、何か重要な話があるのだとユキは察しがつき、どきまぎする。
「……実は、ある宗教団体に入ったんだ」
「あら、アメさんの影響？」
思いがけない言葉だった。
「それもあるかもしれないな」
「アメさんは、何かにとりつかれたっていってたじゃないの。信じているの、あんな娘のいうこと」
「いや、アメさんを信じているっていうわけじゃないんだ。ちゃんとした仏教の経典をもとにした宗教団体に入ったんだよ。昨日の朝も、本部の玄関掃除に行ってきた」
自由気ままな笠原が、真面目に宗教活動をはじめたなんて、信じられない。ユキは耳を疑った。
「フィリピンへ行って体調を崩しちゃって、実は入院していた」
ユキはびっくりして笠原の顔を見つめた。
「病気だったの？　それで、帰りが遅かったのね。……どこが悪いの」
い人間だと思っていたのに、実際には、笠原は死の恐怖に怯えながら生きてきたかもしれない。外見はごっついけれど、死の予感に怯えながら一人で無我夢中に突っ走ってきたのだろうか。そう思うと、ユキの心は痛んだ。笠原が、まるで幼ない子供のような哀れな男に思えてきて、目を伏せた。
（あなたのことが、少しわかったような気がするわ。自分のことしか考えない自己中心な男だって、いつも思っていたけれど、今話を聞いて、その理由がわかったような気がする）
心のなかで呟いた。
笠原が自分に対して積極的に出てこないのは、病気のせいだったのだ。心のどこかで憎からず思っていた笠原が、部品の壊れた大男だったことに、ユキは心の奥底で大きな絶望感を抱いていた。
「でも宗教を信じるようになってから、大分体調がよくなったんだ。規則正しい生活をするようになったし、日々のお勤めもしている。きっと、父親の年齢より、長く生きられるさ。医学の発達は、三十年前とは比べものにならないからね」
ユキの気落ちを察してか、笠原はつとめて明るくいう。
「見てよ、この数珠。この石には宇宙のエネルギーが集まってくるんだ。だから病気から守られるそうなんだ」
しかしユキは、顔を上げることができなかった。
「帰るわ」
その場にいたたまれなくなったユキは、笠原のアパートを飛び出していた。

（四）

ユキは仕事柄、取材で宗教団体や占いの特集を手がけたことがあった。
新興宗教の教祖様の取材に、わざわざ東北の田舎町まで出向いたこともある。その教祖様は、恰幅のいい中年男で、鄙びた町の畑の真中の、真新しいコンクリート造りの寺にいた。
ある日突然、神の声を聞いたという教祖様を取り囲むようにして、大広間には、数十人の信者たちが集っていた。みな大真面目な顔をして呪文のような言葉を唱え、一心に祈りを捧げている。やがて神主のような白い衣を着た教祖様がおはらいをすると、一同は「ややー」とひれ伏し、頭を垂れる。その狂信的な雰囲気に、ユキはすぐさま猜疑心が芽生えた。新建材の匂いがする金ピカの建物は、胡散臭い匂いが立ち込めていて、ユキは頭痛がしてきた。
それでもユキは、本心では占いが嫌いではなかった。星座、血液型、四柱推命、易、タロット、霊感など、いろいろな種類の占い師を取材しながら、けっこう楽し

んでいたのだ。

笠原の話を聞いて大きな衝撃を受けたユキは、今まで取材したなかの誰かを訪ねてみようという気になっていた。アメの予言、予想だにしていなかった笠原の病気、そして自分自身のこれからの運命。何か神秘的な力に頼らなければ生きていけないというほど、窮地に立たされていたのだ。

今まで自分が記事にした雑誌のページをめくっているうちに、そのなかの一人、風変わりな女霊感師唐木モモに、何故か心が動かされた。

唐木モモを取材に訪れたのは、一年ほど前のことだった。

モモの道場は小さな印刷会社の一室にあり、その会社の社長がモモを全面的にバックアップしているらしかった。

「今、ちょうど先生はとりこみ中なので、少しお待ちください。先生は忙しくて、なかなか時間通りにお会いできないのだす」

三十分ほど待たされた末、現れた唐木モモは、異様だった。

真っ黒なおかっぱ髪に、黒いアイシャドウを塗った時代遅れの厚化粧。魔法使いのおばさんのような黒いロングドレスを着た黒ずくめのモモは、なるほど神秘的な雰囲気をたたえている。ユキよりも年上なのは確かだが、年齢不詳だ。だが、明るくカラッとした物腰のせいか、いわゆる教祖様的な辛気臭さはない。

取材のために集まってもらったモモの信奉者たちが、口々に体験談を語りはじめた。

「この子はね、生まれつき歩けなかったの。でも私がパワーを入れてから、今ではちゃんと歩けるようになって、元気になったのよ」

「そうなんです。先生のおかげで、普通の子供以上に健康になりました」

五歳くらいの小さな女の子を連れた母親が、うれしそうに目を輝かせる。

「この人も、心臓が悪かったのに今は山登りが趣味なの。……この青年は、私のパワーの入ったシールをヘルメットに貼っていたおかげで、バイク事故を起こしたのにかすり傷ひとつ負わなかったのよ」

「危機一髪のところを、命拾いしました」

モモの力で病気が治った人、借金苦から救われた人、夫の暴力から解放された人など、みな表情は明るい。ユキはさらに、モモに質問を浴びせた。

「どうやって、パワーを授かったんですか？」

「五年ほど前のことなんだけど、列車の窓から外を眺めていたら、突如、空から金の光が降ってきて、私の体に入りこんだの。その時は眩暈がして、倒れそうになったわ。そんな状態が一週間くらい続いたかしら……それ以

来、すごく元気になって、体の内側からパワーが湧いてきたっていうか、何かの力を授かったことを、確かに感じたの」

「どういう感覚か、想像がつきませんが……」

「体が軽くなって、毎日、溌剌としてきたっていうか。それで一大決心して、紀州の山奥で滝行を受けたんです。そしてこの不思議な力を、病気とかで苦しんでいる人たちに与えなければと思いはじめて、パワーを噴き込むようになったの。神様の力を授かったのよ」

ユキは取材で聞いた奇妙な話を思い出し、再び、モモの道場を訪れようと心に決めた。

ようやく朝晩涼しくなりはじめた九月のある日、ユキはモモのところへ向かった。

昨年、訪問した時よりも、明らかに人の出入りが多くなっている。そのため、事務所の入口の応接室で一時間余りも待たされた。しばらくして奥の部屋に通されると、唐木モモは、前と同じような不思議ないでたちで現れた。

「以前、取材でうかがったことがあるんですけれど」

「ええ、覚えているわ。石田ユキさんね。あなたは、きっと私のところに戻って来ると思っていました。待っていたのよ」

モモは、にっこりしながら意味ありげな言葉を吐く。

「あなたの書いた雑誌の記事を見て私のところへ来た人もかなりいるの。あなたも神様の役に立っているのよ」

「今日は取材ではなくて、私の運命を見ていただきたくて来たんです」

ユキは、静かに口を開いた。

「私の男友達が、重い病にかかっていることを知って、すごいショックでした。それに私自身も、仕事がうまくいかなくて……」

「そう。まず、あなた自身の運命を見てあげましょう」

モモは戸惑うユキを椅子に座らせると目の前に立ち、両手を合わせると呪文のような言葉を唱えた。

「神様、ここにいる石田ユキさんに、パワーをください」

ブツブツ呪文のような言葉を唱えると、一挙に語り出した。

「……あなたのご先祖様の話をしましょう。母方の祖先に、二百年ほど前に亡くなった女性がいます。思いを遂げられずに、一生独身で亡くなった女性です。父方の祖先には病気の方がいました。それらの霊があなたの両肩についているのです。……まずお払いをして、それらの霊を浄化しなければなりません。……それから、あなた自身は本物のわかる人です。ただ、清純な外見とは異なり、芯は強くて頑固です。その内面と外面との落差に、あなた自身、たいへん苦しんでいます。せっかちな性格は直さないと、社会に強調して生きていかれないでしょう」

その声は、今まで話していたトーンとはまるで違う、ドスのきいたまさに神がかりの声だった。モモの言葉に、ユキはさっぱりしたような気持と、気味悪さが混ざりあったおかしな思いにかられた。

人と迎合できない苦痛やきかんぼうな性格は、まさにユキ自身を言い当てているが、先祖の霊が肩にいるといわれては、気味が悪い。

「安心して。私のところへ来て、パワーを入れれば必ず幸せになれるわ。まず、両肩にいる霊を浄化してから、あなた自身にパワーをつけていけばいいのよ。……その彼とどうなるかは、パワー次第ね」

モモは、微笑みながらやさしくいう。

「どのくらいの割りで、ここに通えばいいんでしょうか」

「一週間に一度、いらっしゃい。通ってくるうちに、体が軽くなってくるはずよ。お金は心配いらないわ。自分で払える分だけ払っていただければいいの。こちらから強制はしません」

職を失いヒマをもてあましたユキは、モモの不思議なパワーにすがってみようという気持になっていた。

そんなユキの思いに呼応するかのように、笠原から、手紙が舞い込んだ。

「突然の私の話に、きっとユキさんはショックを受けたことでしょう。しばらく私は、宗教活動に専念するつもりでいます。そしてこれからの自分の生き方を、じっくり考えてみたいと思っています。ユキさんも仕事を辞め、大切な時期にいると思います。お互い、将来のことを冷静な目で見つめてみましょう。考えがまとまったら、また連絡します」

笠原は〝将来のこと〟というけれど、果たして二人の間に将来はあるのかと、ユキは思った。しかしあれこれ思い悩んだところで、なるようにしかならないのが現実だ。あとはモモのパワーに任せるしかない。

古沢から頼まれた仕事をこなしながら、週に一回モモのところへ通うのが、当面のユキのスケジュールになっていた。

出来上がった分の原稿を持って久しぶりに古沢に会ったが、ちょっと見ない間に太り、顔色もドス黒くなっていた。

「相変わらず飲み歩いているの？不健康そうな顔色しているわ」

「今度、デスクが変わることになった。アラシなんて大喜びだよ。ユキちゃんももうちょっと我慢していれば良かったのに」

以外な展開に、ユキは軽い衝撃を覚えた。デスクが変わるのなら、早まって辞めることもなかったかもしれない。いや、もともと自分には合わない仕事なのだ。さまざまな思いが頭のなかを駆け巡った。いずれにしても、吉報に、部員たちは小躍りしていることだろう。アラシ

のはしゃぐ姿が目に見えるようだった。

「良かったわね。うれしさのあまり気が抜けて、太ったのかしら。古沢さん、まるで金融業の親父みたいだわ」

辛辣なユキの言葉に、古沢は気を悪くしたらしく、ぶすっとした表情を見せる。そして負けじと、辛辣な言葉を吐く。

「ユキちゃんこそ、優雅な生活を送ってるんでしょ。鼻の頭がテカテカ光っているよ」

「……今は宗教に興味があるの」

「ふうん。きみが教祖になれば、お金儲けできるかもしれないよ。男性信者をたくさん集めて、ひと儲けするつもりかい」

「古沢さんは、いつも話を茶化すんだから。もっと深刻なの。こうみえても、私は悩める子羊なんだから」

「僕の病気も治してもらえるかな」

「本当に病気なの？」

「嘘のわけないだろ。五種類も薬を飲んでいるんだ。肝炎なんだ。だから本当は、酒も飲んじゃいけないんだ」

「じゃあ、まるで自殺行為じゃないの。どうしてそんなことをするのよ」

笠原だけでなく、古沢までもが病や死を口にする。ユキの周りには、どうしてこうも何かに取りつかれた人間ばかりが集まってくるのだろう。部品の壊れた男たちしか寄ってこないと思うと、ユキはまた気分が暗くなる。

外に出ると、雨が降っていた。雨を気にせずにユキが歩き出すと、

「これ以上髪が薄くなったら困るよ……」

古沢はそう叫びながら、手に持っていた週刊誌を頭に乗せて、うろたえている。慌ててタクシーをつかまえて乗りこむと、

「ユキちゃんて、男らしいね」

という。

「頼もしい？　古沢さんは、女らしいわね」

古沢と話していると、ユキはなぜか悪たれをついてしまう。古沢にしても同じ思いに違いなかった。

モモのところへ行ってパワーを入れてもらい、その後、お弟子さん一二十代の女性数人一も交えて一緒に食事に行くのが、いつのまにかパターンになっていた。

「たまたま、神様のパワーを授かったのが私だったのよ。だからみんなが幸せになるために、それを一人でも多くの人に分け与えているだけなの。これって人助けよね」

同意を求めて、モモはユキの顔をのぞきこむ。食事中のモモは、食欲旺盛な上に饒舌だった。

「おいしいものをみんなで一緒に食べるのも、それと同じよ。何気ないことだけど大切なのよね。ねえ、ユキちゃんもそう思うでしょ」

ユキが苦笑すると、お弟子さんたちは首を縦に振って

大きくうなづく。モモに心酔しきっている様子だ。こういう時のモモは普通の人と変わらず、むしろ陽気で面倒見のいいお姉さんといった感じだ。だがひとたび神のパワーとやらにふれると、人が変わったようになる。それはアメの時も同じだった。彼女たちのいう神の力とやらは、一体どういうものなのだろうか。ユキにはまった想像がつかなかった。

もう数回以上、ユキはパワーを入れてもらった。しかし、瞑想するモモの前に座って肩や背中を撫でてもらいパワーを入れてもらっても、ユキは少しも体が軽くなるような気がしない。何も変わっていないのだ。

ユキは体の具合が悪いわけではなく、心のなかのモヤモヤをはらして欲しいがために、通っているだけだ。職を失った今、これからどうやって生きていけばいいのか。笠原の病気はどうなっていくのか。そういう心の奥底の問題を解決してもらいたいのに、内面の悩みや抽象的な願い事は叶わないのではないかと、次第に疑心暗鬼に陥っていた。

そんな疑念を抱きながらモモのところへ行くと、モモの方からいきなり切り出した。

「前に比べると、ユキちゃんの運命は百八十度よくなっているわ。来年になったら、いい仕事が舞い込むはずよ。彼のことも、今のところは様子を見ていましょうよ」

「自分では、あんまり変っていないような気がするけど……」

「いくら神様だからって、そんなに簡単に力を発揮してくれないわ。それより、このペンダントどう？素敵でしょ」

モモは、自分の胸に垂らしていたペンダントを首からはずしてユキに見せた。

「みんな持っているのよ。これをしていれば、神様に守られるのよ」

ユキは、そのペンダントを手にとってみた。金の鎖とヘッドでできている。

「でも、みんなにはあげられないの。特別に縁のある人だけね。私がユキちゃんのためにこのペンダントにパワーを入れておいたわ。これをいつも身につけていれば、不慮の事故や災難から救われるわよ」

「本当ですか。うれしいわ」

ユキも思わず、目を輝かせる。

「十八金でできていて、なかには小さいけどダイヤがはめこまれているのよ。お値段は十万よ。でも、支払はいつでもいいのよ。分割でも構わないし」

そういって首にかけてくれた。

ペンダントを受取った瞬間は、うれしかった。お守りを授かり、神様のパワーを身に着けることで、幾多の困難を乗り切ることができるだろうと、大真面目に思えた。

しかし帰る道々、どうも気持がすっきりしなくなっていた。

今のユキにとって、十万円という額は大金である。預金を取り崩して生活しているうちに、残高はもうすぐ十万円を切りそうだ。それほどまで切羽詰っているというのに、モモのところに通い続けたら、今日のように、これから次第にいろいろなものを買わされ、無駄な出費が重なる一方なのではないか。疑い深い自分には、やはり暗示は効かないのかもしれない。笠原の健康状態が、これからどうなっていくのか見当もつかないし、仕事のことも、答を出すのは難しいだろう。

ユキはこれからの不安にかられなか、迷い子のように都会の雑踏をさまよっていた。

数日後、笠原の母親から、ユキあてにハガキが舞い込んだ。そこには、「息子が入院したので見舞ってやって欲しい」と簡単に記されていた。

ユキは恐ろしかった。予感が的中し、笠原は最悪の事態に陥ったのだろうか。現実を直視したくなかった。できれば目をそむけ、避けて通りたい。

秋晴れの穏やかな日、ユキは病院を訪れた。

しかしその軽快に天気とは裏腹に、まるで両足に鉛を吊るしているよう足取りは重かった。病院の十階の笠原の病室を、ユキは恐る恐るのぞいた。ちょうど昼食が終わった時間帯である。四人部屋の窓際のベッドで、笠原は横になっていた。ユキはゆっくりと笠原のもとへ進み、顔をのぞきこんだ。不精ヒゲがのび、点滴の管を通した腕はげっそり痩せ、以前の笠原とは形相が違っている。

ユキの気配に、笠原は目を開いた。

「起こしちゃったかしら？」

「いや、寝ていたわけじゃないから」

笠原は静かに口を開く。

「気分はどう？」

「落ち着いているけど、すっきりはしないな」

笠原はゆっくりと起き上がると、ユキを促してそのフロアにあるリビングへ向かった。足取りはしっかりしているが、何よりも、体全体の肉が削げてしまったことが、きがかりだった。

十階のフロアは見晴らしがよく、ガラス張りの窓から近くの広い公園の緑が茂り、遠くに高層ビルを見渡せる。明るい陽射に包まれたサンルームのような部屋は、ここが病院でなければ、本当に心地良い場所だ。時が止まっているような感覚だ。

「やっぱり、父と同じ運命をたどるのかもしれない」

笠原は投げやりにいう。

「検査続きで疲れているのよ」

「どうかな……」

「この病院は最新の設備が整っているし、薬だって今はすごく進歩しているのよ。そんなこと、言わないで」

「腸にポリープができているんだ。手で触ることもでき

る。僕の体のなかで、栄養をすって成長しているんだ」
「ポリープなんて、手術してとっちゃえばそれで終わり。思い悩まない方がいいわ。病は気からっていうじゃない」
励まそうと言葉をかけても、空回りに終わってしまうような気がした。
「パソコンに向かって、小説でも書いているの？」
「ああ、気分がいいときはノートパソコンに向かっている」
「じゃあ、きっと名作が生まれるわ。いい小説を書くために、神様から休息の時間を与えられたのよ」
笠原ははじめて、笑顔を見せた。
あんなに元気だった笠原のことを思うと、ユキの胸はしめつけられた。その胸の痛みを何とかして押さえたいと、ユキはその足で、モモのところへ直行した。
「やっぱり、入院しちゃったの。今、会ってきたんだけど、耐えられなくて……。お願い。早くパワーを入れてください」
ユキの訴えに、モモは背中を軽くマッサージすると、
「この世の神様、ここにいるユキさんにパワーを与えてください」
目をつぶり、一心に唱えている。
「……エイッ！これでパワーが入ったわ」
顔を紅潮させているモモの手は熱かった。その熱が、ユキの体にも伝わってくる。何らかの力を持っているこ

とは確かなのかもしれないが、ユキは不思議なものを見つめるような表情でモモを見た。
「彼の病気が、どうなるかはわからないわ。ユキちゃんがパワーをつけて幸せになればそれでいいのよ。その人とは縁がないのかもしれないし……」
ユキをなだめるように、モモは明るくいった。
「今、ユキちゃんの背中を触って感じたんだけど……」
「何？」
「いいブラジャーしてるなあと思って。なかなか体に合うのがないのよね。ねえ、どこで買ったの？」
ユキは耳を疑った。ユキが藁をもすがる思いでモモのところへやってきたのに、ブラジャーを欲しがる神様なんて、この世にいるだろうか。自分はただ、からかわれているだけではないか。
「モモさんは、胸が大きいから」
「ううん、大きさの問題じゃないのよ……ちょっと触らせて」
まさぐるような手つきで胸を触ってくるモモに、この女はレズなのだろうかと、ユキは不快感を感じた。いつもモモはユキのフッションをほめるが、ブラジャーまで欲しがるとは、なんてハレンチきわまりない女なのか。
ユキは大きな落胆に襲われると同時に、ムカムカしてきた。
「私はあんたのパワーを信じて、真剣な気持でここに通って来ているのよ。誤魔化さないで！カサを救うこともできない。私自身の状況も追い込まれ、生活に貧するところまで来ているの。あんたの神様にすがってみても、状況は悪くなる一方じゃない。あんたの正体は、やっぱり女ペテン師だったのね」
そうまくしたてると、ユキは首から下げていたペンダントをむしり取り、モモに投げつけ、その場から走り出していた。
神様って一体、何だろう。
笠原のアパートでのパーティ以来、アメという不思議な女の子に出会って神様の力の話を聞いてから、この数ヶ月の間に、いろんなことが起きた。
アメも神が自分に宿ったといった。モモも、自分は神の光を見て力を授かったという。神様、神様とみんな口にするけれど、その正体は、一体何なのだろう。これまで面白半分に神様を訪ねたが、猜疑心がつのるばかりだ。ユキは、自分が愚かなゆえに、神様だのパワーだの、わけのわからないものに惑わされているだけのような気がしてきた。
この宇宙を造った天地創造の神が、そんなに簡単に、いろいろな人間のところへ降りてくるのだろうか。それはまやかしの神様だ。ユキはそう確信した。じゃあ、本物の、人間をお造りになった全能の神様は、一体、どこにいるんだろう。それとも、神様なんてこの世には存在しないのだろうか。
ユキの頭のなかは神様のことでパニックに陥り、混乱していた。
電車のなかからぼんやりと外を見つめているユキの目に、ある大きな建物が目に入った。高台のこんもりと木の茂ったなかに、聖堂と鐘楼が建っている。昼に夜に、いつも何気なく通り過ぎている場所なのに、今まで決して目に入らなかった。しかし、何故か今日にかぎって心ひかれるものがあり、ユキはあわてて電車から降りると、迷わずそこへ向かった。
駅から続く坂道を、ユキは一歩、一歩踏みしめるように歩いた。人影はないが、鉄の門は空いている。紅葉した樹木の周りには落ち葉が舞い、自然の木立のなかに建てられた教会の周りは静寂が漂っている。今までユキは、教会など無縁の世界だったが、はじめて訪れるその場所は、別世界のようにおごそかだった。
聖堂正面の石階段を上り、入口にやっとたどり着いた。足を踏み入れ、ゆっくりと重い木のドアをあけると、天井の高い広い空間の正面に掲げられたイエスの像が、真っ先に目に入った。木の十字架にはりつけにされ、苦しみをたたえてうなだれた姿に、ユキの心ははっと衝かれた。悲しみに溢れた姿に、ユキはいいようもない感動を覚えた。

ちょうど、夕方のミサの最中なのだろう。前の方の席に人がまばらに座り、前方の壇上に神父様らしき人がいて、儀式を行っている。ユキも後のはじの方の席に、ちょこんと腰をかけた。

「人は誰しも、後悔します。後で振り返ってみて、ああすればよかった、こうすればよかったと反省し、二度と同じような過ちを起こさないようにしようと思います。けれども人間とは弱いもので、また同じ過ちを犯してしまいます。私たちの一生は、その繰り返しです。私たちは、生まれた瞬間から死に向かって生きています。でも若くて元気な時は、死とは無縁な世界に生きています。しかしある日突然、死を身近なものとして感じるのです。過ちを繰り返しながらも、最期の時に、イエス様のいらっしゃる天国へ行けるような人でありたいと願っています」

その話の内容はよくはわからなかったが、はじめて聞く説教に、ユキは胸の高鳴りを覚え、心が透明になっていくような気がした。それは生まれてはじめて感じた、新鮮な衝撃といっても大袈裟ではなかった。

「私の過ちは、数知れない。気が短くて、自分勝手で、一人よがりで……」

そして人間は、得体の知れない神様のパワーなんていうものでは救われないと、この時はっきり感じた。

この神父様のいう通り、死に直面した途端、人間は死に恐れおののくのだ。

笠原はまさに今、死の恐怖と戦っている最中なのだ。笠原の病が回復するのか、手遅れなのかはわからない。今のユキにできることは、笠原のそばにいて、ほんのわずかでも心の支えになってあげることなのかもしれない。発作的に仕事やめたことも、そのためなのかもしれなかった。

そう感じながら、ユキは十字架に向かってひざまづき、心から祈りを捧げていた。

＊文中のなかの週刊誌名『週刊アミーカ』は、前編での『週刊馬子』を改名したものです。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日注）

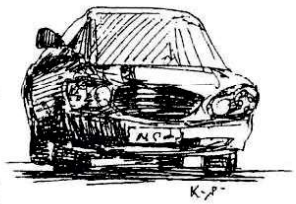
春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日

注　円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

悪流修羅（第二話）3

―リストラの虚構―

中泉聖司



（五）

何が、どう狂ったのだろうか？どう対応したらよいのだろうか。その心底を察したのか、老刑事の尋問は簡単に終わった。遺体の解剖所見がでたら再尋問をすると言う。広田は混乱していた。混乱した悩芯を超越した悲しみが胸の底から湧き上がる。

遺体が死体安置所から病理解剖棟に出ると控え室では、紀子と菊枝が泣き崩れている。どのように対処をしたらいいのか、胸を痛めていた。

広田には全てが初めての経験だった。

州警察は他殺、事故の両面で考えているようであった。

広田の脳裏に磯に横たわっていた遺体の表情が幾重にも蘇える。あれは、正しく山野社長の骸体、白髪が絡んだ顔だった。アクアラングの酸素ボンベは背中から外れて、マスクは干潟の泥を付けて肉体の側に投げ出されていた。

広田にとって、山野の自殺は当然、考えられない。事故なのだろうか。傍らにあった酸素ボンベには残量はなかった、と検死官から聴いた。

「サーフボードで遊んでいた老人が、どうしてアクアラングに身を包んでいたのか」

刑事の質問は単純であったが、広田は返答ができない。

「分からない・・・」

その表情を観察していた別の刑事は

「キミは何かを隠している、知っていることは、すべて話してくれ」

警察に、計画の全てを話さなければならないだろう、自殺の可能性を否定させ、真実を捜索させなければならない。

他殺ではないのか？事故でなければ当然だろう。

でも、どうして、誰が、なぜ山野を殺さなければならないのか？

あの計画は、F議員への献金疑惑がF議員の秘書から

マスコミに漏れ、俄かに国外への脱出計画の指示を受けた時から、一計を打ち明けられて協調してきた私と山野社長しか知らない。あとは協力者のホーソン氏とその部下だけだ。

「ジョージ・ワシントンいわく！たちの良い友と付き合うべし、悪い友との交際をするくらいなら、一人でいるほうがましだ」

かってのアメリカ大統領の教えだよ、と言って、

「この時節は悪い政友達ばかりが徒党を組んでいる、大勢は清流に逆行しているんだ。けだし、今は逃げるのも兵法のうちなのだ、卑怯ではない。たちの悪い政治家やマスコミの餌食になることもなかろう・・・」

広田には釈然としない理屈に聞こえていたが、今となっては悲しい声になって山野の濁声が耳の奥で響いてきた。

本社の役員の誰かは今回の計画を知っているのだろうが、それが誰かは聴いていない、広田は自分の憶測を交えて州警察の電話で本社の江本秘書室長に電話を入れる。

「行方不明の山野社長が殺された？・・・と、言いたいのか！」

「いいえ、今は事故、他殺の両面で動いているようですが、当局は自殺の可能性も考えています」

「キミは！大変なことをしたねえ！一体、何をしていたんだ！」

「・・・・」

「他殺となれば、キミには一番に疑いが及ぶだろうさ・・・もちろん、キミが社長を殺したと言っているわけではないが・・キミには社長秘書として、すべての責任がある。間接的にはキミが殺したのと同じだ！」

異国に派遣したのは私ではない。わたしは社長の命令でキミを派遣しただけだ、だから上司である私の責任ではないぞ、と聴こえてきた。

「わたしは、責任を痛感しています。その前に、ご指示をいただきたいことがあります」

「いまさら・・・事実をもうすこし調査してくれ、詳しく調べて報告しろ！キミの処分はそれからだ・・・」

秘書室長は受話器の向こうで喚くように言った。日頃から柔和な顔、冷静な事務的処理を見てきた広田は室長を信頼していたし、室長から的確な指示が出てくるものだと考えて救助を求めていたのだが。

受話器のむこうには豹変した課長の姿しか見えなかった。

自分の立場を理解してはもらえない広田のこころに寂しい風が走り抜けた。

マングローブの林の中で漂ってきた臭気に似た、嫌な臭いを思い出し、初めての孤独感を覚えた。

「広田くん、専務の坂口です！マスコミはどうしていますか！」

丁寧な言い方ではあるが、冷ややかな声が聴こえてきた。

「わかりません、・・・でも間もなく州警察にいる私たちを知るはずです。」

「いいですか！何も言ってはいけません！・・・喋ってはなりません！そのくらいのことはキミにもわかっていますね」

「事実は州警察から公表されると思いますが・・・」

「ばか者！そんなことを言っているんじゃないよ！会社に関すること、会社にマイナスになることは、すべて言ってはいかんのです・・」

広田は呆然としていた。

これから、自分は何をどのようにすべきかが必要なのだ。今の広田にはマスコミも政治家もたいした問題ではなかった。山野が計画した失踪劇を知っている役員がいるのか、それは誰なのか、全てを専務に報告するべきなのか、混迷した脳裏に山野の表情が重なり合いながら選択を探している。

いったい、本社は何を考えているのか？

広田はマングローブの磯で全身の支えが溶けていくように身体が崩れ折れていった感触が今、また蘇える。

（六）

「広田を早く帰しなさい！なぜ指示を出さないのですか！」

株式会社オートネックの本社は東京、麹町にある。日本時間、午後の一時に召集された役員会は混乱を極めていた。夕刻に至っても終わりそうになく、更に紛糾していた。

電話で広田の報告を逐一受けながら。

「しばらくは警察でいろいろ対処させませんと・・それとも広報部長を派遣させて交替させますか」

「責任はすべて彼にあります！早く帰らせてください！山野の娘さんといつまでも楽しんでいるわけにはいかないのですよ！」

言葉は丁寧だが、刺々しい言いかたで、すぐに役員室は沈鬱な雰囲気に変った。

坂口は入社以来、生産技術に携わり内勤一筋、他社に先駆けて社内のI・T化プロジェクトを提案して立ち上げて統括し、経営情報化の功績には定評がある。経営、人事、情報、すべては数字で評価するべし、との論理をもっていた。

坂口は死亡した山野悦治に対しての黙禱を捧げる儀式を中止した。それどころか、この事実が報道されることによる会社の受ける損害の数字をコンピューターソフトで弾くように計算課に指示をしたところであった。さらに、

「会社のイメージダウン率、販売媒体に与える悪影響、販売先への説明コスト、社内の停滞コスト、庶務費用・・」

担当役員に各部門別ロスコストのまとめを命じはじめた。

山野が人間の能力主義としたら坂口は原状の人間の引起す結果に対して機械的に照準を当て原価を基礎においた、償却主義なのかもしれない。

役員のそれぞれの胸には悲しみのかけらもないのではないか、と疑いたくなるほど、会議は山野に対する誹謗と中傷で始まっていったのだった。

ブリスベン警察にいる広田には当事者としての責任について集中砲火を浴びせている。

大利根の急逝のあと、坂口は山野に社長候補として争い、敗れたのだが山野は礼を尽くして専務に就任させていた。坂口は、この人事の経緯を知っている役員らの表情に、そこまで言わなくても良いのではないか・・と言う空気を感知した。

坂口は若干怯えながら自分の立場のロス率を計算しはじめている。

坂口は役員会議室の沈鬱な雰囲気を変えたかった。柔和さを装い意識的に唇を曲げて全体の役員を眺め始めている。

「それでは、次の議題にいきますか」

眼鏡を外して、縁の顔油を取りながら

「社葬はできないでしょうね・・・この醜態では」

言葉は丁寧だが、それが、反って威圧的に聞こえる。

「ご意見をお持ちのかたは・・・いますか」

坂口はリーダーシップを取れるのは自分以外には居ないと言う、認識をすべての役員に植え付けたかった。

社長に事故がある場合は専務が社長を代行することは定款にうたってある。

総務部長が手にした書類を見ながら帰ってきた。

「いつ帰って来るのですか！社長の遺体は！」

「わかりません、今度の連絡は、捜索費用の請求です」

「まったく無駄なことですね・・・いくらだと言って来ましたか！」

「約二百万ドル、オーストラリアドルです」

「日本円ではいくらなんです！」

「今日の為替レートで計算しますと、えーと、約一億六千万円です。」

「誰が負担するんですか」

「当社です」

「全部を負担するのでしょうか」

「それを現地の高官と交渉させています、政府間の協力協定に従って一部は日本政府になると思いますが。あとは遺体の引取り費用が・・・」

「キミの責任で交渉しなさい。当社負担を少しでも安くしてもらうべきです。政治家にも動いてもらったらどうでしょう！今まで、そのためにたくさんの献金をしてきたのでしょう！わたしは、それにはノータッチでしたがね。不正は、わたしの経営ポリシーにはありません。今となると、山野社長が亡くなって、一番ホッとしている政治家はだれだと思いますか！」

「与党の幹部も、今回の事件を知ると証人喚問ができなくなったので、野党に逆襲を考えはじめましたよ」

「しかし、F議員も今は動けないでしょう、マスコミは更に次のキャンペーンを企画するでしょうし、当社が動けば更に叩かれてしまう・・・ここは慎重にやりませんと」

困惑顔の山本広報部長が皆に視線を送った。

「山本君、キミはいつも慎重にと言って何もしない、言うだけなら誰でも言える。だからと言って全てを当社が支払って、我々の会社に損害を与えてもかまわないと言うのですか！」

「専務、逆に、すべての真実を明らかにされると困るのは外務省、その族議員だし、一度、帰国させて広田に外務省官房に折衝させてみても良いのかも知れない、広田は今回の主犯格、最後のご奉公をさせましょう！」

「官房の機密費で処理できるかも知れないねキミに任せる、やってみなさい」

ただ一人、島野常務は黙って首を落とした。おそらく今の時代にはうまくはいかないだろう。時代の変遷はこの役員達には理解ができてはいない、と思った。

「まったく、山野もつまらない男をゴールドコーストに呼んだものだ！なんの役にもたたない、それどころか社長が殺されてしまった！・・・社長を日本から連れ出した奴は誰ですか？マスコミにも知られずに！」

江本秘書室長に鋭い視線が飛んできた。

「知りません、わたくしは知らないのです。」

実際は山野の指示を受けて広田に工作をさせたのだが、今は自己防衛のためには不知で通そうと考えていた。

「そうだろう！山野は私にも話してくれなかったからね、君が知るはずもなかろう」

「おそらく、社長とゴルフの親しい友人が手配したのかもしれません、向こうには毎年行っていらしたときに、確かミスター、ホーソンというロータリーのガバナーを訪ねていましたから・・・」

「いずれにしても、早く当社の不利益を取り除きたいものですね」

坂口は冷淡に言い放った。

「そのあとは、当社に不利益をもたらす社員の整理をしなければなりますまい。山野の人情主義を踏襲しては、この会社の未来はありません。」

（つづく）

哀愁武士道（三）

三戸岡道夫

（十二）

それから三年の歳月が流れた。

藩主綱政は没して、嫡子の綱輝が藩主を継いだ。綱輝は二十二歳という、血気盛んな年令になっていた。

しかし血気盛んといっても、綱輝はその若い情熱を藩政に注ぐのではなくて、もっぱら傾けるのは遊興の方へであった。

先代の綱政は建築魔といってもよかった。たえず城や屋敷の化粧工事に浮身をやつし、屋敷の内部も、有名な画家に襖絵を描かせ、絵屏風で飾り、庭園もたえず石や植木を入れ替えて模様がえした。その工事を、参勤交代の時期に合わせて、江戸と国許で交互にやるのだから、水留藩の財政は日に日に傾いていった。

その後を継いだ綱輝は、建築魔の代わりに遊興魔といってよかった。金に糸目をつけずに遊興にふけり、そのため藩の財政はますます逼迫し、綱輝が新藩主となったときの水留藩は、五万両にのぼる借金を抱え、火の車となっていた。

そのため国許での年貢の取立てはますますきびしくなって百姓たちは困窮にあえぎ、また家臣たちへの俸禄も遅滞し、一部借上げなどもしていた。

しかし生れたときから江戸屋敷で我儘に育った綱輝は、そんな財政事情は知りもせず、また知ろうともしなかった。幸い綱輝には父のような建築道楽がなかったから、まだよかったが、藩政改革などはそっちのけで、その日その日を怠惰に、贅沢に、遊興の中に暮していた。

綱輝が新藩主になった翌年、水留藩の財政は破綻の一歩手前まで来ていた。両替商や商人からの借金はピークに達し、

（水留藩へはもうこれ以上、一文も貸せられない）

という、ぎりぎりのところまで追いつめられていた。

（何とか手を打たねばならぬ）

と誰もが思うのだが、誰もそれを綱輝に言う者がいなかった。

ついに意を決した男が二人いた。一人は江戸家老の永井高之助、もう一人は国許の仕置家老の用宗格太夫である。

国許の用宗格太夫は、藩財政の危機を訴える詳細な手紙を書いて綱輝に差し出し、並行して永井高之助が綱輝へくわしく事情を説明し、

「このまま放置すれば、水留藩は壊滅してしまいます。なんとか手を打たねばなりませぬ」

と進言した。用宗格太夫も永井高之助も先代以来の家老であるから、綱輝もいささか頭の上らないところがある。仕方なく、不機嫌な顔で聞いていたが、

「なんとかとは、どんな手を打つのだ」

と吐きすてるように言った。

（それを考えるのが殿のつとめではありませぬか）

と、そこまで永井高之助の喉に出かかったが、それをぐっと呑みこんで、

「わが藩でもきびしい倹約令を出さなければなりませぬ」

はっきりと言った。

綱輝の顔がにわかに狼狽してひきつり、そのまま能面のように止った。ただ口許だが、ぴくぴくと動いた。

（そんなことはやる必要ない）

綱輝はそう言いたいのだったが、声にならなかった。感情的にはいかに反撥しようと、説明を聞いてみれば、たしかにその通りなのである。また最近は他の藩でも、財政再建のために倹約令を出しているところが、多いと聞いていた。綱輝は、

「うむ」

と不快極まる顔でうめくと、突然、

「よきにはからえ」

と、立ち上りざまに奇声を発し、荒々しく奥へ消えていった。

（十三）

二人の家老による綱輝への財政改善の提言は、綱輝が考えていたある計画を、促進させるきっかけとなった。

折しも綱輝は、家老をはじめとする家臣のポストの若返りを計画していた。

藩主を継いだ当初は、先代藩主付の家臣の言うことを聞いていたが、いつまでも旧い家臣たちの眼が光っていたのでは、窮屈でたまらない。自分の思うことが、自由に出来ない。ましてや今回のような財政改善などという、やりたくもないことを強要されるとあっては、尚更である。そこで少し前から、藩政の若返りという名目で人材

を入れかえ、自分の息のかかった者を主要ポストにつけたいと思っていた。

問題は国許仕置家老の用宗格太夫と、江戸家老の永井高之助だった。この二人の大物をどう料理するか、その思案がなかなかつかないのだった。だが今日の財政改善の強要事件が、綱輝の決断を生んだ。

（うん、いいきっかけが生れたわい）

数日後、用宗格太夫と永井高之助は、

（長年にわたって水留藩の財政を困窮に至らしめた責任）

を問われて罷免された。代わりに若い家老が後釜についた。もちろん、いずれも綱輝のお気に入りの家臣だった。

新しく江戸家老となったのは笠谷文之丞といった。これまで国許で勝手奉行をしており、勘定の細かい役人だった。まじめで、忠誠心が強かった。

綱輝は用宗格太夫や永井高之助の練言にたいし、

（倹約など出来るものか）

と声を荒げてはみたものの、水留藩の財政改善は焦眉（しょうび）の急である。綱輝としても認めざるをえなかった。勘定のこまかい笠谷文之丞なら、うまくやるだろうと思ったのである。

それに文之丞は忠誠心が強かった。しかし文之丞の忠誠心には、ちょっと注釈が必要だった。文之丞の忠誠心というのは『自分の身を犠牲にしてもお家のためにつくす』というのではなくて、たえず藩主の顔色を伺い、藩主の気に入ったように仕事をするといった、いわば保身術だった。それが藩主の方から見れば忠誠心に見えるわけで、現代でいえば社長の御機嫌伺いのうまい、イエスマンとでもいえばよかろうか。

まもなくその笠谷文之丞が江戸へやってきた。文之丞の江戸は、はじめてではない。先代藩主のころ、江戸留守居役を勤めたことがある。しかし役に立たなくて、一年ほどで国許へ帰されたという過去があった。だが過去の内容はどうであれ、文之丞の胸のうちには、

（江戸ははじめてではない）

という若干気負いのようなものがあった。

文之丞が江戸に着いて二日目である。

「新家老の就任を祝って、祝杯をあげよう」

と前任家老の永井高之助は、新任家老の笠谷文之丞に声をかけた。

「うむ、わしも江戸は久し振りだからな」

文之丞も満更ではない。

「とくべつ場所を吟味して設営いたしましょう」

会場を深川の錦泉亭にとり、高之助は星川修理をつれて、文之丞を案内した。もちろん座敷には、芸者の染吉が入っていた。

「うん、超一流とあって、なかなかいい料亭だな」

文之丞は満足だったが、その言葉の裏には、

（江戸ではいつもこんな贅沢な所を使っているのか）

という棘のようなものが、ちらりと含まれていた。星川修理は、

「ここは幕府の御要職方などをお招きするときに、とくべつ使っております」

と説明した。文之丞は軽くうなづきながら、

「どうりで美人がそろっているな」

と目の前に並んだ芸者衆を、穴があくように見つめた。

「染吉と申します。よろしく。いつも水留藩の皆さまからはご贔屓（ひいき）にあずかっております」

「うむ、こちらこそだ…」

「では、お近づきのしるしに…」

染吉が銚子を持って酌をする。それを合図に座敷の雰囲気が柔らかになっていった。

文之丞は長年勝手奉行の職にあって、勘定に細かく、固い人間だと聞いていたので、酒の宴はあまり肌に合わぬかと修理は思っていたが、飲みはじめると酒は強く、酔うほどに女たちへしつっこくからんだりもした。

が酔うほどに文之丞は、この宴が自分が思うほどに、自分中心に動いていないことに気づきはじめた。

（新しいご家老の就任を祝って…）

などといいながら、いつのまにか宴は永井高之助や星川修理を中心に動いているではないか。

もちろん染吉の方も、

（今夜の中心は新家老の笠谷文之丞である）

ということはわかっているのだが、酔った文之丞があまりにしつっこいので、つい、

（この田舎侍め）

という気持が、心の隅に首をもたげてしまうのだった。それに染吉の心は、もともと星川修理のものである。注意はしていても染吉のサービスは、修理の方へ傾いてしまうのだった。

その辺の微妙なものを、文之丞は敏感に感じとっていた。そのため宴が更けるにつれて、文之丞の顔はしだいにこわばったものになり、

「やあ、今夜はたのしかった。面白かった、面白かった」

と文之丞は口では言ったが、駕籠に乗って帰る眼つきには、けわしいものがあった。

十四

江戸家老と国許仕置家老の交代によって、すべて家老は綱輝の息のかかった者に揃ったわけで、それを機会に水留藩は本格的な倹約運動に突入した。

しかし笠谷文之丞も、新しい国許仕置家老の川俣藤九

郎も如才ない能吏型だったから、下の者へはきびしい倹約令を出すが、藩主の綱輝へは、倹約の『けの字』も強制しなかった。だから綱輝だけは従来通りの贅沢三昧ですごしているのだから、本格的な倹約運動にもなんら痛痒を感じなかった。それのみならず綱輝は、

「家老が新しくなって、やっとわが藩の財政改革も緒に着いてきた。やはり若い家老でないと、だめだわい」

と笠谷之丞と川俣藤九郎の手腕を評価する有様だった。いい気なものという外はなかった。

笠谷文之丞はたえず勝手掛を自分のところに呼んで、江戸藩邸における金の使いぶりを、いろいろと調べていた。長々と説明を聞いたり、くわしい資料を提出させて家老みずからがそろばんをはじき、家老本来の仕事はそっちのけで、日がな一日、計算にあけ暮れる始末だった。国許の勝手奉行がただそのまま江戸に来ているのと同じで、なんのために江戸家老になったのか、わからなかった。

どの藩でも財政を圧迫しているのは、江戸藩邸における経費の増大にあった。その中味は、江戸における藩主の贅沢な生活費と交際費、その贅沢が身についたままの藩主の、国許に帰っても贅沢をつづける藩主のわがまま、藩主の奥方や子弟の贅沢な生活費、一年おきに行われる江戸と国許間の参勤交代の費用、身分不相応に広大な江戸屋敷の維持、そして江戸家老や留守居役などによる幕府の諸役人や、他藩武士との、交際費であった。

水留藩の場合も例外ではなかったが、笠谷文之丞の調査分析が進むうちに、ひとつの問題点が浮かび上ってきた。それは留守居役である星川修理の使う交際費が異常に多いことだった。それは文之丞が想像していたものよりも、はるかに多額なものだった。

「なんのために、こんなに使うのか」

と聞いても、勝手掛は。

「それは存じませぬ」

と内容を明かさなかった。文之丞の頭に浮かんだのは、先日文之丞の就任祝いをしてくれた、深川の錦泉亭である。

（あんな高級料亭を使って遊び呆けているからだ）

文之丞は、前任家老の永井高之助と、星川修理が使った交際費だけを抽出させ、それを日付別、会場別、購入品目別などに分類させてみた。するととくに星川修理の使う用途が高級で、金額も張っていることがわかった。

（藩の金を濫用して星川修理は遊びまわったり、また秘密に交際している者がいる。それは誰なのか、家老として知っておかねばならぬ）

だいいち留守居役の分際で、身分不相応な錦泉亭などという高級料亭へ出入りすること自体が、けしからぬことである。それなのに文之丞が倹約令を出してからも、修理の金使いはちっとも変っていないのである。まるで

自分だけは別格だといわんばかりである。

そんなある日。

星川修理が書見をしていると、勝手掛がやってきて、

「ご家老よりのお言いつけでございますが…」

と言いにくそうに、口をもぐもぐさせた。

「何だ」

修理の身体の中を、すっと、うすら寒い氷のようなものが走った。

「お留守居役の使われる経費が、すこし多すぎると申されております。すこしご節約いただきたいと、そういうことでございます」

そしこれは自分の考えではない、ただご家老の意見を伝えにきただけだという点を、勝手掛は強調した。だがそれを聞いた瞬間、今度はかっと熱いものが、修理の背筋から頭へかけ上った。修理は、

（馬鹿をいえ）

と一喝しようと思ったが、勝手掛の困惑しきった顔を見ると気の毒になり、

「必要だから使っているのだ」

とそれだけ言った。修理はもうすこし説明したほうがいいかとも思ったが、それは止めた。勝手掛などにいくら説明しても無駄だという思いに、かられたからだ。

（それにしてもこの勝手掛の腰抜けめ！）

と修理は思った。長年、江戸の勝手掛をつとめていれば、これまで永井高之助や星川修理が、どんな苦労をし、どのように金を使って藩の危機を救ってきたか、知っているはずである。

（笠谷文之丞からそんな指示が出たとき、おうむ返しに伝えにくるだけでなく、勝手掛として一言ぐらいの弁明ができなかったのか）

新家老に尻尾を振るしか能のない勝手掛を情なく思った。

勝手掛はしばらくもじもじしていたが、それ以上修理が取り合わないので、すごすご帰っていった。が、勝手掛の姿が部屋から消えると、修理の中に、

（どうして文之丞はそのことを、直接自分に言わないのだ）

という不愉快さがわき上ってきた。それは真綿で首をしめられるような、隠湿な嫌な感じだった。

十五

笠谷文之丞が直接修理に言わないで、勝手掛を介して言ってきたという不快さが、修理をしてわざと文之丞の指示を無視させる行動をとらせる結果になった。

（俺は家老から直接言われたのではない。そんなことは知るものか）

と修理は従来通りのやり方を、すこしも更めなかった。

そして文之丞の出方をうかがった。自分の方から事を起こすつもりはなかった。ただ文之丞の出方によっては、

（ただではおかないぞ）

という決意があった。

しばらくの間、文之丞からは何の反応もなかった。しかし新家老としての文之丞の内部で、じりじりしたものが起りつつあることは、修理にもわかった。そしてついにある日、修理は文之丞から呼び出されて、釘をさされた。

「このあいだ勝手掛の方から話があったと思うが…」

文之丞は、その辺の物をちょっと片付けるような事務的な調子で、そう言った。それで修理の方も、

「ああ、経費のことでござるか」

と事務的な言い方になった。文之丞の顔に、

（すこしも倹約していないではないか）

という詰問の表情が浮かんでいたが、文之丞はそのことは口に出さずに、

「藩をあげて倹約令を行っている。貴殿の方も協力してもらわねばならぬ」

今度はすこし激した調子で言った。

「協力しております」

修理も自分の口調がすこし激しているなと思った。

「そうは言うが、貴殿の茶屋通いはすこしも減ってはおらぬ」

「それは必要なので、以前からそうしております」

「その必要とは何じゃ」

「藩のためです。それ以上は申し上げるわけにはまいりませぬ」

修理がそう返事したのは、隅櫓事件の真相をここで全部、文之丞に話してしまっていいのかどうか、判断つかなかったからである。

先代藩が隅櫓を一層から二層へ増築したことは、もちろん文之丞も知っている。そして公儀隠密の手が入り、公儀で問題になりそうになったことも、知っているはずである。しかしそれがとくに問題にもされず、無事に納った。無事に納ったのは、江戸で修理が必死の隠蔽工作を行ったからである。

だがその水面下の工作を、おそらく文之丞は知らないであろう。隠蔽工作は誰にも相談せず、誰にも報告せず、当時の江戸家老と修理との二人だけで遂行したのだから、二人以外は誰も知らないはずである。

隠蔽工作をしなければ、お家は大事に至る。それが出来るのは、江戸にいる者だけである。永井高之助と星川修理がやらなければ、他に誰がやれようか。これこそ江戸藩邸を預る家老と留守居役の勤めである。義務である。誰に命令されなくても、誰に認められなくても、やらねばならない。

（だから我々はそれを黙ってやったのだ）

その蔭の仕事に、永井高之助も星川修理も満足していた。たとえ藩主にほめられなくても、国許から評価されなくても、べつに不満はなかった。

それに隠蔽工作という仕事の性格上、それはあちこち手柄顔に言いふらして歩くようなものではない。そのために情報が洩れて世間の噂になり、万が一公儀の耳へ入ったら、それこそあぶはち取らずである。永井高之助と星川修理が口を閉して、何事もなかったことにするのが、お家安泰の最上の途なのである。『この事件のことは黙って墓場まで持っていく』、それが義務だと、二人は覚悟をきめていた。

しかし水留藩の隅櫓の増築は公知の事実である。いくら事件にならず、平穏にすんだとはいえ、何も手を打たないですんだとは、誰も思っていないであろう。誰かが陰で動いたはずである。動いたとすれば江戸留守居役しかいない。そのくらいのことは、すくなくとも江戸家老になった文之丞であれば、見当がついているはずである。経費がかかる、高級料亭を使いすぎる、それはその為のものであるぐらいの察しがつかなくて、江戸家老といえようか。修理が、

（申し上げるわけにはまいりませぬ）

と言ったのは、その言葉の裏に、

（そんなことぐらい、言われなくてもわかっているではないか）

という思いがこめられているからだった。しかし文之丞にはそんな思いは通じないのか、それとも知っているのに、

「それでは困るな」

と文之丞の頭には、倹約の効果をいかにあげて綱輝からの点数をかせぐか、そのことだけで一杯なのだった。

文之丞は最初から修理と喧嘩になってもまずいと思ったのであろう、この日はその程度の押問答で終った。

十六

奥右筆の朝日桜之介やお庭番と、星川修理との関係は、もちろんその後も延々とつづいていた。

世話になるときはせっせと足を運ぶが、事が済めば、はい、さようなら、では駄目なのであって、いつまでも変わらない付き合いが必要なのである。そうした付き合いの中の人間関係から、互に助け合い、かばい合い、配慮してやろうという、心意気のようなものが生れてくるのである。だから、盆、暮れの挨拶、その他の祝い事など、機会を捉えての挨拶や、折りを見ての料亭への接待など、こまかい心配りをいまだに修理はつづけていた。

それを文之丞は、

「倹約しろ、倹約しろ」

と言ってくるのである。

（いい気なものだ）
と修理は思う。
（いま水留藩が安泰でいられるのは誰のお陰だ）
と言ってやりたかった。
（文之丞よ、お前がのほほんと江戸家老をやっていられるのも、この俺の必死の地下工作のおかげなんだ）
その修理が築いた藩の安泰の上にただ腰をすえて、
（倹約せい、倹約せい）
と修理に迫ってくる。
（あんたはちっとも判っていないね。ほんとうに倹約してしまっていいんですか）
だから文之丞との押問答のあった後も、修理は従来通りのやり方を変えなかった。料亭からの支払いの請求がくるたびに、勝手掛が、
「これはどなた様との会合にお使いになったものでしょうか」
と顔を歪めて聞きにくる。その度に修理は、
「そんなことを説明する必要はない」
とはね返した。
困りはてた勝手掛が文之丞へその旨を報告する。そのときの苦虫を嚙みつぶしたような文之丞の顔が、修理には眼に見えるようだった。だが、そんなことが度重ってくると、修理もうっとうしくなり、気分がいら立ってきた。

だが修理が許せないのは、そういう文之丞自身が、ちっとも倹約を守っていないことだった。それほど大した相手でもないのに招いたり、お気に入りの部下を引き連れて、なじみの料亭へ足を運んでいる。
（おぬしこそ、何だ。倹約、倹約といいながら、自分だけは別だと思っているのか）
と言ってやりたかった。しかし同時に、
（だが、どうせやるなら、一流どころでやってくれ）
とも言ってやりたかった。修理の耳へ入ってくる情報では、文之丞の出入りするのは、どうも二流の料亭が多いのである。それは経費を安く上げようとするよりも、文之丞の心の屈折の反映のように修理には思えるのだった。
文之丞にはある苦汁のような記憶がある。それは文之丞が家老として江戸に着いたときの、最初の錦泉亭での祝賀の宴である。文之丞を祝う会といいながら、芸者の染吉をはじめ、出てきた女たちが、永井高之助や星川修理の方ばかりにべったりなのが、面白くなかった。また別の料亭へ行っても、永井高之助や星川修理ほど顔がきかないのも、面白くなかった。江戸に慣れていない文之丞にとっては仕方がないことだったが、そのコンプレックスが修理にたいして片意地になっていた。
しかし文之丞もやがて江戸に慣れるにつれて、それなりの巣も見つかり、顔のきく料亭もできた。するとそこ

への出入りが面白くなり、入り浸るようになっていたのである。
互いにそんな心の屈折を持った男が二人、同じ屋敷のなかで仕事をしているのである。それも家老と留守居役という、江戸藩邸の二大要職にあってである。いずれの日にか正面衝突はさけられそうになかった。
（そのうち、また文之丞から何か言ってくるぞ。そのときこそ、はっきり言ってやろう）
修理の心に、次第に文之丞への挑戦態勢ができ上がっていくのだった。

倹約といっても文之丞のやり方は、他人にはきびしいが、自分には甘いというご都合主義だったから、もちろん藩主の綱輝にも、甘いも甘いの、大甘のご都合主義だった。
だから綱輝は倹約などというのは、どこの国のことばかり、贅沢に暮し、遊びまわっていた。しばしば屋敷を抜け出して遊びに出たり、また役者や能楽師を屋敷に呼びよせてさわいだり、親しい大名や旗本を料亭に招いたり、遊興にふけっていた。まだ若く世間知らずの若殿であるから、いったんのめりこむときりがなかった。大名や旗本を招くときも、見栄っぱりの綱輝は贅をつくし、その経費は馬鹿にならなかった。しかし招く大名や旗本も、いざというとき役に立つような実力のある者ならば、まだしものこと、たんに遊び仲間として面白いというだけの集りだったから、修理に言わせれば、まったくの経費の無駄というものだった。そして文之丞もその尻馬に乗って、いっしょに遊びまわっていた。
だが綱輝は自分はそのように遊びまわっているくせに、ときどき文之丞を呼びつけて、
「どうじゃ、倹約令はうまく進んでいるのか」
などと聞くのである。すると文之丞は、
「ご指示のとおり順調に進んでおります」
と平身して答えるのである。
「うん、それは重畳じゃ。ところで文之丞、あの染吉のことだがな」
と、最近お気に入りの芸者染吉の話に矛先が向いてくる始末だった。

十七

錦泉亭へ奥右筆の朝日桜之助を、そして笹竹へお庭番たちを招くたびに、いくら星川修理が、
（これはお家のためだ。これをやっているからこそ隅櫓事件が爆発せずにすんでいるのだ）
と確信していても、勝手掛からの、倹約、倹約の小言がたび重なると、あまり気分がいいものではなかった。設営するたびに気分が重くなり、そのために設営の頻度も

すこしづつ間遠になっていった。その影響がやはり目につくようになっているようで、ある日、染吉から、
「最近の星川さまはすこし手抜きをしておられますよ」
と注意されてギクリとした。
（やはり何とかしなくてはならないな）
と修理は思いはじめていた。
すると文之丞の方も我慢の限界にきたのであろう。ある日、修理のところへ呼び出しがきた。いつか押問答をしてから、二回目ということになる。今度の文之丞は最初から詰問調であった。
「すこしも言ったことが、行われていないな」
「接待のことですか」
「そうだ」
「必要があるからしているのです」
修理は切るように言った。その後につづけて、
（ご家老のように手下の者をぞろぞろ連れて、飲みに行くようなことはしませんよ。わたしのはお家を守るための接待費です。いわば仕事です。遊びではありません）
とよほど言おうとしたが、それはとりあえず我慢した。
「必要、必要というけれど、なにがいったい必要なのだ」
その嵩にかかった言い方に、修理の自制がプツンと切れた。
「では申し上げましょう。先代綱政さまのとき、城の隅櫓を一層から二層へ増築されたことはご存じですな」
「もちろん知っておる。二層の櫓が東西対になって、美麗なものじゃ。国許にいたときは毎日見ていたから、知るも、知らぬもない」
「そのとき公儀隠密の手が入り、事件になりかかったことも…」
「うむ、そんな噂をちらりと耳にしたことはあるが…、それがどうかしたか」
修理は隅櫓事件が起きて以来、江戸において、先代家老の永井高之助と星川修理とが、奥右筆やお庭番に手をまわし、必死の工作のすえ、やっと押えこんで事なきをえたことを、詳細に説明した。しかし文之丞は、
「でも、そんなことは昔のことだ。いまは何事もないではないか」
とけろりとしていた。
「いえ、それは何事もないように、いまもやっているから、何事もなくすんでいるのです。せっかく築いた公儀との友好関係を崩してしまっては、水留藩の安泰を維持することはできませぬ」
「それは留守居役の幻想というものだ。いつまでもそんな交際をつづけている必要はない。昔のことは、済んだことだ」
「いえ、済んだことではありません。いまでもすこし手を抜けば、ふたたび事件が爆発しないという保証はありません」
「なぜ爆発するのだ」
「奥右筆の手許には、大名台帳というものがあります。台帳には、各藩ごとに諸大名に関する情報が詳細に記録されています。したがって水留藩の隅櫓のこともその台帳には記録として残っておりますから、誰かが火をつけようと思えば、また爆発する危険があるのです」
「大名台帳などというのは噂だけで、あるという確証はない。幻の台帳だ。貴殿はその目で台帳をたしかめたのか」
「いえ、見たわけではありませぬが…」
しかし、
（奥右筆の朝日桜之介やお庭番頭の弓野佐兵衛の口ぶりからして、その存在は絶対まちがいない）
という修理の確信はゆるがなかった。しかし文之丞もいったん口に出した以上、そうそう意見を変えるわけにもいかず、
「万が一そんな台帳があるにしても、隅櫓のことまで記録されているという確証はないではないか」
「でも、記録されている可能性のほうが大で…」
「たとえ記録されていても、それがふたたび爆発する確証はない」
「爆発してからでは手おくれです」
文之丞には公儀の恐ろしさが、すこしもわかっていないのだった。修理は穴のあくほど文之丞の顔を見つめながら、
（こんな男に江戸藩邸を任せておいて、ほんとうに大丈夫なのだろうか。これでは水留藩はつぶれてしまう）
修理は暗澹とした気分に陥るのだった。

十八

そんな頃、一人の若侍が国許から江戸藩邸へ移ってきた。
若侍は久米又十郎といって、文之丞が国許で勝手奉行をしていたとき、配下に使っていた者だった。もちろん文之丞が綱輝の内諾を得て、国許から呼び寄せたのにちがいない。あるいは綱輝も国許にいたときに、顔を見知っていた若侍かもしれなかった。
久米又十郎が着任するとしばらくして、文之丞は、
「この又十郎といっしょに仕事をして、仕込んでやってくれ」
と修理に指示した。
「かしこまりました」
と修理は返事をしたものの、一瞬、文之丞の指示の意見がわからなかった。しかし文之丞は又十郎を留守居役として、修理の後釜に据えるつもりなのであった。そのための見習いなのである。同時に修理といっしょに仕

事をさせて、修理の行動を監視させるという、一石二鳥を狙ったものでもあった。

修理は、文之丞を中心とした新しい勢力によって、自分の立場がしだいに崩れはじめてきたことを感じた。

ときどき星川修理は放心したように、庭木や、空の彼方を見つめるようになった。そんなときの修理の心は、

（おれはいったい誰のために、こんなことをやっているのだ）

というやりきれない気持で、押しつぶされそうになるのだった。

（何のために？　誰のために？）

何のためにといえば、もちろんお家安泰のためである。誰のためにといえば、藩主綱輝をはじめとする家臣一同のためである。しかしその誰もが修理の苦労などわかっていない。いや、わかっていないどころか、

（水留藩を財政危機に陥れたのは、前代家老の永井高之助と留守居役の星川修理だ）

と批難する始末なのである。それを思うと無念さで、修理の眼に、にわかに涙があふれてきた。

しかしやがて涙が乾くと、修理はいつまでもこんなことをしているのが、馬鹿馬鹿しくなってきた。するとにわかに、

（もう一刻も、人に認められないこんな陰の仕事などやっていられない）

という思いが、修理の中を激流のように駆けめぐった。それは修理が自分でも予期しなかった激しい感情で、自分でも驚いた。長年、修理の中で我慢に我慢を重ねてきたものが、突如として噴出したのだとでもいえばよかろうか。

（もうこんな仕事はきっぱり止めよう）

修理は捨てぜりふのように自分に言った。

（止めよう）

と思った気持は、同時に、

（止めてやれ）

という気持にも通じていた。修理がいま水面下でやっている仕事をやめたら水留藩はどうなるか、文之丞は思い知るだろう。

（思い知ればいいのだ）

すると時を同じうして、

（藩主の綱輝が、修理を激怒している）

という風評が修理の耳へ入ってきた。それは修理と文之丞の口論のとき、ふと修理が口をすべらせた、

（倹約、倹約というのなら、殿みずからが倹約をされて範を垂れるべきだ）

と言ったのを、文之丞が針小棒大に綱輝の耳に入れたので、綱輝が怒ったのだった。

（もう陰の忠義だてなどは、すっぱり止めよう）

修理は決然と自分に言いきかせた。

それから半年ほどたって、久米又十郎は江戸留守居役に取り立てられ、星川修理は罷免されて国許へ帰ることになった。

十九

雪の降る日、星川修理が奥右筆の朝日桜之介の自宅へ、お別れの挨拶に出向いてきたのは、この国許へ帰るときだったのである。

桜之介は、その日の老中評定で雑談の中とはいえ、水留藩の隅櫓増築の話が出た直後だっただけに、星川修理の来訪に若干ギクリとしたのだった。

外は雪が降っていた。寒いので桜之介は修理に手あぶりをすすめた。修理の顔がすこし悲痛な感じなのが気になって、

「どうだ、息災かな」

と声をかけると、修理は、

「江戸留守居役の任を解かれまして、国許へ帰ることになりました。今日はそのご挨拶にまいりました」

と深々と頭を下げた。

（公儀との折衝に辣腕を振った男を罷免して、水留藩は大丈夫なのかな）

という思いが桜之介の頭をかすめた。水留藩の隅櫓事件は星川修理がいるからこそ、いちおう治まってはいるが、修理がいなくなったらどうなるのか。桜之介が、

「あの件は大丈夫なのか」

と聞くと、修理の顔がくもって、

「なるようにしか、なりません」

投げやりな調子でそう言った。修理にしては珍しい言い方だった。やはり、

（裏になにかあるな）

と桜之介は感じた。

修理が悄然と肩を落して帰っていく後姿を眼で追いながら、桜之介は、

（はたして藩主の綱輝は、事の重大性に気ずいているのか）

と水留藩の将来が心配になった。しかし、

（どの藩でどんなことが起ろうと、それはその藩の問題だ。そんなところまで奥右筆のわしが介入する必要はない）

と桜之介はそれ以上追究することをやめた。

だがその頃、幕府の中に、水留藩をめぐってある一つの動きが起きていた。

水留藩は、蜜柑、桃、杏などの果物を産し、また織物なども盛んで、裕福な藩として知られていた。綱輝が贅

沢をしていられたのも、藩主として立派だったからではなくて、天然の資源が豊富で、領民が勤勉だったからにすぎないのだった。

その水留藩の豊かな領国を狙っている大名がいたのである。それは将軍家の血筋を引いた松平信純という大名で、

（水留藩へ国替えをしてほしい）

という希望を、以前から将軍の耳許にささやいていた。それである日将軍の口から。

「何とかせよ」

という下命が、老中首座の大久保氏房のところへ下ったのである。

大久保氏房はさっそく奥右筆の朝日桜之介を呼んで、

「何とかならぬか」

と相談を持ちかけた。

「松平信純を今の領国から、水留藩へ移封するわけですな」

「そうじゃ」

「すると水留藩の秋野綱輝を他へ移さねばなりませぬな」

「当然そういうことになる」

「とすると、何かその口実を見つけねばなりませぬ」

「何かいい口実はないか」

「……」

桜之介の頭にすぐ、五年前の隅櫓事件が浮かんできた。口実に使うとすれば、それしかない。が同時にそれは、絶好の口実ともいえた。大久保氏房も十分そのネタを知っての上での、相談なのである。

（水留藩では城の隅櫓を一層から二層へ増築して、公儀へ弓を引く準備を進めた）

水留藩改易を迫るのに、これほど強力な口実がまたとあろうか。

桜之介の頭に、数日前に挨拶にきた星川修理の、なげやりな姿が浮かんできた。しかし星川修理はもはや留守居役ではなくなったのだ。

（もう修理へ義理だてする必要はない）

そう考えると、桜之介の口から、

「何とかうまくいたしましょう」

という返事がすらっと出た。

星川修理は新任留守居役の久米又十郎への引き継ぎが終わると、国許へ帰った。

しかしその引き継ぎのとき、修理は隅櫓事件については、いっさい久米又十郎へ引き継ぎをしなかった。したがって修理は又十郎を、奥右筆の桜之介のところへも、お庭番び弓野佐兵衛や足助甚蔵のところへも、引き継ぎの挨拶に連れていかなかった。修理は、

（後はどうなろうと、俺の知ったことか。もし必要とあらば、笠谷文之丞の方へはすべて話してあるのだから、文之丞と又十郎の二人が相談してやればいいのだ）

と吐きすてるようにつぶやいた。その底には、

（やれるものなあら、やってみろ）

という思いがこもっている。

（多分、出来はしまい）

星川修理は国許へ帰ると、ただちに武士を捨てると、百姓になった。

そしてはげしい労働で苦悩を忘れんとするかのように、田畑の仕事に打ち込んだ。

水留藩主秋野綱輝にたいして隅櫓増築の責任が追及されて、北館への改易の指示が下ったのは、それから一ヵ月たった頃だった。

北館藩は東北の寒地で一万石、あまり産業もない僻地といってよかった。秋野綱輝は突如として、四万石の大名から一万石の大名へと転落したのである。秋野綱輝は、

「なぜじゃ、なぜじゃ。隅櫓の増築などずっと昔のことではないか。そして今日までなんのおとがめもなく安泰にきているというのに…、なぜ、今頃…？」

狂ったようにわめき散らした。家老の笠谷文之丞と留守居役の久米又十郎が呼び出され、

「お前たちはいったい何をしておるのだ」

と強い叱責を受けた。しかし二人ともただ身をちぢませて平伏する以外に、なすすべがなかった。

秋野家は四万石から一挙に一万石へ減封となったのであるから、多くの家臣が召し放され、浪人の身となった。

秋野綱輝はこれまでの半分にもみたない数の家臣を引きつれて、北館藩へ移っていった。

それと入れ代わりに、これまで二万石だった松平信純が、その希望通りに四万石の水留藩へ入ってきた。二万石から四万石へ格上げされた松平家は、去っていく秋野家とは反対に意気盛んであった。

その松平信純が水留藩の国許へ入ってきた日、百姓姿の星川修理は、その美々しい大名行列を、田圃の稲を刈りながら見つめていた。

その眼には、

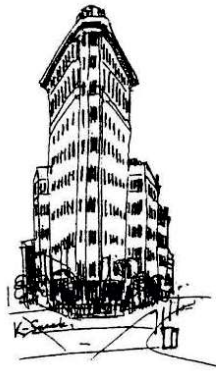
（やはり、なるようにしかならなかった）

という今日あることを予知した哀愁が、深く沈んでいた。

（終）

都市銀行『爆発物処理班』（三）

宅見勝弘



【前号までのあらすじ】武神優一は東西銀行大手町支店で不良債権回収を担当している。自分の名前と似た暴力団組長の射殺事件のニュースを聞いて、担当先のトーキョーファイナンスが関係あるのではないか、と疑った。

六、イトマル・墨銀事件

「イトマル・墨銀事件の京英宗被告人が先月、海外で逃亡したそうだ」

十月七日火曜日の夕方、取引先から支店に戻った武神優一に山名が話しかけた。武神優組長射殺事件から一ヶ月余りが経過していた。

「今日のイトマルの裁判に京氏が欠席して、逃亡の事実が判明した」

『イトマル・墨銀事件』とは、総合商社を舞台にした戦後最大の経済事件である。単に『イトマル事件』あるいは旧社名で『糸丸物産事件』とも呼ばれている。

「イトマルは、山名さんが新宿支店で担当していたのですね」

イトマル（糸丸物産）は、総合商社の第五位の規模で、百十年の歴史を持つ老舗上場企業であった。そのメインバンクが墨銀つまり墨田銀行であった。

「イトマル事件では『三千億円が闇の世界に消えた』と言われていますね」

「当行の損失も三百億円だからな。墨銀の磯野元頭取が阿高物産の倒産処理で『一千億円をドブに捨てた』という名言を吐いたが、まさにドブに捨てたようなものだ」

「当行よりも主力の墨銀の損失が大きかったでしょう。イトマルは『墨銀の商社子会社』とか『墨銀の不動産子会社』と言われていましたから」

「『墨銀の痰壺』と言われていたよ。墨銀はイトマルに随分と酷い不良の不動産案件を引受させていたからな」

山名は墨田銀行に対して敵対心を持っている様子であった。

「イトマル社長の山村氏は墨銀常務からイトマルへ行った人ですね」

「山村社長は商業高校卒で墨銀の常務まで登りつめた、叩き上げの英雄だ。『向こう傷を恐れるな』という磯野元頭取の腹心だ」

「イトマル事件の被告人の身でありながら、東京都知事選挙に出馬した人ですね」

イトマル事件では山村社長・末光専務・京英宗らが東京地方裁判所で、特別背任罪・業務上横領罪などで摘発されており、審理中であった。

「最終的にイトマルは解体されて、墨田財閥系の墨金商事に吸収されたが、三千億円は闇に消えたままだ」

山名は新宿支店から送られてきたファックスを優一に見せた。新宿支店の担当者が知り合いの記者から送られてきたものを転送したということだった。

「そのイトマル事件の被告人が国外逃亡ですか」

「刑事事件だけでなく、民事の方も影響が出るかもしれないな」

「京英宗というと、中国人フィクサーとして大物で、風貌が非常に目立つ人物ですが、よく国外逃亡できましたね」

ファックスの写真には、頭を丸坊主に剃り上げた、相撲取りのような巨体の人物が写っていた。

「京英宗は中国本土で親戚の法事があるということで、裁判所の許可を貰って出国したそうだ」

「京氏は、竹上昇元総理大臣や亀山静雄民自党政調会長とも関係のあるくらいですから、容易いかもしれませんね」

優一はファックスの写真を見ながら、竹上元総理大臣の顔を思い浮かべた。

「たしか保釈金も七億円とか莫大な金額でしたね」

「当然、保釈金は没収されるな。もっとも保釈金を出したのが武神組長とすると、返済する相手はこの世にいなくなったが」

優一は今回の京氏の逃亡が何を意味するのか、と考えていた。

「京英宗の逃亡、武神組組長射殺事件、それにトーキョーファイナンスは関係してきますか」

「関係は有るだろう。イトマル事件で京氏と一緒に首謀者として逮捕された人物は誰だ」

山名は優一に確認するように質問した。

「イトマル専務の末光一統です」

「その末光氏が代表取締役を務める会社は何だ」

「明治総合開発です」

「そうだ。武神組のフロント企業だ」

「その明治総合開発に五百億円近く貸している会社はどこか」
「トーキョーファイナンスです」
優一は答えながら、頭の中で絡み合っていた糸が解れていくような気になった。
「イトマルもトーキョーファイナンスも武神組長、京英宗、末光氏と役者が揃っているな。闇の勢力に数百億円から数千億円の金を奪われている」
「数千億円もの金を巡って、武神組長と京英宗とが対立した。あるいは武神組・京氏らのグループと、別の暴力団とが対立した。その結果、武神組長射殺事件が起こったのでしょうか」
「テレビや新聞の報道では、矢内組内部の私怨による暴力団抗争としているようだが、実際には数千億円の金を巡って発生した射殺事件という見方もできるな」
山名は続けて、優一に質問した。
「なぜ、京氏が逃亡したと思うか」
「京氏が武神組長を殺した犯人グループか、あるいは武神組長と同じ様に殺されることを恐れたから、と思います」
二人はファックスを前に暫く話し込んでいた。イトマル事件は自分達に直接には関係無い事件であるが、事件の背後関係を把握しておくべきと感じていた。
九月末の上半期決算の事務仕事も終わって、十月七日は、回収班の仕事が比較的に落ち着いている時期であった。
二人が話をしていると、通りかかった伊馬副長が罵声を浴びせてきた。
「何を無駄話してるんだ。遊んでばかりいないで、早く回収して来い」

七、巻き添え

その夜、優一と山名は独身寮の食堂で食事を摂りながら、テレビを見ていた。
イトマル事件の京英宗の失踪に続いて、暴力団の抗争の報道がされていた。
「親分の仇討ちがあって、さらにその報復が繰り返していくというのは、まさに血で血を洗う争いだな」
「京氏の失踪と暴力団抗争と全く関係が無い様な報道ですね」
「一般の人から見れば、全く別の事件が同時期に発生しただけと思うだろう」
武神組長射殺事件の犯人が同じ矢内組内の大野組系の暴力団組員であることが判明し、武神組と大野組とで全国各地で銃撃事件など抗争が繰り広げられた。一般民間人が巻き添えで被害に会う事件も発生していた。
「本日午後一時三十分、和歌山市で、三十九歳の主婦が

車に乗ろうとして、車の前のペットボトルを移動させようとしたところ、突然、ペットボトルが爆発しました」
テレビではレポーターの背後に血痕のある駐車場が映し出されていた。
「『ペットボトル爆弾』だな」
「何ですか、それは」
聞き慣れない山名の言葉に優一は質問した。
「ペットボトルの中に小型電池があって、動かすと電気が流れる仕組みになっている。電気が流れると中の爆弾が爆発する。殺傷能力を高めるために鉄の塊を混入しているものだ」
「主婦は、全身に爆弾の破片を浴び、また右腕と両足を骨折しており、重傷を負いました」
現場のコンクリートには直径三十センチの穴が開くなど、爆発の凄まじさを物語っていた。
「駐車場の隣に、武神組射殺事件で抗争中の大野組系列の吉田組事務所があります。主婦は夫の車で駐車場に来たのですが、吉田組長の車と同一車種であったため、間違えて狙われたようです」
テレビでは、現場のレポートを受けてキャスターが解説していた。
「九月十日には、熊本市内の病院に勤める三十歳の看護士の方が、顔面を横から拳銃で打ち抜かれるという事件が起きました。男性は一命を取り留めましたが、重傷を負いました。
この事件で暴力団組員が逮捕されたのですが、犯人は殺す相手の顔も名前も知りませんでした。犯人が持っていた情報は唯一住所だけで、その住所が間違っていたということです。その結果、全く関係の無い民間人が拳銃で撃たれました。
全国で暴力団による発砲事件等の抗争が相次いでいますが、今後も一般民間人の巻き添えが増えていくのでないか、心配です」
テレビを見ながら、優一は山名に質問した。
「なぜ、暴力団同士の殺し合いで、こんなに人違いが起きるのでしょうね」
「沖縄では高校生が暴力団抗争の巻き添えで射殺された事件があったな」
「大阪でNTT職員が巻き添えで射殺されたこともありました」
「実際の殺人実行犯に組長が直接命令を出せば、共同正犯として殺人の罪に問われる。共同正犯の罪を免れるために幾重にも伝言ゲームのように情報を伝えるから、人違いが起きるのだろう」
「それだけでしょうか」
「殺人の実行犯といっても、昔と違って自ら志願するヤクザは減っているそうだ。無理やり指名されて殺し屋になった者は、命令に背けば自分が殺される。仮に成功し

て相手の組長を殺しても、死ぬまで相手の組から命を狙われる。

関係の無い民間人を殺して刑務所に入れば、自分の組からも相手の組からも殺される心配は無いから、最も安全かもしれないな」

山名の言葉がブラックジョークと優一は思っていたが、何となく不安な気持ちになった。

「その内、銀行員も巻き添えになることが出てくるかもしれませんね」

「巻き添え、というのでなく、『狙い撃ち』された事件はあったからな」

「墨田銀行取締役名古屋支店長が射殺された事件のことですね」

一九九四年九月十四日、墨田銀行取締役名古屋支店長が単身赴任中の社宅の玄関で、頭部を拳銃で撃たれ殺された。自首した人物は真犯人ではなく、射殺事件の真相が全く解明されていない。

「墨銀だけでなく、前の年は和阪銀行副頭取が拳銃で射殺されたからな。不良債権回収の陣頭指揮を執っていたらしい」

一九九三年八月五日、和歌山県の地方銀行である和阪銀行の副頭取が自宅玄関で、腹部に三発の銃弾を浴び殺された。犯人は捕まっておらず、この事件も迷宮入りとなっている。

「両事件とも全国の金融機関の不良債権担当者に深い恐怖心を与えたな」

「私はヒラ行員だから殺されることは無い、と思っていたのですが。交渉相手から、射殺事件の話題を持ち出されると、恐怖を感じますね」

「どちらの事件も凶行に拳銃を使っているのが象徴的で、私的な怨恨でなく組織的暴力の存在をアピールしている」

「二つの事件では、銀行側が警察の捜査に協力的でなく、事件が解明されないようですね」

「つまり、回収担当者は殺されても、銀行側は見殺しにするということを全国的に宣伝したようなものだな」

山名は吐き捨てるように言って、さらに続けた。

「あの事件以降、支店長や副長など、お偉い方が不良債権の相手に会うことが無くなったから、回収担当者の負担も重くなっているよ」

「銀行員になって『殺し』の話ばかりするとは思わなかったですよ」

二人とも食事が進まなくて、半分近く残して片付けた。

優一は寮の自分の部屋に戻ると、電話が鳴っているのに気付いた。受話器を取り上げて名乗ったが、受話器からは何も聞こえてこなかった。

優一が電話を切ろうとしていると、暫く押し黙っていた相手は、凄みを効かせた声で言った。

「お前を殺してやる」

黒船（四）

太田和貞

火事装束

「拙者、黒鍬組組頭正木進之助と申す。お手前は興之宮村の名主三郎右衛門殿とお見受けいたすが……」

「はい。三郎右衛門はわたくしめにございます」

「池田播磨守様の丸に揚羽蝶の御用提灯をお持ちでしたので、すぐ分かり申した。御用人の佐藤孫太夫様から丁重に御案内いたせと連絡をいただいておりましたのでお待ちいたしておりました。海風に吹かれて、さぞかし、のどもかわきましたでしょうから、詰所に入られて御休息ください」

そう言って、正木進之助は歩き始めた。三郎右衛門は、そのあとに続いた。

武士たちが左右二列に分かれた中央を三郎右衛門たちは小腰をかがめながら歩いた。

（わしが思っていた以上に、御用人の佐藤孫太夫様は手を打っておいてくださった）

正木進之助のはば広い後ろ姿を見ながら、そう思った。

詰所は八畳ほどの広さだった。

かわいたのどに、お茶はうまかった。三郎右衛門は、茶碗をおしいただいてから飯台に置いた。

「それでは、ご説明申しあげる」

立ちあがった正木進之助は飯台に大きな絵図をひろげて説明し始めた。

「海岸沿いに伸びているのが東海道でござる。我国有数の幹線道路でござるが、旅人などにここを通られては御普請の妨げになるため、高輪大木戸から品川までは一切通行どめといたした。その代りに、三田、二本榎、大崎と脇道をつくり迂回させ申した。さらに、御殿山の東を流れていた目黒川を、御殿山の西側の東海寺と東光寺の間を流れるように流れをかえ、その吐き口を猟師町の網干場に割り申した。そのどれも、これも、われら黒鍬組がやり申した」

ここで正木進之助はことばを切って、（どうだ）と三

郎右衛門の顔を見ながら絵図面の黒鍬組の拝領地を何度も指で叩いた。

「黒鍬」とは「鍬仕事に玄い」からきたとも、鍬そのものの呼び名だとも言われていた。

黒鍬には土木工事にあたった武士と土木工事の出稼ぎにきた農民の二通りがあった。つまり、土木技術にすぐれた集団であった。

幕府がこの品川一帯の高台を御台場御普請の根拠地としたのは、つぎのような理由であった。

御台場御普請の建設予定の海に近かったこと。その御普請を指図する黒鍬組が近くの高台にあったこと。明俵につめる土砂がこの一帯の丘陵地から掘り出せること。さらに、車町という牛車を扱う人夫の町があったことなどである。

材木や石などは、伊豆・安房・相模方面などから船で輸送した。

海岸沿いの東海道は、この御普請の物資運搬の大動脈となった。

正木進之助から一通りの現場の説明を受けて、三郎右衛門は幕府の並々ならぬ御台場御普請にかける熱意を今まで以上に感じた。

三郎右衛門は立ちあがって、正木進之助に礼を言った。

「いや、いや。まだお話し申すことがござる。これは品川御台場の建造案でござる。池田播磨守様の御推挙を受けた三郎右衛門殿は十番の御台場の請負人に指定されており申す」

そう言って正木進之助は懐から書類を取り出して、三郎右衛門の目の前にひろげた。

品川御台場の請負人

一番御台場	幕府大工棟梁	平内大隅
二番御台場	右ニ同断（右ニ同じ）	
三番御台場	右ニ同断	
四番御台場	勘定所御用達	岡田治助
五番御台場	右ニ同断	
六番御台場	幕府大工棟梁	平内大隅
七番御台場	勘定所御用達	岡田治助
八番御台場	幕府大工棟梁	平内大隅
九番御台場	勘定所御用達	岡田治助
十番御台場	興之宮村名主	三郎右衛門
十一番御台場	柴又村年寄	五郎左衛門

十番御台場請負人に興之宮村名主三郎右衛門、十一番御台場請負人に柴又村年寄五郎左衛門と明記されているのを見て、三郎右衛門は口の中で、「よし」と小さい声で言った。

五郎左衛門が年寄と書かれていることに満足した。

「ほれ、あそこに見える洲崎猟師町突端の弁天脇に、

拙者たちが築造した御台場がござる。こぶりで、しかも洲崎と地続きなので、海中に築き立てる御台場とは比較にはなりませぬが、御参考にはなると存ずる」

正木進之助のことばに、「ぜひ見分させて欲しい」と何度も頭を下げた。

正木進之助に従って、見張り詰所から出た三郎右衛門は海を眺めて、「あッ！」と声を挙げた。

先程まで舟がゆききしていた海がひいて見渡す限りの平坦な砂地になっていた。

三郎右衛門たちが乗ってきた伝馬舟も御用地脇の砂地に舟底をつけて傾いていた。

「ここ品川沖あたりは潮のみちひがはげしく、大潮のときには砂地がむきだしになり申す」

正木進之助は三郎右衛門の顔を見て笑った。

「海の中に石垣を組むのに、どうしたらよかろうかと悩まれたのではありませんか？」

正木進之助のことばに三郎右衛門は何度もうなずいた。

「地盤をしっかり固めることが肝要でござる」

そう言ってから、

「拙者はあの洲崎弁天脇の御普請現場で、人夫たちの相撲大会をひらいて、地盤を固め申した」

正木進之助の声は得意気であった。

「海水に強い松丸太を何本も砂中に打ち込み、刈り取ったアシやカヤを敷き、その上に土をかぶせ、さらに小石をばらまいて広場をつくり申した」

この広場の地固めをどのようにしたらよいかと思い悩んでいたとき、品川宿の相撲興行が終ったあとの空地が見物客の足で、しっかり踏み固められていたのを思い出して、この広場で、二日間、相撲大会を開いたと、目黒川の河口に架かった木橋の上で止木進之助は説明した。

「一日目は個人戦。二日目は五人一組の団体戦。優勝者には三両の賞金を出すと発表したので、人足どもは目の色をかえて、励み申した。御普請現場近くの練習は御法度（禁止）、この広場での練習は勝手次第。応援団もこの広場にくりこむことを許したので、二日間の大会が終ったあとは、しっかりと広場の地固めができ申した。しかも、人足どもの意気もあがり、一気に御台場御普請ができ申した」

そう言って、正木進之助は胸を張った。

「この木橋の下の目黒川も寺と寺との間を縫って、われ等、黒鍬組が新しくつくり申した」

正木進之助の自慢話は尽きることがなかった。

「いい方にめぐり会えた」

帰りの伝馬舟に揺られながら三郎右衛門はそう思った。

「お武家さまとお話ししていると肩がこったものだが、正木進之助様には、ちっとも、そうゆうところはなかった」

きさくになんでも話しをしてくれた正木進之助に、三郎右衛門は驚きを感じた。

今まで三郎右衛門が会った武家はみな肩肘を張って、にこりともしなかった。

（黒鍬組というお役目柄、もっこをかつぎ、鍬を振われたせいだろう）

そう三郎右衛門は思った。

正木進之助たちが見張り詰所からバラバラと駈け寄ってきたとき、（とがめられた）と三郎右衛門は内心ギョッとした。

「拙者、黒鍬組組頭正木進之助」と丁重に挨拶されて、真正面から見た正木進之助の顔の日焼けの凄さに、三郎右衛門は親しみを感じた。

顔の肌の黒さは、農民以上だった。

「これも黒鍬組、あれも黒鍬組」

正木進之助が自慢するのは、農民が稲のでき、野菜の育ちを自慢するのと同じだった。

体を使って、石垣を築いたり、目黒川の流れをかえた苦労が多かっただけに、自慢しないではいられなかったのだろう。

「わが一族に、穴太衆と呼ばれている者たちがおります。石切り、石積みを業とする石工たちです。三郎右衛門殿が御台場御普請をなさるときには、この者たちをお使いなさるのがよろしいかと存じます。そのときには、拙者、喜んでおひきあわせ致し申す」

そう言った正木進之助の顔には、

（わが一族に、穴太衆あり）

という誇りが読みとれた。

「御台場築造の資材としての枕木などは関東方面の材木、岩石類は相模・伊豆・安房より海上輸送し、この品川一帯の空地に集積させており申す。三郎右衛門殿もこの方面の方策をお考えとは存じますが、幕府御用を名乗れば、集めやすいことは事実でござる」

幕府御用をお名乗りなさいと謎掛けまでしてくれた。

「品川の潮干狩のことも書いておいてください」

三郎右衛門の脇でセッセと筆を動かしている儀兵衛に三郎右衛門は声を掛けた。

「かしこまりました。書き終りましたら、お目を通していただいて、おちがないか、どうか見ていただきたいと思っております」

「浮世絵で見て知ってはいたが、この品川沖一帯が潮干狩の名所だとは思い浮かばなかった。歌麿だったろうか、砂地に傾いている舟を背景に、江戸の女たちが蛤をすなどっている美しい姿にみとれたことを思い出した。かがみこみ、はだけた着物の胸元から豊かな乳房が今にもこぼれ落ちそうで、わしは生唾を呑み込んだものだ。潮がひいた砂地にほっそり立っている真っ白な素足からわしは目が離せられなかった。その品川沖に、わしは御

台場を御普請しようとしている。わしの若い血が戻ってきたような気がする」

「お名主さまがお元気になられれば、わしらも元気になります。勘八、松助、そうだろう」

儀兵衛は二人に声を掛けた。

「へい。さようでございます」

勘八も松助も大きく、うなずいた。

江戸ではやった「当世ものは尽し」の一節に、

「なひものハ、火事と仕事と銭通用」

とあるように、「火事と喧嘩は江戸の華」とうたわれた火事がこの時季、激減した。

これは、幕府が旗本・御家人に非常出陣の用意を命じるとともに、城門を固めさせ町奉行所、先手組の与力・同心が昼夜の別なく、江戸市中の見廻りを始めたからであった。

各町の町役人はそれぞれの自身番につとめ、与力・同心の差図を待ち、火消人足はそれぞれの詰所につめていた。非常時という緊張感が江戸から火事を無くしたとも言えた。

また、幕府は異国船が、もしも江戸湾に侵入してきたときには、八重州河岸定火消役が早半鐘を鳴らして合図をし、つぎつぎに早半鐘を打ちついで、江戸市中に知らせる手筈もととのえていた。

まえまえから江戸近郊の農村も、江戸の早半鐘を聞きつけたときは、村役人が付き添って、馬喰町の御用屋敷に農民たちが駈け付けることになっていた。

農民たちは草鞋、脚絆で足元を固め、半天をはおって胴を荒縄でかたく結び、手に鳶口を持って名主屋敷に集ってきた。

三郎右衛門は背中に輿と染め抜いた厚い木綿地の火事羽織をはおり、したは武士たちの踏込と称する袴をはいた。踏込の裾縁は武士に遠慮して付けなかった。

四十路になるまでは、この村火消の先頭に立って、小走りで江戸に向かうのは心地よかった。

街道に立って、三郎右衛門たちを見送る村人の間から、

「あら、輿之宮村の村火消よ」

そう囁く声が耳に入ってきて、三郎右衛門の自尊心を満足させた。

しかし、五十路に入ってからは、馬喰町の御用屋敷まで走り続けることはできなくなっていた。

年寄役の儀兵衛は三郎右衛門より年輩であったから、江戸までの差し添えは頼めなかった。

「わしが江戸まで駈け抜けられるのであれば、わしは喜んで駈けていく。しかし、五十を過ぎたわしには、もう無理なのだ。まして、儀兵衛はわしより体力が無い。村役人で、残るのは勘八、お前だけだ。いろいろと大変なことは、わかっているが、どうか、江戸までの差し添

え役を引き受けてくれ！。近在で火事があったときは、わしがついていこう。わしが着ていたこの火事装束をお前にやる」

三郎右衛門は火事装束の入った乱れ箱を勘八の前に、押した。

「お名主さま、わしがお名主さまの代りだなんて、とんでもねえ」

勘八は尻込みして、固辞した。

「わしは、もう駈けたくとも、駈けられないのだ。お前が御用屋敷まで村火消を連れていってくれ」

そう頼みながら、三つのとき、はやり病で亡くなった伜のことを思い浮べていた。

（寅之助が生きていれば、いい若い者になって、勘八に頼まなくとも、わしの代りを務めてくれた）

そう言う思いが三郎右衛門の心に突如として襲ってきた。

天保十三年、三郎右衛門に待望の男の子が産まれた。

そのとしの干支にちなんで寅之助と命名した。

夏から秋にかけて、関八州はひでりが続き、天保七年から始まった凶作が、ことしも続くのかと村々は重苦しい雰囲気に包まれていた。

その中での寅之助の誕生であったから、三郎右衛門の喜びは、ひとしおであった。

おつねが名主屋敷に嫁にきて、七年目の秋であった。

もう、子どもはできないものと、あきらめていたところであった。

「孫ができなければ、家のそとでつくればいい」

母親に、そうけしかけられていたが、三郎右衛門は相手にしなかった。

（子供ができなければ親戚の子を養子に迎えればよい）

眠れない夜に、親戚の子供たちの顔を闇に浮ばせたこともあった。

寅之助が三歳になった秋、急に元気がなくなり、むずかり始めた。

額に手を当てたおつねは、その熱さに、急いで村の漢方医の玄庵を呼びにやった。

病室に入ってきた玄庵は、寅之助の顔を見るなり、

「もがさですな」

と顔をしかめた。

「もがさ」とは面瘡の略で、顔に瘡が多くできる疱瘡の古い呼び名であった。

「風に当ててはなりませぬ。すぐに雨戸、戸障子、襖をお閉めください。蚊帳を吊り、その中にお子さんをねかせてください。赤木綿で肌着をつくり、お子さんに着せてください。看護する方も同じです」

玄庵のことばで、三郎右衛門が恐れていた寅之助の病名が疱瘡と分かった。

三郎右衛門もおつねも肚をくくった。

寅之助の顔に出てきた赤い斑点に、

（そうではないか）

と心配していたことが現実となった。

おつねは若いときの赤い着物、赤い帯を身につけて、寅之助の看護にあたり、三郎右衛門は江戸に人を走らせて赤木綿や赤いおもちゃを買い求めさせた。

部屋の入口には、屏風衣桁を立て、それに赤い着物を掛けた。

なぜ、病室をはじめ、病人から看護人まで赤い色の着物を着せたのか、その理由はわかってはいない。

元禄年間、香月牛山は『小児養育草』の中で、

「痘の色は赤きを好しとする故なるべし」

と書いているだけであった。

疱瘡の治療法がはっきりしていなかったこの時代に、赤い色にすがった親の姿があわれであり、その親心が悲しい。

享保年間、寺島良安の「済生宝」によれば、疱瘡は、熱発三日、出斉三日、廻漿三日、貫膿三日、収靨三日にして、ようやくおさまると書かれている。

とくに、出斉から貫膿の九日間は、そのかゆさに子どもは患部をかこうとする。

母親のおつねは、かかせまいとして寅之助の両手を縛った細紐を自分の背中にまわして、寅之助の両手の自由を奪った。

寅之助は泣いた。

寅之助がどんなに泣いても、おつねは辛抱した。

（堪忍しておくれ、かさぶたがとれるまでの辛抱だからね）

寅之助が泣けば、おつねは胸をはだけて寅之助に乳首をふくませた。

首を左右に振って、いやいやをしていた寅之助が急に乳首に噛みついた。

「ヒェーッ！」

あやうく声をあげそうになったのを必死にこらえた。

「寅之助、お願いだからかあさんを困らせないで、泣くお前より、泣かないかあさんの方がつらいのだから」

おつねは酒湯にひたした赤木綿を軽くしぼって、赤くはれあがった寅之助の顔にかけ、その上からやさしく叩いてやった。

酒湯のほどよいあたたかさと軽く叩かれる気持ちよさとで、泣き疲れた寅之助はコトンと眠入ってしまった。

「ようがんばられた。あとは体力の回復を待つばかりです」

玄庵から、そういたわられておつねと三郎右衛門は、

（寅之助を殺さずにすんだ）

と安堵した。

その日、おつねは寅之助が喜ぶ酒湯を念入りにおこなった。

米の一番とぎ汁は捨て、二番とぎ汁一斗に酒五合を入れ、沸湯させてからさまして沐浴させた。

久し振りの沐浴に寅之助は喚声をあげた。

おつねと三郎右衛門が寅之助の笑顔と喜びの声を聞いたのは、これが最後だった。

その夜、発熱した寅之助は翌朝、息をひきとった。

「お名主さま、どうなさいました」

勘八に膝をゆすられて三郎右衛門はハッと気が付いた。

「いや、すまん。わしは今、二十年前に亡くした一人息子と会っていた。生きていれば、ことし二十三歳になる。わしの火事装束を着て、火事現場で立ち働いていたであろうに……」

「おいくつのときに？」

「三つだ。かわいいさかりだった。よかれと思って、入れた酒湯が命とりになってしまった」

「……」

「おつねもわしも、寅之助を亡くしたことで、長い間、苦しんできた。しかし、このごろ、ようやく寅之助の名前を口にすることができるようになった。勘八、お前や村の若い者の姿を見るたびに、わしはいつも寅之助のことを思い出していた。寅之助ならきっとこう言うだろう。寅之助なら、もうすこしちがった、けじめをつけるだろうと、わしはわしの心の中に生きている寅之助に話し掛けてきた。勘八、実はな、……」

ここまで言って、三郎右衛門は絶句した。

勘八もしばらく黙っていたが、三郎右衛門の顔をみつめて話し始めた。

「お名主さま、わしが亡くなられた寅之助さまの代わりを務められないことは、じゅうじゅう分かっておりますが、もし、わしでよければ火事装束をいただきたいと思います」

三郎右衛門の両の目から急に涙があふれ出てきた。

（つづく）

祝出版

三戸岡道夫著

（資料協力・瀧澤中）

「明治陸軍の巨星

児玉源太郎」

学習研究社　六八〇円

宰相の橋

（四）



太田精一

春になった。ドリナ川は、付近の雪解け水を集め、水嵩を増し、滔滔と流れている。木々は芽吹き、若葉が岸辺を埋め尽している。春の訪れは、ヴィシェグラードの住民の心を浮き立たせ、町も活気を取り戻すはずであった。だが、今年は違っていた。

「こんなに気鬱な春を迎えたことはなかった」町の人々は、工事の再開を懸念し、アビダガの恐怖を思い起して、ヒソヒソと語り合った。

そんな時、イスタンブールからアビダガ解任の知らせが届いた。その情報は、ヴィシェグラードの町から近郷近在にまで、たちどころに広まった。住民は、一斉に家から飛び出しお互いに肩を抱き合い、喜びを分ち合った。

トスンが大宰相に架橋工事の進捗状況を包み隠さず報告したことが、アビダガの解任に繋がったのだ。「このままでは、橋の完成はおぼつきません。ムスリムも正教徒もユダヤ人も、アビダガ総監督のやり方には批判的です。橋の工事は、祝福されるどころか怨嗟の的となってしまい、それを計画実施した大宰相様や私どもまで恨まれております」トスンは、大宰相に「アビダガの非道なやり方を改めるよう命じて欲しい」と職を賭して懇願した。

「わかった。アビダガについては、其方の話を聞くまでもなく、いろいろと悪い噂が耳に入っている。賦役人夫に日当も払わず、その賃金を着服しているとの報告も受けている。アビダガの登用は、予の失敗であった」

ソコル大宰相は、すぐさまアビダガを解任した。アビダガは、着服した金の全額を返却させられ、アナトリア（小アジア）の小さな村に追放されて、二度とイスタンブールの土を踏むことはなかった。

アビダガの後任には、ルーメリアの地方行政長官アリ

フ・ベイが任命された。トスンは、アリフ・ベイに従って、ヴィシェグラードに到着した。ダルマチアからは、石工の親方アントニオが職人を連れて戻って来た。トスンは直ちにアントニオをアリフ・ベイに引き合わせた。

ある四月の暖い日、工事は再開された。アリフ・ベイは、性格も風貌もアビダガとは全く異なっていた。背が高く、柔和な目をしており、鞭のような杖も持っていない。いつも微笑をたたえ、怒鳴ることもない。それでいて、適格な指示が、口をついて出た。橋の完成に賭ける情熱は、アビダガを凌ぎ、工事の中断を言い出せるような隙を全く見せなかった。彼が就任してから無報酬の賦役は無くなった。人夫は日当を貰い、加えて粉と塩の給付を受けた。聾唖の娘は、冬の間に、閑散とした工事現場から姿を消し二度と戻っては来なかった。

工事は比較的順調に進んだ。工事が進むにつれ、ヴィシェグラードの人たちは、橋の袂に建設されつつある建物にも関心を寄せた。

「あの建物は、何んだろう。見張小屋にしては立派すぎる。兵隊でも駐屯させるつもりだろうか」住民の間にさまざまな憶測が乱れ飛んだ。

旅宿（キャラバン・サライ）の建設が行われていたのだ。キャラバン・サライは、遠くから来た商人などの旅人が、馬や荷車ともども宿泊できる施設で、オスマン帝国の各地に設けられていた。ヴィシェグラードのキャラバン・サライは、橋を渡る際、夜になってしまった旅人のために建てられたものである。

この頃になると、橋の周辺のあちこちで、さまざまな工事が行われ、住民たちも、それらの工事が、橋とどのようなかかわり合いがあるのか理解できなくなっていた。新しいダムや土手が伸び、川の流れは、排水溝や溝で細く分かれ、別の川床に導かれている。ギリシア人の大工たちが、トスンとアントニオ親方の設計に従って、巻取り装置付きの巨大な木製の起重機を作った。それをいかだの上に据付け、重い石を一列に川床の橋脚に運んだ。この起重機によって、工事は思いのほか捗り、中止を囁く声も次第に影が薄くなった。夏が過ぎ秋が来て、両岸は木の足場によって繋がった。

着工からすでに三年たち、この年の工事も終りに近い頃である。中央の橋脚工事付近で、突然悲鳴が聞こえた。アントニオ親方の助手をしていたモール人（ムーア人）が、石材の下敷となって下半身を押し潰されている。モール人は、恐怖と苦痛の眼差しを向け必死に逃れようとしていた。起重機で石を所定の場所に運ぶ時に起った事故である。起重機の綱が緩み、石が突然彼の体の上に落ちてきたのだ。

トスンとアントニオ親方は、すぐに駆けつけた。人夫を集め、鉄のバールや、木の角材で、石を取り除こうとした。懸命の救出活動も空しくモール人は、石の下敷に

なって死んだ。体は切断され、棺の中には、上半身だけが入れられた。葬儀には、ムスリムの男子がこぞって参列し、棺を交替で担いだ。キリスト教徒もユダヤ教徒も喪服に身を固め、棺を見送った。親方は、橋と同じ石材を使って石碑を造り、橋の近くに立てた。

やがて冬が来て工事は中断した。次の年は四月から再開され、十二月半ば頃まで続けられた。五年目の春を迎え、木材、石材、工具などで埋まっていた工事現場も、次第に整理され、目立たなくなった。

秋、木々の葉が黄金色に輝く頃、橋の完成より一足早く、キャラバン・サライが、壮大華麗な姿を現わした。二階建の大きな建物で、材料は橋の石と同じものを使っている。これまで町になかったような堂々とした質量感あふれる美しい建物であった。

キャラバン・サライの内装工事が終わる頃橋もようやくその優美な姿を現わし始めた。蛹が蝶に変身するようにまず両岸に近い川の中に、それぞれ一つずつアーチが姿を見せた。その後、次々と幾つもの虹が、川の中に掛ったようにアーチが現われた。最後の足場が取除かれると、十一個のアーチが、壮麗な姿を見せ、秋の陽差しを受け、眩いばかりに輝いていた。

ヴィシェグラードの人たちは、橋の全容を見て歓声を上げた。これまで工事の中断を望んでいた人も完成を疑問視していた人も皆一様に喜び合った。

「あの見事な橋を見たか。これからわしらの生活も便利になる。有難いことだ。それもこれも宰相さまのお蔭だ。わしは前から宰相さまの力を信じていた」先日まで、橋の工事に反対していたことをすっかり忘れ、以前から建設を支持していたかのような口ぶりで、ムスリムの一人が話した。

「お前は、アビダガ様が来た時から反対していたが、いつの間に変ったんだ。まあ、そんなことを詮索するのは、この際止めよう。これから、わしら皆この橋を利用させて貰うことになるからのう」

トスンは、こうした会話を聞いて、住民の意思がいかに変り易く、ご都合主義であるかを痛感した。アリフ・ベイ総監督と共に、橋の建設功労者として、住民から賞讃を浴びている今の自分が、〝幻〟ではないかとふと思った。アビダガが解任されず、彼のやり方で工事を続けているとしたら、まだ何年かかるか分からない。完成を見ぬまま橋は、ドリナ川の中に残骸を晒し、後世の人からも〝無謀な計画〟として笑いものにされることになったかもしれない。それを考えただけで背筋が寒く感じられ、改めてアッラーの加護を感謝した。

十月初旬、アリフ・ベイは、橋の完成を祝って、大祝宴会を開いた。彼は、アビダガと違い清廉潔白な人物であった。大宰相から預った建設費は、全て橋の建設のた

めに費し、祝宴会も彼の自前の費用で賄った。祝宴は、二日にわたり料理や酒がふんだんに振舞われた。歌や踊りも披露され、余興も飛び出した。住民は、アリフ・ベイの催す祝宴を心から祝った。

また、甘いものも、食べ切れないほど配られた。酒を飲まない敬虔なムスリムにとって、甘いものは大好物である。トルココーヒーを啜りながら、小麦粉と砂糖とバターで作ったハルヴァに舌鼓みを打った。ジプシーたちも、めったに口にすることができないご馳走やハルヴァに群がり、食べ過ぎて死ぬ者も出るほどであった。

橋の上では、子供たちが燥ぎ回り、若者は、輪になって踊る。老人たちは、橋の損傷を恐れるかのように、一歩一歩敷石を踏みしめながら渡った。老人たちの中には途中何度も立ち止まり、滔滔と流れる水流に翻弄される枯枝の行方をじっと眺める者もいた。

長さ一八〇米、幅七米ほどの橋の上では、ムスリムも正教徒もユダヤ教徒もジプシーも皆平等であった。また地主も小作人も商人も職人も金持も貧乏人も一人の通行人として扱われ、差別されることはなかった。

橋の中央部の歩道の両端には、カピア（門）といわれるテラスが張り出している。このカピアは、縦、横、三・五米の正方形をしており、石の手摺りで囲まれている。屋根はない。カピアには、コーヒー屋が店を出し、そこで憩う人びとに暖かいコーヒーを売っている。そのカピアの壁に、石板に刻み込まれた碑文がはめ込まれた。ソコル大宰相の偉業を讃えたものである。碑文には〝大宰相が私財を投じ建設したこの橋が、永遠に壊れることなく存続することを願う〟という趣旨のことが書かれていた。

祝宴も終わり、ヴィシェグラードの人々に、日常の生活が戻った。日がたつにつれ、橋はずっと昔からこの町にあったかのように、日常生活の中に溶け込んで行った。橋のなかった頃の不便な生活は、次第に忘れ去られた。だが、この橋のお蔭で、ヴィシェグラードの町は急速に発展し、橋の回りには、人家が増え、交通の要衝として栄え始めた。

トスンは、橋の完成祝宴会が終わるとすぐイスタンブールに戻り、ソコル大宰相に、報告した。「これまで、あの地方では、見たこともないような見事な橋ができ上がりました。付近の住民たちも、完成を喜んでおります。皆大宰相様のお蔭だと言って、記念の碑文がカピア（テラス）の壁に、はめ込まれました」

「ご苦労であった。アビダガの件では、其方もずいぶん嫌な思いをしたであろう。だが、あの複雑な地形のヴィシェグラードに、幾世代にわたって利用できる橋を造った其方たちの貢績は、まことに大きい」

ソコル大宰相は、トスンに感謝状と褒賞金を与え、労をねぎらった。感謝状を読みながら、大宰相は、遠いボ

スニアの故郷を想い浮べた。天日干しの煉瓦で建てられた家屋の中、炉端で父親が皮を鞣し、母親が家畜の毛を梳き糸を紡いでいる。炉には、固めた牛糞を焚いた火が燃え、鍋が掛かっていた。ガランとした部屋。小麦、米、乾燥した肉、果物の入った土の壺が、土間に置いてあった。家畜小屋には、牛が二頭、馬が一頭いて、その熱気が、土の壁を通して伝わり、部屋を暖めていた。「これで、故郷に少こしは貢献できた」大宰相は、念願の橋が完成した喜びを噛み締めていた。

その時、レパントの海戦における悲報がもたらされた。ギリシア本土とペロポネソス半島を分けるパトラス湾のレパント港沖で、オスマン帝国海軍が、ベネチアを中心とするキリスト教国艦隊に撃破され、大敗を喫した大事件である。

もともと海運国ではなかったオスマン帝国の地中海における制海権は、ベネチア海軍に握られていた。だが、スレイマン大帝の時代に、地中海に拠点を持つ海賊たちを懐柔し、その頭目たちをアレキサンドリア、チュニス、アルジェリアなどの総督やパシャに任じた。こうして短期間のうちに海軍力を強化したオスマン帝国は、地中海を〝スレイマンの海〟といわしめるまでに至った。

だが、海賊を登用した急速な海軍力の増強は、指揮系統の統一を欠き、大艦隊が正面から激突する海戦には不向きであった。また、中央から派遣された艦隊司令長官提督アリ・パシャや作戦総司令官のペルテウ・パシャは、実戦の経験が乏しく、海賊出身で実戦経験豊かなアルジェリア総督副司令官ウルグ・パシャと互いに反目していた。

「わが海軍の装備は、キリスト教連合艦隊より劣る。砲は、明らかに破壊力が弱く、ヴェネチアの六隻のガレアス船は、船首と船尾に八門、左右舷側に七門の大砲を積んでいる。このガレアス船だけでも、わが軍の艦船六十隻に匹敵する。この際、湾内に留まり地上軍の協力を得て、戦うべきだ」アルジェリア総督ウルグ・パシャはこう主張した。だが、司令長官のアリ・パシャと作戦総司令官のペルテウ・パシャは、双方の大艦隊が正面から激突する海上決戦を強硬に主張した。

「オスマン海軍は、これまで敗れたことはない。これだけの艦隊を率いて、貝のように湾内に閉じ込もっているべきではない。正面から戦いを挑み、オスマン帝国の武威をキリスト教徒どもに見せつけるべきだ。火力は確かに劣るかもしれないが、わが艦船には、イエニチェリよりの精鋭が八千人も乗り込んでいる」

かくして、艦数二七八隻、砲数一八一五門、乗組員八万三千人のキリスト教連合艦隊と艦数二二四隻、砲数七五〇門、乗組員八万七千人のオスマン艦隊とが、地中海の覇権を巡って激突した。一五七一年十月七日のことである。

敗報を聞いたソコル大宰相は、トスンをトプカピ宮殿から送り出した後、すぐさま、スルタン・セリム二世に報告した。

「わが艦隊の司令長官アリ・パシャは、戦艦の中で、弩弓の矢によって心臓を貫かれ即死。その首は、キリスト教艦隊司令長官の乗る旗艦の帆柱に繰られたそうです。また、作戦総司令官のペルテウ・パシャも艦と運命を共にしたようです」

大宰相の報告を聞いて、セリム二世は、天を仰いで、「キリスト教徒どもに勝利の喜びを与えてしまった」と呟き、厚いカーテンの奥に消えた。

その後、ソコル大宰相のもとに、海戦の詳報が次々ともたらされた。副司令官ウルグ・パシャは、マルタ騎士団旗を奪って、戦場を離脱しイスタンブールに帰還したこと。オスマン艦隊の損害は、損失艦戦数一九〇隻、戦死者および行方不明者三三〇〇〇人。一方キリスト教連合艦隊の損害は、戦死者および負傷者を併わせ八〇〇〇人であることなどが、明らかとなった。

ソコル大宰相は、イスタンブール駐在のヴェネッツィア大使バルバロをトプカピ宮殿に招聘した。早速大使は宮殿を訪れ、高官の案内に従って、午前会議の行われる閣議用の部屋に入った。そこには、顎鬚を蓄えたソコル大宰相が、威厳に満ちた顔で座っていた。全閣僚が居並んでいる。対西欧強硬派で知られるララ・ムスタファ・パシャやピヤール・パシャの顔もあった。部屋には、厚いカーテンが掛けられていた。そのカーテンの裏には、スルタン・セリム二世が、じっと会談の成行きを見守っている。

ソコル大宰相は、余裕のある表情で、おもむろに口を開いた。「レパントの海戦では、われわれは敗北した。だが、キプロス島は依然としてわれわれのものである。われわれはすでに海軍の再建に着手している。一年以内には、敗戦前を上廻る大海軍を編成してみせる。オスマン帝国の権力と資源は無限であり、必要とあれば、絹の綱、サテンの帆をすぐにでも入手することができる」

バルバロ大使は、海戦による勝利を得ながら、キリスト教連合艦隊が解散してしまったことを悔んだ。ヴェネッツィア海軍だけでは、オスマン海軍に対抗できない今、オスマン軍に占拠されているキプロスの放棄は、やむを得ないものと判断した。

レパントの海戦は、もともとヴェネッツィア共和国の領土であったキプロス島が、オスマン帝国の攻撃を受けたところから端を発したものである。キプロス島は、ヴェネッツィアの地中海貿易における重要拠点であり、海軍の前線基地でもあった。そのキプロスが攻撃されたため、ヴェネッツィアは、法王ピオ五世にイスラームの脅威とキリスト教国の危機を訴えた。ピオ五世は、キリスト教

諸国に、檄を飛ばし、対オスマン帝国に対抗するキリスト教諸国の連合艦隊を結成させ、レパント沖での海戦となったものである。

戦勝国ヴェネッツィアは更に譲歩を迫られた。多額の通商金を三年間オスマン帝国に支払うことを合意させられた。にもかかわらず、ヴェネッツィア側の得たものは、わずかに没収された財産の返還と全トルコ領内での経済活動の自由を保証されたことだけであった。

ソコル大宰相は、ウルグ副司令官に対し、敗戦の責任を問わなかった。それどころか大提督に任じ、オスマン帝国艦隊の再建に着手させた。ウルグ大提督は、ソコル大宰相の期待に応えて、敗戦後八ヶ月もたたないうちに、開戦時の保有艦数を上廻る二百五十隻からなる大艦隊を編成し地中海の制海権を握った。レパントでの海戦の好機を生かすことなく、連合艦隊を解散したキリスト教国の地中海制覇は、十七世紀後半まで待たねばならなかった。

再び地中海の制海権を握ったオスマン帝国の版図は、小アジア、東ヨーロッパ、北アフリカに及び古代ローマ帝国に匹敵する領域をその支配下に置いた。人口三〇〇〇万～三五〇〇万人。首都のイスタンブールは七〇万人を数え、明の北京と並んで世界最大級の大都会となった。ちなみに当時の英国の人口は五〇〇万人、スペイン六～七〇〇万人、イタリア一二〇〇万人、フランス一六〇〇～一八〇〇万人と推定されている。また西ヨーロッパ最大の都市ナポリでも人口三五万人前後で、パリ二三万人、ロンドン一二万人、セビリア一〇万人程度であった。

ソコル大宰相は、レパントでの敗戦を巧みに処理し、オスマン帝国の威信を回復。西欧諸国に脅威を与え続けた。だが、経済の混乱と宮廷内の権力争いによる国内の政治的混迷は、老宰相の体力と気力を損耗させた。ハーレムの女性たちが、スルタンの寵を競い、後継者争いは、秩序と規律を破壊した。また、オスマン帝国創設以来支えてきた土地の用益権（オスマン帝国では土地はスルタンのもので、スルタンから用益権をゆだねられる）を有するティマール（騎士階級）の騎士隊シパーヒー（中央政府直属の騎士）は、彼等の管理下にある土地を宮廷の官僚に取り上げられ、生活基盤が失われて行った。シパーヒーは、騎馬軍団、イエニチェリは歩兵軍団として共にオスマン帝国軍の中核を担ってきた。だが、十六世紀末ソコル大宰相の時代には、兵器が発達し、槍、弓、剣による伝統的な戦法に固執したシパーヒーの役割は次第に低下して行った。それに引き替え、イエニチェリ軍団はいち早く火砲を取り入れ、装備を近代化し、最強の軍隊として、近隣諸国を圧迫し、帝国内の発言権をますます強めるに至った。これによってイエニチェリたちの俸給

が増え、経済的にも豊かになり、貧困化するシパーヒーの嫉視を浴びるようになった。

こうした国内問題は、オスマン帝国内の政治的対立を生んだ。ソコル大宰相に対立するララムスタファ・パシャやピヤール・パシャたちは、領土拡張によって、経済の拡大を図るとともに、異教徒を従える優越感を国民に与えることにより国内問題から国民の目を逸そうとした。ソコル大宰相は、西欧諸国といたずらに事を構えるべきでないとの考えに立ち、ララムスタファ・パシャやピヤール・パシャの強硬派と対立していた。一五七八年対外強硬派との政争に破れたソコル大宰相は、失意のうちに失脚した。

失脚後数ケ月が過ぎ、イスタンブールにも秋が来た。ボスボラス海峡の流れに乗って、オスマン艦隊が黒海からエーゲ海へと出て行く。ソコル前大宰相は、ボスボラス海峡を見下す小高い丘の別荘から、トプカピ宮殿を眺め、静かな日々を過していた。

一五七九年のある穏やかな秋の日のことである。ソコルは急に、私財を投じて建設したモスクを訪れ、敬虔なイスラームとしての祈りを捧げようと思い立った。薄暗いモスクの中で長い時間過ごしたソコルは、外の光に目がくらみ、一瞬視力を失った。その時、黒く薄汚れた外套を着た男が、物欲しげに手を差し伸べ、身を寄せてきた。その懐には、短剣が隠されていた。ソコルは、胸に痛みを感じたと思った瞬間、血がほとばしり出た。何が起ったかソコルには理解できなかった。鮮血の中で、次第に意識が薄れ、イスタンブールの街が霞んで見える。夕日の長い影が、ボスボラス海峡の山の斜面に広がり、薄闇が周りを包んで行く。ソコルは、その影の彼方に、ヴィシェグラードの近郊の風景を見た。まだ見ぬ橋が、瞼の奥に浮かんだ。その橋をゆっくりと渡る一人の少年の姿が、自分と重なり合い霧の中に消えて行った。

暗殺者は、オスマン帝国の騎馬隊の勇士として活躍した退役シパーヒーであった。彼は、ティマール保有者の一人であったが、中央政府の指名する徴税請負人によって、土地の用益権を失い困窮していた。暗殺の動機は、イエニチェリへの妬みと宮廷官僚への恨みであった。

「オスマン帝国興隆の功労者であるティマール保有者を蔑ろにする政策を実施し、イエニチェリ出身者を厚遇して、高官に据え、政治を壟断した」として、かねてからソコル大宰相を恨んでいた。暗殺者は、即刻逮捕され、処刑された。

ソコル前大宰相の死は、眩いばかりに輝いていたオスマン帝国の繁栄に、影を落すことになった。

トスンは、ヴィシェグラードの橋が完成した後、イスタンブールで数年間を過ごし、師のケマルと共に、幾つかの建造物を建てた。ケマルはトスンの建築家としての才能を高く評価し、自分の持つ全ての技術を伝え、帰らぬ人となった。葬儀は敬虔なイスラームの慣習に従い簡素に行われた。人間は一つの塵に過ぎず神のみが偉大であるとするイスラームの葬儀は、本来簡素なものである。埋葬は、翌日の朝に行われた。棺は、モスクの中庭にある石の台の上に置かれ、トスンがコーランの数節を読経した。ついで遺体を墓所に運び棺から出し、頭をメッカの方角に向けて葬った。ケマルが生前被っていたターバンの型を刻んだ石を墓所に立てた。

トスンは、ケマルの葬儀を終え、悲しみの残るイスタンブールを後にした。

バルカンの諸地方で、モスクや橋を建て、旅を続けていたトスンは、セルビアのベオグラードで、ソコル前大宰相の悲報を聞いた。死後三ヶ月たった冬の寒い日のことであった。イマーム（イスラム僧）の礼拝の声が、モスクから流れ、ムスリムたちがメッカに向って一斉に祈りを捧げている時である。

「去年おやめになったソコル大宰相様が殺されなすったらしい。ピラル・パシャ様との争いに敗れ、宮殿を追われたと聞いて心配してただ。善い宰相様だったが残念なことだ」ムスリムの洋服屋が呟いた。それを聞いたトスンは、礼拝を終えた後も、モスクに一人残った。イスタンブールに向かって揺拝を続けているうちに、涙がとめどなく流れ、嗚咽を押えることができなかった。長身で豊かな髭を蓄えた謹厳な顔に微笑を浮かべ、ヴィシェグラードの橋の竣工を労ってくれたありし日の面影が、がらんとしたモスクの壁の中から、ぼんやりと浮き出てきたように思えた。トスンは、傷心の想いの消えぬまま、モスクを出た。陽はいつしか傾き、冬の日差しを浴びたモスクは、ベオグラードの屋並に、長い影を落していた。建築技師として十年各地を巡った後、トスンはサラエボに定住し、三十年の歳月が流れた。

トスンは、四十年前のヴィシェグラードの想い出から醒め、窓に目を向けた。風は止んだようだ。対岸の喧騒も治まり、サラエボの街も静寂な闇に包まれている。ミリャツカ川のせせらぎだけが、闇の中に聞こえる。夜明けも近いようだ。薄ぼんやりとした頭で、部屋の中を眺め渡した。壁には、ナダの肖像画が掛っている。かつてヴィシェグラードの小屋の中で、ナダをモデルに、トスン自からが描いたものである。ムスリムのトスンは、肖像画を描くことを好まなかったが、ナダだけはどうしても描かずにはいられなかった。

「ナダはどうしているかな。ヴィシェグラードで可愛い孫に囲まれ静かな暮しをしていることだろう」トスンは、呟いた。イスタンブールで、トスンは、ナダに似た

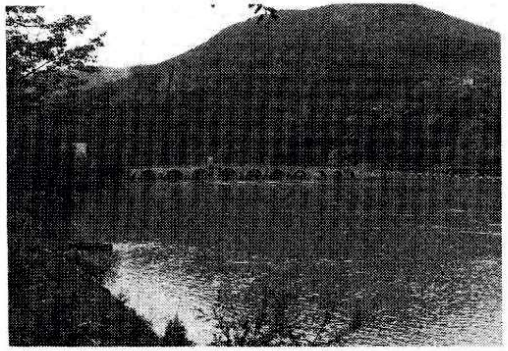
ブルガリア出身のキリスト教徒の女奴隷を妻にした。だがトスンの心は満たされなかった。妻との諍いを続けながら、五年の結婚生活を送った後、妻はイスタンブールで他界した。子供は無かった。それから今までずっと独身を続けてきた。

肖像画から視線を逸し、再度窓の外に目を向けた。白いものが舞い始めている。また長い冬が来る。トスンの混濁する意識の中に、雪を被って霞んで行くヴィシェグラードの町の景色が映った。アビダガの顔が雪の中に現われては消えて行く。ナダの呼ぶ声が微に聞こえたような気がした。

夜が明け雪が止んだ。窓から差し込む陽の光は、キラキラと輝き、眠っているようなトスンの穏かな顔を照らしていた。

（完）

この物語は、旧ユーゴスラビア連邦共和国のノーベル賞イヴォ・アンドリッチの「ドリナの橋」（松谷健二訳）の一部をもとに、作者の主観を交え、とりまとめたものである。



ドリナの橋（1984.5.5 撮影）

シナリオ〔大人の見るアニメーション映画の試み〕

龍化妖姫（五）

―周の幽王伝―

相原精次



67　物見楼

幽王　褒似よ。よく見るがよい。あの空高く昇ってゆくあの煙を。あれが烽火だ。あれがつぎからつぎへ山々を伝って、九国全土に事を知らせるのだ。あれを見て諸侯の兵たちは、この鎬京を守ろうとして、たちどころに馳せ参じるというわけだ。

褒似　王様、あの山にも、一筋煙が上がりました。

68　煙が上る様子（あたかも龍が空に昇るように）

幽王　見えるか、褒似よ。そうだ、ああして、つぎからつぎへと伝えられて行くのだ。近い国からは間もなく兵士がこの鎬京に到着するであろう。

褒似　王様、煙が見えます。遙か向こうの山にも、また一筋あがりました。まるで、龍が天に昇るようでございます。（褒似は目を輝かせその方を指さす）

幽王　（横から褒似の様子を見て）おお、褒似よ！　お前の顔が輝いた。そんなに嬉しいか。（褒似に頬をすり寄せる）そんなに嬉しいか。烽火はな、この鎬京を守るばかりでなく、これからは、お前をも守ることになるのだ。

69　野を駆けてくる兵士の姿

70　山を越えてくる兵士の姿

71　幽王の居室

虢石父　幽王様、続々と諸侯の兵士が鎬京の周辺に集まっ

ております。事態をいかが致しましょう。
幽王　うまく言って引き返させろ。それにしても虢石父よ、嬉しいではないか、褒姒が喜んでくれたのだ。ワシは褒姒の目があんなに輝くのを初めて見た。きれいな目をしておる。
虢石父　それはよろしゅうございました。
幽王　それはそうと、申侯義の始末をつける手はずはどのようになっておる。
虢石父　はっ、間もなく瀧に水を送る水路も完成します。その完成を見た上で民衆を不穏な行動に導いた廉により……
幽王　そうか、手抜かりなくやれよ。

72　鎬京の街中

民Ⅰ　戦ではないのだそうだ。
民Ⅱ　幽王が褒姒のために見せ物としてあげさせた煙だとか。
民Ⅲ　戯れで烽火を上げるようでは、いよいよ世も末になった。たかだか一人の女のために。
民Ⅰ　聞いたか？
民Ⅱ　何を？
民Ⅰ　褒姒というのは龍の化身だとか。
民Ⅱ　龍の化身？
民Ⅰ　そうだ、天の神が降ろしたもうた龍の化身だそうだ。
民Ⅲ　天の神の怒りに触れたということか。
民Ⅰ　幽王も、もはやおしまいだ。
民Ⅱ　この先、一体どうなるのだ。

73　西戎の集落・夕方の風景

広い草原地帯。天幕を張って移動している一族。あたりに夕闇が迫っている。

74　西戎の集落・夜の風景

かすかに明かりの漏れる天幕の外に一頭の馬が着く。

75　西戎の王の室内

宰相　王様、申侯義の使者がただいま着きました。
王　いよいよ動き出したか。確か、数日前に鎬京に急を知らせる烽火が上がったそうだが。それは何だったのだ。
宰相　その意味も、これから分かると思います。
王　よし、使者をここへ通せ。

宰相　はっ。（出て行く）

76　周の宰相執務室

虢石父　その後、水路の工事の進み具合いはどうなっておる。
家臣　はっ、どうも近頃、民たちがあまり事を熱心に進めないようで、あとわずかのところで滞っております。
虢石父　それはどういうことだ。申侯義はどうしておる。
家臣　工事の現場であまり姿を見なくなりました。
虢石父　この大事なときに。今、幽王はな、褒姒が笑顔を見せたと、大はしゃぎなのだ。ここに瀧の完成も見たら、それこそ大喜びだ。これを強力に進めることは、お前たちにとっても、どんなに重要な仕事か分かっておるだろう。何とか、早く事を進めさせろ。
家臣　ただ、申侯様がいないと民たちはなかなか働いてくれません。
虢石父　鞭で追い立ててでも、事を進めろ。すぐ行け！
家臣　ははッ。（出て行く）
虢石父　申侯め、何か気づきおったかな。

77　西戎の王の室内

申侯の使者控えている。王、手紙を読み終える。
王　三回目の烽火が我々にとっての合図というわけだな？
使者　はい、左様でございます。
王　既に一回あがっている。これから数えて二回目ということだな。
使者　はい、左様でございます。
王　申侯に確かに心得た、と伝えてくれ。
使者　ははッ。

78　褒姒の居室

幽王と褒姒、床の中。幽王は大きくなった褒姒の腹をさすっている。
褒姒　幽王様、烽火が天をついて昇る様子をまた見とうございます。
幽王　褒姒がそんなに気に入ったとあれば、よかろう。やって見せてやるぞ。

79　水路の工事現場

虢石父の部下　申侯様、民たちが事を早く進めるように、もっと言葉をかけて下さい。幽王様も一日も早い完成をと、首を長くして待っておいでです。

義　分かっておる。あとわずかで完成させると言っておけ。

民衆たち、せわしく水路の作業を続けている。

民Ⅰ　あッ！　烽火だ。

80　空に立ち上る煙

指さす方向に煙が上がっている。

81　水路の工事現場

民衆口々に叫ぶ。

民Ⅰ　今度こそ本物だぞ。戦だ。こんな作業はしていられネェ。家族を守れ！　戦だぞ！

義　皆のもの、あわてるな。戦ではない。この前と同じだ。幽王の戯れだ。

民Ⅱ　幽王様は何を考えておられます。

民Ⅲ　この工事だって王の迷いでやっていること。

民Ⅰ　俺たちは毎日生きるか死ぬかの間をさまよっているというのに。

申侯様、王への口添えをして下さっているはずでした。

それはどうなっていますか。

（民衆たち、口々に詰め寄る）

義　そのことだ。皆、静かに聞いてくれ。大事な事を話そう。

民Ⅰ　みんな、静かにしろ！　話を聞こう。

義　私は幽王様と次のようなことを確認し合おうと考えている。この水路が完成し、大瀧に水が落ちたとき、民たちのために穀倉を開けると。

（民衆一斉に歓声を上げる）

民Ⅱ　嘘だ、だまされるな。そんな夢のようなことがあるはずはない。

民Ⅲ　そうだ。あの幽王がそんなことを約束するはずがない。うまいことを言って、我々を喜ばせるだけだ。

（民衆一斉に「そうだ、嘘に決まっている」「今から穀倉を襲え」と叫ぶ。）

義　待ってくれ。私は嘘は言わない。私の命に代えて言おう。もし、この水路が完成してなお穀倉が開かないときは、この私の手で倉を開こう。私は必ず果たす。私を信じてくれ。

（民衆、なお罵声を浴びせる）

民Ⅰ　みんな、申侯様の言葉に嘘はないと、俺は感じた。もう一度申侯様を信じよう。あと数日で工事も完成する。わずかの辛抱だ。もし、嘘だと分かったときは、我々も立ち上がろう。どうだ、みんな。

民Ⅱ　よし、分かった。

民Ⅲ　俺も承知した。完成した日が限度だ。みんな、どうだ。

（一斉に「分かったぞ」の声。そして作業を始める）

82　王宮の望楼

幽王　（褒姒をいたわるようにして望楼に登る）褒姒よ。お前の見たいと言った烽火の煙が、再び天をさして上るぞ。よく見て見よ。

83　天に向かって昇る煙

84　王宮の望楼

褒姒　何と雄々しい姿でしょう。空の高みに、ほれ、あのように吸い込まれて行きます。なぜでしょうか、あの煙が私の心を慰めてくれます。

幽王　そんなに嬉しいか。（強く褒姒の肩を抱く）お腹の子供はどうだ？（腹に耳を当てる）

褒姒　確かに私の身体の中で、わが子は成長しております。間もなく、我が子が誕生するかと思うと、心がふるえます。

幽王　よしよし。身体をいたわり、元気な子供を産め。産まれてくる子は、きっと男児であろう。褒姒よ、ワシは、産まれてくる子に既に伯服という名を付けた。……嬉しいことだらけではないか。新たに王子が生まれる。そして、誕生を祝うかのように王宮の庭に、瀧の水が流れる。お前の喜びが同時に二つ重なるのだ。

85　諸侯の兵士たちの野を馳せる姿

86　諸侯の兵士たちの山を越える姿

87　王の居室

幽王　瀧にはいつ水が流れる？

虢石父　あと数日で完成します。

幽王　よし、間もなく褒姒が新しい王子を生む。産声と共に、庭に瀧の水が流れるように手はずを整えよ。そして、鎬京の街上げての祝宴だ。民たちにも宴を張らせろ。

虢石父　はい、承知しました。民はこぞって王子の誕生を祝うことと存じます。幽王万歳を叫ぶことでございましょう。

幽王　ところで虢石父、義の始末の手はずは？

虢石父　はい、その件、抜かりはございません。祝宴に

参加しないであろう義を謀反の廉で捕らえ、たちどころに処刑いたします。

幽王　二度目の烽火で参集する諸侯の兵士はどうする。

虢石父　はい、その点も抜かりなく、前回にならってうまく言いくるめ、それぞれの国に返す手はずも順調に進めております。

幽王　ワハハハハッ、よしよし、虢石父よ、祝宴まで事が順調に進んだときは、お前に特別な褒賞を取らせよう。いよいよお前も諸侯の一員だ。土地を与え、新たな国の建設をするがいい。

虢石父　ははッ、ありがたき幸せに存じます。

88　西戎の陣営

草原に陣を構えつつ、鎬京へ攻め込む機会を窺っている。

西戎の王　（兵士たちに向かって）既に二回目の烽火が上がった。この次の烽火が鎬京に攻め込む合図だ。訓練を兼ねながら東に進むぞ。

89　戦闘の訓練

訓練をしながら陣営は東に進む。

90　后の居室

義　怨麗、よく聞け。いよいよ機は熟したようだ。間もなく褒姒が子供を産むだろう。私は、そのことが逆に我々にとって瑞祥だと確信するようになった。

怨麗　褒姒に子供が産まれることが瑞祥ですか？

義　そうなのだ。褒姒は神龍の化身だ。神龍の出現こそ天の意志による新しい国の誕生の先触れなのだ。周王室が新たに生まれ直すのが今なのだよ。幽王は子供の誕生と共に我々を邪魔なものとして行動を起こすだろう。むしろそのときこそ我々の動くとき。

怨麗　どのような手はずで？

義　宮中に瀧が完成したとき、幽王は大々的に祝宴を張る計画らしい。祝宴に先だってもう一度烽火を上げさせるのだ。その烽火が合図だ。

怨麗　何が起きるのですか？

義　不満で我慢の出来なくなった鎬京の民や農民たちが一斉に反乱を起こすだろう。私も我が申の国の兵を用意している。

怨麗　父上様、それは無謀ではありませんか。周室の兵は強固です。

義　いいや、今の幽王にはそれを動かしきれるだけの力はない。しかも、もう西の戎はそこまで来ている。三

度目の烽火で、時を置かず、鎬京に攻め込む手はずだ。

怨麗　父上はもうそこまで計画されて……

義　そうだよ、十分すぎる用意をした。

怨麗　でも、もし三度目の烽火など上げたら、諸侯の兵士が馳せ参じるのではありませんか？

義　いいや、上げるに意味もない烽火に、諸侯は既に幽王を見限った。それに万一、駆けつけるどこかの兵があっても、既に事が終わっているはずだ。どこよりも早く来るのが我が申の国の兵と、西の戎の軍隊だ。

怨麗　父上の冷静な計画がよくわかりました。私は、どうしたらいいのでしょう。

義　お前と宜臼は万一の事を考えて、人目に付かぬように今から東の雒邑へ行け。そこは、周建国の初めに周公様がもう一つの都として開拓された周王室ゆかりの土地だ。新しい周王室の都にふさわしいところだ。

怨麗　それでは、父上の考えておられることは、

義　そうだ。この鎬京は廃都となり、新しい周室の都は雒邑となる。

新しい周王室の王は、幽王に代わって我が孫宜臼がつく。宜臼こそ生まれ変わった周王室の平王となるのだ。

怨麗　父上の計画に、改めて感服致しました。宜臼を無事雒邑へ連れて行き、即刻新しい都づくりを始めます。

義　よし、すぐにも、人目に付かぬように出発しろ。

怨麗　わかりました。父上も、くれぐれもご無事で。

91　幽王の居室

幽王は家臣から祝宴の手はずの説明を受けている。そこへ一人の侍女が飛び込んでくる。

侍女　幽王様、おめでとうございます。たった今、褒姒様が男児を出産されました。

幽王　確かに男児をだな？　でかした。褒姒、よくやった。新しい王子、伯服の誕生だ。

92　水路の工事現場

義　みんな、よく頑張ってくれた。いよいよ水門を開けて、王城の庭の瀧に水が落ちることになる。

民Ⅰ　過日の約束、穀倉を開けていただけますね？

義　幽王は今、褒姒に男児が生まれたということで心はそこになさそうだ。

民Ⅰ　それでは約束が違う。（民たち口々にわめきながら義に迫る）こうなったら、あなたのお命にかけて王城の倉を開ける、ということでした。そのお約束は、どうなりますか？

義　私は、命に代えてもその約束は守ると言った。それ

は実行する。

民Ｉ　それはいつでございますか？

義　実は、今ここに来て幽王の時代は終わろうとしている。天の下した龍の怒りに触れてな。

民Ｉ　天の下した龍？

義　そう、あの褒姒こそ、その化身なのだ。

民Ｉ　褒姒という女が龍の化身だとの噂は聞いておりましたが、それは本当のことだったのですね。

義　その事実がはっきりするときが来たようだ。いいか、間もなく虢石父は祝宴開始の合図として瀧に水を落とすよう我々に命じてくるだろう。瀧の水がドドドッと流れたとき、それこそが我々の合図と思え。そのとき、私は約束通り、命を懸けて城の穀倉の扉を開く。みんなは、そこからいいだけ、ものを持ち出せ。

ただし、幽王はこの動きにうろたえて、王室の兵を出すことだろう。みんなは、それに負けないだけの心意気と、対抗できる武器の用意も必要だ。

そして、その前に、体の弱い者、女や子供、これらは一日も早く東の雒邑に向かわせろ。雒邑にはみんなの望む平和で豊かな生活が待っている。

虢石父、忙しく庭にしつらえた酒宴の準備の指図をしている。

虢石父　（家臣たちに向かって）いいか、今から大事な話をする。これから言うことが予定通り成就したら、特別な褒賞があると思え。庭の瀧に水を落とす合図を出したそのとき、申侯義を引っ捕らえろ。義は水門の近くにいるはずだ。手抜かりなく事を行え！

（つづく）

祝出版

瀧澤中著

「日はまた昇る」

ぶんか社　九五〇円



霧に包まれていた光(6)

鍋屋次郎

喜作がシモンと清吉を大井川上流川根奥まで見送りに行っている間に、梅ヶ島街道の樵小屋（キリシタンとしての喜作の隠れ家）を駿府町奉行所に捜索されていたので、喜作はそこを離れて身延山久遠寺に学僧秀雲を訪ねていた。秀雲は過去に喜作の樵小屋を訪ね、バテレンの教えを聞くと共に、何とかバテレンそのものに会いたいという依頼をしていた。日蓮の教えを深く極めた秀雲は、更に仏法とは別の、日月や星を抱く天空、万物を萌え出す大地等の真理を探求する学僧であった。そのため日蓮宗の宗門世界のみでなく、同じ探求を志している天台宗の学僧慶覚とも交わりを持ち、二人は密かに、バテレンの持つ自然科学の知識とキリシタンの教理の探求の機会を探していた。

「喜作さん。遠州森町に天台の名刹蓮華寺があるのをご存じか」

の秀雲の質問に喜作は首を傾げていると

「そこは天長八年には時の住職慈覚師が一山三十六坊を建立し、やがて比叡山延暦寺第三世座主に就任された歴史のある名刹だ」

更に続けて

「そこの一坊に私と同じ探求をしている学僧慶覚がいる。慶覚と共に比叡山に上るので、そこにキリシタンの教理を説明できるバテレンを連れてきて欲しい。しかも我が国の言葉が相当使えるバテレンを」

喜作が驚いていると、構わずに続けて

「そして明日にでもここを立って慶覚の所に私の手紙を届けて返事を貰ってきて欲しい。今夜はここに泊まりなさい。食事は用意するから心配しないで宜しい」

と一方的に話が進み、喜作は夜遅くまでキリシタンの教えについて秀雲の質問に答えていたが、質問の中身が深く、返事が出来ないことも多く、喜作自身自分の勉強不足を痛感していた。

翌朝早く見延山久遠寺を後にした喜作はそれから三日後の夕刻、遠州森町の旅籠吉川の入り口に立った。

怪訝な表情の主留蔵に

「お宅については、京の都の清吉さんから聞いていた。今晩お世話になりたい」

と言うと、留蔵は喜作を離れに案内した。

「ところで蓮華寺は遠いですか。天台の名刹だそうですね」

と聞く喜作に、留蔵は

「はい。太田川を一里半か二里位下ると三島神社があります。そこから西に向かって歩くと山麓南面に赤い大門が見えます。その大門が蓮華寺山門の入り口になります」

頷いている喜作に留蔵は

「蓮華寺に何かご用ですか」

と聞くと、

「ご主人、折り入ってお願いがあるのですが、京の清吉さんの住まいはお分かりでしょうか。実は蓮華寺の学僧と共に日を改めて京に上ります。その時清吉さんをお訪ねしたいので」

ここまで話して、留蔵の表情に未だ警戒心が消えていないことを読みとった喜作は

「何もかもお話ししましょう。私は元小笠原様に仕えていたもので、今は樵の喜作と申します」

ここまで話すと、留蔵は清吉から聞いたことを思い出し、手を小さく左右に振って喜作の話を遮り

「旦那様、それ以上は仰らないでください。後ほど清吉さんの住まいを書いて持って参りましょう」

夕食が済んで一段落した頃、留蔵は離れの喜作の所に来て

「旦那様、旦那様は蓮華寺はお初めてのご様子なので宜しければお寺の由来を、と思ってお持ち致しました」

と、既に表紙の文字もかすれている古い書き付けを差し出した。

喜作が目を通すと次のように書かれている。

「当山は慶雲元年、文武天皇の勅願により行基菩薩が開創したもので、永禄年間に武田の兵乱により一堂三十六坊が消失し、今の建物は慶長八年に掛川城主山内候等の寄進により再興されたもので、そのずっと以前嘉応元年には比叡山の高僧皇円阿闍梨を招来し……」

そこまで目を通した喜作は

「これは鄙には珍しい名刹だ。さぞ立派な学僧がおられるでしょう」

「はい、天台の総本山比叡山延暦寺のお若い学僧方が修行に見えておられます。格が高いので、近在でも余程のお家でなければ檀家にはなれません」

との留蔵の返事に喜作は頷いていると、留蔵は別の紙

を出し

「旦那様、清吉さんは京の伏見で古着屋を営んでおります。伏見でお尋ねになれば直ぐわかるそうです。お兄さまが伏見で大きな塩問屋を商っていて、屋号は播州屋さんだそうです」

と一枚の紙を喜作に渡した。喜作が目を通していると

「旦那様、明日の夜もお泊まりになりますか」

と留蔵の問に

「そうだね。明日の夜もお世話になりましょう。それから、改めて身延山久遠寺の学僧とお世話になりたいと思いますが、その時も宜しくお願いします」

の喜作の言葉に、嬉しそうに

「有り難うございます。お越しをお待ち申し上げております」

と言って、暫く雑談の後出ていった。

翌晩のこと、留蔵は息子亀松を喜作のお供として京に連れて行って欲しいと頼み込んだ。喜作は亀松を連れてこさせた上で

「今回の旅は自分一人の旅ではない。ご立派な学僧のお供で行くことになっている。その方々のお許しが必要なので良くお頼みしてみよう。旅立ちは春の彼岸過ぎになるだろう。どこのお寺さんでも彼岸は忙しいだろうから」

春の彼岸が過ぎると寺の行事が一段落する。秀雲と喜作が旅籠吉川を訪れたのは、春の彼岸を十日ばかり過ぎたときであった。夜になって蓮華寺の学僧慶覚が合流した。

若い学僧達がキリシタンに深い興味を持ったのは、仏教が現世の権力と手を繋ぎ、彼らが理解している仏法の真理がこの世で生かされていない不満を抱いており、反面、キリシタンバテレンが弱者の側に立って権力を恐れない力を持っていることと、我が国の歴史の中で、空海が遣唐使船に乗って唐に渡ったとき、シルクロードを通って唐の都に入ったキリスト教・・・景教と出会ったことが記録に残されていたことである。空海が、異教の国で何故進んで景教と接触を持ったのか、そこには我々の知らない真理が隠されているのではないか、と言うことであった。（今日、空海と景教との関係を記念して、高野山奥の院に中国での景教と交流記念碑の複製が建立されている）

その夜は、喜作が彼らの質問に答えていた。

「キリシタンの神は天地万物の創造主であって、その神様のご計画によってこの天地と人間が作られた。そして、全ての人は神様の教えにそって悔い改めれば神様の御許の天国・・・パライソ・・に行ける」

の説明に秀雲と慶覚が議論をしていた。
「天地の始めとは何か。それでは天も地もないときもあったのか。そのようなことは考えたこともない」
「それならば天地の始まる前に、キリシタンの神はどこにいたのか」
「仏教はこの天地の中で西方浄土において、悟りの境地から人間の持つべき真理が追究され広められたものである」
「バテレンは親兄弟とも別れて、命を惜しむことなく万里の波濤を乗り越えてキリシタンの布教につとめているが、その力はキリシタン信仰のどこから出てくるものなのか」
等の質疑が深更まで続いていた。

翌朝、旅籠吉川の主留蔵の願いによって、その息子亀松が一行の供をすることを許された。彦次も行きたがったが彼の家庭が許さなかった。

道中、慶覚が持っている遠州森町、天台宗八形山蓮華寺の署名と捺印がある「この僧は天台宗総本山比叡山延暦寺に学ぶために赴く学僧である」の書状がものを言って、旅は極めて順調であった。

都に入ってから、伏見と距離的に近い東山に旅籠を見つけ、そこを拠点として、喜作が亀松を連れて清吉を訪ね、バテレンを延暦寺に同道することを頼みに行った。一方では慶覚が天台宗学僧沿海との連絡を取るために延暦寺に上っていった。その間、秀雲は一人旅籠で待っていた。

慶覚の帰りは早く、沿海は
「一日も早くキリシタンバテレンを伴って彼の坊に来ることを待っている。食事と寝具は十分に用意する。逗留は何日間でも良い。共に研究しよう」
と言うことであった。

ところが五日を過ぎても喜作からの連絡はない。七日目に亀松一人が戻ってきて
「喜作さんは清吉さんの屋根裏に潜んでいるシモン様と会っている。シモン様は出来ればオルチーノ神父もご一緒にお連れしたい、と言って堺まで使いを出している」
とのことであった。

待つこと久しく、それから十日の後、夜陰に紛れて喜作と亀松が、清吉、シモン、オルチーノ神父の三人を伴って旅籠に戻ってきた。
東山の旅籠から延暦寺までは夕方出れば朝には着く距離である。その日は簡単な挨拶のみで就寝し、翌朝早く

から秀雲と慶覚が、オルチーノ、シモンに対して延暦寺での三人の学僧による天地万物の自然摂理とキリシタン教理学究についての協力を依頼した。
「決して争いをすることが目的ではなく、自分達仏僧は、天地万物の自然摂理に対する貴方方の知識と、キリシタン信仰教理を教えていただきたいことが目的である」
ことを丁寧に説明して、それには喜作と清吉も同席して、双方が理解できない言葉の通訳をするよう依頼した。
二人の学僧の真摯な依頼を汲み取って、オルチーノもシモンも快諾した。
その夜、一行は延暦寺の山中にある沿海の坊を目指して出発した。亀松も雑用のための小者として同道を許された。

そのころ、仏僧とバテレンの、自然科学と神学学究のための交流とは正反対に、京都所司代内部では、キリシタン弾圧のための準備が着々となされていた。

彼らが延暦寺に向かった三日の後、堺奉行の配下が丸大の店先に立った。主桐兵衛は奥座敷にいたが、番頭の知らせで丁重に出迎え奥に通した。
酒肴のもてなしも終わった頃、囁くように
「ご注意あれ。三日後にキリシタン匿いの疑いでお店に探索が入る。伏見の播州屋とその弟の古着屋清吉の三軒が同時だ。伏見は伏見奉行所が探索する」
と呟いた後、お礼の金子を懐にして帰っていった。

桐兵衛は直ちに伏見の播州屋にその旨をしたためた手紙をお志乃に早駕籠で持たせた。播州屋徳右衛門は清吉の女房と息子を呼び、それを伝え、証拠になるような物は明日中に一切処分して、明後日は朝からいつもの通り営業することを命じた。

オルチーノもシモンも幸い大切な物は全て持って行ったので、丸大ではオルチーノの身辺の雑物はまとめて、庭の二頭の土佐犬の犬小屋の下に穴を掘って埋め、その上に元通り犬小屋を乗せた。使用人も番頭と機転の利くお志乃だけを残し、後は休ませた。
播州屋では駿府や江戸での聞き書きはその都度燃していた。念には念を入れて徳右衛門の文箱、文棚を中心に仏壇引き出しの奥まで整理した。
一方、清吉の女房と息子は秋葉山火伏せのお札を正面に掲げ、シモンの下着の洗濯物などは、捨てるばかりの古着の中に混ぜて、シモンが寝起きしていた屋根裏部屋も商売用古着の置き場に切り替え万全を期した。

丸大の桐兵衛が聞いたとおり三日後の朝、六人の奉行所の役人が踏み込んできた。桐兵衛は

「何事でございますか」
と恐る恐る聞くと、主だった役人が
「お前が主桐兵衛か。訴えによってキリシタンバテレン隠匿の容疑で家を探索する。神妙にいたせ。家中の者、下男下女は全てこれに出せ」
「は、は。本日は暇を取らせている者が多く、ただ今当家にいる者は少のうございます。直ちに召し連れます」
と言って番頭にお志乃を呼ばせ、自分では女房を呼び、全員土間に平伏した。

昼頃まで全ての部屋、離れをくまなく調べたが、何もキリシタン隠匿の証拠が出ない。桐兵衛は奥座敷に呼ばれ役人から詰問を受けるが、平伏したまま、どこまでも
「全く身に覚えがございません」
で押し通した。
やがて妻女が
「あり合わせの物でございますが」
と言って焼き魚と香の物を添えただけの酒肴の用意をした。

役人一同は酒肴を平らげた後、頭だった役人が
「桐兵衛、邪魔したな。そちは何か恨みでも買った覚えはないか」
と切り出した。桐兵衛は平伏して
「恨みを買うなど身に覚えは全くございません。しかし我が身の不徳と致すところ、お役人様のお手を煩わせましたことを深くお詫び申しあげます」
「そうか、そちならばさもあろう。邪魔したな」
と言って立ち上がりながら
「主、裏の盆栽はよく手入れがしてあるな。もう一度見せてくれ」
と言って裏庭を見ようと奥座敷の方に歩き出した。
「お目に止まって恐悦至極でございます」
と言いながらその役人にすり寄り、奥座敷で二人だけになっていることを見定めて、相応の金子を袖口から投げ入れた。その重みを感じた役人は庭の方を見ながら、再度大きな声で
「邪魔したな」
と言って店先の方に向かって歩き出した。
一方、播州屋は一通りの探索で何事もなく終わったが、清吉の家では妻女が、
「何故清吉がいないのか」
を息子共々責められた。
「商用に出たのであればどこへ行ったのか。お前達が分からない筈はない。神妙に答えろ」
と厳しく問い詰められ、やがて息子と目を合わせて頷きあった妻女は
「申し上げます。主は何を思ったのか、誰にも言うな、と言っただけで、比叡山延暦寺の一坊に籠もりに行きました。十日は帰らない。何があっても俺の修行の邪魔をするな、と言って出て行きました。三日前でございます」
すると主だった役人は
「お前達、でたらめを言うな。本人がキリシタンの疑いがあるのに、そんなに簡単に宗旨を変えるのか。キリシタンと歩いていたのを見られているのだ。神妙に本当の事を言え」
「本当でございます。延暦寺の学僧沿海様に天台の教えを導いていただく、と言って出て行きました」
そこまで妻女が言うと、役人は驚くように
「今なんと言った。学僧の沿海様だと。沿海様は今の天台座主の信頼が最も厚い名僧である。清吉などが近づける相手ではない」
それを聞いた息子が
「お役人様、これをご覧下さい。このように私が見ても素晴らしく、墨痕鮮やかに沿海様の坊への行き道が書かれています。どなたが書いたかは知りませんが、父が、俺は見なくても分かる、と言って置いていったものでございます」
とその紙を役人に差し出した。役人は暫くそれを眺めて
「そうか、これはもしかすると沿海様の直筆かもしれない。左下に『沿』と印がある。沿海様の所へ行ったか。戻ってきたらその報告を兼ねて奉行所に出頭するように伝えよ。邪魔したな」
と言って部下を引き連れて戻って行った。

その二日の後、鬼嵐坊は嘘の垂れ込みをした廉で伏見奉行所に引き立てられ、何を言っても聞いてもらえず、お仕置きを受け顔面黒痣だらけになって
「あの野郎、清吉も播州屋も、丸大もこのまま生かしておくものか」
とぶつぶつ呟きながら町を歩いていた。
奉行所が早急に結論を出したこの裏には、堺の丸大の陰の力が大きかった。

三軒が探索を受けてから十日の後、清吉は喜作と亀松を伴って帰宅した。一部始終を聞いた清吉は播州屋を訪れ、対策を練って奉行所に出頭した。
沿海、秀雲、慶覚などの名僧がオルチーノやシモンと議論していた内容は少ししか理解は出来なかったが、幸い、門前の小僧よろしく仏法教埋の専門表現が少しばかり頭に残っていたので、奉行所での
「何を悟ってきたか」
の質問に、役人が舌を巻く程の仏法専門用語で答え、無事戻ってきた。

オルチーノ神父とシモンは、僧沿海の配慮により、比叡山延暦寺の寺紋の入った二丁の駕籠に乗って、日中堂々と堺の丸大に戻って行った。

その直後、慶長十四年（一六一四）春から初夏にかけて、京都所司代板倉重勝は幕命により伏見・大阪・堺の三奉行に対して

「キリシタンの名簿を再調査し、バテレンを国外に追放し、国内のキリシタンは全て棄教させ、棄教しないものは死罪とせよ。なお天主堂は全て取り壊せ」

と命じた。

当時、京都には七千人のキリシタンがいた。またイエズス会、フランシスコ会のバテレンも十五人はいた。

この命により、従来以上に厳しいキリシタン探索が行われ、親戚縁者の棄教の勧めを聞き入れないキリシタン信徒達は深夜密かに山中に逃れて行った。

伏見界隈でも、キリシタン達が引き立てられてゆく姿が毎夜のように見られた。近隣の商家は重い板戸を締め切って洩れて来る灯り一つなく、闇の中の伏見は死の町を思わせるような静けさであった。

このような中でも、年頃の娘を持ったキリシタン家庭では、娘達に食料を持たせて、かねてバテレンから教えられていた山科山中の一軒の農家を目指して落ち延びさせていた。そこにはシモンが待っていた。

この間に伏見奉行所管内でも男女五十人のキリシタンが捕縛され引き立てられていった。折檻しても棄教しない婦人十五名を丸裸にして一人一人俵に詰め、手足と首だけを俵から出して、見せしめのために市中を引き回した。その途中縄と俵が切れて文字通り全裸で引き回される婦人もあった。

引き回した後、奉行所の狭い牢の中にすし詰め状態に監禁され横になることも出来なかったが、互いに励まし合って朝まで祈り続けていた。

朝になってごく少量の水と粟粥を与えられた後、牢から全員出るように命ぜられたが、内五人は食べることも立つことも出来ず、そのまま牢内に放置された。奉行所の中庭に引き出された十人の婦人達は、役人から

「棄教する者には今直ぐそれぞれの着物を与え自宅に戻す。棄教しない者は市中の無頼の徒に引き渡す。そのような下賤な者どもの慰み者になるか、それとも家に帰るか。お前達次第だ。今少し時間を与える。よく考えろ。お前達の夫も兄弟も、男は全員棄教した」

との言葉に、一人の婦人は

「嘘です。夫が棄教する訳はございません。例え身体は汚されても心は美しいままゼウス様の御許に参りましょう」

と叫んだ。と同時に麻縄の固い鞭が肩から胸に掛けて数回飛び、その婦人はその場に倒れ起きあがることは出来なかった。

奉行所の庭の片隅では、昨夜引き立てられてきた二組の夫婦が、立木に結わえられたままこの様子を眺めさせられている。

暫くすると、立たされていた中の一人が哀願するような視線を役人に送った。役人が近寄って来て

「そうか、転ぶか。こちらに来い」

と言って、抱きかかえるようにして連れ出した。それを見ていた他の婦人達の表情は固かった。

一時間くらいの間に三人が連れ出されて行った。残った婦人達は連日の呵責に立っていることが出来ず座り込んだが、役人はそれでも無理矢理立たせようとした。何度立たせても倒れ込んでしまって起き上がれない。仕方がないので這わせて牢に戻した。

翌朝、その牢から七人の遺体が運び出され、裏山に埋められた。

掘った穴に、遺体を無造作に投げ込んでいる人夫達を遠くから見ていた男が、人夫達が引き上げてから、どこからか大きな石を抱えて来て、今埋められた遺体の土の上に置き、跪いて祈っていた。

比叡山延暦寺から戻った喜作は、堺の丸大の使用人として丸大に住込み、オルチーノ神父とシモンの使いをしながら、京都伏見、大阪、堺の三奉行所によるキリシタン弾圧の状況を二人に報告していた。

オルチーノ神父はイエズス会から

「隠れることの出来る宣教師は、隠れて信徒の動向を見守り、励まし祈り続けて欲しい。そして避難する信徒を助けなさい」

との要請を受けシモンと共に国外退去はしないこととしていたが、厳しい摘発の状況を耳にする度にじっとしていることが出来ず、シモンは夜陰に紛れて、市中のキリシタンの唯一の落ち延び先である山科山中の農家に行き、家族と別れて落ち延びて来るキリシタン達を励ましていた。

喜作は清吉に連絡する用件があったので昨夜伏見に着いたところ、キリシタン婦人達の市中引き回しと奉行所内での厳しい取り調べの状況を噂で聞き、清吉を訪ねる前に裏山に登り、奉行所の裏口からの出入りの様子を見ていた所、朝になって死体の運び出し目撃していた。

祈り終えた喜作は、清吉の家を目指して歩き出した。ところが見知らない男が喜作をつけているのを感じ、開け放してある農家の納屋を見つけ、その中に隠れた。男は納屋の前でキョロキョロして喜作を捜している。納屋の中にあった天秤棒を手にした喜作が外に出ると、その男は

「お前もキリシタンか。奉行所までついてこい」

と言いながら喜作の胸ぐらを摑もうとした。その男の顔中に殴られたような黒い痣が出来ている。咄嗟に体を躱わし二～三歩さがった喜作は無言のまま天秤棒でその男の脚を払った。向こう脛をしたたか打たれた男は立ち上がることが出来ない。向こう脛を抱えたまま痛みをこらえ座り込んでいる。

喜作はそのまま振り返ることもなく清吉の家に向かった。

清吉の家では、女房お春と息子が、清吉に対してキリシタンと関係するのを止めるよう、毎晩のように清吉に迫っていた。

従って喜作が訪ねてもお春と息子は挨拶もしない。むしろ早く帰ってくれと言わんばかりの態度である。

屋根裏部屋に喜作を伴った清吉は

「喜作さん、キリシタンはどうしてこんなに激しく弾圧されなければならないんでしょうか。何も悪いことはしていないし、シモン様でも喜作さんでも立派なお人だ。だけど、キリシタンの神様を仏教やお上が駄目というなら、そのような中にわざわざキリシタンの神様を持ち込むことはないと思います。喜作さんにはいろいろと教えていただきましたが、キリシタンの神様が原因でこんなに大勢の人が苦しめられ、殺されるのを見ていると、人間を救うための神様であるとは信じられなくなりました」

黙って清吉を見つめている喜作に、続けて

「キリシタンが入ってこなければ、キリシタンで苦しむ人達はいなかったのです。この問題については沿海様達の前でもオルチーノ様もシモン様も言葉はなかった。また一方では、お上が仏教や現政治体制を守るために、一つも悪いことをしていないキリシタンを弾圧していることも確かです。これについては名僧達も反論はなかった」

少しの間無言が続いた後、大きくため息をした清吉は

「喜作さん、キリシタンの神様に祈って毎日を過ごし、ゼウスの教えを学び、貴方と一緒に過ごしていたときは、本当に毎日が清々しかった。だけど、ゼウスの教えは権力を握っている人達には受け入れられないと思います。キリシタンの神様は、この弾圧と迫害に苦しむ人達を本当にあわれと思っているのでしょうか。私にはそう思えなくなりました」

二人の沈黙が続いた。喜作はここまでの清吉の言葉に、清吉なりに何日も何日も苦しんだ結果の言葉と受け止めて

「清吉さん、キリシタンに対する今の弾圧は、貴方の言うとおり現在の権力者の権力保持のため以外にはないと思う。しかし、ね、考えてご覧。この世の中で権力や金を持っていない人達の虐げられている生活。そのような人達には生きている世界そのものが地獄だ。いくら働いても搾取があるだけで希望がない。キリシタンの教えは神様の前では全ての人が平等であり、そして信ずることによってこの世で平和に過ごし、この世での苦しいことも、流す涙も、ゼウス様によって拭っていただけるパライソで来世を生きることを仰ぎ見て生活している。現世に希望を持てない人々がそこに希望を持って、優しく正しく慎ましく生きていこうというのが、どうして迫害されなければいけないのだろうか。例え迫害されてもパライソの望みを捨てない。ここに迫害に耐える強さがある。清吉さん、迷ってはいけない。どこまでもこの教えを広く伝えていかなければ。それが多くの人々を救うことになる」

喜作がここまで言うと、清吉は遮るように

「喜作さん、喜作さんの言うことはキリシタンを信仰する人達の間ではその通りと思います。だけど今は駄目です。町中を見てください。毎日のように、老幼男女の区別なくキリシタンが捕らわれて行くではありませんか。権力者その者がキリシタンに帰依しなければキリシタンの時代は来ないと思います。このような中では、沿海様や名僧方が言うように、大人しく仏法に言う来世を信じて生きて行くことも立派なことだと思います」

暫くして清吉は言い難そうに横を向いて

「今夜ここにお泊めしたいけれど女房や息子の手前出来ません。シモン様は山科山中にいると聞いています。天主堂に来ていた主だった方々や、若い娘さん達も何人か逃げてきている筈です。今日はこれでお帰り願えないでしょうか」

清吉も、お春も、息子も誰も見送りのない清吉の家の裏木戸から、喜作は用心深く辺りを見回して夜の闇の中に消えた。

三日後の朝早く見回りのために山科山中の隠れ家の外に出た喜作は、一つの黒い陰が動くのを見た。辺りは物音一つしない。静寂そのものだ。黒い陰が動いて行った方向に目を凝らして見つめてみたが、鬱蒼と茂った林のみで、動く者は何一つ見えない。

喜作は林に向かって歩き出した。朝の冷気が身を引き締める。辺りは白みかかって、林の姿もはっきりしだした。しかし、何も気配は感じられない。

突然、林の右側から鳥が数羽飛び立った。喜作は全体を見渡せる左側の丘に登り暫く林を眺めた。

やがて山伏姿の男が片足を引きずりながら林の右側から出て、隠れ家の農家の入り口に向かって歩き始めた。喜作には気が付いていない。

喜作は足音を忍ばせて男の後ろに近づくと、その気配で男は振り返った。喜作と目が合うと

「やはり貴様か。これで証拠は握った」

といい終った男は、その瞬間、飛び掛かった喜作にねじ伏せられていた。

右手をねじ上げたまま馬小屋に連れて行き、柱に縛り付けてシモンを呼びに行った。

シモンは男を一目見て

「鬼嵐坊だ！」

と言って、喜作に

「もしかすると奉行所には、この場所がわかっているかも知れない」

と言ってから、鬼嵐坊との経緯をかいつまんで話した。

農家の主人伝吉を中心に、シモン、喜作、それと伏見天主堂の熱心な信徒数名が、ここから逃げるか、留まるか、どうするかを話し合っていた。やがて伝吉が

「シモン様、もう逃げるのはやめましょう。どこも行く所はありません。私ども一家も皆さんとご一緒にパライソに参りましょう」

というと、シモンは大きく頷き、祈り始めた。伏見の町家の娘六人が、シモンの祈りが終わったときは後ろに立っていた。

鬼嵐坊は馬小屋で縛り付けられたまま

「殺せ、早く殺せ」

と喚いている。キリシタンが人を殺さないことを承知の上である。

朝食の後、一同は捕り方が来ても一切抵抗することなく捕らわれる事を申し合わせ、まだ十代前半の娘達にも覚悟をさせた。

今の時間で正午過ぎ、伏見奉行の配下三十人がやってきて無抵抗の全員を捕縛、農家の庭先で縛られている喜作に対して、鬼嵐坊は容赦なく頭を打ち、蹴り飛ばし、唾をかけた。それを見ていたシモンは

「喜作さん、ゼスズ・キリストも捕らわれた時は貴方と同じように打たれ、着物を剝がされ、唾をかけられ、生身を釘で木の十字架に打ち付けられ、そして天に昇りました」

と声をかけると、額から幾筋かの血が流れている顔を上げて、にっこりしながら

「シモン様、パライソへご一緒に」

と答えたとき、また激しく顔を蹴り上げられた。

伏見までの道中、後ろ手に両手を縛られ、腰に縄をかけられ、裸足で引き立てられている娘達の着物の胸元も裾も大きくはだけていた。鬼嵐坊は助平根性丸出しで、捕り方の役人に代わってその娘達を連行していた。

翌日、伏見では朝早くから多くの町民が奉行所の裏側の丘に登り、山科から引き立てられてきたキリシタンをひと目見ようとしていた。

その中に清吉もいた。一旦遠州森町に帰って、再び喜作の手足となりたいと京に出て、清吉を訪ねてきた亀松もいた。

清吉の手には、山科にいた時に書いたシモンと喜作からの清吉宛の書状が握り締められている。

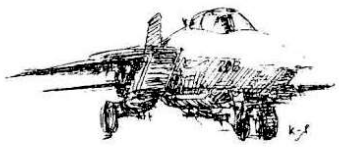
「清吉さん、今朝の山科は濃い霧が立ち込めています。貴方が心のうちではキリシタンを否定していないことは私達には分かっています。幕府も、殿様も、仏僧も、今キリシタンがいては邪魔なのです。自分達の立場が無くなってしまうのです。今のこの国の政治と社会構造が成り立たないのです。だけど、ゼウスの教え、キリシタンの教えはこの世で生きる人間にとって光です。この意味は貴方には良くお分かりですよね。貴方とはこのことで何日も議論をし尽くして、そして祈り求めましたよね。

今は、社会のいろんな霧に・・・・今立ち込めているような濃い霧に・・・・包まれてしまって、人々にその光は見えないのです。やがて、多くの人にその光が見える時がやってくるでしょう。お先にパライソで待っています。一人静かに祈る清吉さんでありますように。シモン・喜作」

（完）

体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（九）

千坂精一



一夜明けて

深夜に叩き起こされて、征きて還れぬ十死零生の神風特別攻撃隊員に選抜された一三名は、敵機動部隊を発見次第払暁を待って出撃という慌ただしい緊迫感のなかで、寝台（ベッド）に横臥したものの、眠れるはずはなかった。

気持の整理がつかず、輾転反側する隊員たちのなかで、関大尉の心がもっとも揺れていたのではないだろうか。

というのは、前任地の台南航空隊で訓練生のなかから人間爆弾『桜花』の搭乗員を選抜することになったとき、高橋司令は武道場に全員集合させたなかから親一人、子一人、長男、妻子ある者を対象外として退場させた。

玉井副長から特攻隊の編成を聴かされたとき、関は、（俺は親一人、子一人、長男で妻帯者だから除外される）咄嗟にそう思っただろうところへ指揮官を命ぜられたのだから、衝撃（ショック）で眼が眩んだとしても無理はなかった。

それぞれの苦悩を他所に、刻（とき）は容赦なく過ぎていった。

翌二十日未明、隊員たちは出撃準備を整えて宿舎で待機（スタンバイ）したが、発進した偵察機が低く垂れ籠めた雨雲に遮られて、敵機動部隊を発見するにはいたらなかった。

朝食をすませて寛いでいるところへ、大西長官の訓示があるということで、二〇一空本部に集合させられた。

前庭に全員整列すると、玉井副長が大西長官を促した。

台上に立った長官は、蒼褪めた顔で重い口を開いた。

「日本は、いままさに未曾有の危機である。この危機を救い得る者は、大臣でも、大将でも、軍令部総長でもない。もちろん、自分のような長官でもない。それは、諸子の如き純真にして気力に満ちた若い人々のみである。したがって、自分は一億国民にかわってみなにお願いする。どうか、成功を祈る」

命令形ではなく、懇願調の大西長官は、声だけではなく、躰も小刻みに震わせていた。

「みなはすでに神である。神であるからなんの欲望もないであろう。が、もしあるとすれば、それは自分の体当たりが無駄ではなかったかどうか、それを知りたいことであろう。しかし、みなは永い眠りに就くのであるから、残念ながらそれを知ることは出来ないし、われわれもその結果をみなに知らせることは出来ない。だが、自分はみなの努力を最後まで見届けて、かならず上聞に達するようにするから、安心して征ってくれ」

大西長官は、いつか涙ぐみ、

「しっかり頼む」

そう結んで訓示を終えると、隊員たちに近づき、関大尉以下一人一人と握手を交わして武運を祈った。

大西長官はこの訓示のなかで、隊員たちが希（のぞ）みもしないのに、勝手に「神である」と煽（おだ）て上げて神格化した。

『神』とは人間を超越した存在であり、人々が畏敬し、信仰の対象とするものであることは言うまでもない。

ことに、この時代の『国家神道』における『神』とは、国民全体が崇（あが）め祀（まつ）る絶対的なものであった。

つまり、特攻隊員たちを指して、

「みなは、すでに神である」

とすることは、生きながらにして天界へ送られ、再び人間社会へは戻れぬという宣告であって、征きて還れぬ特攻出撃を正当化しようとする証しにほかならなかった。

大西長官の訓示のあと、隊員たちはマバラカット飛行場で待機することになり、関指揮官の敷島隊と大和隊は西飛行場、朝日隊と山桜隊は東飛行場にと分散した。

この日は待機だけで、飛行作業も敵襲もなかったので、昨夜からの緊迫が嘘のような平穏な一日になった。

前線基地といっても四六時中敵襲があったり、出撃を繰り返したりしているわけではなかったから、谷間の静謐のあいだは張り詰めていたものが弛（ゆる）んで暢（の）んびりする。

この日の午後、そんな寛いでいる隊員たちの知らぬところで、一時緊張が奔（はし）った。

一五〇〇ごろ、二〇一空司令部に偵察機から、

「サマール島東方海上に、敵機動部隊発見」

の報告が入った。

猪口先任参謀が、

「爆装零戦の航続距離ぎりぎりですが、出撃させますか」

逸る心を抑え切れず、大西長官に決断を迫ったが、長官は、

「必死の体当たり攻撃をさせるのだから、確実性がなければ、徒や疎かには扱えないよ」

そう撥ね付けて、断念させた。

大西長官は、みずからの意志で編成させた神風特別攻撃隊の初出撃を見送ろうとして、マバラカットに留まっていたのであるが、標的はまだ近海に現れないと判断されたので、いったんマニラの司令部へ戻ることにした。

訣別の水盃

下痢が止まらぬ関大尉は、副島軍医長に注射を打ってもらいながら、敷島、大和隊員が待機している西飛行場北側崖下のバンバン川の河原の天幕の中で休養していた。

そこへ、玉井副長と猪口先任参謀がやってきたので、みなで河原へ出て車座になり、談笑していたら、こんどは、大西長官が門司副官を伴ってひょっこり現れた。

甲飛一〇期生たちは、大西長官から気さくに声をかけられ、出身地や家族、好物などを尋ねられて羞じらっていたというから、まだ純真な若者たちであったのだ。

半時間ほどして、車座から立ち上がった大西長官は、門司副官の腰の水筒に眼を遣り、水があるか質した。

隊員と訣別の水盃を交わそうとしていることを察した玉井副長は、バンバン川を背にして七人を整列させた。

全員飛行帽は被っていたが、服装は区々で、関、山下、宮川は飛行服、中野、谷、塩田は防暑服だった。

門司副官が大西長官、猪口先任参謀、玉井副長の順に水筒の水を注ぎおわると、玉井副長がそのあとを受けて、関大尉以下の隊員たちと一人ずつ水盃を交わした。

この場面は報道映画になって内地で放映されたが、戦後に発行された雑誌や書籍のなかでもたびたび紹介されたからご存知のかたも多いだろうが、背丈に余る芒の叢を背景にして、左から関指揮官、中野、山下、谷、塩田、宮川の各隊員が横一列に並んでいるところである。

右端の宮川一飛曹の姿が半分切れてしまっているので、その右にいるはずの中瀬一飛曹が写っていない。

隊員一人一人に水筒の水を注ぐ玉井副長の眼に涙が泛び、大西長官はその様子を微動だにせず凝視めていた。

出陣の儀式が終わると、大西長官はあらためて七人の前に立ち、挙手の礼をもって訣別の挨拶をした。

門司副官の回想によると、大西長官はマニラに戻る一時間余りの車中、ずっと沈黙したままであったという。

征きて還れぬ十死零生を命じた若者たちと会って、その撥溂とした声や漲る血潮の温もりに接しては、平静でいられるはずがなく、感傷に浸っていたのであろう。

いかに剛毅な長官といえども、おなじ人の子であるからには、思いはおなじはずである。

決行まえに隊員増強

この日の昼下がり、二〇一空司令部はまだ特攻隊の編成を知らぬ搭乗員たちを、全員西飛行場に集合させた。

山本司令は、骨折した左足を松葉杖で支えて退院すると、一航艦司令長官発令の神風特別攻撃隊編成について、

「現有兵力をもって特別攻撃隊を編成し、なるべく十月二十五日までに比島東方海面の敵機動部隊を殲滅すべし」

のあとにつづく、

「司令は、今後の増員兵力をもってする特別攻撃隊の編成を、あらかじめ準備すべし」

は、大西長官が四隊に留まらず、さらに編成を拡大する方針であることを示したものであり、そのためには玉井副長の選抜した甲飛一〇期生だけではとても足りず、全隊員から特別攻撃隊志願を募ることにしたのだった。

『特別』というからにはあくまで例外のはずなのに、この異常戦法は決行まえからはやくも後続隊編成の動きが出てきて、歯止めがきかなくなる兆しをみせはじめた。

一航艦の猪口先任参謀、マニラの病院から帰隊した中島飛行長、それに玉井副長、指宿、横山飛行隊長が待つ滑走路の隅に、全飛行隊搭乗員が続々と集まってきた。

以前関に殴られたことのあるS三〇一飛行隊分隊士久納好孚中尉は、整列する搭乗員たちの前を所在なげに行ったりきたりしていたが、全員の集合を確認すると中島飛行長に申告して特別攻撃隊編成の説明がはじまった。

「戦雲急を告げているこの危機を脱して勝利を得るためには、貴様たち自身が爆弾を抱いて体当たりし、一機をもって一艦を屠るしか方法がない」

猪口先任参謀の決意表明のあと、中島飛行長が立った。

「このたびのわが二〇一空の攻撃には全隊員が双手を挙げて賛成するものと思う。これからその体当たり攻撃隊員を当方より指名する。異存ある者は手を挙げろ」

仰天の命令にS三一一飛行隊の丙飛一七期生井信男上飛は、一瞬自分の判断が停止したように思ったという。

丙飛は一般兵科からの転科組で、甲飛一年、乙飛二年の修業に対して僅か三カ月の速成だから、半年前に実戦配置されたとはいえ、まだ伎倆慣熟にはいたっていない。

飛行隊は尉官、下士官、飛長で構成されていて、上飛がいるのは稀であるから、上級者たちに調法に使われて、その身辺の世話をするのが主な仕事になっていた。

後輩の上飛が転属してくるのはまず期待薄だったから、自分が飛長に進級しない限り万年当番兵であった。

実戦経験のない若年兵生井上飛が、中島飛行長の指示に驚愕しているところへ、追い打ちをかけるように、

「体当たり攻撃隊を志願するものは一歩前へッ」

地獄へ誘う悪魔の怒声に嗾けられて戸惑い、一瞬横眼で左右にいる者たちの動きを窺ったという。

先輩搭乗員たちがどう反応するかが気になって、自分の意志はその場の雰囲気にのまれてしまったのだろう。

そのとき、久納分隊士が、

「遅かれ早かれ、みな死ぬんだから、征け、征けッ」

そう自暴自棄になったような罵声を発して、逡巡している搭乗員たちに、還れぬ出撃をする決意を迫った。

法政大学出身の久納中尉は、海兵出身の生粋の軍人分隊長関大尉とは違って、隊員たちと上下の隔てなく気さくに付き合い、学生時代羽田海軍予備航空団で鍛えた操縦技倆は、熟練の域に達していると評判が高かった。

そんな人柄の久納分隊士のいつにないどやしに吃驚して、全員が思わず知らず一歩前へ踏み出した。

全員が一歩前へ出たのでは目立たぬので、さらに一歩、もう一歩と先を競ったという。

その日の夕刻、中島飛行長と久納らの士官たちは、選抜された隊員たちとともにセブ島のセブ基地へ移動した。

いざ、出撃の時機来る

待機のままの一日が過ぎた。

関大尉の下痢は、軍医長副島泰然大尉の治療で快方に向かい、朝食は少量ながら普通食が摂れるようになった。

雲はまだ幾分残っていたが、回復して晴天になった。

今日は索敵機が機動部隊を発見するかも知れなかった。

関以下の隊員たちは、出撃準備を整えて宿舎を出た。

報道班員たちが詰め掛けてきて、なにかと取材にかかり、最初の特攻出撃を待つ緊張した状態がつづいた。

一六〇〇、突然陸軍の一〇〇式司偵が舞い降りてきて、

「レイテ沖に敵機動部隊を発見」

したことを報告した。

「搭乗員整列」

そう叫びながら黒眼鏡の玉井副長が指揮所を飛び出すと、猪口先任参謀も折り畳み椅子を蹴って立ち上がった。

舗装されていない草原の滑走路北側の台地で、暢んびり待機していた隊員たちのあいだに緊張が奔った。

出撃は、敷島、朝日二隊と、直掩二隊に決まった。

敷島隊の山下憲行一飛曹が十九歳の丙飛一五期永峰肇飛長と交替したほかは変更がなく、直掩隊の谷飛曹長、桜井、政本一飛曹、森飛長を加えた十一名が整列した。

この出撃の様子は、報道写真や映画になったのでご存知かもしれぬが、直掩隊員たちは胸に落下傘の幅広い紐を締めているのに、関ら七人にはそれが見当たらず、還れる者と還れぬ者との任務の差が歴然としていた。

玉井副長が、あらためて水筒を持ってまわり、注ぎ終わると自身で音頭をとって『海行かば』を斉唱した。

海行かば水漬くかばね
山行かば草むすかばね

大君の辺にこそ死なめ
かえりみはせじ

これは、奈良時代万葉末期の代表的歌人大伴家持の長歌のなかの句であるから、当時空飛ぶものはなかった。

アメリカの『星条旗よ永遠なれ』（スーザ作曲）、ドイツの『旧友』（タイケ作曲）とともに世界三大行進曲といわれている瀬戸口藤吉作曲の『軍艦行進曲』は、戦果発表などの心浮き立つ報道の前奏に使われたが、『海行かば』は玉砕や敗退など無念報道の前奏に用いられた。

特攻隊員たちが、『海行かば』を斉唱することは、すなわち、自分自身を葬送するためにほかならなかった。

特別攻撃隊の目標は空母で、大型、中型、小型の順に狙う。いなければ戦艦、巡洋艦、駆逐艦を仕留める。

空母攻撃の場合、一番機は飛行甲板中央部の昇降機を狙う。二番機は一番機の突入が効果なしと判断したらおなじ箇所に突入する。爆破すれば空母は真っ二つに折れる。一番機が成功したら、二番機は次の目標に向かう。

あくまで自爆に徹する戦法だから、生還はあり得ない。

敷島、朝日両隊員は、冥途行きの儀式が終わると、直掩隊員とともに貨物自動車で東飛行場へ移動した。

そこには、すでに爆装零戦七機と増槽に燃料満載した直掩機四機が、発動機音を響かせて待機していた。

関大尉は、玉井副長に訣別の挙手をしたあとで、

「お世話になりました。これをお願いします」

と言って、遺髪の紙包みを差し出した。

隊員たちがそれぞれの搭乗機に行くと、翼に乗って待っていた整備兵が、手を取って引き上げてくれた。

「有難う」

謝意を伝えて操縦席に着く隊員を凝視める整備兵の眼に、涙が光った。

関大尉が愛機に乗り込もうとしたとき、見送りのなかにいた副島軍医長が掛け寄ってきて、掌を握り締めた。

関は副島の掌を握り返すと、発動機音に負けぬ大声で、

「有難うございました。おかげで元気に出撃することが出来ます。かならずやりますからどうか安心して下さい」

そう叫ぶと、にっこり微笑って挙手の礼を返した。

いよいよ出撃の時刻がきた。

車輪止めを外された関隊長機が、列線を離れて発進位置につき、発動機を全回転させて勢いよく飛び立つと、発動機不調の谷機を除く僚機五機が次々とあとに続いた。

最後に直掩の四機が離陸して、全機上空で編隊を組むと、敵機動部隊のいるレイテ沖を目指した。

いつも増槽を抱く腹に二五番（二五〇キロ爆弾）を装着した爆装零戦はずっしり重く、臨月の妊婦同様機敏な動きが出来ないから、もし途中でグラマン戦闘機に迎撃されたら、直掩機に命運を託すよりほかなかった。

洋上に出て、雲に隠れながら一時間余りの飛行で目指

す海域に到達したが、敵機動部隊のすがたはなかった。
付近を限無く捜したが発見出来ず、日没が迫ってきた。
（どこにいるんだ、出てこい）
空母を発見出来なければ、爆弾を捨てて近くの基地に不時着し、再起を期すよう命ぜられていたが、向こうっ気の強い関指揮官は帰投を潔しとせず、焦りに焦った。
いつか雲量が一〇に増えて、視界がきかなくなった。
高度を下げて、海面を舐めるように探索したが艦影は見当たらず、索敵範囲を拡げるには燃料が覚束なかった。
神風特別攻撃隊の先鋒を承って盛大に見送られ、勇躍出撃しておきながら、おめおめ基地に戻ることは絶え難い屈辱であり、指揮官関大尉の自尊心が許さなかった。
だが、いかに豪気な関も日没と燃料不足には勝てない。
関は、やむなく機体を左右に振って急反転させた。
列機と直掩機が指揮官機を見て、慌てて反転してきた。
遠くルソン島の海岸線が見えるところまできて、関はすでに安全弁を外してある二五番を海中に捨てた。
島の南端レガスピーに到達したときは、すでに日没後で基地は暗かったが、全機無事に着陸することが出来た。
残念ながら特別攻撃隊最初の出撃は空振りに終わった。
（つづく）

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い
私達はひろく同志の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。
☆　維持会会員へのお誘い
本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ケ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。
郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

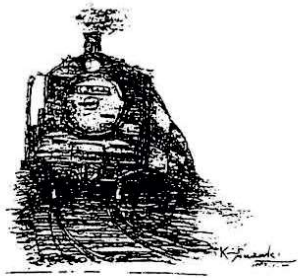
紙透家の人びと（十五）

第五章　父が小尉に任官

一雄基

昭和十五年八月十日、私が朝鮮の南陽で、父母、弟妹と別れ、羅津から敦賀まで、ハルビン丸で日本海を渡り、山梨町の祖父母の家に身を寄せたことは、すでに述べた。
その後、父は南陽憲兵分遣隊から、雄基憲兵分隊に転勤となり、家族ともどもその官舎に引っ越した。雄基は南陽から汽車で、豆満江に沿うように下流に進み、日本海に出た所にあった港町である。その先は、羅津で、ともに港湾一帯は軍事的に重要で、要塞地帯となっていた。
母と妹の思い出話によると、官舎の門前にはコスモスの花が咲き乱れ、そこからは港がよく見えて、いつも船が沢山とまっていたそうである。島が見えないほどに、かもめがいっぱい飛んでいたという。

紙透寛夫



昭和十六年十二月二十九日には、四男忠（私の弟）が、雄基の官舎で生まれた。
『羅南憲兵隊史』に、次の挿話が載っていた。
昭和九年夏ごろ、朝鮮軍司令官小磯国昭中将が、ソ満国境視察のため来雄せられ、大和ホテルに宿泊された。雄基分遣隊（のち分隊に昇格）より仲沢軍曹以下六名が身辺護衛に任じた。
軍司令官一行は、自動車により雄基港を展望後、沿岸の状況を視察し、更に西水羅に至り、豆満江河口附近を視察して旅館に帰られた。翌日、軍司令官の御希望により小舟を借り、港内で魚釣りをされた。夏の日照り中、閣下はユカタを着、カンカン帽を冠っ

て、その姿はお爺さんそっくりであり、附近の人が近寄り、あのヤンバン（偉い人）はどこの人ですかと問いかけられた一幕もあり、庶民的で屈託のない閣下の態度は正に平和な時代を象徴するものであり深く記憶に残る。とあった。

また、母の話によると、昭和十七年八月に、雄基港で、隊員と家族全員のレクリエーションとして、舟に乗り、食事をして楽しんだことがあったそうである。

小磯国昭の魚釣りも、雄基憲兵分隊の舟での慰安会も、港町雄基ならではの光景であり、そのころは、まだまだ平和であった。

さらに、この『羅南憲兵隊史』は、

雄基は北鮮三港の北端で、欧亜連絡船天草丸や、敦賀―新潟―浦潮を結ぶ定期船さいべりや丸が寄港していた。私服憲兵は、警察の特高係とともに同船に向かい乗組員から種々の情報を入手した。とくに浦潮港を根拠地とするソ連極東海軍の動向、沿岸州ポセット湾沿岸の軍事施設の状況などは情報価値の高いものがあった。ソ連側においても北鮮における日本軍の行動、軍事施設の状況を知るため諜者を潜入せしめていたので、憲兵はこれが検索検挙にも努力した。

と、述べている。たまたま、この本の三三三頁に、父のことがちょっと載っていた。

眼鏡の奥からキラリと光る当時の班長紙透小太郎准尉の威光が恐れられたものだ。

私はここを読んで、その光景を想像し、思わず笑ってしまった。

父は昭和十六年一月十二日、日本伝講道館柔道の初段に列せられた。

同年二月一日に、従七位に叙された。

また、昭和十七年二月十九日には、大日本武徳会から剣道弐段を允許された。

そして、同年十一月に、憲兵少尉に任官した。父は、さぞ、うれしかったことと思う。

陸軍憲兵准尉　紙透小太郎

任陸軍憲兵少尉

昭和十七年十一月十日

内閣総理大臣正三位勲一等功二級東條英機宣

私はこの辞令を見た時に、陸軍大臣東條英機と、どこにも書いていないことに気が付いた。いうまでもなく、憲兵は陸相の管轄下におかれていたのに……と不思議に思った。そのころ、東條首相は陸相を兼任していたからとしても……。

二　さらば朝鮮よ

父は少尉に任官すると、すぐ羅南憲兵分隊に転勤となった。そして一息つくと、今度は出陣することになった。

私の手元に『昭和十八年一月四日以降の出来事』と題する父の手記がある。これは父が戦後、戦犯として巣鴨拘置所で服役中の、昭和二十七年七月五日から、書き記した、いわば、回想録である。私の注釈を加えながら、以後、この手記を転記していきたいと思う。

昭和十八年一月四日。

朝、たしか、ずいぶん寒かったように思う。零下十五度ぐらいであったろう。年末から管内である高周波工場（日本高周波工業株式会社）で有名な城津を一度、回っておかなければならないと思いながら、延び延びになっていた。

ここは、咸鏡線で羅南から普通列車で約二時間半、憲兵分遣隊のある所であり、柿崎准尉が駅に来てくれた。初めて見る工場地帯、小さいながらも北鮮唯一の高周波工場だ。

やがて分遣隊に到着。柿崎氏が若い人たちや補憲（補助憲兵）に気合をかけ、僕に剣道試合を見てもらうつもりらしい。

「準備が出来ました」

と、僕は早速仮道場へ行った。すると、その時、電話当番が、

「軍用電話で、羅南平尾分隊長から電話です」

とのこと、僕は直観的に、

（来たな）

と思った。

「電話で用件は話せない、即時帰隊せられたい」

と、電話は切られてしまった。隊馬のくたびれたのに鞭を打って城津駅に駆け付けた。ちょうど下り列車に間に合い、帰ると、平尾大尉から

「一月十五日、東部第十五部隊に集合」

との命令を受けた。南方派遣のことは確実だが、行き先、部隊編成その他は不明だった。だが、人の征く所だ。『武門の誉れ』（今にして思えば、バカげたことだが）その時は、そう信じたのは当然であった。

飛ぶように官舎に帰り、茂登子に話す。家内は覚悟はしていたものの、顔色がさっと変った。無理もない。内地生活の窮屈さと子供六名を抱えての生活を思えば、顔色の変わることは当たり前だろう。

出発するとなると、荷物整理のこと。子供連れ旅行のこと、礼挨拶回りのこと。十五日までに僅か十日しかない。内地へは、昭和七年三月以来、十一年振りでの帰郷であり、山梨（母茂登子の実家）、永田（父小太郎の実家）へも、ゆっくりしたいと思った。しかし、十五日ま

でには、どうしても部隊に到着しなければならなかったから、あまり時間がなかった。それを思い、これを考えると容易ではない。荷造りが大仕事であるが、もう四日は暮れてしまった。荷造りは明日からだと、茂登子とも話し、子供たちにも言い聞かせ、取り敢えず、永田と山梨へ電報して帰郷することを知らせ、その夜は酒を飲んで、まず、明日からと元気付けた。

その夜、茂登子は、

「あなた、死んではいやですよ」

と、悲しそうにいったことは、耳から離れない。

五日から、何はともあれ、家財道具を至急送る用意をしなければいけないので、隊員の若い人たち（補憲）が手伝いに来てくれた。昨年十二月、雄基から引っ越した荷物の大部は、正月にほとんど解梱してしまったので、また、荷造りに一苦労した。五日、六日は荷造りで終り、羅南駅長に連絡して貴重なもの二十数個チッキにして、ほとんど七日朝発送したが、有難いことに一月十日、袋井駅に僕たちよりも早く全部の荷物が到着していた。

羅南の官舎も、一時隊付きなので、判任二等の官舎で、あまりよい家ではなかった。少しの間の辛抱と我慢して入っていたが、とうとう将校宿舎に入る機会もなかったのは残念だった。

七日、関係方面の挨拶を終り、その夜、中山總三中佐（羅南憲兵）隊長、佐藤勇助副官、平尾大尉、根食英男准尉、大越主計さんたちの招待の送別会を赤穂屋で開催してくれた。たしか『ふぐ料理』だったように記憶する。

六日に、会寧からみさ子が手伝いに来てくれた（みいちゃん。竹内時雄曹長と結婚して、その時、会寧憲兵分隊の官舎にいた私の叔母）。また、藤江氏には何かと、ずいぶんお世話になったが、七日の夜は藤江さんの宅にご厄介になりご迷惑をかけた。そのころ、藤江さんの娘さんが胸の病気で、僕たちの寝室の隣の部屋に寝ていたが、唐紙をそっと、五、六寸ぐらい（一寸は、三・〇三センチ）開けて、のぞいて見たことも思い出の一つだが、あの時の娘さんは今どうしているだろうか。あの娘さんも継母（藤江さんの後妻は、継母でもよい人）に気兼ねしていたように想像されて、気の毒だなぁと思われた。

その後、藤江さんも、終戦後引揚げ途中、元山か咸興で病死されてしまったそうだ。奥さんや子供さんたちは今、どうしておられるだろう。

八日、午前八時何分、京城行き普通急行二等車（そのころは三等車まであったように思う）で出発の朝だ。隊の若い人二、三名、わざわざ清津まで行き、僕たちのために、汽車の座席を取ってくれた。厚意は今も忘れることは出来ない。子供たちは寒い中にも、内地へ帰ることにした。この握り飯は、山梨に帰って、まだ二個残っていた。僕の考えは正しかった。この飯がなかったら、どのくらい困ったか知れない。まず、京城では成功であった。

午後、京城発、南へ南へと汽車は進んで、だいぶん、気温も緩やかになる。幹郎はまるまると太って、足をぶらぶらさせ窓を眺めたり、居眠りをしていた。久代はこれもあまり憎くない顔で、僕から離れようとしない。忠はいつも母ちゃんのおっぱいばかり気にしていた。淑子と敏子は内地が初めてのような顔で、物珍しく窓外を見ている。茂登子は主人がいない内地の生活がどうなるであろうか、長くて二年の我慢かな、というような思案顔。しかし皆、その時はそう不幸や不安のような顔は一つもなかった。晴れやかな、浮き浮きした顔だった。

汽車が釜山（現プサン）駅に着いた。羅南を出る時、釜山へ応援に行っている某下士官に、船のこと、荷物のことにつき詳細、電報を打っておいたので、連絡船まで安心して案内してもらえるものと下車して見たが、一向に彼らしい姿はない。ほかの乗客は、ほとんど全部船の方へ行く。この時は僕もすっかり赤ゲット振りを発揮して、今でも赤面する。荷物はある。子供は多勢、それでもようやく船に乗った。船に行くと、彼氏曰く、

「だれが打ったか知らないが、ずいぶん分からない電報だ」

で、うれしそうである。

中山隊長、佐藤副官、根食君、平尾分隊長その他隊員の一部が見送ってくれた。当日は、師団の観兵式のため、平尾氏はちょっと顔を出して、すぐ式場へ行ってしまった。平尾氏とは、この時が、この世の最後であった。彼は香港で戦犯にかかり（昭和二十三年二月二十四日）刑死してしまった。中山中佐はマニラ収容所で、昭和二十二年に遭ったが、ミンダナオ島憲兵隊長で終戦、戦犯は起訴されず、無事帰ったが、その後は音沙汰なし、人はこうしたもの。彼も普通の人間であった。人の心の頼りなさ。大越さん、根食さんは、どうしただろう。皆、よい人であったが。

さらば北鮮よ。大正十一年（一九二二）十二月、徴兵で、朝鮮に足跡を印してより満二十一年、平凡であったが、面白いことも、つまらないことも、悲しかったことも、皆、昔の思い出として。

九日朝、京城着。京城では汽車を待つ時間、かって、淑子が昭和八年、京城医大附属病院へ入院の際、時々、宿った三重旅館で半休、隊司令部の綿引延次君夫妻に連絡して、綿引君にきてもらった。一同で京城の三越へ行き土産物を買ったりして遊んで来た。綿引君には、旅行中、とくに内地へ行って困るであろう食事のことを思い、十一日帰宅までの三日分、七人分の握り飯を作ってもら

と、開いた口が塞がらないとはこのことだ。頼りにならぬ人の多い世の中だ。こんな人がなんの用に立つだろうか。誠意がないのか、気がきかぬのか、バカか、当てにする方がアホウか。

十日朝、下関へ到着。駅の憲兵に連絡したら、上り列車は少し時間があるとのこと、荷物を詰所へ依頼して旅館で休むことにした。宿屋の客引きに連れられて行ったら、二流程度の貧相な宿屋で、部屋は寒いし、火鉢にろくに火もない。ちょっと、外出して、皆で赤間宮に参拝して、その辺を見物して帰る、活気のない町だ。つまらないので、ごろ寝をしようとしたら茂登子にしかられた。その内に時間が来たので駅へ行く。

親切な若い憲兵伍長が色々、世話をしてくれた。座席も取ってくれる、荷物も手順よくすっかり始末してくれた。若いのに、よく気がつくことだ。だが、僕が駅にきて気の付いたことだが、上り列車の手頃なのは何本もあったのだ。半日損をしてしまった。もう、取り返しがつかない。茂登子が変な顔をしていた。何時ごろであったか、夕方の汽車に乗った。もう一息だ、京都、米原辺を通るころ、雪が盛んに降っていた。今、十日の夜中だ、寝台から降りて、便所に行き、帰りに子供たちの様子をちょっと見たら、忠が母ちゃんのお乳をちゅうちゅうと、うまそうに、すっていた。

十一日午後、袋井駅に着いたら袋井の兄と姉が出迎えてくれた。兄も姉もずいぶん、年を取ったものだ。とくに姉の変わり方はどうだろう、すっかりおばあさんになった。

（父（小太郎）のいう袋井の兄と姉とは、母の長姉しのと、夫の鈴木廉策のことで、袋井の目抜き通りで下駄屋を営んでいた。私が山梨にいたころ、何度か立寄ったことがあり、廉策伯父が店先で下駄作りに腕を振っているところを近寄って見たことがあった。そのころ、しの伯母は穏やかな人柄で、いつも微笑みを浮かべていた。子供は、ちせ、とむ、勇作、悦次、信雄、りつ子の六人がいた。私は勇作と悦次、二人の従兄は知っているが、ほかの四人は会ったことがあったかどうか忘れてしまった。下駄屋は昔、かなり繁昌していたようであるが、伯父に魔が差したのか博打にのめり込んだとか、親類の大人たちのひそひそ話が少年だった私の耳にも入った。どうも、すってんてんになったらしい。それで、しの伯母は非常に苦労したらしい。悪事千里を走るというが、この話は朝鮮の山奥にいた父母までには届かなかったようである。だから、父はしの伯母の変貌ぶりに驚いたのであろう。）

すぐ電車で山梨へ行く。昭和三年最初の帰国、昭和六

年二度目の帰国、今度は十一年振りの、三度目の帰国だ。山梨の風物は少しも変っていない。両親が少し年を取ったぐらい、そういえば、父はだいぶん老けた。母はそうでもなかった。一三も大きくなって女学生らしくなっていた。寛夫も大きく見違えるようになっておった。

（私（筆者、紙透寛夫）はこの日、二年五か月ぶりに、父母弟妹と再会した。だが、母におんぶされていた忠とは、袋井駅ホームで初めて対面したのである。）

母の喜びは、大きかったようだ。父も、もちろん喜んでくれた。両親ともに、この僕には、いつも変らない心持ちのよい応対で、心からうれしくなってしまった。茂登子や子供たちには、なおさら、よい両親であり、おじいちゃん、おばあちゃんであった。このよい両親に心配をかけっぱなしで、しかも、なんら報ゆることも出来ず、ついに、昭和十八年一月十二日が、最後の生前の別れになろうとは、神ならぬ身の知る由もなかった。不孝の罪、万死に値する。御両親よ不孝の子を許されよ。

二階の部屋を僕ら一行に開放してくれた。ほっとした安心感と汽車の疲れで子供たちは早寝してしまったが、僕たちは深更まで語り明かし、部隊の状況も前日には知っておく必要があるので、今日だけ山梨に厄介になり、両親へも旅行日程やら昔話をして、十一日も終わってしまった。

一月十二日、いよいよ山梨の両親へ家族を預けるため、父に、

「まことに相済まない話ですが、出征中はご迷惑ですが、家族をおいて頂きたい」

と、お願いしたら、父は即座に、

「よろしい」

と、快諾してくれた。が、今にして思えば、なぜ、あの時、小さな家でも一軒建てるか、買うか、しなかったのだ。僕も間抜けであった。

この日が、山梨の両親と永久の別れになろうとは。

十二日、一族を引き連れて、十一年振りに、生まれ故郷永田に行く。永田の老母はじめ兄姉たち、元気で皆、駆け付けてくれた。南方行きだと話すと、姉たちは、

「それでは召集か」

と、相変わらず田舎らしい言い草だ。老母も今度は内地隊で勤務するのかと思っていたらしく、落胆したらしい。どこまでも不孝の子だろう。だが、皆親切であった。

とくに感じたことは、昭和六年帰省の時とは違って、兄姉たちが皆活気のあることに一驚を喫した。それは農家の好景気を物語っているのだと、すぐ察した。これでよいのだ。皆の景気のよいのは、何よりだと思った。町内の親類、知人、友達に一通り挨拶回りをした。昔の村

の様相はほとんどなく、すっかり変った。もっとも、十一年の留守であり、親類や近所の子供たちは誰が誰だかさっぱり分からない。

十二、十三日は永田におり、十四日は取り敢えず、飯田橋の末男（母の弟）の家に厄介になることにして、一同を引き連れて上京した。軍用行李一個を持って。東京駅には末男が出迎えてくれた。行李がどうした訳か届かない、心配なので荷物係に交渉して駅の地下室に行って見ると、横須賀線で、ちゃんと着いていた。大急ぎで、自動車で飯田橋へ行き、その車で東京十五部隊へ状況を見に行く。先着の人たちが道場に集まっている。そこに行李を預け、引き返して、その夜は末男の家に厄介になる。当夜、市川の兄夫婦（母の兄始一と、妻のとよ）が来てくれた。餞別に五十円もらう。そのころ、なかなか手に入らないすしをご馳走になる。寝てから一時間ちょっと過ぎてから茂登子が吐き気をもよおし、ご馳走を全部吐いてしまった。その始末したものを便所へ捨てたので、便所の筒が詰まって、翌日、愛子さん（末男叔父の妻）が困ったらしい。新聞紙が詰ってしまったらしい。これも思い出の一つだ。

（私（筆者紙透寛夫）のうろ覚えではあるが、この末男叔父の家は、九段下から飯田橋駅に向かう大通りに面した右側にあったように思う。玄関を上がるとすぐに板の間で、事務所になっていた。二、三あった机の一つには邦文タイプライターが置いてあった。私は初めて見るこの機械に触れはしなかったが、興味深くまじまじと見たことをなぜか、はっきりと覚えている。奥の方は畳敷きで、住まいになっていた。二階もあったように思う。ここは紛れもなく、始一伯父と末男叔父の兄弟二人が昭和十四年十二月三十日に、資本金十万円で創立した協成商事株式会社の所在地であった。紙・加工紙・紙製品の製造販売をしていた。昭和十七年七月には富士興業株式会社と社名を変更していた。なお、始一伯父はすでに、昭和製袋工業株式会社を経営していたが、さらに、別に、昭和十七年九月、静岡市に静岡加工紙工業株式会社を創立し、防湿紙および製袋の加工業を始めていた）。

一月十五日、いよいよ部隊編成の第一日だ。部隊へ行けば、営内宿泊となるか、外泊になるか分からないので、家族たちは、ひとまず山梨へ帰すことにした。

（この日、すなわち、昭和十八年（一九四三）一月十五日、父、小太郎は四十歳、母茂登子は三十三歳、私（筆者紙透寛夫）は十四歳、妹の淑子は十二歳、敏子は十歳、久代は六歳、弟の幹郎は三歳、忠は一歳であった。以後、父はやがて戦地に向かい、私は母、弟妹と一緒に山梨で生活することになった。）

（つづく）

漢詩

潮騒録（卅四）

鯨游海

足球四海覇権争奪戦・五首連作其一・日本對白耳義戦

平成十四年六月

綠野馳驅赤惡魔
青騎邀撃化修羅
鶴翎陣動如流水
此夜神州滿凱歌

押韻・魔羅歌

〈足球四海覇权争奪戦・五首連作その一・日本対白耳義戦〉

緑野に馳駆す「赤き悪魔」
青騎は邀撃して　修羅と化す
鶴翎の陣の動きは　流水の如く
この夜神州　凱歌に満つ

〔注　解〕

足球は蹴球の現代中国語。四海は世界。唐代まで中国人にとっては自国のみが全世界であった＝中華思想。その他辺境は文明の及ばない蛮夷の世界で四海（東南＝海、西北＝砂漠）と表現した。「赤き悪魔」はベルギーチームの愛称で深紅のユニフォームに由来する。

対する日本は紺青のユニフォーム。サポーターも青一色でスタンドを埋めた。修羅は阿修羅と同意。帝釈天と戦かう武力にめっぽう強い神様。

鶴翎は孫子の兵法にある陣形の一つ。鶴が両翼を拡げた形で布陣する。翎＝翼。神州は自国の呼称。ここでは日本の雅名。凱歌は戦勝を祝ってうたう歌。

四年に一度開かれるサッカーの祭典。今回は日本と韓国が主舞台となった。日本はこの試合を2対2で引き分けたが、史上初めての勝ち点1を挙げる事が出来た。

☆鶴翼のはばたく陣にまろぶ球
　生けるが如く脚にまつろう

又・五首連作其二・日本對露西亞戰
平成十四年六月

白面巨人驕傲趨
欲開活路好機無
窮禽九蹴遂搖網
君不見
三本疋之八咫烏

押韻・趨無烏

〈又・五首連作その二・日本対露西亜戦〉

「白面の巨人」　驕傲に趨りて
活路開かんと欲するも　好機なし
窮禽の九蹴　遂に網を揺るがす
君見ずや
三本疋の　八咫の烏を

〔注　解〕

「白面の巨人」はロシアチームのニックネーム。驕傲は驕り高ぶること。趨は疾走する＝速く走る。

承句以降はこれに対する日本チームの苦戦の様を歌う。窮禽＝窮鳥とは「窮鳥入懐」より。追いつめられて逃げ場を失った鳥は、猟師のふところにも飛びこむ。顔氏家訓・省事より引用。但し原文の意味は「困り切ったあげくに頼って来る者があれば、これを憐れまなければならない」の喩え。日本チームはロシアチームの懐に飛び込み死地に活路を開いた試合で1対0で強剛に辛勝した。

結句「八咫の烏」とは、神武天皇が東征し道に迷った時、一行を先導して安全な所に案内したという烏。三本の足があるといわれる。疋は足の原字。「ひつ」とも訓み転じて動物や虫を数える単位「ひき＝匹」に転化した。なお日本チームのマスコットはこの八咫の烏である。

口語訳してみよう。

雪かとまごうまっ白の肌の巨人揃いのロシアチーム。そのニックネーム「白い巨人」は、余裕綽々と、わが日本をみくびり驕り高ぶって我がもの顔にピッチを疾走している。

これに対し日本は何とか活路を開かんとしているが中々好機が廻って来ない。緊迫の時が流れる。

遂にチャンス到来。窮鳥執念の九度もの蹴り。白球は飛んでゴールのマウス（枠）を突破しネットに突き刺さった。ネットは二度三度大きく揺れた。

君はその瞬間を見たであろう。否、見なかった筈はない。必らず見たに違いない。

三本疋の強靭なひと蹴りを。あの神武天皇を先導したという伝説の鳥「八咫の烏」の鮮やかなシュートが決まった一瞬を。

☆窮鳥の猫をも噛まん一念ぞ
　ふところ深く網を揺るがす

又・五首連作其三・日本對蛛爾西亞戰
平成十四年六月

膏汗淋漓褐色肌
豹乎獅子跳梁肢
然而盍獲唯一兎
孰知故山梅雨期

押韻・肌肢期

〈又・五首連作その三・日本対蛛爾西亞戦〉

膏汗淋漓たる　褐色の肌
豹か獅子か　跳梁する肢
然り而うして　盍ぞ唯の一兎すら獲ざるや
孰か知らん故山　梅雨の期を

〔注　解〕

この句は終始チュニジア側に立って詠んでいる。膏はあぶら汗。淋漓は汗などが滴たるさま。跳梁は跳梁跋扈より＝わがまま勝手にふるまう。盍＝何不と同じ。

さて予選最後のチュニジア戦。地中海の南岸アフリカ西北端の国。昔カルタゴと呼ばれた所。アフリカの砂漠と草原を跳梁跋扈するライオンにも似た肢を持つ選手達。

しかし彼らにとって日本の湿気が天敵となった。日本は2対0で勝ち夢に迄見た決勝戦への切符を手にした。

☆泰西の砂漠を駆くる猛き獅子
　そぼ濡る草に肢転びつつ

又・五首連作其四・日本對突厥戰
平成十四年六月

先鋒猪突壁非情
主力蛇行阻未征
兩翼變形生寸隙
瞬間列島覆悲鳴

押韻・情征鳴

〈又・五首連作その四・日本対突厥戦〉

先鋒猪突するも　壁非情なり
主力蛇行するも　阻まれて未だ征けず
両翼変形して　寸隙生じ
瞬間列島は　悲鳴に覆わる

〔注　解〕

さて予選リーグを二勝一分けで無事突破して決勝トーナメントに進んだ日本。その第一戦はトルコであった。

トルコは土耳古とも書くが、古名は突厥。古来西戎と呼ばれ西域にあって中国とは時に結び、時に対決した国。明治以降何かと縁の深い親日的な民族。しかしサッカーに関しては先輩であった。終に日本は敗れ去った。

鶴翼は兵法にある正攻法の陣形。これに寸隙が生じた。

☆鶴翼の堅きまもりに隙ありや
　摩訶不思議なる流火飛び込む

又・五首連作其五・獨逸對伯剌西爾決勝戰

平成十四年六月

黒鷲群飛黄鳥翻
右旋左轉忽狂奔
喚聲使月舞雲漢
永結友宜包乾坤

押韻・翻　奔　坤

〈又・五首連作その五・獨逸対伯剌西爾決勝戦〉

「黒鷲」群飛すれば　「黄鳥」翻がえり
右旋左転　たちまち狂奔
喚声月を使て　雲漢に舞わしめ
永えに友宜を結びて　乾坤を包みたり

〔注　解〕

鷲は独逸の国鳥。伯剌西爾のユニフォームは黄色で「カナリヤ軍団」と恐れられた。決勝戦に相応しい激闘だったがブラジルが優勝した。この一ケ月世界は不思議な感動に包まれた。李白・月下獨酌の天上との一体感を想起する。「：我歌月徘徊　我舞影零亂　醒時同交歡　醉後各分散　永結無情遊　相期邈雲漢」。雲漢は天の川。

☆雲漢今宵限りと舞う月に
四海兄弟とわにむすばる

《漢詩の流れ25》晩唐②――唯美主義の台頭――

李商隱（八一二～八五八）

杜牧と共に晩唐を代表する詩人。字は義山。号は玉谿生、後に樊南生。河南省鄭州の人。

中級官僚の家系に生まれたが、その詩名の割には官での志は得られず不遇のうちに終えた。しかしその詩及び文章は不滅である。彼の詩には典故が多い。四書五経、史記、漢書、三國志等々士大夫必読の書はもとより雑書からも引く例が多い。李賀と共に彼の詩が難解とされる一因である。科挙には二度落第した。「才を恃みて詭激」であったからとされたが「幼にして能く文を為った」と褒められてもいる。二十六歳で進士に合格した。

彼の詩材は、盛唐では少ない恋愛詩にも及ぶ。男女の情はもと〳〵明らさまに出来ない機微があろう。まして現役の官僚である。従って暗喩しぼかした表現をとらざるを得ない。彼の詩が難かしいとされる第二の要因である。代表例を挙げる。

夜雨寄北（夜雨に北に〔愛しい女性〕に寄せる）

君問歸期未有期　君は帰期を問うも　未だ期有らず
巴山夜雨漲秋池　巴山夜雨　秋池に漲る
何當共剪西窗燭　何か当に共に　西窓の燭を剪り
却話巴山夜雨時　却って話さん　巴山夜雨の時を

「君はいつ帰れるのかと手紙で尋ねてきたが今は未だその時期は判らない。巴山に降りしきる夜の秋雨が池に水を漲らせている。何時になったら西窓（貴女の部屋）で灯芯を切りながら、この今の私が想っていること（君への思慕）を君に話すことが出来ようか」

これは不倫の想いを詠んでいる。「巴山夜雨」が二度も繰り返されている。連綿たる想いを技巧を凝らして効果的に表現したのであろう。

もう二首無題と題する艶情詩を紹介しよう。

無題

含情春晼晚　情を含む　春は晼晩なり
漸見夜闌干　漸やく見る　夜の蘭干たるを
樓響將登怯　楼は響きて　将に登らんとして怯じ
簾烘欲過難　簾は烘して　過ぎらんと欲するも難し
多羞釵上燕　多に羞ず　釵上の燕
眞愧鏡中鸞　眞に愧ず　鏡中の鸞
歸去橫塘曉　帰り去る　横塘の暁
華星送寶鞍　華星　宝鞍を送る

「晩春の暮れ君に逢いたくて忍んで来た。時は移り夜も更けた。楼の階段がみし〳〵と音を立てるので怯えそう。途中の部屋の簾から明りが洩れすり抜けるのが難かしい。人目を忍ぶ束の間の逢瀬だから逢えてもかんざしの双燕の模様を見て羞じ、鏡に鳳凰が並び飛ぶ模様を見て又恥かしい。馬を駆って築堤の上を朝帰りする私を見送ってくれるのは東の空の薄明の中に一つ輝く暁の明星だけだ。私の馬の鞍の飾りがきら〳〵光る」

無題

來是空言去絶踪　来るとは是れ空言　去って踪を絶つ
月斜樓上五更鐘　月は楼上に斜めなり　五更の鐘
夢爲遠別啼難喚　夢に遠別を為し　啼けども喚び難し
書被催成墨未濃　書は催がされて成り　墨未だ濃からず
蠟照半籠金翡翠　蠟照　半ば籠む　金翡翠
麝熏微度繡芙蓉　麝熏　微かに度る　繡芙蓉
劉郎已恨蓬山遠　劉郎已に恨む　蓬山の遠きを
更隔蓬山一萬重　更に隔つ蓬山　一万重

「来るとおっしゃったのは嘘だったのですね。あれっきりお便りがありません。楼上に月は傾むき明け方の鐘が鳴っています。夢の中で貴女と遠く別れるのを悲しんで泣きましたが声になりませんでした。夢さめて心せくままにお便りをしたためたので墨もかすれて了いました。でも貴女だって蠟燭の明りに金の翡翠の模様を織り込んだ帳の中を半ば照らされ、ほのかな麝香の香りが蓮を刺繍した褥の上を渡ってゆく中で寝られぬ夜を過ごされたのではないかしら。昔劉晨は蓬萊山の仙女を訪ねて余りの遠さに引返したと申しますが、貴女は更に一万倍も遠い彼方に行っておしまいになったのでしょうか」

これも遠い手の届かぬ所にいる女性への綿々たる思いを訴えた詩である。彼には女道士の宋華陽や宮女の盧飛鸞、輕鳳姉妹等々秘密の恋人が居たという。

千篇萬律

☆高麗との国交が再開されようとしている。喜ばしい。拉致問題を始め朝野の論評は喧しいが、両国が一衣帯水の間に在る事実は厳然たる宿命である。

☆歴史を辿ると日本は中夏と高麗を父母として生まれた子供である。単に文明を受容して来たという形而上的な関係に留まらず、形而下的な身体髪膚（はっぷ）や血液そのものを含めてである。証は蒙古斑。

☆インカの例を引く迄もない。アイヌ、オセアニアのマオリやアポリジニー、インディアン、ハワイ等々歴史が証明している。原住民が貧しくとも平和に暮している所に突然文明の格段に高い民族が入って来るとどうなるか。衝突ではなく呑蝕（どんしょく）が起きる。多数の弱者は少数の強者に征服される。

☆高度な武器、良質の物資に圧倒され忽ち勝負が着く。抗う者は抹殺か奴隷。容喙、威嚇、服従、乗取り又は傀儡政権が出来る。「東南大海中の孤島」だけが何で例外であり得よう。唯一水の間だ。

☆万感胸に迫り一首を口號し太古を想う。

儒佛百工幾往還　儒仏百工　幾たり往還せしか
牛羊亦歷百頭山　牛羊も亦歴（へ）たり　白頭山（ペクトウサン）
可思絹路通羅馬　思う可し絹路（シルクロード）の羅馬（ローマ）に通じしを
度矣春光一水間　渡れや春光よ　一水の間を
（く）

まんじ　第86号

平成14年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　鯨　　游海（くじら　ゆうかい）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223 0056 横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）No.00270－0－64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）大和印刷株式会社
〒332 0031 川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　　宮城正彦画
仲間、継続、積年等をイメージして描いた（宮城）。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品（く）。